

博士学位論文（東京外国語大学）  
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏名	近藤 野里
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 198 号
学位授与の日付	2015 年 7 月 22 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	17 世紀末および 18 世紀初頭フランス語におけるリエゾンの分析 －Milleran (1694)および Vaudelin (1713, 1715)の文献調査を基に－

Name	Kondo, Nori
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 198
Date	July 22, 2015
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	French liaison in the end of the 17 <sup>th</sup> century and the beginning of the 18 <sup>th</sup> century – Analysis based on the texts of Milleran (1694) and Vaudelin (1713, 1715)

17 世紀末および 18 世紀初頭フランス語  
におけるリエゾンの分析

-Milleran (1694)および Vaudelin (1713, 1715)の文献調査を基に-

近藤 野里

序章.....	13
1. 本論文の目的.....	13
2. 本論文の構成.....	14
第二章 リエゾンの定義.....	16
2.1. フランス語のサンディ現象.....	16
2.1.1. リエゾン、アンシェヌマン、エリジオン.....	16
2.1.2. フランス語における語の定義 一綴り字が持つ役割.....	17
2.1.3. 周辺的なリエゾン.....	20
2.1.3.1. アンシェヌマンのないリエゾン.....	20
2.1.3.2. 間違っただリエゾン.....	23
2.2. リエゾン子音の特徴.....	24
2.2.1. リエゾン子音と他の子音の違い.....	25
2.2.2. リエゾン子音と語末子音の違い.....	25
2.2.3. リエゾン子音と語頭子音の違い.....	26
2.2.4. 形態的マーカーとしてのリエゾン子音.....	26
2.2.4.1. 動詞マーカーとしての[t].....	26
2.2.4.2. 複数性マーカーとしての[z].....	27
2.3. リエゾンの実現コンテキストの分類.....	28
2.3.1. 義務的リエゾン.....	29
2.3.2. 選択的リエゾン.....	31
2.3.3. 禁止的リエゾン.....	33
2.4. 第二章のまとめ.....	35
第三章 20世紀および21世紀初頭におけるリエゾン研究.....	37
3.1. 規範の記述.....	37
3.2. コーパスに基づいた記述的研究.....	42

3.2.1.	リエゾン研究に用いられるコーパスの特徴.....	43
3.2.2.	記述的研究.....	47
3.2.3.	言語内的要因.....	50
3.2.3.1.	語の長さ.....	50
3.2.3.2.	語の使用頻度.....	52
3.2.3.3.	リエゾン子音の種類.....	53
3.2.3.4.	リズムグループ.....	55
3.2.4.	まとめ.....	57
3.3.	社会言語学的研究.....	57
3.3.1.	変種.....	58
3.3.2.	発話者間要因.....	59
3.3.2.1.	社会階層、学歴.....	59
3.3.2.2.	性別.....	60
3.3.2.3.	年齢.....	60
3.3.2.4.	地域的な違い.....	61
3.3.3.	発話者内要因.....	63
3.3.3.1.	発話状況とスタイル.....	64
3.3.4.	まとめ.....	65
3.4.	理論的アプローチ.....	66
3.4.1.	リエゾン子音の位置の問題.....	66
3.4.1.1.	語末子音としてのリエゾン子音.....	67
3.4.1.1.1.	Schane (1965, 1968): 削除規則.....	68
3.4.1.1.2.	Dell (1970): 音位転換.....	68
3.4.1.1.3.	補充法.....	69
3.4.1.2.	潜在的子音.....	70



3.4.1.2.1.	非線形音韻論 : 浮遊子音 .....	71
3.4.1.2.2.	最適性理論 .....	75
3.4.1.3.	挿入子音としてのリエゾン子音 .....	78
3.4.1.4.	接頭辞としてのリエゾン子音 .....	79
3.4.1.5.	構造内部に組み込まれた子音 .....	80
3.4.1.6.	リエゾン子音の位置に関する問題のまとめ .....	83
3.4.2.	統語的アプローチ .....	83
3.4.2.1.	Selkirk (1972, 1974) .....	84
3.4.2.2.	Kaisse (1985) .....	86
3.4.2.3.	統語的アプローチのまとめ .....	87
3.5.	第三章のまとめ .....	88
第四章	16 世紀から 18 世紀の文法書におけるリエゾンに関する説明 .....	90
4.1.	語末子音脱落からリエゾン形成の概要 .....	90
4.2.	語末子音の発音およびリエゾンに関する記述 .....	93
4.2.1.	16 世紀から 18 世紀にかけてのフランス語の規範化の進行 .....	93
4.2.2.	16 世紀以前における語末子音の発音の手がかり .....	97
4.2.3.	16 世紀文法書における語末子音の説明 .....	98
4.2.4.	17 世紀の文法家による語末子音の脱落に関する記述 .....	101
4.2.5.	リエゾンの実現に関する規則の出現 .....	103
4.3.	第四章のまとめ .....	119
第五章	コーパスおよび研究方法 .....	121
5.1.	コーパス .....	121
5.1.1.	Milleran (1694) .....	121
5.1.1.1.	René Milleran の人物像 .....	122
5.1.1.2.	Milleran の文法書の目的 .....	122

5.1.1.3.	表記法の特徴 .....	124
5.1.1.4.	表記法におけるエラー .....	125
5.1.1.5.	Milleran が記述したフランス語における音韻体系 .....	125
5.1.1.5.1.	母音 .....	126
5.1.1.5.2.	子音 .....	129
5.1.1.5.3.	半母音 .....	131
5.1.2.	Vaudelin (1713, 1715) .....	131
5.1.2.1.	Vaudelin が記述したフランス語 .....	132
5.1.2.3.	発音記号 .....	134
5.1.2.4.	Vaudelin によるリエゾンについての記述 .....	135
5.1.2.5.	Vaudelin が記述したフランス語における音韻体系 .....	136
5.1.2.5.1.	母音 .....	137
5.1.2.5.2.	子音 .....	138
5.1.2.5.3.	半母音 .....	139
5.2.	コーパスの作成方法 .....	140
5.2.1.	Milleran (1694) .....	140
5.2.2.	Vaudelin (1713, 1715) .....	140
5.3.	二つのコーパスを比較する意義 .....	143
5.3.1.	先行研究に対する本研究の位置付け .....	143
5.3.1.1.	Milleran (1694)に関する先行研究 .....	144
5.3.1.2.	Vaudelin (1713, 1715)に関する先行研究 .....	144
5.3.2.	本研究の位置付けとその狙い .....	145
5.4.	分析方法 .....	148
5.4.1.	メタデータの作成方法 .....	149
5.4.1.1.	語末子音字の発音有無を示すコード .....	149

5.4.1.2.	メタデータにおける品詞タグ .....	150
5.4.1.3.	Excel 上のメタデータ .....	151
5.5.	第 5 章のまとめ .....	151
第六章	Milleran (1694)コーパスにおける語末子音字の発音およびリエゾン .....	153
6.1.	語末子音字の発音 .....	153
6.1.1.	冠詞 .....	153
6.1.1.1.	定冠詞 .....	153
6.1.1.1.1.	単数形 .....	153
6.1.1.1.2.	複数形 .....	153
6.1.1.2.	不定冠詞 .....	155
6.1.1.2.1.	単数形 .....	155
6.1.1.2.2.	複数形 .....	155
6.1.2.	名詞および形容詞の語末子音字の発音 .....	156
6.1.2.1.	単数形名詞および単数形形容詞 .....	156
6.1.2.2.	複数形名詞および複数形形容詞 .....	164
6.1.3.	副詞 .....	165
6.1.3.1.	語末子音字 <i>-p</i> ([p]) .....	165
6.1.3.2.	語末子音字 <i>-r</i> ([r]) .....	167
6.1.3.3.	語末子音字 <i>-s</i> ([z]) .....	167
6.1.3.4.	語末子音字 <i>-t, -d</i> ([t]) .....	169
6.1.4.	代名詞 .....	172
6.1.4.1.	三人称単数形人称代名詞 <i>il</i> .....	172
6.1.4.2.	一人称複数形人称代名詞 <i>nous</i> および二人称複数形代名詞 <i>vous</i> .....	172
6.1.4.3.	三人称複数形人称代名詞 <i>ils</i> .....	173
6.1.4.4.	三人称複数女性形人称代名詞 <i>elles</i> .....	174

6.1.4.5.	指示代名詞 <i>celles</i> および <i>ceux</i> .....	175
6.1.4.6.	代名詞 <i>eux, les, un(e)s, leur</i> .....	175
6.1.5.	前置詞 .....	177
6.1.5.1.	語末子音字 <i>-r</i> ([r])を持つ前置詞 .....	177
6.1.5.2.	語末子音字 <i>-f</i> ([f])を持つ前置詞.....	177
6.1.5.3.	語末子音字 <i>-c</i> ([k])を持つ前置詞.....	177
6.1.5.4.	語末子音字 <i>-t</i> ([t])を持つ前置詞.....	179
6.1.5.5.	語末子音字 <i>-s, -z, -x</i> ([z])を持つ前置詞 .....	180
6.1.6.	接続詞 .....	181
6.1.7.	数詞.....	182
6.1.7.1.	数詞 <i>deux, trois, cinq, six, cent</i> .....	183
6.1.7.2.	数詞 <i>sept, huit, neuf, dix, vingt</i> .....	186
6.1.8.	関係代名詞 <i>dont</i> .....	190
6.1.9.	動詞.....	190
6.1.9.1.	屈折形 .....	190
6.1.9.2.	不定詞.....	201
6.1.9.3.	過去分詞.....	202
6.1.9.4.	ジェロンディフ .....	204
6.1.10.	語末子音字の発音のまとめ.....	205
6.2.	リエゾンの分析 .....	206
6.2.1.	リエゾン子音.....	206
6.2.2.1.	リエゾン子音 [p], [k], [l], [ʎ]を持つ語彙の特徴.....	206
6.2.2.2.	リエゾン子音 [t]を持つ語彙の特徴.....	208
6.2.2.3.	リエゾン子音 [z]を持つ語彙の特徴 .....	209
6.2.2.4.	まとめ .....	209

6.2.3.	語の長さ .....	210
6.2.4.	語末音節の種類 .....	211
6.2.5.	統語的結束性.....	213
6.2.5.1.	名詞句 .....	213
6.2.5.2.	動詞句 .....	223
6.2.5.3.	前置詞句におけるリエゾン .....	229
6.2.5.4.	副詞.....	232
6.2.5.5.	接続詞におけるリエゾン.....	236
6.2.5.6.	代名詞 .....	242
6.2.5.7.	+アルファベット .....	246
6.2.5.8.	+接続詞 <i>et, ou</i> .....	247
6.2.5.9.	名詞+動詞.....	248
6.2.5.10.	リエゾン分析のまとめ .....	249
第七章 Vaudelin (1713, 1715)コーパスにおける語末子音字の発音およびリエゾン.. 251		
7.1.	語末子音字の発音 .....	251
7.1.1.	冠詞 .....	251
7.1.1.1.	定冠詞 .....	251
7.1.2.	不定冠詞.....	257
7.1.3.	名詞および形容詞の語末子音の発音 .....	259
7.1.3.1.	単数形 .....	259
7.1.3.2.	複数形 .....	266
7.1.3.3.	名詞および形容詞の語末子音字の発音のまとめ .....	267
7.1.4.	副詞 .....	267
7.1.4.1.	語末子音字 <i>-l</i> ([l])を持つ副詞.....	267
7.1.4.2.	語末子音字 <i>-n</i> ([n])を持つ副詞.....	268

7.1.4.3.	語末子音字 <i>-p</i> ([p])を持つ副詞.....	269
7.1.4.4.	語末子音字 <i>-r</i> ([r])を持つ副詞.....	270
7.1.4.5.	語末子音字 <i>-s</i> ([z])を持つ副詞.....	270
7.1.4.6.	語末子音字 <i>-t, -d</i> ([t])を持つ副詞.....	275
7.1.5.	人称代名詞.....	277
7.1.5.1.	三人称単数形代名詞 <i>il</i> .....	277
7.1.5.2.	主語人称代名詞 <i>on</i> .....	279
7.1.5.3.	三人称複数形代名詞 <i>ils</i> .....	280
7.1.5.4.	三人称複数形代名詞 <i>elles</i> .....	281
7.1.5.5.	一人称複数形 代名詞 <i>nous</i> 、二人称複数形 代名詞 <i>vous</i> .....	281
7.1.5.6.	代名詞 <i>leur</i> .....	282
7.1.5.7.	代名詞 <i>en</i> .....	282
7.1.5.8.	代名詞 <i>les</i> .....	283
7.1.5.9.	代名詞 <i>eux, aucun, chacun, quelqu'un</i> .....	283
7.1.6.	接続詞.....	284
7.1.7.	数詞.....	286
7.1.8.	前置詞.....	287
7.1.8.1.	語末子音字 <i>-c</i> ([k])を持つ前置詞.....	287
7.1.8.2.	語末子音字 <i>-n</i> ([n])を持つ前置詞.....	288
7.1.8.3.	語末子音字 <i>-r</i> ([r])を持つ前置詞.....	288
7.1.8.4.	語末子音字 <i>-s, -x</i> ([z])を持つ前置詞.....	290
7.1.8.5.	語末子音字 <i>-t</i> ([t])を持つ前置詞.....	292
7.1.9.	動詞.....	294
7.1.9.1.	屈折形.....	294
7.1.9.2.	過去分詞.....	302

7.1.9.3.	ジェロンディフ .....	304
7.1.9.4.	不定詞 .....	304
7.1.10.	語末子音字の発音のまとめ .....	305
7.2.	リエゾンの分析 .....	307
7.2.1.	リエゾン子音 .....	307
7.2.1.1.	リエゾン子音[r], [p], [k], [l] .....	308
7.2.1.2.	リエゾン子音[t] .....	309
7.2.1.3.	リエゾン子音[z] .....	310
7.2.1.4.	リエゾン子音[n] .....	311
7.2.2.	音節の長さ .....	312
7.2.3.	音節の種類 .....	313
7.2.4.	統語的結束性 .....	315
7.2.4.1.	名詞句 .....	315
7.2.4.2.	動詞句 .....	321
7.2.4.3.	前置詞句 .....	327
7.2.4.4.	副詞 .....	331
7.2.4.5.	接続詞 .....	334
7.2.4.6.	代名詞 .....	336
7.2.4.7.	+アルファベット .....	340
7.2.4.8.	+接続詞 <i>et, ou</i> .....	341
7.2.4.9.	名詞+動詞 .....	342
7.2.5.	リエゾンの分析のまとめ .....	342
第八章 Milleran コーパスと Vaudelin コーパスの比較 .....		344
8.1.	両コーパスに類似する特徴 .....	344
8.1.1.	リエゾンの実現における MOT1 (左側の語) の音節数の影響 .....	344

8.1.2.	MOT1 (左側の語) の語末の音節構造 .....	345
8.1.3.	名詞句 .....	346
8.1.3.1.	「複数形形容詞+複数形名詞」 .....	346
8.1.3.2.	「冠詞 (語末閉音節) +名詞/形容詞」 .....	349
8.1.4.	三人称屈折形におけるリエゾンの実現 .....	349
8.2.	両コーパスにおいて異なる傾向 .....	351
8.2.1.	名詞句 .....	352
8.2.1.1.	「冠詞+名詞」 .....	352
8.2.1.2.	「名詞+形容詞」 .....	353
8.2.3.	動詞句 .....	355
8.2.3.1.	動詞の屈折形 .....	356
8.2.3.2.	過去分詞 .....	356
8.2.3.3.	ジェロンディフ .....	356
8.2.4.	接続詞 <i>et, ou</i> .....	357
8.2.5.	「名詞+動詞」 .....	358
8.3.	形態的マーカーに関する考察 .....	359
8.3.1.	複数性を示す [z] .....	359
8.3.2.	三人称マーカーの [t] .....	360
8.4.	スタイルに関する考察 .....	360
8.5.	第八章のまとめ .....	361
8.5.1.	MOT1 の長さのリエゾン実現への影響 .....	361
8.5.2.	MOT1 の語末音節構造のリエゾン実現への影響 .....	361
8.5.3.	複数性マーカー [z] .....	361
8.5.4.	三人称単数マーカー [t] .....	362
8.5.5.	スタイルの違い .....	362



結論.....	364
1. 本研究のまとめ.....	364
2. 今後の課題.....	367
参考文献.....	369
Résumé français .....	378
謝辞.....	401

## 序章

### 1. 本論文の目的

博士論文の研究対象に、フランス語に特徴的な音声現象であるリエゾンを選んだ。リエゾンに興味を惹かれる理由は、リエゾン現象そのものの特殊性および複雑さである。まず、リエゾンは実際に話された、もしくは読まれたフランス語にその存在を確認できるものである。しかし、綴り字上では語末子音字に、母音で始まる語が続くという条件が揃ったとしても、常にリエゾンが実現されるわけではない。リエゾンは、現れたり消えたりする、どこか掴みどころのない現象であるといえるだろう<sup>1</sup>。また、リエゾンは古いフランス語において安定的に発音されていた語末子音字の名残りから形成された現象である。これによって、リエゾン自体は音声においてのみ観察され、綴り字の保守性と発音の変化の関係の中に保持されてきたといえる。現代フランス語におけるリエゾンの研究は多岐にわたり、大変豊富である。この理由は、新しい研究分野が誕生すると（コーパス言語学、社会言語学）、その分野の視点から研究が行われ、また新しい音韻理論が誕生すると、リエゾンは常にその理論の妥当性の証明に使用されてきたためである。

本論文の目的は、17世紀末および18世紀初頭におけるフランス語のリエゾンについて明らかにすることである。今までこの時代のフランス語におけるリエゾンはあまり注目されてこなかった。これは、音声現象であるリエゾンをそもそも実際に録音された音声からではなく、文献調査においてどのように研究できるのかという問題点があるからである。本研究では、17世紀および18世紀初頭に2人の異なる著者によって書かれた、語末子音字の発音有無を確認することが可能な文献をコーパスとして使用することで、この問題点を克服するように努める。また、語末子音字の発音およびリエゾンについての説明が書かれた16世紀以降の文法書を調査することで、コーパス調査から得られた結果を補強できると判断した。

本研究では17世紀末および18世紀初頭に2人の異なる著者 René Milleran と Gile Vaudelin によって書かれた文献をコーパスとして、語末子音字の発音およびリエゾンの実現について分析を行う。これによって、この時代のフランス語におけるリエゾンが実際にはどのようなものであったかを明らかにする。次に、2つのコーパスを比較することによって、リエゾンの実現に対するスタイルの違いの影響、そしてリエゾン子音[z]および[t]の形態的マーカーとしての機能の進化を観察する。本研究は基本的には共時態を研究対象とするが、通時態の観察に対しても注意を怠らないように努める。また、リエゾンに関する通時的変化についてはこれまで体系的な研究がないといえるので、これは本研究の意義の一つである。

---

<sup>1</sup> これについて Laks (2005 : 101)は «Un fantôme hante la phonologie du français, et singulièrement celle de la liaison»と述べている。

ろう。

リエゾンに対する研究は特に 20 世紀以降、規範的研究、記述的研究、社会言語学的研究、理論的研究といった言語学の幅広い分野および方法論によって行われてきた。リエゾンという現象が幅広い分野からの関心を得た理由として、2 つの語の間で起こる子音が発音される現象であるリエゾンのメカニズムの複雑さをまず一番に挙げることができる。例えば、現代フランス語においては、言語内的要因および言語外的要因といった 2 つの要因がリエゾンの実現および非実現に影響すると考えられている。本研究が特に関心を抱くのは、17 世紀および 18 世紀のフランス語において既にこのような要因が存在していたのかということである。

## 2. 本論文の構成

**第二章**では本研究の研究対象であるリエゾンおよびその他のサンディ現象（アンシェヌマン、エリジオン、周辺のリエゾン）について特に現代フランス語の観点から一般的な定義を与える。フランス語はサンディ現象を豊富に内在させる言語であることから、フランス語における「語」を定義することは重要であり、この語の定義には綴り字との関係性が欠かせないと言われている。よって、語を定義するための綴り字の重要性についての考察を行う。次に、リエゾンが実現される場合に発音されるリエゾン子音の特徴について提示し、他の子音とはどのような点で区別されるかについて説明する。また、周辺のリエゾンとして興味深い現象である、アンシェヌマンのないリエゾン、間違っただけのリエゾンについても導入する。そして、リエゾンの実現コンテキストの分類（義務的、選択的、禁止的）について説明する。

**第三章**では、20 世紀および 21 世紀の先行研究で論じられたリエゾンの特徴およびリエゾン実現に関する要因について要約する。先行研究は大きく 4 つのタイプに分類することができる。この 4 つのタイプとは規範記述的研究、コーパスに基づいた研究、社会言語学的研究、理論的研究であり、これらの要約を行うことで、リエゾンという現象の複雑さを示す。

**第四章**では、16 世紀半ばから 18 世紀にかけてフランス語の規範自体の整備がどのように進んだのかについて説明する。そして、特に 16 世紀半ばから 18 世紀にかけて出版された文法書において、語末子音字の発音に関する説明、リエゾンに与えられた規則についてどのように説明されてきたかを明らかにする。

**第五章**では、本研究で使用する 2 つのコーパスについて、そしてコーパスの作成方法について説明する。また、先行研究と本研究との違いを強調すること、そして 2 つのコーパスを比較することで得られると考えられる仮説を紹介することで、本研究の位置付けを述べる。分析方法については、特にメタデータの作成方法、コーパスのデータ処理を行う際に用いる語末子音字の発音有無を示すコードと品詞タグについて説明する。

**第六章**および**第七章**では、17 世紀末および 18 世紀初頭に 2 人の異なる文法家 René Milleran (1692)および Gile Vaudelin (1713, 1715)によって書かれた文献をコーパスとして、語末子音字の発音およびリエゾンの実現・非実現を記述する。

**第八章**では、2 つのコーパスを比較することでリエゾンの実現傾向の一般性を分析する。そして、2 つのコーパスに類似する傾向および異なる傾向を観察する。それを踏まえて、2 つのコーパスで用いられたスタイルの違い、そしてリエゾン子音[z]および[t]の形態的マーカ―の機能の成立について考察する。

## 第二章 リエゾンの定義

本章ではまず、本研究の研究対象であるリエゾンおよびその他のサンディ現象（アンシェヌマン、エリジオン）について一般的な説明を与える。また、リエゾンに関連する周辺の事象とされている、アンシェヌマンのないリエゾンおよび間違っただリエゾンについて簡略に説明する。サンディ現象によって、フランス語における語の定義がどのように複雑であるかについて論じる。

次に、リエゾンが実現される場合に発音されるリエゾン子音は、安定的に発音される子音とは異なる特徴を持つといえる。特に、語境界におけるリエゾン子音と、語末の安定的子音のふるまいの違い、そしてリエゾン子音と語頭の安定的子音の音響音声学的特徴の違いについて先行研究で明らかになっていることを提示する。また、リエゾン子音[t]および[z]は形態的な機能（動詞マーカ―もしくは三人称マーカ―、複数性マーカ―）を持つと言われてきた。この形態的機能について、先行研究でどのような議論がなされてきたかについて要約を行う。

リエゾンは、後続語が母音である場合において常に実現されるわけではない。そのために、リエゾンが実現されるコンテキストの分類（義務的、選択的、禁止的）が Fouché (1959) や Delattre (1966) によって提示されてきた。本章では、特に Delattre (1966) による分類を取り上げ、この分類と音声コーパスで観察されるリエゾンの実現との違いを強調したい。

### 2.1. フランス語のサンディ現象

#### 2.1.1. リエゾン、アンシェヌマン、エリジオン

サンディ（連声）とは「交差」もしくは「合流」を文字通り示すサンスクリット語からの借用語である(Burov, 2012 : 14)。語の内部における 2 つの形態素の接続部における音変化は内連声(sandhi interne)、語境界における 2 つの語の接続における音変化は外連声(sandhi extetrne)と呼ばれる。フランス語の外連声にはアンシェヌマン、エリジオン、リエゾンがある。

- (1) アンシェヌマンは、語末で安定的に発音される子音が、語境界を越えて後続語の語頭に再音節化される現象を指す。形容詞 *grande* [gʁɑ̃d] に名詞 *amie* [ami] が後続する場合には、*grande amie* [gʁɑ̃.da.mi] と発音される。つまり、語末子音[d]は後続語 *amie* [ami] の語頭母音[a]に再音節化され、[da]という音節が形成される。
- (2) エリジオンは、母音の前で母音が脱落する現象である。例えば、定冠詞 *la* [la] は名詞 *amie* [ami] の前で *l'amie* [la.mi] となる。

そして、本研究の研究対象であるリエゾンとは以下のように定義することができる。

- (3) リエゾンとは、MOT1（左側の語）と MOT2（右側の語）の間で、特に MOT2 が母音で始まる語の間で起きる。そして、MOT1 および MOT2 が単独で発音された場合に、どちらの語に属しているとも言えない子音が発音されることが、リエゾンの実現である。

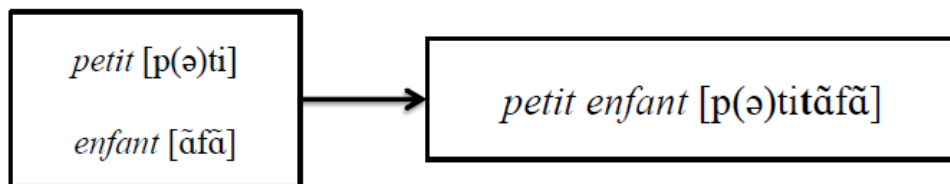


図 2-1 : リエゾンコンテキストにおけるリエゾン子音の現れ

上図の左側に見られるように、語 *petit* と *enfant* は単独で発音された場合には、それぞれ [p(ə)ti] と [ɑ̃fɑ̃] と発音される。一方、上図の右側に見られるように、*petit enfant* と 2 つの語が「小さい子供」という連辞を形成する場合には、[p(ə)ti. tɑ̃. fɑ̃] と発音される。これがリエゾンの実現である。そして、これらの語が個々に発音される場合には発音されない子音 [t] が一般にリエゾン子音 (Consonne de Liaison、略称 CL) と呼ばれるものである。このリエゾン子音が深層構造において MOT1、MOT2 のいずれに属するのか、それともどちらにも属さないのか、というような議論については第三章で扱うが、リエゾン子音がどの音声で表れるかについては、MOT1 の語末子音字が指標となる。よって、上記の例では *petit* の語末の「t」の綴り字から、リエゾン子音の音声が予測可能である。以上に加えて、子音が添加されるタイプもある。例えば、このタイプは *il a* が倒置されるときに \**a-il* [ai] ではなく、*a-t-il* [atil] となり、子音 [t] が添加される現象である (川口, 2010 : 120)。

### 2.1.2. フランス語における語の定義 — 綴り字が持つ役割

語境界で起きる外連声によって、フランス語では複数の語があたかも一つの語のように発音される。そのために、フランス語は音の連続から語を切り出すのが簡単な言語ではない。リエゾンを研究する上で、フランス語における「語」の定義について考えることは重要だろう。まず、音の連続から語を切り出すことの難しさについて、Sabio (2000 : 6) は以下のように指摘している。

« [...] parmi les unités de parole qu'ont dégagées les chercheurs en prosodie, on trouve des unités d'extension inférieure au mot (phonème, syllabe), des unités d'extension supérieure (groupes accentuels, groupes intonatifs...), mais aucune

unité coïncidant nécessairement avec les limites du mot. C'est cette absence de séparation en mots dans la chaîne parlée qui rend totalement homophones les paires suivantes : « c'est l'analyse » / « c'est l'âne à Lyse » ; « l'otarie / l'eau tarie » ; « l'anormalité / la normalité »... »

Sabio (2000 : 6)

「プロソディーを基に研究者が分節した単位において、語よりも小さい単位（音素、音節）、語よりも大きな単位（アクセントグループ、イントネーショングループ）があることに気付くだろう。しかし、いかなる単位も必ずしも語の境界と共に表れるわけではない。発話における語の切離の不在が次のような同音異義の連辞を生じさせるわけである。「c'est l'analyse（これが分析である）/ c'est l'âne à Lyse（これはリーズのロバである）[selanali:z]», « l'otarie（アシカ）/ l'eau tarie（水が乾く）[lotabi]», « l'anormalité（異常）/ la normalité（正常）[lanɔʁmalite]»」

また、1つの語が3つの異なる発音を持つことも可能である。そのような例として、数詞 *six* はわかりやすい例である。この語は、単独で発音される場合には[**sis**]、リエゾンのコンテキストでは *six amis* [**siz** ami]、子音の前では *six pommes* [**si** pɔm]と3つの発音を持つ。よって、1つの語に対して3つの音声的実現を結びつける必要がある語も存在する。これは発音の通時的変化に端を発するものである。

それでは、フランス語において語はどのように定義できるのだろうか。語の単純な定義として、まず17世紀のポールロワイヤル文法が与えた定義が度々引き合いに出される(Blanche-Benveniste, 1993 : 145 ; Sabio, 2000 : 6)。それは、「個々に発音され、個々に書かれるものを語と呼ぶ<sup>2</sup>」というものである。語を定義するための綴り字の役割は様々な研究者によって指摘されてきたと言える。例えば、Blanche-Benveniste & Chervel (1969 : 211)は以下のように述べている。

« L'orthographe nous a appris à écrire des mots, c'est-à-dire à lever la plume à la fin d'un ensemble graphique minimum afin de le séparer du suivant par un blanc.»

Blanche-Benveniste & Chervel (1969 : 211)

「綴り字は我々に語を書くことを学ばせた。つまり、空白によって次の語から切り離すために、文字の最も小さな集合の終わりに、ペン先を上げるということである。」

フランス語を母語として習得する幼児は、音声だけを頼りに語境界を探らなければなら

---

<sup>2</sup> Lancelot & Arnauld (1660 : 16) を参照。« On appelle Mot ce qui se prononce à part, & s'écrit à part »

ない。そして、彼らにとっても音連続から語と語を切り離すことは難しいことのようにである。この幼いフランス語母語話者たちは、名詞を発音する際に、冠詞を付けて発音することを好む傾向があることから、語境界を特定することの難易度は明らかである(Cf. Dugua, 2006 ; Wauquier-Gravelines 2004)。このような語境界という概念自体の習得の難しさは、幼児が産出するエラーにおいて観察することができる。Côté (2005 : 68)は2歳から5歳の幼児の語境界におけるエラーには5種類あることを指摘している。以下に Côté (2005 : 68)が挙げた例を示す。

(1) CL の代用 (リエゾンが起きる文脈において)

un ours 幼児 : [œzurs] 大人 : [œnurs]

以上の例において、幼児は通常発音が期待される子音[n]ではなく、[z]を代用している。

(2) CL の挿入 (リエゾンが起きる文脈外において)

papa ours 幼児 : [papanurs] 大人[papours]

以上の例では、通常[papours]と発音され、語境界において母音接続が起きるはずだが、幼児の例では子音[n]が挿入されている。

(3) CL の省略 (義務的リエゾンが起きる文脈において)

un ours 幼児 : [œurs] 大人 : [œnurs]

この例においては、[œnurs]のようにリエゾン子音[n]がリエゾン子音として発音されるべきところであるが、幼児はこの子音を省略している。

(4) 語頭の CF<sup>3</sup>の代用

un zèbre 幼児 : [œnzɛbr] 大人 : [œzɛbr]

以上の例では、語頭の安定的子音[z]が、他の子音([n])で置き換えられている。

(5) 語頭の CF の省略

un zèbre 幼児 : [œɛbr] 大人 : [œzɛbr]

以上の例では、語頭の安定的子音[z]が省略されている。

以上のエラーでは、リエゾン子音が語頭に接辞化されて実現されるタイプ (例 1、2)、リエゾンコンテキストにおいてリエゾン子音の省略が起きるタイプ(例 3)、リエゾン子音と安定的子音が語頭において区別されないタイプ(例 4、5)という3つの可能性があるということである。幼児はこれらの語、それぞれに異形態を与えているとも考えられる。よって、2つの語 *ours* および *zèbre* を以下の表のように認識しているとも解釈できる。

<sup>3</sup> CF は安定的に発音される子音(Consonne Fixe)の略称として用いる。



語 <i>ours</i>	語 <i>zèbre</i>
[urs]	[ɛbʁ]
[nurs]	[nɛbʁ]
[zurs]	[zɛbʁ] ?

表 2-1 : 語 *ours* と語 *zèbre* の発音形

つまり、語 *ours* および *zèbre* は、語頭子音がある発音形、語頭子音がない発音形をそれぞれ持つと、幼児が認識している可能性がある。そして、発話から語の正しい発音形を取り出すことを要求された場合に、第一に語頭のリエゾン子音と安定的子音が本質的に異なるものであると幼児が認識している必要がある。第二に、MOT2 の語頭で発音される子音が MOT1 に依存することを認識する必要があるといえる。

一方、綴り字を学び始めた小学 1 年生の子供たちは、「冠詞+名詞」の連辞から、名詞のみを切り離すことがより簡単にできるようである。そのため、語境界でリエゾン子音を省略するエラー（例：*les ours* [le urs]）が多いことを Ruvoletto (2014) が指摘している。

従って、フランス語において語を定義するために、綴り字は重要な役目を果たすことが明らかである。また、綴り字の集合と集合の切れ目によって、語の境界を判断できるといっても過言ではない。語と綴り字は切っても切り離せない依存の関係にあるといえる。

### 2.1.3. 周辺的なリエゾン

以上で説明したリエゾンの他に、アンシェヌマンのないリエゾン (*liaison sans enchaînement*) と間違っただリエゾン (*fausse liaison*) と呼ばれる、周辺的な現象がある。以下ではこの周辺的なリエゾンについて説明する。

#### 2.1.3.1. アンシェヌマンのないリエゾン

アンシェヌマンのないリエゾン (*liaison sans enchaînement* / *liaison non enchaînée*) とは、Encrevé (1988 : 32) の説明によれば CL が MOT2 の語頭音節に再音節化されないものである。つまり、リエゾンコンテキストにおいて、CL は MOT2 の語頭母音に再音節化されず、MOT1 のコーダ<sup>4</sup>で発音される、もしくは CL に声門閉鎖が後続し、その後に MOT2 が発音されるものである。

例：*J'avais un rêve* (Encrevé 1988 : 32)

(1) 通常のリエゾン : [ʒa ve zɛ̃ ʁɛv]

(2) アンシェヌマンのないリエゾン : [ʒa vez(?) ɛ̃ ʁɛv]

<sup>4</sup> 音節は母音の前の子音(群)であるオンセットと母音とその後の音(群)の連鎖であるライムに分かれる。さらに、ライムは母音からなる核と子音からなるコーダに分かれる。例えば、1 音節語の *bal* /bal/ は、オンセットに /b/、核に /a/、コーダに /l/ が置かれる。

以上の例において、通常リエゾンが実現される場合は、子音[z]は語 *un* [ɛ̃]と共に[zɛ̃]と発音される。しかし、アンシェヌマンのないリエゾンにおいては、この子音が語 *avais* [avez]の語末で発音される。Encrevé (1988 : 33)はこのような再音節化を伴わないリエゾンのスペクトログラムを提示している。

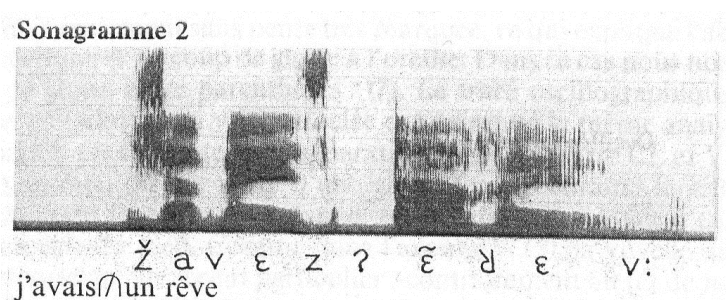


図 2-2 : アンシェヌマンのないリエゾン(Encrevé, 1988 : 33)

以上に挙げたスペクトログラムから、リエゾン子音[z]と後続する語の語頭母音の間に声門閉鎖が挿入されていることは明らかである。。以上で説明したタイプのリエゾンは、Encrevé以前にも指摘されてきた。ただし、このタイプのリエゾンを、Coustenoble & Armstrong (1934)<sup>5</sup>や Delattre (1966 : 59)は「強調アクセント」として、また Ågren (1973 : 25-26)は「躊躇のポーズ」の一種として考えていたようである(Encrevé, 1988 : 41)。それでは、リエゾン子音の位置に干渉すると捉えられた「強調アクセント」と「躊躇のポーズ」は、どのように説明されているのだろうか。Delattre (1966 : 59)はこのような「強調アクセント」に対して以下のように説明している。

« L'accent d'insistance du type le moins émotif [...] peut affecter la liaison de diverses manières. Ainsi l'exclamation : *C'est Impossible* se prononcera soit en omettant la liaison et en prolongeant la voyelle du verbe [se-ɛ̃pɔsibl] ; soit de telle manière que le *t* se réunisse implosivement à la première syllabe : [set ɛ̃pɔsibl] »

Delattre (1966 : 59)

「最も感情的ではない強調アクセントは様々な方法によってリエゾンに影響を与える。つまり *C'est Impossible* (不可能である) というような感嘆文は次のような方法で発音されるだろう。一方では、リエゾンが実現されず、母音を長くして[se-ɛ̃pɔsibl]と発音する方法である。他方では、[set ɛ̃pɔsibl]のように、*t*が内破的に最初の音節で発音される方法である。」

<sup>5</sup> Encrevé (1988)によって引用されている。Coustenoble, H.N. & Armstrong, L.E. (1934). *Studies in French Intonation*, Cambridge : Heffer.

Léon (1992 : 109)に従えば、「強調アクセント」は強さ、長さ、声門閉鎖の挿入、もしくはイントネーションの部分的上昇によって示される。Delattre の1つ目の強調アクセントを表す方法は、母音を長くする方法である。2つ目の *t* を内破的に発音することで強調アクセントを表す方法には、声門閉鎖の挿入も同時に起きると解釈できる。よって、この声門閉鎖の挿入がアンシェヌマンのないリエゾン<sup>6</sup>を、Delattre が強調アクセントとして捉えた理由として考えられるのではないだろうか。また、Ågren (1973 : 25)は躊躇のポーズに対して以下のような説明を与えている。

« Lorsque la liaison se réalise, la consonne de liaison peut se comporter de deux manières différentes selon la place qu'occupe la PH (Pause-hésitation). Si la PH intervient avant la consonne de liaison, cette consonne est perçue comme appartenant au mot suivant, mais si la PH se présente après la consonne de liaison, celle-ci donne l'impression d'être incorporée au mot précédent. »

Ågren (1973 : 25)

「リエゾンが実現される際に、躊躇のポーズが占める位置によって、リエゾン子音は2つの異なったふるまい方をみせる。もし躊躇のポーズがリエゾン子音の前にある場合には、この子音は後続する語に属するように認識される。しかし、もし躊躇のポーズがリエゾン子音の後に現れるのであれば、リエゾン子音が先行する語に組み込まれているような印象を与える。」

以上に記した Delattre (1966)と Ågren (1973)がそれぞれ説明する「強調アクセント」と「躊躇のポーズ」の特徴は、Encrevé (1988)が「アンシェヌマンのないリエゾン」と呼ぶものと一致する。Delattre (1966)や Ågren (1973)の説明からは、この種のリエゾンは比較的珍しいものであるように思える。それに対して、Encrevé (1988)はアンシェヌマンのないリエゾンを、「強調アクセント」や「躊躇のポーズ」と同列に扱うわけではなく、むしろある特定の話者を特徴化する一種の社会言語学的現象として捉えている。アンシェヌマンのないリエゾンは Encrevé (1988)が調査の対象とした政治演説のような発話において珍しいものではない。さらに、政治家だけに限らず、テレビやラジオのアナウンサー、知識人にもこのようなリエゾンの発音が観察される<sup>6</sup>。少なくとも公の場で話すことが多い職業に従事する話者の間で、このようなタイプのリエゾンは1970年代に文法化したと Encrevé (1988 : 271)は主張する<sup>7</sup>。これに対して、パリ郊外 Villejuif の若者の話し言葉について Laks (1980)が行った研究、最近の第一言語習得研究 (Chevrot *et al* 2005, Wauquier-Gravelines *et al* 2005)では、このタイプのリエゾンは全く観察されていない。また、最近の大規模コーパスに基づいた研究 (Mallet,

<sup>6</sup> Encrevé (1988 : 270)を参照。

<sup>7</sup> Morin (1986 : 198) は、ケベックのフランス語にはこのようなリエゾンは観察されないと述べている。アンシェヌマンのないリエゾンはフランスのフランス語に特有な現象であるとも考えられる。

2008 : 179)においても稀にしか観察されない<sup>8</sup>。

### 2.1.3.2. 間違っただリエゾン

間違っただリエゾン(*fausse liaison, liaison fautive*)には2つのタイプがある。まず一つ目は、リエゾンの実現が通常期待されないコンテキストにおいて、MOT2 のオンセット<sup>9</sup>に子音が発音されるタイプである。次に二つ目のタイプは、リエゾンの実現が期待されるコンテキストにおいて予測されるリエゾン子音とは異なる子音が発音されるものである。例えば、Morin & Kaye (1982)は以下のような例を挙げている。

(1) *chemins de fer* [z] *anglais*

(2) *Il devra y* [t] *avoir*

(3) *J'ai beaucoup* [t] *aimé*

まず例(1)と(2)は一つの目のタイプである。例(1)の *fer* は語末子音[r]が発音された後に、更に子音[z]が MOT2 の *anglais* の前で発音されている。例(2)の *y* は母音のみで構成される音節を持つはずが、*avoir* の前で子音[t]が発音されている。そして、例(3)は二つ目のタイプであり、この例では、*beaucoup* がリエゾンコンテキストにある場合、子音[p]の実現が期待されるが、子音[t]が現れる。予期されるリエゾン子音とは異なる子音が発音される場合や、リエゾンコンテキストではないにもかかわらず MOT2 のオンセットに子音が発音される場合を「間違っただリエゾン」と呼ぶのである。

この「間違っただリエゾン」が起きる理由として2つのことが考えられるだろう。まず一つ目は、MOT2 が複数の異形態を持つことである<sup>10</sup>。この異形態には、語頭に形態的マーカーという機能（動詞マーカーの[t]、複数性マーカーの[z]）を持つリエゾン子音が接頭辞化したものが考えられる。二つ目の理由として、MOT1 と MOT2 の間にリエゾン子音が偶発的に挿入されることである。この場合にも、挿入されるリエゾン子音は既述した形態的マーカーの機能を持つことが考えられる。この間違っただリエゾンはリエゾン子音の位置をめぐる理論的議論における事例として大いに利用される。

---

<sup>8</sup> Mallet (2008)が使用した PFC コーパスでは、コード化されたリエゾンコンテキストの0,35%を占める130例が観察されている。256名の話者のうち75名がこのリエゾンを実現し、ほとんどの場合がインタビューもしくはテキストの朗読で実現されている。

<sup>9</sup> オンセットとは註4で述べたように、音節の核となる母音の前に位置する子音(群)のことを指す。

<sup>10</sup> Gadet (1997a : 30) は、*donne-moi z'en* のような例について、*en* や *y* は、*z'en* や *z'y* のような異形態を持つと指摘している。このような考え方は、Damourette & Pichon (1927)を始め、Morin & Kaye (1982)、Morin (2001)、Morin (2005a)でも提示されており、MOT2 はリエゾン子音が接頭辞化した異形態を持つというものである。

## 2.2. リエゾン子音の特徴

リエゾン子音はリエゾンのコンテキストでのみ現れ、その音声的性質 ([z], [t], [n], [r], [p], [k]もしくは[g]) は子音字に依存する。リエゾン子音となる語末の子音字は、「*s, z, x, t, d, n, r, p, g*」である (Delattre, 1966 : 42)。これらの綴り字はリエゾンのコンテキストにおいて、それぞれ以下のような子音で発音される。

綴り字	子音	例
<i>s, z, x</i>	[z]	<i>jeux [z] olympiques</i>
<i>t, d</i>	[t]	<i>grand [t] ami</i>
<i>n</i>	[n]	<i>un [n] animal</i>
<i>r</i>	[ʁ]	<i>premier [ʁ] enfant</i>
<i>p</i>	[p]	<i>trop [p] important</i>
<i>g</i>	[k] <sup>11</sup> もしくは[g] <sup>12</sup>	<i>long [k] / [g] hiver</i>

表 2-2 : 綴り字とリエゾン子音

リエゾン子音[r], [p], [k]もしくは[g]については、リエゾンコンテキストにあってもその発音の実現は稀である。最近の大規模コーパスを用いた研究においては、[r], [p], [k]を語末に持つ語において後続語とのリエゾンが実現した割合は、それぞれ 1,3%、11,2%<sup>13</sup>、0%である (Mallet, 2008 : 214-217)。リエゾン子音[k]が実際に発音されるのは、大変限られたコンテキストであるようである。例えば名詞 *sang* (血) について、Fouché (1959 : 440-441) は以下のように指摘している。

« En dehors du *qu'un sang impur de la Marseillaise*, on ne fait plus guère la liaison dans le cas de *sang* suivi d'un adjectif : *le sang | artériel*, *le sang | humain*. »

Fouché (1959 : 440-441)

「マルセイエーズ (フランスの国歌) の *un sang impur* (汚れた血) を除けば、形容詞が後続する *sang* において、もはや全くリエゾンをすることはない。このような例には、*le sang | artériel* (動脈血)、*le sang | humain* (人間の血) がある。

<sup>11</sup> 語末子音字 *g* は[k]と発音されると Fouché (1959 : 436) は指摘している。

<sup>12</sup> Morin (1992 : 390, 398n8) によれば、*long* の *g* は現代フランス語においては無声化せず子音 [g] がリエゾンのコンテキストで表れる。

<sup>13</sup> Mallet (2008 : 215-217) によると、PFC コーパスにおける [p] のリエゾンが実現したのは、副詞 *trop* および *beaucoup* のみである。

その一方で、リエゾン子音[t]、[z]、[n]を語末に持つ語において後続語とのリエゾンが実現した割合は54%、43,8%、25,3%である(Mallet, 2008 : 219)。このように、リエゾンの実現率は、リエゾン子音によって異なることは明らかである。

### 2.2.1. リエゾン子音と他の子音の違い

それでは、他の子音とリエゾン子音との決定的な違いはどのように説明できるだろうか。フランス語では[p(ə)titami]という音の連続に、*petit ami* (男性の恋人)、*petite amie* (女性の恋人)、*petit tamis* (小さなふるい)<sup>14</sup>という3つの意味的解釈が可能である。

(1) リエゾン子音	<i>petit</i>	<i>ami</i>	←	<i>petit ami</i>
	[p(ə)ti]	[a. mi]		[p(ə)ti. ta. mi]
(2) 語末子音	<i>petite</i>	<i>amie</i>		<i>petite amie</i>
	[p(ə)tit]	[a. mi]		[p(ə)ti. ta. mi]
(3) 語頭子音	<i>petit</i>	<i>tamis</i>		<i>petit tamis</i>
	[p(ə)ti]	[ta. mi]		[p(ə)ti. ta. mi]

表 2-3 : 同音異義の連辞 *petit ami*, *petit tamis*, *petite amie*

つまり、(1)ではリエゾン子音が MOT2 の語頭で発音され、(2)では MOT1 の語末に位置する安定的子音[t]が MOT2 の語頭で発音されることでアンシェヌマンが起きる、(3)では MOT2 の語頭の安定的子音[t]が発音される。リエゾン子音とその他の子音(語末子音、語頭子音)にはどのような違いが観察されるのか、以下で簡略に説明する。

### 2.2.2. リエゾン子音と語末子音の違い

Bonami & Boyé (2005 : 92)をはじめ、Ågren (1973), Morin & Kaye (1982), Encrevé (1988), Tranel (1990)らは、リエゾンのコンテキストに休止が挿入された場合について考えが一致している。つまり、一方で、リエゾン子音は休止の前後、つまり MOT1 の語末および MOT2 の語頭での発音が可能である。他方で、語末で安定的に発音される子音は、2つの語の間にポーズが挿入された場合には、必ず MOT1 の語末で発音される。Bonami & Boyé (2005 : 92) はこれについて以下のような例を挙げている。

- (1) mon petit ami
  - a. mɔ̃pətɪ tami
  - b. mɔ̃pətɪt ami

<sup>14</sup> Côté (2005)が用いた例を参照。

(2) mon sympathique ami

- a. \*mõsẽpati kami
- b. mõsẽpatik ami

上記の例(1)では、連辞 *mon petit ami* において *petit* (MOT1)と *ami* (MOT2)の間に休止が挿入された場合には、リエゾン子音は *petit* の語末および *ami* の語頭で発音が可能である。一方、例(2)の連辞 *mon sympathique ami* では、安定的子音[k]は休止の前、つまり *sympathique* (MOT1)の語末で発音され、語境界を越えて *ami* (MOT2)の語頭で発音されることはない。

### 2.2.3. リエゾン子音と語頭子音の違い

リエゾン子音は MOT2 の語頭で発音されるが、語頭で安定的に発音される子音 (MOT2 本来の語頭子音)とは音響音声学的に異なる性質を持つと言われている。例えば、Delattre (1940)は、リエゾン子音は語頭子音に類似するが、語頭子音に比べて弱く、リエゾン子音は MOT2 の語頭で発音された場合にも、コーダに位置する子音としての特徴を保つために、リエゾン子音とは異なると述べている。Dejean de la Bâtie (1993) は、リエゾン子音が発音された場合に、その閉鎖は長く、語頭子音に比べて VOT が短いことを観察している<sup>15</sup>。リエゾン子音の知覚実験を行った Spinelli & Meunier (2005)は、リエゾン子音の持続時間が語頭子音のものよりも短いという音響音声学的情報が、例えば « *c'est le dernier oignon* (これが最後のタマネギである) »と « *c'est le dernier rognon* (これが最後の腎臓である) »の発音を区別するための聴覚的な手がかりになることを提示している<sup>16</sup>。

### 2.2.4. 形態的マーカーとしてのリエゾン子音

特定のリエゾン子音は形態的マーカーの働きを持つと言われている。そのような子音は、動詞マーカーの[t]と複数性マーカーの[z]がある。これらの子音がなぜ形態的マーカーとしての機能を持つと考えられるかについて以下で詳しく説明する。

#### 2.2.4.1. 動詞マーカーとしての[t]

Morin & Kaye (1982 :323)は、リエゾン子音[t]は動詞マーカーとしての機能を持つと指摘している。以下のような「間違っただリエゾン」はその良い例といえるだろう。

- (1) Il devra **t**-y avoir
- (2) Les résultats qu'on aurait pu **t**-en espérer
- (3) J'ai beaucoup **t**-aimé

<sup>15</sup> Côté (2005)および Spinelli & Meunier (2005)を参照。

<sup>16</sup> Wauquier-Gravelines (1996)も同様に、リエゾン子音[t]について、その閉鎖が語頭の安定的子音よりも短い(50ms vs 70ms)という結果を得ている。

(4) Ça doit bien t-être cuit, maintenant

(5) Ils ne veulent pas t-aller à l'école

Morin & Kaye (1982 : 323)

以上の例を見ると、動詞句の中に挿入される子音は全て[t]である。なぜ、動詞マーカの機能を持つと考えられる子音は[t]に限定され、[z]はそのように考えられないのだろうか。これについては、動詞のリエゾンにおいて[z]のリエゾン実現率が[t]と比較して低いということが考えられるだろう<sup>17</sup>。例えば、*être* 動詞、*avoir* 動詞に限定すると、1人称 ([z]のリエゾン子音コンテキスト) よりも3人称 ([t]のリエゾン子音コンテキスト) が実現されやすい傾向も実際に指摘されている。Booij & De Jong のコーパスにおいても *étais* (2.3%)、*était* (18.7%)、*vais* (9.5%)、*vont* (33%)<sup>18</sup>のように、[t]のリエゾン子音を持つ語においてリエゾンはより実現される<sup>19</sup>。

また、[t]が動詞の3人称形のリエゾンに表れることから、3人称マーカとしての役割も考えられる。ただし、Morin & Kaye (1982 : 325)は、[t]が3人称に限らず、1人称および2人称の動詞の後にも表れる例を示している。

(6) j'ai rencontré t-une rare beauté

(7) j'ai t-un lit garni

(8) j'ai t-aperçu t-une réelle beauté

(9) ma mère, ah ! faites-moi t-un lit

(10) apprends-moi t-à parler

以上に挙げた例があることから、Morin & Kaye (1982)はリエゾン子音[t]は3人称を示す機能ではなく、むしろ広い意味で動詞マーカの役割を持つと主張している。

#### 2.2.4.2. 複数性マーカとしての[z]

Martinon (1913 : 375) は今後とも末永く保持されるリエゾンの機能として、「複数性を示すこと」を挙げている。また、この機能があることにより、冠詞 (*mes, les, ses, nos, vous, leurs, certains, plusieurs*)や数詞 (*deux, trois, six, dix*)のリエゾンは例外なく実現されると述べている。Delattre (1966 : 41)も、[z]のリエゾン実現が複数性を、そしてリエゾンの非実現が単数を示す傾向があると述べている。

<sup>17</sup> Morin & Kaye (1982 : 325)は、フランスのフォークソングにおいてリエゾン子音/z/を伴った「間違っただリエゾン」の例を示唆している。例えば、そのような例には « j'ai rencontré z-une rare beauté »がある。

<sup>18</sup> *étais* と *vais* は[z]のリエゾン子音を持ち、一方 *était* と *vont* は[t]のリエゾン子音を持つ。

<sup>19</sup> この傾向は Ågren (1973 : 33, 63)でも観察できる。



- (1) *Des soldats espagnols ; un soldat / espagnol.*
- (2) *Des maisons à vendre ; une maison / à vendre.*
- (3) *Les lilas et les roses ; le lilas / et la rose.*

Delattre (1966 : 41)

このように、リエゾン子音[z]は複数形を表すコンテキストに頻出し、そのために複数性を示す機能が定着したようである。また、この複数性の機能は「間違ったリエゾン」にも活用される(Martinon, 1913 : 375 ; Morin & Kaye, 1982 : 321)。

- (4) *Des avions à réaction z-américains*
- (5) *Des chefs d'Etat z-africains*
- (6) *Les chemins de fer z-anglais*

Morin & Kaye (1982 : 321)

上記の例のように、リエゾン子音[z]は形態的分析によって、複数性という意味合いを含むようになる。この機能が確実性を帯びることによって、間違ったリエゾンのような例において、子音[z]が複数名詞の語頭に現れると解釈することもできる。

### 2.3. リエゾンの実現コンテキストの分類

リエゾンの分類は複数の研究にみられるが、ここでは Delattre (1966)の分類を引用する。従来リエゾンは、義務的、選択的、禁止的の 3 つのコンテキストに分類されてきた。ただし、Delattre (1966 : 43)が述べているように、このような分類は絶対的なものではなく、使用されるスタイルに依存するものである。以下に、Delattre (1966)による分類を簡略化したものを提示する。

	義務的	選択的	禁止的
名詞句	冠詞+ 名詞 <i>vos enfants</i> 代名詞 <i>deux autres</i> 形容詞 <i>un ancien ami</i>	複数形名詞+ <i>des soldats anglais</i> <i>ses plans ont réussi</i>	単数形名詞+ <i>un soldat anglais</i> <i>son plan a réussi</i>
動詞句	人称代名詞+動詞 <i>ils ont compris</i> <i>nous en avons</i>  動詞+人称代名詞 <i>ont-ils compris</i>	動詞+ <i>je vais essayer</i> <i>j'avais entendu dire</i> <i>vous êtes invité</i>  <i>il commençait à lire</i>	

	<i>allons-y</i>		
不変化語	単音節の不変化語 <i>en une journée</i> <i>trop aimable</i>	複数音節の不変化語 <i>pendant un jour</i> <i>toujours utile</i>	<i>et</i> + <sup>20</sup> <i>et on l'a fait</i>
特殊な語 もしくは 語の連続	慣用句 <i>comment allez-vous</i> <i>les Etats-Unis</i> <i>accent aigu</i> <i>tout à coup</i> <i>de temps en temps</i>		有音の h <i>des héros</i> <i>en haut</i>  + <i>un</i> <sup>21</sup> , <i>huit</i> , <i>onze</i> <i>la cent huitième</i> <i>en onze jours</i>

表 2-4 : リエゾンの分類 (Delattre, 1966 : 43)

この分類は一見すると単純な統語的分類に見える。しかし、特に「不変化語」については、単音節ならば義務的、複数音節なら選択的といった語の長さが、リエゾンの実現に関わる要因の一つであるということにも気づくだろう。以下では、「義務的」、「選択的」、「禁止的」リエゾンについて、Delattre (1966 : 43)の分類に対して、現代フランス語ではどのような齟齬が観察されるのかについて先行研究を基に考察する。

### 2.3.1. 義務的リエゾン

義務的リエゾンは、リエゾンが必ず実現されねばならないものを示す。Delattre (1966)によって義務的リエゾンに分類されたコンテキストを以下に提示する。

MOT1	MOT2	例
冠詞 定冠詞 不定冠詞 部分冠詞	+名詞	<i>vos enfants</i> <i>deux autres</i> <i>un ancien ami</i>
指示形容詞 所有形容詞 数詞 疑問形容詞		<i>Ces enfants</i> <i>Son ami</i> <i>Deux amis</i> <i>Quelles histoires</i>

<sup>20</sup> このような「MOT1+」のようなコンテキストは、MOT1 とその後続語というコンテキストを指している。つまり、「*et* +」は「*et*と後続する語」というコンテキストと解釈できる。

<sup>21</sup> 「+MOT2」のようなコンテキストは、MOT2 に先行する語と MOT2 のコンテキストを示す。「+*un*」は、「*un*に先行する語+ *un*」というコンテキストである。

不定形容詞 質的形容詞		<i>Plusieurs hommes</i> <i>Un gros arbre</i>
限定詞	+代名詞 +形容詞	<i>les uns, plusieurs autres, les deux autres</i> <i>leurs éternels regrets, quels horribles étés, de vrais anciens amis, certains affreux aigles</i>
人称代名詞	動詞 +人称代名詞+動詞	<i>Vous êtes</i> <i>Vous y êtes</i>
動詞	+人称代名詞 +人称代名詞+人称代名詞	<i>Vient-elle</i> <i>Allons-nous-en</i>
<i>c'est</i> (非人称) <i>il est</i> (非人称)		<i>C'est impossible</i> <i>Il est évident</i>
前置詞 (1 音節)		<i>Dans un an</i> <i>Sous un arbre</i>
副詞 (1 音節)		<i>Très utile</i> <i>Trop aimable</i> <i>Pas amusant</i> <i>Plus important</i>
慣用句		<i>Les Champs-Élysées</i> <i>Les États-Unis</i> <i>Comment allez-vous</i> <i>Il était une fois</i> <i>Tout à fait</i>

表 2-5 : 義務的リエゾンのコンテキスト

上記のようなコンテキストが、必ずリエゾンが実現されるコンテキストと言われているわけだが、Durand & Lyche (2008)による大規模コーパスを用いた PFC の調査において、絶対的にリエゾンが実現されるコンテキストは、「限定詞+名詞」、「人称代名詞+動詞」、「動詞+接辞」に縮小されている。Durand & Lyche (2008)は、Delattre (1966)の分類と PFC コーパスで実際に得られた結果の違いを詳細に記している。以下にその要点を挙げる。

- (i) 単音節の前置詞の後で常にリエゾンが実現されるわけではない。例えば、*en* は非常に高い確率でリエゾンが実現される一方で、*chez* はそういうわけにはいかない。*chez elle* のように人称代名詞が後続する場合にはリエゾンが絶対的に実現される一方で、

- 固有名詞(例：*chez Yves*)が後続する場合には、リエゾンが実現されないことも多い。
- (ii) 単音節の副詞の後で常にリエゾンが実現されるわけではない。
  - (iii) 前置形容詞+名詞において常にリエゾンが実現されるわけではない。PFC コーパスの文章読み上げタスクにおいて、*grand émoi*、*grand honneur* といったコンテキストでリエゾンが実現されない、もしくは通常期待される子音[t]ではなく、子音[d]が実現されることもある。
  - (iv) 中性代名詞+繫辞(c'est+)も同様で、PFC コーパスでは *c'est* において、リエゾンの実現頻度は 30%であり、義務的にリエゾンが実現されるわけではない。

よって、少なくとも使用されるスタイルが特にかしこまったものではない自然会話において、現代フランス語では、上記のコンテキストは選択的リエゾンに分類される必要がある。

### 2.3.2. 選択的リエゾン

選択的リエゾンは、リエゾンの実現・非実現の選択が話者に委ねられているものを指す。選択的リエゾンは統語的コンテキストによって、リエゾンの実現率が比較的高いものと、低いものがある。

MOT1	MOT2	例
名詞（複数形）	+形容詞  +動詞  +不変化語	<i>Des maisons immenses</i> <i>Des plans urgents</i> <i>Les trains ont du retard</i> <i>Les camions arrivent</i> <i>Des plans à faire</i> <i>Des lits assez larges</i>
代名詞+		<i>D'autres arriveront</i> <i>Plusieurs écoutent</i> <i>Toutes auront peur</i>
人称代名詞（倒置）+ a) 主語( <i>nous, vous</i> )  b) 補語( <i>nous, vous</i> )		<i>avons-nous un livre</i> <i>qu'avez-vous à faire</i>  <i>placez-vous à droite</i> <i>amusons-nous un peu</i> <i>donnez-nous un livre</i>
動詞+		<i>Ils sont heureux</i>

		<i>Il fait un pas</i> <i>Nous allons en voir</i> <i>Je vais y aller</i> <i>Ils le font écrire</i>
	+過去分詞	<i>Qu'avez-vous entendu</i> <i>Avez-vous bien observé</i> <i>Ont-ils tout apporté</i> <i>Nous l'avons appris</i>
前置詞 (2 音節以上) +		<i>Depuis un an</i> <i>Pendant une semaine</i> <i>Après avoir vu</i> <i>Devant un mur</i>
副詞 (2 音節以上) +		<i>Souvent absent</i> <i>Jamais à l'heure</i> <i>Toujours en retard</i> <i>Beaucoup à faire</i> <i>Assez aimable</i>
接統詞 (単音) +		<i>Mais alors</i> <i>Puis on partira</i>
	+不変化語 (a) 名詞 (複数形)  (b) 形容詞 (複数形)  (c) 代名詞  (d) 動詞	<i>Les maisons et les prés</i> <i>Des plans à faire</i> <i>Les sapins ou les pins</i> <i>Les mots et les phrases</i>  <i>Bons ou mauvais</i> <i>Divins à voir</i> <i>Bruns et gris</i> <i>Deux et deux</i>  <i>Plusieurs à tour de rôle</i> <i>C'est pour eux et vous</i> <i>Remettez-vous à lire</i> <i>Les miens aussi</i>

	(e) 副詞(2音節以上)	<i>Il s'attend à partir</i> <i>Il allait et venait</i> <i>J'étais en retard</i>  <i>J'ai tellement à faire</i> <i>Il a toujours à redire</i> <i>Simplement et brièvement</i>
--	---------------	--

表 2-6 : 選択的リエゾンのコンテキスト

名詞+動詞コンテキストのリエゾン(例: *les parents [z] attendent*)を Delattre (1966)は選択的コンテキストに分類しているが、もはやこのコンテキストのリエゾンはリエゾンが常に実現されないコンテキスト(禁止的)であることが指摘されている(Bonami *et al*, 2004, 2005; Durand & Lyche, 2008: 46)。

選択的コンテキストは、リエゾンの実現・非実現の選択が話者に委ねられている上に、全てのコンテキストにおいて一様の頻度でリエゾンが起きるわけではない。

### 2.3.3. 禁止的リエゾン

禁止的リエゾンは、リエゾンが全く実現されないコンテキストである。このようなコンテキストにおいて、リエゾンが仮に実現された場合、母語話者は違和感を覚える。以下に Delattre (1966)が禁止的に分類したコンテキストを挙げる。

MOT1	MOT2	例
合成語の複数形		<i>Des salles / à manger</i> <i>Des arcs /-en-ciel</i> <i>Des pots /-au-feu</i> <i>Des accents /aigus</i>
固有名詞+		<i>Jean / espère venir</i> <i>Louis / appelle</i>
代名詞(語末が鼻母音のもの) +		<i>Chacun / y va</i> <i>Quelqu'un / arrive</i> <i>Le mien / est bon</i>
代名詞の倒置 a) <i>on, ils, elles</i>		<i>a-t-on / un livre</i> <i>ont-ils / un livre</i> <i>qu'ont-elles / à la mains</i> <i>auront-ils / essayé</i>

b) <i>en, les</i>		<i>placez-en / à droite</i> <i>donnez-en / aux enfants</i> <i>donnez-les / aux enfants</i>
<i>on, ils, elles</i>	+ 過去分詞	<i>Qu'a-t-on / apporté</i> <i>Qu'ont-ils / écrit</i> <i>Où sont-elles / allées</i>
接続詞 <i>et</i> +		<i>Lui et / elle</i> <i>Et / en plus</i> <i>Et / ils y perdent</i>
	+ <i>oui</i>	<i>Il dit / oui</i> <i>C'est / oui</i> <i>Mais / oui</i>
疑問副詞+		<i>Combien / en as-tu</i> <i>Comment / a-t-il fait</i> <i>Quand / es-tu arrivé</i>
接続詞 (2 音節以上)		<i>Alors / on rentra</i> <i>Pourtant / Alice attendait</i> <i>Cependant / on l'accusait</i> <i>Néanmoins / elle resta</i>
	+ 不変化語 (a) 名詞 (単数)  (b) 形容詞 (単数)  (c) 代名詞 (鼻母音語末)	<i>La maison / et le pré</i> <i>Un plan / à faire</i> <i>Le sapin / ou le pin</i> <i>Bon / ou mauvais</i> <i>Divin / à voir</i> <i>Brun / et gris</i> <i>Chacun / à son tour</i> <i>Prenez-en / et partez</i> <i>Va-t-en / à ta place</i>
	+ 有声の <i>h</i>	<i>La / hache</i> <i>La / haie</i> <i>La / heine</i> <i>En / haut...</i>

	+un, huit, onze, unième, huitième, onzième	<i>Vers les / onze heures</i> <i>La cent / unième rue</i> <i>Les / huitièmes jours</i> <i>Les / onzièmes heures</i> <i>Dans / huit jours</i> <i>Il a cent / un ans</i>
慣用句		<i>Nez / à nez</i> <i>Riz / au lait</i> <i>Pot / à tabac</i> <i>Pot / à beure</i> <i>Chaud / et froid</i>

表 2-7 : 禁止的リエゾンのコンテキスト

禁止的リエゾンは、Delattre (1966)の分類に変更を加える必要はなく、安定的である(Cf. Mallet, 2008 : 70)。

#### 2.4. 第二章のまとめ

第二章では、まずフランス語における外連声である、アンシェヌマン、エリジオンおよびリエゾンの定義を行った。外連声の影響から、音声上の語境界が曖昧になりやすいフランス語において、語はどのように定義されるのかという点について言及した。フランス語の語の定義において、大変重要な役割を担っているのは綴り字であり、語と綴り字は切っても切り離せない依存の関係にあるといえるだろう。さらに、周辺的なリエゾンとして、アンシェヌマンのないリエゾンおよび間違っただリエゾンという事象について説明した。リエゾン子音の特徴については、語末で安定的に発音される子音と語頭子音との違いについて述べることでリエゾン子音の特殊性についての考察を行った。また、特にリエゾン子音[t]および[z]は形態的マーカーとしての機能を持つことについて述べた。終わりに、Delattre (1966)のリエゾンコンテキストの分類とDurand & Lyche (2008)がPFCコーパスに基づいて行った新たな分析の結果を比較することで、多くのコンテキストが選択的なものとして分類されるべきということは明白である。例えば、そのような変更点とは以下のようなものである。

(1) 単音節の前置詞や副詞の後で常にリエゾンが実現されるわけではない。

(2) 「前置詞形容詞+名詞」のコンテキストにおいてリエゾンは常に実現されるわけではない。

(3) 「中性代名詞+繫辞 (C'est)」におけるリエゾンは常に実現されるわけではない。

これによって、Delattre の分類における義務的コンテキストの数は 21 世紀のフランス語において減少したといえる。



次章では、リエゾンに関する先行研究にはどのようなタイプのアプローチがあるのか、そしてそれぞれのアプローチにおいてどのようなことが問題になったのか、そしてこれらの研究において明らかになったことを要約する。

### 第三章 20 世紀および 21 世紀初頭におけるリエゾン研究

20 世紀および 21 世紀における、言語学者によるリエゾンを対象とした研究の特徴は大きく 4 つに分類することができる。それらは、規範の記述<sup>22</sup>、コーパスに基づいた研究、社会言語学的研究、理論的研究である。第一に規範の記述については、特にリエゾンの義務的および選択的コンテクストに関する規範が記述された。第二に、コーパスを使用した研究には以下のような特徴がある。規範記述において母語話者の主観的な観察が規範を形成したが、コーパスに基づいた研究というのは実際に話されたフランス語を観察および分析することで、より客観的な分析を可能とするものである。そして、この分析によって、リエゾンの実現に関わる言語内の要因が明らかになったといえる。第三の社会言語学的研究では、リエゾンの実現が言語内の要因だけではなく、発話者の社会的な立場といった言語外的要因も大きく影響するということが着目された。第四に、理論的研究には主に 2 種類のアプローチがある。まず 1 つ目のアプローチは、音韻論および形態論においてリエゾンをモデル化するものである。また、このアプローチにおいてはリエゾン子音は深層構造においてどの位置に属するのかということが中心的な関心であったといえる。2 つ目のアプローチは、統語構造に基づきリエゾンの実現をモデル化するものである。本章では、20 世紀および 21 世紀初頭に行われたこれらのリエゾン研究の要約を試みる。

#### 3.1. 規範の記述

Lodge (1997 : 208) は「規範が与える規則は、上層から強制され、意識的な学習の努力が必要とされる<sup>23</sup>」と述べている。この規範を成立させるには、規則の目録を作成する「規範を成文化すること(codifier)」が必要となる。Lodge (1997 : 208)に従えば、この規則というものには 2 種類ある。

« d'une part les règles descriptives, c'est-à-dire celles qui rendent explicites les structures sous-jacentes, le plus souvent subconscientes, de la langue [...], et d'autre part les règles *prescriptives*, c'est-à-dire celles qui décident laquelle de deux formes linguistiques (ou plus) est à un moment donné considérée par la société comme correcte et acceptable. »

<sup>22</sup> Lodge (1997)は規範について、処方的規則(Règles prescriptives)という用語を用いているが、本研究では単に規範という用語を用いる。

<sup>23</sup> « (...) celles de la *surnorme* résultent le plus souvent d'une codification explicite, sont imposées par le haut et nécessitent un effort d'apprentissage conscient. »

Lodge (1997 : 206-207)

「まず 1 つ目は、記述的な規則である。これは、深層にある構造を明白にする規則であり、言語において、たいていは潜在意識的なものである。もう 1 つは規範的な規則である。これは、2 つの（もしくは複数ある）言語体系のうちのどちらが、社会においてその時、正しく、そして許容できるものかを決定する規則である。」

成文化に必要とされるのは、この後者の「規範的規則(Règles prescriptives)」である(Lodge 1997 : 206-207)。成文化において、最も品位があると考えられる社会階層が参照され、彼らを使用するものが規範的規則として書きだされることから、成文化は社会的な側面を持つものである(Lodge, 1997 : 211)。同様に、Rey (1972 :17) は、規範について以下のように述べている。

« La norme prescriptive étant une construction seconde, obtenue par sélection des types d'usages et de leurs éléments caractéristiques, puis par élimination, aboutit à un pseudo-système, unique comme la structure effective de la langue, plus restrictif, mais aussi beaucoup plus implicite que le modèle fonctionnel des linguistes [...]. »

Rey (1972 : 17)

「副次的な構造である規範は、言語使用のタイプおよびその特徴的な要素から取捨選択されることで得られたものである。この規範は、言語の最も効果的な構造として唯一的な、さらに限定的な、しかし言語学者の機能的モデルよりもさらに暗黙的な擬似的体系へとたどり着く。」

すなわち、規範というのは、言語が持つ複数の使用の中から選ばれた一つの形態に社会的価値が付与されることによって形成されるものである。そして、このような規範は、度々「～ではなく、～と言うべきである(« *Ne dites pas..., mais dites...* »)」というような命令形で示されてきたものである。そして、リエゾンに関する規範というのも、文法書では発音の規範として扱われてきたわけである。

16 世紀以降、文法家によって主観的に選択されて成立した規範というものは 20 世紀においても、発声法の教師や音声学者らによって継承されている (Cf. Mallet 2008 : 27)。それでは、規範を記述する上で、20 世紀にはどのようなフランス語がその記述の対象となったのだろうか。大まかにいえば、パリもしくは北フランスの教養ある話者が話すフランス語のようである。

ここでは、Martinon (1913 :VII) 、Grammont (1914 : 1)、Bruneau (1931 : xx-xxo)、 Fouché (1959)が記述のために選択した話者についての説明を以下に挙げる。

« [...] ce n'est pas en province qu'il faut chercher le modèle de la prononciation française, c'est à Paris. Toutefois, je ferai à ce principe quelques restrictions. La prononciation parisienne est la bonne, mais à condition qu'elle ne soit pas exclusivement parisienne, auquel cas elle devient simplement dialectale. Pour que la prononciation de Paris soit tenue pour bonne, il faut qu'elle soit adoptée au moins par une grande partie de la France du Nord. »

Martinon (1913 : VII)

「フランス語の発音の規範を地方に探し求めてはならない。探すべきはパリである。しかし、基本的にいくつかの制限を与える。パリの発音は良いものである。しかしこれがもっぱら単なる方言としてパリの的ではないという条件においてである。パリの発音は良いものであるが、パリの発音が良きものであるためには、少なくともその発音が北フランスの大部分で受け入れられているべきである。」

« [...] celle de la bonne société parisienne, constituée essentiellement par les représentants des vieilles familles de la bourgeoisie. »

Grammont (1914 : 1)

「主にブルジョワ階級の旧家によって代表されるパリの良き階級の発音」

« Mais il est nécessaire de distinguer : l'ouvrier parisien possède un accent *faubourien* extrêmement désagréable et très peu élégant. On a donc pris comme type le bourgeois parisien, et le bourgeois parisien cultivé. On pourrait dire, plus largement, *Le Français cultivé de toutes les grandes villes du nord de la France*. »

Bruneau (1931 : xix- xx)

「しかし、以下のものを区別することが必要である。パリの労働者は非常に不快かつ全く上品とは言えない場末の訛りを持っている。よって、パリのブルジョワ、そして教養あるパリのブルジョワを選択した。さらに大まかにするならば、北フランスの全ての大都市の教養あるフランス人である。」

« La prononciation soignée qui fera l'objet de cet ouvrage sera celle des Parisiens cultivés nés vers la fin du XIXe siècle ou plus tard ».

Fouché (1959 : III)

「本書の対象となるかしまった発音というのは、19世紀末そしてそれ以降に生まれた教養あるパリの人々のものである。」

上記に挙げたように、Grammont (1914 : 1)<sup>24</sup> はその話者を、基本的に旧家やブルジョワの代表者によって構成されるパリの良き社会層における発音を記述の対象としている。Bruneau<sup>25</sup> (1931 : xx-xxo)や Martinon (1913 : VII) もやはり、パリの教養階級のブルジョワ、さらに範囲を広げると北フランスの全ての大都市の教養あるフランス人、が対象となると述べている。Fouché (1959)もまた、上記に述べた研究者と同様に、19 世紀またはそれ以降に生まれた教養あるパリ人の会話における丁寧な発音を対象として記述を行っている。よって、この規範記述においては、北フランス以外のフランス語話者、方言を話す話者、教養階級に属さない話者がその対象から排除される。

ただし、恣意的に定められた規範も常に変化するものである (Cf. Straka 1981 : 198)。規範はその当時の理想的な話者のフランス語の共時態を記したものであり、通時的に規範を観察した場合に、ある共時態における規範もやはり時代の経過において変化が観察されるものである。この規範の変化は、リエゾンにも見られるようである。例えば、Dauzat (1930 : 143) は以下のように述べている。

« La liaison s'est heurtée à l'hostilité du peuple, qui y répugne, tandis que les grammairiens se sont efforcés d'en étendre l'usage. Dans la bonne société, elle avait perdu du terrain du XVIe au XVIIe siècle pour des raisons phonétiques ; elle en a regagné du XVIIIe au XIXe époque où elle a atteint son maximum. Depuis un demi-siècle, le nombre des liaisons va en diminuant dans ces milieux, fait très frappant lorsqu'on compare le langage d'une même famille à une et surtout à deux générations de distance. »

Dauzat (1930 : 143)

「リエゾンは嫌悪を抱く民衆の敵意にさらされる一方で、文法家はその使用を広げようと努力した。16 世紀から 17 世紀にかけて、リエゾンの存在は薄れた。18 世紀から 19 世紀にかけて、リエゾンはまたその存在を得ることになり、この時代は最もリエゾンがなされた。半世紀前から、リエゾンの数は減少し始めた。家族代々の言語、特に 2 世代を比較すると明らかである。」

以上の引用から、リエゾンに関する規範は常に一定ではなく、少しずつ変化を遂げたことが明らかであろう。

---

<sup>24</sup> Grammont (1914 : 1) は、規範的なフランス語を話す対象を、ブルジョワジーと旧家に代表されるパリの良き階級の発音(« [...] *la prononciation de la bonne société parisienne, constituée essentiellement par les représentants des vieilles familles et de la bourgeoisie* »)と表現している。

<sup>25</sup> Bruneau は、規範話者の対象として教養あるパリのブルジョワを第一に挙げ、さらにその範囲を広げ、北フランスの大都市の教養あるフランス人としている。(« *le bourgeois parisien cultivé [...], et plus largement, le Français cultivé de toutes les grandes villes du nord de la France* »)。

19世紀末から20世紀にかけてリエゾンの規範を記述したのは、ほかでもない音声学者である。Durand & Lyche (2003 : 260)はこの20世紀初頭の音声学者たちについて以下のように指摘する。

« En décrivant la liaison, des phonéticiens dont on admire l’objectivité dans d’autres domaines, sont pris dans la tenaille de la norme et ne peuvent cacher leur mépris ou leur irritation à l’usage de diverses classes sociales. Passy (1913) et Martinon (1913) ne sont ni les premiers ni les derniers [...] »

Durand & Lyche (2003 : 260)

「リエゾンを記述する際に、他の分野では客観性を尊ぶ音声学者たちは規範にとらわれ、様々な社会階層の用法に軽蔑やいらだちを隠せなかった。Passy (1913)やMartinon (1913)はその最初でも最後でもないのである」

上記の引用から、言語学者である音声学者も、リエゾンについては記述的なアプローチではなく規範的なアプローチを取らざるを得なかったことがうかがえる。

このような規範的記述がリエゾンの実現に言及する場合には、リエゾンが実現するコンテキスト、発話スタイルの違いにおける注意点、リエゾン子音から解釈できる形態的特徴について言及されることが多い。

### (1) リエゾンの実現コンテキスト

Grammont (1933 : 417)は、リエゾンがリズムグループの内部で実現されるべきであるとしている。Martinon (1913 : 391)は、リエゾンが実現されるためには、語の間にある関係が十分であるべきであるとしている。上記のような説明は、Ågren (1973)が、リエゾンが実現する要因の一つとして挙げた統語的結束性(Cohésion syntaxique)を想起させるものである。

### (2) 発話スタイルの違いにおける注意点

Fouché (1959)は使用されるスタイルによって、リエゾンの実現が異なると述べている。リエゾンの実現に関する記述は、主に朗読、演説においてなされるべきリエゾンについて詳細に扱われている。それに対して、丁寧な会話、もしくは親しい間の会話でのリエゾンについてはそこまで詳細な説明が与えられるわけではない。このようなスタイルの違いとリエゾンの説明の偏りに関してはMartinon (1913 : 356)は以下のように説明している。

« [...] il est évident qu’on en fait plus en lisant qu’en parlant, parce qu’en lisant on recherche la correction du langage, tandis qu’en parlant on ne cherche qu’à se faire comprendre avec le moins d’effort possible, [...] »

Martinon (1913 : 356)

「会話においてよりも読む際に（リエゾン）より実現するのは明らかである。なぜなら、読む時には、言語の正しさを追求するからである。一方で、話す際には、より少ない努力で理解しあうことしか求められない」

よって、Fouché (1959) と Martinon (1913)に共通する考察として、書き言葉を発音する際のリエゾンの実現がより意識されている。話し言葉のリエゾン、つまり朗読や演説以外の発話、言い換えれば親しい間で交わされる発話におけるリエゾンは記述する必要がないものとして捉えられていた。

### (3) リエゾン子音

Martinon (1913 : 363)は三人称の動詞の語尾が *t* で終わることに注目し、このような場合にはリエゾンはより義務的であるとしている。また、*avoir* や *être* のような動詞の三人称形で使用頻度が高いもの(例 : *est, sont, avait, ont*)はよりリエゾンが必要である、と説明している。特に動詞句におけるリエゾン子音[z]はスタイルの違いによって回避されるもの、もしくは推奨されるものにもなり得る。これについては、Sophie Dupuis (1836)もまた二人称単数形 *tu* は親しい間柄における会話で使用されるものであることから、*tu aimes à rire* において[z]の発音は不要であるとしている。このようにリエゾン子音の種類によって実現されやすいリエゾンと、そうではないものがある、という説明が加えられている。

実際の言語データの観察を行っているわけではないにしろ、以上で言われていることは実際の話し言葉においても観察される傾向である。また、Fouché (1959)が規範として与えたリエゾンの実現コンテキスト（および非実現コンテキスト）の説明および例文は 50 ページ以上にわたる。このような詳細な規範の提示は、その後、理論的アプローチによるリエゾンのモデル化を試みた Schane (1965, 1968)や Selkirk (1972)といったフランス語を母語としなない研究者によって利用されることになる。

### 3.2. コーパスに基づいた記述的研究

1970 年代以降には、リエゾンに関する研究は、理論的研究と並行してコーパスを用いた研究が盛んになった。Crystal (1992 : 85)に従えば、コーパスは以下のように定義される。

«A collection of linguistic data, either compiled as written texts or as a transcription of recorded speech.»

Crystal (1992 : 85)

「コーパスとは、書かれたテキスト、もしくは録音された話し言葉の転写、それぞれが編集された言語学のデータの集合である。」

コーパスに基づいたリエゾンの研究が 1970 年代以降に増加した理由として、情報技術の発展が挙げられる。例えば、Malécot (1975 : 161)はこの情報技術の発展と新しい研究方法について以下のように述べている。

« [...] new research techniques have appeared, principally the computer-assisted analysis of large surreptitiously recorded corpuses of natural speech, and these have revealed a myriad of hitherto unsuspected aspects of French pronunciation. »

Malécot (1975 : 161)

「新しい研究方法が現れた。それは、主に大規模な自然言語の録音コーパスのコンピューター使用に基づく分析である。それらの研究方法は、フランス語の発音におけるこれまで予期されなかった多くの側面を明らかにした。」

リエゾンは音声でのみ観察される現象であるため、実際の音声の観察に基づき、リエゾンの実現および非実現を観察することによって研究が可能である。そのために、コーパスは音声データが基本となる。このコーパスを用いた研究方法は、(1) リエゾンの実現に関する言語内の要因を明らかにする記述的研究と、(2)言語外的要因を明らかにする社会言語学的研究の 2 つに分類することができる。また、これらの研究は同じコーパスを用いて同時に行われることも多い。これは、リエゾンの実現に言語内の要因と言語外的要因が同時に作用することがその理由として挙げられる。ただし、社会言語学的研究については節を改めて扱うこととする。よって、以下ではリエゾン研究に用いられるコーパスの特徴について述べる。そして、記述的研究で明らかになったリエゾンの実現に関わる言語内の要因について整理する。

### 3.2.1. リエゾン研究に用いられるコーパスの特徴

20 世紀初頭の音声学者は、リエゾンに関する規範を与える際に、常に書き言葉的な話し言葉、つまり詩の朗読や演説について説明することが多い。話し言葉は書き言葉とどのように区別されるのだろうか。Blanche-Benveniste (1997 : 5)は、以下のように話し言葉と書き言葉を区別している。



« Opposer la langue parlée à la langue écrite a longtemps été, pour le grand public, une affaire de combat entre le bien et le mal : la langue parlée spontanée, éventuellement pittoresque, mais à coup sûr fautive ; langue écrite policée, témoignant, surtout grâce à l'orthographe, de la vraie grammaire de la langue. La notion même de langue parlée est souvent encore liée aux versants négatifs de la langue fautes, inachèvements, particularités des banlieues délinquantes, etc... »

(Blanche-Benveniste, 1997 : 5)

「話し言葉と書き言葉を対立させることは長い間、多くの人々にとって、善と悪の戦いのようなものであった。つまり、自然な話し言葉は、場合によっては生き生きとしたものであるが、欠陥を持つことが明らかである。書き言葉は、とりわけ綴り字のおかげで、言葉の真なる文法を保証している。話し言葉の概念それ自体は、間違った、不完全な、そして郊外に特徴的な、言葉の消極的な側面に関連付けられることが多い。」

このような自然な話し言葉に対する消極的なイメージは、リエゾンの記述的研究でも共有されるものである。なぜならリエゾン研究の多くが使用するコーパスは、研究上特別な意図がない限り、書き言葉的なフランス語を録音したもの<sup>26</sup>が多いことが挙げられる。

例えば、Encrevé (1988 : 45)の引用はこの理由をわかりやすく説明してくれるだろう。

« Du point de vue de l'approche variationniste, en effet, la liaison est, en quelque sorte, un *phénomène sociolinguistique inversé*. Toutes les données connues et toute observation directe indiquent, en effet, que ce sont les locuteurs du français les plus scolarisés qui présentent le plus large système de variation sur la liaison. La partition traditionnelle entre liaisons obligatoires, facultatives et interdites, reprise à juste titre par tous les phonologues modernes, témoigne bien que, pour la liaison, même les tenants les plus stricts de l'homogénéité du bon usage n'ont pas pu renvoyer la variation à la ténèbre de la performance ou de l'agrammaticalité. »

Encrevé (1988 : 45)

「変異主義の視点からいえば、リエゾンは「社会言語学的な逆現象」である。リエゾンにおいて最も幅広い変異構造を示すのは最も就学期間が長いフランス語話者であることが、あらゆるデータと直接的な観察によって提示されている。現代の音韻論研究者によっても使用される義務的、選択的、禁止的という伝統的な分類は、良き慣用の均質性に最も忠実な話者でさえも言語運用もしくは非文法性の闇の中にその変異を追い払うことができない

---

<sup>26</sup> 政治演説、ラジオ、そして丁寧なスタイルが使用される話し言葉を例として挙げる事ができる。

かったということを、とてもよく証明している。」

また、この使用されるコーパスの特徴について Gadet (1997a : 52-53)は以下のように説明している。

« [...] car ce sont les locuteurs les plus scolarisés qui présentent sur elle le plus large système de variation. Aussi la constitution d'un corpus sur la liaison incite-t-elle à faire appel à des locuteurs favorisés, en situation surveillée, puisque, sur un corpus ordinaire, il n'y aura guère plus à signaler que le respect prévisible des liaisons obligatoires. »

Gadet (1997a : 52-53)

「変種間で最も幅広い違いを見せるのは、より教養のある話者であるからである。また、リエゾンを研究するためのコーパスを構築するにあたって、監視された状況かつ、(社会的に) 優遇された話者を集める必要があるだろう。普通のコーパスでは、義務的リエゾンの予測された遵守を観察することしかできないだろう。」

つまり、リエゾンの実現が多く観察される発話は限定的であるということである。選択的リエゾンの実現および非実現への関心は、記述的研究および社会言語学的研究の両方に共通するものである。また、コーパスを用いた研究は、この両方の研究を同時に扱う傾向にある。以下では、リエゾン研究に用いられたコーパスの傾向を探る。

コーパス	発話状況の特徴	話者の特徴
<b>Ågren (1973)</b>	ラジオ番組内の発話を転写したコーパス:発話のスタイルには「くだけたもの(familier)」と「かしこまったもの(soigné)」がある。	ジャーナリスト、コメディアン
<b>Malécot (1975)</b>	インタビュー	パリの教育を受けた中産階級
<b>Ashby (1981)</b>	インタビュー	社会言語学的調査を目的とした、社会経済的階層、年齢、性別について考慮され

		た話者の集合
<b>Encrevé (1988)</b>	政治演説	政治家
<b>Léon (1992 :152)</b>	政治演説	政治家
<b>Green &amp; Hintz (2001)</b>	インタビュー(職業の話)	大学卒およびパリの 中産階級および上位 中産階級の35歳~40 歳男性

表 3-1 : コーパスの特徴

上記の表から、いくつかのことが読み取れる。まず一つの傾向として、インフォーマントをパリのフランス語話者とするものがある(Malécot, 1975 ; Green & Hintz, 2001)。これは、コーパスにおける話者の選定が、標準的なフランス語話者に限定される強い傾向を示しているとも考えられる。この標準的なフランス語話者には2つの要素があると Morin (1987 : 817) は述べており、そのような話者というのは、第一に教育された話者であり、第二に話者の居住地について「パリ」という限定が与えられている。また、コーパスの内容も、ラジオにおける発話、インタビュー、政治演説のように少なくとも丁寧に話されることが期待されるものであり、普通の日常会話というわけではない。

特にフランスでは、パリ以外の地方のフランス語は標準としてほとんど扱われないという点については、21世紀以降変化がみられる<sup>27</sup>。つまり、21世紀以後は、リエゾン研究の対象となる話者の範囲は拡大し、例えば、最近の傾向として、南仏の話者を対象にコーパスを作成した Ranson (2008)やエクサンプロヴァンスのフランス語について分析を行った近藤 (2010, 2011)が挙げられる。また、1つの地方に限らずフランス全土を対象として大規模コーパスを構築した現代フランス語音韻論プロジェクト PFC (Projet de Phonologie du Français Contemporain)のコーパス<sup>28</sup>は、今まで直感で語られることが多かった地方のフランス語の特徴についての調査を可能にした (Durand & Lyche, 2003 ; Durand *et al*, 2010 ; Mallet, 2008 ; Eychenne, 2011)。

発話者の社会的プロフィールは社会言語学において大変重要視されるが、リエゾン研究においてもそれは同様である。上記の表を見ると、「教育を受けた」もしくは「大学卒」という話者の教育レベル、「中産階級、上位中産階級」といった話者の階級に限定を加えるものがあることに気づくだろう。また、話者の職業も「政治家」や「ジャーナリスト」とい

<sup>27</sup> ただし、20世紀においてフランス以外の地域におけるコーパスを用いたリエゾンの研究としては、カナダのケベック州(特にモントリオール)で話されるフランス語について研究した Ameringen (1977)、Tousignant (1978)および Tousignant & Sankoff (1979)などを挙げることができる。

<sup>28</sup> PFC コーパスは、一定のプロトコルに基づいているため、録音内容(単語読み上げタスク、朗読タスク)に一貫性があるため、フランス語圏各地で録音されたコーパス間の比較が可能である。このコーパスを使用したリエゾン研究には Durand & Lyche (2008), Durand *et al* (2011), Mallet (2008), Eychenne (2011)などが挙げられる。

う公共の場で話すことに長けた話者に対する関心が示されていることも明らかである。

### 3.2.2. 記述的研究

Crystal (1992 : 98)は「記述」および「記述言語学」を以下のように定義している。

« The aim of descriptive linguistics is to account for the facts of linguistic usage as they are, in a particular language, and not as purist critics or prescriptive grammarians imagine they ought to be. »

Crystal (1992 : 98)

「記述言語学の目的とは、純粹主義的な批評家もしくは規範文法の文法家が想像する言語があるべき姿ではなく、特定の言語のあるがままの言語使用の実態を説明することである。」

前節で述べた規範的記述は言語の理想的な形を示した。この理想的な形を描く際には、「正しい、正しくない」という価値判断が下される。反対に、記述的研究が対象および目的とするのは、実際に話された（もしくは、書かれた）言葉を観察し、そこにどのような傾向および特徴があるのかについて、正否を決めるような判断をせずに分析することである。少なくとも録音技術が可能になった時代におけるリエゾンの共時的記述研究に関する限りでは、以下の2つの注意が払われるべきである。第一に、実際に話されたフランス語を対象とするべきであり、第二にリエゾンが実際にどのようなコンテキストで行われているかについての観察およびその分類記述、さらにリエゾンの実現にどのような言語内の要因が作用するのかが分析されるべきである。

リエゾンに関する記述的研究において、初めて体系的な研究が行われたのは Delattre (1966)による研究である。例えば、Delattre (1966)の研究の特性について Ågren (1973 : 14)は以下のように説明している。

« [...] j'ai dû constater que tous les auteurs de manuels de phonétique, Martinon, Grammont, Fouché, Bruneau, Nyrop, Peyrollaz, et j'en passe, se sont occupés de la liaison dans le seul but pratique et normatif. Mais en se limitant à cette seule perspective, ces auteurs ont plus ou moins négligé ou fait passer à l'arrière-plan les facteurs sous-jacents de la liaison et de la non-liaison. [...] C'est Pierre Delattre, qui, dans un article intitulé *Les Facteurs de la liaison facultative en français*, s'efforce de rassembler les informations éparses sur le pourquoi la liaison et de proposer de nouvelles solutions à ce problème. »

Ågren (1973 : 14)

「すべての音声学的教本、つまり Martinon、Grammont、Fouché、Bruneau、

Nyrop、Peyrollaz は実用および規範とという唯一の目的において、リエゾンを取ったといっても過言ではないだろう。この一つの目的にのみ限定したため、彼らはリエゾンの実現、またその非実現の根底にある要因について考慮せず、分析することもなかったのである。『フランス語における選択的リエゾンの要因』と題された論文において、Delattre は離散的に点在していたリエゾンについての情報の統合を試み、この問題に新しい解決法を提示した。」

Delattre (1966)による研究と、それ以前に行われたリエゾンに関する規範的研究との決定的な違いは、リエゾンに関する規範的規則を記すのではなく、リエゾンに関わる言語内の要因および言語外的要因についての彼自身が行った観察について記述している点が挙げられる。Delattre (1966)はリエゾンに関して記述する上で、以下の4点について考慮していることが考えられる (Cf. Mallet, 2008 : 31-32)。

- (a) 発話の状況、レジスターの選択 (スタイル) の影響
- (b) 特に選択的リエゾンにおける、語の結束性を支配する統語的要因の影響
- (c) プロソディー、特に語の長さ、文イントネーション、強調アクセントの影響
- (d) 音声学的要因 (リエゾンのコンテキストにおける子音クラスターの問題)

ただし、Delattre (1966)は規範記述という枠から抜け出せていないともいえる。Delattre (1966)は、その観察の対象として複数のインフォーマントの話し言葉について分析したわけではなく、その記述にも外国人フランス語学習者にリエゾンを教えるという目的が根底に存在する<sup>29</sup>。その分類に対して「義務的、選択的、禁止的という区別は絶対的ではなく、これらはスタイルによって揺れが生じるものである<sup>30</sup>」と注意を喚起し、特に選択的リエゾンについては「話者がその会話に与える文体に応じて、実現されたり、されなかったりするもの<sup>31</sup>」と解釈を与えている。Delattre (1966)の研究は、一般的な傾向を提示することを目指したものであっても、実際には母語話者の直感に従ったという特徴が強いだらう。しかし、直感に頼りながら話し言葉の例を作り出すことは本当の意味で「記述的」ではない。よって、Delattre の研究目的は、規範的研究のそれとは異なるものの、実際の話し言葉を観察したわけではない。そういった理由から、Delattre (1966)の研究は、その後に行われた数多くの記述的研究とは区別されるべきである。ただし、規範となる規則を書き出すことを重視するのではなく、むしろ実際に話されている言葉を記述することを目指すという Delattre (1966)の

<sup>29</sup> 例えば、Delattre (1966 : 39)は語の結束性について、「初心者 of 学習者に教える際に、この一つの基準に基づくことができる。つまり、生徒に結束性を判断することに慣れさせればよいのである。(« Dans l'enseignement des débutants, on peut s'en tenir à ce seul principe. Alors il suffit d'habituer les élèves à juger du degré d'union. »)」と述べている。

<sup>30</sup> Delattre (1966 : 43)を参照。

<sup>31</sup> Delattre (1966 : 49-54)を参照。

姿勢は、記述的研究への第一歩として好意的に評価できるだろう。

実際の話し言葉のコーパスの観察に基づいた初めてのリエゾンの研究として、Ågren (1973)によるラジオ番組内の発話を録音および転写したコーパスに基づく研究が挙げられる。Ågren (1973)は1960年から61年に録音されたラジオをコーパスとして用い、選択的リエゾンのみを分析の対象とし、その実現に影響する要因について詳しく記述している。さらに、Malécot (1975)はコーパスを基にリエゾンの実現コンテキストの分類を初めて行った。Malécot (1975)の分類はDelattre (1966)やFouché (1959)のものに比べると例やコンテキストの種類が少ないといえるが、リエゾンコンテキストを4つに分類していることが特徴的である。これらの4つのリエゾンコンテキストは以下のようなものである。

(a) Universally required	普遍的に要求されるもの
(b) Conversation optional / Elocution required	会話においては選択的であるが、雄弁術では要求されるもの
(c) Conversation rare / Elocution optional	会話では珍しいが、雄弁術では選択的であるもの
(d) Universally forbidden	普遍的に禁止されているもの

表 3-2 : Malécot (1975)による4つのスタイル

上記のような分類において、Delattre (1969)の分類では通常「選択的」という分類がなされる(b)会話においては選択的であるが、雄弁術では要求されるものと(c)会話では珍しいが、雄弁術では選択的であるものがどのように違うのかである。例えば、前置詞を例に挙げると Malécot (1975 :174)はそれぞれの前置詞を3つのカテゴリーに分類している。

(a) Universally required	(b) Conversation optional / Elocution required	(c) Conversation rare / Elocution optional
語末が鼻母音で終わる単音節の前置詞 <i>dans un an</i> <i>en un jour</i> <i>sans un sou</i>	語末が鼻母音ではない単音節の前置詞 <i>dès à présent</i> <i>chez un ami</i> <i>sous un arbre</i>	複数音節の前置詞 <i>depuis un jour</i>

表 3-3 : Malécot (1975 : 174)による前置詞の分類

コーパスに基づき実際の発話を観察・分析することにより主観性が排除され、さらに統計を使用した分析に頼ることで、より客観的な分析を得ることが可能になった。また、記述的な研究は、リエゾン実現に影響する言語内の要因の同定に貢献したといえる。以下では、先行研究で指摘されているいくつかの言語内の要因の特徴について、それぞれ詳しく

説明する。

### 3.2.3. 言語内的要因

記述的研究によって、既に規範的研究において直感的に語られてきたリエゾンの実現に関わる言語内的要因がより客観的かつ詳細に提示された。以下では、言語内的要因として考えられている語の長さ、語の使用頻度、リエゾン子音の種類、リズムグループについてそれぞれ説明する。

#### 3.2.3.1. 語の長さ

語の長さがリエゾンの実現に影響するということには、3つの可能性がある。これらは、MOT1 自体の長さ、MOT1 が含まれる連辞の長さ、MOT2 が含まれる連辞の長さの3つである。

まず、MOT1 自体の長さについては、語が1音節である場合にリエゾンが行われる可能性が高くなる傾向は複数の研究で観察されている(Delattre, 1966 : 43-48 ; Ågren, 1973 : 30 ; Booij & De Jong, 1976 : 1013 ; Encrevé, 1983 : 52 ; Fougeron *et al*, 2001)。

- (a) *en un jour* > *depuis un jour*
- (b) *très utile* > *extrêmement utile*

以上のような例について、Delattre (1966 : 41)は、前置詞句 *en* は *depuis* よりも、また副詞 *très* は2音節の副詞である *extrêmement* よりもリエゾンが実現しやすいと述べている。この傾向を示す例は、実際に複数のコーパスから提示されている。例えば、Encrevé (1983 : 52) は、単音節の語の後ではリエゾンが77%、複数音節の語の後では29,3%実現されたと述べている。また、語の音節数に関して、特に前置詞と副詞では1音節であれば義務的リエゾンに、2音節以上であれば選択的リエゾンに分類される傾向があるのも事実である<sup>32</sup>。

ただし、MOT1 が例え1音節であったとしても、一樣にリエゾンが実現されやすいわけではない。Ågren (1973 : 33) は「*être + un + 名詞*」というコンテキストにおいて、「*est [t] + un + 名詞*」ではほとんど義務的にリエゾンが実現される一方で(98, 8%)<sup>33</sup>、「*suis [z] + un + 名詞*」ではリエゾンは選択的である(53, 8%)という傾向を観察している。Ågren (1973 : 30)はこのような例から、語の長さと言語の使用頻度の関係性がリエゾンの実現に影響を与えると述べて

<sup>32</sup> Delattre (1966 : 43-48), Ågren (1973 : 30), Booij & De Jong (1976 : 1013), Encrevé (1983 : 52) を参照。

<sup>33</sup> Ågren (1973)のコーパスでは、このコンテキストでのリエゾンの実現率は非常に高いといえるが、PFC コーパスに基づいた Mallet (2008 : 283)の研究においては *est* のリエゾン実現率は43,87%、*suis* のリエゾン実現率は13,49%である。これらのリエゾンは義務的とはいえないものの、三人称単数形 *est* は一人称単数形 *suis* よりもリエゾンが実現されやすいという傾向は21世紀以降のフランス語でも同様である。

いる。

次に、MOT1 を含む連辞の長さについては、Delattre (1966 : 59)は、文の構成素の長さはリエゾンの実現に影響すると述べている。つまり、特に主部が長ければ、その主部が後続する動詞とのリエゾンの実現率は低くなる。

(c) *les enfants / attendront.*

(d) *Les plus petits des enfants / attendront.*

上記の2つの例を比較すると、(c)ではリエゾンが実現される可能性が比較的高いと Delattre (1969 : 59)は主張する<sup>34</sup>。ただし、主部と述部のリエゾンは詩の朗読以外の発話では、日常的に実現されるわけではない<sup>35</sup>。

MOT2 を含む連辞の長さについても同様である。例えば、述部となる動詞句に含まれる音節数が少ない場合には、リエゾンが起こりやすいと言われている。

(e) *les enfants / attendront.*

(f) *Les enfants / attendront longtemps leurs parents.*

Delattre (1966)に従えば、例(e)は例(f)よりもリエゾンが実現する可能性は高くなる<sup>36</sup>。これについては、Morin & Kaye (1982 : 296)も同様の意見を示している。つまり、より短い連辞において、補語のリエゾンが実現されるという仮説を立てている。Fougeron *et al* (2001)は、リエゾンコンテキストの音節数と実現頻度の関連を観察している。

音節数	1 音節	2 音節	3 音節	4 音節	5 音節	6 音節	7 音節
実現頻度	-	62%	35%	45%	33%	15%	9%

表 3-4 : 音節数と実現頻度の関連<sup>37</sup>

以上の表からは、MOT1 と MOT2 の音節数の合計が 2 音節の場合には 62%の確率でリエゾンが実現されたことがわかる。また、6 音節以上の場合にはリエゾンの実現頻度が格段に低下することが明らかである。リズムグループに含まれる音節数は最高で 8 音節が限界であり<sup>38</sup>、4~5 音節が平均的<sup>39</sup>であると言われている。音節数の増加を回避するためにリズムグ

<sup>34</sup> Delattre (1966 : 59)を参照。

<sup>35</sup> Durand & Lyche (2008 : 46)は、PFC コーパスに基づいた分析においても、主部と述部におけるリエゾンは観察されなかったと述べている。

<sup>36</sup> このような例も、リエゾンのコンテキストが主部と述部にまたがる例である。Durand & Lyche (2008 : 46)は、PFC コーパスに基づいた分析においても、主部と述部におけるリエゾンは観察されなかったと述べているように、このリエゾンコンテキストは今日では大変稀だと言えるだろう。

<sup>37</sup> Fougeron *et al* (2001)を参照。

<sup>38</sup> Ågren (1973 : 12)を参照。

<sup>39</sup> Léon (1992 : 111)を参照。



ループを短くすることによってリエゾンが実現されないならば、音節数が少ないコンテキストで最もリエゾンが実現する可能性は高いといえる。

### 3.2.3.2. 語の使用頻度

Ågren (1973 : 28) は使用頻度が低い語と比較すると、使用頻度が高い語はリエゾンが実現されやすいと主張している。その理由として、リエゾンが昔の発音の名残であるように、使用頻度が高い連辞が最も容易にリエゾンを保持しやすいことを挙げている。確かに、以下の表をみると、最も使用頻度が高い être 動詞の三人称単数形の *est* は Ågren のコーパスにおいてリエゾンの実現頻度が 97% であるが、使用頻度が低い *était* や *êtes* もそれぞれ 75% と 71% の実現頻度を示している。

	リエゾンあり	リエゾンなし	合計	リエゾンの実現率
<i>est</i>	2591	77	2668	97%
<i>sont</i>	242	38	280	86%
<i>étant</i>	22	7	29	76%
<i>était</i>	272	95	367	75%
<i>êtes</i>	24	10	34	71%
<i>étaient</i>	36	21	57	63%
<i>sommes</i>	43	31	74	58%
<i>suis</i>	65	74	139	47%
<i>serait</i>	17	24	41	41, 4%
<i>soit</i>	22	32	54	40, 7%
<i>j'étais</i>	6	23	29	21%

表 3-5 : être 動詞のリエゾン実現頻度 (Ågren, 1973 : 33)

Ågren は、以上のような傾向から、語の使用頻度だけがリエゾンの実現の要因ではなく、他の要因の影響も考慮にいれるべきであることも示唆している。加えて、リエゾンコンテキストにある 2 つの語の共起頻度がリエゾン実現頻度に影響することが、既にいくつかの研究で指摘されている(Bybee, 2001, 2005 ; Fougeron *et al*, 2001)。特に、Fougeron *et al* (2001) はリエゾンの実現頻度と 2 つの語の共起頻度には相関関係があるとしているが、それだけではなく実現頻度は語の長さにも依存するとしている。単音節語は複数音節語よりも使用頻度が高いために、リエゾンの実現頻度も高くなる。その一方、3 音節または 4 音節の語で使用頻度が低い場合にはリエゾンの実現頻度は低くなるようである。

### 3.2.3.3. リエゾン子音の種類

Mallet (2008 : 204)は、リエゾン子音の性質とその出現頻度に関して以下のように要約している。

- (i) リエゾン子音 /p, k, r/はリエゾンのコンテキストにおいてほとんど出現がなく、後続する語に結びつかない。
- (ii) 反対に、リエゾン子音/n, t, z/は高頻度で出現があり、後続する語へ結びつきが強い。
- (iii) 先行研究によってその子音の出現頻度が異なる（以下の表を参照）。

順位① [z] > [n] > [t]	順位② [z] > [t] ≥ [n]	順位③ [n] > [z] > [t]
Green & Hintze (2001 : 34)	Léon (1992 : 152)	Malécot (1975 : 164)
Pagliano & Laks (2005 : 5)		
Durand & Lyche (2008 : 58)		

表 3-6 : リエゾン子音の実現頻度の違い (Mallet 2008 : 205)

Mallet (2008 : 211)による PFC コーパスを用いた研究では、[n], [t], [z]はリエゾンコンテキストにおいて最も高頻度で現れたリエゾン子音であり、[n], [t], [z]の実現率は、46,4%、38,7%、14,8%である。一方で、[r], [p], [g], [k]は全体で0,2%の実現頻度である<sup>40</sup>。Malécot (1975 : 168)、Ashby (1981 : 50)、Encrevé (1988 : 68)、Booij & De Jong (1987 : 1013)、Durand & Lyche (2008 : 58-59)らが得たリエゾン子音の順位について、リエゾン子音の出現頻度と統語構造には相関関係があると Ranson (2008 : 1675)が主張している。その理由として以上に述べた結果の違いというのは、リエゾン子音[n]および[z]を持つ限定詞と後続語においてはリエゾンが義務的に実現する一方で、リエゾン子音[t]を持つ語とそれに後続する語はリエゾンの実現が選択的であることが多いということである。確かに、リエゾンコンテキストによって、特定のリエゾン子音の実現頻度が高くなることは大いにありえる。例えば、Delattre (1966)によって義務的リエゾンに分類されたコンテキストにおける語の大部分がリエゾン子音[n]および[z]を含む。以下の表は Delattre (1966)の義務的リエゾンコンテキストにおける MOT 1 である。

<sup>40</sup> Encrevé (1983)は選択的リエゾンに限定し、リエゾン子音の出現頻度を観察したが、リエゾンの頻度は/t/、/z/、/r/ がそれぞれ、72%、39,8%、11%であると述べており、リエゾン子音 /r/が含まれる。このリエゾン子音 /r/の実現頻度の要因は、Encrevé (1983)の使用したコーパスが政治演説であることがその理由として考えられる。

	[n]	[z]	[t]
冠詞	<i>un</i>	<i>des, les</i>	
指示形容詞			<i>cet</i>
所有形容詞	<i>mon, ton, son</i>	<i>mes, tes, ses, nos, vos, leurs</i>	
数詞	<i>un</i>	<i>deux, trois, six, dix</i>	<i>sept, huit</i>
疑問形容詞		<i>quels, quelles</i>	
不定形容詞		<i>plusieurs, quelques</i>	
人称代名詞		<i>vous, nous, ils, elles</i>	
前置詞 (1音節)	<i>en</i>	<i>dans, chez, sous</i>	
副詞 (1音節)		<i>très, pas, plus</i>	

表 3-7 : Delattre (1966)の義務的リエゾンコンテキストにおける MOT 1

以上の表において、リエゾン子音[z]を含む語が最も多く、リエゾン子音[n]はそれに続く。反対にリエゾン子音[t]を含む語は以上の表で最も少ないといえる。

さらに、動詞の活用形においても、あるリエゾン子音が他のリエゾン子音よりも実現される傾向にあるといえる。例えば、以下の表は Ågren (1973 : 33)の *être* 動詞のリエゾン実現頻度についてリエゾン子音[t]を含む活用形と、[z]を含む活用形とに分けたものである。リエゾン子音[t]を含む活用形はリエゾン実現頻度が高いものが複数ある。

	リエゾンあり	リエゾンなし	合計	リエゾンの実現率
<i>est</i>	2591	77	2668	97%
<i>sont</i>	242	38	280	86%
<i>étant</i>	22	7	29	76%
<i>était</i>	272	95	367	75%
<i>étaient</i>	36	21	57	63%
<i>soit</i>	22	32	54	40, 7%
<i>serait</i>	17	24	41	41, 4%
合計	3202	314	3516	91, 07%

表 3-8 : リエゾン子音[t]を持つ *être* 動詞活用形のリエゾン実現頻度<sup>41</sup>

その一方、リエゾン子音[z]を含む 2 人称複数形の *êtes* は 71%の実現頻度を示していること

<sup>41</sup> この表は Ågren (1973 : 33)が *être* 動詞のリエゾン実現頻度を示したものから、リエゾン子音/n/を持つ動詞だけを抜き出して表を作成したものである。

を除くと、その他の活用はそれほど実現頻度が高いとはいえない。

	リエゾンあり	リエゾンなし	合計	リエゾンの実現率
<i>êtes</i>	24	10	34	71%
<i>sommes</i>	43	31	74	58%
<i>suis</i>	65	74	139	47%
<i>j'étais</i>	6	23	29	21%
合計	138	138	276	50%

表 3-9 :リエゾン子音[z]を持つ être 動詞活用形のリエゾン実現頻度<sup>42</sup>

また、リエゾン子音[t]を含む活用形を合計したリエゾン実現頻度は 91,07% (=3202/3516)であり、リエゾン子音[z]を含むものは 50% (138/276)である。リエゾン子音[t]を含む活用形のリエゾン実現率が非常に高いのは、*est* の例数が突出して多い (2668 例) ことも考慮に入れるべきであるが、この実現頻度の高さによってリエゾン子音[t]が三人称マーカーとして捉えられる 1 つの可能性である。

### 3.2.3.4. リズムグループ

リエゾンは 2 つのリズムグループの間では起こりにくいことが Ågren (1973 : 9-11)および Grammont (1914 : 129)によって指摘されている。フランス語におけるリズムグループとは複数の語を含む韻律単位のことである。フランス語では、ある 1 つの語が単独で発音される場合には語末音節に常にアクセントが置かれる一方、複数の語がリズムグループを形成している場合には、このリズムグループの末尾の音節にアクセントが置かれる。

2 つのリズムグループの間ではリエゾンが実現されない傾向があることは、話者がこのグループを意図的に作り出すことによって、リエゾンを回避することも可能であることを暗示するだろう。そのような例は Green & Hintze (1990 : 64-65)によって提示されている。

(a) | La France\_était | un des rares pays au monde | à euh| oser |

[ la frã se te | œ de vaʁ pei\_ o mɔ̃d | ?a | ?ø | o ze ]

(Green & Hintze, 1990 : 65)

以上の例では、「*était*」と「*un*」の間にリズムグループが挿入されたために、リエゾンが実現されない。「*un*」に後続する「*des rares pays au monde*」という連辞の音節数が複数であるため、「*un*」の前の「*La France était*」で第一のリズムグループが形成されたことが、リエゾンが実現されない理由として考えることができる。一方、発話内でリズムグループが形成

<sup>42</sup> この表は Ågren (1973 : 33)が être 動詞のリエゾン実現頻度を示したものから、リエゾン子音/z/を持つ動詞だけを抜き出して表を作成したものである。

された場合でも、そのリズムグループ境界を越えてリエゾンを実現させる場合もある。

(b) | bon | il\_y a | **des** | **lexamens** obligatoires

[bõ | i li\_a² | de | zɛg za mɛ\_ɔ bli ga twaɾ ]

(Green & Hintze, 1990 : 65)

上記の例では、「*des*」と「*examens*」の間にリズムグループの境界がある一方で、リエゾンの実現([dezɛg za mɛ]が観察される例である。このリエゾンのコンテキストは「冠詞+名詞」というリエゾンの実現が絶対的に要求される。よって、リズムグループの介入はリエゾンの実現を妨げることもあるが、リエゾンが義務的な場合にはリズムグループはリエゾンを妨げる効力を持たないと解釈できる。

Green & Hintze (1990)は、2つのリズムグループの境界に声門閉鎖が含まれた場合において、頻度が高くはないがリエゾン子音の発音が可能であることを観察している。ただし、声門閉鎖があった場合においては、リエゾン子音の位置に2つの可能性があるようだ。第一の可能性は、リエゾン子音が先行語の語末(MOT1のコーダ)で発音され、その後に声門閉鎖が起こるものである。つまり、これはアンシェヌマンのないリエゾンと呼ばれるものである。

(c) | C'est une juridiction qui **est** \_ | **intermittente**

[ se tyn zy ʁi dik sjõ ki\_et | ʔɛ tɛɾ mi tãt ]

(Green & Hintze, 1990 : 65)

上記の例では、「*est*」と「*intermittente*」の間にリズムグループの境界置かれ、「*est*」の語末でリエゾン子音[t]が発音され、後続するリズムグループの頭で声門閉鎖が発音され、「*intermittente*」が続き、[ɛtʔɛ tɛɾ mi tãt]のように発音されている。

第二の可能性は、声門閉鎖が先行語の語末で挿入され、リエゾン子音は後続語の語頭(MOT2のオンセット)で発音されるものである。

(d) | qui sont | **les** | **infractions** | punies | (.)

[ki sõ² | le² | zɛ fɾak sjõ | pyni]

(Green and Hintze, 1990 : 65)

上記の例では、「*les*」と「*infractions*」の間にリズムグループの境界が置かれ、「*les*」の語末で声門閉鎖が挿入され、リズムグループの境界を越えてリエゾン子音が後続語の「*infractions*」の語頭で発音され、[le² zɛ fɾak sjõ]というように発音される。

上記に挙げたリズムグループの境界においてリエゾンの実現および非実現に干渉するも

のについて、Ågren (1973 : 24-25)は「躊躇のポーズ (pause d'hésitation)」を挙げている。Ågren (1973 : 24-25)に従えば、躊躇のポーズは、「ごく稀にリズムグループの後に干渉するポーズが全てのリエゾンの実現を妨げる」。確かに、実際の発話において、何を話すか決まっていなない場合には躊躇することがあるのは当然だろう。話者はリズムグループ内でリエゾンコンテキストとなる語と語の間で躊躇することや、発話を停止することもある。さらには、語を選ぶため、もしくは発話の構造を再編成するため、または発話の新しい方向性を探すために、ポーズを置くことができると Ågren (1973 : 24-25)は述べている。この躊躇のポーズは、音節を伸長させる、もしくはイントネーションの停止、声帯振動の停止などを伴う(Ågren, 1973 : 24-25)。この躊躇のポーズが、リエゾンが実現可能なコンテキストにおける語と語の間におかれた場合に、リエゾンの実現には揺れがあるという。このような場合に、先ほど説明した声門閉鎖がリズムグループの境界に位置するのと同様のことが起こるようである。つまり、アンシェヌマンのないリエゾンが実現されるか、もしくは躊躇のポーズの後にリエゾン子音が後続語の語頭で発音される。ただし、Ågren (1973 : 26)によれば、リエゾンコンテキストに躊躇のポーズが挿入された場合に、95%の確率でリエゾンが実現しないようである。リエゾンが実現される場合には、義務的リエゾンのコンテキストに限定される傾向にある。

#### 3.2.4. まとめ

以上では、記述的研究で明らかになったリエゾンの実現に影響する言語内の要因をそれぞれをみてきた。それらの要因は、語の長さ、語の使用頻度、リエゾン子音の種類、リズムグループである。ただし、これらの要因のうち一つだけがリエゾンの実現頻度を決定するわけではなく、常に相互作用があることが明らかである。

### 3.3. 社会言語学的研究

17世紀以降の文法書や規範的研究において、リエゾンの実現に関する説明において、「詩の朗読、演説ではより多くのリエゾンをする一方、親しい会話においては最低限のリエゾンを実現することだけが望まれる」というようなものが多い。つまり、リエゾンの実現には、言語内の要因だけでなく、発話者の社会的な立場といった言語外的要因も大きく影響する。リエゾンに関して行われた社会言語学的研究は、1人の発話者が使い分けるスタイル、そして発話者の間に存在する社会的特性の違いについて注目した。派生規則を与えることでリエゾンを理論的に捉えようとした生成音韻論的アプローチにおいてさえも、少なくとも発話に使用される「スタイル」については考慮されるものであった (Cf. Encrevé, 1988)。

本節では、まず社会言語学における言語変種の分類について触れ、リエゾンに影響する社会言語学的要因について要約する。

### 3.3.1. 変種

社会言語学的な変異にはどのようなものがあるのだろうか。ここでは、Gadet (2003b : 15) が Coseriu に基づいて提示した分類<sup>43</sup>を用いて変種の定義を行う。

発話者間変種 (話し手による変種)	時間	変化	<i>Diachronie</i>
	空間	地理的、地域的、空間的	<i>Diatopie</i>
	社会、共同体	社会的	<i>Diastratie</i>
発話者内変種 (言語使用における変種)	スタイル、レベル、レジスター	状況的、スタイル、機能的	<i>Diaphasie</i>
	伝達手段	書き言葉/話し言葉	<i>Diamésie</i>

表 3-10 : 変種の分類 (Gadet, 2003b : 15)

Gadet (2003b : 7) は、「時間、空間、発話者の社会的属性、発話者の行動によって話し方は異なるものである<sup>44</sup>」、と述べている。これらの変種は、発話者間変種（話し手による変種）と発話者内変種（言語使用における変種）の大きく 2 つに分類され、それぞれに下位分類がある。

発話者間変種は、社会における発話者の特徴が反映されるものである。それらは、通時的、空間的、社会的の 3 種類である。

1. 通時的：時間的変移が言語にもたらす影響のことを指す。時代によって言語の規範が変化するのは、この通時的変化のためである。
2. 空間的：地域や地方によって言語に違いが見られる。
3. 社会的：時代、地域が同じであっても、発話者はその社会的立場によって異なる話し方をする。

発話者内変種は言語使用において発話者自身が持つレパートリーから生じる。この変種

<sup>43</sup> Gadet (2003a : 18)はフランスにおける社会言語学の受容の特徴について以下のように説明している。「フランスにおけるアメリカの理論の優勢は明白である。なぜなら、フランスでは「地域的」、「社会的」そして「スタイル」という変種のラベルが使用されていたが、他のヨーロッパの国々のほとんど、もしくは少なくともロマンス語学においては、1952年に Flydal が作成し、Coseriu が発展させた‘diatopic’, ‘diastratic’, ‘diaphasic’ variation と呼ばれている。」

Völker (2009 : 33)は、アメリカで発展した社会言語学とは異なる変異主義がヨーロッパにあるとしている。また、社会言語学が社会的コンテキストとコミュニケーションの目的との繋がりを分析すること目標としている。変異主義言語学(Linguistique variationnelle)は、変異が言語体系の一部を成すと解釈し、そして、この変異の規則性を同定するという目的に基づいて分析を行うとしている。つまり、変異主義言語学は、構造主義言語学に従って言語変異それ自体の構造を抽出することを目指しているといえる。

<sup>44</sup> Gadet (2003b : 7) を参照。 « Les façons de parler se diversifient selon le temps, l’espace, les caractéristiques sociales des locuteurs, et les activités qu’ils pratiquent. »

には2種類ある。

4. 発話状況とスタイル：発話者はその発話状況によって話し方を変える。会議や面接のような形式的な状況では、規範的な形が理想的である一方で、友人との会話のような私的な発話では、規範に従う必要があるとは限らない。
5. 伝達手段による変種（書き言葉/話し言葉）：書き言葉と話し言葉には違いが見られる。

通時的変化については、本章では特に扱わないこととするが、本研究が特に17世紀末および18世紀初頭の資料を用いることから、この時代を中心として現代までにどのような変化があったのかということ进行分析以降の章で扱う。

書き言葉および話し言葉という伝達手段の違いについては、リエゾンは音声においてのみ観察されるため、単純な二項対立を当てはめるのは難しいだろう。リエゾンの実現に影響する伝達手段の違いというのは、書き言葉的な話し言葉、つまり韻文や演説の朗読と、自然な話し言葉の違いであるといえる。ただし、この違いはむしろスタイルに還元されるものであるとも考えられる。

よって、本節ではリエゾンの実現に影響すると考えられている以下の言語外的要因の要約を行う。まず、発話者間変種を作り出す要因である、(1)社会階層、学歴、(2)性別、(3)年齢、(4)地域的な違いについて扱う。加えて、発話者内変種を作り出す要因である発話状況とスタイルについて扱う。

### 3.3.2. 発話者間要因

発話者間変種を作り出す要因とは、発話者自身の社会的属性の違いから生じる。規範記述における理想の話者として選ばれる人々の共通点を思い浮かべてほしい。すなわち、選択的リエゾンの実現が教養のある話者を特徴づけるものであることは、Fouché (1959)やDelattre (1969)が理想的な話者として「教養階級に属するパリの人々」を挙げたことから明らかである。話者の社会的な属性というのは、リエゾンの実現に大いに影響すると考えられてきた。以下では、発話者間要因として、社会階層、性別、年齢、地域的な違いを挙げることにする。

#### 3.3.2.1. 社会階層、学歴

Booij & De Jong (1987 : 1016)とAshby (1981 : 53)は、高い社会階層に属する話者は、低い社会階層の話者に比べてリエゾンをより多く実現すると主張している。また、1975年にLaks (1980)がパリ郊外の工業地域において若者を対象に行った調査から、その地域の若者が義務的リエゾンを実現する一方で、選択的リエゾンは実現しないという傾向があることが明らかになった。Encrevé (1988 : 257)は、Laksの調査地域出身の共産党書記長G. Marchaisが選択的リエゾンを最も実現しない理由として、この政治家が労働者階級出身者であり、小学校



が最終学歴であることを喚起している。それに対して、フランスの高等教育機関出身の政治家においては、他の政治家に比べて選択的リエゾンの実現率が高い。ただし、Encrevé (1988 : 257)は、労働階級出身の共産党員の一人が、フランス国立政治学院出身の政治家と比較して、選択的リエゾンをより高い確率で実現している事例から、出自や職業を選択的リエゾンの実現率へ単純に関連付けることはできないとも述べている。さらに、Mallet (2008 : 192)は、PFC コーパスの分析結果から、学歴とリエゾンの実現に相関関係がなく、学歴よりもむしろ朗読と会話の発話状況の違いの方がリエゾンの実現率に影響を与えると考察している。Mallet (2008)の考察に私自身の解釈を加えるならば、選択的リエゾンを実現できる能力は、むしろ話者の綴り字の知識もしくは教育レベルに左右されるという考え方もできる。そして、それを身につけさえすれば、選択的リエゾンの実現能力を職業的技術として利用することもできる。よって、発話者が属する社会的階層や学歴とリエゾンの実現の相関関係を安易に期待するべきではない。

### 3.3.2.2. 性別

多くの社会言語学的研究で、性別要因は社会言語学的変数の一つとされているが、リエゾンの実現に関しても性別を変異の要因として考察した研究がいくつかある。例えば、Malécot (1975 : 169)は、女性は男性よりも選択的リエゾンを実現する傾向 (67% vs 62%) を観察している。加えて、Booij & De Jong (1987 : 1017)もまた短文リストの読み上げ実験において同様の傾向を観察している。反対に、Ashby(1981 : 52-53)はコーパスを用いて、男性が女性よりリエゾンを多く実現するという結果を得ている(36% vs 32%)。ただし、21世紀以降のRanson (2008 : 1678)による南仏話し言葉コーパスを用いた研究では、男性に対して女性の話者が幾分か高い実現率を示しているが、義務的リエゾンを除いた場合には、男女間に有意差は観察されていない。それぞれのコーパスから得られた結果において偏りがみられることから、リエゾンの実現が「女性らしさ」や「男性らしさ」の特徴となりえる、ということとは断定できない。

### 3.3.2.3. 年齢

リエゾン実現に関する年齢の影響として、年齢が高い層は低い層と比較すると、リエゾンの実現頻度が高いと主張されることが多い。Nyrop (1935 :136)<sup>45</sup>は年齢について興味深い例をErnest Legouvéの『L'art de la lecture』から引用している。

« Un jour, dans une pièce de Mme de Girardin, *La Joie fait peur*, la jeune actrice chargée du rôle de l'ingénue dit, en parlant de fleurs qu'elle avait plantées avec son frère : *nous les avons plantées zensemble*, en faisant sentir l's. Mme de Girardin

---

<sup>45</sup>この例はDelattre (1966 : 57)も引用している。

bondit sur sa chaise : Pas d's! Pas d's! s'écria-t-elle. *Planté ensemble*. Vous n'avez pas droit de faire pareilles liaisons à votre âge! Je me moque de la grammaire ! Il n'y a qu'une règle pour les ingénues, c'est d'être ingénues! Cet affreux s vous vieillirait de dix ans! »<sup>46</sup>

Legouvé (1877 : 176)

「ある日、作家ジラルダン夫人の作品『*La joie fait peur*』において、うぶな女性役を与えられた若い女優が、弟と植えた花について話しながら、sの綴り字を発音して「*nous les avions plantées zensemble* (一緒に花を植えた)」という台詞を言う。ジラルダン夫人は椅子に飛び乗って、「sはいらない！」と叫ぶ。さらに、「*Planté ensemble* で十分。あなたの年齢で、そのようなリエゾンをする権利はありません。文法家なんて気にしてはいけません。無邪気な人間にとっては一つしか規則がない、それは無邪気であることです。その恐ろしいsはあなたを10歳も老けさせるのですから。」

選択的リエゾンにおいても実現頻度が低い種類のものを実現することが、いかにも年よりくさいというイメージが既に19世紀にも存在したという興味深い例である。そして、年齢がリエゾンの実現に影響する要因であることは、複数の研究結果から断定できることである。Booij & De Jong (1987 : 1016-1017)のコーパスでは、最も年齢が高い層が、最も高いリエゾン実現率を示すことから、年を取るにつれリエゾンを実現するようになるという解釈がある。最近の研究である Ranson (2008 : 1678)の南仏コーパスの分析、さらに大規模コーパスを用いた Mallet (2008 : 194)の研究においても、年齢が高い話者は低い話者よりもリエゾンの実現率が高いことが明らかにされている。さらに、近藤 (2011 : 64-65)のエクサンプロヴァンスで録音されたコーパスを用いた分析においても、20~40代の話者と比較して、60~70代の話者が選択的リエゾンをより実現する傾向が確認されている。一方 Malécot (1975 : 169)は、若い年齢層のリエゾンの実現率が幾分か高くなると述べている。この理由として、発話の受け手が発話者よりも年上であり、丁寧さが求められると判断した場合には、意図的にリエゾンの実現を増加させるということも考えられる。ただし、発話者同士の間年齢差がある場合に、相手より若い話者が丁寧に話したいと願い、リエゾンの実現率を挙げるといような傾向があるかどうかについては、過去の先行研究で論じられたことはない。

#### 3.3.2.4. 地域的な違い

地域的な違い(diatopie)は、地域もしくは地方のような距離的な空間において、言語に違いが見られるということ意味する。地域によるリエゾンの実現の違いについては諸説ある。例えば、規範の対象として選択されたのはパリの教養階級のフランス語であり、パリ以外

---

<sup>46</sup> Legouvé, E. (1877 : 176). *L'art de la lecture*. 31<sup>ème</sup> édition, Paris : Bibliothèque d'éducation et de récréation.

の地方のフランス語は規範の記述の対象として敬遠されるものであった。確かに、Brun (1931 : 45)は、マルセイユで話されるフランス語について以下に引用するように、大変辛辣な指摘を与えている。

« Les liaisons sont donc beaucoup moins fréquentes qu'en français commun. Cette négligence, ainsi que la paresse à articuler les groupes de consonnes donne au parler du provençal ce caractère de vulgarité qui choque le nouveau-venu. »

Brun (1931 : 45)

「(マルセイユのフランス語において) リエゾン、共通フランス語と比較するとかなり頻度が低い。この怠慢、そして子音の束を発音することへの怠惰は、新参者を驚かせるような下品さをプロヴァンス地方の話し方に与えている。」

一方で、Séguy (1978 : 38)はフランスの南西に位置するトゥールーズで話されるフランス語について、リエゾンはパリよりも高い頻度で実現されると述べている。このような地方的差異に関する記述は、直観に基づくものである。

そして、「標準フランス語」の記述の対象がパリ以外である場合には、フランス北部に限定される。例えば、パリ周辺一帯を表すイル・ド・フランス(Malécot, 1975)、トゥール(Ashby, 1981 ; Booij & De Jong, 1987)を研究対象としていることから明らかである。パリで話されるフランス語を規範として扱う必要があるのならば、以下のような理由も考えられる。一つは、歴史的にパリは宮廷が置かれた場所で、17世紀以降フランス語の規範が確立された場所であることから、パリのフランス語が標準フランス語となるという考え方である。もう一つは、パリという場所を「元来のパリの住人の発音と地方の様々な発音が混ざり合う、つぼ」として捉えた Walter (1976 : 14)の考え方だろう。つまり、パリでは人の流れが流動的であり、地方からそれぞれ異なるフランス語を話す人々が集まり、コミュニケーションが発生する場所と定義をすれば、パリを平均的なフランス語が形成される場所として捉えることもできる。後者の意味では、規範というよりは、平均化されたフランス語という意味合いが強いただろう。ただし、社会言語学を目的とした上記に挙げた北フランスを対象とする先行研究では、話者の選択について特に明白に説明されているわけではなく、方言の研究が目的でない限りには北フランス（特にパリ）の話者を選択する傾向がみられる。

ただし、21世紀には、フランス語が話される地域全体を対象として大規模話し言葉コーパスを構築した PFC プロジェクト、さらにタイトルに南仏のフランス語と明記されている Ranson (2008)の研究のように、「パリ＝規範」という考え方に基づく研究以外のものも増加している。また、Durand & Lyche (2008)は、フランス南部とフランス北部と比較することで、フランス南部の話者がリエゾンの実現に関してより保守的であるという事実を示している。

*c'est, c'était, avait, nord vs sud*

	Nord		Sud	
	liaison	pas de liaison	liaison	pas de liaison
(C')est	155 33,91%	302	146 42,69%	196
(C')était	10 5,34%	177	26 15,75%	139
avait	0 0%	126	11 11,34%	86

表 3-11 : 北部と南部での変種の違い (Durand & Lyche, 2008)

上記の表からわかることは、動詞« (C')est », « (C')était », « avait »とその後続語のリエゾンが南部では、リエゾンの実現頻度がより高いということである。ただし、この結果は PFC プロジェクトの録音ポイントのうち、それぞれ Brécey (北部、バス＝ノルマンディー地方マンシュ県) および Douzens (南部、ラングドック＝ルシヨン地方オード県) で録音されたコーパスから得られたもので、全てのコーパスに基づいて比較された結果ではない。よって、この結果を北フランスと南フランスでのリエゾンの違いとして一般化することはできない。

### 3.3.3. 発話者内要因

発話者内要因とは、発話者がどのような発話状況に置かれるか、加えてそのような状況でどのような発話スタイルを選択するかを指す。Gadet (1997a : 5)はこれについて以下のように述べている。

« La variation stylistique ou situationnelle ne clive pas la société, mais le locuteur : il n'y a pas de locuteur à style unique. Contrairement à l'idée reçue selon laquelle seules les couches cultivées seraient capables de managements variés modulés selon les situations, tous les locuteurs disposent de plusieurs styles en liaison avec la situation dans laquelle ils se trouvent, l'interlocuteur auquel ils s'adressent, le sujet dont ils parlent, les enjeux sociaux qu'ils mettent dans l'échange... »

Gadet (1997a : 5)

「発話状況やスタイルという変異は、社会を分けるのではなく、話し手を分ける。一つのスタイルしか持たない話者は存在しない。教養のある階層のみが状況に合わせて異なる話し方をすることができるという考え方がある。発話者が置かれた状況、話し相手となる共発話者、話す内容、そしてやり取りにおいて発話者が設ける社会的争点に合わせて、全ての話者が複数のスタイルを使い分ける。」

### 3.3.3.1. 発話状況とスタイル

Delattre (1966 : 40)は、リエゾンの実現はスタイルの選択に依存するとし、以下の4つの発話スタイルにおけるリエゾンの実現コンテキストを提示している。

- ① 親しい間柄での会話では、選択的リエゾンほとんど、または全く実現されない。

例 : Des [z] hommes/ illustres/ ont/ attendu.

- ② 丁寧な会話では、リエゾンの頻度は日常会話に比較して増える。

例 : Des [z] hommes/ illustres/ ont [t] attendu.

- ③ 会議での会話では、リエゾンは頻繁に実現される。

例 : Des [z] hommes [z] illustres/ ont [t] attendu.

- ④ 詩の朗読では、全ての、またはほとんどのリエゾンが実現される。

例 : Des [z] hommes [z] illustres<sup>47</sup> [z] ont [t] attendu.

Delattre が挙げた例では、①親しい間柄の会話では、限定詞と名詞の間における義務的リエゾンのみが発現されている一方で、④詩の朗読のような書き言葉に重点が置かれるような状況では、全てのリエゾンコンテキストにおいてリエゾンが発現される。Booij & De Jong (1987)も Delattre (1966)と同様に、丁寧な発話スタイルが用いられる場合には、リエゾンが発現する確率が増加すると述べている。

スタイルの選択は、発話を取り巻く状況によって決定される。つまり、発話者がどのような状況で話すのか、もしくは発話をする相手（発話の受信者）が誰であるかが考慮される。このような傾向が反映されているのは次に挙げるような例である。Léon (1971)はド・ゴール大統領の10回の演説を資料体として分析した結果から、その演説環境によって選択的リエゾンの実現率に差があることを示した。つまり、選択的リエゾンの実現率は1960年にロンドンで行われた演説では100%、1961年にフランスのある地方で行った演説では9%という違いが観察され、発話状況に違いがあったことを意味する。この実現率の相違を Léon (1971)は、丁寧なスタイルを使用するか否かに結び付けている。このことは、発話者が発話状況もしくは発話の受信者に応じてスタイルを変える、つまり応化(accomodation)が行われることを示す。例えば、Abecassis (2004 : 66)は「Bell<sup>48</sup>に従えば、スタイルのシフトは発話の応化によって説明されるべきである。Giles (1994)<sup>49</sup>の定義によれば、この応化は発話の受け手によってその発話を調整する能力である。」と述べている。よって、ド・ゴール大統領の演説においてもこの応化というのが行われていると考えることもできる。つまり、政治演説が高尚なスタイルが要求されるものであったとしても、その発話の受け手の特徴を含めた発話状況を正確に判断し、適切なスタイルを選択するという姿勢が見られる。このよ

<sup>47</sup> Durand & Lyche (2008)によれば、主語となる名詞句とそれに後続する動詞の間でリエゾンが発現されることはかなり特殊なレジスターに限られる。

<sup>48</sup> Bell, A. (1984). Language style as audience design, *Language in Society*, 13-2, pp. 145-204.

<sup>49</sup> Giles, H. (1994). Accomodation in communication, *ELL*, pp.12-15.

うな演説の例は、選択的リエゾンの実現が公的な場で良しとされる傾向にある一方で、発話の理解度や親密性の欠如を引き起こす可能性があるということを示していると言えるだろう。

一方で、Mallet (2008)の分析結果からは、発話状況によってリエゾンの実現がそこまで大きく異なるわけではない。

	コンテキストの合計	リエゾンの実現あり		リエゾンの実現なし	
		合計	実現率	合計	実現率
インタビュアーとの会話	15345	7037	45,9%	8308	54,1%
自由会話	13174	5804	44,1%	7370	55,9%
テキストの朗読	8469	5350	63,2%	3119	36,8%

表 3-12：レジスターによるリエゾンの実現率 (Mallet, 2008 : 189)

以上の表は、PFC プロジェクトで作成されたコーパスにおけるレジスターの違いとそのリエゾン実現率の違いが示されている。これをみると、インタビュアーとの会話 (45,9%) と自由会話 (44,1%)におけるリエゾン実現率の違いはほとんどない<sup>50</sup>。Mallet (2008)は、この結果の理由の一つとして、リエゾンが会話のスタイルの違いに大きな影響を持たない可能性を指摘している。むしろ、以上の表からは、テキストの朗読 (63%)と会話 (45%)におけるリエゾン実現率の違いのほうが明白である。綴り字が与える視覚的情報は、リエゾンの実現により影響を与えることが考えられる。リエゾンの実現に影響する発話スタイルの違いというのは、伝達手段による違い、つまり書き言葉の朗読と話し言葉の違いと解釈することもできるのではないだろうか。

### 3.3.4. まとめ

社会言語学的研究においては、リエゾンの実現に影響する発話者間要因として、社会階層、学歴、性別、年齢、そして発話者内要因として、発話状況とそれに応じたスタイルが考慮された。先行研究を概観すると、年齢とリエゾンの実現は綴り字という視覚的情報がリエゾンの実現に大きく影響することが明らかである。選択的リエゾンの実現率が年齢に比例することは複数の研究で見られている。そして、Mallet (2008 : 192)はPFC コーパスの分析から、むしろ会話と朗読におけるリエゾンの実現率の差異を明らかにした。確かに、教養のある話者は綴り字の知識があることは当然である。また、政治家やジャーナリストなどテキストを見て話すことが多い特殊な職業では、リエゾンの実現率は通常より高くなることは大いに考えられる。

<sup>50</sup> Mallet (2008)はこの違いに統計的な有意差があるかについては確認していない。

### 3.4. 理論的アプローチ

理論的アプローチは大きく 2 つに分類することができる。第一に、リエゾンの実現を音韻論もしくは形態論の枠組みにおいてモデル化するものであり、このアプローチで中心的に扱われた問題はリエゾン子音の位置に集約されるといえる。第二に、リエゾンが実現されるコンテキストを統語的にモデル化するアプローチである。

#### 3.4.1. リエゾン子音の位置の問題

1960 年代に生成音韻論の基礎が形成される頃、フランス語の音韻論において音韻的定式化の試みの対象となったのは、主にリエゾンと不安定な *e* (シュワー) であり、その分析は理論の発展に重要な役割を果たしたといえる (Cf. Tranel, 2000 : 39)。リエゾンについての最初の音韻的定式は、マサチューセッツ工科大学に Schane (1965, 1968) が提出した博士論文において提示された削除規則である。その後、現在に至るまで様々な規則が提示されてきた。このような音韻的定式化は、語が単独で発音された場合に読まれない子音字 (発音された場合には、リエゾン子音と呼ばれるもの) を基底表示においてどのように表示するか、という問題を扱う試みといってもよいだろう。生成音韻論の枠組みでリエゾンを形式的に説明した Schane (1965, 1968) は、リエゾン子音を MOT1 の基底における語末子音として表示した。その後、初期の Schane (1965, 1968) の研究への批判から、様々な定式化の試みがいくつも提案された。1980 年代以降に発展した非線形音韻論 (Phonologie non-linéaire) では、リエゾン子音は浮遊性子音 (Floating consonant, Consonne flottante (仏)) という立場を与えられた。20 世紀末に音韻理論の主要な理論となった最適性音韻論 (Optimality Theory, Théorie de l'Optimalité (仏)) を用いた Tranel (2000) や Eychenne (2011) にも MOT1 における潜在的子音としてこの子音を扱っている。一方で、リエゾン子音を MOT1 にも MOT2 にも属さない挿入子音として扱う方法 (Klausenburger 1974, Côté 2005, 2010 ; Tranel 1981)、リエゾン子音を MOT2 の接頭辞として形態的に扱う方法 (Côté 2005, 2010 ; Morin & Kaye 1982 ; Morin 2003, 2005a)、そして語レベルよりも大きな構造の中でリエゾン子音を扱うアプローチ (Bybee 2001, 2005) が提示された。以下にリエゾン子音に付与された複数の位置を要約したものを挙げる。

リエゾン子音の位置		特徴	語彙の基底
語末子音	音韻的 Schane (1965, 1968)	削除 (Troncation) : リエゾン子音はリエゾンコンテキスト外で脱落する安定的な子音として基底に表示される。	/døz/ /ami/
	音韻的 Dell (1970)	音位転換 (Métathèse) : リエゾン子音はリエゾンコンテキストにおい	/døz/ /ami/

		て、右側の語に移動する	
	形態的 Côté (2005, 2010), Tranel (1990), Steriade (1999)	補充法(Supplétion)による分析：リエゾン子音は異形態における語末の安定的子音である	/dø, døz/ /ami/
潜在的子音	音韻的 Encrevé (1988)	自律音節音韻論 (Phonologie autosegmentale)における浮遊子音：リエゾン子音はスケルトンライン(squelette)にも音節構成素ラインにも係留せず、浮遊した存在である。この浮遊性によって、安定的子音とは異なる表示を持つ。	/dø(z)/ /ami/
	音韻的 Tranel (2000), Eychenne (2011)	最適性理論 (Théorie d'Optimalité): リエゾン子音を潜在的子音として扱う。	/dø(z)/ /ami/
挿入子音	音韻的・形態的 Klausenburger (1974), Tranel (1981), Côté (2005, 2010),	リエゾン子音はMOT1とMOT2の間に挿入される。	/dø/ /ami/
形態的子音	形態的 Morin & Kaye (1982), Morin (2003, 2005), Côté (2005, 2010)	接頭辞的分析：リエゾン子音はMOT2の接頭辞である。	/dø/ /z+ami/
構造の中に組み込まれる子音	Bybee (2001, 2005)	リエゾン子音は語よりも大きい構造の一部となり、リエゾン子音を含んだ構造の語彙化が生じる。	/dø z ami/

表 3-13：リエゾン子音の位置によるアプローチの分類<sup>51</sup>

本節では、以上に挙げたそれぞれのアプローチで、リエゾン子音が基底表示においてどのような位置付けを与えられたかについて説明する。

#### 3.4.1.1. 語末子音としてのリエゾン子音

Schane (1965, 1968)以降の派生的音韻論では、リエゾン子音は基底表示においてMOT1の語末に表示される。以下では、削除規則、音位転換、補充法におけるリエゾンへのアプロ

<sup>51</sup> この表は基本的に Côté (2010)のものを参照している。



一チを要約する。

### 3.4.1.1.1. Schane (1965, 1968) : 削除規則

Schane (1965, 1968)はリエゾン子音を基底表示において MOT1 の語末に表示し、リエゾンとエリジオンをたった一つの規則で説明することを試みた。以下がその規則である。

$$(a) \left\{ \begin{array}{l} \alpha \text{ cons} \\ -\alpha \text{ voc} \end{array} \right\} \rightarrow \emptyset / \_ \# [\alpha \text{ cons}]$$

この規則は、語境界の右側の語が子音で始まる語の場合に、左側の語の語末子音が削除されることを示している。同時に、語境界の右側の語が母音で始まる語の場合には、語境界の左側の語末の母音（シュワー）が削除されるということも示す(Cf. Schane, 1968 : 2)。つまり、リエゾンは語末子音の削除であり、エリジオンは語末の母音の削除と捉えることができる。ただし、この規則が実際に表すものはリエゾンとエリジオンが実現されない場合であることが指摘されている<sup>52</sup>。

形容詞および名詞の女性形の語末が子音で終わる場合に、この子音は安定的に発音され、リエゾン子音とは区別されなければならない。そのため、Schane (1968 : 6)は基底形において女性形の語末に/a/を加えることを主張している。確かに、綴り字の上では *petit~petite* のペアのように *e* の有無で区別されることを考えれば、語 *petite* に /pətitə/ という基底形を与えることは自然なこととも考えられる。ただし、*avec* /avək/, *sens* /sãs/, *chef* /ʃɛf/ のような語の場合は綴り字上にこの *e* の綴り字はなく、これらの語の語末子音は安定的子音である。このような語は削除規則の例外となる。

### 3.4.1.1.2. Dell (1970) : 音位転換

Dell (1970)は、Schane (1965, 1968)のリエゾンとエリジオンを同時に扱う規則を棄却し、リエゾンを音位転換 (Métathèse)として表す規則を提示した。この規則は以下のようなものである。

$$(b) \text{LIAIS (obl): } [- \text{syll}] \# [+ \text{syll}] \\ 1 \quad 2 \quad 3 \quad \Rightarrow \quad 2 \quad 1 \quad 3$$

この規則は、MOT1#MOT2のような語の連鎖において、MOT1の語末が子音、MOT2が母音で始まる場合にMOT1の語末子音がMOT2の語頭に移動することを示す。さらに、この規則LIAISには以下のような削除規則が与えられている。

<sup>52</sup> Mallet (2008 : 112)を参照。

(c) TR(obl) : [-son] ⇒ ∅ / \_ [-son]₀#

上記の規則は、語末子音の削除を指示するものである。

	<i>petit ami</i>			<i>petits amis</i>		
基底形	pətit	#	ami	pətit+ z	#	ami+z
	1	2	3	1	2	3
LIAIS (obl)	pəti#	t	ami	pətit#	z	ami+z
	2	1	3	2	1	3
TR (obl)				pəti#	z	ami
				2	1	3
表層形	[p(ə)titami]			[p(ə)tizami]		

表 3-14 : *petit ami* vs. *petits amis*

ただし、この規則の連続が説明できないものもある。例えば、Encrevé (1988 : 25-26)は、Dell (1970)の規則では、*il part à Paris* という句が[i-lpa-ra-pari]と発音された場合に見られるように、[r]が[a]へとアンシェヌマンされない点を指摘している。

	<i>(il) part à (Paris)</i>		
基底形	part	#	a
	1	2	3
LIAIS (obl)	不適用		
TR (obl)	par	#	a
表層形	[par. a]		

表 3-15 : 規則の適用におけるアンシェヌマンの欠如

つまり、規則 LIAIS が適用されない場合には、規則 TR によって基底形/part/のリエゾン子音 /t/が削除されるのみで、語末へと移動した /r/が後続する語 à (/a)へのアンシェヌマンが起こらない。

### 3.4.1.1.3. 補充法

補充法 (Supplétion)はリエゾンを形態的現象として捉える。このアプローチにおいては、

MOT1 はいくつかの異形態を持つと考えられている(Côté, 2005, 2010 ; Tranel, 1990 ; Steriade, 1999)。例えば、語 *petit* は短い形態 *petit* /pəti/ (*petit zèbre* [pətizɛbɛ])とともに、*petit* /pətit/ (*petit ours* [pətituɔʁs])という長い形態を持つことが考えられる。これらの研究の多くは、形容詞の男性形と後続する名詞の間でリエゾンが実現する際に表れる形が、女性形と同様であることに着目する。例えば、Steriade (1999 : 243-244)は以下のような例を挙げている。

(1) a. *nouvel an* [nuvɛl ɑ̃]

男性形 : *nouveau* [nuvo] ; 女性形 *nouvelle* [nuvɛl]

b. *bon endroit* [bɔ̃ ɑ̃dʁwa]

男性形 : *bon* [bɔ̃] ; 女性形 *bonne* [bɔ̃n]

c. *petit enfant* [pətit ɑ̃fɑ̃]

男性形 : *petit* [pəti] ; 女性形 *petite* [pətit]

以上の例では、「男性形形容詞+名詞」のコンテキストで実現されるリエゾン子音は女性形の語末の安定的な子音と同じものである。ただし、女性形の語末子音が無声子音であるのに対して、リエゾンでは有声子音になるものがある。

(2) d. *gros enfant* [gʁozɑ̃fɑ̃]

男性形 : *gros* [gʁo] ; 女性形 *grosse* [gʁɔs]

e. *grand ami* [gʁɑ̃tami]

男性形 : *grand* [gʁɑ̃] ; 女性形 *grande* [gʁɑ̃d]

Steriade (1999 : 262)に従えば、以上のような語はリエゾン形を含む3つの異形態を持つことになる。一方でCôté (2005 : 74) は補充法は形容詞の一部に対して有効であるとする。例えば、リエゾンが実現される場合に鼻母音と母音の交替を示す語(*bon* (/bɔ̃-/bɔ̃n/), *plein* (/plɛ̃-/plɛ̃n/))、もしくは狭母音と広母音の交換を示す語(*sot* (/so-/so/))のみが補充法で解決されると主張する。ただし、Morin (2005a : 脚注4) は補充法がリエゾンを説明するために不十分な理由は、*gros t-enfant* [gʁɔtɑ̃fɑ̃]や*soudain t-intérêt* [sudɛ̃tɛ̃tɛrɛ]のような間違ったリエゾンが実現される事実に対する説明が補充法では不十分であることだと指摘している。

### 3.4.1.2. 潜在的子音

1970年代半ばに、音韻論は重要な理論的転換期を迎える。Chomsky & Halleによって提示されたSPEを基礎とする派生規則中心の音韻論は時代遅れなものとなり、Goldsmith (1976)<sup>53</sup>の博士論文において提示された非線形的音韻論が音韻理論の中心的存在となる(Cf. Encrevé,

<sup>53</sup> Goldsmith, J. A. (1976). *Autosegmental Phonology*. Ph. D. dissertation : MIT. New York : Garland Press, 1979.

1988 : 159 ; Mallet, 2008 : 121)。

この非線形的音韻論において、リエゾン子音は潜在的子音（もしくは浮遊的子音）という立場を与えられた。この潜在的子音という名前は既に Damourette & Pichon (1927)によって導入されており<sup>54</sup>、他の子音との区別のために与えられた概念である。例えば女性形容詞の語末子音は常に発音されるために安定的であるのに対して、潜在的子音は音韻コンテキストやその他の要因によってその音声的実現が安定的ではない。1980年代に発展した非線形音韻論において、リエゾン子音の潜在的性質は、音節に係留されない浮遊子音としての立場が主張された。

その後 1990 年以降に発展した最適性理論に基づいたアプローチにおいても、リエゾン子音は潜在的な子音として扱われ、基底表示において安定的な子音とは異なることを示す工夫がなされた。

#### 3.4.1.2.1. 非線形音韻論 : 浮遊子音

1980 年代以降、生成音韻論における中心的理論となった非線形音韻論では、リエゾン子音は潜在的な子音として存在するという解釈が与えられた。非線形音韻論では、従来の分節音の階層とは別にいくつかの階層が与えられており、樹形図により表示することが可能である。例えば、Encrevé (1988 :31) は音節構造を以下のように説明している。

« Le sommet de syllabe,  $\sigma$  domine les constituants attaque et rime. L'attaque peut comporter une ou plusieurs consonnes, selon les langues ; la rime comprend toujours un noyau comportant au moins une voyelle, et peut comprendre une coda comportant une ou plusieurs consonnes. »

Encrevé (1988 : 31)

「音節の頂点( $\sigma$ )はオンセット(Onset (英), Attaque (仏))とライム(Rime)を支配する。オンセットは、言語によって一つないし複数の子音を含むことができる。ライムは、少なくとも一つの母音を含む核(Nucleus (英), Noyau (仏))、一つないし複数の子音を含むことができるコーダ(Coda (英、仏))で構成される。」

よって、音節構造は以下のような図で表すことができる。

---

<sup>54</sup> Morin (2003 : 386-388) を参照。

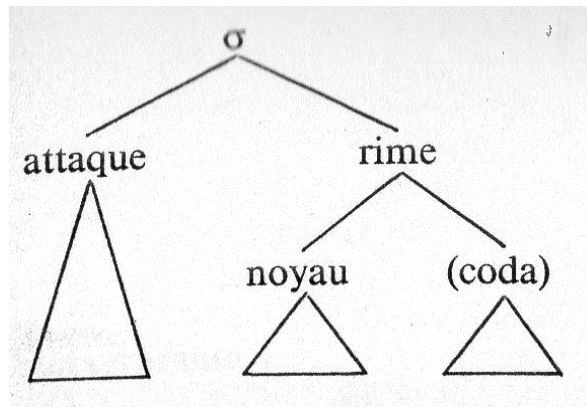


図 3-1 :音節構造 (Encrevé, 1988 : 31)

また、非線形音韻論では、分節音のラインと音節構成要素のラインの間にスケルトン (squelette) と呼ばれる媒介的な位置が設定されている。Encrevé (1988 : 175) はフランス語における語末音節のコーダについて以下のような説明を与えている。

« [...] en français à la finale des mots un constituant syllabique *coda* est toujours flottant, qu'il corresponde à une CF ou à une CL. Ce fait de structure se traduit directement dans le fait empiquement constaté de l'enchaînement. »

Encrevé (1988 : 175)

「フランス語において語末では、安定的子音もしくはリエゾン子音に値するコーダの音節構成素が常に浮遊している。この構造の事実、アンシェヌマンから経験的に確認される事実において、直接的に解釈される。」

リエゾン子音は音節構成要素とスケルトンのどちらにも係留されず、このような要素が浮遊性要素と呼ばれるものである。Encrevé (1988 : 169) に従えば、リエゾン子音は以下のように表される。

- C (音節構成要素ライン)
- (スケルトン)
- C (分節音ライン)

図 3-2 : 非線形音韻論におけるリエゾン子音の立場

さらに Encrevé (1988 : 169) は、リエゾン子音は基底表示における位置づけについて以下

のように説明している。

- (1) Sur la ligne autosegmentale des segments, la CL est un *segment flottant*, sans association donc avec le squelette ;
- (2) Dans le plan autosegmentale syllabique, sur la ligne des constituants de la rime, une *coda flottante*, sans association donc avec le squelette, correspond à ce segment flottant ;
- (3) Sur la ligne du squelette, une *position*, sans association aucune, est disponible pour l'ancrage à la fois de la CL et d'un constituant syllabique.

Encrevé (1988 : 169)

- (1) 自律分節オンラインにおいて、リエゾン子音はスケルトンに係留せずに浮遊する分節音である。
- (2) ライムの構成要素の線上における音節構成要素ラインにおいて、スケルトンに係留されない浮遊するコーダは、浮遊要素である。
- (3) スケルトンライン上で、リエゾン子音および音節構成要素が同時に係留するための位置が用意されている。

一方、安定的な語末子音は音節要素には係留されない一方で、スケルトンに係留されている。よって、安定的な語末子音は以下のように表示されるだろう。

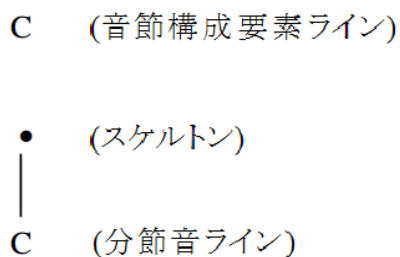


図 3-3 : 非線形音韻論における安定的な語末子音の位置付け

これら 2 つの異なる立場を持つコーダの子音は、例えば語 *petit* /pəti(t)/ および *petite* /pətit/ の基底表示で以下のように表示される。

a. リエゾン子音 (例: <i>petit</i> )	b. 安定的な語末子音 (例: <i>petite</i> )																																																												
<table style="border: none; margin: auto;"> <tr><td>A</td><td>R</td><td>A</td><td>R</td><td></td></tr> <tr><td> </td><td>N</td><td> </td><td>N</td><td>C</td></tr> <tr><td> </td><td></td><td> </td><td> </td><td></td></tr> <tr><td>·</td><td>·</td><td>·</td><td>·</td><td>·</td></tr> <tr><td> </td><td></td><td> </td><td> </td><td></td></tr> <tr><td>p</td><td>ə</td><td>t</td><td>i</td><td>t</td></tr> </table>	A	R	A	R			N		N	C						·	·	·	·	·						p	ə	t	i	t	<table style="border: none; margin: auto;"> <tr><td>A</td><td>R</td><td>A</td><td>R</td><td></td></tr> <tr><td> </td><td>N</td><td> </td><td>N</td><td>C</td></tr> <tr><td> </td><td></td><td> </td><td> </td><td></td></tr> <tr><td>·</td><td>·</td><td>·</td><td>·</td><td>·</td></tr> <tr><td> </td><td></td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td>p</td><td>ə</td><td>t</td><td>i</td><td>t</td></tr> </table>	A	R	A	R			N		N	C						·	·	·	·	·						p	ə	t	i	t
A	R	A	R																																																										
	N		N	C																																																									
·	·	·	·	·																																																									
p	ə	t	i	t																																																									
A	R	A	R																																																										
	N		N	C																																																									
·	·	·	·	·																																																									
p	ə	t	i	t																																																									

図 3-4: 語 *petit* /pəti(t)/および *petite* /pətit/の基底表示

リエゾンが実現する場合には、リエゾン子音が語境界を越えて後続する語のオンセットに係留されるという解釈ができる。例えば、以下の図のように *petit ami* [pətitami] という連辞においてリエゾンが実現する場合に、基底表示においてコーダに位置する浮遊子音/t/が、語 *ami* のオンセットに係留されることによって、[t]が音声的に実現されると考えればよい。

Encrevé (1988)は、このような理論に基づいて、「アンシェヌマンのないリエゾン」がどのようなメカニズムで起きるのかを説明している。コーダ位置で浮遊するリエゾン子音が MOT2 のオンセットに係留されず、元の位置のスケルトンに係留されることによって語末での音声的实现が起こるというものである。連辞 «*j'avais un rêve*» [zavɛzɛʁɛv] において通常のリエゾンが実現された場合には、以下の図のように表すことができる。

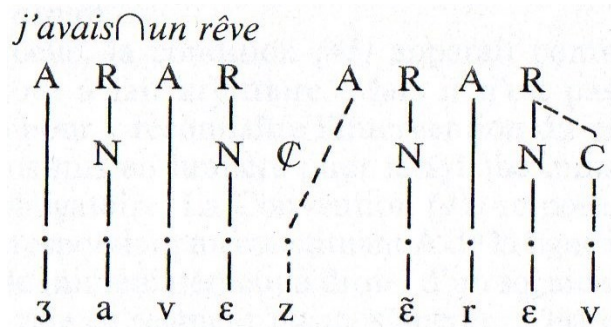


図 3-5: 再音節化があるリエゾン (Encrevé, 1988 : 177)

つまり、浮遊子音/z/が後続する語の語頭のオンセットに係留される。反対に、アンシェヌマンのないリエゾンでは、連辞 «*j'avais un rêve*»においてリエゾン子音[z]の再音節化が起こらない。

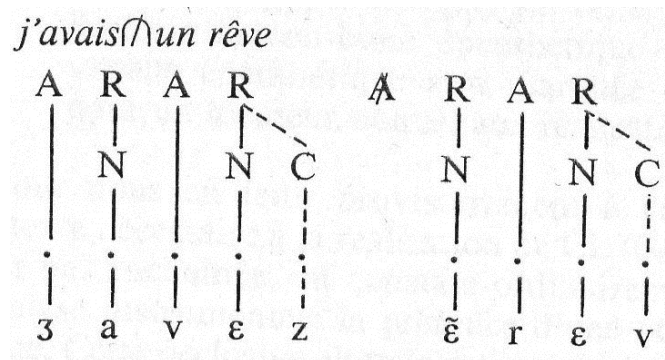


図 3-6: 再音節化がないリエゾン (Encrevé, 1988 : 183)

Encrevé (1988 :183)に従えば、つまりアンシェヌマンのないリエゾンが実現された場合には、浮遊子音である[z]は語末のコーダに係留される。この様子は以上の図においても明らかである。

### 3.4.1.2.2. 最適性理論

最適性理論 (Optimality Theory、Théorie d'Optimalité(仏)、以下略称 OT とする)は、Prince & Smolensky (1993)によって提示された生成音韻論の新しい理論である。基本原理が、生成理論における標準理論においては「規則、派生」に特徴づけられている一方で、OT では「制約」が使用される。規則と派生に基づく理論および OT の共通点は、基底形から表層に表れる音声形を導くものであることに変わりはない。ただし、OT では複数の出力候補を制約に基づいて評価することで、最適な出力 (音声的实现) を選択する。

OT に基づいてリエゾンのモデル化を目指した研究は、私の知る限りでは、Tranel (2000) および Eychenne (2011) が挙げられる。Tranel (2000 : 39) が「音韻的プロセスは世界中の言語に普遍的に表れる根本的な言語の特性の相互作用に帰する」と述べているように、リエゾンを他の言語にも表れる音韻的的特性に結びつけて説明しようと試みている。よって、Tranel (2000)はリエゾン子音を鍵括弧({})で囲うことにより、制約に違反しないために鍵括弧が外される潜在的子音としてリエゾン子音を扱っている。以下がリエゾンの実現について Tranel (2000 : 52)が提示したタブローである。

/pəti {t} ano/	*VV	DEP(L)
[pɛti t ano]		*
pɛti ano	*!	

表 3-16: リエゾンの実現(Tranel, 2000 : 52)

まず、基底表示/pəti {t} ano/が入力にあり、出力候補としてリエゾンが実現される[pɛti t ano]



とリエゾンが実現されない[pœti ano]の2つがある。Tranel (2000)は、母音接続を禁止する制約(\*VV)を優位に置き、もう一つの制約の候補として、分節音を挿入してはいけないという制約(DEP(L))を与えている。リエゾンが実現することを、母音接続を回避するための方法と解釈するのならば、リエゾンの非実現は制約\*VV に違反することを意味する。よって、制約\*VV に違反する候補「pœti ano」ではなく、分節音を挿入すべきではないという制約(DEP(L))に違反する候補「pœti t ano」が出力される。

Tranel (2000)のアプローチは、世界中の言語が共有する母音接続を回避するという一般的傾向に、リエゾンの問題を結びつけたものである。また、部分的にフランス語にのみ特有な連声現象のひとつとして、一般的かつ類型論的に動機付けられた制約の相互作用による現象として、リエゾンを扱うことを可能にした<sup>55</sup>。

ただし、Tranel (2000)の OT に基づいたリエゾンの実現に対するアプローチに対して、Eychenne (2011 : 86)は批判的な立場をとる。その批判の第一の理由とは、入力にリエゾン子音を表示しているにも関わらず、リエゾンの実現が分節音を挿入してはいけないという制約 DEP(L)に違反することである。リエゾン子音は鍵括弧に入れられているものの、リエゾン子音が含まれる形が入力されている。また、入力および出力においてリエゾン子音が含まれていることは、忠実性制約にかなっているため、DEP(L)に違反することはない。第二の理由として、Eychenne (2011)は母音接続を禁止する制約(\*VV)についての問題点を指摘している。例えば、Tranel (2000)の方法であれば、*belles années* の *belles* は/bel{z}/となる。

/bel {z} ane /	*VV	DEP(L)
⊗belzane		* !
☞belane		

表 3-17 : 連辞 *belles années* におけるリエゾンの実現(Eychenne, 2011 :88)<sup>56</sup>

以上のタブローにおいて、出力として実際に最適である[belzane]が、制約 DEP(L)に違反する一方で、最適とは考えられない出力候補 [belane]がどの制約にも違反することなく、出力される。Eychenne (2011 :88)はこの問題に関して、そもそも通時的に考えれば、リエゾンの成立は母音接続の回避のためではなく、むしろ語末のコーダの弱化 (PasDeCoda) によって起こったことを考慮すべきであると述べている。

Eychenne (2011)は、Bonami *et al* (2005)に倣い、指数原理<sup>57</sup>に基づいた方法でリエゾン子音

<sup>55</sup> Eychenne (2011 : 86)を参照。

<sup>56</sup> 表における記号⊗は、出力候補が決定的に制約に違反することを意味する。また、記号☞は出力候補が最適であることを意味する。

<sup>57</sup> Eychenne (2011)は McCarthy & Prince (1993)および Oostendorp (2005)を参照している。

- McCarthy, J. & Prince, A. (1993). *Prosodic Morphology : constraint interaction and satisfaction*, *Rapport technique RuCSS-TR-3*, New Brunswick : Rutgers University Center for Cognitive Science.

- Oostendorp, M. van. (2005). *The Theory of Fithfulness*, Manuscrit, Meertens Institute.

に潜在的な立場を与えている。Eychenne (2011 : 94)に従えば、語 *petit* および語 *petite* は以下のように表すことができる。

a. *petit* : p<sub>α</sub> ə<sub>α</sub> t<sub>α</sub> i<sub>α</sub> t<sub>λ</sub>

b. *petite* : p<sub>α</sub> ə<sub>α</sub> t<sub>α</sub> i<sub>α</sub> t<sub>α</sub>

このλマークがついた子音は、制約の順序付けによって音声的実現の有無が決定されるものである。以下がこのようなアプローチに基づいた表である。

/gʁɑ̃t <sub>λ</sub> emwa/	ATTAQUE	PASDECODAL	MAX(C)	PASDECODA	*λ
☞ [gʁɑ̃.t <sub>λ</sub> e.mwa.]	,				*
[gʁɑ̃.e.mwa.]	*!		*		
/gʁɑ̃t <sub>λ</sub> denivəle/					
[gʁɑ̃t <sub>λ</sub> .de.ni.və.le.]		*!		*	*
☞ [gʁɑ̃.de.ni.və.le.]			*		

表 3-18 : *grand émoi* vs. *grand dénivelé* (Eychenne 2011 : 95)

Eychenne (2011)は、*grand émoi* および *grand dénivelé* の連辞において、λマークがついた子音の発音有無がどのような制約とその順序付けによって決定されるかを提示している。このタブローにおいて 5 つの制約に優先順位が付けられている。以下で、これらの制約について簡略に説明する。

- (1) ATTAQUE : 音節は頭子音を持つべきである、
- (2) PASDECODAL : 音節は λ マークを持つ子音のコーダを持つべきではない、
- (3) MAX(C) : 入力に含まれる子音は全て出力に反映されるべきである、
- (4) PASDECODA : 音節はコーダを持たない、
- (5) \*λ : 出力は λ マークが付いた子音を含むべきではない。

これらの制約が順序付けられ、連辞 « *grand émoi* » の最適な出力は [gʁɑ̃. t<sub>λ</sub>e. mwa]、連辞 « *grand dénivelé* » [gʁɑ̃. de. ni. və. lə.] となる。

Tranel (2000) および Eychenne (2011) のアプローチの違いは、基底表示におけるリエゾン子音の位置付けと、制約の違いである。Tranel (2000) が、母音接続を回避するための制約 (VV\*)

を上位にランク付けしたのに対し、Eychenne (2011)のアプローチは、リエゾンの成立は言語変化におけるコーダの弱化であることが考慮されており、また音節は頭子音を持たねばならないという制約「ATTAQUE」は、出力において人間の言語の基本的な音節構成要素 CV を得られるという利点があることが考えられる。ただし、リエゾンが実現されない場合には、語境界で母音接続が起こる。そして、これは現代フランス語において大変よく起こることである。よって、Eychenne (2011)の最適性理論に基づいたリエゾンへのアプローチは音韻レベルでの制約の順序付けによって理想的な音節構成要素 CV という傾向を導き出すことに成功しているとはいえるが、リエゾンを統語的、形態的、社会言語学的といった他の要因を含めて総合的な分析が行われているとはいえないだろう。

### 3.4.1.3. 挿入子音としてのリエゾン子音

挿入子音としてのリエゾン子音とは、基底において MOT1 にも MOT2 にも属さないものである。Klausenburger (1974)は、MOT1 にリエゾン子音が結びつくという前提を否定し、挿入規則を用いてリエゾンの説明を試みた。以下に記す規則(b)は Klausenburger (1974)が提示したリエゾンの規則である。

(b)  $\emptyset \rightarrow C / \_ V$

上記の挿入規則(b)は MOT2 が母音で始まる場合に、リエゾン子音が現れることを示している。このような挿入規則は、リエゾン子音を MOT1 および MOT2 の基底には表示せずに、リエゾンを定式化する規則といえる。Klausenburger (1974) 同様、Tranel (1976)も、リエゾン子音が深層構造で左側の語に属するという認識をフランス語話者が持つのかという点に疑問を提示している。ただし、Encrevé (1988)によって、どの子音が挿入されるかが明らかではないという問題点が指摘されている。この挿入規則をより限定されたリエゾンコンテキストに応用したのとして、Tranel (1981)によって提示された2つの挿入規則がある。まず、MOT1 が鼻母音で終わる場合に、非鼻母音化が起こった上で[n]が挿入される規則である。

(c) 非鼻母音化 (Tranel 1981 : 240)

$$\begin{array}{c} V \\ + \text{nasal} \end{array} \rightarrow [-\text{nasal}] / \_ n \# V$$

そして、MOT1 が複数形の名詞もしくは複数形の形容詞であるときに[z]が挿入される規則(以下の規則(d))である。

(d) 複数を示す[z]の挿入 (Tranel 1981 : 210-221)

X # [-syll]  
N, A [+plural]  
1 2 3 → 1 2 z 2 3

Tranel の提示した 2 つの規則は全てのリエゾン現象を十分に説明できるものではないが、特に(d)の挿入規則は Morin & Kaye (1982)が述べているように[z]の子音は複数性マーカーとして機能するといえる。

Côté (2005)はリエゾン子音を挿入的子音として扱う利点をいくつか挙げている。まず、リエゾン子音の音声学的特徴を語末子音と語頭子音と比較するものである。例えば、以下 3 つの名詞句 *petit ami* (リエゾン子音としての[t])、*petite amie* (語末子音[t])、*petit amis* (語頭子音[t])は同音である。しかし、Delattre (1940)<sup>58</sup>がリエゾン子音は語頭子音に類似するが、より弱いということを既に明らかにしており、更に *petite* の語末子音[t]は、後続する母音に再音節化した場合でも、コーダに位置する子音としての特徴を保つために、リエゾン子音とは異なるとする。音響音声学的分析<sup>59</sup>によっても、リエゾン子音としての[t]は語頭子音に比べて閉鎖の時間が長く、より短い VOT を持つという。次に、Desrochers (1994)が述べている *bien mieux isolé* [bjɛ̃mjø̃nizø̃le]が[n]を伴って発音される現象<sup>60</sup>が引き合いに出される。この現象というのは、*bien* の[n]が *mieux* の介入がある一方で、*isolé* の前で発音されるということである。Côté (2005)は、リエゾン子音を MOT1 の語末子音として扱う場合、本来属する語から子音が離れるということは想像し難いと述べている。

#### 3.4.1.4. 接頭辞としてのリエゾン子音

MOT2 にリエゾン子音が位置するという考えは、Morin (2003)に従えば、リエゾン子音を MOT2 の接頭辞として扱うものである。よって、リエゾンに音韻的定式を与えるのではなく、むしろリエゾンは形態的現象として捉えられる。リエゾン子音が接頭辞として MOT1 ではなく MOT2 に与えられることで、MOT2 の異形態を形成する。つまり以下の例のように、リエゾンコンテキストにある MOT2 は接頭辞化したリエゾン子音が表記された異形態をいくつか持つ可能性があると言えよいだろう。

<sup>58</sup> Delattre (1940). Le mot est-il une entité phonétique en français ?, *Le français moderne* 8, 1, 47-56. が参照されている。

<sup>59</sup> Dejean de la Bâtie (1993)の音響音声学的分析が引用されている。Dejean de la Bâtie (1993) (1993). *Word boundary ambiguity in spoken French*, Thèse de doctorat, Monash University.

<sup>60</sup> このようなリエゾンを Desrochers (1994) は *liaison en distance* (遠隔リエゾン)と呼んでいる。

### (3) 語 *ami* の 3 つの異形態

	<i>t-ami</i> [tami]	(例: <i>grand ami</i> )
<i>ami</i> /ami/	<i>n-ami</i> [nami]	(例: <i>mon ami</i> )
	<i>z-ami</i> [zami]	(例: <i>les amis</i> )

例えば、話者は *ami* という語に 3 つの異形態 ([tami], [nami], [zami])があり、これらの異形態のうち何が選ばれるかは MOT1 によって決定される。このようなリエゾン子音の扱い方を裏付けるものとして、Morin (2005 : 14)は綴り字の知識を持たないフランス語話者の認識について、興味深い例を提示している。その例とは、ルイジアナ州のフランス語話者が、例えば *arbre* /aʁbʁ/ という語に 3 つの異形態を与えているというものである<sup>61</sup>。つまり、*larbre* [laʁbʁ]、*narbre* [naʁbʁ]、*zarbre* [zaʁbʁ]は語 *arbre* の可能な実現形となり、MOT1 に合わせて、これらの異形態のうちのどれかが選択される。ルイジアナ州のフランス語話者の例は、フランス語の綴り字の知識を持たないフランス語話者がどのようにリエゾン子音を認識しているかを示している。

次に、後接代名詞 *z-en* /zɑ̃/, *z-y* /zi/, *t-il* /ti(l)/, *t-elle* /tɛ(l)/, *t-on* /tɔ̃/はリエゾン子音の接頭辞化が主張されている (Morin & Kaye, 1982 ; Côté, 2005) 。Côté (2005 : 73, 2010 : 1285) は、ケベックのフランス語における破擦化の例を挙げている。ケベックフランス語では、語の内部において子音 /t, d/が /i, y, j, ɥ/に先行する場合に、破擦化された [tʰ, dʰ] が発音される。倒置疑問文 *doit-il* は [dwaʰtʰil] (\*[dwaʰtil]) と発音され、破擦化は義務的に起こる。よって、後接代名詞に先行するリエゾン子音はこれらの話者にとって、MOT2 に位置するということが考えられる。ただし、Côté (2005, 2010) は Morin & Kaye (1982), Morin (2003, 2005)と異なり、リエゾン子音が全ての語に接頭辞化した異形態が考えられるわけではなく、後接代名詞 *z-en* /zɑ̃/, *z-y* /zi/, *t-il* /ti(l)/, *t-elle* /tɛ(l)/, *t-on* /tɔ̃/だけがリエゾン子音を伴った異形態が与えられるものであると主張している。

子音が MOT2 の語頭で安定的に発音されるという現象は、フランス語の変化において観察される歴史的膠着化の例にも見られる。例えば、冠詞の膠着化 (*l'hierre* > *le lierre*)<sup>62</sup>がその良い例だろう。また、/z/が膠着化した新語の形成(例 : *les yeux* [lezjø] > *zyeuter* [zjøte] )もこのような例として挙げることができるだろう。

#### 3.4.1.5. 構造内部に組み込まれた子音

Bybee(1985, 2001)による用法基盤モデル(Usage-based Model)に基づいたリエゾンへのアプローチは、以下のように説明されている。

<sup>61</sup> Morin (2005 : 14, 脚注 14)が提示した例は、Luc Baronian が 2003 年 3 月にルイジアナで行った録音から得たものである。

<sup>62</sup> Morin (2005a : 10)および Guiraud (1965 : 104-105) を参照。

« [...] les aspects pertinents de cette théorie sont les suivants : des mots entiers et des suites de mots sont mémorisés dans le lexique et le critère de mémorisation est la fréquence d'usage, les mots et suites de mots employés fréquemment étant mémorisés globalement. Cette mémorisation n'entraîne pas l'absence de généralisation, puisque les relations entre les items prennent la forme de connexions lexicales fondées sur des similarités phonologiques et sémantiques. À force d'être utilisés, les items fréquentes voient leur force lexicale augmenter et les items qui ont une grande force lexicale sont plus facilement accessibles que les autres et résistent mieux au changement analogique. »

(Bybee, 2005 : 25)

「この理論 (Bybee, 1985, 2001)がリエゾンに最も関係すると思われる点は、語全体と語の連続はレキシコンにおいて記憶され、その基準となるものは使用頻度だということである。高い頻度で使用される語、またはそのような語の連続は、その構造全体が記憶される。この記憶が一般化の不足を導くことはない。なぜなら、この語と語の関係は、音韻的そして意味的類似性に基づいたレキシコンの関連という形を取るからである。使用によって、使用頻度の高いものは語彙の強度が強化され、またこの強度が高いアイテムは他のものと比較してアクセスしやすいものになり、類似的变化にも耐えられるものとなる。」

このような用法基盤モデルに基づきリエゾンを説明しようと試みる場合には、リエゾンは使用頻度が高い語の連鎖、またその一般化された構造において、リエゾン子音が組み込まれた形で記憶されるものである (Bybee, 2005 : 24)。つまり、リエゾン子音は語と語の連続における構造の内部に位置するため、この子音が挿入されるか、もしくは削除されるかといった選択肢が提示されることはない。それでは、使用頻度はどのように定義されるかといえば、ある2つの語の連続の共起頻度が高い場合には、語と語の間に結束性が生じる<sup>63</sup>。語の共起頻度によって、2つの語の連続が持つ構造が記憶される。さらに、フランス語のリエゾンはある語の連鎖においてのみ実現されるわけではなく、そのような語の連鎖が統語的、意味的に一般化された構造の中でも起こり得る。例えば、「名詞<sub>pl</sub>+形容詞<sub>pl</sub>」のようなコンテキストにおいて、複数を示すリエゾン子音[z]は以下のようにその構造に組み込まれる。

---

<sup>63</sup> 例えば Ågren(1973 : 29)も統語的結束性は使用頻度から形成されると述べている。ただし、使用頻度だけがリエゾンの実現を解決するわけではなく、他の要因(例えば、語の長さ)とともに考慮されるべきであるという補足もされている。

*les*  
 [ *ces*      名詞 -z- [Vowel] – 形容詞 ] pluriel  
*des*  
 etc.

[z]のリエゾンが実現される際に、頻繁に使用される *anglais* や *américain* のような特定の形容詞が以下のような構造が与えられることも可能である(Bybee, 2005 : 28)。

*les*  
 [ *ces*      NOM -z- *anglais* ] pluriel  
*des*  
 etc.

以上のような構造は、*des chemins d'État [z] africains* や *les chemins de fer [z] anglais* のような間違っただリエゾンが実現される原因であると Bybee (2005)は考えている。また、特に「数詞+名詞」のコンテキストで起こる間違っただリエゾンにも構造が存在すると主張している。

- (a) *quatre enfants* [katʒãfã]
- (b) *huit épreuves* [ɥizeprœv]
- (c) *neuf œufs* [nœfzø]
- (d) *vingt-cinq années* [vêtsêkzane]
- (e) *trois mille évêques* [trwamilzevek]

Bybee (2005 : 28)

以下のような構造は、規範的には *deux*、*trois*、*six*、*dix*、*quatre-vingts* のような数詞に母音で始まる語が後続した場合に可能なものである(Bybee, 2005 :29)。

[NOMBRE -z- [voyelle] – NOM] pluriel

この構造の一般化から、以上(a)-(e)のような間違っただリエゾンが実現されると Bybee (2005)は考察している。このような、構造の一般化から *quatre z-enfants* のような間違っただリエゾンが実現されるという主張について、Morin (2005 : 11)は以下のような例を提示して批判している。

A : - ça fait plusieurs mois que je mange des papayes.

B : [corrigeant la proposition de A]

- plusieurs [z] années, plutôt.

A : [dubitatif]

- Z-années !?, je ne crois pas.

(Morin, 2005 : 11)

語の組み合わせから一般化された構造の類推では、「Z-années [zane]」という形を得ることができないと Morin (2005)は述べている<sup>64</sup>。

#### 3.4.1.6. リエゾン子音の位置に関する問題のまとめ

以上で、リエゾン子音の位置に関する問題が先行研究によってどのように扱われてきたのかを概観した。リエゾン子音を結びつけるそれぞれの位置に、利点および欠点があることは明らかである。Bonami *et al* (2005) が「条件が純粋に音韻的であるならば、リエゾンはフランス語においていかなる場合にも義務的であろう」と述べている通り、仮にリエゾンが純粋な音韻現象であるならば、条件が揃えば常にリエゾンが実現されるはずである。ただし、実際のリエゾンの実現はその通りにはいかない。このことから、リエゾンを単なる音韻的現象として扱うことは不可能である。現代のフランス語において、リエゾンには義務的、選択的、禁止的コンテキストがあり、統語的結束性といった言語内の要因によって、義務的か選択的に分類されることが多い。このようなコンテキストの違いがあることから、リエゾンのモデル化という問題は音韻論もしくは形態論によってのみ解決されるわけではなく、他の要因（統語的要因、社会言語学的要因）の影響とともに考察されるべきであろう。

#### 3.4.2. 統語的アプローチ

統語的アプローチでは、リエゾンの実現が語の統語的結束性に注目したものといっていよう。リエゾンは2つの語の間で必ず実現されるわけではなく、2つの語の間にある何らかの関係によって、義務的、選択的、禁止的といったコンテキストに分類されてきた。このコンテキストの違いは、2つの語の統語構造上の関係性によって決まる、という仮説を理論的にモデル化しようとしたものが統語的アプローチである。このようなアプローチでは、音韻的・形態的な研究では副次的に扱われた発話スタイルの違いが考慮される。その理由として、義務的リエゾンと選択的リエゾンといった、リエゾンの実現の有無がどのような要因によって生じているのか、という疑問が前提として存在するためである。

音韻規則が適用されるためには統語的な条件を満たさなければいけないという点は Schane (1968 : 13)によっても指摘されていた。このような統語的条件は以下のようなものであった。

<sup>64</sup> Morin (2005)の主張は、むしろリエゾン子音が接頭辞であることに焦点が置かれる。



語末子音の削除は

1. 義務的に、
  - a. 句末において
  - b. 単数形の名詞において
2. 選択的に、複数形の名詞において

Schane (1968)の削除規則は、基本的には名詞句に限定した統語コンテキストに基づいて提示されている。そのため、上記のような統語的条件は非常に単純であることは Schane (1968) 自身も認識している。

### 3.4.2.1. Selkirk (1972, 1974)

統語構造の分析に基づいたリエゾンへのアプローチは Selkirk (1972, 1974)によって始めて提示された。Selkirk (1972, 1974)は Chomsky (1970)の X Comp Rule と Chomsky & Halle (1968)の External Sandhi Rules(外連声規則)に基づいて、リエゾンの規則性を説明している。X Comp Rule において、X は任意の語彙範疇であり、XP はそれを主要部とする句である。例えば、NP(名詞句)は N (名詞) を、VP(動詞句)は V(動詞)を主要部として持つ。

- (1) 境界#は主要部、つまり「名詞」、「動詞」、「形容詞」、または「文」、「名詞句」、「動詞句」のような語彙範疇によって支配される構成素の前後に自動的に挿入されるものであり、非語彙範疇の語は語境界に接することはない。

(Selkirk, 1974 : 577)

- (1)  $Y \neq S$  のときに、 $W\#]_X\#]_Y Z$  または  $Z_Y[\#_X[\#_W$  において、内部の語境界が削除される。

(Selkirk, 1974 : 578)

以上の2点から、X-Comp Rule は以下のような式を用いて表している。

$$\begin{aligned} \text{a) } X''[\#Y_{X'}[X[ [X (+inflected)]\#]_X Z] X'\#]_{X''} &\Rightarrow \\ X''[\#Y_{X'}[X[[X(+inflected)]_X Z]_X\#]_{X''} & \end{aligned}$$

(Selkirk, 1974 : 582)

次に、以下は核となる名詞に、機能語の冠詞が先行した場合である。

b)  $N''[\#[\text{Art}]N'[\#N'[\text{Noun}]_N]N'\#]N''$

(Selkirk, 1974 : 578)

例えば、*un ami* という連辞において境界記号#は1つであることから、語境界自体が取り外されるため、リエゾンが実現する。

(1) ## *un # ami* ## → *un [n] ami*

語境界記号#がたった一つである場合には、語境界が排除され、リエゾンが実現する。一方で動詞と名詞が隣接した場合においては以下のようなになる。

c)  $V''[\# V' [V [\text{Verb} \#] V N''[\# N' [N[\text{Noun}]_N]N'\#]V'] \#]V''$

(Selkirk, 1974 : 578)

以上のc)に見られるように語境界記号#が2つ連続する場合には、語境界は排除されないため、リエゾンは実現されない。*ils [z] achètent / une baguette* という連辞では、特に *achètent* と *une* の間に境界記号が2つ連続している。このため、リエゾンの実現はない。

(2) ## *Ils # achètent ## une # baguette* ## →

*Ils [z] achètent / une baguette*

しかし、使用される発話スタイルによっては、フランス語特有の規則に従い、規則の再調節が行われることによって、X'内部で語境界が削除されない場合にも、リエゾンが実現されることが可能であると Selkirk (1974) は主張している<sup>65</sup>。よって、2つの語の間に語境界記号#が1つの場合には義務的コンテキストであり、2つの語境界記号がある場合には選択的コンテキストであるということになる。

一方、Morin & Kaye (1982) は、Selkirk (1972, 1974) の外連声規則に対していくつもの反例を提示する。Selkirk (1974) の仮説の背後にある中心的な考えは、リエゾンは必ず *phonological word* (音韻的語) の中で起こるべきであり、その間で起こることはないとする Chomsky & Halle (1968) の *phonological word* の概念とは一致しない。Chomsky & Halle (1968) によれば、この *phonological word* とは、ある統語範疇に支配される句に境界記号#を導入する規則によって形式的に定義されたものである。しかし、Selkirk (1974) が、発話の文体がかしこまったもの場合には語境界が削除されることもあると述べた点は、SPE の内容とは一致せず、フランス語にのみ特有であるこの規則は、普遍的であるとはいえないという問題点が指摘さ

<sup>65</sup> Selkirk (1974 : 581) を参照。

れている。Morin & Kaye (1982)による Selkirk (1974)のリエゾン理論に対する主な批判は以下に挙げる3点である。

- 1) 形容詞は非語彙範疇には分類されないため、形容詞と名詞の間に語境界記号 # が2つ連続する。このため、前置形容詞と名詞の間で、規範的にはリエゾンが実現されると言われているが、Selkirk の規則では、選択的リエゾンに分類されてしまう。よって、この前置形容詞を冠詞のような非語彙的範疇に分類する必要がある。
- 2) Ågren (1973)のデータから、同じ統語構造上同様であっても、動詞の屈折の種類によってリエゾンの実現頻度が変化することは明確であるが、Selkirk のアプローチでは頻度による影響は考慮されていない。
- 3) 休止が干渉する場合、Selkirk の理論では後続語のオンセットにリエゾン子音が再音節化するのは不可能であるが、実際には Ågren (1973)によって、ポーズや声門閉鎖が観察された場合にもリエゾンが実現されることが経験に基づくデータから証明されている。

さらに、Selkirk (1974)の理論的アプローチは、実際の話し言葉のデータが使用されることなく、Fouché (1959)や Delattre (1966)の分類のみを参考に行っている。実際の発話における、選択的リエゾンの実現率がコンテキストによって異なることがほとんど考慮されていないことは否定できない<sup>66</sup>。

#### 3.4.2.2. Kaisse (1985)

Maurice Gross (1967)は文構造の樹形図における距離を測ることで、その距離が短い場合にはリエゾンの実現があるとした(Cf. Encrevé, 1988 : 90)。後に、Gross (1967)のアプローチを生成統語論の枠組みにおいて発展させたのが Kaisse (1985)である。Kaisse (1985)はリエゾンの実現の有無を C 統御 (C-command)による規則性によって説明することを試みた。C 統御は以下のように定義される。

「C-command (C 統御) = 2つの接点  $\alpha$ 、 $\beta$  がいずれも他を支配せず、かつ、 $\alpha$  を支配する全ての枝分かれ接点が  $\beta$  を支配している場合、 $\alpha$  は  $\beta$  を C 統御する。」

Kaisse (1985)はリエゾンの実現は  $\alpha$  と  $\beta$  が C 統御の関係にある場合に起こることを主張する。ここでは「*Les adorables enfants ont été conduits en classe*」という句を例に挙げる以下の

---

<sup>66</sup> Morin (1987)は、フランス語に関する音韻論の研究において、実際に話されたフランス語のデータを使用しないことについて大いに批判している。

図はこの句の統語的樹形図である。

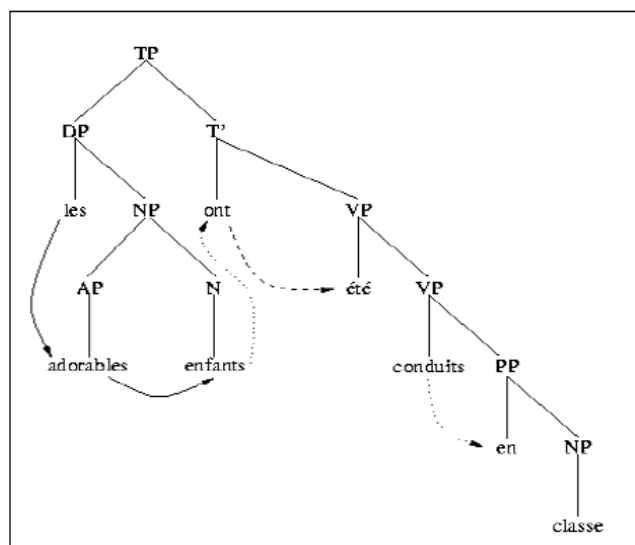


図 3-7: リエゾンと C 統御<sup>67</sup>

例えば、この連辞において、定冠詞 *les* と形容詞 *adorables*、形容詞 *adorables* と名詞 *enfants* でリエゾンが必ず実現される（義務的）。一方、助動詞 *ont* と過去分詞 *été*、過去分詞 *conduits* と前置詞 *en* の間では必ずリエゾンが実現されるわけではない（選択的）。また、名詞 *enfants* と助動詞 *ont* の間ではリエゾンは実現されない（禁止的）。例えば、リエゾンが義務的である「*Les [z] adorables*」において、*les* は *adorables* を C 統御し、また「*adorables [z] enfants*」においては、この 2 つの語はそれぞれ C 統御の関係にある。一方でリエゾンが実現されないことがない、「*enfants ont*」では、この 2 つの語には C 統御の関係がない。ただし、「*ont été*」および「*conduits en*」では先行語が後続語を C 統御しているが、リエゾンが必ず実現するわけではない。Fougeron *et al* (2001) は、「C 統御はリエゾンの実現において、必要条件ではあるが、それだけでリエゾンの実現を説明できるわけではない」と結論付けている。

### 3.4.2.3. 統語的アプローチのまとめ

統語構造に基づいたリエゾンへのアプローチは、リエゾンコンテキストにある語と語の統語的關係（統語範疇、C 統御）を明らかにすることによって、リエゾンの実現の有無を予測できるものにしようと努めたといえる。ただし、特に選択的リエゾンには、統語構造以外の他の要因も影響するため、リエゾンの実現が可能であることは予測できても、それがどのような確率で実現されるのかについては予測できない。

<sup>67</sup> Fougeron *et al* (2001)を参照。

### 3.5. 第三章のまとめ

20世紀および21世紀初頭のリエゾンに関する研究は以上で概観したように、規範的記述研究、記述的研究、社会言語学的研究、そして理論的研究（生成音韻論、生成統語論）がある。

まず、規範的記述研究においては、「リエゾンはどのように実現されるべきか」という姿勢がはっきりとみられる。これは、リエゾンの実現および非実現に関する基準をフランス語話者およびフランス語を学習する外国人に与えることに貢献した。ただし、これは規範に基づいて主観的に選択されたものであって、実際の言語使用とは異なることが問題であった。

次に、記述的研究は、実際に話されたフランス語を観察することで、「リエゾンはどのような場合に実現し、その実現にどのような要因が影響するのか」という問いに対する答えを提示しているといえる。特にリエゾンの実現に影響する言語内の要因として提示されたのは以下のようなものである。

- 語の長さがリエゾンの実現に与える影響
- 語の頻度がリエゾンの実現に与える影響
- リエゾン子音を持つ形態的特徴
- リズムグループがリエゾンの実現に与える影響

また、社会言語学的研究は、「リエゾンの実現および非実現はどのような社会言語学的特徴を反映するのか」という問いに答えることに寄与したといえる。つまり、言語内の要因のみではなく、話し手の特徴を分析することで、リエゾンの実現および非実現が実際には話者の社会的特徴を反映することを示したといえる。

- 話者の社会階層
- 話者の性別
- 話者の年齢
- 地域的な違い
- 発話状況とそれに応じたスタイル

以上が、リエゾンの実現に関与すると考えられた言語外的要因である。ただし、最近の大規模コーパスを用いた研究(Mallet, 2008)において、特に影響が顕著だと考えられているのは、特に朗読と会話という伝達手段の違いに近いものである。

理論的研究では、音韻論および形態論においてリエゾン子音の位置について多くの議論が行われた。また、新しい理論的アプローチが作り出される度に、このようなアプローチは常にリエゾンを説明するために適用された。もしくは、このようなアプローチの妥当性を示すために、リエゾンは格好の対象となったといえる。統語理論的なアプローチは統語構造の分析によって、義務的リエゾンおよび選択的リエゾンの区別を試みた。リエゾンの実現に関して統語構造は重要な要因である一方、それ以外の要因（言語内の要因および言

語外的要因)の相互作用が大変複雑であることから、統語的アプローチだけではリエゾン現象を捉えることは不可能であることも明白である。

リエゾンを対象とした言語学的研究は、複数の言語学分野において行われ、その数は大変豊富であるといえる<sup>68</sup>。そして、リエゾンを対象とした言語学的研究は常に言語学の発展と共にあった。特に、変形生成文法、社会言語学といった言語学理論、そして研究の方法論が生まれる度に、リエゾンへの説明に対して還元されたと言っても過言ではない。

リエゾンに対する研究が言語学の複数の分野で行われる大きな理由は、リエゾンという現象が形成された通時的変化の過程において、少しずつ複雑性を増していったということが考慮される。次章では、この通時的変化の過程について概観したい。そして、リエゾンの持つ複雑さというものが、16世紀から18世紀の文法書の説明において、どのように表現されていたのかを観察する。

---

<sup>68</sup> Encrevé (1988 : 87)によれば、生成音韻論にのみ限定するのであれば、20年という期間に、39人の学者によってリエゾンが扱われた論数は75本に及ぶ。

## 第四章 16世紀から18世紀の文法書におけるリエゾンに関する説明

本章では、16世紀から18世紀の文法書におけるリエゾンに関する説明を観察する。これは、まず本研究で使用するコーパスが17世紀末および18世紀初頭のものであるため、歴史的観点からの観察を行うことで、この時代に文法家たちによってリエゾンがどのような現象としてとらえられていたのかを確認するためである。本章では、まずフランス語においてリエゾンがどのように形成されたかについて説明する。また、フランス語の規範の整備がどのように進んだのかを説明した上で、語末子音の発音およびリエゾンに関する文法書の記述についてまとめる。

### 4.1. 語末子音脱落からリエゾン形成の概要

フランス語においてリエゾンという現象が形成された過程について Léon (1992 : 151) は以下のように説明している。

« La liaison est le résultat d'un état de langue ancienne où toutes les consonnes étaient prononcées. Vers le XI<sup>e</sup> ou le XII<sup>e</sup> siècle, les consonnes finales ont commencé à ne plus se prononcer. Ce n'est que dans la mesure où elles se trouvaient enchaînées à la voyelle suivante, à l'intérieur d'un groupe rythmique, qu'on les a conservées. »

Léon (1992 : 151)

「リエゾンは全ての子音が発音されていた古いフランス語の状態の結果である。11世紀もしくは12世紀にかけて、語末子音の発音の脱落が始まった。リズムグループ内において後続する母音に連結する限りにおいてのみ、そのような子音が保持されるのである。」

語末子音の脱落の進行は3つの段階に分かれる。第一段階は、語末子音が子音の前で脱落するものである。この時点では、語末子音は休止の前で未だに発音されており、語末子音は子音の前で削除 (truncation) される現象として扱うことが可能である。よって、以下のような発音が期待される。

- (a) Il est un petit garçon. [pəti garsõ]
- (b) Il est un petit enfant. [pəti tâfã]
- (c) Il est petit. [pə tit]

つまり、子音が脱落するのは例(a)のみである。これは句末に限らず、句中に休止が表れる

場合にも語末子音は休止の前で発音されると考えられる。この点については、Morin (2005 : 303)が例を挙げて指摘している。例えば、以下の韻文において *diroys* と *adieu* の間に短い休止が置かれた場合、リエゾン子音 [z]が発音されるのではなく ([ʒədɪrwe: /zadjø]), むしろ[s]が休止の前で発音される ([ʒədɪrwe:s /adjø])。

*Je diroys : adieu* ma maistresse ;  
Mais le cas viendrait mieulx à point  
*Si je disoys : adieu* jeunesse  
Car la barbe gruse me poingt.  
(Clément Marot, *Adieux à la ville de Lyon*)

第二段階においては、休止の前における語末子音の脱落が起きる<sup>69</sup>。

- (d) Il est un petit garçon. [pəti garsɔ̃]
- (e) Il est un petit enfant. [pəti tɑ̃fɑ̃]
- (f) Il est petit. [pəti]

例(f)のように、語末子音[t]は休止の前で発音されない。この休止の前における語末子音の脱落が始まると、語末子音字は母音の前でのみ発音される。リエゾンが成立したといえるのはこの段階である。この点について、Morin (2005b : 301-302)は以下のように説明している。

« La liaison s'est développée dans langue lorsque la forme tronquée d'un mot est devenue sa forme de base, utilisée en finale d'énoncé et, dans les usages métalinguistiques, comme forme isolée servant à le nommer. »

Morin (2005b : 301-302)

「言表の末尾において、子音が脱落した形が語の基本形となったときに、そして、その切り取られた形がその語を指すようになったメタ言語的言語使用において、リエゾンは形成された。」

休止が語末子音の脱落の有無に大きく関与していることは Clédât (1917 : 166-167)によって指摘されている。

---

<sup>69</sup> 休止の前における語末子音の脱落は、一様に生じたわけではない。Morin (2005b:302)は、20世紀半ばに Marais Vendéen 方言では、休止の前において破裂子音が保持されていたことを指摘している。



« La pause a été une cause de conservation de la consonne finale jusqu’au moment où le mot a pris sa forme définitive avec ou sans consonne finale. Depuis ce moment, elle a été au contraire une cause de chute de la consonne finale devant voyelle. Le mot s’étant fixé avec consonne finale amuïe, cette forme devient la forme normale du mot, même devant voyelle (...). »

Clédat (1917 : 166-167)

「語が語末子音を持つ、もしくは持たない形態のどちらかに定まるまで、休止は、語末子音を保存する理由であった。反対に、この（語末子音が脱落するか否かが決定的になる）時期から、休止は母音の前における語末子音脱落の原因となった。母音の前においても、語末子音とともに定着した語は、それが通常の（発音）形となった。」

よって、休止の前において語末子音が脱落した場合には、語末子音は母音の前でのみ現れるようになるため、これをリエゾン子音と呼ぶことができる。反対に、未だ語末子音が弱化されずに、発音される語もある。それは例えば、*brut*, *but*, *sec*, *las* などである。その一方で、子音の前でリエゾン子音が脱落しない場合もある。例えば、数詞 *vingt* (*vingt-six* [vɛ̃t sis])、接続詞 *quand* (*Quand Marie va à l’école* [kɑ̃t mari va a lekɔl])はその一例である<sup>70</sup> (Cf. Carton, 2000 : 39 ; Encrevé, 1988 : 276-278 ; Morin, 1990, 2005b : 301)。

**第三段階**は、母音の前において語末子音が安定的に発音されなくなる段階である。つまり、語末子音が発音されるコンテキストに制限が与えられるということである。例えば、17 世紀半ばには、リエゾンの実現への制限に関する規則を文法書に見ることができる。この最初の規則を提示したのは、Chiflet (1659 : 204-215)である。Chiflet は「制御される語 (*mot régi*)」という定義<sup>71</sup>を与えた。これは、リエゾンが常にどのようなコンテキストでも実現するわけではなく、リエゾンコンテキストにある 2 つの語のうちの MOT1 が MOT2 を制御する場合に、MOT1 の語末子音が発音されるというものである。つまり、このような言及というのは、リエゾンの実現が統語構造からの影響を受けるということを明確に示していると解釈できる。Chiflet 以降、リエゾンの実現について統語的な説明が加えられるようになる。

しかし、以上に挙げた 3 つの段階はフランスの異なる地域において同時に進行したとは決して言えないだろう。これらの段階はフランス語全体に起こった事実ではあるが、それぞれの地域で同様の速度で進行したわけではないことが Morin (2005b)によって主張されている。例えば、Marais Vendéen と呼ばれる地方<sup>72</sup>において話されていた方言では、第一段階

<sup>70</sup> ただし、例として挙げた語の語末子音はむしろ一度脱落が完了した後に、また子音の発音が復活したと考えるほうが妥当である。

<sup>71</sup> Chiflet が定義した「制御される語」については、後ほど詳細に扱う。

<sup>72</sup> フランス北西に位置するペイ・ド・ラ・ロワール地域圏にあるヴァンデ県で話されていた方言である。

から第二段階への進捗は非常にゆっくりしたものである。Svenson (1959)の調査によれば、20 世紀においてもこの地域では未だ第一段階の状態が保たれていた<sup>73</sup>。

## 4.2. 語末子音の発音およびリエゾンに関する記述

ここでは、まず 16 世紀から 18 世紀にかけてフランス語がどのように整備され、規範が形成されたのかについてその様子を概観する。また、16 世紀以前において語末子音字の発音の状況について簡略に提示する。そして、16 世紀における文法書から読み取ることができる語末子音字の発音の状況について説明する。17 世紀に Chiflet (1659)が提示したリエゾンの規則、そしてそれに続く Hindret (1687)のリエゾンへの説明などを取り上げる。終わりに、特に 17 世紀から 18 世紀の文法書に見られるリエゾンのコンテキストに関する注意書きにはどのようなタイプがあるのかを例を挙げて説明する。

### 4.2.1. 16 世紀から 18 世紀にかけてのフランス語の規範化の進行

16 世紀から 18 世紀にかけて、「良きフランス語 (*le bon français*)」、「良き慣用」といった規範の提示、そしてこの規範を正当化する説明付けが成された。Lodge (1997)は良きフランス語の定義は時代によって変化することを前提に、この発展段階を、(1) 1500 年～1660 年、(2) 1660 年～1789 年、(3) 1789 年以降、の 3 つに分けている。特に(1)と(2)については以下のような特徴を挙げている。

(1) Première phase (1500-1660) : le « bon français » est celui qui est parlé par les gens du « meilleur monde ».

Lodge (1997 :221)

「第一期 (1500-1660) : 良きフランス語は最良の階層に属する人々によって話されるフランス語である。」

(2) Seconde phase (1660-1789) : Le « bon français » est la langue de la raison et de la clarté.

Lodge (1997 :236)

「第二期 (1660-1789) : 良きフランス語は理性と明晰さを持つ言葉である。」

この Lodge (1997)が定義する第一期には、まず社会的にフランス語が国家言語として確立する契機となる象徴的な出来事がある。これは 1539 年に、フランソワ 1 世が署名したヴィレル＝コトレの勅令（司法行政の改革を目指した一連の勅令）が布告されたことである。この勅令は行政的な公文書におけるラテン語の使用を廃止することが目的であった<sup>74</sup>。さらに、

<sup>73</sup> Morin (2005b : 302)を参照。

<sup>74</sup> また、この勅令による排除の対象としては、ラテン語のみならず地域言語も該当する。

この勅令によって、行政機関で使用される言語はフランス語に限定されることになる。また、1530年に設立されたコレージュ・ド・フランス (Collège de France)では、フランス語による講義も許可されていた。この頃から、フランス語に関する教科書、文法書、辞書などの出版も少しずつ増加していく。ただし、16世紀において読み書きを学ぶというのは、未だラテン語の読み書きを意味していたということも念頭に置いておく必要がある(Lodge, 1997: 176)。

16世紀において「フランス語」という唯一の言語が存在したわけではなく、パリおよびその周辺で話されていた方言が標準語として整備されていく過程が、フランス語の規範化である。また、Lodge (1997: 230-233)に従えば、特に17世紀に起こった規範化が意味するものは、フランス語のヴァリエーションの拒絶である。つまり、成文化の対象となったフランス語は、上層階級が話すフランス語であり、下層階級 (いわゆる *peuple*)が話すものとは差別化が成された (Cf. Lodge, 1977: 233)。

この規範を成文化する上で、規範的記述の対象となるフランス語話者はどのような特徴を持つのだろうか。この理想的な話者は宮廷に住まう人々であることが、1647年に Claude Fabre de Vaugelas による *Remarques sur la langue françoise* (『フランス語に関する覚え書き』) において言及されている。

« Voicy donc comme on définit le bon Usage [...] *C'est la façon de parler de la plus saine partie de la Cour, conformément à la façon d'écrire de la plus saine partie des Auteurs du temps.* Quand je dis la Cour, j'y comprends les femmes comme les hommes, et plusieurs personnes de la ville où le Prince reside, qui par la communication qu'elles ont avec les gens de la Cour participent à sa politesse.

(Vaugelas, 1647: Préface, II, 2-3)

「良き慣用の定義を以下に挙げる。時の作家の最も健全な人々の書き方に従った、宮廷の最も健全な人々の話し方である。私が宮廷という言葉を用いる場合には、男性と同じく女性も、そして儀礼に参加する宮廷の人々と交流を持つ、王子が住む街の人々も含む。」

ところで、Vaugelas が書いた『覚え書き』は、一つのジャンルとして確立し、その後これに類似したタイプの文法書の出版が相次ぐ。このジャンルとしての『覚え書き』の特徴について Ayres-Bennett & Seijido (2011: 42)は以下のように説明している。

---

リカード (1995: 121)は、「すべての訴訟、証書、判決等は他のものではなくフランスの母なる言語で *en langage maternel françois et non autrement* で書かれるべきことを命ずることによって、他の地域言語を排除した」と述べている。

« Les remarques ne traitent donc pas de questions élémentaires de la grammaire mais de points particuliers qui posaient problème à ceux qui maîtrisaient déjà bien la langue française. [...] Tous les domaines de la langue peuvent être discutés : prononciation, orthographe, morphologie, syntaxe, style et lexique. »

Ayres-Bennett & Sejjido (2011 : 42-43)

「覚え書きは文法の基本的な疑問を扱うのではなく、むしろフランス語を既に習得しているものにとって問題となる特定の項目について扱うものである。言語の全ての分野について議論がなされる。つまり、発音、綴り字、形態、統語、スタイルそして語彙である。」

よって、覚え書きというジャンルにおいては、全ての文法項目について丁寧に説明が記されているというのではなく、正しいフランス語の習得の最終段階、つまり完成 (perfection) という観点が重要であるということである。さらに、17 世紀半ばにこの覚え書きというジャンルが確立した理由について、Ayres-Bennett & Sejjido (2011 : 17)は以下のように説明している。

« L'émergence du genre des remarques en France au milieu du XVII<sup>e</sup> siècle semble donc être intimement liée au contexte socio-culturel contemporain. L'essor d'un gouvernement central, le prestige de la Cour et la mobilité sociale des nouveaux riches encourageaient un nouvel intérêt pour la perfection linguistique comme moyen de s'intégrer dans la bonne société ; une fois cette perfection acquise, elle servait également à s'y distinguer.

Ayres-Bennett & Sejjido (2011 : 17)

「17 世紀フランスにおける覚え書きというジャンルの出現は現代の社会的コンテクストに密接に結びついている。中央集権的統治の飛躍、宮廷の威厳そしてブルジョワジーといった社会的流動性は、上流階級へ同化する方法としての言語の完成度に対する新しい関心を生んだ。そして、この完璧さが一度習得されれば、それは同様に他者との区別に役立った。」

規範の完全なる習得は、理想的な話者を模倣することであり、この習得は社会的にも良しとされたということである。

フランス語の規範化における第二期 (1660-1789) には、良きフランス語は「理性と明晰さ」が結び付けられたわけであるが、それはどういう経緯から起こったのだろうか。18 世紀を通して、フランス語の規範の成文化は詳細な部分にまで達し、標準フランス語のイデオロギーが確立された(Lodge, 1997 : 236)。Lodge (1997 : 236)によれば、このイデオロギーは以下の3つの要素に基づくものである。

- (a) La croyance qu'il n'existe qu'une seule variété de langue légitime et que toutes les variantes non standard sont par définition incorrectes ;
- (b) L'idée qu'il convient d'imiter un modèle idéal en privilégiant la langue écrite par rapport aux errements de la parole ;
- (c) La légitimation du standard sur la base de sa prétendue supériorité sur toute autre variété (en clarté, en logique, en précision, etc.)

(Lodge, 1997 : 236)

- (a) 正当な言語はただ一つしか存在せず、標準的ではない全ての変種は当然間違っただけのものであるという信仰、
- (b) 話し言葉の悪習に対して書き言葉を優先することによる理想的なモデルを模倣するのがふさわしいとする考え、
- (c) 他の変種に対して見せかけの優位性を基にした標準語の正当化（明晰性、論理性、精度性において）

17 世紀におけるフランス語の文法書として Arnauld & Lancelot (1660)の著作 *la Grammaire générale et raisonnée* (ポールロワイヤル文法)が挙げられる。この本では、言語使用の多様性の基底にある言語のシステムへの関心が示されている(Lodge, 1997 : 241)。ルイ 14 世の死後は、文法家たちが成文化の対象として選択した良きフランス語は、宮廷のフランス語ではなく、むしろ権威ある作家の書き言葉であり、18 世紀後半には書き言葉がフランス語の真髄と見なされるようになったようである。Lodge (1997 : 244)は Rivarol の著作 *Discours sur l'universalité de la langue française* (1784)の以下に挙げる興味深い一節を引用している。

« Ce qui distingue notre langue des langues anciennes et modernes, c'est l'ordre et la construction de la phrase. Cet ordre doit toujours être direct et nécessairement clair. Le Français nomme d'abord le *sujet* du discours, ensuite le *verbe* qui est action, et enfin l'*objet* de cette action : voilà la logique naturelle à tous les hommes [...] la syntaxe française est incorruptible. C'est de là que résulte cette admirable clarté, base éternelle de notre langue. Ce qui n'est pas clair n'est pas français : ce qui n'est pas clair est encore anglais, italien, grec ou latin. »

(Rivarol, 1784 : 112-113)

「昔の言語および現代の言語から私たちの言語を分かつのは、語順と文の構造である。この語順は、常に直接的で必ず明白でなければならない。フランス語はまず話法における主語を、次にその行為である動詞を、そして終わりにその行為の対象を置く。これが全ての人間において自然論理である。フランス語の統辞法は不朽である。この驚くべき明晰さと我々の言語

の永続する基礎が生じるのは、このためである。明晰ではないものはフランス語ではなく、明晰でないものは英語、イタリア語、ギリシャ語、もしくはラテン語である。」

Lodge (1997 : 240-241)は、言語は時代の流れと共に変化するものであるが、その時代に権力者が話す言葉を永久に保存するためには、その言語使用の中に理性が敷かれなければならないという解説を与えている。

このように、フランス語は16世紀に独立した言語としての認識化が果たされ、17世紀および18世紀を通して規範の確立に対する多大な努力が払われ、そして規範に対する厚い信仰、その規範を理性的に説明するということが目標となったといえる。次節では、語末子音の脱落およびリエゾンの成立、規則化が文法書においてどのように記述されてきたのかについて考察を進める。

#### 4.2.2. 16世紀以前における語末子音の発音の手がかり

中世において語末子音がどのように発音されていたのかという問いに対して、答えを可能にするのはその時代に残された文学作品である。特に、この時代の韻文における句末の押韻を観察することによって、語末の子音の発音有無を観察することができる。Fouché (1952 : 663)によれば、まず初めにラテン語の *t* から派生している [θ] が11世紀末に脱落し、12世紀の後半<sup>75</sup>以降に、俗語においてほとんどの語末子音が脱落した。Fouché (1952 : 663) は語末子音字の脱落に関して次のような例を挙げている。

<b>-t</b>	<i>estrei (estreit) : mei</i> <i>doi (doit) : moi</i>
<b>-k</b>	<i>bu (buc) : feru</i>
<b>-s</b>	<i>troi (trois) : foi</i>
<b>-l</b>	<i>naturé (naturel)</i> <i>avri (avril)</i>
<b>-r</b>	<i>verser : a escriés</i>
<b>-n, -m</b>	<i>Dinam &gt; Dinan</i> <i>Brium &gt; Brion</i>

表 4-1 : 語末子音字の脱落の例 (Fouché, 1952 : 663)

13世紀には、モンペリエの写本において、聖歌、そして牧歌のような大衆的な詩句の中では *esté : chanter*、*repentir : jolis*、*avril : tenir*、*tans : chant*、*mamelete : amouretes* のような脚

<sup>75</sup> 一方で、12世紀および13世紀には既にこの変化が完了したものとして扱う研究もある。(Bourciez, 1950 ; Wartburg, 1946, 123, 154)

韻が既に用いられている (Cf. Bettens, 2007 : 42)。Bettens (2007 : 42)はこのような押韻の例から、13 世紀の自然発話において、語末の子音は既にさほど重要なものではなかったと主張する。それに対して、宮廷で綴られる詩句においては、このような脚韻の不規則さというのはかなり例外的であったようである。つまり、知識人のフランス語において、俗語と同様に語末子音が脱落していたとは考えにくい。なぜなら、16 世紀の文法家によって語末子音を休止の前で発音するべきであるということは何度も主張されている。また、休止の前における語末子音の脱落が知識人のフランス語においても完了していた場合に、語末子音の復元という退行的な変化は不可能であることを Fouché (1952 : 665)が指摘している。

#### 4.2.3. 16 世紀文法書における語末子音の説明

ここでは、16 世紀のフランス語に関する証言を引用しながら、語末子音字がどのように発音されていたかについて考察していく。まず、16 世紀において、語末子音は、後続する語が子音で始まる場合には発音されず、母音で始まる場合および休止の前においては発音される傾向が未だ残っていた。この特徴は、複数の文法家によって指摘されている。ただし、16 世紀後半には、休止の前における語末子音の発音を義務付けないという証言を見つけることもできる。

イギリス人の文法家 Palsgrave (1530 : 40)は、16 世紀のフランス語が外国人にとってどのように聞こえるかについて、以下のように説明している。

« If a frenche worde ende in a consonant or consonantes, the next worde folowyng begynnyng also with a consonant or consonantes, they shalbe sounded or left unsounded acordyng to the rules here afore rehersed : as welle as though they came to gether in on worde by hym selfe, that is to saye *m*, *n* and *r*, shall never lese their sounde. [...] And here upon it ryseth why the frenche tong semeth unto other nations so short and sodayne in pronounsyng; for after they have taken away the consonants, as wel from the particular words by them selfe as from theyr last endes by reason of the words folowyng they joyne the vowels of the words that go before to the consonants of the words folowyng in redyng and spekyng without any pausing, save only by kepyng of the accent: as though five or syx words or somtyme mo made but one worde [...] »

Palsgrave (1530 : 40)

「もし、フランス語のある語が一つもしくは複数の子音で終わり、後続する語が一つの子音もしくは複数の子音で始まる場合、それらは発音されるかもしれないし、発音されないかもしれない。それは、一つの語にいくつかの子音が重なる時、例えば *m*、*n*、*r* は絶対にその音を失うことはない。[...] このようなことが原因で、フランス語は外国人にとって、速く発音されるよう

に聞こえる。つまり、語末の子音は子音の前で削除され、母音の前では後続する語の母音に融合される。これによって、5 個ないし 6 個、もしくはそれ以上の語の集合が、たった一つの語のように感じられる」

この引用の興味深いのは、英語話者である Palsgrave にとって、フランス語はやはり複数の語が、休止が挿入されずに連続すると、1 つの語に聞こえてしまうということである。

Palsgrave 以前に既に Tory (1529 : f° lvii r°)<sup>76</sup>は著書 *Champ Fleury* において、フランス語の語末子音の発音に関して興味深い証言を与えている。以下に、「パリのご婦人(Le Dames de Paris)」の発音についての Tory の観察を引用する。

« Les Dames de Paris pour la plusgrande partie obseruent bien ceste figure poetique [l’apostrophe], en laissant le S, finale de beaucoup de dictions : quant en lieu de dire, Nous auons disne en vng Iardin / & y auons menge des Prunes blanches et noires, des Amendes douces & ameres, des Figes molles, des Pomes, des Poires & des Gruselles. Elles disent & pronuncent. Nous auon disne en vng Iardin : & y auon menge des prune blanche & noire, des amende douce & amere, des figue molle, des pome, des poyre, & des gruselle. Ce vice leur seroit excusable, se nestoit quil vient de femme a homme & quil se y treue entier abus de parfaitement pronuncer en parlant. »

Tory (1529 : f° lvii r°)

「パリのご婦人の多くは、この詩の形を良しとするだろう。多くの文の終わりに *s* を忘れることである。例えば、 « Nous auons disne en vng Iardin / & y auons menge des Prunes blanches et noires, des Amendes douces & ameres, des Figes molles, des Pomes, des Poires & des Gruselles. » という代わりに、彼女たちは以下のように発音する。 « Nous auon disne en vng Iardin : & y auon menge des prune blanche & noire, des amende douce & amere, des figue molle, des pome, des poyre, & des gruselle. » この悪徳は無理もないだろう。これは女性から男性へと移るものではなく、話しながら完璧な発音をするという全くの乱用だろう。」

この引用から以下のことが明白である。*blanches*、*douces* および *poyses* の語末子音字 *-s* は、母音で始まる語 & (*et*)の前で発音されないこと、また *noires*、*ameres*、*molles*、*pomes*、*gruselles* の語末子音字 *-s* が休止の前で発音されないことに対して Tory (1529)は批判的である。

Henri Estienne (1582 : 94-95)が著書 *Hypomeneses* の中で説明した休止の前における語末子音字の発音は、既述の Tory (1529)の説明に類似したものである。Henri Estienne (1582)はまず、

---

<sup>76</sup> Bettens (2007 : 42-43)によって引用されている。



以下のような例文を挙げる。

« Vous me dites toufiours que vostre pays est plus grand de beaucoup & plus abundant que le nostre, & que maintenât vous pourriez bien y vivre à meilleur marché que nous ne viuons depuis trois moins en ceste ville: mais tous ceux qui en viennent, parlent bien un autre langage : ne vous desplaiſe. »

Henri Estienne (1582 : 94-95)

そして、その発音について「気取らない正しい発音では、無音であるべき綴り字を読まずに、次のように発音せよ (« Tu la prononceras de la manière suivante, sans faire entendre les lettres qui doivent rester muettes dans une prononciation correcte et sans affectation »)」<sup>77</sup>と Henri Estienne (1582 : 94-95)は支持している。以下の表に、上記で引用した綴り字と Henri Estienne が発音されない語末子音字を消去して書いた文を引用したものを挙げる。

綴り字<sup>78</sup> : « Vous me dites toufiours que vostre pays est plus grand de beaucoup & plus abundant que le nostre, & que maintenât vous pourriez bien y vivre à meilleur marché que nous ne viuons depuis trois mois en ceste ville: mais tous ceux qui en viennent, parlent bien un autre langage : ne vous desplaiſe. »

発音 : « Vou me dite touiours que vostre pays est plu gran de beaucoup & plus abandon que le notre, e que maintenant vou pourrie bien y viure à meilleur marché que nou ne viuon depui troi mois en cete ville: mai tou ceux qui en viennet, parle bien vn autre langage: ne vou deplaise. »

まず、語末子音字が消去されている語は、vous, dites, plus, grand, abundant, maintenât, nous, viuons, depuis, trois, mais, tous, viennent, parlent である。一方、toufiours, pays, est, beaucoup, plus, meilleur, ceux, bien の語末子音字は消去されていないわけではない。まず、これらの語の中で、母音が後続するものは pays, beaucoup, plus, bien であり、これらの語の語末子音字は後続する語の語頭母音とともにリエゾンが実現することが考えられる。次に、子音が後続するものは、toufiours, est, meilleur, ceux である。meilleur の語末子音字の r は安定的に発音される子音であるとも考えられる。ただし、toufiours に関しては、Henri Estienne (1582 : 94-95)<sup>79</sup>は以下のような説明を加えている。

<sup>77</sup> このテキストは実際にはラテン語で書かれている。本論文では Thurot (1883 : 2 : 12-13)によるフランス語訳を引用する。

<sup>78</sup> 四角で囲った語は、語末子音字の脱落が観察されるものであり、下線が引かれた語は、語末子音字が保持されているものである。

<sup>79</sup> ここでも Thurot (1883 : 2 : 12-13)によるフランス語訳を引用する。

« Remarque que, dans le premier *plu*, l'*s* est muette, parce qu'elle est suivie d'une consonne. Remarque aussi que dans *toufiours*, j'ai laissé l'*s*, quoique le mot soit suivi d'une consonne : c'est qu'il est précédé immédiatement de quelques autres mots où l'*s* est muette, et qui se prononcent si vite l'un après l'autre, qu'ils ne semblent faire qu'un mot ; mais après *toujours*, celui qui parle fait une petite pause. C'est la cause et même la seule cause pour laquelle parfois nous n'ôtons pas à cette lettre, ou à une autre, le son qui lui est propre : surtout lorsque la pause est un peu plus longue qu'ici. »

Henri Estienne (1582 : 94-95)

「子音が後続するために、最初の *plu* において、*s* は発音されない。そして、*toufiours* についても、子音が後続しているにもかかわらず、私が *s* を残していることに気付くだろう。つまり、この語に先行する *s* が無音である他の語がいくつかあり、それらの語は一つ一つ速やかに発音されている。たった一つの語であるかのようにしか見えないのである。しかし、*toufiours* の後は、話者は短いポーズを置くだろう。つまり、この綴り字、もしくは他の綴り字を私たちがしばしば発音しないたった一つの理由というのは、休止がこれよりも長い場合である。」

よって、16 世紀において語末子音字は休止の前では脱落せずに、発音されるという傾向が明らかである。しかし、Tory (1529 : f° lvii r°) が批判した「パリのご婦人方」が複数を示す語末の *-s* を発音しない傾向が暗示することは、当時の社会階層において上流階級もしくは教養階級に属さない話者にとって語末子音字の発音は全く義務的ではないということである。そして、良き慣用を守る立場にある人々にとっては、この語末子音の発音は少なくとも韻文を読む際には義務的であったことがうかがえる。

#### 4.2.4. 17 世紀の文法家による語末子音の脱落に関する記述

17 世紀初期、休止の前における語末子音の発音を主張する文法家は存在するが、その発音は義務的ではないようにも捉えられる。そのような文法家の例として、Garnier (1607)<sup>80</sup> が挙げられるだろう。Garnier (1607 : 10) は「それを望むのであれば、句の終わりにおいて語末の子音を発音することは可能である。(« In fine periodi pronunciare licet, si velimus. »)」と述べており、休止の前における語末子音の発音は選択的と解釈できるだろう。

---

<sup>80</sup> Thurot (1883 : 2 : 15) を参照。Garnier, Ph. (1607). *Procepta gallici sermonis ad plenioram perfectioremque eius linguae cognitionem necessaria tum breuissima, tum facillima*. Ertia edition denuo ab ipso autore recognita, ac infinitis in locis aucta.

一方、Duval (1604 : 47)が示した例からは語末子音は休止の前において発音されない。例えば、Duval は以下のように述べている。

« Remarqués que ceste consonante est de celles qui à la fin des mots semblent se perdre, lorsqu'une autre consonante suit. Exemple plusieurs bons Roys nous laissent des biens suffisamment, Comme s'il estoit escrit *Plusieur bon Roy nou laise de bien sufisamen.* »

Duval (1604 : 47)

「次のことに注意しなさい。他の子音が後続するとき、いくつかの語の末尾にある子音は失われる。例えば、*plusieurs bons Roys nous laissent des biens suffisamment* という文は、*Plusieur bon Roy nou laise de bien sufisamen* と書くように発音されるだろう。」

この引用から明白な点は、まず語末子音字は子音の前で発音されないということである。「*suffisamment*」が休止の前で「*sufisamen*」と書かれていることから、休止の前でも発音されないことが読み取れる。

休止の前における語末子音字は不要であるという証言が時代を追うごとに増加する一方で、変化に対する躊躇を感じさせる説明も見られる。例えば、Maupas (1607 : 4)は語末子音に関して、以下のように指摘している。

« Quelques consonnes à la fin des mots, ne se prononcent que peu ou point, assavoir, b, d, g, m, n, s, t, x, z. Et ne sont pourtant du tout oisives, car elles servent à prolonger la syllabe. Quelques autres s'y doivent prononcer pour le mieux, comme c, l, f, q, p, r. Toutesfois il est bien seant d'exprimer assez clairement, toute consonne finissant la periode, [...] si le mot suivant commence par voyelle ou h muëtte, la consonne finale se doit lier & conjoindre avec la voyelle commençant le mot suivant, comme si elle luy appartenoit [...] »

Maupas (1607 : 4)

「語末に位置するいくつかの子音、すなわち b, d, g, m, n, s, t, x, z は少しもしくは全く発音されない。しかしながら、全く無為であるわけではなく、これらの子音は音節を長くする。c, l, f, q, p, r といった他の子音は常に発音されなければならない。しかし、文の終わりにおいてははっきりと子音を発音することは重要である。[...]もし、後続する語が母音もしくは無声の h で始まるのであれば、語末子音は後続する語の初めの母音に繋がる、もしくは結合されなければならない。[...]」

17世紀後半にさしかかると、Dobert (1650 : 411)にいたっては、韻文において語末子音字を視覚的にも一致させないという、この時代にはかなり大胆な意見を提示している。

« Le B ne termine pas volontiers les rimes, car bien k'il soet à la fin de ses deux môs *plomb, coulomb*, il n'y et point prononcé [...] »

Dobert (1650 : 411)

「韻文は普段、Bで終わることはない。なぜなら *plomb, coulomb* という語が文末にあっても、発音されることはないからである。」

そして、以下のような韻文の例を挙げている。

*Il m'a baill & du sablon,*

*Il luy ey randu du **plom**.*

Ou bien,

*Le fus querir an son **nom***

*Deus ou trois livres de **plom**.*

Dobert (1650 : 411)

つまり、語末子音字 *b* は発音されない上に、それ以前には韻を踏む2つの語のペアとして使用されなかった *sablon : plomb* および *nom : plomb* という脚韻が Dobert (1650 : 411)にとって許せるものであったということである。

#### 4.2.5. リエゾンの実現に関する規則の出現

17世紀半ば頃には、母音の前における語末子音の発音の有無の決定について指標が与えられるようになる。この指標について初めて規則性を記したのが Chiflet (1659)である。まず、Chiflet (1659)は句末において語末子音字を発音しないことを指摘している。

« La premiere regle generale. A la fin des periodes : ou quand on finit le cours des paroles, pour reprendre son haleine : les consones qui finissent le dernier mot, ne sont jamais prononcées. Par exemple. *Ne donnez pas tout*. Prononcez *tou*, sans faire sonner le *t*. »

Chiflet (1659 : 200)

「第一の一般的規則は以下のようなものである。一定の間隔の終わりに、もしくは呼吸をするために話をやめるとき、語末の子音は絶対に発音されない。例えば、*Ne donnez pas tout*. という文において、*t*の音を発音しないで、*tou*と発音しなさい。」

そして、リエゾンの実現が統語的な要因が影響するという « *mot régi* (制御される語) » という概念を与えている。これがリエゾンの実現における統語的要因の影響が考慮された、最初の規則である。

« La voicy : les consonnes finales, principalement l'*n*, le *t*, & le *d* prononcé comme vn *t* ; ont coutume de se faire entendre & de sonner clairement deuant les voyelles des mots suiuaus, quand ces mots suiuaus sont regis par le precedent, qui finit en consonne : autrement non. Ainsi le nom adjectif deuant son substantif ; la preposition deuant ses cas ; le verbe deuant le cas qui en est régi ; l'aduerbe *on*, ou *l'on*, deuant son verbe impersonnel, font sonner leurs consonnes finales : comme en ces exemples ; *Petit-t'enfant. Bon-n'homme. Grand-t'orateur. Deuant-t'hier. Il alloit-t'à la ville. Allant-t'à la ville. On-n'aime. L'on-n'a aimé &c.* Autrement vous ne prononcerez pas ces consonnes, disant ; *Peti & Joli. Bon & beau. Gran & gros. Devan & Derriere. Il alloi & venoit. Allan & venant. Veut-on aller là, &c.* »

Chiflet (1659 : 204-205)

「後続する語が先行する語によって支配される場合に、語末子音 *n*, *t*, そして *t* のように発音される *d* は基本的に、後続する語の母音の前ではっきりと発音される。さもなければ、発音されることはない。つまり、名詞の前の形容詞、格の前の前置詞、支配される格の前の動詞、非人称動詞の前の副詞 *on* もしくは *l'on* は、以下の例のように語末の子音が発音される。*Petit-t'enfant. Bon-n'homme. Grand-t'orateur. Deuant-t'hier. Il alloit-t'à la ville. Allant-t'à la ville. On-n'aime. L'on-n'a aimé &c.* それ以外は、これらの子音を発音しない。例えば以下のような場合である。*Peti & Joli. Bon & beau. Gran & gros. Devan & Derriere. Il alloi & venoit. Allan & venant. Veut-on aller là, &c.* 」

Chiflet が挙げた複数の例文と語末子音字の発音有無に関する説明から推測するところでは、リエゾンは以下のような統語的コンテキストで実現されたと考えられる。

名詞句	
a) 冠詞+名詞、冠詞+形容詞	<i>Mon ami</i> (p. 206), <i>Ton aimable frere</i> (p. 206), <i>Un enfant</i> (p. 206), <i>Un autre jour</i> (p. 206), <i>Un excellent peintr</i> (p. 206)
b) 形容詞+名詞	<i>Petit enfant</i> (p. 205), <i>Bon homme</i> (p. 205),

	<i>Grand orateur</i> (p. 205), <i>grand homme</i> (p.205), <i>un sot homme</i> (p.209), <i>un saint Apostre</i> (p.209),
c) 数詞+名詞	<i>Vingt hommes</i> (p.210), <i>dix ans</i> (p.210), <i>six hommes</i> (p.210)
d) 名詞+形容詞 (複数形)	<i>les maux insupportables</i> (p.210)
不変化語	
e) 前置詞+	<i>Devant hier</i> (p. 205), <i>En un moment</i> (p.207), <i>En allant</i> (p.207), <i>Quant à nous</i> (p. 209)
f) 副詞+	<i>Bien avant</i> (p.207), <i>J'ai bien entendu</i> (p.207), <i>J'ai beaucoup attendu</i> (p.208), <i>J'ai trop attendu</i> (p.208)
g) 接続詞 <i>quand</i>	<i>Quand il viendra</i> (p. 205)
動詞句	
h) 動詞+	<i>Il alloit à la ville</i> (p. 205), <i>Il tend à la fin</i> (p. 205), <i>Il tend un piège</i> (p. 205), <i>Il prend un oiseau</i> (p. 205), <i>Faites encore le mesme</i> (p.208), <i>Il met en danger</i> (p. 209), <i>Ils vient à moy</i> (p. 209)
i) 不定詞+	<i>Louer un excellent homme</i> (p.204)
j) ジェロンディフ+	<i>Allant à la ville</i> (p. 205)
人称代名詞	
k) 人称代名詞+動詞	<i>On aime</i> (p. 205), <i>L'on a aimé</i> (p. 205), <i>Il y en a beaucoup</i> (p.207)
慣用句	
l) 慣用句	<i>Pied à terre</i> (p.205)

表 4-2 : Chiflet (1659)のリエゾンコンテクスト

以上のコンテキストではリエゾンが実現するという例を Chiflet が実際に挙げている<sup>81</sup>。ただし、このようなコンテキストにおいて常にリエゾンが実現するという断定的な意見は観察されない。

次に、Chiflet の説明からは曖昧なリエゾンコンテキストとして「+ 接続詞 *et*」が挙げられる。接続詞 *et* とその先行語におけるリエゾンの可能性について、Chiflet (1659)の提言は幾分か曖昧なものである。例えば、Chiflet (1659 : 205)は「*Peti & Joli. Bon & beau. Gran & gros. Devan & Derriere. Il alloi & venoit. Allan & venant. Veut-on aller là, &c.*」のようなコンテキストでは子音を発音しないと指示しているのに対して、*sang* と *bourg* について «*sang & la vie*» および «*le bourg & la ville*»については、接続詞 *et* の前で *sanc* および *bourc* と発音するように指示している。そして、Chiflet が挙げた例文を観察すると、むしろ語末子音字の種類に依存しているように思われる。

語末子音字の発音なし		語末子音字の発音あり	
<i>t</i>	<i>petit &amp; joli</i> <i>un sot &amp; une sotte</i> (p. 209), <i>un saint &amp; une sainte</i> (p. 209), <i>le droit &amp; le tortue</i> (p. 209), <i>le droit &amp; la raison</i> (p. 209), <i>vaillamment &amp; prudemment</i> (p. 209), <i>le tout &amp; ses parties</i> (p. 209)	<i>c, g</i>	« <i>sanc &amp; la vie</i> » ( <i>sang &amp; la vie</i> ) (p. 205), « <i>le bourc &amp; la ville</i> » ( <i>le bourg &amp; la ville</i> ) (p. 205)
<i>d</i>	<i>grand &amp; gros</i> (p. 205)	<i>s</i>	<i>les anges &amp; les hommes</i> (p. 208)
<i>n</i>	<i>bon &amp; beau</i> (p. 206), <i>fin &amp; rusé</i> (p. 206), <i>le mien &amp; le tien</i> (p. 206) <i>un &amp; deux</i> (p. 207)		
<i>m</i>	<i>la faim &amp; la soif</i>		

表 4-3 : Chiflet (1659)による接続詞 *et* のリエゾンの例

つまり、語末子音字が *-t, -d, -n, -m* は接続詞 *et* の前では発音されないが、語末子音字 *-c, -g, -s* は発音されるということになる。「+ 接続詞 *et*」のようなコンテキストでは、リエゾンの実現有無は語末子音字に依存することも考えられるが、Chiflet の証言のみでは断定できない。

また、「名詞+動詞」コンテキストにおけるリエゾンの有無は興味深い。例えば、以下のような例ではリエゾンが実現されるように提示されている。

<sup>81</sup> これらの例は統語的コンテキスト毎に整理されて提示されているわけではなく、筆者が整理したものである。

- *Tout le camp est alarme* (p.207)
- *Les rangs estoit doubles* (p. 208)

ただし、以下の例では、語末子音字-tを発音しないように指示している。

- *L'estat / est en trouble* (p. 209)

このコンテキストの例は大変少なく、リエゾンが選択的であるということを察することができるが、その理由が語末子音字の種類によるのか否かは断定することができない。

次に、Chiflet (1659)が語末子音字は発音しないと指摘しているコンテキストには以下のようなものがある。

m) 倒置文および命令文における人称代名詞とその後続語	<i>Parle-t-il / à vous ?</i>
n) 語末子音字に <i>n</i> を持つ特定の語 <sup>82</sup> ( <i>Platon, certain, vilain, raison, chacun</i> )	<i>Platon / a dit</i> (p. 206), <i>Un certain / homme</i> (p. 206), <i>Un vilain / yurogne</i> (p. 206), <i>Raison / evidente</i> (p. 206), <i>Chacun / a sçeu</i> (p. 206)
o) <i>assez</i> <sup>83</sup>	<i>J'ay assez / attendu</i> (p.211)
p) 語末子音字-sを持つ単数名詞	<i>un sousris amiable</i> (p. 209)

表 4-4 : Chiflet (1659)によるリエゾンが実現されないコンテキスト

また、Chiflet (1659 : 207)はリエゾンの間違いについても指摘している。それは以下のようなものである。

« Ne mettez jamais un z, après *on* deuant les verbes commencez par des voyelles : comme, *On z'a dit, On z'asseur.* Dites, *on a dit, on assure.* »

<sup>82</sup> ただし、Chiflet (1659 : 206)は形容詞 *fin, bon, aucun, commun, divin* および所有形容詞 *mien, tien, sien* は母音で始まる名詞の前では発音すべきであると考えている。

<sup>83</sup> Chiflet (1659 : 211)は副詞 *assez* の発音について、「多くの人が母音の前で *z* を発音しない。例えば、*j'ay assez attendu* を彼らは *j'ay assé attendu* と発音する(« En ce mot *Assez*, plusieurs ne prononcent non plus le *z* deuant les voyelles : comme *j'ay assez attendu* : ils prononcent, *j'ay assé attendu.* »)」と述べている。



Chiflet (1659 : 207)

「*on* の後、母音で始まる動詞の前に、*z* を置くべきではない。つまり、*On z'a dit, On z'asseur.*ではなく、*on a dit, on assure.*と言いなさい。」

Thurot (1883 : 2 : 271)によれば、Erasme、Tory、Palsgrave、Sylviusら16世紀の文法家が、*r*と*z*の交替についての記述を残している。興味深いのは、Chiflet (1659 : 207)の証言が16世紀に指摘されていたような単なる[r]と[z]の交替(*Marie~Masie, cousin~courin*)ではないことである。この証言から、子音[z]が複数性を示す形態的マーカーとしての機能を帯び始めていた証拠とも考えられる。

Chifletの後に、Hindret (1687 : 201)も、このChifletの定義した「*mot régi*」と同様に、母音の前における語末子音字の発音について以下のような説明を与えている。

« Les lettres finales des mots qui en regissent d'autres suivans, commencez par des voyelles ou par des *h*, muettes, se prononcent, c'est à dire qu'on fait sonner la dernière consone de l'article mis devant son substantif, comme *les Anges*, Celle de l'adjectif, du pronom, ou d'un nom de nombre, mis devant un substantif, comme, *petit animal, mon enfant, unarbre, deux, aunes, trois exemples* ; Celle du pronom personnel devant son verbe, comme *nous avons* ; Celle du verbe & de la prononciation devant leurs cas, comme, *passer une riviere, finit une affaire, sans argent ; en Angleterre, sous ombre, &c.* »

Hindret (1687 : 201)

「母音もしくは無声の*h*で始まる後続する語を支配する語の語末子音は発音される。つまり、*les Anges*のように名詞の前に置かれた冠詞の語末子音は発音される。*petit animal, mon enfant, unarbre, deux, aunes, trois exemples*のように、名詞の前に置かれた形容詞、代名詞、数詞、*nous avons*のように動詞の前の人称代名詞、*passer une riviere, finit une affaire, sans argent ; en Angleterre, sous ombre*のように格の前に置かれた動詞。」

Hindret (1687 : 202)が挙げたリエゾンのコンテキストの例は、Chifletとそうかけ離れたものではない。以下にHindret (1687)が記述したリエゾンのコンテキストを提示する。

	名詞句
冠詞+名詞	<i>les avis,</i> <i>des homes,</i> <i>aux enfans,</i> <i>mon hoste,</i>

	<i>ton amy,</i> <i>mes ancestres,</i> <i>tes yeux,</i> <i>ses yeux,</i> <i>Deux articles,</i> <i>trois oranges,</i> <i>cinq escadrons,</i> <i>cent arbres</i>
数詞+名詞	
形容詞+名詞	<i>un bon apuy,</i> <i>grand honneur,</i> <i>méchant habit,</i> <i>petit os,</i>
	人称代名詞
人称代名詞+動詞	<i>Il acheve,</i> <i>on avance,</i> <i>nous estimons,</i> <i>vous éprouvez,</i> <i>ils adorent</i>
	不変化語
前置詞+	<i>Sans argent,</i> <i>en angleterre</i>
副詞+	<i>Il n'y a rien à espérer,</i> <i>bien heureux,</i> <i>cela est trop honneste,</i> <i>il y a beaucoup à gagner</i>

表 4-6 : Hindret によるリエゾンコンテキスト

Hindret (1687 : 204)は上記のコンテキストの他に、例外としてリエゾンが実現されないコンテキストについても説明している。

#### (1) 不定詞-er の発音

Hindret (1687 : 204)は不定詞の語末-er の発音について以下のように述べている。

« ON ne prononce pas ordinairement dans le discours familier les *r* finales des verbes terminez en *er*, quoy qu'ils se rencontrent devant des mots commencez par des voyelles, comme *achever*, *commencer*, *passer*, *chastier*, *payer* ; on dit *commencé une affaire*, *passé une riviere*, *chastié un enfant*, pour dire *commencer une affaire*, *passer*

*une riviere, (...)* »

Hindret (1687 : 204)

「通常、親しい会話においては、仮に母音で始まる語の前でこれらの語が会する場合であっても、*-er* で終わる動詞の語末の子音 *r* は通常発音しない。*achever, commencer, passer, chastier, payer* は、*commencé une affaire, passé une riviere, chastié un enfant, pour dire commencer une affaire, passer une riviere* のように発音する。」

ただし、Hindret (1687 : 205)はこの*-er*の発音について、公の場や韻文を読む場合には、支配関係にない語ともリエゾンが実現され、さらに子音の前でも発音されるという説明を与える。

## (2) 動詞の三人称複数*-ent*の発音

基本的に、*-nt*の子音は全く発音されない。ただし、公の場で話す場合、もしくは韻文を読む場合には必ず語末の *t* を発音するべきである(Hindret, 1687 : 212)。

例 : *ils cherchoient une personne qui &c.*

*Ils luy proposerent une affaire*

*Elles lui dirent une nouvelle.*

## (3) *ils*の発音について

Hindret (1687 : 209)は、母音の前では*-l*は発音せず、むしろ*-z*を発音することで[iz]という発音形を正しいとしている。一方、*ils*を母音の前で[i]と発音することについては否定的な立場を示す。ただし、*ils*の母音の前の発音は文法家によって揺れがあるといえる。例えば、Chiflet (1659 :6)は[i]という発音を推奨している。

Chiflet や Hindret の文法書以降は、リエゾンについての統語的な観察、そして語末子音字の発音有無がスタイルによって決定されるというような説明が徐々に増えていくといえる。ただし、これらの説明が構造的に行われたかといえ、そういうわけではない。綴り字の発音に対する記述は、アルファベット順に行われることが多いため、リエゾンの説明は語単位、語末子音字単位で点的に行われるのが普通であった。以下ではリエゾンに関して与えられた説明をいくつかの項目についてみていくことにする。

### 4.2.6. 文法書にみられるリエゾンに関する注意書き

文法書においてリエゾンのコンテキストに関する体系的な説明というのはなく、離散的にいくつかの点についての注意書きが観察される。この注意書きには主に、(1)スタイルの違いに対する考慮、(2)ある特定の統語的コンテキストにおける指摘、(3)ある特定の語に関する指摘、のような3つのタイプがあると考えられる。

### (1) スタイルの違いに対する考慮

Vaugelas による『覚え書き』以降に出版された文法書に見られるリエゾンに関する説明において特徴的であるのは、スタイルの違いによってリエゾンの実現有無に差があるという指摘である。

例えば Tallemant (1698 : 108)は散文における発音と韻文における発音を区別している。

« C'est une chose bizarre & particulière sur tout à la Langue François que la plupart des mots ont deux différentes prononciations ; l'une pour la prose commune & pour le discours ordinaire, & l'autre pour les Vers, & c'est ce qui est cause que peu de personnes sçavent bien lire des Vers, faute de sçavoir cette difference de prononciation. [...] »

(Tallemant, 1698 : 108-109)

「多くの語が2つの異なる発音を持つことは、風変りで特にフランス語に特殊なことである。発音の1つは、散文もしくは普通の会話であり、もう1つは韻文である。この発音の違いにおける無知が、少数の人だけが韻文を正しく読めるということの理由である。」

この散文と韻文の違いについて Tallemant (1698 : 109-110)は以下のような例を挙げて説明する。

« La Prose neglige de prononcer les *s*, finales du pluriel, & les *t*, de la troisième personne du pluriel des verbes, & plusieurs autres consonnes finales, mesme devant des voyelles ; on dit fort bien *les hommes ont de tout temps esté*, comme s'il y avoit *les homme ont de tout temp esté*, *les enfans aiment à joüer*, comme s'il y avoit, *aime à joüer*, mais en Vers quand il se rencontre une voyelle après un pluriel ou après quelque consonne que ce soit il faut necessairement prononcer tout [...] »

Tallemant (1698 : 109-110)

「散文は複数形の *s*、動詞の三人称複数形の *t*、そして母音の前において他の多くの語末子音を発音することを無視する。例えば、*« les hommes ont de tout temps esté »*をあたかも *« les homme ont de tout temp esté »*のように、そして *« les enfans aiment à joüer »*をあたかも *« aime à joüer »*のように発音する。しかし、韻文では複数形の後に母音が、もしくはいくつかの子音の後に母音が重なるように、全てを必ず発音すべきである。」

つまり、Tallemant (1698)が意味するところでは、韻文では例えば、*« les hommes ont »*では

主語と動詞の間に[z]を、「*aimet à joïer*」において動詞と前置詞の間に[t]を発音するべきであるということである。

また、Roux (1694 : 117-118)は使用するスタイルの違いをむしろ話者同士の関係性に見出している。まず、Roux (1694 : 117-118)は家族間の会話において、母音の前で語末子音字を基本的に発音しないとしている。

« Il y a deux sortes de prononciations [...] ces consonnes ne s'unissent pas à ces voyelles suivantes dans les discours familiers, entre amis & entre pere, mere, enfants & domestiques dans une famille ; & ainsi ces consonnes ne se prononcent pas pour lors, excepté les articles, il, ils, les, des, & ces Pronoms ces, mes, tes, ses, nous, vous, dont la consonne finale se prononce tousjours devant une voyelle [...] »

Roux (1694 : 117)

「正反対の 2 つの発音方法がある。親しい間柄の会話、つまり、友人同士、親子同士、そして家族の使用人との間においては、この子音は後続する母音とつながることはない。そして、語末子音が常に母音の前で発音される冠詞 *il, ils, les, des, & ces* と代名詞 *ces, mes, tes, ses, nous, vous* を例外として、これらの子音は発音されることはない。」

親しい間の会話ではリエゾンがより少なくなると解釈できるだろう。また、普通の会話において過剰にリエゾンをすることは馬鹿馬鹿しいというような Restaut (1732 : 313)の証言も興味深い。以下にその引用を提示する。

« dans la prose commune & dans le discours ordinaire, ce seroit une affectation ridicule, & qui tiendroit du pédantisme, que de vouloir prononcer les consonnes finales & même les *s* & les *t* avant les mots qui commencent par une voyelle ou par une *h* non aspirée, aussi exactement que dans les vers & dans le discours soutenu. Ainsi on prononce, *Mes freres & vos soeurs reviennent ensemble*, comme s'il y avoit, *Mes frere & vos soeurs reviennent ensemble*, & de même dans une infinité d'autres occasions. »

Restaut (1732 : 313)

「普通の散文や普通の会話において、韻文やかしまった演説と全く同じように母音や有音の *h* で始まる語の前で語末子音、*s* や *t* を発音するというのは、銜学をそのままにしておくような馬鹿馬鹿しい気取りであろう。よって、*Mes freres & vos soeurs reviennent ensemble* をあたかも *Mes frere & vos soeurs reviennent ensemble* のように発音する。無数の他の場合にもこれは同様のことである。」

## (2) ある特定の統語的コンテキストにおける指摘

### (a) 「形容詞+名詞」、「名詞+形容詞」

Régnier-Desmaris (1706 : 19)は「形容詞+名詞」コンテキストにおいて形容詞の語末子音字は発音すると述べているのに対して、「名詞+形容詞」コンテキストについては会話の場合にはリエゾンは必要ないというように説明している。

« Ainsi *grand homme, grand esprit, second accident, profond abysme* se prononce toujours, comme s'ils estoient écrits *grant homme, grant esprit, secont accident, profont abysme*, en faisant sonner le *t*; & pareillement *froid horrible, chaud espouventable, bord escarpé* devroient se prononcer *froit horrible, chaut insupportable, bort escarpé*, en faisant sentir aussi la prononciation du *t*. Mais à l'égard des substantifs devant leurs adjectifs, cette regle n'est pas si rigoureuse, que dans la conversation on ne puisse s'en dispenser, sans blesser l'oreille. »

Régnier-Desmaris (1706 : 19)

「*grand homme, grand esprit, second accident, profond abysme* は常に、*t* の音を聞かせることで、あたかも *grant homme, grant esprit, secont accident, profont abysme* と書かれたように発音される。それと同様に、*t* の発音を感じさせるように *froid horrible, chaud espouventable, bord escarpé* も *froit horrible, chaut insupportable, bort escarpé* のように発音させる。しかし、名詞が形容詞の前に立つことに関しては、この規則はさほど厳密なものではなく、会話においては耳に不快感を与えることなく、なしですませることができる。」

また複数形については Régnier-Desmaris (1706 : 56)が以下のように述べている。

« Et quant aux mots qui prennent une *s* à leur pluriel, il y a cette difference à faire ; que si le nom adjectif est mis devant son substantif, & que ce substantif commence par une voyelle, alors l'*s* de l'adjectif se prononce toujours, comme quand on dit *les grands hommes, les belles ames, les excellents esprits* : mais qu'au contraire, si en mettant le substantif devant l'adjectif, on dit *les gens habiles, les ames élevées, les esprits excellents*, la prononciation de l'*s* du substantif devient alors en quelque sorte arbitraire, suivant qu'il s'agit d'une conversation plus ou moins libre & familiere. »

Régnier-Desmaris (1706 : 56)

「複数の *s* を取る語の場合には、ここにすべき違いがある。名詞の前に形容名詞があり、この名詞が母音で始まる場合には、*les grands hommes, les*

*belles ames, les excellents esprits* のように形容詞の *s* は常に発音される。しかし、その反対に形容詞の前に名詞を置いて、*les gens habiles, les ames élevées, les esprits excellents* を発音するときには、それが自由で親しい間の会話かどうかによって、この名詞の *s* の発音はいくらか任意なものになる。」

つまり、「形容詞+名詞」コンテキストではリエゾンの実現があるが、「名詞+形容詞」の場合にはリエゾンの実現は会話のスタイルに左右されるということである。

Buffier (1709 : 395)は「名詞+形容詞」コンテキストにおいては、親しい間の会話において語末子音字の発音は必要ないとしている。

« Le *t* final dans le discours familier ne se prononce point d'ordinaire, même devant une voyelle, précédé d'*r* ou d'*n* : *une mort afreuse, un pédant importun* ; prononcez, *mor afreuse, pedan importun* : exc. dans l'adjectif mis avant son substantif, *savan touvrage* on prononce aussi le *t* dans l'adverbe, *fort, fort heureux* : prononcez, *for-theureux*. »

Buffier (1709 : 395)

「親しい間柄の会話において *r* もしくは *n* が先行する語末の *t* は、母音の前で普通全く発音されない。よって、*une mort afreuse, un pédant importun* は、*mor afreuse, pedan importun* と発音しなさい。例外。名詞の前に置かれる形容詞は、*savan touvrage* と発音される。副詞 *fort* における *t* もまた発音する。よって、*fort heureux* は *for-theureux* と発音しなさい。」

ただし、Buffier (1709 : 395)が例に出した形容詞は語末で *-r* が安定的に発音される形容詞 *mort*、そして鼻母音語末の形容詞 *pédant* である。他の形容詞での一般的傾向はこの説明から明らかであるとは言い難い。それに対して、「形容詞+名詞」コンテキストではリエゾンの実現が起りやすいようでもある。

さらに、Moules (1761 : 138)もやはり、高尚なスタイルにおいては特に複数形の「名詞+形容詞」のリエゾンが実現されることを指摘している。以下にその説明を引用する。

« L'*s* finale est sonante en poésie & dans le discours soutenu, dans les exceptions ci-dessus & toutes les fois qu'elle est devant un mot qui commence par une voyelle. Ainsi, quoique dans la conversation on dise *cruauté inoüies*, il faudra prononcer en poésie & dans le discours soutenu, *cruauté zinoüies, armée-zinnombrable, homme-zavare, & non armée innombrable, homme avare, mes frere-z& soeurs, quoique la conversation admette, mes frere & soeur*. »

Moules (1761 : 138)

「下に挙げる例外においては、詩文とかしこまった演説において語末の *s* は、母音で始まる語の前にあるときには常に、発音される。つまり、会話においては *cruauté inoüies* と発音するにもかかわらず、詩文とかしこまった演説においては *armée innombrable, homme avare* ではなく、*cruauté zinoüies, armée-zinnombrable, homme-zavare* のように発音する。会話は *mes frere & soeur* という発音を許すが、*mes frere-z& soeurs* と発音する。」

18 世紀のいくつかの文法書から読み取れることは、「名詞+形容詞」コンテキストにおいてリエゾン「形容詞+名詞」コンテキストにおいてよりも実現されやすい。そして、「形容詞+名詞」コンテキストでは、普通の会話においてはリエゾンを実現する必要性はそこまでないが、詩文もしくは演説においてはこのリエゾンを実現すべきであるという認識が成されていたといえるだろう。

### (3) ある特定の語および形態素の発音に関する指摘

#### (a) 不定詞-*er*, -*ir* の発音

不定詞-*er* および-*ir* の語末子音字-*r* の発音に関する文法家の意見は様々である。Régnier-Desmaris (1706 : 19)は、不定詞-*er* および-*ir* の語末子音字 *r* の発音について、親しい間柄の会話では必要ないが、演説や韻文を読む際には必要であると述べている。

Girard (1716 : 161)は不定詞-*er* の語末子音字-*r* は母音の前では発音するべきであると述べている。ただし、-*ir* については特に述べてはいない。また、-*r* を発音する場合には、その直前の-*e*は広く発音されるという指摘がある。以下に引用を提示する。

« [...] tout ce que j'ai à remarquer sur *R*, c'est qu'elle est inutile à la fin des infinitifs des Verbes où elle est précédée d'un *E*, comme *aller, jouer, risquer, payer* ; excepté lorsque le mot suivant commence par une voyelle : Car alors elle se fait entendre dans la Prononciation, & rend l'*E* qui la précède plus ouvert que fermé : on dit *commander avec empire*, comme s'il était écrit *commande-r-avec empire*, & *commander sans emportement*, comme s'il y avoit *commandé sans emportementé* »

Girard (1716 : 101)

「*R* について私が気付いた全てのことは、*E* が先行する動詞の不定詞の終わりにおいて *r* は無意味である。母音で始まる語の前は例外である。つまり、発音において *r* は聞こえ、先行する *E* を狭いものよりは広いものにする。*commander avec empire* はあたかも *commande-r-avec empire* と書くように発音する。そして、*commander sans emportement* は *commandé sans*



*emportementé* のように発音する。」

一方 Buffier (1709 : 392)、Mourgues (1724 : 40)は、*-r* の発音は母音の前であっても必要ないと述べている。

« A l'infinitif des verbes il ne se prononce point, pas même d'ordinaire devant une voyele : on prononce *chanter & rire, finir un conte* : comme, *chanté & rire, fini un conte*. »

Buffier (1709 : 392)

「通常、母音の前であっても、動詞の不定詞において、*r* は全く発音されない。つまり、*chanter & rire, finir un conte* は *chanté & rire, fini un conte* のように発音する。」

« parce qu'ils ne font point sentir l'*r* à la fin des infinitifs, comme en effet elle y est muette suivant la prononciation ordinaire. »

Mourgues (1724 : 40)

「不定詞の終わりに *r* を感じさせない。普通の発音においてこの音は実は無音である。」

それよりしばらくの後に、Moules (1761 : 130)はスタイルの違いによって*-r* の発音有無が決定されるという Régnier-Desmaris (1706 : 19)と同様の意見を述べている。以下に引用を提示する。

« L'R FINALE ne se prononce point dans le discours familier, soit devant une voyelle, soit devant une consonne. Il faudra donc dire en supprimant l'*r*, *aimé à rire, aimé à boire, cherché à briller*, quoiqu'on écrive, *aimer à rire, aimer à boire, chercher à briller, &c. cherché de l'argent, prié Dieu*, quoiqu'on écrive *chercher de l'argent, prier Dieu*. »

Moules (1761 : 130)

「語末の *R* は親しい会話において母音の前でも子音の前でも全く発音されない。よって、*r* を削除しながら発音するべきである。*aimer à rire, aimer à boire, chercher à briller* のように書くにもかかわらず、*aimé à rire, aimé à boire, cherché à briller* のように発音する。そして、*chercher de l'argent, prier Dieu* のように書くにもかかわらず、*cherché de l'argent, prié Dieu* のように発音する。」

« (...) J'ay dit que l'*r* finale ne se prononce pas dans le discours ordinaire, soit devant une voyelle, soit devant une consonne, à l'exception des cas ci-dessus : mais il n'en est pas de même dans le discours soutenu ; l'*r* s'y prononce toujours devant une voyelle : ainsi on ne dira pas dans le discours soutenu, *aimé à boire*, mais *aimer à boire*, en faisant sonner l'*r*. »

Moules (1761 : 130)

「普通の会話において *r* は母音の前でも子音の前でも発音されないと述べたが、以下に挙げる例外がある。かしこまった演説においては異なる。*R* は母音の前で常に発音される。よって、かしこまった演説において *aimé à boire* とは言わない。*R* を響かせながら、*aimer à boir* と発音する。」

以上で観察したように、不定詞の語末子音字-*r* の発音に関する証言には大変揺れがある。一般的傾向として考えられるのは、子音の前では発音されず、母音の前ではスタイルによって発音の有無が決定されると解釈することができる。ただし、この[*r*]の発音有無に関しても、文法家の好みが反映されていると考えられる。

#### (b) 三人称複数形-*ent* の発音

動詞の三人称複数形屈折形-*ont* および-*ent* の語末子音字に関する説明は豊富であるとはいえないが、二人の文法書において興味深い指摘を見つけることができた。Restaut (1732 : 314) は-*ont* は-*ent* よりも語末子音字が発音されやすいというような証言を残している。

« Il est assez d'usage de prononcer aussi le *t* final dans les troisièmes personnes du pluriel des Verbes, lorsque leur dernière syllabe n'a pas le son de l'*e* muet ; comme dans, *ils vont à Rome. Ils sont à Paris. Elles étoient à table. Ils espéroient en venir à bout, &c.* au lieu qu'il faut prononcer, *Ils donnent à manger tous les jours*, comme s'il y avoit *ils donne à manger, &c.* »

Restaut (1732 : 314)

「*ils vont à Rome. Ils sont à Paris. Elles étoient à table. Ils espéroient en venir à bout* などのように、無音の *e* の音が語末の音節にない場合に、動詞の複数形三人称における語末 *t* は十分慣用的である。また、*Ils donnent à manger tous les jours* は、あたかも *ils donne à manger* のように発音する。」

これはリエゾンが起きる語の直前で、語末に子音が発音される活用語尾よりも母音が発音される活用語尾の語末子音字が発音されやすいということである。また、Moules (1761 : 143-144)は三人称複数形の語末子音字を会話では脱落させていることも興味深い。

« la troisième personne pluriel des verbes en *oient*, en *ent*, en *ont*. Exemples : *ils aimeroient à dire*, *il se repent en ce jour*, *sagement examiné*, *commandement inouïi*, *ils sont ici* ; prononcez en conversation, *ils aimeré à dire*, *il se repen en ce jour*, *sagemen examiné*, *commandamen inoui*, *ils son ici*. »

Moules (1761 : 143-144)

「*oient*、*ent*、*ont* を持つ複数形の三人称について。例 : *ils aimeroient à dire*, *il se repent en ce jour*, *sagement examiné*, *commandement inouïi*, *ils sont ici* は会話において、*ils aimeré à dire*, *il se repen en ce jour*, *sagemen examiné*, *commandamen inoui*, *ils son ici* と発音せよ」

### (c) 三人称複数形代名詞 *ils* の母音の前における発音形

三人称複数形代名詞 *ils* の発音に関しても文法家の証言に揺れが見られる。例えば、Duez (1639 : 23)は[i]の発音を推奨して、以下のように述べている。

« (...) devant une voyelle, l'homme du peuple prononce *il* ; la plupart des hommes instruits et ceux qui sont dans les écoles prononcent *is* : mais la première prononciation est la plus usitée. »

Duez (1639 : 23)<sup>84</sup>

「母音の前では、民衆は *il* と発音する。学識がある人々の多く、そして大学にいる人々は、*is* と発音する。しかし、最初の発音は最も使用されているものである」

複数形代名詞 *ils* には主に 3 つの発音形[i]z]、[iz], [i]が指摘されている。以下ではまず Thurot (1883 : 2 : 78-80)を参考として文法家の証言においてどの発音が良いとされたかをまとめた表を提示する。

---

<sup>84</sup> Thurot (1883 : 2 : 79)の翻訳を参照。

	[ilz]	[iz]	[il]
Barcley (1521)			○
Péletier (1549)		○	
Bèze (1584)			○
Du Val (1604)			○
Van der Aa (1622)			○
Giffard (1641)		○	○
Chifflet (1659)		○	
Duez (1639)		○	○
Latigaut (1669)		○	
Mourgues (1685)			○
Hindret (1687)		○	
Tallemant (1696)	○	○	○
Buffier (1709)		○	
Féraud (1761)	○	○	

表 4-8 : Thurot (1883)による *ils* についての文法家の証言

上記の表を見ると、発音形[iz]もしくは[il]のどちらか勧める文法家が多数いる。そして、少数ではあるが、発音形[ilz]を勧める文法家もいる。ただし、これら3つの発音形のうち正しい発音はどれかという点について、文法家の好みは反映されているに過ぎないという印象を受けるだろう。

#### 4.3. 第四章のまとめ

本章では、フランス語においてリエゾンという音韻現象が形成された3段階の過程を文法家の証言と並列しながら観察した。社会的に理想的な話者のフランス語を規範の対象として特に17世紀に行われた規範の成文化の中で、どのような場合にリエゾンを実現するかということは重要な問題として扱われた。これについては、Chifflet (1659)や Hindret (1687)はリエゾンの実現有無を決定する基準として統語的結束性に注目して、「制御される語」という概念を提示している。これをフランス語の理想的な姿として渴望された明晰性に結びつけることもできるだろう。この「制御される語」という概念は、リエゾンをどこで実現すべきなのかという問題に対して、明晰な答えとして与えられたが不完全な規則であると解釈できる。

ただし、文法書におけるリエゾンのコンテキストに関する体系的な説明というのは観察されず、離散的にいくつかの重要な点についての注意書きが観察される。この注意書きにおいてリエゾン実現に関する説明には、(1) スタイルの違いに対する考慮、(2) ある特定の統語的コンテキストにおける指摘、(3) ある特定の語に関する指摘、の主に3つのタイプが

観察された。

まず(1)スタイルの違いに対する考慮としては、特に、Vaugelasによる『覚え書き』以降、文法書では度々使用されるスタイルによってリエゾンの有無が決まるというような説明が複数の文法書で観察された。つまり、演説や韻文ではできるだけリエゾンを実現することが推奨され、普通の会話においてはリエゾンを過剰に実現することは気取りとして否定的にとられるということである。

次に(2)ある特定の統語的コンテキストにおける指摘では、「形容詞+名詞」コンテキストではリエゾンを実現するべきであるが、「名詞+形容詞」コンテキストは普通の会話においてはリエゾンを実現する必要性はそこまでないが、詩文もしくは演説においてはこのリエゾンを実現すべきであるという認識があることが明らかになった。

また、(3)ある特定の語に関する指摘として、(a)不定詞-*er*, -*ir*の発音、(b)三人称複数形-*ent*の発音、そして(c)三人称複数形代名詞*ils*の母音の前における発音形、といったものが観察される。

本章では、Chiflet (1659)、Hindret (1687)および複数の文法家によって与えられた説明や例文を基に、どのようなコンテキストでリエゾンが実現されるべきか、という疑問を部分的に明らかにしたといえる。また、リエゾンの実現に対してスタイルが大きく影響することは明らかである。つまり、書き言葉はフランス語において優先的な規範として捉えられる(Cf. Lodge, 1997: 209)。しかし、少なくともリエゾンに関しては書き言葉における規則のみを遵守することが常に推奨されるわけではなく、話し言葉におけるリエゾン実現にも何らかの規範が存在するわけである。しかし、17世紀および18世紀のリエゾンの実現コンテキストの詳細な全体像、そして書き言葉的なスタイルと話し言葉的なスタイルの間で、リエゾンの実現がどのように異なるのかを把握するには至っていない。次章以降のコーパスの分析では、この点を追求することが目的となる。

## 第五章 コーパスおよび研究方法

本章では本研究で使用する2つのコーパスの特徴についてそれぞれ説明する。また、2つの文献に関する先行研究について紹介した上で、本研究が2つのコーパスを比較する意義について述べる。最後に、研究方法について説明する。

### 5.1. コーパス

本研究で用いる2つのコーパスについて説明する。本研究では、Milleran (1694)によって書かれた文献および Vaudelin (1713, 1715)によって書かれた文献を電子コーパス化し、使用する。以下では、Milleran (1694)および Vaudelin (1713, 1715)の著作の特徴を、その目的、音韻体系、表記法および発音記号について指摘しながら説明する。

#### 5.1.1. Milleran (1694)

本研究では17世紀末の資料として René Milleran の文法書 *Les deux grammaires fransaises* を使用する。この文法書は400ページにわたって、フランス語の発音に対する説明が書かれた文献である。



図 5-1 : *Les deux grammaires fransaises* の表紙

Milleran の文法書 *La Nouvelle grammaire française* は 1692 年にマルセイユにおいて Henri Brebion 社から出版される。その後、1694 年に第二版が *Les deux grammaires fransaises* という名前で再版されている。本研究では第二版のリプリント版(Slatkine, Genève, 1973)をコーパスとして使用する<sup>85</sup>。

#### 5.1.1.1. René Milleran の人物像

René Milleran はソミュール(Saumur、メーヌ＝エ＝ロワール県の都市)の出身である。*Nouvelle Biographie générale* (Tome 35, p.527)によれば、1665 年生まれである(Crevier, 1994 : 4)。Milleran は 1685 年 11 月 13 日に文法書の編集を終えたことから<sup>86</sup>、1685 年にはたった 20 歳であったことになる。このため、Crevier (1992 : 4)は Milleran が 1665 年以前に出生しているはずであると指摘している<sup>87</sup>。Milleran は 1692 年の版に自分の肩書きについて、「*Professeur des Langues Française, Alemande, et Angloise, et Interprete du Roi* (フランス語、ドイツ語教師、英語教師、王の通訳)」と記している。一方 1694 年版では、「王の通訳、そしてラテン語、イタリア語、ドイツ語、英語を用いてフランス語を教える教師である(« *Interprete du Roi, et proféseur de la Langue Fransaize, qu'il enseigne par les Langues Latine, et italienne, et Alemande, et Anglaize* » (0 : 1))」と述べている。また、Milleran 自身も、パリ、ドイツ、オランダ、イギリス、イタリアでフランス語を教えていたと述べている(0 : 6)。このことから、Milleran は複数の言語を話す、フランス語教師および通訳者であったことがうかがえる。

#### 5.1.1.2 Milleran の文法書の目的

Milleran は、その著書の序文で文法書を書く目的として 2 つのことを主張している。この 2 つの目的とは、(1)フランス語の良き発音を教えること(0 : 7)、(2)彼自身の綴り字の改革を正当化すること(0 : 9)である。

まず、「フランス語の良き発音を教える」という第一の目的については、教える対象が複数存在するようである。第一にその対象として挙げられるのが、外国人のフランス語学習者である<sup>88</sup>。このため、Milleran は文法書において当時の知識人の共通語であるラテン語記を付けている(0 : 10)<sup>89</sup>。また、ラテン語を理解しない外国人のために、ドイツ語、オランダ語、英語、イタリア語を話す人々にとって難しいと考えられる語の発音の方法を解説して

---

<sup>85</sup> 第二版を使用する理由は、先行研究である Crevier (1994)の調査結果と照らし合わせるためである。

<sup>86</sup> Milleran (2 : 198)を参照。

<sup>87</sup> Crevier (1994 : 4)を参照。(« Notons ici que, selon le *Dictionnaire historique, géographique et biographique de Maine & Loire et de l'ancienne province d'Anjou* (Cf. Schmitt (1984 : 401), Milleran serait né en 1655 et il serait décédé en 1699. »)

<sup>88</sup> Milleran (0 : 5)を参照。(« non seulement parce que je la croi tres-utile aux Etrangers, mais parce que les François mêmes m'ont aussi paru la goûter. »)

<sup>89</sup> Milleran は « La premiere, que j'y ai mis le Latin de tous les Exemples pour les faire mieux entendre aux Etrangers. » (0 : 10)と述べている。

いる<sup>90</sup>。複数の言語に通じていた Milleran は、諸外国語の発音にフランス語の発音の特徴の手がかりがある場合には、外国語の発音の例を挙げることもある。

次に、Milleran が明言しているように、母語話者であるフランス人もその対象となる。Milleran は特に、女性たちの発音の問題点を指摘しているが、これは女性たちは発音されない綴り字をしばしば読んでしまうために、読んでいるものを理解できない、というものである<sup>91</sup>。さらに、Milleran は「フランス語の良き発音」として、Milleran 自身の出身地ソミュール(Saumur)で話されるフランス語を高く評価していることがうかがわれる。Crevier (1993, 1994)はロワール河沿いの街トゥールで話されるフランス語が最も美しいフランス語であるという神話を思わせる<sup>92</sup>ことを指摘している。

第二の目的である「綴り字の改革」について、Milleran は発音されない綴り字の削除や、特定の綴り字を他の綴り字で置き換える試みを行っている。Crevier (1994 : 8-11)は Milleran の綴り字改革には以下のようなものがあることを指摘している。まず、発音されない母音字および子音字の削除について指摘している。

	綴り字が保存された形	Milleran の推奨する綴り字
綴り字 <i>p</i> の削除 (2 : 88)	<i>ptisane, psalete, pseahme</i>	<i>tisane, salete, seome</i>
綴り字 <i>s</i> の削除 (2 : 130-131)	<i>Conscience, absçés</i>	<i>Concience, abcés</i>
綴り字 <i>oe</i> の単純化 (1 : 137)	<i>Oeconome, oeconomie, boeuf, oeil</i>	<i>Econome, economie, beuf, eil</i>

表 5-1 : Milleran による綴り字改革の一例

例えば、綴り字 *p* は «*ptisane, psalete, pseahme*» のような語においては発音されないの  
で、«*tisane, salete, seome*» と発音され、綴り字もこのように表記することが推奨されている。  
また、綴り字 *s* は «*Conscience, absçés*» においては余分であるため «*Concience, abcés*» という  
綴りが提案されている。そして、綴り字 *oe* において *o* は発音されないため、«*Oeconome,*

<sup>90</sup> « La seconde, que j'y ai ajoûté la maniere de prononcer les mots les plus difficiles selon les Alemans, les Holandois, les Anglois et les Italiens, principalement en faveur de ceux qui ne parlent point Latin. (0 :10) »

<sup>91</sup> « Ce défaut est ordinaire aux femes qui, outre la difficulté qu'elles ont à bien lire, prononcent le plû-souvent toutes les lettres qui se mangent, et c'est pour cela qu'elles n'entendent pas ce qu'elles lisent. (0 :9) »

<sup>92</sup> Crevier (1994)は Gueunir *et al* (1978 :167-173)を参照としている。これについては、Lodge (1997 :223)は 17 世紀に貴族階級がロワール河沿いに領地を持っていたこと、そしてイギリス人の文法家 Palsgrave がセーヌ河とロワール河に位置する地域で話されるフランス語の慣用に従うべきであると書き残していることを指摘している。



*oeconomie, boeuf, oeil* »のような綴りを« *Econome, economie, beuf, eil* »に単純化することも推奨されている。

次に、Milleran は1つの音に対して複数の綴り字を避けることを改革に取り入れようと試みている<sup>93</sup>。そのような例として、綴り字 *ph* を *f* によって置換することが挙げられる。例えば、「*Dauphin, Phisolophie*」という綴り字に対して、「*Daufin, Filosofo*」という綴り字を使うようにという助言が観察される(2: 94-95)。そして、Milleran は *mm* や *nn* に対して、重複する綴り字を省略した *m̃, ñ* という綴り字を使用している。「*cõme*」のように、重複した2つの *m* が上に波線を伴った *m̃* という形で記述されている。

文法書の第三の目的については、統辞法が挙げられる。文法書の中で、統辞法について書かれた章は37ページあるが、実際には、Milleran は補助記号(例: アクセント、分音、アポストロフ)と句読点について説明している(Crevier, 1994: 7)。

### 5.1.1.3. 表記法の特徴

Milleran は綴り字の発音有無を示すために特別な表記法を用いている。つまり、発音されない綴り字は、立体で書かれた文章において、発音されない子音の綴り字はイタリック体によって表記<sup>94</sup>される。これは、イタリック体で書かれた文章においても同様で、この場合には発音されない子音の綴り字は立体によって表記される。

例えば、下記の例は立体で書かれた文章である。

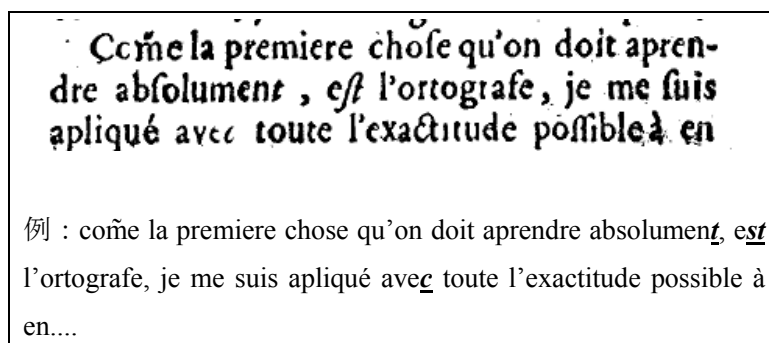


図 5-2: 表記法の一例

上記の例の場合には、*absolument* の語末の *t*、*est* の語末の *st*、*avec* の語末の *c* がイタリック体で表記され、これらの綴り字は発音されないと解釈できる。

ただし、この表記法は Milleran の綴り字改革の一部に組み込まれているわけではなく、文法書を読む人々に「フランス語の発音を正しく学ぶ」ことを可能にするという考え方が適

<sup>93</sup> Crevier (1994: 10)を参照。

<sup>94</sup> Milleran (1694: 0: 13)を参照。また、この方法を Crevier (1994)は *exponctuation* と呼んでいる。

当である。発音しない子音字に何らかの印を付けるという手段は、既に Palsgrave (1530)、Dubois (1531)、Saintliens (1580)によっても使用された手法である(Crevier, 1994 : 12)。

この表記法において、実際の発音が明らかではない点はいくつかある。

- 1) 鼻母音：語末が鼻母音で終わり、その後に母音もしくは無声の *h* ではじまる語が続く場合に、鼻母音が非鼻母音化した上で鼻子音[n]が母音とともに発音されるのか、それとも鼻母音が保持されたままで鼻子音[n]が続くのか不明である<sup>95</sup>。よって Milleran の発音教本における *n* のリエゾンについて調査することは不可能である。
- 2) [ʎ]の発音：[ʎ]は綴り字上では *ll* が用いられるため、[l]との区別が難しい場合がある。Milleran 自体はこの濡れた *l* と呼ばれる[ʎ]の発音の特徴について触れている。この[l]と[ʎ]の区別については、以下で詳細に説明する。
- 3) 語末以外の発音：Crevier (1994 : 19) に従えば、語末では 16703 箇所がイタリック体で表記された一方で、語中では 1014 箇所のみがイタリック表記であることから、Milleran は語末で発音されない子音字に最も注意を払っていたことが明らかである。語中のイタリック表記には、例えば « que[que] », « tenz[s] » などの子音字と無音の *e* ([ə])がある。

#### 5.1.1.4. 表記法におけるエラー

Crevier (1994 : 21)は、Milleran のテキストにおけるエラーには2つのタイプがあることを指摘している。それらは、印刷上のエラーと表記法自体のエラーである。第一に、印刷上のエラーは少数である。Milleran は印刷の後に2度読み直した(2 : 191)と述べている。一般的に、語が重複しているもの(例 : *ne ne* (1 : 114)や音節の重複(例 : *ordinaire* (0 : 9))、文字の重複(例 : *ouvert* (2 : 39))、文字の脱落(例 : *mon e « monde »*)などがこの第一のタイプに当てはまる<sup>96</sup>。第二のタイプは表記法自体のエラーであり、これがエラーの大部分を占めている。例えば、発音が予想される綴り字がイタリック体で表記されている、もしくは発音が予想されない綴り字がイタリックに変換されていないものである。例えば、接続詞 *et* の語末の子音字 « *t* »は通常発音されないが、*et* という表記の変わりに、*et* という表記が使用されていることがある。Crevier (1994 : 22)によれば、接続詞 *et* の語末の子音字 *t* は長く発音されず、このようなエラーは 1168 例あるうちの 27 例のみであり、これは 2,31%に過ぎない<sup>97</sup>。

#### 5.1.1.5. Milleran が記述したフランス語における音韻体系

以下では、Milleran のフランス語における母音体系および子音体系について説明する。

---

<sup>95</sup> Crevier (1994 : 16)を参照。

<sup>96</sup> Crevier (1994 : 21)を参照。

<sup>97</sup> Crevier (1994 : 42) は、語の出現回数において子音字の表記におけるエラーが 3%もしくはそれ以下であれば、子音字は発音されないのが通常であると考えてもよいと指摘している。

### 5.1.1.5.1. 母音

Milleran の文法書における母音体系は以下のようなものである。この母音体系は Vaudelin のものと同様である。

i i:    y y: ÿ    u u:  
e e:    ø ø:    o o: õ  
ε ε: ë  
a a: ã

Milleran は[a]と[a:]の2つの母音を区別していることが以下の説明から明白である。

« A Qui a toujours le son naturel Latin, comme dans toutes les autres Langues, savoir long en que/ques mots, et bref en d'autres [...] (1 : 55) »

「A は全ての言語において、ラテン語本来の音を常に持つ。すなわち、いくつかの語では長く、他の語では短い。」

Milleran の提示した例にはミニマルペアが含まれる。例えば、*chasse* [ʃas] (狩り)と*châsse* [ʃa:s] (聖遺物匣) や、*glace* [glas] (氷)と*classe*[kla:s] (階級) などが挙げられる。

次に、[e, ə, ε, ε:]に関して、Milleran は4つの発音に分類している(1 : 64)。

« il y a quatre sortes d'E.

1. Le masculin clos *ou* Latin qui s'appelle ainsi, parce qu'il est marqué de l'accent aigu.
2. Le féminin, *ou* le François parce qu'il est sans accent.
3. Le neutre *ou* ouvert, parce qu'il se prononce ouvertement.
4. S'appelle plus ouvert, parce qu'il a presque le même son du Latin, et afin qu'il se conoisse mieux, on le marque aussi de l'accent aigu, et rarement du Circonflexe (1 : 64) ».

「4種類のEがある。

1. アクサンテギュが付けられることから、閉じられた男性形、もしくはラテン語のEとも呼ばれる。
2. アクセントが付かないため、女性形、もしくはフランス語のEと呼ばれる。
3. (開口度が) 広い発音のため、中性もしくは広いEである。

4. ラテン語とほとんど同じ音を持つため、(開口度が) 広い E と呼ぶ。また、わかりやすいように、アクセントギョや稀にシルコンフレックスを付ける。」

まず、1 番目の E は[e]に相当し、名詞、形容詞の語末においてアクセントギョが付いた形で表れる。これに加えて、女性形の[e:](-ée)があることが明記されている。

2 番目の E は[ə]に相当する。フランス語に特有な音として記述する理由として、1 番目の E がラテン語と同じものであるのに対して、2 番目の E はアクセントがなく、軽く柔らかな音である、と Milleran は主張している<sup>98</sup>。例えばこのタイプの E は語中と語末の両方で、イタリックで表示されている例があるため、17 世紀末において既に[ə]の発音は義務的ではなかったということが伺える<sup>99</sup>。

3 番目の E は[ɛ]に相当する だろう。この[ɛ]の音について、Milleran は以下のような説明を加えている。

« Le premier n'est ni bref ni long, mais ouvert, et il se prononce presque cõme la diftongue, *ai*. ou *ay*. (1 : 86) »

「一つ目は、短くも長くもなく、しかし開音である。そして、この音は二重母音の *ai* または *ay* とほぼ同じように発音される」

4 番目の E は[e:]に相当すると考えられる。Milleran が記述したフランス語において、長母音[e:]は短母音[e]と対立しているようである。この E に関しては、アクセントギョや稀にシルコンフレックスを付けるというような説明があるが、先述の[e]の音にもアクセントギョが付くという説明があったことから、矛盾しているような印象があるだろう。さて、Milleran は別記でアクセント記号について以下のように解説している。

« Le premier *l'aigu* ' qui se fait à la gauche, se prononce cõme *e* Latin.

Le second *le grave* ` , qui se fait à droit ne change rien du tout de la prononciation.

Le troisieme *le-circonflexe* ^ [...], c'est-à-dire cõme un *v* renversé de cete maniere, fait prononcer la syllabe sur la quelle il se met, plus longue que les autres. »

Milleran (1694 : 1 : 17)

<sup>98</sup> « *e*. féminin qui s'appelle aussi François, parce qu'il est aussi particulier à nôtre Langue que l'*e* masc. l'est à la Latine, ne se marque d'aucun accent et se prononce si brièvement, et d'un son si mol, »

<sup>99</sup> Crevier (1994 : 36)は以下のように述べている。« il est prononcé facultativement entre deux consonnes, ainsi qu'un finale. Soulignons que [ə] final sera toujours entre parenthèses dans les transcriptions phonétiques, pour illustrer qu'il est faultatf dans la prononciation. »

「1 番目は、左下がりの「ˊ」で表される高音、ラテン語の *e* のように発音される。2 番目は、右下がりの「ˋ」で表される低音であるが、発音を変えるものではない。3 番目は *V* を反対にした「^」で表されるシルコンプレックスであり、この記号が付く音節は他よりも長く発音される。」

以上のような説明から、Milleran (1 : 92) はアクセント記号「ˊ」が、[e] の音を持つ綴り字に付くと考えていることは明白である。しかし、Milleran は [e] が発音される語 *accès, cyprès, Décés, Excés, Exprés* のように、アクセント記号が付いた「é」に子音字「s」が後続する綴り字 *és* に対しては、[e] と発音するようにと指摘している。このことから、アクセント記号は、[e]、[ɛ]、[ɛ:] の表す綴り字を常に区別するわけではないようである。

Milleran のフランス語において、短母音 [i] は長母音 [i:] の対立は単数形と複数形を区別する形態的な機能を持っていたといえる。例えば、そのようなことは以下の説明からも明らかである。

« [...] ce pronom *ils* se prononce cõme un double *ii*, [...]

*Va-t-il ?* [...]

*Parle-t-il ?* [...]

*Finissent-ils ?* [...]

*Dites donc va ti ? parle ti ? finisse tii ?* »

(2 : 76-77)

「この代名詞 *ils* は 2 つ続く *ii* のように発音される。

*Va-t-il ?* [...]

*Parle-t-il ?* [...]

*Finissent-ils ?* [...]

つまり *va ti ?* ([vati]) *parle ti ?* ([paʁl]) *finisse tii ?* ([finisti:]) と発音しなさい。」

つまり、*Va-t-il ?* や *Parle-t-il ?* の語末の 3 人称単数代名詞 *il* は [i] と発音されるが、3 人称複数代名詞 *ils* は句末において [i:] と長母音で発音される。

[o] および [o:] についても Milleran は長さについての説明を与えている。例えば、「もし、2 つの *o* が偶然にもいくつかの語で続くならば、これは普通の *o* よりも少し長く発音される (1 : 146)」と説明しており、*roole (rôle), controoler (contrôler)* といった語が長母音の [o:] に当たる。

綴り字 *u* に対しては、母音 [y] が対応する発音である。Milleran はこの母音に関して、「ドイツ語の *ü* と同様に、閉められた口で発音される<sup>100</sup>」と説明している。また長母音の [y:] に

<sup>100</sup> « *U. est toujours par tout voyelle devant ou après une consone, et aussi au milieu de deux autres*

つについては、「子音が消えた部分にのみアクセントコンプレックスがついた場合に、長く発音する<sup>101</sup>」という指摘もある。

綴り字 *ou* に対しては、母音[u]が対応する発音である。Martinet (1969 : 160-163)に従えば、短母音[u]に対応する長母音[u:]が存在していたことが予想される<sup>102</sup>。

綴り字 *eu* については、[ø]に相当する。長短の区別について、Milleran による言及はない。Crevier (1994 : 38)はこれに関して「歴史に基づいて察することができるのであれば、作者 (Milleran)の言語においても長母音[ø:] の存在が認められる<sup>103</sup>」と述べているように、長短の区別が存在したと考えるのが妥当であろう。

鼻母音に関しては、Milleran が記述したフランス語では4つの鼻母音[ɛ̃], [ã], [õ], [ỹ]があり、これは Gile Vaudelin の文献でも同じ数の鼻母音が観察されている。

#### 5.1.1.5.2. 子音

Crevier (1994 : 46)に従えば、Milleran のフランス語における子音体系は以下のようなものである。

破裂音	p,	t,	k
	b,	d,	g
摩擦音	f,	s,	ʃ,
	v,	z,	ʒ,
鼻音	m,	n,	ɲ
流音		l,	ʎ
		r, (R)	

表 5-2 : Milleran のフランス語における子音体系

破裂音[p], [t], [k]は語末でも発音されるが、[b], [d], [g]に関しては限られた語において語末での発音が可能なようである。

摩擦音は、[f]および[s]のみ語末での発音が可能であり、語末における[ʃ], [v], [z], [ʒ]の発音は観察されないようである。

鼻音には[n], [m], [ɲ]の3つがある。鼻音[m]と[n]は語頭、語中、語末で発音が可能である。[m]および[n]について特筆すべきことは、連続する *nm*(*ñ*)と *mm*(*m̃*)で表される綴り字である。

---

voyelles dans la même syllabe, et se prononce les lèvres fermées, comme l'*ü*. des Alemans marqué de deux points, c'est-à-dire, plus fortement que leur *i* (1 : 106). »

<sup>101</sup> Milleran (1 : 110) を参照。

<sup>102</sup> Crevier (1994 : 38)を参照。

<sup>103</sup> Crevier (1994 : 38)を参照。« Ici encore, l'histoire nous permet de supposer l'existence d'un [ø:] long dans la langue de l'auteur, même si ce dernier ne me mentionne pas. »

これらの綴り字について Crevier (1994 : 43)は「Milleran にとって、この二重の綴りは、例えば[n]もしくは[m]が後続する鼻母音に対応している」と指摘している。例えば、*Boñe* は[bõn]、*Coñe* は[kõm]と発音されたことが予想される<sup>104</sup>。しかし、Milleran (1694 : 1 : 104)による記述には、「-omm (-om̃)の綴り字の場合にこの-oは u のように発音されるのがよし」というようなものもある。この場合には、*Boñe* は[boun]、*Coñe* は[koum]というように発音されるのだろう。鼻母音についての記述は、明白ではない部分が多いため、どちらの発音がなされていたのかは Milleran の説明だけでは断定できない。[n]の発音について、Milleran は n が後続する g の前で i は通常よりも流音のような音を持つとしている<sup>105</sup>。またこのような音を持つ語の例として挙げられているのは、*Allemagne* や *Espagne* といった現代フランス語では *gn* の綴り字で[n]と発音がされるものである。

流音は[l], [ʎ], [r], [R]の4つである。[l]と[ʎ]の違いに関しては、「Lの綴り字に異なる2つの音があり、一つ目は普通、二つ目は流音である」という Milleran による記述がある<sup>106</sup>。Milleran の指す「普通のL」とはどの子音が当てはまるのだろうか。現代の音声学に基づいた場合に、流音に当てはまるのは[l]である。Milleran は流音について以下のように説明する。

« Il faut pourtant remarquer qu'ordinairement L à la fin du mot n'a le son liquide, qu'après les Diftongues et les Triftongues suivantes qui se terminent en I. [...] la double LL. a toujours le son plus liquide [...] à la fin des Diftongues ou des Triftongues qui se terminent en I. Savoir, AI. EI. UI. EUI. OEI. OUI. UEI. (1 : 22) »

「しかし、以下のことに気付くべきである。通常、語末のLはIで終わる2重母音、3重母音のあとに位置する場合にのみ、流音となる。LLはより流音的である。これも、Iで終わる2重母音、3重母音のあとに位置する場合である。つまり、AI. EI. UI. EUI. OEI. OUI. UEIである。」

よって、以上の説明から Milleran が流音と呼ぶ音は[ʎ]が妥当であると判断できる。ただし、

<sup>104</sup> Thurot (1883 : 2 : 517) はこの-omm, -onn という綴り字の発音について、複数の文法家たちの証言をまとめている。まず、このような綴り字は[um], [un]という発音がなされるとしている文法家がいるが、その一方で[om], [on]というように発音するべきであるという証言もある。興味深いのは鼻母音と伴ってさらに鼻音が続くというような Milleran の発音については、Thurot はこのような発音は俗語で常に起こるとしている。

<sup>105</sup> Millran (2 : 52)を参照。(« Quant à la nasale palatale [ɲ], Milleran la décrit en ces termes : « [...]on ne peut doñer d'autre regle plus affeurée que de dire simplement que, parce qu'on m'étoit autrefois i. devant g. suivi de l'n. elle a un son plus liquide qu'à l'ordinaire [...] (2 : 52) »).

<sup>106</sup> Milleran (2 : 67)を参照。(«L. A deux sons fort differens. Le premier est ordinaire, et le second liquide. Elle se prononce par toût au comencement et au milieu come en Latin, en Italien, en Alemand, en Holandois, et en Anglois. »)

[l]は語頭、語中、語末での発音が可能であるが、[ʎ]は語中、語末のみの発音に限られる。

次に[r]と[R]の発音についてだが、Milleran (2 : 98, 104)は、この2つの発音は綴り字の違いによって区別している。ただし、発音の特徴の違いについて決定的な記述は見られない。まず綴り字 *r* は語中や語末よりも固い音で発音される (Milleran 2:198)。綴り字 *rr* について Milleran は「乱暴な音で発音される(2 : 104)」と表現している。Thurot (1883 : 2 : 270)に従えば、おそらく語頭の *r* は口蓋垂音の[R]で発音され、連続する2つの *rr* は舌先音で発音されることが予測される。

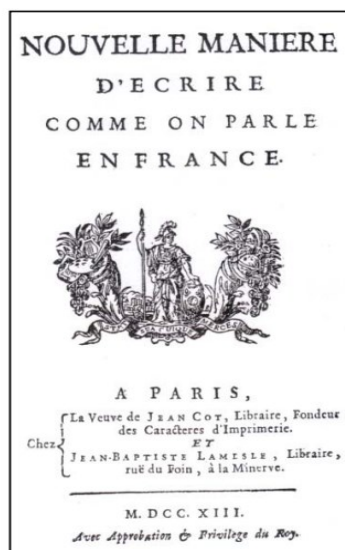
### 5.1.1.5.3. 半母音

綴り字 *oi* と *oy* は[w]に相当する<sup>107</sup>。[j]は綴り字 *y* を伴って表記される。Milleran (1 : 99)は、この音は2つの母音 *ii* を一つの音節に入れるように発音すると述べている。最後に[u]については、綴り字 *ui* で綴られるものに相当するようである。Crevier (1994 : 45)は *cuire* [kʷiʁə], *aiguillon* [ɛgʷiʎõ]は[u]を伴って発音されていたことが考えられると指摘している。

### 5.1.2. Vaudelin (1713, 1715)

本研究では、18世紀初頭におけるリエゾンの実現を調査するために、Gile Vaudelin の以下の2つの著作を用いる。

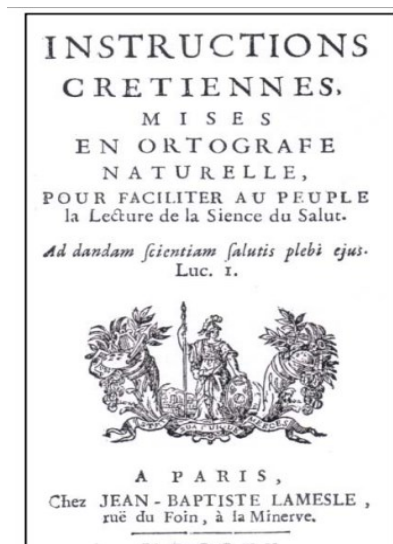
- a. *Nouvelle manière d'écrire comme on parle en France, 1713, Paris : Chez La Veuve de Jean Cot et Jean-Baptiste Lamesle, Slatkine Reprints, 33p.* (以下、NM という略称を使用する)



<sup>107</sup> この綴り字は、[ɛ]を表す場合についても併記されている。例えば、*droit, adroit, étroit, froid* はそれぞれ、*drait, adrait, étrait, frait* と発音するようという指示がある。Milleran (1694 : 1: 138-139)を参照。



- b. *Instructions crétiennes, mises en ortographe naturelle, pour faciliter au peuple la lecture de la Science du salut*, 1715, Paris : Chez Jean-Baptiste Lamesle, Slatkine Reprints, 247p. (以下、NM という略称を使用する)



この2つの書、*Nouvelle manière d'écrire comme on parle en France* (以下、NM)は1713年に、*Instructions crétiennes, mises en ortographe naturelle, pour faciliter au peuple la lecture de la Science du salut* (以下、IC)は1715年にそれぞれパリで出版された。Cohen (1946 : vii)によれば、Vaudelinは改革派オーギュスタン派に属する知識人であった。一方で、Vaudelinの出生年および出生地はこれといって明らかではない。Martinet (1969 : 167)が「Vaudelinは自分のことばではないものを観察し、記述することができた («[...] qu'il saurait observer et décrire un autre parler que le sien. »)」と述べているように、Vaudelinの記述したフランス語は当時の規範から大変かけ離れたものではないと考えられる。Vaudelinは1692年に既に音声表記法をアカデミー・フランセーズに提出していたが、実際に2つの著作が出版されたのは、それぞれ1713年、1715年である。

#### 5.1.2.1. Vaudelin が記述したフランス語

Vaudelinの目的は、「フランスにおいて話されているようにフランス語を書くための新たな方法 (NOUVELLE MANIERE D'ECRIRE COMME ON PARLE EN FRANCE)」を考察することであったといえる<sup>108</sup>。Cohen (1946 : 3)によれば、ルイ14世の時代のことばの記憶を後世に伝えるために、1712年の発音を不滅にし、言語の相対的均一化と定着化へたどり着くこ

<sup>108</sup> 川口(2010 : 121)を参照

とを Vaudelin は目標に掲げていたようである<sup>109</sup>。そして、記述対象となるフランス語は、宮廷やサロンで使用される良き慣用である、とも述べている。例えば、Vaudelin は 1713 年の著作で以下のように述べている。

« La prononciation des conversations honnestes et familières est sans contredit la plus naturelle, la plus agreable, la plus usitée à la Cour, & la seule prononciation du beau Sexe ; ainsi elle est par tout la plus estimable ; ainsi en Parlant & en Ecrivant, le meilleur est d'imiter & de peindre la Pononciation de ceux qui parlent naturellement bien notre Langue Française. L'Empereur Auguste Ecrivoit comme il Prononçoit ; c'est à dire du mieux qu'il estoit alors possible. C'est aussi l'Orthographe ordinaire des Princes & des Dames ».

(NM, p.28-30)

「率直かつ親しい間柄での会話における発音は、意義の余地なく、最も自然なもの、最も気持ちの良いもの、宮廷で最も用いられるもの、そして女性の唯一の発音である。また、そのような発音は最も立派なものである。よって、話し、書くために最良の方法は、私たちのフランス語を美しく自然に話す人々の発音を模倣し、記述することである。アウグストゥス皇帝は話すように書いていた。つまり、そのようなことは過去に可能であったのである。そしてそれは王子や貴婦人達の普通の綴り字である。」

Cohen (1946 : 4)は、記述された慣用に変異を含ませることを Vaudelin が考慮に入れていたと考察している。例えば、Vaudelin は以下のように述べている。

« On a taché de bien peindre la Prononciation qui est la plus usitée dans les conversations des gens de qualité qui parlent naturellement bien la Langue Française. Parce que la Prononciation ou le changement ou la supression de certaines Letrtes dedans ou la fin des Mots est arbitraire, pour contenter les diferens gouts, on a marqué tantost l'une & tantost l'autre de ces variations. »

(IC, p.10)

「フランス語を上手く自然に話す優れた人々の会話において最も用いられる発音を描くことに努めた。つまり、発音、変化、語中もしくは語末での文字の消去は任意によるものである。そして、それは様々な趣向を満足させるためであり、それらの変異の中から、ある時はその一つを、またあ

---

<sup>109</sup> Cohen (1946 : 3) を参照 (« Il voulait « éterniser la véritable prononciation » de 1712, en transmettant à la postérité l'image des paroles du siècle de Louis le Grand ; il pensait ainsi parvenir à une relative uniformisation et une quasi-fixation de la langue. »)

る時は他のものを記した。」

### 5.1.2.3. 発音記号

この発音の表記法については以下の3つの原則がある(Vaudelin, NM, p.7)。

1. フランス語は本質的に異なっている29の単音で構成される。
2. 個々の単音は、常に固有かつ単独の文字によって表されなければならない。
3. 旧来のアルファベットにおいて良いものは保持されるほうが合理的である。 (...) <sup>110</sup>

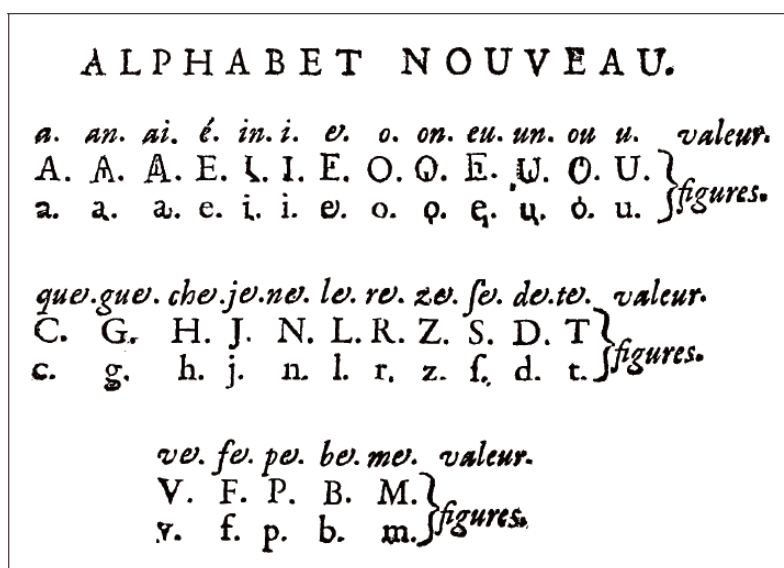


図 5-3 : Vaudelin (1713)の新アルファベット (NM, p.4)

まず、上段は13の母音を表し、中央と下段は16個の子音を表す。以上の表記は旧来のアルファベットを改良して新しい8つの文字が作られている(an /ã/, ai /ɛ/, in /ẽ/, e /ə/, on /õ/ eu /ø/, un /œ̃/, ou /u/)。Vaudelin自身は2つの母音が1つの音節の中で統合して発音するものを二重母音と呼ぶ。それは例えば、*Di-eu*、*lui*、*bi-in*などであるが、これらは現代フランス語でいう半母音に当たるものであるが、Vaudelinは二重母音と呼んでいる。

次に、綴り字と発音記号の関係について簡略に説明する。例えば、鼻母音[ã]は、綴り字*an.*と表記されている。

*an.*  
*A.*  
*a.*

図 5-4 : 母音記号 [ã]

<sup>110</sup> ここでは、川口 (2010: 121)による和訳を引用する。

[ã]という音価を持つこの母音に対して、大文字と小文字それぞれの発音記号が与えられている。[ã]の小文字の発音記号は a のヒゲの部分が長く下に垂れ下がり、大文字の発音記号では A の横棒の真ん中に下に垂れ下がる縦線がついていることが特徴的である。

#### 5.1.2.4. Vaudelin によるリエゾンについての記述

川口(2010 : 122)は Vaudelin によるリエゾンについての記述について以下のように述べている。

Vaudelin によると、母音字は「意味の文字 (lettres de signification)」であり、語にとって書くことができないもので、母音字を1つでも取り去ると語の意味は分からなくなる。これに対して、語末の子音字は「発音の文字 lettre de prononciation」であり、単語の意味に役立つことはなく、2つの母音が接触することを回避し発音を和らげるために加えられる。[...] 前の語の最後にくる母音と次に来る語の最初の母音が衝突しないように、n, l, t, z, c...などの子音を発音する。子音と休止の前については言及していないため、このくだりがフランス語の連声現象全体を説明しているとはいえない。しかし語末子音が発音され、子音が後続の母音と音節を形成する、すなわちリエゾンが起きていることは、この説明から明らかである。

(川口, 2010 : 122)

子音の発音に関して「2つの母音が接触することを回避し発音を和らげる」と Vaudelin 自身が考察していることは大変興味深い。つまり、彼にとってリエゾンは母音接触 (hiatus) を避けることが重要であり、MOT1 の語末において安定的に発音される子音があるならば、MOT1 のリエゾン子音が MOT2 の母音の前で発音されなくてもよいと解釈できるからである。

興味深い特徴の一つとして、Kawaguchi (2011)は間違っリエゾンと思われる発音を指摘している。以下にその例を挙げる。

un comairs de priair, ce nou leuz adraison, IC, p.92.

[ã komers də pri(/j)ɛr, kə nu lœz adresɔ̃]

= un commerce de prière, que nous leur adressons,

以上の例で注目すべき点は、人称代名詞 *leur* と動詞 *adressons* の間に綴り字の s が存在しないにも関わらず、[z]の音が発音されていることである。これについて Kawaguchi (2011)は2つの可能性を与えている。第一の可能性とは、[z]が複数を表す形態的マーカーだということなのである。第二の可能性は、母音に r や z が挟まれて発音された場合に、置換が起こる現象

である。つまり、*cousin* は *courin*、*Marie* は *Masie* と発音される現象である。Thurot (1883 : 2 : 271)によれば、Erasme、Tory、Palsgrave、Sylviusら16世紀の文法家が、*r*と*z*の交替についての記述を残している<sup>111</sup>。一方で、Thurot (1883 : 2 : 273)はこの発音は1620年頃には既に廃れたものになっていたことについても指摘している<sup>112</sup>。少し後の時代になると、Chiflet (1659 : 207)が *On z'a dit, On z'asseure.*のように人称代名詞と動詞の間に[z]を挿入する発音を指摘している。さらに、Hindret (1687 : 234)もまた1687年に人称代名詞 *leur* が *leuz* と[z]を伴って発音を指摘し、批判している<sup>113</sup>。このChiflet (1659)とHindret (1687)の証言から考えられることは以下に述べることである。第一段階として16世紀の *cousin~courin* や *Marie~Masie* に見られる、2つの母音の間における *r* と *z* の交替は、人称代名詞 *leur* にも影響を及ぼし、母音の前で[z]が発音されるにいたる、第二段階として、一方で *r* と *z* の交替はおそらく1620年頃には古風なものになる、それに対して人称代名詞 *leur* の *r* が[z]で発音されることから、おそらくChifletやHindretの時代の頃には複数性を示す形態のマーカースとしての役割を担い始めていたとも考えられる。

#### 5.1.2.5. Vaudelin が記述したフランス語における音韻体系

Vaudelinによる新アルファベットから推測できる、Vaudelinが記述したフランス語の音素は以下に挙げる表のようなものである。

母音	口母音	/i, e, ε, a, ɔ, u, y, œ, ə/
	鼻母音	/ã, ě, õ, ð/
子音	破裂音	/p, b, t, d, k, g/
	摩擦音	/f, v, s, z, ʃ, ʒ/
	鼻音	/m, n/
	流音	/l/
		/r/

表 5-3 : Vaudelin の記述したフランス語の音素目録

<sup>111</sup> Kawaguchi (2011)は脚注で Anthony Lodge との個人的なやり取りについて言及している。Lodgeによれば、話し言葉において *r* と *z* の交替が観察されたのは主に16世紀であり、18世紀までこの特徴が続いたとは考えられないようである。

<sup>112</sup> Thurot (1883)は Godard (1620)の説明を引用している。Godard (1620 : 175)は、「パリの住人は昔、*r*の代わりに*s*を、*s*の代わりに*r*を発音していた(« Nos Parisiens mettoient autrefois (mais cela ne se fait plus ou c'êt fort rarement et seulmant parmi le menu peuple) une *s* au lieu d'une *r* et une *r* au lieu d'une *s* »)」という証言を残している。

<sup>113</sup> Hindret (1687 : 234) は以下のように述べている。「[...] Et encore moins, on leur zadonné ordre de &c. Comme prononcent quantité de gens à Paris qui sans consulter ni la raison ni l'usage estropient toute la prononciation de notre Langue. S'il échappe à quelques-uns de prononcer de cette maniere par une mauvaise habitude qu'ils ont retenuë de jeunesse, ils doivent du moins prendre garde à prononcer regulierement l'*r* de ce pronom personnel, quand ils lisent ou quand ils parlent en public, car assurément c'est faute de ne pas la prononcer. [...] »

Vaudelin のフランス語と現代フランス語を比較した場合に、母音の数と子音の数には相違がある。以下では母音と子音の音素目録についてさらに細かく説明する。

#### 5.1.2.5.1. 母音

母音に関しては、現代フランス語の母音音素体系の一部である /ø/, /o/, /ɑ/ が含まれていない。この時代にはおそらく、現代フランス語の /ø/, /o/, /ɑ/ に相当するものは長母音 /œ:/, /ɔ:/, /ɑ:/ であり、音価の違いではなく長さの違いによって対立していたことがその理由である。

Vaudelin による長母音についての記述は次に述べるようなものがある。

« Qu'en lisant, il faut élever & prolonger la *voyelle* un peu plus que les autres voyelles qui n'ont point d'accent [...] »

(NM. p. 13)

「読むときに、アクセントを持っていない他の母音よりも、その母音を少し高くかつ長くすること、[...]。」<sup>114</sup>

母音の長さについては、Vaudelin は記号の上に横線を入れることで、長母音と短母音とを区別している。

語末における /i, e, ε, a, ɔ, u, y, œ/ と /i:, e:, ε:, a:, ɔ:, u:, y:, œ:/ の長短の対立は、主に男性形と女性形の区別、もしくは単数形と複数形の区別に用いられていた。ただし、これらの母音に関しての長母音と短母音の対立は Vaudelin によって体系的に記述されているわけではない。例えば、語 *mot* の複数形 *mots* には 2 つの発音が与えられている。長母音を伴った « le mô ([le mo:] ) » (IC. p. 146) と短母音を伴った « le mo ([le mo]) » (IC. p. 148) である。フランス語の母音体系の通時的変化において、最も長く保持された長母音音素 /ε:/ は<sup>115</sup>、Vaudelin のテキストにおいても観察される。例えば、語 *mettre* (maitr [metr], IC, p.40) と語 *maître* (mâitr [mε:tr], IC, p.62) のミニマルペアが観察される。

次に、鼻母音については、現代フランス語では /œ̃/ が消失しているが、Vaudelin の時代のフランス語では 4 つの鼻母音 /ã, ê, œ̃, ð/ が保持されている。

無音の *e* ([ə]) については、単音節以外の語末の [ə] を Vaudelin は表記することはない。Martinet (1969 : 158) は「Vaudelin は概して [ə] が弁別価値を持たないことを自覚している」と述べている。語中で [ə] の省略がある一方で、単音節語の語末の [ə] は常に発音されるように記述されている。

以上の考察から Vaudelin の記述したフランス語の母音体系は以下のようなものであると

<sup>114</sup> 川口 (2010 : 123) の訳を引用する。

<sup>115</sup> 近藤 (2013) による 19 世紀末のフランス語母音体系の調査において、長母音 /ε:/ の保持が観察されている。

いえる。

i i:      y y:      u u:  
 e e:      œ œ:      ɔ ɔ:  
 ε ε: Û      ã      õ  
 a a:      ã

これは Milleran の母音体系とほぼ同様のものである。

### 5.1.2.5.2. 子音

Vaudelin の記述したフランス語の子音体系は以下のようなものである。

破裂音	p,	t,	k
	b,	d,	g
摩擦音	f,	s,	ʃ,
	v,	z,	ʒ,
鼻音	m,	n,	ɲ
流音		l,	ʎ
		r, (R)	

表 5-4 : Vaudelin のフランス語の子音体系

子音に関しては、[ɲ]という子音が Vaudelin の発音記号に欠けている。Vaudelin は [ɲ]に相当する発音記号を提示せず、*nia* と表記することによってその音を表現している。この *nia* という綴り字がもう一つ[nj]という発音を示すことはなく、*nia* は基本的に *-gn-*で綴られる語 (例 : *Seigneur, Espagne*) に用いられている。

また、現代フランス語には存在しない子音[ʎ] (*l mouillé* (濡れた/l/と呼ばれるもの) についても以上と同様に、発音記号を与えない代わりに *lia* と表記することでその発音を示している。/r/は、2つの異音である舌尖音の[r]と口蓋垂音[R]を持つことが考えられる。これについて Thurot (1883 : 2 : 270)は以下のように述べている。

« L'r initiale était sans doute prononcée de la gorge ou plutôt avec la lchette, tandis que l'r médiale ou finale était prononcée avec la langue. C'est ce qui explique la permutation de l'r médiale ou finale avec le z et avec l'l, permutation qui serait difficilement explicable si l'r s'était toujours prononcée de la gorge, comme nous le faisons aujourd'hui à Paris. »

Thuot (1883 : 2 : 270)

「一方で語頭の r はおそらく喉でもしくは口蓋垂によって発音されていた。他方で語中もしくは語末の r は舌で発音されていた。このようなことは、語中や語末の r が z や l の音と交替を説明する。もし、r が今日のパリにおいて私たちがするように常に喉で発音されていたら、この交替を説明するのは難しい。」

ただし、Lodge (2004 : 189) はこの 2 つの異音[r]と[R]には社会言語学的な違いがあることを指摘している。以下に引用を挙げる。

«The uvular trill [R], referred to prescriptively as the ‘r grassayé’, developed initially in seventeenth-century Paris (Thuot 1883: 270). Opinions are divided about whether this variant first emerged in lower-upper-class origin, [...]. The label ‘grassayé’ is always negative, however, and upper-class variants are rarely stigmatized in metalinguistic texts of this period. In Molière’s *Le Bourgeois Gentilhomme* (Act II; scene 4) apical [r] is firmly recommended by the elocution master to the upward-climbing *bourgeois*. »

Lodge (2004 : 189)

「喉で鳴らす r と規範的に言及される口蓋垂震え音[R]は 17 世紀に初めて現れた。この異音が最初に下層上流階級の生まれの話者において初めて出現したか否かについての意見は分かれる。しかしながら、喉で鳴らすというレッテルは常に消極的である。そして上流階級の変異はこの時期のメタ言語的なテキストにおいてほとんど烙印を押されることはない。モリエールの作品『町人貴族』の中で、貴族階級に上り詰めようとしている者に対して、発声法教師は舌先音の[r]を固く推奨している。」

少なくとも、Vaudelin の時代においては、舌先音[r]が正しいとされていたのではないだろうか。

#### 5.1.2.5.3. 半母音

半母音については、Vaudelin は「一つの音節内で発音される二つの母音(NM, p.6) <sup>116</sup>」と説明している。それらは、*Dieu, lui, bien, oui* で発音される音を示している。つまり、Vaudelin が二重母音と呼ぶものが半母音に当たるものである。ただし、これらの半母音に対応する記号はなく、Vaudelin は [j], [ɥ], [w]をそれぞれ、/i/, /y/, /u/の変異と考えている。これらの半

---

<sup>116</sup> 原文 : « Deux voyelles unies & prononcées dans la mesme syllabe font une Diphthongue (...) »



母音を示すために、それぞれ/i/, /y/, /u/の後ろに母音字を付けている。

半母音		転写	例
[j]	/i/ + 母音	= i + 母音字	<i>bien</i> [bjɛ̃] « bi-in »
[ɥ]	/y/ + 母音	= u + 母音字	<i>depuis</i> [dpɥi] « dpui »
[w]	/u/ + 母音	= ou + 母音字	<i>oui</i> [wi] « oui »

表 5-5 : Vaudelin の半母音とその転写方法

## 5.2. コーパスの作成方法

### 5.2.1. Milleran (1694)

Milleran は綴り字の発音有無を示すために特別な表記法を使用し、発音されない綴り字は、立体で書かれた文章において、発音されない子音の綴り字をイタリック体によって表記している。これは、イタリック体で書かれた文章においても同様で、この場合には発音されない子音の綴り字は立体で表記される。よって、この表記法に従って転写を行い、コーパスを作成した。

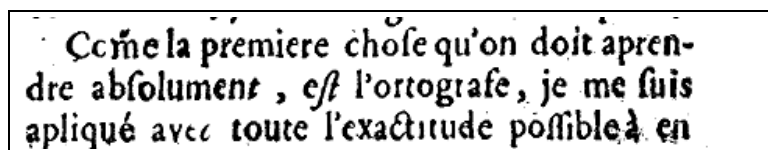


図 5-5 : Milleran の綴り字表記の一例

例えば、以上の抜粋は電子化の際に以下のように転写を行った。

comē la première chose qu'on doit apprendre absolument, est l'ortografe, je me suis  
apliqué avec toute l'exactitude possible à en....

### 5.2.2. Vaudelin (1713, 1715)

音声記号で書かれた Vaudelin 文献のコーパス化方法については、発音記号に対応する綴り字（つまり図 5-3 において一番上に書いてある綴り字）を用いて転写を行った。例えば、Vaudelin が音声記号を使用したところを、音声記号に対応する綴り字を用いることで、特殊文字を使用しない方法で転写を行った。以下は Vaudelin の音声記号と転写時に使用した綴り字の対応例である。

Vaudelin の音声記号	転写時に使用した綴り字	発音記号
A. a.	A / a	[a]

表 5-6 : Vaudelin の音声記号と転写時の綴り字および発音記号例(A, a)

Vaudelin のアルファベット	転写時に使用した綴り字	対応するであろう発音記号
A. a.	A / a	[a]
Ä. ä.	AN / an	[ã]
Ä. ä.	AI / ai	[ɛ]
E. e.	E / e	[e]
I. i.	IN / in	[ɛ̃]
I. i.	I / i	[i]
E. e.	E* / e*	[ə]
O. o.	O / o	[o]
Ö. ö.	ON / on	[õ]
E. e.	EU / eu	[ø]
U. u.	UN / un	[ũ]
O. o.	OU / ou	[u]
U. u.	U / u	[y]

Ĉ. ĉ.	C / c	[k]
G. g.	G / g	[g]
H. h.	H / h	[ŋ]
J. j.	J / j	[ʒ]
N. n.	N / n	[n]
L. l.	L / l	[l]
R. r.	R / r	[r]
Z. z.	Z / z	[z]
S. ŝ.	S / s	[s]
D. d.	D / d	[d]
T. t.	T / t	[t]
V. v.	V / v	[v]
F. f.	F / f	[f]
P. p.	P / p	[p]
B. b.	B / b	[b]
M. m.	M / m	[m]

表 5-7 : Vaudelin の音声記号と転写時の綴り字および発音記号例 (全アルファベット)

以下に転写の実例を挙げる。

## Reflacsiq.

I. Si d'Ecrir ôtrma ce l'q Parl a  
Fras, i n'an ariva cepe ô ce de pûz  
icqveniã ; e si l'q ne s'a plainiea po-i  
partô, e dpui lo-ta, parson n'ora  
jama pafe a la Reform del'Ortograf  
Frasâz.

## Reflaicsion.

I. Si d'Ecrir ôtrman ce\* l'on Parl an Frans, i n'an n arivai ce\* peu ou ce\* de\*  
ptîz inconveniân ; e si l'on ne s'ai plainieai po-in partou, e depuis lon-tan,  
pairson n'orai jamai panse a la Reform de l'Ortograf Fransâiz.

(I. Si d'Écrire autrement que l'on Parle en France, il n'en arrivait que peu ou  
que de petits inconvénients ; et si l'on ne s'est plaint point partout, et depuis  
longtemps, personne n'aurait jamais pensé à la Réforme de l'Orthographe  
Française.)

図 5-6 : Vaudelin の発音記号の転写例

本研究では Vaudelin の 2 つの文献に対する IPA 転写は行わないこととする。その理由として、18 世紀フランス語に存在すると考えられる音素 /j, w, ɥ, ŋ, ʁ/ に対して、Vaudelin が音声記号を与えていないためである。ただし、必要があれば IPA 表記を付することにする。

### 5.3. 二つのコーパスを比較する意義

二つのコーパスを比較する意義を説明するために、まずそれぞれの文献に対する先行研究について手短かに説明する。そして、本研究の位置付けとその狙いについて説明する。

#### 5.3.1. 先行研究に対する本研究の位置付け

Milleran (1694)そして Vaudelin (1713, 1715)には既に先行研究が複数存在することをここで指摘しておく。これらは文法書に見られる規範とは異なる可能性がある当時のフランス語の発音を知ることができる貴重な文献であるためである。特に Vaudelin (1713, 1715)は発音記号を使用して当時の発音を記しているため、実際の言語使用の一面が観察されることが期待される。まず、以下ではそれぞれの文献の先行研究を紹介し、本研究との違いについて説明する。

### 5.3.1.1. Milleran (1694)に関する先行研究

Milleran (1694)を既に分析した先行研究は、Crevier, I. (1994). *La liaison à la fin du XVIIe siècle dans la Nouvelle grammaire française de René Milleran, de Saumur*. Thèse de Ph.D. Montréal : Université de Montréal. (「René Milleran の新フランス語文法における 17 世紀末のリエゾン」)である。

Crevier (1994)の研究の主な目的は、語末子音字が母音、子音および休止の前でどのように発音されていたかという文献学的調査である。Crevier (1994)は母音の前における語末子音字の発音に限定して研究を行ったわけではなく、またリエゾンの実現における統語的要因、形態的要因について詳しく調査したものではない。語末子音字の発音に関しては、Crevier (1994)によって詳しく分析されているため、本研究は Crevier (1994)の研究の要約を行う。

### 5.3.1.2. Vaudelin (1713, 1715)に関する先行研究

Vaudelin (1713, 1715)の主な先行研究は複数ある。まず、最初に 20 世紀に行われた三つの研究について説明する。

- Cohen, M. (1946). *Le français en 1700 d'après le témoignage de Gile Vaudelin*, Paris : Librairie ancienne Honoré Champion.
- Martinet, A. (1969). *Le français sans fard*. Paris : Presses universitaires de France.
- Krier, F. (1993). Gile Vaudelin und die französische Orthographie, Schmidt-Radefeldt, Andreas Harder (hrsg.), *Sprachwandel und Sprachgeschichte, Festschrift für Helmut Lüdtke*, Tübingen : Narr, p.117-122.

川口 (2010 : 121)は Gile Vaudelin の二つの著作を言語学的に分析した最も詳細な研究として Cohen (1946)を挙げている。Cohen (1946)によれば、Ambroise-Firmin Didot (« *Observations sur l'orthographe ou orthographe française*, 2<sup>ème</sup> édition, 1868)、F.Brunot (« *Histoire de la langue française* 10me VI, p.948 »)、そして 19 世紀末のフランス語学者 Thurot (1883)は、その著作のなかで、Vaudelin の 2 つの著作について触れているが、丹念に読んだというわけではないうである。よって、Cohen (1946)の研究が Vaudelin 文献についての最初の研究書であると考えられる。ただし、「60 年前という時代的制約もあり、Vaudelin の著作をデータベース化し、徹底的な分析を行ったというわけではない。どちらかといえば、規則的な部分よりも、綴り字の特異な部分、言語学的に注目すべき点に力点が置かれているといえる」と川口 (2010)は指摘している。

Vaudelin の著作は、「17 世紀・18 世紀フランス語の音声研究にとって、欠くことができない書である」と川口 (2010 : 121)が述べているように、Martinet (1969)は当時のフランス語の音声体系を Vaudelin の著作を基に提示している。

また、21 世紀以降の研究については、以下の 2 つの論文が挙げられる。

- 川口裕司 (2010). 「18 世紀フランス語におけるリエゾン Gile Vaudelin 文献の予備的調査から」, 『コーパスに基づく言語学教育研究報告 5』, 東京外国語大学大学院総合国際学研究科, p.119-153.
- Kawaguchi, Y. (2011). French Liaison in the 18th Century -Analysis of Gile Vaudelin's textes -, *Corpus-based Analysis in Diachronic Linguistics*, Y. Kawaguchi, M. Minegishi, W. Viereck (eds.), John Benjamins, pp.133-151.

これら 2 つの論文は 1 人の研究者によって、ほとんど同一の内容がそれぞれ日本語および英語で書かれたものである。川口 (2010) および Kawaguchi (2011) の目的は Vaudelin (1713, 1715) のコーパスで用いられている綴り字を分析することによって、18 世紀初頭のフランス語におけるリエゾンの現象を記述し、その特徴を共時的および通時的に位置づけることである(川口, 2010 : 119)。川口 (2010) および Kawaguchi (2011) の研究はページ数が限定される論文という形で発表されているが、限られた語のリエゾンの実現の様子については把握できる。ただし、Vaudelin の文献における語末子音字が、母音、子音および休止の前でどのように発音されるかについては調査されず、またリエゾンについても統語的要因などに対する分析が行われているわけではない。

### 5.3.2. 本研究の位置付けとその狙い

以上で挙げた先行文献と本研究の違いは、まず本研究が Milleran および Vaudelin のフランス語におけるリエゾンの実現がどのように違うのかということに重点を置き、これらのコーパスの比較を行うことである。この時代の実際の言語使用におけるリエゾンの実現を観察することは、大変難しく、本研究で用いるコーパスにおいては綴り字および発音記号を分析することによって、そして文法書の中で見つけることができるリエゾンに関する説明書きを参考することによってしか、事実に近いことはできない。しかし、これらの文献を分析することで、当時のフランス語においてリエゾンがどのように実現されていたのか、また二つのコーパスに類似する点および異なる点を明らかにすることで、見えてくるものがあるはずである。特に、二つのコーパスにおいて異なる特徴があるならば、なぜこの二つのコーパスにおいてリエゾンの実現が異なるのか、その理由を考えることも非常に重要なことである。

Milleran (1694) の文献は 17 世紀末に、そして Vaudelin (1713, 1715) の文献は 18 世紀初頭に出版されているため、通時の変化を観察されることを期待できるとも考えられる。ただし、20 年という短期間で大きな通時の変化を観察できるかどうかは定かではない。また、Vaudelin の発音記号は既に 17 世紀末にアカデミー・フランセーズに提出されており<sup>117</sup>、実

---

<sup>117</sup> Vaudelin (1713, NM, p.30) は以下のように述べている。 « En 1692, ce système (moins touché) fut envoyé à l'Académie Française, qui deux ans après donna des marques publiques de l'estime

際にはこれら 2 人の著者は同時代に生きた人々であるとする方が適格であるとする<sup>118</sup>。よって本研究ではむしろ、これらの 2 つの文献に用いられているスタイルが決定的に異なるという仮説を設定する。スタイルの違いによる差異というのは現代フランス語においては、主観的に語られ、客観的にも証明されている。まず主観的な意見の例として、Martinon (1913 : 356)が「会話においてよりも読む際にリエゾンをより実現するのは明らかである。なぜなら読む時には、言語の正しさを追求するからである。一方で、話す際には、より少ない努力で理解し合うことしか求められない」と述べている。また、客観的には、特に Mallet (2008 : 189)の研究において、会話とテキストの朗読というスタイルの間でリエゾンの実現率に大きな違いが観察されている。

それでは、Milleran と Vaudelin の文献の間にはどのようなスタイルの違いが観察されるのだろうか。これら 2 つの文献の目的には、「良き発音」を教えることであるという共通点があるが、本の趣旨は異なる。まず Milleran の書は文法書であり、発音に対する説明書きが多い。それに対して、Vaudelin の書は特に IC の方では祈りと教理問答が発音記号で記してある。この違いから Milleran (1694)のフランス語はより文語的であり、そして Vaudelin (1713, 1715)のフランス語はより口語的であるということが考えられる。

まず、Milleran (1694)の文献がより文語的であるとする理由は、そもそも Milleran の書は文法書であり、主にアルファベットの発音を説明する文章がほとんどである。よって、疑問文のようなものは例文としては含まれるものの、会話文のようなものは全く含まれることはない。それに対して、Vaudelin (1713, 1715)の文献がより口語的であると解釈する理由として、例えば Vaudelin のテキストには対話と捉えることができる疑問文とそれに対する返答文とが交互に続くことも多い。例えば、「子供のための教理問答 (Catéchisme pour les jeunes enfants, p.31-35)」というセクションでは、以下に挙げるような対話が含まれる。

---

(...)» (1692 年にこの方法はアカデミー・フランセーズに送られ、2 年後に評価の公印を与えられた。)

<sup>118</sup> 残念ながら、Vaudelin の出自および生年を示すような文献は見つかっていない。

アルファベット	フランス語綴り字	日本語訳
C'âi-se* ce* Di-eu?	Qu'est-ce que Dieu ?	神とは何か？
S'âi le* Createur du Sial e de* la Tâir,e le* souvrin Sainie*-eur de* tout hôz.	C'est le Créateur du Ciel et de la Terre, et le souverain Seigneur de toute chose.	神は天と地の創造者であり、 全てのものの至上の主であ る。
I at-i pluzieur Di-eu?	Y a-t-il plusieurs Dieux ?	神は複数あるのか？
Non, i n'i ann a c'un, e in'i an peut avo-air pluzieur.	Non, il n'y en a qu'un, et il n'y en peut avoir plusieurs.	いいえ、一人だけであり、複 数存在することはない。
Ou âi Di-eu?	Où est Dieu ?	神はどこにいるのか？
Il âit o Sial e an la Tâir, e an tou li-eu.	Il est au Ciel et en la Terre, et en tous lieux.	天と地にあり、そしてどこに でもいる。
Di-eu at-i toujours ete?	Dieu a-t-il toujours été ?	神は常にいたのか？
Oui, i n'a poin u de* comansman, e i n'ora jamâi de* fi.	Oui, il n'a point eu de commencement, et il n'aura jamais de fils.	はい、始まりはなく、息子も ない。
Pourco-ai Di-eu nouz at-i cree?	Pourquoi Dieu nous a-t-il créé ?	なぜ神は我々を創造したの か？
Pour le* conâitr, l'aime, le* sairvi, e par se* mo-aii-in obtni la vî etairnail.	Pour le connaître, l'aimer, le servir, et par ce moyen obtenir la vie eternelle.	知るため、愛するため、仕え るため、そして永遠の命を得 るために。

表 5-8 : Vaudelin コーパスにおける対話の例

また興味深いのは、Milleran と Vaudelin の文献に表れる疑問符の数が明らかに違うことである。

	Milleran	Vaudelin
疑問符の数	126 個	381 個
コーパスの語数	66663 語	20889 語

表 5-9 : Milleran コーパスおよび Vaudelin コーパスにおける疑問符の数の比較

以上の表から明らかなのは、Vaudelin コーパスは Milleran コーパスの約 3 分の 1 の語数だが、約 3 倍の疑問符の数を含むということである。

ところで、Vaudelin が記述したフランス語がより口語的であるとしても、そのスタイルはぞんざいな話し方、俗的な民衆の話し方というわけではないだろう。例えば、Cohen (1946 : 4) は Vaudelin のフランス語について次のような考察を行っている。



« Vaudelin n’enseigne rien sur une prononciation solennelle, du moins en prose. Il parle seulement du français de la « conversation » des gens cultivés. Son texte est en général écrit sur ce ton non solennel ; les catéchismes en particulier fournissent de vrais fragments de dialogues. Mais il semble probable qu’il faut tenir compte de certaines différences de registre ; les *Réflexions de la Nouvelle manière* ..., et certaines prières fondamentales portent sans doute la trace d’une allure plus soutenue. »

Cohen (1946 : 4)

「Vaudelin は厳粛な発音について、少なくとも散文において、何か教示を与えているわけではない。教養ある人々の会話で話されるフランス語だけに限定して語っているのである。彼のテキストには、概して厳粛ではない語調について書かれている。特に教理問答というのは、会話に存在する真の断片を提供している。しかし、レジスターの違い、つまり新しい方法についての考察について考慮しなければならないのは確実である。そして、基本的な祈りのいくつかはおそらく、最も丁寧な話し方についての輪郭を提示している。」

それに対して、Kawaguchi (2011)は「Vaudelin の記述はそのスタイルにおいて日常的なものからはかけ離れているように見える。彼のテキストは発音されるために書かれたのではなく、声をだして、もしくは静かに読まれるために書かれたと考えられる」と異なる見解を示している。確かに、NM では発音記号やフランス語の発音について、IC ではキリスト教の祈りや教理問答といった内容を記述しているため、Vaudelin 自身の言葉を借りれば「親しい間で用いられる」かつ「率直」な会話が記述されているわけではない。むしろ、このように判断すべきではないだろうか。Vaudelin によって既述されたフランス語は丁寧なスタイルではあるが、必ずしも演説や韻文が読まれるときに期待されるような書き言葉的なスタイルであるわけではない。

以上のことから、Milleran の文献は演説や韻文が読まれる際に期待される書き言葉的なスタイルが観察され、Vaudelin ではそこまで書き言葉的ではないが、より口語的で丁寧なスタイルが観察されることが期待できるだろう。そして、Milleran と Vaudelin のコーパスにおけるリエゾンの実現の仕方を比較することで、2つのコーパスにおけるスタイルの違い、そして2つのスタイルにおけるリエゾンの実現の違いを観察することも本研究の目的となる。

#### 5.4. 分析方法

本研究では、分析対象の文献を電子化した後に、研究対象であるリエゾンの実現を観察するためのメタデータの作成を行う。このメタデータは Excel を使用して作成する。

### 5.4.1. メタデータの作成方法

メタデータが含むものは、ページ情報、語末子音字の発音有無を示すコード、MOT1 および MOT2 の情報、MOT1 および MOT2 の品詞情報、これらの語が含まれる文情報である。以下では、特に語末子音字の発音有無を示すコード、MOT1 および MOT2 の品詞情報のために付与するタグについて説明する。

#### 5.4.1.1. 語末子音字の発音有無を示すコード

語末子音字の発音有無を示すためにそれぞれコードを与える。このコードは 3 つの数字 および 1 つのアルファベットを含む。それぞれの記号およびアルファベットは以下のような情報を含む。

1 番目の記号 (数字)	語末子音の発音有無	1=発音あり 2=発音なし
2 番目の記号 (数字)	後続する要素	1=後続語が母音で始まる語 2=後続語が子音で始まる語 3=休止 (コンマ、ピリオド、空白) 4=その他
3 番目の記号 (数字)	音節数	1=単音節 2=複数音節
4 番目の記号 (アルファベット)	予想される子音の発音	p, t, k, f, v, z, l, r

表 5-10：語末子音字の発音有無を示すコード

これによって語末子音字の発音有無、後続する要素が母音、子音、休止であるか否か、MOT1 の音節数、語末子音の種類という情報が含まれる。

リエゾンやアンシェヌマンといった外連声は通常休止がある場合には起こらない。実際の音声がない場合には、休止の判断はテキスト上の句読点 (punctuation) に頼らなければならない。例えば、休止について Milleran は「長い、もしくは短い休止を挟むことなしに、話すことは不可能である (1:48)」と述べているように、句読点はイントネーション、リズムグループなどの区切れを示す記号である。

いくつかの句読点 (le point, les deux-points, la parenthèse など) について Milleran (1694: 1:49-50) は以下の要素を挙げ、説明している。

- ① ピリオド(「.」)は話法において完璧な意味を示す、また(書物)を読む際には、大

きな休止を意味する。

- ② コロン (「:」)は、より完全ではない意味を示す、読む際にはより小さい休止を意味する。
- ③ 括弧 (「()」)は休止を持つ文から切り離された文を収納するためである。
- ④ セミコロン (「;」)は継続と話の関係を何通りかの方法で表す。
- ⑤ 感嘆符 (「!」)は、感嘆の情を表す。
- ⑥ 疑問符 (「?」)は疑問の句読点である。
- ⑦ コンマ (「,」)の後は休止がなく、これは (要素を) 繋ぎ、双方に絶対的に依存する発話を分離させるために必要である。

特にコンマについて休止がないとしているが、Crevier (1994: 24)の指摘に従えば、Milleranのコンマの使い方には、休止が予想されるものと予想されないものがあるといえる。多くの場合には、コンマは休止を示す、もしくは発話においてイントネーションの断絶を意味する。そして、それ以外の場合では、コンマが休止を表さずに挿入されている (Crevier, 1994: 25)。ただし、本研究ではデータ処理の便宜上、コンマが休止を表すものと解釈することにする。

#### 5.4.1.2. メタデータにおける品詞タグ

メタデータにおける品詞タグは、リエゾンコンテキストにおける MOT1 と MOT2 の統語的關係を観察することを容易にするために使用する。品詞タグは以下のようなものである。

<b>DET</b>	限定辞
<b>NUM</b>	数詞
<b>ADJsg, ADJpl</b>	単数形形容詞、複数形形容詞
<b>NOMsg, NOMpl</b>	単数形名詞、複数形名詞
<b>V</b>	動詞
<b>PAR</b>	過去分詞
<b>Gérondif</b>	ジェロンディフ
<b>CON</b>	接続詞
<b>PRE</b>	前置詞
<b>ADV</b>	副詞
<b>PRO</b>	代名詞
<b>Figé</b>	慣用表現

表 5-11: 品詞タグ

### 5.4.1.3. Excel 上のメタデータ

Excel 上のメタデータは以下のようなものになる。

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
ページ数	文献名	コード	MOT1 の品詞タグ	MOT1	MOT2 の品詞タグ	MOT2	コンテキスト
69	IC	222r	NOMpl	Exercices	PRE	pour	Exercices pour la Communion.
69	IC	121r	PRE	pour	DET	la	Exercices pour la Communion.
69	IC	222z	V	Rappelez	PRE	dans	I. Rappelez dans votre mémoire la dernière
69	IC	221z	PRE-dans	dans	DET	votre	I. Rappelez dans votre mémoire la dernière
69	IC	111z	PRO	vous	V	avez	Communion que vous avez faite ; remerciez-en
69	IC	222z	V	avez	PAR	faite	Communion que vous avez faite ; remerciez-en
69	IC	112z	V	remerciez-	PRE	en	Communion que vous avez faite ; remerciez-en

表 5-12: メタデータの一例

まず、(1)ページ数は、連辞が文献のどのページにあるのかを示している。(2)文献名は、Milleran の文献、Vaudelin の文献 (IC, NM) を示している。(3)語末子音字の発音有無を示すコードを入力する。(4)MOT1 の品詞タグおよび(5) MOT1 は 2 つの語の連辞における左側の語である MOT1 の情報を示すものである。これは、(6) MOT2 の品詞タグおよび(7) MOT2 についても同様に、MOT2 の情報を示すものである。そして、(8) コンテキストはこの連辞がどのようなコンテキストにおいて表れたかを示すものである。

## 5.5. 第 5 章のまとめ

本章では、まず本研究で使用する 2 つのコーパスに関して、それぞれの文献で用いられている綴り字および発音記号の特徴、そしてそれぞれのフランス語音韻体系について説明した。また、本章ではこれら 2 つのコーパスに対するそれぞれの先行研究を紹介し、なぜ本研究がこれらのコーパスを比較するという目的を掲げるのかについて理由付けを行った。Milleran コーパスと Vaudelin コーパスにおいてどちらも「良き発音」を教えることをその目的に挙げているが、本の趣旨は少し異なる。まず Milleran の書は文法書であり、発音に対す

る説明書きが多い。これに対して、Vaudelin の書は特に祈りと教理問答が発音記号で記してあることが特徴的である。この違いから Milleran コーパスでは文語的、そして Vaudelin コーパスではより口語的なフランス語の発音が観察されるということが考えられる。よって、リエゾンの実現に影響するスタイルの違いがどのようなものか、2つのコーパスの比較で得られるということを仮定するに至った。以降の章では、これら 2 つの文献を分析することによって、当時のフランス語においてリエゾンがどのように実現されていたのか、また 2 つのコーパスに類似する点および異なる点を明らかにする。

## 第六章 Milleran (1694)コーパスにおける語末子音字の発音およびリエゾン

本章では Milleran コーパスにおける語末子音字の発音およびリエゾンについての分析を行う。

### 6.1. 語末子音字の発音

以下では、Milleran (1694)で観察される語末子音字の発音について品詞毎に観察を行う。品詞のカテゴリーは、冠詞、名詞および形容詞、副詞、代名詞、前置詞、接続詞、数詞、関係代名詞、動詞に分類する。

#### 6.1.1. 冠詞

##### 6.1.1.1. 定冠詞

##### 6.1.1.1.1. 単数形

単数形の冠詞には語末子音字 *-l* [l], *-r* [r], *-t* [t] のものがある。語末子音字が *-l* および *-r* の定冠詞では、基本的に語末子音字が発音される。

	子音の前	母音の前	休止の前
lequel [ləkɛl]	4	3	-
quel [kɛl]	16	13	2
tel [tɛl]	2	-	2
leur [lœr]	112	40	5

表 6-1 : 語末子音字 *-l* [l], *-r* [r] を持つ定冠詞

一方、語末子音字 *-t* [t] を持つ以下のような冠詞母音で始まる語の前において発音されるが、子音で始まる語の前では発音されない傾向が観察される。

	子音の前	母音の前	休止の前
susdit ([sysdit]), du dit ([dydit]), ledit ([lədit])	-	3	-
du di# ([dydi]), ledi# ([lədi])	6	-	-

表 6-2 : 語末子音字 *-t* [t] を持つ定冠詞

##### 6.1.1.1.2. 複数形

複数形の定冠詞はいずれも語末子音字は *-s* [z] である。子音と休止の前において子音字 *-s* がイタリック体で表示されないエラーが確認されたが、いずれも 2 パーセント以下である。

よって、子音および休止の前で語末子音字は発音されないと判断できる。

	子音の前	母音の前	休止の前
les [ləz]	-	188	-
les <del>s</del> [lə]	687 (+13) <sup>119</sup>	32	9 (+2)
ces [sɛz]	-	7	-
ces <del>s</del> [sɛ]	97 (+2)	1	1(+1)
leurs [ləʁz]	-	8	-
leurs <del>s</del> [ləʁ]	61 (+1)	3	1
mes [mɛz]	-	5	-
mes <del>s</del> [mɛ]	11	2	2
tes [tɛz]	-	-	-
tes <del>s</del> [tɛ]	-	-	1
ses [sɛz]	-	8	-
ses <del>s</del> [sɛ]	32	-	1
nos [noz]	-	2	-
nos <del>s</del> [no]	5	-	-
vos [voz]	-	1	-
vos <del>s</del> [vo]	-	-	-
sus-dits [sysdiz]	-	1	-
sus-dites <del>s</del> [sysdit]	1	-	-
lesquels [ləkɛlz]	-	-	-
lesquels <del>s</del> [ləkɛl]	12	4	-
lesquelles [ləkɛlz]	-	3	-
lesquelles <del>s</del> [ləkɛl]	9	-	-

表 6-3 : 語末子音字-s を持つ定冠詞

定冠詞の語末子音字-s は母音の前で常に発音されるわけではない。特に定冠詞 *les* が母音の前に位置する例は合計で 220 例あるが、そのうちの 32 例では語末子音字が母音の前で発音されない例がある。この点については、リエゾンの分析において詳細に観察する。

<sup>119</sup> 括弧()に入った数が示すものは、エラーと考えられる例数である。つまり、(+13)というのは、子音の前で立体で表示されたが、実際にはイタリック体で示されるべきであると考えられる例数が 13 例あったということを意味する。

## 6.1.1.2. 不定冠詞

### 6.1.1.2.1. 単数形

単数形の不定冠詞については、*-t* [t]を語末子音字に持つ *tout* が本コーパスで観察された。以下に語末子音字の発音の有無の分布を以下の表に示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>tout</i> [tut]	9	3	-
<i>tou#</i> [tu]	15	-	-

表 6-4：語末子音字*-t*を持つ不定冠詞

不定冠詞 *tout* の語末子音字*-t* は母音の前で常に発音される。さらに子音の前でも子音字が発音される例が 9 例観察された。以下に例を挙げる。

#### - 語末子音字が発音される例

Neanmoins j'au~~r~~ois été aussi aise d'en desabuser autant **tout** le monde des cete premiere Edition que des consones, (0 : 9-10)

#### - 語末子音字が発音されない例

ils auroient bien mieux fait d'écrire pour **tou#** le monde en écrivant pour les premiers que de n'écrire, (0 : 12)

よって、子音の前において語末子音字*-t* は完全に脱落したわけではないことが明らかである。

### 6.1.1.2.2. 複数形

本コーパスにおいて *-z* を語末子音字として持つ複数形の不定冠詞は、*des*, *plusieurs*, *quelques*, *certain*s, *certain*es, *tous*, *toutes* が観察された。まず、*des* に関しては、子音と休止の前においてエラーであると考えられるものが少数観察されるが、基本的にはイタリック体で表示される。母音の前で常に語末子音字が発音されるわけではない。



	子音の前	母音の前	休止の前
des [dɛz]	-	135	-
deṣ [dɛ]	423 (+5)	16	1(+1)
plusieurs [plyzjøɛrz], plusieurṣ [plyzjøɛz]	-	4	-
plusieurṣ [plyzjøɛr], plusieurṣ̣ [plyzjø]	40	6	1
quelques [kɛkz]	-	11	-
quelqueṣ [kɛk]	21	6	-

表 6-5 : 語末子音字-z を持つ不定冠詞 *des, plusieurs, quelques*

次に、*certain*s, *certain*es, *tous*, *toutes* に関しては母音で始まる語の前および休止の前に位置する例は観察されない。子音の前では語末の子音字-s は常にイタリックで表示されている。

	子音の前	母音の前	休止の前
certaiṇs [sɛrtɛ̃]	12	-	-
certaiṇes [sɛrtɛ̃n]	3	-	-
touṣ [tu]	93	-	-
touteṣ [tut]	66	-	-

表 6-6 : 語末子音字-z を持つ不定冠詞 *certain*s, *certain*es, *tous*, *toutes*

他の不定冠詞の複数形において子音および休止の前では語末子音字が発音されず、母音の前では語末子音字が発音されることから推測するなら、これらの不定冠詞の語末子音字は母音の前で発音され、休止の前では発音されない。

## 6.1.2. 名詞および形容詞の語末子音字の発音

Crevier (1994)は名詞および形容詞の語末子音字の発音に関してかなり詳細な調査結果を提示している。よって、Crevier (1994)の研究を基に、名詞および形容詞の語末子音字の発音の有無を要約することに留める。

### 6.1.2.1. 単数形名詞および単数形形容詞

#### 6.1.2.1.1. 語末子音字 -f ([f])

Crevier (1994 : 60)によれば、ラテン語の語尾が-ivus もしくは-ivum であった [-if]を語末に持つ語は常に[f]が発音される。語末の f は一般的に多くの場合に発音されるが、いくつか例外がある。まず、*bœuf*, *œuf*, *neuf* のような語は母音および休止の前で発音されるものの、子音の前では[f]は発音されない。次に、*apprentif*, *bailli(f)*, *clef*, *couvre-chef* は何れの場合にも語末の[f]は発音されない。そして、*cerf*, *nerf* に関しては、休止の前において[sɛr] / [nɛr] および [sɛrf] / [nɛrf] の 2 種類の発音が可能であると Crevier (1994 : 66)は指摘している。

	子音の前	母音の前	休止の前
語末子音字- <i>f</i> ([f])一般的傾向 (例 : <i>adjectif, naïf, captif, etc.</i> )	+	+	+
<i>bœuf, œuf, neuf</i>	-	+	+/-
<i>apprentif, bailli(f), clef, couvre-chef</i>	-	-	-
<i>cerf, nerf</i>	-	?	+/-

表 6-7 : 語末子音字-*f* ([f])を持つ単数形名詞および単数形形容詞

#### 6.1.2.1.2. 語末子音字-*l* ([l])

Crevier (1994 :68-69)によれば、-*l* ([l])が語末にある語は2つの例外を除き常に発音される。

	子音の前	母音の前	休止の前
語末子音字- <i>l</i> ([l])の一般的傾向	+	+	+
<i>cul, saoul</i>	-	?	-

表 6-8 : 語末子音字-*l* ([l])を持つ単数形名詞および単数形形容詞

2つの例外とは、*cul, saoul*であり、これらの語は子音および語末において[l]が発音されない。ただし、母音の前でこの語末子音字-*l*が発音されるかは不明である。また、Milleran (1694 : 2 : 74)は語 *cul* の-*l*について全く発音されることはなく、むしろアクサンシルコンプレックスを付けた *Cû* という綴り字を書くように注意を促している。

#### 6.1.2.1.3. 語末子音字 -*l* ([ʎ]) (-*ail*, -*eil*, -*euil*, -*ouil*, -*il*)

Crevier (1994 : 72-73)によれば、-*ail*, -*eil* ([εʎ]) を語末に持つ語は語末で[ʎ]の音が常に発音される。一方、-*ouil* および-*il* を語末に持つ語においては[ʎ]は発音されることはない。ただし、語 *gentil* は例外である。この語は母音で始まる名詞に前置する場合に[ʎ]が発音されるとCrevier (1994: 76)は指摘している。

	子音の前	母音の前	休止の前
- <i>ail</i> [aʎ], - <i>eil</i> [εʎ] (例 : <i>accueil, cercueil, conseil, travail,</i> <i>etc.</i> )	+	+	+
- <i>ouil</i> [uʎ], - <i>il</i> [iʎ]	-	-	-

(例 : <i>fenouil, fusil, genouil, gril, nombril, outil, persil, sourcil, verrouil</i> )			
<i>gentil</i> [ʒɑ̃tiʎ]	-	+	-

表 6-9 : 語末子音字 *-l* ([ʎ]) を持つ単数形名詞および単数形形容詞

#### 6.1.2.1.4. 語末子音字 *-c, -g, -ch* ([k])

語末子音字 *-c, -g, -ch* が読まれる場合には、語末子音[k]が発音される。基本的に *-ec, -ic, -oc, -ac, -ach* を語尾に持つ語は子音、母音および休止の前で発音される。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>-ec</i> [ɛk], <i>-ic</i> [ik], <i>-oc</i> [ɔk], <i>-ac</i> [ak], <i>-ach</i> [ak] (例 : <i>almanach, arc, bec, choc, etc.</i> )	+	+	+
(1) <i>-ng, -nc</i>	-	-	-
(1') <i>blanc, sang, franc</i>	-	+/-	-
(2) <i>bourg, clerc, marc</i>	-	-	-
(2') <i>arc, parc, porc, turc</i>	+	+	+
(3) <i>-sc</i>	+	+	+

表 6-10 : 語末子音字 *-c, -g, -ch* ([k]) を持つ単数形名詞および単数形形容詞

ただし、*-ec, -ic, -oc, -ac, -ach* 以下の語尾を持つ語では語末子音字の発音に揺れがある。

- (1) *-ng, -nc* を語尾に持つ語、つまり鼻母音が語末で発音される語において子音字[k]は発音されない。ただし、(1') *blanc, sang, franc* は例外で、母音の前で発音されることもある。
- (2) *-rc, -rg* を語尾に持つ語は語によって発音が異なる。一方で、*bourg, clerc, marc* の語末で[k]は発音されない。他方で、(2') *arc, parc, porc, turc* の語末で[k]が常に発音される。
- (3) *-sc* を語末に持つ語は、語末において常に[k]が発音される。

#### 6.1.2.1.5. 語末子音字 *-p* ([p])

語末に *-p* の綴り字を持つ語の数は特に多いとは言えず、以下の表に見られるような3つのグループに分類できる。

	子音の前	母音の前	休止の前
(1) <i>camp, chanp, drap, loup, sirop</i>	-	-	-
(2) <i>cap, julep</i>	+	+	+
(3) <i>coup</i>	-	+	+/-

表 6-11 :語末子音字 *-p* ([p])を持つ単数形名詞および単数形形容詞

- (1) *camp, chanp, drap, loup, sirop* はどのような場合にも[p]が発音されない。  
 (2) *cap, julep* は常に[p]が発音される。  
 (3) *coup* は子音の前以外では[p]が発音される。

*coup* の複数形 *coups* について Milleran (2 : 93)は以下のように述べている。

« mais *p.* ne se lit point dans son pluriel.

*Coups*, m. *Ictus*.

Dites donc *Cous*. »

(2 : 93)

「しかし、*p* はその複数形において読まれない。よって、*Cous* と発音する。」

つまり、複数形 *coups* において[p]は発音されないが、語末で[s]が発音される可能性があるということである。

#### 6.1.2.1.6. 語末子音字 *-r* ([r])

語末子音字*-r*が発音されるか否かは、その直前の母音によって異なる。まず、*-ar, -air, -eur, -oir, -or, -our, -ur*を語尾に持つ語において基本的に語末子音字*-r*は発音されるが、それ以外の語尾は語彙ごとに異なる傾向が見られる。

	子音の前	母音の前	休止の前
(1) <i>-ar, -air, -eur, -oir, -or, -our, -ur</i>	+	+	+
(1a) <i>miroir, mouchoir</i>	+/-	+/-	+/-
(1b) <i>monsieur</i>	-	-	-

(1c) 接尾辞- <i>eur</i> ( <i>faiseur, bateur, vuideur, etc.</i> )	+/-	+/-	+/-
<b>(2) -er, -ier</b>	-	-	-
(2a) <i>amer, enfer, fer, fier, hiver, ver, hier</i>	+	+	+
(2b) <i>cher, entier, familier, léger, mer, pluriel, premier, dernier, singulier</i>	+/-	+/-	+/-
<b>(3) -ir</b>	-	-	-
(3a) <i>desir, respir, soupir</i>	+	+	+

表 6-12：語末子音字 *-r* ([r])を持つ単数形名詞および単数形形容詞

- (1) 基本的に語尾-*ar, -air, -eur, -oir, -or, -our, -ur* の語末子音字-*r* [r]は発音される。ただし、以下に示す語は例外的である。
- (1a) *miroir, mouchoir, (encensoir, pressoir)*は子音、母音、休止の前で語末子音字-*r* の発音に揺れがある。
- (1b) *monsieur* においては、語末子音字-*r* は全く発音されない。
- (1c)接尾辞-*eur* (*faiseur, bateur, vuideur*)の語末子音字-*r* の発音には揺れがある。
- (2) 基本的に語尾-*er, -ier* の語末子音字-*r* は発音されない。
- (2a) *amer, enfer, fer, fier, hiver, ver, hier* の語末子音字-*r* は発音される。
- (2b) *cher, entier, familier, léger, mer, pluriel, premier, dernier, singulier* は子音、母音および休止の前で語末子音字-*r* の発音に揺れがある。
- (3) 基本的に語尾-*ir* の語末子音字-*r* は発音されない。ただし、(3a) *desir, respir, soupir* の[r]は発音される。

#### 6.1.2.1.7. 語末子音字 *-t, -d* ([t])

語末子音字-*t, -d* の発音に関しては、語末音節の母音の特徴（短母音/長母音/鼻母音）、また語末子音字が-*t, -d* が単独なのか、もしくは-*rd, -rt, -ct* のような子音クラスターに含まれるのか、といった語末音節の特徴に語末子音字の発音有無が大きく左右されるようである。

	子音の 前	母音の 前	休止の 前
(1) 短母音に語末子音字-t, -d が後続する場合の一般的傾向	+/-	+	+/-
(1a) <i>but, secret, alfabet, electorat, magistrat</i>	+	+	+
(1b) <i>appetit, habit, repit, doigt</i>	-	-	-
(1c) <i>etat, lut(h), avocat</i>	-	+	+
(1d) <i>bout, credit, droit, écrit, esprit, froid, fruit, petit, (im)parfait, laid, mot, muet, preterit, recit, sujet</i>	+/-	+/-	+/-

表 6-13：短母音に語末子音字-t, -d が後続する単数形名詞および単数形形容詞

- (1) 短母音に語末子音字-t が後続する場合の一般的傾向として、子音の前および休止の前でも[t]が発音されることがある。母音の前では[t]が発音される。ただし、以下の場合では異なる傾向が見られる。
- (1a) *but, secret, alfabet, electorat, magistrat* のような語は常に語末で語末子音字-t が発音される。
- (1b) *appetit, habit, repit, doigt* のような語は語末で常に語末子音字-t が発音されない。
- (1c) *etat, lut(h), avocat* のような語は子音の前では語末子音字-t が発音されないが、母音および休止の前では[t]が発音される。
- (1d) *bout, credit, droit, écrit, esprit, froid, fruit, petit, (im)parfait, laid, mot, muet, preterit, recit, sujet* は子音および休止の前において語末子音字-t の発音が可能である。ただし、母音の前において常に発音されるわけではない。

	子音の 前	母音の 前	休止の 前
(2) 語末- $\tilde{V}d/-\tilde{V}t$ (鼻母音)を持つ語の一般的傾向	-	-	-
(2a) 語末に- <i>ment</i> を持つ語	-	+/-	-
(2b) <i>accent, joint, peint, point, pont, second</i>	-	+/-	-
(2c) <i>argent</i>	-	+	+/-

表 6-14：語末に- $\tilde{V}d/-\tilde{V}t$  (鼻母音)を持つ単数形名詞および単数形形容詞

- (2) 語尾に- $\tilde{V}d$ /- $\tilde{V}t$  (鼻母音)を持つ語の一般的傾向は、子音、母音で始まる語および休止の前で語末子音字が発音されないことである。

(2a) 語末に-*ment*を持つ語において、語末子音字-*t*, -*d*は子音および休止の前では発音されない。ただし、母音の前では発音される場合もある。

(2b) *accent, joint, peint, point, pont, second*は、語末子音字-*t*は子音および休止の前では発音されない。ただし、母音の前では発音される場合もある。

(2c) *argent*は子音の前では発音されない。ただし、母音および休止の前では発音される場合もある。

	子音の前	母音の前	休止の前
(3) 語末に- <i>rd</i> , - <i>rt</i> を持つ語 (例 : <i>fort, art, hasard, plus-part, raport</i> )	-	+/-	-

表 6-15 : 語末に-*rd*, -*rt*を持つ単数形名詞および単数形形容詞

- (3) 語末に-*rd*, -*rt*を持つ語において、語末子音字-*t*は子音および休止の前で[t]は発音されない。ただし、母音の前では[t]が発音される場合もある。

	子音の前	母音の前	休止の前
(4) 長母音に語末子音字- <i>t</i> が後続する場合の一般的傾向	-	+/-	-
(4a) <i>août, têt</i>	+	+	+

表 6-16 : 長母音に語末子音字-*t*が後続する単数形名詞および単数形形容詞

- (4) -*s*-の脱落から形成された長母音の前の語末子音字 *t* の一般的な傾向は、子音および休止の前においては[t]が発音されない。ただし、(4a) *août, têt*のような語においては、常に語末子音[t]が発音される。

	子音の前	母音の前	休止の前
(5) 語末に- <i>aud</i> , - <i>aut</i> を持つ語 (例 : <i>chaud, saut, haut</i> )	-	+/-	-

表 6-17 : 語末に-*aud*, -*aut*を持つ単数形名詞および単数形形容詞

- (5) 語末に $-aud$ ,  $-aut$ を持つ語は、子音および休止の前において語末子音字  $t$  は発音されない。一方、母音の前では子音 $[t]$ の発音は可能であるが、揺れがある。

	子音の前	母音の前	休止の前
(6)語末に $-ct$ を持つ語	+	+	+
(6a) <i>aspect, respect, suspect</i>	+/-	+/-	+/-

表 6-18：語末に $-ct$ を持つ単数形名詞および単数形形容詞

- (6) 語末に $-ct$ を持つ語は一般的に、子音、母音で始まる語および休止の前で $[t]$ が発音される。

ただし、(6a) *aspect, respect, suspect* のような語においては、語末の $[t]$ の発音は揺れる。語末に $-ct$ を持つ語について、Crevier (1994 : 131)はThurot (1883 : 2 : 103-106)を引用することで、17世紀から18世紀初頭の文法家が語末で $[t]$ が発音されない形を記していることを指摘している。また、16世紀の文法家 Lanoue が *abject* [ $abzɛt$ ]のように $[k]$ が発音されないが $[t]$ が発音される形を良しとしていたことを Crevier (1994 : 132)は指摘している。つまり、このような語においては3つの発音形（例：*suspect* [ $syspek$ ], [ $syspet$ ]および $[syspekt]$ ）が可能であったとも考えられる。

- (7) 終わりに、古仏語において $[-θ]$ が発音されていた語は以下のような発音の傾向が観察される。

	子音の前	母音の前	休止の前
(7a) <i>ble(d), cru(d), mui(d), nœu(d), nu(d), pie(d)</i>	-	-	-
(7b) <i>nid</i>	-	+	+

表 6-19：古仏語において $[-θ]$ が発音されていた単数形名詞および単数形形容詞

(7a) *ble(d), cru(d), mui(d), nœu(d), nu(d), pie(d)*のような語については語末子音字 $-d$ は発音されない。一方、(7b) *nid* は子音の前において語末子音字 $-d$ は発音されない。ただし、母音および休止の前では語末子音字 $-d$ が発音される。

#### 6.1.2.1.8. 語末子音字 $-s, -x, -z$ ( $[s], [z]$ )

子音字 $-s, -x, -z$ を語尾に持つ語は、基本的に子音と休止の前では発音されず、母音の前で



は揺れがある。

	子音の前	母音の前	休止の前
語末に-s, -x, -z を持つ語の一般的傾向	-	+/-	-
(1) <i>athlas, chaos, diesis, embesas, iris, lapis, rebus, rinoceros</i>	+	+	+
(2) 接尾辞 <i>-eux, -ois, -is, -ès</i>	-	+/-	+/-
(3) <i>temps</i>	-	+/-	+/-
(4) 接尾辞 <i>-rs/-rds</i>	-	+/-	-
(5) -x [ks] が語尾にある語 ( <i>fenix, linx, prefix, storax</i> )	+	+	+
(6) <i>corps</i>	+/-	+/-	+/-

表 6-20: 語末に-s, -x, -z を持つ単数形名詞および単数形形容詞

さらに細かく見ていくと、以下のような特徴が浮かび上がるだろう。

- (1) *athlas, chaos, diesis, embesas, iris, lapis, rebus, rinoceros* のような語は基本的に [s] が発音される。
- (2) 接尾辞 *-eux, -ois, -is, -ès* を持つ語は子音の前で [s] は発音されないが、母音および休止の前でその発音には揺れがある。
- (3) *temps* は子音の前で [s] は発音されないが、母音および休止の前でその発音には揺れがある。
- (4) 接尾辞 *-rs/-rds* を持つ語は子音と休止の前では発音されない。母音の前では [s] の発音には揺れがある。
- (5) -x [ks] が語尾にある語 (*fenix, linx, prefix, storax*) は常に [ks] が発音される。
- (6) 語 *corps* は子音、母音、休止の前で、[s] の発音に揺れがある。

#### 6.1.2.2. 複数形名詞および複数形形容詞

複数形名詞および複数形形容詞は語末子音字は-s, -x である。

##### 6.1.2.2.1. 複数形名詞

複数形名詞が子音の前に位置する例は合計で 1038 例観察された。そのうちの 6 例が語末

子音字が発音されるように表記されていたが、これはエラーであると考えられる<sup>120</sup>。また休止の前でも同様に、35例において語末子音字が発音される表記がみられた。

	子音の前	母音の前	休止の前
-s, -x [-z]	-	83	-
<del>-s, -x</del>	1032 (+6)	193	996 (+35)

表 6-21：複数形名詞における語末子音字-s, -x, -z の発音

休止のにおいて語末子音字が発音されていたか可能性は大いにありえる。一方、母音の前では語末子音字の発音有無には揺れがみられた。

#### 6.1.2.2.2. 複数形形容詞

複数形形容詞が子音の前に位置する例は合計で 293 例観察された。そのうちの 3 例が語末子音字が発音されるように表記されていたが、これはエラーであると考えられる。また休止の前でも同様に、9 例において語末子音字が発音される表記がみられた。一方、母音の前では語末子音字が発音される例が 60 例、発音されない例が 66 例観察された。

	子音の前	母音の前	休止の前
-s, -x [-z]	-	60	-
<del>-s, -x</del>	290 (+3)	66	176 (+9)

表 6-22：複数形形容詞における語末子音字-s, -x, -z の発音

#### 6.1.3. 副詞

##### 6.1.3.1. 語末子音字 -p ([p])

Milleran (1694 : 2 : 92)は語末子音字-p について以下のように述べている。

« P. s'exprime seulement à la fin des 3. suivans devant un mot qui commence par une voyelle ou par un h muet, et lors qu'il finit la frase. Beaucoup, [...] Trop, [...] Coup [...] »(2 : 92)

「P は、以下の 3 つの語においてのみ、母音もしくは無音の h の前、そして句の末尾に位置する場合に発音される。(この 3 つの語とは、Beaucoup, Trop, Coup である。)」

また実際にコーパスで観察された語末子音字に p を持つ副詞は、trop および beaucoup のみ

<sup>120</sup> 子音の前で語末子音字が発音される 6 例は全体数の 0,057%に過ぎない。

であった。以下に、発音の分布を提示する。

	子音の前	母音の前	休止の前
trop [trɔp]	1	2	1
trop <b>p</b> [trɔ]	25	-	4
beaucoup [bokup]	-	2	-
beaucoup <b>p</b> [boku]	11	1	3

表 6-23 : 語末子音字 *-p* ([p])を持つ副詞 *trop, beaucoup*

Milleran (2 : 93)は *beaucoup* および *trop* の発音について例を挙げて説明している。母音の前では以下に示す例のように[p]が発音されている。

J'ai beaucoup enduré ⇒ *j'ai beaucoup p-enduré*

Vous êtes trop hardi ⇒ *vous êtes tro p-ardi*

一方、子音の前では[p]は発音されないことが以下の例において明白である。

Beaucoup d'amis ⇒ *baucou d'amis*

Tu as trop d'ennemis ⇒ *tu as tro d'ennemis*

ただし、コーパスにおいては子音の前で語末子音字が発音される表記も観察されたが、これは Milleran の説明に従えばエラーであると考えられる。以下に例を挙げる。

pour éviter la **trop** grande diversité des marques qui n'au~~roient~~ fait que de la confusion (0 : 2)

休止の前では[p]の発音には揺れがあるようである。本コーパスで実際には、*beaucoup* および *trop* は休止の前で[p]が発音される例が 1 例のみ観察された。

J'en ai beaucoup ⇒ *j'en ai beaucoup*

J'en ai trop ⇒ *j'en ai trop*

Crevier (1994 : 221) が指摘しているとおり、*trop* および *beaucoup* は子音の前で[p]は脱落が完了しており、休止の前では脱落する傾向にあると考えられる。ただし、休止の前で[p]が発音されることは可能であったといえる。

### 6.1.3.2. 語末子音字 *-r* ([r])

語末子音字に*-r*を持つ副詞は1例のみで、*hier*がそれに該当する。以下に発音の分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
hier [jɛ:r]	-	1	5

表 6-24：語末子音字 *-r* ([r])を持つ副詞 *hier*

副詞 *hier* は母音の前および、休止の前で常に発音される傾向が観察された。

(母音の前) *cõme vous voyez dans avant-s-hier et dans va-s-y*

(休止の前) *Vous me dites hier, si je ne ments,*

休止の前で安定的に発音されているため、子音の前でもこの[r]の発音は脱落しないと考えられる。

### 6.1.3.3. 語末子音字 *-s* ([z])

語末子音に*-s*を持つ副詞は大きく2つに分類することができる。この2つのグループは、(1)母音字+*-s*、(2)母音字+[r]+*-s*である。

まず、(1)母音字+*-s*を語末に持つ副詞の発音の分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
assés, assez [asez]	-	2	-
assés, assez [ase]	11	1	2
autrefois [o:trefwaz]	-	2	1
autrefois [o:trefwa]	5 (+1)	-	-
quelquefois [kɛlkfwaz]	-	3	1
quelquefois [kɛlkfwa]	23 (+1)	2	3
(ci-)dessous [dəsus]	-	-	1
(ci-)dessous [dəsu]	4	1	7
(ci-)dessous [dəsys]	-	2	3
(ci-)dessous [dəsy]	9 (+2)	-	26
désormais [dezɔrmɛz]	-	5	1
désormais [dezɔrmɛ]	1	2	1
jamais [ʒamez]	-	15	-
jamais [ʒamɛ]	56 (+1)	5	13

mieux [mjøz]	-	13	3
mieu <del>s</del> [mjø]	63	7	6
neanmoins [neãmwẽz]	-	16	-
neanmoins <del>s</del> [neãmwẽ]	20 (+1)	6	1
moins [mwẽz]	-	7	-
moins <del>s</del> [mwẽ]	21	3	1
très [trez]	-	15	-
très <del>s</del> [trɛ]	41 (+1)	2	-
plus [plyz], [plys]	6	79	3
plus <del>s</del> [ply]	236	18	14
pas [paz]	-	37	1
pas <del>s</del> [pa]	106	3	15

表 6-25：母音字 + -s を語末に持つ副詞

これらの副詞は、子音の前で -s が立体で表示される例が多く観察され、また休止の前においても語末子音字 -s が稀に発音されることが観察された。ただし、多くの場合に、子音、休止の前では語末子音字 -s の発音は脱落するが、母音の前での発音は可能なようである。

次に、(2) 母音字 + [r] + -s を語末に持つ副詞は、子音および休止の前で語末子音字 -s の脱落が完了している。

	子音の前	母音の前	休止の前
ailleurs [aλœ:rz]	-	1	-
ailleurs <del>s</del> [aλœ:r]	2	1	9
lors [lɔ:rz]	-	6	-
lors <del>s</del> [lɔ:r]	80	4	2
toujours [tuʒuz]	-	15	-
toujours <del>s</del> [tuʒu], toujours <del>s</del> [tuʒur]	59	12	10

表 6-26：母音字 + [r] + -s を語末に持つ副詞 *ailleurs, lors, toujours*

まず、副詞 *ailleurs* および *lors* については、子音の前および休止の前では子音[r]が発音されるが、子音[s]は完全に脱落しているといえる。母音の前でのみ語末子音[rz]が発音される。次に、副詞 *toujours* については、母音の前では[r]が脱落する一方で語末子音字 -s は発音されるため、[tuʒuz]と発音される。一方、子音と休止の前では語末子音字 -s は発音されることはなく、そして[r]の発音の有無に揺れがある。つまり、[tuʒu]もしくは[tuʒur]という発音が可能である。

*alors, dehors, hors* は主に休止の前と子音の前でのみ観察され、母音の前では観察されなかった。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>alors</i> [alɔ:r]	1	-	1
<i>dehors</i> [dəɔ:r]	-	-	3
<i>hors</i> [ɔ:r]	-	-	1

表 6-27 : 母音字 + [r]+s を語末に持つ副詞 *alors, dehors, hors*

おそらく、これらの副詞では子音および休止の前では、語末子音字-s の発音の脱落が完了していると考えられる。ただし、母音の前での語末子音字の発音は不明である。

副詞 *gueres* については、主に休止の前と子音の前でのみ観察され、母音の前では観察されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>gueres</i> [gɛ:rə]	3	-	2

表 6-28 : 副詞 *gueres*

Thurot (1883 : 2 : 59)によれば、*gueres* の綴り字には長い間 *guere* と *gueres* の2種類があり、この2つの綴り字の間で揺れがあるが、*gueres* と書かれた場合にも語末子音字-s は発音されなかったようである。

#### 6.1.3.4. 語末子音字 -t, -d ([t])

語末子音字-t を持つ副詞は、4つのグループに分類することができる。まず、(1) 語末子音字-t の直前に短母音が位置するもの、(2) 語末子音字-t の直前に長母音が位置するもの、(3) 語末子音字-t の直前が鼻母音のもの、そして(4) 語末子音字-t, -d の前に子音[r]がくるものである。

まず、(1) 語末子音字-t の直前に短母音が位置するタイプの副詞を以下に挙げる。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>debout, de bout</i> [dəbut]	-	-	3
<i>debou#</i> [dəbu]	-	-	1
(de) <i>fait</i> [fet] , <i>tout- à-fait</i> [fet]	7	1	4
<i>tout-à-fai#</i> [fe]	1	-	-
<i>par tout</i> [partut]	2	14	10

par tou# [partu]	9	-	-
sur tout [syrtut]	12	3	-
sur tou# [syrtu]	11	-	-
(rien du) tout, (point du) tout, tout [tut]	4	3	12
tou# [tu]	1	-	2

表 6-29：語末子音字-*t*の直前に短母音が位置する副詞

以上の表から明白なことは、これらの副詞において語末子音字-*t*は母音の前ではもちろん、子音および休止の前でも発音されることがある。

さらに、*en effet* および *à regret* については、休止の前でのみ観察され、語末子音字は発音される。

	子音の前	母音の前	休止の前
(en) effet [efet]	-	-	2
(à) regret [rgret]	-	-	1

表 6-30：語末子音字-*t*の直前に短母音が位置する副詞 *en effet*, *à regret*

次に、(2)語末子音字-*t*の直前に長母音が位置する副詞は以下の表のようなものである。

	子音の前	母音の前	休止の前
tôt [to:t]	-	4	-
tô# [to:]	1	-	-
aussi-tô# [osito:]	1	-	-
tantô# [tâto:]	2	-	1
bientô# [bjêto:]	-	-	1
plutô# [plyto:]	2	-	2

表 6-31：語末子音字-*t*の直前に長母音が位置する副詞

これらの副詞は基本的に語末の綴り字-*tôt*の副詞である。まず副詞 *tôt* の語末子音字-*t*は子音の前で発音されることはないが、母音の前では発音される。ただし、*tôt*の語末子音字-*t*が母音の前で発音される4例は全て«*tôt ou tard*»という慣用表現である。それ以外の副詞 *aussi-tôt*, *tantôt*, *bientôt*, *plutôt*については、子音および休止の前で語末子音字-*t*が発音されることはない。ただし、これらの副詞が母音の前に位置する例は本コーパスでは観察されなかった。仮に、これらの副詞が *tôt*と同様の特徴を持つのであれば、母音の前での発音も可能であると考えられる。

(3)語末子音字-*t*の直前に鼻母音がある副詞には以下のようなものがある。

	子音の前	母音の前	休止の前
point [pwễt]	-	15	-
poiñ [pwễ]	75	4	36(+2)
副詞-ment [mât]	-	51	-
副詞-meñ [mâ]	262 (+5)	36	130 (+14)
(par) consequent [kỗsekât]	-	6	-
(par) consequeñ [kỗsekâ]	11	5	2
souvent [suvât]	-	3	-
souveñ [suvâ]	21	1	3
pourtant [purtât]	-	2	-
pourtañ [purtâ]	22	1	2
tant [tât]	-	10	-
tañ [tâ]	30	1	-
à present [a prezât]	-	2	-
à preseñ [a prezâ]	5	5	12

表 6-32 : 語末子音字-*t*の直前に鼻母音が位置する副詞

*point* および *-ment* が語尾の副詞では、休止の前および子音の前で発音される例が少なからず観察されたが、Crevier (1992 : 229)はこのような例はエラーとして扱っている。語末子音字-*t*の直前に鼻母音がある副詞において、語末子音字-*t*が発音されるのは母音の前に限定される。

一方、副詞 *auparavant*, *autant*, *avant*, *comment*, *maintenant* では語末子音字-*t* [t]の発音が全く観察されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
auparavañ [oparavâ]	1	-	-
autañ [otâ]	35	-	-
avañ [avâ]	1	-	1
cõmeñ [komâ]	-	1	1
maintenañ [mễtnâ]	-	-	1

表 6-33 : 語末子音字-*t*の直前に鼻母音が位置する副詞([t]の発音無し)

終わりに、(4)語末子音字-*t*, *-d*の前に子音[r]が発音される副詞には、*fort* および *tard* が観察される。



	子音の前	母音の前	休止の前
fort [fɔ:rɪ]	-	10	-
fort# [fɔ:r]	28	3	1
tard# [ta:r]	2	-	6

表 6-34：語末子音字 *-t*、*-d* の前に子音 [r] が発音される副詞

副詞 *fort* において語末子音字 *-t* は母音の前でのみ発音され、子音の前および休止の前で [t] は脱落している。また、副詞 *tard* が母音の前に位置する例は観察されないが、子音の前および休止の前において語末子音字 *-d* ([t]) は完全に脱落しているといえる。

#### 6.1.4. 代名詞

##### 6.1.4.1. 三人称単数形人称代名詞 *il*

Milleran (1694 :2 :75) は、代名詞 *il* は、母音の前でのみ [l] が発音されると断言している<sup>121</sup>。

	子音の前	母音の前	休止の前
il [il]	50	317	3
il# [i]	510	5	8

表 6-35：三人称単数形人称代名詞 *il*

しかし、上記の表で子音の発音分布を見る限りでは、子音の前で [l] が発音される例が 10 パーセントほどある。一方、母音の前で [l] が発音されない例が 5 つ観察された。ただし、この 5 つの例のうち 1 例は倒置文であり、この場合には語末子音字が発音されないということは他の代名詞でも観察されている。Crevier (1994 :268) は代名詞 *il* の語末子音字の発音は、どのコンテキストでも揺れがあると結論付けている。しかし、語末子音字は、子音の前では発音されにくく、母音の前では発音されやすいことがうかがえる。

##### 6.1.4.2. 一人称複数形人称代名詞 *nous* および二人称複数形代名詞 *vous*

一人称複数形人称代名詞 *nous* および二人称複数形代名詞 *vous* の語末子音字の発音有無は以下のような分布が観察された。

<sup>121</sup> Milleran (1694 : 2 :75) を参照。

	子音の前	母音の前	休止の前
nous [nuz]	-	16	-
nous [nu]	50(+1)	-	3(+1)
vous [vuz]	-	34	-
vous [vu]	144 (+2)	3	13 (+3)

表 6-36：一人称複数形人称代名詞 *nous* および二人称複数形代名詞 *vous*

*nous* および *vous* は表の分布に従うと、母音の前では語末子音字 *-s* [z] が発音され、子音および休止の前では発音されない。*vous* の語末子音字 *-s* が母音の前で発音されない 3 例を以下に挙げる。

- (a) *Enfin sans vous on ne sauroit que confusement l'origine et la naissance du monde*, (2 : 183)
- (b) *coñe vous êtes, es & estis, vous dites, dicis & dicitis, vous faites, facis & facitis, &c.* (2 : 151)
- (c) **Vous** êtes trop hardi, *Nimiicus es audax*. (2 : 93)

以上の例(a)においては、*vous* と *on* の間にコンマが置かれないものの、休止が置かれる可能性が高いため、一概に母音の前における例として扱うことはできない。例(b)および(c)においてはリエゾンが実現されない例として扱うことができるだろう。

次に、子音の前で *vous* は 2 例、*nous* は 1 例が、子音字 *-s* がイタリック体で表示されない場合がある。また、休止の前で語末子音がイタリック体で表示されない例が、*vous* は 3 例、*nous* は 1 例ある。ただし、これはエラーであると考えられる。

#### 6.1.4.3. 三人称複数形人称代名詞 *ils*

三人称複数人称代名詞 *ils* の語末子音字 *-s* は基本的に子音および休止の前で発音されることはない。また、子音および休止の前では *-l-* も発音されることがないため、*ils* は [i] と発音される。母音の前においては 4 つの表記の違いが観察される。まず、一番多く見られた発音形は *ils* と綴られる [il] が 37 例観察される。次に多い発音形は、*ils* という綴り字で [iz] という発音が期待されるものが 4 例観察される。また、1 例のみ *ils* と綴られ、[ilz] と発音されることが観察される。そして、母音の前で子音字が全く発音されない [i] という発音形が 5 つ観察される。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>ils</b> ([il])	-	37	-
<b>ils</b> ([iz])	-	4	-
<b>ils</b> ([ilz])	-	1	-
<b>ils</b> ([i])	202 (+11)	5	5

表 6-37：三人称複数形人称代名詞 *ils*

Milleran (2 : 75)はこの 3 人称男性形人称代名詞について以下のような説明を与えている (Crevier, 1994 : 270)。

« On ne prononce point l’*l*. [...] du pronom personnel [...] *ils* que devant une voyelle ou l’*h*. muet, en n’exprimant aussi aucunement *s*. [...] »

(2 : 75)

「人称代名詞 *ils* の *l* は母音および無音の *h* の前でしか発音しない。  
*s* も全く発音されることがない。」

以上の Milleran による説明に従うならば、母音の前における *ils* の [iz] および [ilz] の発音はエラーとも考えられる。 [iz] に限定して言及するならば、17 世紀には *ils* の母音の前での発音として [iz] を薦める文法家が多いことは事実である (Thurot, 1883 : 2 : 79-81)。

#### 6.1.4.4. 三人称複数女性形人称代名詞 *elles*

3 人称複数女性形代名詞 *elles* の語末子音字 *-s* の発音有無の分布は以下の表に提示する。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>elles</b> [elz]	-	2	-
<b>elles</b> [el]	36 (+1)	7	4 (+5)

表 6-38：三人称複数女性形人称代名詞 *elles*

まず、語末子音字 *-s* は子音の前においては発音されないと考えられる。エラーと考えられるものが 1 例観察されたが、おそらく子音の前では語末子音字は発音されない。母音の前では、語末子音字が発音されるものが 2 例、語末子音字が発音されないものが 7 例観察された。母音の前における *elles* の語末子音字の発音は絶対的ではない。また、休止の前では語末子音字が発音されると考えられる例が 5 例観察されたが、これらの例はエラーであると判断できる。その理由として、母音の前での語末子音字の脱落の頻度自体が高いため、休止の前で語末子音字が発音されること自体が考えにくい。

#### 6.1.4.5. 指示代名詞 *celles* および *ceux*

指示代名詞 *celles* については、子音の前において語末子音字-*s* は発音されないが、母音の前では発音されることが観察された。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>celles</i> [sɛlz]	-	1	-
<i>celles</i> [sɛl]	12	3	(+1)

表 6-39 : 指示代名詞 *celles*

ただし、休止の前で語末子音字-*s* が発音されると考えられる表示法で表れたが、これはエラーであることが推測される。

指示代名詞 *ceux* については、語末子音字-*x* は子音の前では発音されないが、母音の前では発音される。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>ceux</i> [søz]	-	11	-
<i>ceux</i> [sø]	59	2	-

表 6-40 : 指示代名詞 *ceux*

母音の前において語末子音字が発音される場合には常に « *ceux où ...* » という連辞においてであった。以下に例を挙げる。

Il en est aussi de même de **ceux où** l'on n'ajoute une *s*. que pour en faire mieux aussi la diférence. (2 : 33-34)  
 parce que j'en ai aussi bien fait un recueil entier, que de **ceux où** elle ne se prononce point ; (2 : 105)

休止の前における発音は不明であるが、おそらく子音の前と同様に発音されないと考えられる。

#### 6.1.4.6. 代名詞 *eux, les, un(e)s, leur*

代名詞 *eux* の語末子音字 *eux* は子音および休止の前で発音されない。母音の前における例は本コーパスでは観察されなかった。

	子音の前	母音の前	休止の前
eux [øz]	-	-	-
eux̥ [ø]	3	-	11

表 6-41：代名詞 *eux*

また、Milleran (1694 : 2 : 64)は *eux* の発音と *oeufs* (*oeuf* の複数形)と都市名 *Eu* の発音は同じであると認めていることが以下の引用からも明白である。

Oeufs à la Huguenote, [...].

*Eux*, Pronom personel s'exprime de la même maniere, et aussi.

*Eu*, ville et comté de Normandie, [...].

(2 : 64)

「ユグノー風卵、

代名詞 *Eux* は同様に発音される。

また、ノルマンディーの都市、および郡名 *Eu* も同様である。」

人称代名詞 *les* については、子音および休止の前において語末子音字は発音されない<sup>122</sup>。母音の前において語末子音字は発音されることが観察された。

	子音の前	母音の前	休止の前
les [lez]	-	20	-
les̥ [lɛ]	38 (+1)	2	1

表 6-42：代名詞 *les*

代名詞 *un(e)s* の語末子音字 *-s* は子音の前では発音されないが、母音の前では発音される。また休止の前における例は本コーパスにおいて観察されなかった。

	子音の前	母音の前	休止の前
un(e)s [œz], [ynz]	-	5	-
un(e)s̥ [œ], [yn]	18	1	-

表 6-43：代名詞 *un(e)s*

終わりに、*leur* については子音、母音、休止の前で常に発音される。

<sup>122</sup>エラーと思われるものが 1 例観察された。エラーであると判断できる理由は、冠詞 *les* の観察からも語末子音字が子音の前で発音されることはないためである。

	子音の前	母音の前	休止の前
leur [lœ:r]	15	5	1

表 6-44 : 代名詞 *leur*

### 6.1.5. 前置詞

#### 6.1.5.1. 語末子音字 *-r* ([r])を持つ前置詞

語末子音字 *-r* が含まれる前置詞には *par*, *pour*, *sur* である。これらの前置詞は語末が常に立体表記であった。

	子音の前	母音の前	休止の前
par [pa:r]	167	99	5
pour [pu:r]	239	42	2
sur [sy:r]	115	5	1

表 6-45 : 語末子音字 *-r* [r]を持つ前置詞

よって、前置詞 *par*, *pour*, *sur* は常に語末で語末子音字 *-r* [r] が発音される。

#### 6.1.5.2. 語末子音字 *-f* ([f])を持つ前置詞

語末子音字 *-f* が含まれる前置詞は *sauf* のみである。

	子音の前	母音の前	休止の前
sauf [so:f]	1	-	-

表 6-46 : 語末子音字 *-f* [f]を持つ前置詞 *sauf*

*sauf* は 1 例のみ子音の前で観察され、語末子音字 *-f* は発音される。母音で始まる語、休止の前の例は本コーパスには含まれないが、おそらくこの前置詞では語末子音字 *f* が安定的に [f] と発音されることが期待される。

#### 6.1.5.3. 語末子音字 *-c* ([k])を持つ前置詞

語末子音字 *-c* [k] の前置詞は *avec* のみである。

	子音の前	母音の前	休止の前
avec [avek]	3	60	4
avee [ave]	95	3	-

表 6-47 : 語末子音字 *-c* [k]を持つ前置詞 *sauf*

この前置詞は、子音の前で語末子音字-*c* が脱落し、母音の前および休止の前では語末子音字-*c* が発音される傾向が観察された。子音の前で語末子音字-*c* が発音される例が合計 3 例観察される。以下に例を挙げる。

en faveur des Alemans qui la confondent tellement avec *g*. (2 :50)

IL faut remarquer qu'on le pouroit encore écrire avec *Que*, (2 :24)

elle obligeoit d'y faire une silabe de trop avec l'*e*. (1 :138)

Milleran (1694 : 2 : 23-24) は前置詞 *avec* について以下のような説明を与えている。

« LE C. de la preposition *avec*, se prononce cõme K. ou cõme *Qu*, devant un mot qui cõmence par une voyelle, et jamais devant la consone, quoi que plusieurs l'y prononcent aussi [...]

Dites donc *ave* { K-elle.  
                  { Qu'-elle.

Mais *avé lui* &c. »

(2 : 23-24)

「前置詞 *avec* の C は、母音で始まる語の前において、K もしくは *Qu* のように発音される。そして、多くの人が発音するにもかかわらず、子音の前では発音されない。*aveK-elle. aveQu'-elle* ([avɛkɛlɔ]) のように発音しなさい。しかし、(子音の前では) *avé lui* ([avɛlɥi]) と発音しなさい。」

Milleran の説明に従えば、子音の前で発音されるこの 3 例はエラーとなるだろう。ただし、Thurot (1883 : 2 : 127-128)によると、語末子音字-*c* が子音の前で発音されるか否かについては、文法家によって意見が異なる。子音の前において常に語末子音字-*c* を発音するのが正しいとするもの<sup>123</sup>、子音の前における発音を禁止するもの<sup>124</sup>、子音の前における発音の揺れに対してある程度寛容な意見がある<sup>125</sup>。

一方、休止の前に位置する *avec* は 4 例ある。そのうちの 2 例は引用形であった。

**Avec, Cum.** (1 : 85)

LE C. de la preposition *avec*, se prononce cõme K. ou cõme *Qu*, (2 : 23)

<sup>123</sup> Thurot はこの意見を持つ文法家として Saint-liens (1580 : 48), Delamothe (1592 : 67), Oudin (1633), Vaugelas (1647), Chiflet (1659), D'Aisy (1674), Th. Corneille (1687 : 428), Hindret (1687), De la Touche (1696), De Wailly (1763), Domergue (1805)を挙げている。

<sup>124</sup> Thurot はこの意見を持つ文法家として Pillot (1550: 26), Lartigaut (1669), Villecompte (1751 : 460), Antonini (1753)を挙げている。

<sup>125</sup> Duez (1639 : 49)がその一例である。

また残りの2例は、*avec*の後にコンマと *qu(e)*が入るものである、またこれらの例文はいずれも特定の綴り字の使用(*que* および *qu*)を勧める説明であった。

De plus vous remarquerez que *Republique* étant du féminin genre, ne s'écrit *avec, Que*, (2 : 24)  
*savoir, choquer & troquer, s'écrivent avec, qu.* (2 : 97)

以上の例において、もしコンマが入らない場合には「*avec Que*」と「*avec qu.*」は [avekə] と発音されるのだろうか。その場合に「綴り字 *qu(e)*が書かれる」という説明は、[avekə]の発音では聞き手には大変わかりにくいといえる。コンマを入れることによって「*avec Que*」と「*avec qu.*」[avek k]と発音するという Milleran の配慮であるとも考えられる。

#### 6.1.5.4. 語末子音字 -t ([t])を持つ前置詞

語末子音字に-t [t]を持つ前置詞は *devant, quant, avant, pendant* の4つの前置詞が観察される。まず、*devant* に関しては、子音および休止の前で語末子音字が発音されることはないが、母音の前では発音が可能である。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>devant</i> [dvât]	-	106	-
<i>devant</i> [dvâ]	111 (+5)	38	17

表 6-48 : 語末子音字-t [t]を持つ前置詞 *devant*

よって、子音[t]は子音および休止の前で既に脱落した状況にあるといえる。次に、*quant* は1例のみ観察されたが、「*quant aux*」という連辞で1例観察され、語末子音字は発音される。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>quant</i> [kât]	-	1	-

表 6-49 : 語末子音字-t [t]を持つ前置詞 *quant*

以下に例を挙げる。

Je dirai pourant **quant aux** mots où il semble qu'on la pourroit souffrir en que/que façon à cause de leur étimologie, (2 : 105)

終わりに、2つの副詞 *avant, pendant* は、子音の前でのみ観察された。



	子音の前	母音の前	休止の前
avan <del>t</del> [avã]	3	-	-
pendan <del>t</del> [pãdã]	1	-	-

表 6-50：語末子音字-t [t]を持つ前置詞 *avant, pendant*

母音および休止の前での語末子音字の発音は明らかではないが、おそらく休止の前では[t]が脱落した形で発音される。*devant* の発音に類似するのであれば、母音の前において語末子音字-t [t]が発音されることも予想できる。

#### 6.1.5.5. 語末子音字 -s, -z, -x ([z])を持つ前置詞

語末子音字-s, -z, -x [z]の前置詞は複数観察される。これらの前置詞については、2つのグループに分けて説明する。まず、第一のグループは、語末子音字-s, -z, -x が母音の前で発音されるもの(*aux, chez, après, dans, sans*)、子音および休止の前では発音されないものである。第二のグループは本コーパスでは語末子音字-s, -z, -x の発音が、子音、母音および休止の前で確認されないものである(*auprès, depuis, dès, envers, hors, sous, envers*)。

まず、第一のグループの語末子音字の発音有無の分布を表にまとめたものを以下に挙げる。

	子音の前	母音の前	休止の前
aux [oz]	-	27	-
aux <del>t</del> [o]	24 (+4)	-	4 (+1)
chez [fɛz]	-	1	-
chez <del>t</del> [fɛ]	1	1	-
après [apɛz]	-	20	-
après <del>t</del> [apɛ]	61	12	9
dans [dãz]	-	6	2
dans <del>t</del> [dã]	599 (+1)	10	2
sans [sãz]	-	31	-
sans <del>t</del> [sã]	58	6	1

表 6-51：語末子音字-s, -z, -x [z]が母音の前で発音される前置詞

第二のグループは本コーパスでは子音[z]の発音が、子音、母音および休止の前で確認されなかったものである。

	子音の前	母音の前	休止の前
auprés, auprez [opre]	2	3	3
hors [ɔ:r]	1	1	-
vers [ve:r]	-	1	1
depuis [døpi]	11	-	1
dés [dɛ]	11	-	1
envers [ãve:r]	3	-	2
sous [su]	8	-	2

表 6-52 : 語末子音字-s, -z, -x [z]が発音されない前置詞

前置詞 *auprés* (*auprez*), *hors*, *vers* は以上の表からも明らかなように、母音の前に位置する場合でも語末子音字は発音されない。その他の前置詞 *depuis*, *dés*, *envers*, *sous* については母音の前に位置する例が本コーパスには含まれないため、母音の前における語末子音字の発音の有無は定かではない。

#### 6.1.6. 接続詞

本コーパスに含まれる接続詞は *car*, *or*, *et*, *puis*, *donc*, *mais*, *quand* の 7 つの接続詞である。ただし、これらの 6 つの接続詞における語末子音字はそれぞれ異なる特徴を持つ。まず、*car*, *or* は語末子音字が子音、母音および休止の前で安定的に発音される。

	子音の前	母音の前	休止の前
car [ka:r]	11	10	1
or [ɔ:r]	2	1	1

表 6-53 : 接続詞 *car*, *or*

次に、*et* の語末子音字は全く発音されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
eť [e]	872 (+ 16)	266(+11)	3

表 6-54 : 接続詞 *et*

Milleran のコーパスにおいて、子音、母音、休止の前で子音字 *t* がイタリックで表示されない例が 27 例観察されたが、Crevier (1994) も指摘しているようにこれは全体の 3 パーセントに過ぎずエラーであると考えられる。

次に、*puis* は子音の前で語末子音字が立体で表示される例は皆無であった。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>puis</i> [pqi]	11	-	-

表 6-55 : 接続詞 *puis*

また、*puis* が含まれる語 *puisque* は、「*puî que* ([pɥikə])」というアクセントコンプレックスが付いた綴り字も観察された。母音の前に *puis* が表れる例が本コーパスにはないため母音の前における発音は不明である。

終わりに、*donc*, *mais*, *quand* は語末子音字の発音は、後続する要素によって変化する。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>donc</i> [dɔ̃k]	-	10	-
<i>done</i> [dɔ̃]	66 (+1)	18	96 (+1)
<i>mais</i> [mɛz]	-	46	-
<i>mais</i> [mɛ]	90 (+2)	35	7 (+5)
<i>quand</i> [kɑ̃t]	-	57	-
<i>quand</i> [kɑ̃]	21	5	3

表 6-56 : 接続詞 *donc*, *mais*, *quand*

まず *donc* と *mais* については、例は少数であるが、子音および休止の前でも語末子音字が発音される例が観察された。*donc* については子音で始まる語もしくは休止で始まる語の前で語末子音字が立体で表示される場合が、それぞれ 1,4%と 1,05%である。このため、この立体表示がエラーである可能性が高いと考えられる。*mais* に関しては、子音で始まる語の前で立体で表示された 2 例は全体の 2,1%だが、休止の前では 12 例中 5 例で 41,6%の確率で立体で表示される。このことから Milleran の記述したフランス語において *mais* の語末子音字が休止の前において発音される可能性は否定できない。

### 6.1.7. 数詞

語末子音字の発音の違いの特徴によって、数詞を 2 つのグループに分類して説明する。第一のグループは、休止の前で語末子音字が発音されない数詞 *deux*, *trois*, *cinq*, *six*, *cent* を含むものである。第二のグループは、休止の前で語末子音字が発音される数詞 *sept*, *huit*, *neuf*, *dix*, *vingt* を含むものである。

以下に本コーパスで観察された語末子音字の発音の分布を表にまとめたものを挙げる。

	子音の前	母音の前	休止の前
deux [døz]	-	15	-
(vingt-) deux [dø]	133	2	14
trois [trwaz]	-	1	-
(vingt-) trois [trwa]	30	2	5
cinq [sêk]	-	1	-
cinq [sê]	8 (+2)	1	2(+1)
six [siz]	-	1	-
six [si]	9	-	1
sept [set]	-	-	5
sept [sɛ]	1	-	-
huit [ɥit]	-	-	2
huit [ɥi]	1	-	-
neuf [nœv], [nœf]	4	2	5
neuf [nø]	2	-	-
dix [diz], [dis]	5	3	4
dix [di]	4	-	-
vingt [vêt]	1	7	2
vingt [vê]	2	-	1
cent [sât]	-	1	-
cent, cens, cents [sã]	1	-	4

表 6-57 : 数詞

#### 6.1.7.1. 数詞 *deux, trois, cinq, six, cent*

*deux, trois, cinq, six, cent* は子音および休止の前において語末子音字が発音されないが、母音の前では発音される。まず、*deux, trois, six, cent* の発音について、Milleran の説明は特にない。以下に例を挙げる。

- *deux*

子音の前 : Toutes les fois que vous trouverez **deux** frases doubles, (0 : 4)

母音の前 (リエゾンの実現あり) :

à la charge d'en metre **deux** exenplaires en nôtre Biblioteque publique, (2 : 197)

母音の前 (リエゾンの実現なし) :

il a le son de **deux** *ii.* pour faire mieux la diférence de l'un à l'autre, (1 : 41)

休止の前 : Vingt *et* **deux**, &c. 22. &c. (1 : 46)

- *trois*

子音の前 : Il y en a pourtant qui prononcent ces **trois** derniers marqué d'une \* sans *d*. (2 : 38)

母音の前 (リエゾンの実現あり) : Qu'il entre en composition avec les **trois** autres suivants (2 : 174)

母音の前 (リエゾンの実現なし) : les **trois** autres liquides à la fin (1 : 10)

休止の前 : son verbe qui suit de **trois**. (2 : 134)

- **Six**

子音の前 : Ce mot se prend encore de **six** façons. (2 : 103)

母音の前 (リエゾンの実現あり) : **Six** ans, 6 *anni*, &c. (2 : 177)

休止の前 : **Six**, c. 6. (2 : 175)

- **Cent**

子音の前 : La plû-part se flatant d'en être capables qui n'en aprochent que de **cent** lieues, (0 : 13)

母音の前 (リエゾンの実現あり) : Prince à qui la Déesse Junon avoit doñé **cent** yeux pour mieux garder la vache, (2 : 140)

休止の前 : **Cent**, *Centum*. Sens. m. *Sensus*. (1 : 75)

ただし、Milleran は *cinq* について以下のような指摘を与えている。

« *Cinq*, [...] *q*. ne s'y prononce jamais coñne *k*. que devant un mot qui coñnce par une voyelle ou par l'*h*. muet, car il se mange devant la consone et quand il est le dernier mot de la frase.

*Cinq*, { animaux, }  
          { Holandois, } 5. (...)  
          chevaux,

J'an ai *cinq*, *Habeo* 5.

Dites donc *cin*, *k-animaux*, *cin k-holandois*, &c.

Mais *cin chevos*, *j'en ai cin*. »

Milleran (1694 : 2 : 98)

「*cinq*, [...]母音もしくは無声の *h* で始まる語の前においてのみ、*q* は発音される。そして、子音の前と句の最後の語になる場合には *q* は発音されない。よって、*cin*, *k-animaux* [sêkanimo]、*cin k-holandois* [sêkolandwε]のように発音しなさい。しかし、(子音の前および休止の前では) *cin chevos* [sêfavo]、*j'en ai cin*. [zÿnesê]のように発音しなさい。」

上記の引用から、*cinq* の語末子音字-*q* は子音および休止の前では発音されることはないが、母音の前では発音されるというのが Milleran の見解である。しかし、本コーパスでは子音の

前で *cing* の語末子音字-*q* が立体で表示される例が 2 例ある。

et les **cing** particules relatives *ça, on, le, la, les*, qui se metent après le verbe (1 : 42)

**Cinq** Marcs. 5. *Selibrae Francicae*. (2 : 23)

ただし、これらの例はエラーであると考えられる(Crevier, 1994 : 288)。その理由として、以下の例のように全く同じコンテキストで語末子音字-*q* がイタリックで表示される例があることが挙げられる。

**Cinq** marcs, 5. *Selibra francica*, 5. *Beses*. (2 : 101)

さらに、本コーパスでは休止の前でも語末子音字-*q* が立体で表記される例が 1 例のみ観察された。以下に例を挙げる。

J'an ai **cing**, Habeo 5. (2 : 98)

Milleran の説明に従えば、以上の例はエラーであると解釈する必要がある。ただし、これらの数詞について Hindret (1687 : 745)<sup>126</sup>は以下のように述べている。

« On fait sonner les consonnes finales » des noms de nombre *un, deux, trois, cinq, six, sept, huit, neuf, dix*, « quand ils ne sont point suivis de substantifs, ou quand ils sont relatifs, comme quand on compte, *un, deux, trois*, etc. ou quand sousentend un substantif precedent par la particule relative *en*. Prononcez donc, en comptant quelque chose, *eunn, deüss, trois, sink, siss, sett, huitt, neuff, diss* [...] »

Hindret (1687 : 745)

「名詞が後続する津場合、*un, deux, trois* のように数えるような関係詞である場合、もしくは関係代名詞 *en* によって先行する名詞が暗示されている場合には、数詞 *un, deux, trois, cinq, six, sept, huit, neuf, dix* の語末子音を発音する。よって、数を数える時には、*eunn* ([œ̃n]), *deüss* ([dø̃s]), *trois* ([tʁwas]), *sink* ([sœ̃k]), *siss* ([sis]), *sett* ([set]), *huitt* ([ɥit]), *neuff* ([nø̃f]), *diss* ([dis]) [...]。」

以上の Hindret (1687 : 745)の説明から明らかなことは、*un, deux, trois, cinq, six, sept, huit, neuf, dix* の語末子音字は休止の前では発音されるということである。

<sup>126</sup> Thurot (1883 : 2: 16-17)を参照。

### 6.1.7.2. 数詞 *sept, huit, neuf, dix, vingt*

数詞 *sept, huit, neuf, dix, vingt* の語末子音字は子音の前では発音されないが、休止の前および母音の前では発音されると考えられる。数詞 *sept, huit, neuf* の例を以下に挙げる。

- **Sept**

子音の前 : Dix **sept** fois, (1 : 46)

休止の前 : *P. ne se lit point dans camp, quoi qu'on le prononce dans campagne, ni dans sept*, (2 : 89)

- **Huit**

子音の前 : les **huit** mots suivans et leur derivez. (1 : 98)

休止の前 : **Huit**, 8. (2 : 56)

- **Neuf**

子音の前 : **Neuf** fois, (2 : 49)

母音の前 (リエゾンの実現あり) : Il est **neuf** heures, *Nona est hora*. (2 : 48)

休止の前 : J'en ai aussi **neuf**, *sunt mihi etiaim*, 9. (2 : 48)

数詞 *sept, huit* の発音についての Milleran による指摘は特に見当たらないが、数詞 *neuf* の発音に対して以下のように説明している。

Neanmoins il en faut excepter *neuf*, quand il signifie 9. devant le seul mot *heure*, où *f*. se prononce à la maniere des Alemans, comẽ l'*v*. consone, parce que l'*h*. y est muet.

Il est neuf heures, *Nona est hora*.

Dites donc *neuv-eure*.

[...]

De plus, il faut remarquer que l'*f*. du nom de nombre *neuf*, ne se prononce jamais devant une consone ; mais au contraire qu'elle se fait toujours entendre, quand il est nom adjectif.

(Milleran, 1694 : 2 : 48)

「しかし、*neuf* は次のような場合に例外としなければならない。たった一つの語 *heure* の前において、*neuf* が 9 を示すときである。*f* はドイツ語のように発音される、つまり子音 *v* のように発音されるのは *h* が無声だからである。

Il est neuf heures, *Nona est hora*. (9 時である)

よって、*neuv-eure* [nøvø:r] のように発音しなさい。

[...]

さらに、数詞 *neuf* の *f* は子音の前では全く発音されない。反対に、形容詞的名詞の場合に *f* は常に発音される。」

以上の説明から、子音の前では語末子音字-*f* は発音されず、母音の前では子音[v]が発音され、休止の前でも語末子音字-*f* はおそらく子音[f]が発音される。しかし、本コーパスでは、子音の前において語末子音字-*f* が発音されると考えられる例が 4 つ観察された。以下に例を挙げる。

- (a) *F. se prononce dans neuf* lors qu'il signifie le nom de nombre, (2 : 48)
- (b) *IL en est aussi de même des 3. Derivés de neuf* quand il signifie, 9, (2 : 50)
- (c) *Mais tout au contraire neuf* ne se met jamais qu'après les substantifs, (2 : 48)
- (d) *J'ai reçu neuf livres ou francs, en poids, & volumes de livres*, (2 : 49)

以上の例(a)-(b)については、おそらく数詞 *neuf* と後続語の間には休止が挿入される可能性があるために、語末子音字が発音されると考えられる。例(c)の数詞 *neuf* は文主語であるが、このような場合にも語末子音字が発音されると考えられる。例(d)については、同じような統語コンテキストにおいて *neuf* の語末子音字が発音されない例が観察されるため、エラーであると考えられる。以下に例を挙げる。

**Neuf fois**, (2 : 49)

*Il n'y a que les neuf* suivans qui en sont exceptés, (2 : 137)

よって、後続語が子音である場合であっても休止が挿入される場合に、[f]は発音される。また、単独で文主語になる場合にも[f]は発音される。ただし、「数詞+名詞」コンテキストにおいて名詞が子音で始まる語の場合には語末子音字-*f* は発音されないといえるだろう。*sept* および *huit* においても同様の傾向が期待できると思われる。

数詞 *dix* について Milleran は以下のように説明している。

« L'*x*. du nom de nombre *dix*. se prononce cõme *ce*. mais lors qu'il entre en composition avec les trois autres suivans qui cõmencent par une consone ou par *h*. aspiré, il s'exprime un peu plus doucement que la simple *s*. c'est-à dire presque cõme le *z*.

Dix, 10. X.

Dites donc, *Dice*.

Dix sept, 17. Dix-huit, 18. & dix-neuf, 19.



Mais dites, *di zset, di zhuit, &c.* »

(Milleran, 1694 : 2 : 174)

「数詞 10 の *x* は *ce* [s] のように発音されるが、子音もしくは有聲の *h* とともに形成される次の 3 つの例では、単なる *s* よりも柔らかくに発音される。つまり、それはほとんど *z* のような音である。

Dix, 10. X.

*Dice* ([dis]) のように発音しなさい。

Dix sept, 17. Dix-huit, 18. & dix-neuf, 19.

しかし、*di zset* ([dizset]), *di zhuit* ([dizqit]), &c. のように発音しなさい。」

つまり、数詞 *dix* は子音の前では語末子音字 *-x* は *dix-sept* 以外では発音されない。そして、母音の前では子音 [z] が発音され、休止の前では [s] が発音される。本コーパスにおいて、数詞 *dix* が子音の前で語末子音字が発音される例は 5 例ある。まず、下記の 4 つの例について説明しよう。

**dix sept fois, &c. Decies ac septies, &c.** (1 : 46)

**Dix sept, 17.** (2 : 170)

**Dix sept, 17. Dix-huit, 18. & dix-neuf, 19.** (2 : 174)

**Dix-sept, Septemdecim.** (2 : 89)

以上の例では、*dix* は *dix(-)sept* という「17」を意味する連辞の中で表れる。これは、Milleran も述べているように、*di zset* ([dizset]) というように子音の前であっても語末子音字が発音される。また、「L'*x*. du nom de nombre **dix**. se prononce cõme *ce*.」における数詞 *dix* は文主語となる名詞句の句末に位置する。このような場合には、名詞句が長いために、動詞との間に休止が介入し、語末子音字が発音されると考えられる。また、数詞 *dix* は子音の前では基本的に発音されないが、他の数詞とともに数を表す場合(17、18、19)には語末子音字が発音される。母音および休止の前ではそれぞれ語末子音字は子音 [z] および [s] として発音されることが考えられる。

数詞 *vingt* について Milleran は次のように説明している。

« §. 10. Le *T*. du nom de nombre depuis vingt et un jusqu'à trente, se prononce quoi qu'il suive une consone, mais jamais le *g*.

[...]

Il faut remarquer qu'on peut aussi y ajouter si l'on peut la conjonction copulative, *et*.

Vingt *et* { un, 21.  
deux, &c. 22. &c.

[...]

Dites donc *vin tun*, *vint deux*, ou *vin té un*, *vin té deux*, &c. »

(Milleran, 1694 : 2 :161-162)

「20 から 30 までの数の *T* は子音が後続する場合であっても発音される。しかし、*g* の綴り字は絶対に発音されない。[...] 繋辞的接続詞 *et* を入れることが可能なことについても認識すべきである。

Vingt *et* { un, 21.  
deux, &c. 22. &c.

[...]

*vin tun* ([vêtỹ]), *vint deux* ([vêtdø]), ou *vin té un* ([vêteỹ]), *vin té deux* ([vêtedø]), &c. のように発音しなさい。」

つまり、Milleran の指摘は、21 から 29 までの数において、*vingt* の語末子音字 *-t* は子音で始まる数の前でも発音されるということである。本コーパスで 1 例のみ子音の前で語末子音字 *-t* が発音される例が観察された。また、子音で始まる数の前であっても語末子音字が発音されない例も 1 例観察された。それは以下のようなものである。

**Vingt-** { deux, &c. 22. &c. (2 : 161)

mil six cens quatre **vingt-cinq**, (2 : 199)

ただし、それ以外の場合において、後続する語が子音で始まる場合には語末子音字 *-t* は発音されない。

**Vingt** { Chevaux, (2 : 162)

休止の前で語末子音字が発音されるか否かは本コーパスからの判断は難しい。以下に例を挙げる。

**Vingt**, c. &c. 20. &c. (2 : 53)

De plus s'il suit après **vingt**, (2 : 162)

Six **vingt**, &c. 120. &c. (2 : 175)

休止の前での例は 3 例観察されたが、2 例は語末子音字が発音される形で、1 例は語末子音字が発音されない形で表示されている。

### 6.1.8. 関係代名詞 *dont*

関係代名詞 *dont* の語末子音字 *-t* の発音の分布を以下に示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>dont</i> [dɔ̃t]	-	20	-
<i>donʔ</i> [dɔ̃]	53 (+1)	2	-

表 6-58 : 関係代名詞 *dont*

関係代名詞 *dont* の語末子音字 *-t* は子音の前に位置する 54 例のうち 1 例のみ、イタリック体で書かれた語において語末子音字がイタリック体のままのものがある。この表記の確率は 1,85% であることから、この例はエラーと考えるのが妥当である。また関係代名詞 *dont* が母音の前に位置する例は全体で 22 例観察され、語末子音字が発音されると考えられる例は 20 例観察された。

### 6.1.9. 動詞

#### 6.1.9.1. 屈折形

##### 6.1.9.1.1 一人称単数

Crevier (1994 : 178) に従えば、一人称の語尾につく *s* は語源的なものと、16 世紀以降に類推によって語尾に付随するものがある。

語源的	Je fais : faz > fas (ラテン語 <i>facio</i> )
類推的	Je vais : vao > vais

上記の例において、一方で *je fais* は古フランス語において語源的に語自体に *s* が含まれているが、*je vais* についてはこの *s* は類推から与えられたものである。Milleran が記述したフランス語において、*sai* (*savoir*), *croi* (*croire*), *aperçoi* (*apercevoir*) を除いた第一人称単数形の活用には語末子音字 *-s* が付くことが観察された。

まず、以下に示す一人称単数現在形においては子音の前および休止の前では語末子音字が基本的に発音されず、母音の前では発音されることが観察された。

一人称単数現在形	子音の前	母音の前	休止の前
<i>-s</i>	-	17	-
<i>-ʃ</i>	39 (+1)	3	21 (+1)

表 6-59 : 一人称単数現在形

また、*croi* (*croire*) および *sai* (*savoir*) は母音の前において語末子音が省略される形で観察された。

次に、半過去形、条件法、単純過去、接続法現在における語末子音字-s は子音、母音および休止の前で発音されないことが観察された。

		子音の前	母音の前	休止の前
半過去	-ois [-wɛz]	-	4	-
	-ois [-wɛ]	3(+1)	1	17(+1)
条件法	-rois [-rwɛz]	-	1	-
	-rois [-rwɛ]	16	-	17(+1)
単純過去	-s	-	-	13
接続法現在 <i>être</i>	sois [swɛ]	2	1	2

表 6-60：その他の一人称単数形

一人称単数形の語末子音字-s は基本的に、子音および休止の前では発音されない。ただし、母音の前では発音されることが可能である。

#### 6.1.9.1.2. 二人称単数

二人称単数形の直説法現在の語末子音字-s は基本的に子音の前および休止の前では発音されない。

二人称単数現在形	子音の前	母音の前	休止の前
-s	-	3	-
-s	5	-	20

表 6-61：二人称単数現在形

二人称単数の活用形に母音が後続する例は *vas (aller)* 以外には観察されない。ただし、これらの例では語末子音字が常に発音される。以下に例を挙げる。

Tu **vas en pas de Laron** (2 : 139)

**vas-y** (2 : 140)

次に、二人称単数形における半過去形、条件法、単純過去、未来形、接続法現在、接続法半過去については、休止の前でのみ観察され、語末子音字はいずれの場合にも発音されない。

		子音の前	母音の前	休止の前
半過去	-ois [-wɛ]	-	-	10
条件法	-rois [-rɔwɛ]	-	-	4
単純過去	-as [-a]	-	-	4
未来形	-ras [-ra]	-	-	2
接続法現在 faire	fasses [fasə]	-	-	1
接続法半過去	-sses [fasə]	-	-	4

表 6-62 : その他の二人称単数形

二人称単数形の語末子音字-s は基本的に子音および休止の前では発音されない。その一方で、母音の前において発音されることは可能であるが、大変稀であることが明らかである。

### 6.1.9.1.3. 三人称単数形

三人称単数直説法現在形の語末子音字は-t もしくは-d である。これらの語末子音字は基本的に母音の前で発音される。また、子音および休止の前においても発音される。

三人称単数現在形	子音の前	母音の前	休止の前
-t, -d	73	337	39
-t, -d	746(+1)	14	38(+2)

表 6-63 : 三人称単数現在形

Crevier (1994 : 189)は、長母音、鼻母音もしくは[r]に語末子音字-t が後続する動詞については、基本的に子音および休止の前において語末子音字-t は発音されないことを指摘している。ただし、母音の前で語末子音字-t は発音される。次に、短母音に語末子音字-t が後続する動詞については、子音および休止の前で語末子音字が発音されることもあり、母音の前ではほぼ常に発音される。また、Milleran 自身は(il) dit, (il) fait, (il) met, (il) peut の語末子音字の発音について以下のように説明している (Crevier, 1994 : 192)。

« T. tout à la fin de quel/que mot que ce soit devant un autre qui commence par une voyelle, se prononce ordinairement, et même que/que fois lors qu'il commence par une consone, » [...]

[...]

Il dit, [...] Il fait, [...] Il peut [...], &c [...] il met [...]

(Milleran, 2 : 158-160)

「母音で始まる語の前において、t は通常発音される。そして、子音で始まる語の前でも時に発音される。

*Il dit* ([i dit]), [...] *Il fait* ([i fet]), [...] *Il peut* ([i pøt]) [...], &c [...] *il met* ([i met])」

三人称単数形の倒置疑問文も本コーパスで 10 例観察された。

三人称単数現在形の倒置疑問文	子音の前	母音の前	休止の前
<i>aime-t-</i> [ɛm-t-], <i>va-t-</i> [va-t-], <i>parle-t-</i> [parlə-t-], <i>a-t-</i> [a-t-]	-	10	-

表 6-64：三人称単数現在形の倒置疑問文

このような *-t* [t] は三人称単数形が *-e* で終わる場合 (*aime* [ɛm(ə)]) や、母音で終わる場合 (*va* [va]) に挿入される。

三人称単数形の半過去、条件法の語末子音字 *-t* は母音および休止の前で頻繁に発音されるようである。一方、子音の前においても発音されるが、母音および休止の前ほどの頻度ではない。

		子音の前	母音の前	休止の前
半過去	<i>-oit</i> [-wɛt]	9	10	7
	<i>-oi#</i> [-wɛ]	38	-	2
条件法	<i>-roit</i> [-rwɛt]	19	34	5
	<i>-roi#</i> [-rwɛ]	54	1	-

表 6-65：三人称単数半過去および条件法

次に、単純過去については、*dut, fut, lut* の語末子音字は母音の前および休止の前で発音されることが以下の表から明らかである。

単純過去	子音の前	母音の前	休止の前
<i>dut</i> [dyt]	-	-	1
<i>fut</i> [fyt]	-	2	1
<i>lut</i> [lyt]	-	-	1

表 6-66：三人称単数単純過去 *dut, fut, lut*

ただし、*vint* の例は 1 例のみ子音の前で観察されたが、語末子音字 *-t* は発音されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
vin# [vɛ̃]	1	-	-

表 6-67：三人称単数単純過去 *vin*t

*avoir* 動詞および *être* 動詞の接続法現在形の 3 人称単数形において、語末子音字は *-t* は子音および休止の前で発音され、母音の前では常に発音されることが確認された。

	子音の前	母音の前	休止の前
ait [ɛt]	1	9	-
ai# [ɛ]	9	-	-
soit [swɛt]	15	13	34
soi# [swɛ]	18	1	4

表 6-68：三人称単数接続法現在 *ait*, *soit*

以下に例を挙げる。

- 半過去

cõme s'il y **étoit** joint (2 : 76)

si'il **étoit** marqué d'un double accent (1 : 125)

- 条件法

ce que l'on **devoit** sur une matiere si importante que telle de nôtre *e*. (1 : 63)

il semble qu'on ne **devoit** non plus retrancher en parlant qu'en écrivant, (1 : 9)

- 接続法現在

il semble presque qu'elle **soit** double. (2 : 175)

Il faut remarquer que cõme les voyelles enpêchent que l'*h*. ne **soit** consone, (2 : 56)

接続法半過去の三人称単数形については、子音、母音、休止の前で語末子音字 *-t* の発音に揺れがあることが確認できた。

	子音の前	母音の前	休止の前
-ât [ɑ:t], ît [i:t], ût [y:t]	4	9	6
-â# [ɑ(:)], î# [i(:)], û# [y(:)]	10	3	5

表 6-69：三人称単数接続法半過去

#### 6.1.9.1.4. 一人称複数形

動詞の一人称複数形において、直説法現在形、条件法、接続法現在において、語末子音

字-s は子音および休止の前では発音されず、母音の前では発音されることが観察された。

		子音の前	母音の前	休止の前
直説法現在形	-ons [-ɔ̃z]	-	3	-
	-ons [ɔ̃]	20	4	12
条件法	-rions [-rjɔ̃z]	-	1	-
	-rions [rjɔ̃]	-	-	2
接続法現在	-ons [-ɔ̃z]	-	2	-

表 6-70：一人称複数形（母音の前で発音が確認される例）

ただし、*être* 動詞の直説法現在形 *sommes*、半過去形、未来形、単純過去形については、子音の前と休止の前に位置する例のみ観察され、語末子音字は発音されない。

		子音の前	母音の前	休止の前
現在形( <i>être</i> )	<i>sommes</i> [sɔ̃mɐ]	1	-	-
半過去形	-ions [-rjɔ̃]	1	-	2
未来形	-rons [-rɔ̃]	1	-	2
単純過去	-mes [-mɐ]	-	-	10

表 6-71：一人称複数形（母音の前で発音が確認されない例）

おそらく、上記の表の時制においても、直説法現在形、条件法、接続法現在と同様に、母音の前では語末子音字-s が発音されることが予想される。

#### 6.1.9.1.5. 二人称複数形

二人称複数形は基本的に、-ez (-és)もしくは-tes を語尾に持つ。語末の子音字は、基本的には子音および休止の前では発音されず、母音の前では発音されることが多い。以下に本コーパスで観察された、現在形および *dire* の現在形 *dites*、未来形、接続法現在の語末子音字の有無の分布を表示する。



		子音の前	母音の前	休止の前
現在形	-ez, -és [-εz]	-	44	-
	-eʒ, -és [-ε]	124(+2)	10	16 (+1)
現在形 <i>dire</i>	dites [ditəz]	-	3	-
	dites [ditə]	168	5	8 (+1)
未来形	-rez, -rés [-rεz]	-	9	-
	-reʒ, -rés [-rε]	32 (+2)	3	3 (+1)
接続法現在	-iez [-jεz]	-	1	-
	-ieʒ [-jε]	1	-	-

表 6-72 : 二人称複数形 (母音の前で発音が確認される例)

以下にこれらの二人称複数形の動詞の例を挙げる。

- 現在形

子音の前 : Mais **écrivez** sans virgule (1 : 50)

母音の前 : Dites donc **et écrivez** à present [...]. (1 : 58)

Voyez encore la p. 107. de la première part. de l'*u* voyelle (2 : 28)

休止の前 : N'en **faites** rien (1 : 23)

- 現在形 *dire*

子音の前 : **Dites** donc. (1 : 44)

母音の前 : **dites** aussi bien *Laïc* (1 : 103)

Vous me **dites** hier, *si je ne mens*, (1 : 50)

休止の前 : Mais **dites**, *et écrivez* donc à present (1 : 146)

- 未来形

子音の前 : Vous **remarquerez** sur tout qu'il n'y a qu'un seul mot dans notre Langue (1 : 113)

母音の前 : *et vous écrivez* à present sans *s*. (2 : 136)

comme vous **verrez** au §. 3. de la lettre *E*. (2 : 103)

休止の前 : Vous **aimerez**, (1 : 85)

- 接続法現在

子音の前 : *vous les saurez* bien distinguer (0 : 18)

母音の前 : *mais afin que vous soyez* exens de faire aucune faute, (0 : 18)

半過去形、条件法、単純過去、*être* の現在形 (*êtes*)、*faire* の現在形 (*faites*)が母音の前に位置する例が本コーパスに含まれていない。これらの動詞の活用形の語末子音字は子音および

休止の前では発音されない。おそらく母音の前では上記に挙げた他の時制と同様に発音されることがあると予想できるだろう。

		子音の前	母音の前	休止の前
半過去形	-iez [-jɛ]	1	-	2
条件法	-riez [-rjɛ]	1	-	-
単純過去	-tes [-tə]	-	-	9
<i>être</i> 現在形	êtes [ɛtə]	5	-	1
<i>faire</i> 現在形	faites [fɛtə]	4	-	2

表 6-73 : 二人称複数形 (母音の前で発音が確認されない例)

#### 半過去形

子音の前 : vous **écriviez** l'infinifitif du verbe, (2 : 109)

休止の前 : Vous **dictiez**, (2 : 158)

#### 条件法

子音の前 : *quand même vous auriez renpli des Livres d'alfabets de mots* (0 : 18)

#### 単純過去

休止の前 : vous **vendîtes**, (2 : 128)

#### *être* 現在形

子音の前 : Vous **êtes** trop hardi, (2 : 93)

休止の前 : *coñe vous êtes*, (2 : 151)

#### *faire* 現在形

子音の前 : N'en **faites** rien (1 : 23)

休止の前 : *vous faites*, (1 : 151)

Milleran (1694)は二人称複数形の語末子音字の発音について以下のように説明している (Crevier, 1994 : 203)。

« [...] les secondes personnes du pluriel de tous les verbes des quatre conjugaisons, où il vaut mieux metre un z. au lieu de l's. quoi qu'il ne s'y prononce aussi jamais, [...] »

(Milleran, 1694 : 2 :150)

「4種類の屈折形の全ての動詞の二人称複数形については、絶対に発音されないとしても、sの代わりにzを取り入れる方がよいだろう。」

« z. qui se met ordinairement à la fin de la seconde personne du pluriel de tous

les tens des verbes, [...] se mange toûjours, [...]

Vous aimez fort le Lut, [...]

Vous parlez bien François,

Vous en jouez en Maître, [...]

Vous étudiez incessaîment, [...]

Dites donc *vous z-aimés fort le Lut, vou z en joués en Maître, vous parlés bien Francé, vou z-étudiés incessaman, [...]* Et non *vous zen joue zan Maître, vous zetudie zinsessaman.* »

(Milleran, 1694, 2 : 179-180)

「動詞の全ての時制の二人称複数形の語尾に通常付いている *z* は常に発音されない[...]。

Vous aimez fort le Lut, [...] (あなたはリュートを大変好む)

Vous parlez bien François, (あなたはフランス語をよく話す)

Vous en jouez en Maître, [...] (あなたは横柄にふるまう)

Vous étudiez incessaîment, [...] (あなたは休みなく勉強する)

よって以上は、[vuzɛmefɔ̃l(ə)lyt], [vuzȳzueȳmɛ:ɾ], [vupãlebjɛ̃fɾɔ̃se], [vuzetydjẽsɛsamã]と発音すべきであって、[vuzȳzueȳmɛ:ɾ], [vuzetydzejɛ̃sɛsamã]と発音すべきではない。」

よって、Milleran は二人称複数形の語末子音字は基本的に発音されないと主張していることが明白であり、それはまた母音の前においても同様のことである。しかし、本コーパスでは二人称複数形の語末子音字が母音の前で発音されることが観察された。この点については、リエゾンの分析において詳細に扱いたい。

#### 6.1.9.1.6. 三人称複数形

三人称複数形は基本的に *-ent* もしくは *-ont* を語尾に持つ。通常語末子音字は、子音および休止の前では発音されない。

		子音の前	母音の前	休止の前
現在形	-ent	-	52	-
	-ent#	280 (+1)	47	58 (+6)
半過去形	-ent	-	5	-
	-ent#	10	-	23 (+1)
条件法	-ent	-	2	-
	-ent#	19	3	15
接続法現在	-ent	-	2	1
	-ent#	19	3	7
接続法半過去	-ent	-	1	-
	-ent#	-	-	-

表 6-74 : 三人称複数形活用語尾-ent

Milleran は三人称複数形語尾-ent の発音に関して以下のように述べている(Crevier, 1994 : 206)。

« e. tout au contraire est toujours bref dans toutes les troisièmes personnes du pluriel qui se terminent en ent. & l'n. ne s'y prononce jamais, ni le t. pareillement, si ce n'est devant un mot qui commence par une voyelle. »

(Milleran, 1694, 1 : 79)

「反対に、ent.を語尾に持つ三人称複数形において e は常に短い。n は絶対に発音されることがない。同様に t に関しても母音で始まる語の前でなければ発音されない。」

以上の引用から、語末子音字の-t は子音および休止の前で発音されることはないが、母音の前での発音は可能であることが明らかである。以下に例を提示する。

### 現在形

子音の前 : JE n'ai point lu d'Auteurs qui **admetent** de double uu. voyelle, (1 : 155)

母音の前 :

DEux voyelles jointes ensemble dans la même Sylabe **s'apellent** une diftongue. (1 : 15)

Les voyelles qui ne **s'apellent** ainsi qu'à cause du mot voix, (1 : 3)

休止の前 : Mais ils se **tronpent**, (1 : 5)

### 半過去形

子音の前 : ces bons Messieurs me **demandoient** pour quoi [...] (2 : 11)

母音の前 : Prononcez les donc comme si celles **étoient** écrites ainsi. (2 : 147)

休止の前 : *Ils vouloient*, (1 : 83)

#### 条件法

子音の前 : *ils ne passeroient pas moins pour Etrangers*, (0 : 12)

母音の前 :

*autrement quand ils parleroient aussi bien qu'un François même partout ailleurs*, (0 : 12)

*ils perdroient en aparence leur plus bel ornement*, (1 : 9)

休止の前 : *Ils voudroient*, (1 : 83)

#### 接続法現在

子音の前 : *afin que les François mêmes en puissent profiter*, (2 : 183)

母音の前 :

*qu'ils soyent aussi diferens dans leur signification que dans leur ortografe*, (0 : 7)

*les François mêmes en puissent aussi profiter* (0 : 18)

休止の前 : *ils veüillent*, (1 : 81)

#### 接続法半過去

母音の前 : *il faudroit qu'ils aprissent à tout le moins*, (1 : 148)

次に、*-ont* を語尾に持つ三人称複数形において語末子音字-*t* は子音の前および休止の前では通常発音されず、母音の前では発音されることが観察された。

		子音の前	母音の前	休止の前
現在形	-ont [ɔ̃t]	-	61	-
	-on# [ɔ̃]	150 (+5)	6	6 (+4)
未来形	-ont [ɔ̃t]	-	3	-
	-on# [ɔ̃]	13	-	3

表 6-75 : 三人称複数形活用語尾-*ont*

#### 現在形

子音の前 : *la plû-part des Lettres qui m'ont paru superfluës*, (0 : 7)

母音の前 :

*mais ils font à mon avis une tres-grande faute* (1: 35)

*les mots qui ont entierement du raport les uns aux autres pour en faire la diference*, (2 : 111)

休止の前 : *Ils vont*, (1 : 113)

#### 未来形

子音の前 : *Les deux frases suivantes suivantes acheveront mieux de servir d'exenples*. (2 : 147)

母音の前 : *mais les Regles que j'en doñe ici suplèeront à ce petit defaut involontaire*, (0 :

13)

休止の前 : *Ils viendront*, (1 : 95)

単純過去形において、語末子音字は子音、母音および休止の前で発音されないことが観察された。

		子音の前	母音の前	休止の前
単純過去	<b>-ent</b>	1	4	3

表 6-76 : 三人称複数形単純過去

以下に例を示す。

### 単純過去

子音の前 : *Neanmoins afin que les étrangers eussent* moins de difficulté [...] (2 : 111)

母音の前 : *dans ces Regles plusieurs Exemples qui leur fussent* essentielles (0 : 9)

休止の前 : *ils aimèrent* (1 : 84)

### 6.1.9.2. 不定詞

不定詞については、基本的に *-er* および *-ir* の語末の子音字 *-r* は発音されないが、*-oir* を語尾に持つ不定詞の語末子音字は常に発音される。

不定詞	子音の前	母音の前	休止の前
<b>-er</b> [-e]	520 (+5)	149 (+9)	558 (+20)
<b>-ir</b> [-i]	49	14	71 (+4)
<b>-oir</b> [wɛ:r]	65	33	56

表 6-77 : 不定詞

この不定詞の発音について、Milleran は以下のように説明している。

« *e*. à la fin des infinitifs de la premiere conjug. [...] se prononce tant devant un mot qui comence par une voyelle que par une consone, et pareillement quand tous ces mots terminent la frase, comne l'é. mascu. à cause que l'*r*. se mange pour en adoucir la prononciation.

*Aimer ardeñent*, [...]

*Aimer beaucoup*, [...]

(Milleran, 1694, 1 : 65-66)

「第一活用形の不定詞の末尾の e は、母音で始まる語の前および子音で始まる語の前、そして同様にこれらの語が句末にくるときに、発音を和らげるために r が発音されないため、男性形の e のように発音される。

*Aimer ardeñment* ([ɛme aʁdmã]), [...]

*Aimer beaucoup* ([ɛme bo:ku:]), [...]

« R. ne s'exprime aussi jamais à la fin de l'infinitif de la seconde conjugaison, coñme dans la premiere pour en adoucir la prononciation [...]

*Batir au devant*, [...]

*Courir* { la lice, [...]  
          fortune, [...]

Dites toûjours *bati au*, &c. *couri fortune* [...]

(Milleran, 1694, 2 : 104)

「発音をやわらげるために、第一活用動詞と同様に第二活用動詞の不定詞の末尾で R は全く発音されない。

*Batir au devant*, [...]

*Courir* { la lice, [...]  
          fortune, [...]

常に、[bati au]、[kuri fɔʁtyn]のように発音せよ。」

Crevier (1994 : 211-212)は、Milleran (1 : 68)が動詞 *agréer* および *suppléer* の語末の[r]が発音されると説明していることを指摘している。

不定詞	子音の前	母音の前	休止の前
<i>agréer</i> [agree:r]	-	-	7
<i>agréer</i> [agree]	-	-	1
<i>suppléer</i> [suplee:r]	-	1	1
<i>suppléer</i> [suplee]	-	-	1

表 6-78 : 不定詞 *agréer* および *suppléer*

これら 2 つの動詞において語末子音の発音の有無は選択的のようである。

### 6.1.9.3. 過去分詞

ここで過去分詞として扱うのは、動詞 *être* もしくは *avoir* と共起し、過去を示すものである。

### 6.1.9.3.1. 語末子音字 -s

語末子音字が-sである過去分詞は基本的に子音および休止の前では発音されない。以下に挙げる過去分詞は母音の前に位置する例が観察されないものである。

	子音の前	母音の前	休止の前
comis [komi]	1	-	-
entrepris [ãtrəpri]	1	-	-
pris [pri]	1	-	-

表 6-79 : 語末子音字 -s を持つ過去分詞 (母音の前に位置する例無し)

以下に例を挙げる。

- **comis**  
les enfants qui se servent envers les servantes à qui on en a **comis** le soin, (1 : 29)
- **entrepris**  
Aussi n'aurois-je pas **entrepris** de traiter si particulièrement de chaque Letre (1 : 51)
- **pris**  
j'ai **pris** de lire deux fois après l'Imprimeur les épreuves de ma Grammaire, (2 : 192)

一方、以下に挙げる過去分詞は母音の前に位置する例が観察され、語末子音字は母音の前で発音されることが明らかとなった。

	子音の前	母音の前	休止の前
appris [apriz]	-	1	-
appris [apri]	1	-	-
mis [miz]	-	5	-
mis [mi]	7	1	-
permis [pɛrmiz]	-	1	-
性・数一致			
-s, -es	-	2	-
-s, -es	8	1	4

表 6-80 : 語末子音字 -s を持つ過去分詞 (母音の前に位置する例あり)

以下に例を挙げる。

- **appris**  
[...] qui n'ont jamais **appris** dans leur pays les principes de la Langue, (0 : 21)



- **mis**  
[...] les autres que j'ai **mis** par l'ordre de leur regle de la pronontiation. (1 : 12)
- **permis**  
[...] nous lui avons **permis**, et acordé [...] (2 : 198)
- **性・数一致**  
[...] je ne les ai **laissées** que dans les mots qui ont double signification, (1 : 9)  
[...] je les ai tous **marqués** d'une [...] (2 : 111)

#### 6.1.9.3.2. 語末子音字 -t

語末子音字が-tである過去分詞は、子音、母音、休止の前でそれぞれ発音される様相が観察された。以下の表に子音字の発音有無の分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
dit [dit]	20	13	13
di# [di]	15	-	2
fait [fɛt]	6	5	-
fai# [fɛ]	10	-	1
écrit [ekrit]	2	1	-

表 6-81 : 語末子音字 -t を持つ過去分詞

以上の表から明らかなことであるが、語末子音字-tは頻繁に子音の前および休止の前で発音されるようである。また、母音の前において語末子音字-tは常に発音される。以下にこれらの例を挙げる。

- **dit**  
co#ne j'ai déja **dit**, qui se prononçant le plus souvent co#ne un a. selon sa situation, (1 : 62)  
j'ai **dit** ci dessus de leur chiffre Romain, (2 : 169)  
Que vous a-il-**dit** ? (1 : 28)
- **fait**  
j'ai **fait** mes Regles succinctes, (0 : 17)  
mais deux raisons m'ont **fait** changer le dessein que j'avois de l'y metre. (0 : 17)
- **écrit**  
ceux qui en ont **écrit** jusqu'ici n'en ont efluré que les principales Regles (1 : 52)

#### 6.1.9.4. ジェロンディフ

ジェロンディフは語尾が-antである。語末の子音字は子音および休止の前では発音されない

が、母音の前では発音される。

ジェロンディフ	子音の前	母音の前	休止の前
-ant [ât]	-	38	-
-an# [ã]	180 (+7)	8	45 (+2)

表 6-82 : ジェロンディフ

以下に例を挙げる。

### ジェロンディフ

- 子音の前 :  
ils auroient bien mieux fait d'écrire pour tout le monde en **écrivant** [...] (0 : 16)
- 母音の前 : *Estival vieux mot, **apartenant** à l'été*, (2 : 118)  
il finit la Sylabe **étant** assés reconnoissable par sa figure, (1 : 41)
- 休止の前 : *et une moindre pose en **lisant***. (1 : 49)

#### 6.1.10. 語末子音字の発音のまとめ

以上で観察された語末子音字の発音には 4 つのタイプがあるといえる(Cf. Crevier 1994 : 327)。まず、1 つ目のタイプとして、母音および休止の前では発音されるが、子音の前では脱落が起きるものである。このタイプに該当する語には、*oeuf, boeuf, coup, état* などがある。

2 つ目のタイプは、母音の前でのみ発音され、子音および休止前では脱落が起きるものである。このタイプに当てはまる語には、例えば *saut, rapport, mauvais* がある。

そして、3 つ目のタイプとしては、子音、母音および休止の前といったいずれの場合にも、語末子音字の発音に揺れがあるものである。これらの語は *cerf, singulier, mot* などが該当する。

また、語末子音字の発音に全く揺れないグループが 4 つ目にあたり、この場合には語末子音字が常に発音されるものと、全く発音されないものがある。語末が常に発音される例として、*adjectif, bec, cap, but, athlas, animal, soleil, azur* などがある。また、語末が全く発音されない例としては、*couvre-chef, banc, drap, concert, gant, roux, saoul, outil, cuiller* が該当する。

また、休止の前や子音の前において *mot* のように語末子音字 *-t* が完全に脱落しているわけではないことは、Milleran のフランス語の大きな特徴だといえる(Cf. Morin, 2005b : 308)。特に、三人称単数形の動詞屈折形においては語末子音字 *-t* は子音の前および休止の前でしばしば発音されることが確認された。

## 6.2. リエゾンの分析

### 6.2.1. リエゾン子音

まず、リエゾン子音の違いによるリエゾンの実現率を以下に示す。

リエゾン子音	[t]	[z]
リエゾンの実現率	<b>81,31%</b> (1214/1493)	<b>65,98%</b> (1121/1699)

リエゾン子音	[p]	[k]	[l]	[ʎ]
リエゾンの実現率	<b>80%</b> (4/5)	<b>68,57%</b> (72/105)	<b>97,28%</b> (358/368)	<b>100%</b> (3/3)

表 6-83：各リエゾン子音の実現率

最もリエゾン実現率が高いのは子音[l]であり、97,28%のリエゾン実現率である。次に、リエゾン実現率が高いのはリエゾン子音[t]であり、リエゾン実現率は 81,31%である。現代フランス語において、リエゾン子音の実現頻度を比較すると[z]もしくは[n]のリエゾン実現率は常に[t]よりも高いが(Cf. Mallet 2008 : 205)、Milleran コーパスにおいてはこれとは異なる傾向が観察されたといえる。この Milleran コーパスにおけるリエゾン子音[t]のリエゾン実現率の高さは、おそらく動詞の三人称活用形においてリエゾンが安定的に実現される傾向によるものであるだろう。また、リエゾン子音[p]のリエゾン実現率も 80%とかなり高い値を示している。リエゾン子音[z]は 65,98%のリエゾン実現率を示している。最もリエゾンの実現率が低いのはリエゾン子音[k]である。リエゾン子音[t]、[z]およびリエゾン子音[p]、[k]、[l]、[ʎ]の大きな違いは、これらの語末子音を持つ語彙の種類豊富さである。以下では、Milleran コーパスにおけるリエゾン子音[p]、[k]、[l]、[ʎ]およびリエゾン子音[t]、[z]を持つ語彙の特徴を観察する。

#### 6.2.2.1. リエゾン子音[p]、[k]、[l]、[ʎ]を持つ語彙の特徴

まず、リエゾン子音 [p]のリエゾンは、副詞 *beaucoup* および *trop* でのみ実現される。

		L <sup>127</sup>	NL <sup>128</sup>	Total	%	リエゾンが実現する 例に占める割合
<i>trop</i>	副詞	2	0	2	100%	50%
<i>beaucoup</i>	副詞	2	1	3	66,67%	50%
<b>Total</b>		<b>4</b>	<b>1</b>	<b>5</b>	<b>80%</b>	<b>100%</b>

表 6-84: リエゾン子音[p]を持つ語彙

次に、リエゾン子音[l]のリエゾンは人称代名詞 *il* および *ils* においてのみ実現される。

		L	NL	Total	%	リエゾンが実現する 例に占める割合
<i>il</i>	代名詞	317	5	322	98,45%	88,55%
<i>ils</i>	代名詞	41	5	46	89,13%	11,45%
<b>Total</b>		<b>358</b>	<b>10</b>	<b>368</b>	<b>97,28%</b>	<b>100%</b>

表 6-85: リエゾン子音[l]を持つ語彙

そして、リエゾン子音[k]は本コーパスでは前置詞 *avec* および接続詞 *donc*、形容詞 *blanc* および *flanc*、そして数詞 *cinq* において実現が期待される。ただし、リエゾン子音[k]のコンテキストは主に前置詞 *avec* および接続詞 *donc* に集中し、他の語のリエゾンコンテキストは大変少数である。

		L	NL	Total	%	リエゾンが実現する 例に占める割合
<i>avec</i>	前置詞	60	3	63	95,24%	83,33%
<i>donc</i>	接続詞	10	28	38	26,32%	13,89%
<i>franc</i>	形容詞	1	0	1	100%	1,39%
<i>cinq</i>	数詞	1	1	2	50%	1,39%
<i>blanc</i>	形容詞	0	1	1	0%	0%
<b>Total</b>		<b>72</b>	<b>33</b>	<b>105</b>	<b>68,57%</b>	<b>100%</b>

表 6-86: リエゾン子音[k]を持つ語彙

そして、リエゾン子音[ʎ]は本コーパスでは「*gentil-homme*」という連辞でのみ観察される。連辞「*gentil-homme*」ではリエゾン子音[ʎ]が常に発音される。

<sup>127</sup> L はリエゾンが実現された例数を示す。

<sup>128</sup> NL はリエゾンが実現されない例数を示す。

		L	NL	Total	%
<i>gentil-(homme)</i>	形容詞	3	0	3	100%

表 6-87: リエゾン子音[ʁ]を持つ語彙

以上で観察したように、リエゾン子音[p], [k], [l], [ʁ]を持つ語の種類は大変少数であるといえる。

#### 6.2.2.2. リエゾン子音[t]を持つ語彙の特徴

リエゾン子音[t]を持つ語は複数ある。まず、語末子音字に-tを持つ語で、リエゾンが実現された 1214 例に占める割合が高い語のリストを以下に提示する。

		L	NL	Total	%	リエゾンが実現した例に占める割合
<i>devant</i>	前置詞	106	38	144	73,61%	8,73%
<i>est</i>	動詞	91	5	96	94,79%	7,50%
<i>faut</i>	動詞	74	1	75	98,67%	6,10%
<i>tout</i>	冠詞、副詞、 代名詞	72	0	72	100%	5,93%
<i>c'est (-à-dire)</i>	定型表現	62	3	65	95,38%	5,11%
<i>quand</i>	接続詞	57	5	62	91,94%	4,70%
<i>cet</i>	冠詞	48	0	48	100%	3,95%
<i>peut</i>	動詞	37	0	37	100%	3,05%
<i>ont</i>	動詞	29	3	32	90,63%	2,39%
<i>c'est</i>	動詞	23	1	24	95,83%	1,89%
その他		615	223	838	73,39%	50,66%
<b>Total</b>		<b>1214</b>	<b>279</b>	<b>1493</b>	<b>81,31%</b>	<b>100%</b>

表 6-88: リエゾン子音[t]を持つ語彙

これらの語の上位 10 例を観察すると、リエゾン子音[t]が実現される語の多くは、動詞、前置詞、冠詞、接続詞、定型表現であることが明らかである。また、リエゾンが最も実現されているのは動詞の三人称単数形である。この動詞の屈折形のリエゾンは現代フランス語

ではこれほど安定的に実現されることはないはずである<sup>129</sup>。また、*devant*を除いた語は全て単音節語であることも特徴的である。

### 6.2.2.3. リエゾン子音[z]を持つ語彙の特徴

次に、リエゾン子音[z]を持つ語において、リエゾンが実現された 1121 例に占める割合が高い語の上位 10 例を以下の表に提示する。

		L	NL	Total	%	リエゾンが実現された例が占める割合
<i>les</i>	冠詞	208	34	242	85,95%	18,55%
<i>des</i>	冠詞	136	16	152	89,47%	12,13%
<i>plus</i>	副詞	79	18	97	81,44%	7,05%
<i>mais</i>	接続詞	46	35	81	56,79%	4,10%
<i>pas</i>	副詞	37	3	40	92,50%	3,30%
<i>vous</i>	代名詞	34	3	37	91,89%	3,03%
<i>sans</i>	前置詞	31	6	37	83,78%	2,77%
<i>aux</i>	前置詞	27	0	27	100%	2,41%
<i>après</i>	前置詞	20	12	32	62,50%	1,78%
<i>terminés</i>	形容詞	20	10	30	66,67%	1,78%
その他		483	441	924	52,27%	43,09%
<b>Total</b>		<b>1121</b>	<b>578</b>	<b>1699</b>	<b>65,98%</b>	<b>100%</b>

表 6-89：リエゾン子音[z]を持つ語彙

これらの語の上位 10 例を観察すると、リエゾン子音[z]が実現される語の多くは、冠詞、副詞、接続詞、代名詞、前置詞、形容詞である。また、リエゾンが実現される例に占める割合が高いのは特に冠詞 *les* (18,55%) および *des* (12,13%) である。また、リエゾン子音[z]を持つ語の多くが、単音節語であることも特徴的である。

### 6.2.2.4. まとめ

上記の分析から、明白な点は複数あるだろう。第一に、リエゾンが実現されやすい語の品詞にも特徴が見られた。リエゾンの実現率が高い語の品詞に特徴的な点はいくつかある。まず、前置詞、接続詞、副詞といった不変化語である。不変化語とは、屈折変化が起きない語である。次に、冠詞や代名詞などのような単独で発話を構成することができない拘束型の語におけるリエゾンの実現数が多い。また、動詞や定型表現の中でリエゾンが実現さ

<sup>129</sup> 例えば、Mallet (2008 : 283)の研究においては、*être* 動詞三人称単数形の *est* のリエゾン実現率は 43,87%である。

れやすい語の多くは三人称単数形の屈折形である。リエゾンが実現されにくい語はおそらく屈折変化を表すタイプ、つまり名詞、形容詞、動詞（三人称を除く）であることが考えられるのではないだろうか。

第二に、語の長さがリエゾンの実現頻度に与える影響である。例えば、リエゾンが実現した例に占める割合が高い語の多くは単音節の語であった。一方、複数の音節を含む語で、それぞれのリエゾン子音とリエゾン実現頻度における上位を占めるのは *beaucoup, devant, après, terminés, avec, gentil (-homme)*のみである。

次に、リエゾンが実現されやすい語における語末の音節構造にも注目すべきである。リエゾンが実現された例に占める割合が高い語の多くは、単独で発音された場合に語末音節が開音節である。開音節の語は閉音節の語よりもリエゾンが実現されやすいということになるだろう。

以上で示した点については、「語の長さ」、「語末の音節構造」、そして「統語構造」というリエゾンの実現有無に影響すると考えられる要因として扱う。

### 6.2.3. 語の長さ

リエゾンの実現に対する語の長さの影響として、語に含まれる音節数が少なければ少ないほどリエゾンが実現し、音節数が多ければ多いほどリエゾンが実現されにくいものであると考えられている。Milleran のコーパスにおいてもこの影響は顕著に観察されたといえるだろう。以下の表は、単音節の語のリエゾン実現率と複数音節の語のリエゾン実現率を比較したものである。

リエゾン 子音	単音節			複数音節		
	コンテク スト数	リエゾン 実現数	%	コンテク スト数	リエゾン 実現数	%
[t]	849	787	92,70%	644	427	66,30%
[z]	1048	792	75,57%	651	329	50,54%
[p]	2	2	100%	3	2	66,66%
[l]	368	358	97,28%	-	-	-
[k]	42	12	28,57%	63	60	95,24%
[ʃ]	-	-	-	3	3	100%
<b>Total</b>	<b>2309</b>	<b>1951</b>	<b>84,50%</b>	<b>1364</b>	<b>821</b>	<b>60,19%</b>

表 6-90：語の長さ

まず、単音節の語に関しては 2309 例中 1951 例でリエゾンが実現され、リエゾンの実現率は 84,0%である。それに対して、複数音節の語に関しては 1364 例の中 821 例でリエゾンが実現され、リエゾンの実現率は 60,19%である。

ただし、単音節の語であっても、どのリエゾン子音を持つ語もリエゾンの実現率が高いとはいえない。例えば、リエゾン子音[k]を持つ語のグループではリエゾンの実現率が 28,57% とかなり低い値を示している。また、これは複数音節語においても同様で、リエゾン子音[ʁ]を持つ語は 100%のリエゾン実現率を示している。

また、特にリエゾン子音[t]と[z]と語の長さを比較すると、最もリエゾンの実現率が高いのは「単音節かつリエゾン子音[t]」のグループである。次に、リエゾンの実現率が高いのは「単音節かつリエゾン子音[z]」のグループである。それに続くのが、「複数音節かつリエゾン子音[t]」のグループ、そして「複数音節かつリエゾン子音[z]」のグループが最もリエゾン実現率が低い。

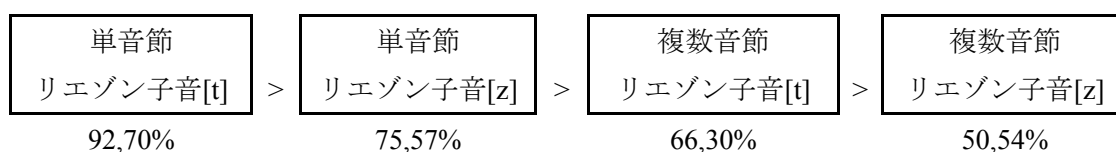


図 6-1 : 音節数とリエゾン子音[t]および[z]の比較

現代フランス語において MOT1 が単音節の場合には、複数音節の場合によりもリエゾンが実現されやすいと言われている。そして、興味深いのは Milleran のコーパスにおいて、リエゾン子音[t]を持つ語が、リエゾン子音[z]を持つ語よりもリエゾンが実現されやすいことである。複数の先行研究においてリエゾン子音の実現頻度の違いを比較すると、[t]が最上位に表れることはない(Cf. Mallet, 2008 : 295)。これについて、「リエゾン子音[t]を持つ語とそれに後続する語はリエゾンの実現が選択的であることが多い」という Ranson (2008 : 1675)の指摘は興味深い。つまり、Milleran のフランス語においては、現代フランス語において選択的であるリエゾンが、かなり義務的に行われていたと解釈できるからである。確かに、Milleran コーパスにおけるリエゾン子音[t]を語末に持つ上位語において、現代フランス語においては選択的にリエゾンが実現される動詞の三人称屈折形(*est, faut, peut, ont*)が多く含まれる。そして、これらの語のリエゾン実現率は 90%以上であり、かなり義務的に近いリエゾンコンテキストといえる。

#### 6.2.4. 語末音節の種類

語末音節の種類はリエゾンの実現に影響を与えるのだろうか。音節の種類にはまず、母音で終わる開音節と、子音で終わる閉音節がある。ここではリエゾン子音が潜在的であり、休止の前で実現しないということを前提として開音節と閉音節を定義したい。つまり、開音節はリエゾン子音が発音されない場合に母音で終わる語末音節のことを指し、閉音節はリエゾン子音が発音されない場合に子音で終わる語末音節のことを指すこととする。ここでは語末開音節の母音の下位分類として、口母音と鼻母音の 2 つの分類を設ける。次に、閉音節の下位分類として、母音+[r]のもの、母音+[r]以外の子音、母音+子音+無音の e (ə)と



いう3つの分類を設けた。

		音節の種類の下位分類		例
開音節	(1) 口母音	V (CL) # V		<i>mot</i> [mɔ]
	(2) 鼻母音	VN (CL) # V		<i>devant</i> [d(ə)vã]
閉音節	(3) 母音 + [r]	V [r] (CL) # V		<i>fort</i> [fɔr]
	(4) 母音 + [r]以外の子音	VC (CL) # V		<i>personels</i> [pɛrsonɛl]
	(5) 母音 + 子音(+無音の e)	VC (ə) (CL) # V		<i>lettres</i> [lɛtr(ə)]

表 6-91：音節の種類の下位分類

これら語末音節の種類それぞれのリエゾン実現率を算出すると、以下のようなグラフが得られる。

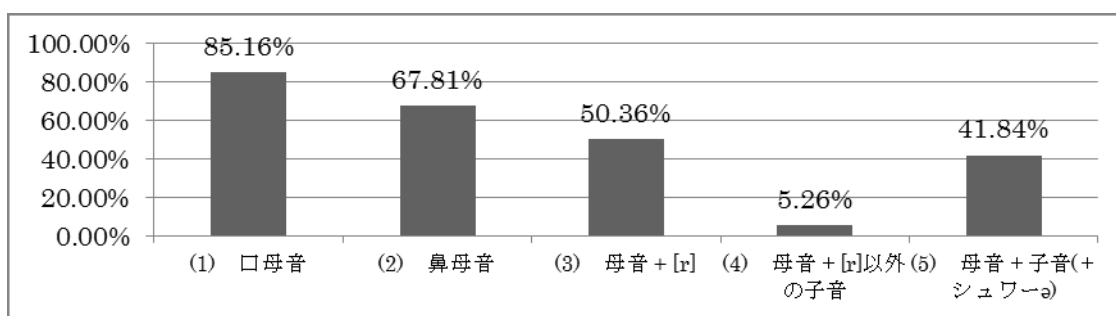


図 6-2：語末音節の種類とリエゾンの実現率

語末音節の種類	L	NL	Total	%
(1) 口母音	1983	346	2329	85,14%
(2) 鼻母音	575	273	848	67,81%
(3) 母音 + [r]	69	68	137	50,36%
(4) 母音+[r]以外の子音	1	18	19	5,26%
(5) 母音+子音(+無音の e)	141	196	337	41,84%

表 6-92：語末音節の種類とリエゾンの実現率

最もリエゾンの実現率が高いのは、口母音で終わる語末音節を持つ語のグループで、リエゾン実現率は 85,14%である。その次に、リエゾン実現率が高いのは、鼻母音で終わる語末音節を持つ語のグループであり、リエゾン実現率は 67,81%である。よって、この結果から、語末に開音節を持つ語において、よりリエゾンが実現されやすいことは明白である。閉音節を持つ語のグループについては、最もリエゾンが実現するのは母音+ [r]を語末に持つ

語のグループで、リエゾン実現率は 50,36 % である。また、母音+子音(+無音の e)を語末音節として持つ語のグループのリエゾン実現率は 41,84 % である。最もリエゾン実現率が低い語は、母音+[r]以外の子音を語末音節として持つ語のグループであり、リエゾン実現率は 5,26% である。

さらに、開音節と閉音節という音節構造の違いを単純な二項対立に還元した場合、以下の表のような結果が得られる。

	L	NL	Total	%
開音節	2561	619	3180	80,53%
閉音節	211	282	493	42,80%

表 6-93：開音節語と閉音節語のリエゾン実現率の比較

開音節の語は 80,81%、閉音節の語は 42,80% のリエゾン実現率を示し、やはり開音節語においてリエゾンの実現頻度が高いことが明らかである。

### 6.2.5. 統語的結束性

以下では、統語的結束性がリエゾンの実現に与える影響を観察する。本節ではまず、MOT1 の品詞の特徴に焦点を置き、名詞句、動詞句、前置詞句、副詞、接続詞、代名詞におけるリエゾンの実現を観察する。また、MOT2 がアルファベットおよび接続詞(*et, ou*)であるリエゾンコンテキストにおけるリエゾンの実現を観察する。終わりに、「名詞+動詞」という主語と動詞が隣接した場合のリエゾンの実現を観察する。

#### 6.2.5.1. 名詞句

名詞句は名詞を主要部とする句である。名詞を限定および修飾するものとして、冠詞、数詞、形容詞が該当する。以下では、「冠詞+名詞」、「数詞+名詞」、「数詞+形容詞 (+名詞)」、「冠詞+形容詞 (+名詞)」、「形容詞+名詞」(単数形および複数形)、「名詞+形容詞」(単数形および複数形) という統語的コンテキストにおけるリエゾンの実現を観察する。

##### 6.2.5.1.1. 冠詞+名詞

Milleran コーパスでは鼻母音の発音についての情報が不確かである。「冠詞+名詞」のコンテキストにおいて、リエゾンの実現を観察することができるのは複数形の冠詞に限定される<sup>130</sup>。よって、*des, les, ces, mes, ses, nos, vos, leurs, sus-dits, plusieurs, quelques* の 11 つの冠詞とその後続語である名詞におけるリエゾンの実現を観察する。

まず、以下に「冠詞+名詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率を以下に表の形で示す。

<sup>130</sup> 単数形の冠詞に該当するのは *un, mon, ton, son* 等である。

「冠詞+名詞」	L	NL	Total	%
<i>des</i>	97	9	106	91,51%
<i>les</i>	115	25	140	82,14%
<i>ces</i>	7	0	7	100%
<i>mes</i>	5	2	7	71,43%
<i>ses</i>	6	0	6	100%
<i>nos</i>	2	0	2	100%
<i>vos</i>	1	0	1	100%
<i>leurs</i>	8	3	11	72,73%
<i>sus-dits</i>	1	0	1	100%
<i>plusieurs</i>	2	4	6	33,33%
<i>quelques</i>	5	5	10	50,00%
<b>Total</b>	<b>249</b>	<b>48</b>	<b>297</b>	<b>83,84%</b>

表 6-94: 「冠詞+名詞」 コンテキストにおけるリエゾン実現率

Milleran コーパスで、「冠詞+名詞」 コンテキストにおけるリエゾンの実現率は 100%ではない。これはこのようなコンテキストにおけるリエゾンの実現が絶対的ではないことを示す。少なくとも、*ces*, *ses*, *nos*, *vos*, *sus-dits* の 4 つの冠詞は後続語とのリエゾンの実現率が 100%である。しかし、それ以外の冠詞のリエゾンの実現率は 33,33%から 91,51%の間に分布する。

興味深いのは、*leurs*, *plusieurs*, *quelques* といった語において、語末でリエゾン子音が発音されない場合にもその直前の子音が、もしくは「子音+[ə]」が発音される語のリエゾン実現率が比較的低いことである。語末に位置する音節構造がリエゾンの実現にどのように影響するかどうかは大変興味深い。音節構造の 1 つとして、リエゾン子音が発音されない場合に語末が開音節であるタイプの冠詞は、*des*, *les*, *ces*, *mes*, *ses*, *nos*, *vos*, *sus-dits* である。次に、リエゾン子音が発音されない場合に語末が閉音節である冠詞は *leurs*, *plusieurs*, *quelques* である。開音節語末の冠詞と閉音節語末の冠詞のリエゾン実現率を計算すると以下の表のような結果を得ることができる。

	L	NL	Total	%
開音節	234	36	270	86,67%
閉音節	15	12	27	55,56%
<b>Total</b>	<b>249</b>	<b>48</b>	<b>297</b>	<b>83,84%</b>

表 6-95: 「冠詞+名詞」 コンテキストにおける開音節と閉音節の違い

開音節語末の冠詞は 86,67%、閉音節語末の冠詞は 55,56%というように、リエゾン実現率の違いが観察される。よって、語末が開音節である語のほうが閉音節の語よりリエゾンが実

現されやすい。

#### 6.2.5.1.2. 数詞+名詞

「数詞+名詞」のコンテキストとしてコーパスで観察されたのは9例であるが、この全てでリエゾンが実現された。

「数詞+名詞」	L	NL	Total	%
<i>deux</i>	3	0	3	100%
<i>six</i>	1	0	1	100%
<i>neuf</i>	2	0	2	100%
<i>dix</i>	2	0	2	100%
<i>vingt</i>	1	0	1	100%
<b>Total</b>	<b>9</b>	<b>0</b>	<b>9</b>	<b>100%</b>

表 6-96 : 「数詞+名詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率

以下に例を挙げる。

- **deux** : La feme, et la jument font **deux** animaux bien indontables, (1 : 20)
- **six** : **Six** ans, 6 *anni*, &c. (2 : 177)
- **neuf** : Il est **neuf** heures, (2 : 48)
- **dix** : pendant le tens de **dix** añées consecutives à comēncer du jour (2 : 198)
- **vingt** : **Vingt** ans, 20 *Anni* (2 : 162)

このコンテキストで常にリエゾンが実現されると断言するためには、十分な数の例が観察されたとは言えない。ただし、このコンテキストにおいてリエゾンが実現する可能性は比較的高いといえる。

#### 6.2.5.1.3. 冠詞+形容詞

「冠詞+形容詞」のコンテキストにおいてリエゾンの実現率は全体で 90,09%である。

「冠詞+形容詞」	L	NL	Total	%
<i>leurs</i>	1	0	1	100%
<i>les</i>	55	3	58	94,83%
<i>des</i>	36	5	41	87,80%
<i>quelques</i>	6	1	7	85,71%
<i>plusieurs</i>	2	2	4	50%
<b>Total</b>	<b>100</b>	<b>11</b>	<b>111</b>	<b>90,09%</b>

表 6-97: 「冠詞+形容詞」 コンテキストにおけるリエゾン実現率

まず、冠詞 *leurs* に形容詞が後続する例は 1 例のみ観察され、リエゾンが実現される。そのため、リエゾンの実現率は 100% である。

- ***leurs*** : *comme dans leurs autres tens qui suivent.* (1 : 80)

次に、冠詞 *les*, *des*, *quelques* はそれぞれリエゾンの実現率が 94,83%、87,80%、85,71% と比較的高いといえる。

- ***les***  
 リエゾンが実現される例 : *sorte d'Officier établi par les anciens Romains* (2 : 174)  
 リエゾンが実現される例 : *Toutes les autres lettres superflues,* (2 : 95)
- ***des***  
 リエゾンの実現がある例 : *Idole des anciens peuples de l'Orient,* (1 : 115)  
 リエゾンの実現がない例 : *et ainsi des autres doubles consonnes,* (2 : 83)
- ***quelques***  
 リエゾンの実現がある例 : *lors qu'ils confondent quelques autres lettres* (1 : 107)  
 リエゾンの実現がない例 : *qui ont aussi s. devant p. et dans quelques autres.* (2 : 132)

終わりに、冠詞 *plusieurs* に形容詞が後続するコンテキストは 4 例のみ観察され、この 4 例のうち 2 例でのみリエゾンが実現された。

- ***plusieurs***  
 リエゾンの実現がある例 : *j'ai donné pour Exemples plusieurs autres mots* (2 : 106)  
 リエゾンの実現がない例 : *et de plusieurs autres noms substantif,* (1 : 65)

興味深いのは上記のリエゾンが実現されない例において、冠詞 *plusieurs* の語末子音字 *-s* に先行する子音字 *-r-* も同様に発音されず、**« plusieurs autres »** [pluzø o:trə] のように語境界で母

音接続が生じることである。この点は、母音接続が必ずしも意図的に避けられたわけではないことを示している。

#### 6.2.5.1.4. 数詞+形容詞

「数詞+形容詞」のコンテキストにおけるリエゾンの実現率は 60,00%である。

「数詞+形容詞」	L	NL	Total	%
<i>deux</i>	3	0	3	100%
<i>trois</i>	0	1	1	0%
<i>cinq</i>	0	1	1	0%
<b>Total</b>	<b>3</b>	<b>2</b>	<b>5</b>	<b>60%</b>

表 6-98 : 「数詞+形容詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率

このコンテキストは全体で 5 例のみ観察され、*deux* は 3 例中 3 例のリエゾンが実現したが、*trois* および *cinq* は 1 例ずつのみ観察され、リエゾンが実現しない。以下に例を挙げる。

- ***deux*** : Les **deux autres** consones J. et V. n'ont point de son que par l'aide des voyelles com̃e les autres. (1 : 15)
- ***trois*** : mais lors qu'il entre en composition avec les **trois autres** suivans (2 : 174)
- ***cinq*** : aussi plus employée que les **cinq autres**. (1 : 61)

ただし、「数詞+形容詞」におけるリエゾンの実現の頻度を安定的に観察するためには、本コーパスで得られた例数は大変乏しい。

#### 6.2.5.1.5. 形容詞+名詞

##### 6.2.5.1.5.1. 単数形

「単数形形容詞+単数形名詞」のコンテキストは《*gentil-hoĩe*》という連辞と、語末子音字に *-t, -d, -k* を持つ形容詞に名詞が後続するものが観察された。

「単数形形容詞+単数形名詞」	L	NL	Total	%
<i>gentil-hoĩe</i>	3	0	3	100%
単数形形容詞 (語末子音字 <i>-t, -d, -c</i> )	8	2	10	80%
<b>Total</b>	<b>11</b>	<b>2</b>	<b>13</b>	<b>84,62%</b>

表 6-99 : 「単数形形容詞+単数形名詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率

まず連辞« *gentil-hoñe* »<sup>131</sup>は本コーパスで 3 例観察され、3 例とも語末子音字-*l*が発音される。以下に例を挙げる。

**Gentil-hoñe, Nobilis.** (2 : 117)

**Gentil-hoñe, qualité d'un simple Gentil-hoñe** (2 : 117)

次に、語末子音字に-*t*, -*d*, -*k*を持つ形容詞に名詞が後続するものについては 10 例観察されたうちの 8 例でリエゾンが実現された。この語末に-*t*, -*d*, -*c*を持つ形容詞には *grand*, *galant*, *méchant*, *puissant*, *petit*, *saint*, *franc* である。リエゾンが実現しなかった 2 例に見られる形容詞は、*saint* および *petit* である。以下に例を挙げる。

- <b><u>grand</u></b> :	Hâle, m. du Soleil <i>ou</i> le <b>grand</b> air, <i>Aestus Solis</i> . (2 : 55) <b>Grand animal</b> , <i>Magnum animal</i> . (2: 36)
- <b><u>galant</u></b> :	C'est un <b>galant</b> hoñe. <i>Est egregius vir</i> . (1 : 23)
- <b><u>méchant</u></b> :	<i>c'est-à-dire</i> , un <b>méchant</b> ouvrier, (2 : 153)
- <b><u>puissant</u></b> :	<b>Puissant</b> animal (2 : 164)
- <b><u>petit</u></b> :	Lezard, e, <b>petit</b> animal, <i>Lacertus, a, &amp;c.</i> (2 : 30)
- <b><u>saint</u></b> :	Xavier, nom de <b>Saint</b> Apôtre des Indes, (2 : 170)
- <b><u>franc</u></b> :	<b>Franc-aleu</b> m. terme de Droit, (1 : 47)

表 6-100 : 「単数形形容詞+単数形名詞」 コンテキストの例

例が少数であるため、「単数形形容詞+単数形名詞」の統語的コンテキストにおけるリエゾンが義務的であるか、選択的であるかについては明白な判断を下すことはできない。

#### 6.2.5.1.5.2. 複数形

複数形形容詞の語末子音字は-*s*もしくは-*x*である。本コーパスにおいて、「複数形形容詞+複数形名詞」のコンテキストは 20 例観察された。そのうち 12 例においてリエゾンが実現され、リエゾンの実現率は 60%である。

	L	NL	Total	%
複数形形容詞 - <i>s</i> , - <i>x</i> + 複数形名詞	12	8	20	60%

表 6-101 : 「複数形形容詞-*s*, -*x*+ 複数形名詞」 コンテキストにおけるリエゾン実現率

<sup>131</sup> « *gentil-hoñe* »の複数形 « *Gentils-hoñes* »は本コーパスで 1 例のみ観察された。複数形の場合には子音字 *l*は発音されることはないが、複数を示す形態素-*s*が発音される。

以下に例を挙げる。

- リエゾンの実現あり

il y a une maison de plaisance dont le jardin est plein des plus **belles** eaux vives (2 : 99)

Nous a fait remonter que s'étant appliqué des ses **premières** années, (2 : 197)

[...] tant de **fameux Auteurs** n'ont pas observé cete exactitude [...] (0 : 15)

- リエゾンの実現なし

De **beaux** animaux, *Pulchra animalia*. (2 : 176)

Saumur lieu de sa naissance est un des **principaux** endroits [...] (2 : 197)

avec les **diferens** accens dont les voyelles doivent être marquées (2 : 111)

リエゾンの実現有無は語末音節の構造に依存する可能性をここで考察したい。例えば、冠詞においては語末音節が閉音節のものは、開音節のものよりもリエゾンの実現頻度が高いことが確認された。このような傾向は「複数形形容詞+複数形名詞」においても観察されるのだろうか。

	L	NL	Total	%
開音節	6	5	11	54,55%
閉音節	6	3	9	66,67%
<b>Total</b>	<b>12</b>	<b>8</b>	<b>20</b>	<b>60%</b>

表 6-102 : 「複数形形容詞-s, -x + 複数形名詞」コンテキストにおける語末音節の違い

リエゾンが実現する形容詞において、語末音節が開音節および閉音節のものはそれぞれ6例ずつである。また、リエゾンが実現しない形容詞においては、語末音節が開音節のものは5例、閉音節のものは3例観察された。開音節語末の語におけるリエゾン実現率は54,55%であり、閉音節語末のリエゾン実現率は66,67%である。語末が開音節であればよりリエゾンが実現するというわけではない。

#### 6.2.5.1.6. 名詞+形容詞

##### 6.2.5.1.6.1. 単数形

単数形名詞+単数形形容詞のコンテキストで表れた名詞の語末子音字は全て-tおよび-dである。以下にリエゾンの実現率を示す。



	L	NL	Total	%
単数形名詞 + 単数形形容詞 (語末子音字-t, -d)	18	6	24	75%

表 6-103 : 「単数形名詞 + 単数形形容詞」 コンテキスト  
におけるリエゾン実現率

このコンテキストにおけるリエゾンの実現率は 75%である。以下に本コーパスで観察された「単数形名詞+単数形形容詞」の組み合わせの内訳を提示する。

MOT1	MOT2	L	NL	Total
<i>accent</i>	<i>aigu</i>	12	3	15
<i>mot</i>	<i>admirable</i>	1	0	1
	<i>entier</i>	1	0	1
<i>point</i>	<i>interogant</i>	1	2	3
<i>chat</i>	<i>huant</i>	1	0	1
<i>art</i>	<i>ingenieux</i>	1	0	1
<i>dent</i>	<i>oeilleure</i>	1	0	1
<i>default</i>	<i>involontaire</i>	0	1	1

表 6-104 : 「単数形名詞 + 単数形形容詞」の例

上記の例について以下で詳しく説明する。まず、「*accent aigu*」という連辞ではリエゾンが 15 例中の 12 例で実現している。この 2 つの語の組み合わせで形成される連辞は合成語を形成しているといってもよいだろう。ただし、名詞 *accent* の語末子音字-t は Milleran のフランス語において常に発音されるわけではない。次に「*mot* + 形容詞」の例は、「*mot admirable*」および「*mot entier*」の 2 例があり、どちらの例でもリエゾンが実現された。これは、語 *mot* は子音および休止の前でも語末子音字が発音されやすい語であることから、母音で始まる語が後続する場合に語末子音字が発音されやすいと考えられる。また、「*point interogant*」, 「*chat huant*」, 「*art ingenieux*」, 「*dent oeilleure*」の 4 つの例でも語末子音字の発音がそれぞれ実現された。終わりに、「*accent aigu*」以外でリエゾンが実現されない例は「*default involontaire*」および「*point interogant*」である。

#### 6.2.5.1.6.2. 複数形

「複数形名詞+複数形形容詞」のコンテキストでは子音[z]の実現が期待されるが、リエゾンの実現率は 34,61%と低い。以下に、リエゾンの実現率を示した表を挙げる。

	L	NL	Total	%
複数形名詞-s, -x + 複数形形容詞	9	17	26	34,61%

表 6-105 : 「複数形名詞-s, -x + 複数形形容詞」 コンテキスト  
におけるリエゾン実現率

「複数形名詞+複数形形容詞」のコンテキストにおいて、リエゾンの実現は義務的であるとはいえない。以下に例を挙げる。

- リエゾンの実現あり
  - Il en est de même des **mots** étrangers. (2 : 176)
  - Il en faut excepter les 7. Derivés des **Langues** étrangères [...] (1 : 74)
- リエゾン実現なし
  - X. dans les **noms** ordinaires, [...] (2 : 173)
  - Femmes** aimables, *Mulieres amabiles*. (1 : 53)
  - Il est encore necessaire de savoir par coeur les 2. **verbes** auxiliaires avoir & être*, (0 : 19)

以下では、「複数形名詞+複数形形容詞」のコンテキストにおいて、語末の音節構造がリエゾンの実現有無にどのように影響するのかを考察する。

	L	NL	Total	%
開音節	7	5	12	58,33%
閉音節	2	12	14	14,29%
<b>Total</b>	9	17	26	<b>34,61%</b>

表 6-106 : 「複数形名詞-s, -x + 複数形形容詞」 コンテキスト  
における語末音節構造の違い

語末音節が開音節の場合のリエゾンの実現率は 58,33%であり、閉音節の場合には 14,29%である。語末音節が開音節である場合には、閉音節である場合よりもリエゾンの実現する確率が高いと考えられる。しかし、そもそも開音節の場合でもリエゾンの実現率は低いため、このコンテキストにおいてリエゾンの実現が絶対的に必要であるとは言えないだろう。

#### 6.2.5.1.7. 名詞句におけるリエゾンのまとめ

名詞句におけるリエゾンの実現について、それぞれのコンテキストによって異なる傾向が観察された。

		L	NL	Total	%
「限定辞+名詞」	冠詞+名詞	249	48	297	83,84%
	数詞+名詞	9	0	9	100%
	「限定辞+名詞」	<b>258</b>	<b>48</b>	<b>306</b>	<b>84,31%</b>
「限定辞+形容詞」	冠詞+形容詞	100	11	111	90,09%
	数詞+形容詞	3	2	5	60%
	「限定辞+形容詞」	<b>103</b>	<b>13</b>	<b>116</b>	<b>88,79%</b>
「形容詞+名詞」	形容詞+名詞（単数形）	11	2	13	84,62%
	形容詞+名詞（複数形）	12	8	20	60%
	「形容詞+名詞」	<b>23</b>	<b>10</b>	<b>33</b>	<b>69,70%</b>
「名詞+形容詞」	名詞+形容詞（単数形）	18	6	24	75%
	名詞+形容詞（複数形）	9	17	26	34,61%
	「名詞+形容詞」	<b>27</b>	<b>23</b>	<b>50</b>	<b>54%</b>
名詞句全体		<b>411</b>	<b>94</b>	<b>505</b>	<b>81,39%</b>

表 6-107：名詞句におけるリエゾンの実現率

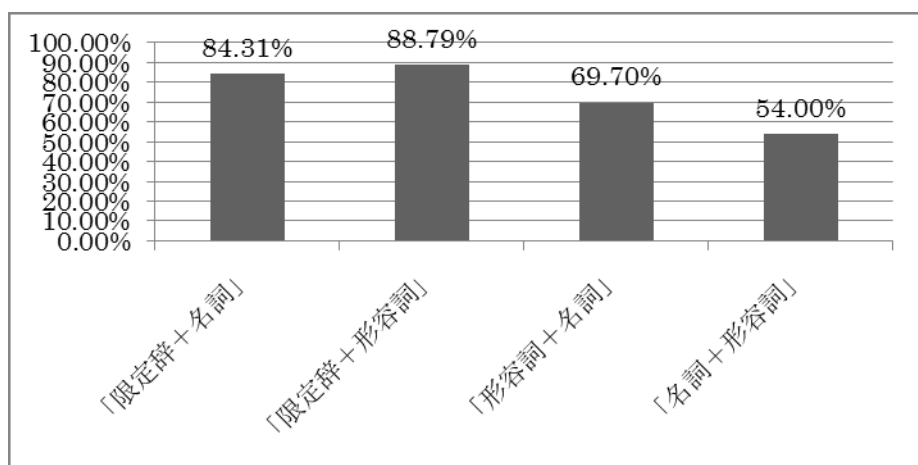


図 6-3：名詞句におけるリエゾンの実現率

まず、「限定辞（冠詞、数詞）+名詞」および「限定辞（冠詞、数詞）+形容詞」のコンテキストではリエゾンの実現率は 80%以上であるが、義務的にリエゾンが実現するわけではない。

次に、「形容詞+名詞」コンテキストでは、リエゾンの実現平均値は 69,70%である。このコンテキストでは、単数形と複数形によってリエゾンの実現率が異なる傾向が観察された。つまり、複数形よりも単数形のリエゾンの実現率が高いということである。

また、「名詞+形容詞」コンテキストでは最もリエゾンの実現率が低く、リエゾン実現率は 54%にとどまる。このコンテキストにおいても、単数形と複数形によってリエゾンの実

現率が異なる傾向が観察され、単数形の場合のリエゾン実現率が高い。

リエゾンの実現が統語的結束性の強度を示すものであるのならば、限定辞と名詞、限定辞と形容詞の間の統語的結束性は比較的強いといえるのに対して、形容詞と名詞、名詞と形容詞の間の統語的結束性は弱いと解釈できる。

さらに、「冠詞+名詞」、「冠詞+形容詞」、「複数形形容詞+複数形名詞」および「複数形名詞+複数形形容詞」のコンテキストでは、リエゾン子音[z]が実現することが期待されるが、リエゾンが義務的に実現されるわけではない。このことは、少なからずも子音[z]が複数性を示すという機能が完全に確立されてないことを意味しているとも考えられる。

### 6.2.5.2. 動詞句

動詞句におけるリエゾンについては、屈折形、過去分詞、ジェロンディフに分けて分析を行う。

#### 6.2.5.2.1. 屈折形

##### 6.2.5.2.2. 後続語の種類による違い

動詞の屈折形と後続語のリエゾンは後続語の種類によって異なる傾向が観察された。以下に後続語毎のリエゾン実現率を示した表を提示する。

	L	NL	Total	%
不定詞	101	7	108	93,52%
冠詞 ( <i>un, une</i> )	66	5	71	92,96%
形容詞	23	2	25	92,00%
名詞	10	1	11	90,91%
人称代名詞	53	6	59	89,83%
副詞	194	34	228	85,09%
過去分詞	33	6	39	84,62%
前置詞	150	30	180	83,33%
アルファベット	5	5	10	50%
動詞	1	1	2	50%
接続詞( <i>et, ou</i> )	5	12	17	29,41%
<b>Total</b>	<b>641</b>	<b>109</b>	<b>750</b>	<b>85,47%</b>

表 6-108 : 後続語の種類による動詞屈折形のリエゾン

まず、「動詞+不定詞」、「動詞+冠詞 (*un, une*)」、「動詞+形容詞」、「動詞+名詞」、「動詞+人称代名詞」、「動詞+副詞」、「動詞+過去分詞」、「動詞+前置詞」のコンテキストにおいて、リエゾンは 83,33%から 93,52%という比較的高い確率でリエゾンが実現している。

これらのコンテキストでは統語的結束性が高いと言える。以下に例を挙げる。

- 「動詞+不定詞」  
リエゾンの実現がある例：Il en **faut** excepter les suivans (1 : 149)  
リエゾンの実現がない例：cõme nous ne **pouvons** admettre de double *ii*. (1 : 100)
- 「動詞+冠詞 (*un, une*)」  
リエゾンの実現がある例：lors qu'il **suit** une autre consone ou qu'il est à la fin, (1 : 108)  
リエゾンの実現がない例：parce qu'elles **rendent** un son plus liquide, (1 : 10)
- 「動詞+形容詞」  
リエゾンの実現がある例：qu'il **soit** impossible de prononcer le Verbe *mouiller*, (1 : 11)  
リエゾンの実現がない例：plusieurs Exenples qui leur **fussent** essentielles, (0 : 9)
- 「動詞+名詞」  
リエゾンの実現がある例：on **fait** allusion pour lors du mot de *mie* de pain [...] (1 : 29)
- 「動詞+人称代名詞」  
リエゾンの実現がある例：Que **veut-il** ? *Quid vult* ? (1 : 42)  
リエゾンの実現がない例：**pouroient-ils** aprendre ces Idiomes (0 : 12)
- 「動詞+副詞」  
リエゾンの実現がある例：Il se **prend** encore de cinq manieres. (2 : 121)  
リエゾンの実現がない例：les discours qui **dependent** absolument [...] (2 : 121)
- 「動詞+過去分詞」  
リエゾンの実現がある例：ceux qui **ont** acoûtumé de converser avec eux (2 : 28)  
リエゾンの実現がない例：J'**avois** eu, &c. *Habueram*, &c. (1 : 56)
- 「動詞+前置詞」  
リエゾンの実現がある例：D'où on **dit** en terme de Droit, (2 : 127)  
リエゾンの実現がない例：**voyez** en l'explication aux exenples [...] (2 : 146)

一方、「動詞+アルファベット」、「動詞+動詞」、「動詞+接続詞」のコンテキストにおいては、それぞれ 50%および 29,41%とリエゾンの実現率が低い。以下にこれらの例を挙げる。

- 「動詞+アルファベット」  
リエゾンの実現がある例：*ils ont s.* imediatement après. (2 : 23)  
リエゾンの実現がない例：si vous **trouvez s.** [...] (2 : 135)
- 「動詞+接続詞」  
リエゾンの実現がある例：*il suffit ou* n'en parlons plus (2 : 114)  
リエゾンの実現がない例：Ainsi **écrivez et** prononcez toûjours. (1 : 140)
- 「動詞+動詞」

リエゾンの実現がある例：celui qui **suit est** bref *et* obscur (1 : 169)

リエゾンの実現がない例：leur e dans le quel elles se **terminent a** un son si viril *et* si dur [...] (2 : 69)

「動詞+アルファベット」、「動詞+動詞」、「動詞+接続詞」のコンテキストにおいてリエゾンの実現率が低い。「動詞+アルファベット」のコンテキストについては、そもそも MOT2 がアルファベットの場合にはリエゾンの実現が起こりにくいようである。また、「動詞+接続詞」の場合では、接続詞は直前の語とのリエゾンの実現が安定的であるわけではないようである。そして、「動詞+動詞」のコンテキストの統語構造は、従属節内の動詞に、その従属節を主語にする本動詞が続くという構造である。この名詞句に複数の語が含まれる場合には、動詞の前に休止が置かれてもおかしくない。

主語となる名詞句	動詞句
celui qui <b>suit [t]</b>	<b>est</b> bref <i>et</i> obscur
leur e dans le quel elles se <b>terminent /</b>	<b>a</b> un son si viril <i>et</i> si dur

表 6-109：「動詞+動詞」のコンテキストの統語構造

例えば、上記の表にみるように、リエゾンが実現される例は、実際には名詞句 (celui qui **suit [t]**)と動詞句 (**est** bref *et* obscur)の間に休止が置かれ、動詞の語末子音字が発音されると考えられる。それに対して、リエゾンが実現されない例では、休止が置かれた場合にも名詞句 (leur e dans le quel elles se **terminent**)と動詞句 (**a** un son si viril *et* si dur)の間で語末子音字が単に発音されないと考えることができる。

#### 6.2.5.2.2.1. 人称の違いによるリエゾン実現率の比較

以下では人称の違いによるリエゾン実現率の違いを比較する。まず、以下にそれぞれの人称のリエゾン実現率を記した表を提示する。

	L	NL	Total	%
一人称単数形	21	5	26	<b>80,77%</b>
二人称単数形	3	0	3	<b>100%</b>
三人称単数形	428	19	447	<b>95,75%</b>
一人称複数形	6	4	10	<b>60%</b>
二人称複数形	57	18	75	<b>76%</b>
三人称複数形	126	63	189	<b>66,67%</b>
<b>Total</b>	<b>641</b>	<b>109</b>	<b>750</b>	<b>85,47%</b>

表 6-110：人称の違いによるリエゾン実現率

まず、二人称単数形のリエゾン実現率は100%を示した。ただし、例は3例と少数であり、動詞も *vas (aller)*のみである。次に、活用語尾の末尾子音字が[z]である一人称単数形、一人称複数形、二人称複数形については、一人称単数形のリエゾン実現率は80,77%、一人称複数形では60%、二人称複数形では76%である。三人称単数形および三人称複数形はともに活用語尾の末尾子音字が[t]である。三人称単数形は、二人称単数形の次にリエゾンの実現率が95,75%と高く、また例数も447例と最も多い。

三人称複数形はリエゾンの実現率が66,67%と低い値を示している。この理由として考えられるのは三人称複数形の語末の音節構造である。例えば、活用語尾-*ent* (-C(ə)(t)#)はリエゾンが実現されない場合にも語尾において子音が常に発音され、この場合にはリエゾンの実現率は52,1%である。その一方、活用語尾-*ont* (-ʔ(t) #)の場合には、リエゾン子音[t]が発音されない場合には、語末が母音で終わるという特徴がある。そのためか、活用語尾-*ont* (-ʔ(t) #)のリエゾン実現率は91,43%とかなり高い実現率となる。

#### 6.2.5.2.3. 過去分詞

過去分詞とその後続語のリエゾンの実現率は93,33%であり、比較的高いといえる。

	L	NL	Total	%
過去分詞	28	2	30	93,33%

表 6-111 :過去分詞におけるリエゾン実現率

過去分詞に後続する語には、副詞、限定詞、前置詞、接続詞がある。以下に、コンテキストの配分およびリエゾン実現率を示す。

	L	NL	Total	%
副詞	4	1	5	80%
冠詞	3	0	3	100%
前置詞	20	1	21	95,24%
接続詞 <i>et</i>	1	0	1	100%
<b>Total</b>	<b>28</b>	<b>2</b>	<b>30</b>	<b>93,33%</b>

表 6-112 : 後続語の種類による過去分詞のリエゾン実現率

#### - 副詞

J'ai **fait** encore un Traité de tous les Idiomes des Langues Française, (0 : 11)

JE n'ai **mis** ici l'Y-Grec qu'à cause qu'il a par tout le son de nôtre *i*. François voyelle, (1 : 97)

ayant **mis** encore ces premiers en question un peu à côté, (2 : 107)

- 冠詞  
j'en ai aussi bien **fait** un recueil entier, (2 : 106)  
quoi que j'aye **fait** une recueil general (2 : 150)
- 前置詞  
*SI j'ai dit à la page 15.* (1 : 157)  
[...] ce que l'on fait qu'on a **mis** à l'apprendre, (1 : 63)  
j'ai **rapportées** au sujet du *ph.* (2 : 157)
- 接続詞 *et*  
nous lui avons **permis et** acordé, (2 : 198)

リエゾンが実現されない2例のコンテキストにおける過去分詞の語末子音字は-sである。また、過去分詞の語末子音字が-tである場合にはリエゾンの実現は100%である。

#### 6.2.5.2.4. ジェロンディフ

ジェロンディフは語末に-*ant*という綴り字を持ち、リエゾンが実現される場合にはリエゾン子音[t]が発音される。ジェロンディフのリエゾンは46例中38例で実現され、実現率は82,61%である。

	L	NL	Total	%
ジェロンディフ - <i>ant</i>	38	8	46	82,61%

表 6-113: ジェロンディフのリエゾン実現率

ジェロンディフに後続する語には、接続詞、前置詞、不定詞、過去分詞、副詞、冠詞、形容詞、アルファベットが観察された。

	L	NL	Total	%
接続詞	1	0	1	100%
前置詞	11	0	11	100%
不定詞	2	0	2	100%
過去分詞	4	0	4	100%
副詞	14	2	16	87,50%
冠詞	5	3	8	62,50%
形容詞	1	2	3	33,33%
アルファベット	0	1	1	0%
<b>Total</b>	<b>38</b>	<b>8</b>	<b>46</b>	<b>82,61%</b>

表 6-114: 後続語の種類によるジェロンディフのリエゾン実現率



「ジェロンディフ+接続詞」、「ジェロンディフ+前置詞」、「ジェロンディフ+引用形」、「ジェロンディフ+過去分詞」、「ジェロンディフ+副詞」は比較的高いリエゾン実現率である。以下に例を挙げる。

- 「ジェロンディフ+接続詞」  
リエゾンの実現があるもの : en **jouant** ou en trafiquant, (1 : 117)
- 「ジェロンディフ+前置詞」  
リエゾンの実現があるもの : Ainsi cete méchante prononciation **venant à** changer autant les mots [...] (2 : 94)
- 「ジェロンディフ+不定詞」  
リエゾンの実現があるもの : garde **signifiant** observer, *empêcher*, *détourner* (1 : 32)
- 「ジェロンディフ+過去分詞」  
リエゾンの実現があるもの : [...] nous a fait remonter que **s'étant appliqué** [...] (2 : 197)
- 「ジェロンディフ+副詞」  
リエゾンの実現があるもの : En **prononçant ainsi**. (1 : 28)

ただし、「ジェロンディフ+接続詞」、「ジェロンディフ+不定詞」、「ジェロンディフ+過去分詞」はそれぞれ例数が1例、2例および4例と少ないため、常にリエゾンが実現するという解釈を避けるべきである。

それに対して、「ジェロンディフ+冠詞」、「ジェロンディフ+形容詞」というコンテキストではリエゾンの実現率が低くなる。また、「ジェロンディフ+アルファベット」というコンテキストではリエゾンが実現しない。以下に例を挙げる。

- 「ジェロンディフ+冠詞」  
リエゾンの実現があるもの : [...] en y **ajûtant** un e. & es. Coïne (2 : 35)  
リエゾンの実現がないもの : [...] en lui **explicant** une difficulté si importante [...] (1 : 62)
- 「ジェロンディフ+形容詞」  
リエゾンの実現があるもの : [...] n'y **ayant** aucune Sylabe, (1 : 6)  
リエゾンの実現がないもの : on pouroit doñer sur la distinction des ee. **étant** incertaines (1 : 62)
- 「ジェロンディフ+アルファベット」  
リエゾンの実現がないもの : si vous voulez, en **ajoutant** s.au plurier. (2 : 75)

#### 6.2.5.2.5. 動詞句におけるリエゾンのまとめ

動詞句のリエゾンの実現率の平均値は 85,59%である。このリエゾン実現率の平均は非常

に高いといえる。

	L	NL	total	%
屈折形	641	109	750	85,47%
過去分詞	28	2	30	93,33%
ジェロンディフ <i>-ant</i>	38	8	46	82,61%
<b>動詞句全体</b>	<b>707</b>	<b>119</b>	<b>826</b>	<b>85,59%</b>

表 6-115：動詞句におけるリエゾン実現率

特に屈折形については、後続語との統語的關係および人称の違いによってリエゾンの実現率が異なる傾向が観察された。特に、三人称複数形の語末の音節構造の違いにおいては、リエゾン子音の種類や MOT1 の語末音節の構造の種類がリエゾンの実現有無に大きく影響すると考えられる。

### 6.2.5.3. 前置詞句におけるリエゾン

本コーパスにおいて母音で始まる語の前に現れた前置詞は次のようなものである。

[k]	[t]	[z]
<i>avec</i>	<i>quant</i> <i>devant</i>	<i>aux,</i> <i>chez,</i> <i>après,</i> <i>dans,</i> <i>sans</i>

表 6-116：前置詞の種類

まず、語末子音が[k]である前置詞には *avec* がある。次に、語末子音が[t]である前置詞には、*quant* および *devant* がある。語末子音が[z]である前置詞には *aux*, *chez*, *après*, *dans*, *sans* の 5 つの前置詞である。まず、それぞれの前置詞のリエゾン実現率は以下の表のようになる。

	L	NL	Total	%
<i>quant</i>	1	0	1	100%
<i>aux</i>	27	0	27	100%
<i>avec</i>	60	3	63	95,24%
<i>sans</i>	31	6	37	83,78%

<i>devant</i>	106	38	144	<b>73,61%</b>
<i>après</i>	20	12	32	<b>62,50%</b>
<i>chez</i>	1	1	2	<b>50%</b>
<i>dans</i>	6	10	16	<b>37,50%</b>
<b>Total</b>	<b>252</b>	<b>69</b>	<b>321</b>	<b>78,50%</b>

表 6-117：各前置詞のリエゾン実現率

*quant* および *chez* のリエゾンの実現率は 100%である。ただし、これらの例は 1 例ずつのみしか本コーパスでは観察されない。前置詞 *aux* のリエゾン実現率は 100%である。それ以外の前置詞のリエゾンの実現率は 100%ではなく、前置詞によって異なるリエゾン実現率を示す。*avec* のリエゾン実現率は 95,24%とかなり高い一方で、*dans* のリエゾン実現率は 37,50%とかなり低い。

#### 6.2.5.3.1. 後続語によるリエゾン実現率の違い

後続語の種類によって生じるリエゾンの実現率の違いはどのようなものだろうか。以下にコンテキスト毎のリエゾン実現率をまとめた表を挙げる。

	L	NL	Total	%
形容詞	9	0	9	<b>100%</b>
動詞	1	0	1	<b>100%</b>
前置詞	2	0	2	<b>100%</b>
名詞	44	5	49	<b>89,80%</b>
冠詞 ( <i>un, une</i> )	128	17	145	<b>88,28%</b>
人称代名詞	11	3	14	<b>78,57%</b>
接続詞 <i>et, ou</i>	5	2	7	<b>71,43%</b>
不定詞	6	3	9	<b>66,67%</b>
アルファベット	46	39	85	<b>54,12%</b>
<b>Total</b>	<b>252</b>	<b>69</b>	<b>321</b>	<b>78,50%</b>

表 6-118：後続語の種類による前置詞のリエゾン実現率

「前置詞+形容詞」、「前置詞+動詞」および「前置詞+前置詞」のコンテキストにおいてリエゾンの実現率は 100 パーセントである。ただし、「前置詞+動詞」のコンテキストは 1 例のみであり、「*est-ce que*」という動詞から始まる引用形が後続する例である。以下に例を挙げる。

- 「前置詞+動詞」：**devant *est-ce que***, ou enfin devant *quelque mot que ce soit*, (1 : 25)

「前置詞+形容詞」のコンテキストは以下のようなものである。

- 「前置詞+形容詞」：après l'Imperatif **sans** aucune negation, (1 : 24)

また、「前置詞+前置詞」のコンテキストは2例のみであるが、どちらも *quant* であり、「*quant à*」と「*quant aux*」という連辞である。以下に例を挙げる。

- 「前置詞+前置詞」：Je dirai pourant **quant** aux mots où il semble qu'on la pouroit souffrir en quelque façon à cause de leur étimologie, (2 : 105)

「前置詞+名詞」、「前置詞+冠詞」、「前置詞+人称代名詞」、「前置詞+接続詞 *et, ou*」はそれぞれ、89,80%、88,28%、78,57%、71,43%であり、比較的高い確率でリエゾンが実現する。以下に例を挙げる。

- 「前置詞+名詞」：  
Le feminin, *ou* le François parce qu'il est **sans** accent. (1 : 64)  
j'en ai usé avec moderation, *et sans* affectation [...] (1 : 51)
- 「前置詞+冠詞」：  
coïme la simple *s.* au coïmencement d'un mot *ou* **après** une consone, (2 : 15)  
Il s'écrit **avec** un *h.* pour le distinguer [...] (2 : 61)
- 「前置詞+人称代名詞」：  
de sorte qu'il semble qu'il y ait un *h.* **devant** elles, (2 : 51)  
à la comparer **avec** elles dans les lieux (0 : 11)
- 「前置詞+接続詞 *et, ou*」：  
parce qu'ils s'apostrofent touïjours **devant** *et* après le verbe. (1 : 24)  
**Aprés** ou en après, *ez, Deinde postea.* (1 : 92)

「前置詞+不定詞」のコンテキストおよび「前置詞+アルファベット」のコンテキストでは、リエゾンの実現率はさらに低くなり、それぞれ 66,67%および 54,12%である。

- 「前置詞+不定詞」  
リエゾンの実現があるもの：La plus nouvelle qu'on puise faire **sans** alterer, (0 : 1)  
リエゾンの実現がないもの：j'ai raison d'ôter **sans** hesiter *d.* [...] (2 : 35)
- 「前置詞+アルファベット」  
リエゾンの実現があるもの：**devant** *e,* dans les suivans. (2 : 12-13)  
リエゾンの実現がないもの：dites donc *et* ecrivez **sans** *i.* (1 : 117)

ただし、「前置詞+アルファベット」のコンテキストを除くと、リエゾンの実現平均率は78,50%から87,29% (206/236)に上昇する。これはMOT2がアルファベットの場合にはリエゾンが実現しにくいことを示している。

#### 6.2.5.4. 副詞

本コーパスではリエゾンの観察の対象となる副詞を以下の表に示す。

[p]	[z]	[t]
<i>trop, beaucoup</i>	<i>assez, autrefois, quelquefois, (ci-)dessous, (ci-)dessus, désormais, jamais, mieux, néanmoins, moins, très, plus, pas, ailleurs, lors, toujours</i>	<i>de fait, par tout, sur tout, tout, tôt, fort, point, 副詞-ment, par conséquent, souvent, pourtant, tant, à présent</i>

表 6-119 : 副詞の種類

以下ではまず、リエゾンコンテキストに表れる副詞は合計で32種類ある。以下では副詞を語末子音字ごとのリエゾンの実現率を観察する。その後に、後続語の違いによるリエゾンの実現率について観察する。

#### 6.2.5.4.1. 語末子音字による違い

##### 6.2.5.4.1.1. 語末子音字-pを持つ副詞

語末子音字が綴り字-pの副詞には*trop* および *beaucoup* がある。この2つの副詞がリエゾンのコンテキストにある例は合計で5例のみであった。この5例のうち4例でリエゾンが実現され、リエゾン実現率は80%である。

	L	NL	Total	%
<i>trop</i>	2	0	2	100%
<i>beaucoup</i>	2	1	3	66,67%
<b>Total</b>	<b>4</b>	<b>1</b>	<b>5</b>	<b>80%</b>

表 6-120 : 語末子音字-pを持つ副詞のリエゾン実現率

また、リエゾンのコンテキストにおいて子音[p]が発音されるのはこれらの副詞に限定される。

##### 6.2.5.4.1.2. 語末子音字-sを持つ副詞

語末子音字が-sの副詞は複数あり、リエゾンの実現率もそれぞれの副詞によって異なる。

	L	NL	Total	%
<i>autrefois</i>	2	0	2	100%
<i>(ci)-dessus</i>	2	0	2	100%
<i>pas</i>	37	3	40	92,50%
<i>très</i>	15	2	17	88,24%
<i>plus</i>	79	18	97	81,44%
<i>jamais</i>	15	5	20	75,00%
<i>neanmoins</i>	16	6	22	72,73%
<i>désormais</i>	5	2	7	71,43%
<i>moins</i>	7	3	10	70%
<i>assez</i>	2	1	3	66,67%
<i>mieux</i>	13	7	20	65%
<i>quelquefois</i>	3	2	5	60%
<i>lors</i>	6	4	10	60%
<i>toujours</i>	15	12	27	55,56%
<i>ailleurs</i>	1	1	2	50,00%
<i>(ci)-dessous</i>	0	1	1	0%
<b>Total</b>	<b>218</b>	<b>67</b>	<b>285</b>	<b>76,49%</b>

表 6-121 : 語末子音字-s を持つ副詞のリエゾン実現率

副詞 *autrefois* および *ci-dessus* はそれぞれリエゾンの実現率が 100%である。ただし、例が少数であるため、これらの副詞について常にリエゾンが実現するとは明言できない。

#### 6.2.5.4.1.3. 語末子音字-t を持つ副詞

語末子音字が-t の副詞は複数あり、全体のリエゾン実現率は 76,12%である。それぞれの副詞によって、リエゾン実現率が高いもの、平均的なもの、低いものがあるといえる。

	L	NL	Total	%
<i>par tout</i>	14	0	14	100%
<i>de fait</i>	1	0	1	100%
<i>surtout</i>	3	0	3	100%
<i>tout</i>	3	0	3	100%
<i>tôt</i>	4	0	4	100%
<i>tant</i>	10	1	11	90,91%
<i>point</i>	15	4	19	78,95%
<i>fort</i>	10	3	13	76,92%

<i>souvent</i>	3	1	4	75,00%
<i>pourtant</i>	2	1	3	66,67%
副詞 <i>-ment</i>	51	36	87	58,62%
<i>par conséquent</i>	6	5	11	54,55%
<i>à présent</i>	2	5	7	28,57%
<b>Total</b>	<b>124</b>	<b>56</b>	<b>180</b>	<b>68,89%</b>

表 6-122 : 語末子音字-t の副詞のリエゾン実現率

上記の表を見ると、語末子音の直前が口母音である副詞(*tout-à-fait, surtout, tout, tôt*)のリエゾン実現率は 100%である。また、これらの副詞は休止の前でも語末子音字が発音される傾向が観察されたことが特徴である。語末子音の直前が鼻母音である副詞はリエゾンの実現率に揺れがあり、高いものは 90,91% (*tant*)、低いものは 33,33% (*à présent*)と揺れがある。

#### 6.2.5.4.2. 後続語の種類

副詞に後続する語には、名詞、アルファベット、不定詞、前置詞、副詞、接続詞、冠詞、形容詞、過去分詞が観察された。

	L	NL	Total	%
過去分詞	16	1	17	94,12%
形容詞	59	11	70	84,29%
冠詞	28	6	34	82,35%
接続詞( <i>et, ou</i> )	19	3	22	86,36%
副詞	46	13	59	77,97%
前置詞	126	50	176	71,59%
不定詞	23	9	32	71,88%
人称代名詞	24	13	37	64,86%
アルファベット	5	16	21	23,81%
名詞	0	2	2	0%
<b>Total</b>	<b>346</b>	<b>124</b>	<b>470</b>	<b>73,62%</b>

表 6-123 : 後続語の種類による副詞のリエゾン実現率

副詞とその後続語のコンテキストにおいて、リエゾンの実現率が最も高かったものは「副詞+過去分詞」であり、実現率は 94,12%であった。

#### - 「副詞+過去分詞」

リエゾンの実現あり : *parce qu'il/s n'ont point étudié ou que tres-peu*, (0 : 14)

リエゾンの実現なし : J'ai **beaucoup** enduré, (2 : 92)

「副詞+形容詞」、「副詞+冠詞」、「副詞+接続詞」、「副詞+副詞」、「副詞+前置詞」、「副詞+不定詞」、「副詞+人称代名詞」のリエゾン実現率は、それぞれ 66,67%から 85,29%の間に分布する。

- 「副詞+形容詞」  
リエゾンの実現あり : *et principalement ceux des Provinces **fort** éloignées de celles où la pureté de la prononciation est en vogue* (2 : 75)  
リエゾンの実現なし : *mais ces points sont **fort** inutiles*, (1 : 166)
- 「副詞+冠詞」  
リエゾンの実現あり : *en metant **desormais** un z. au lieu de l's.* (2 : 152)  
リエゾンの実現なし : *qu'il se fait **ordinairement** une tres-grande faute [...]*. (1 : 5)
- 「副詞+接続詞」  
リエゾンの実現あり : *un matiere qui sent **tôt** ou tard [...]* (1 : 62)  
リエゾンの実現なし : ***Mistiquement** ou mystiquement* (1 : 137)
- 「副詞+副詞」  
リエゾンの実現あり : *Auteurs n'en ont jamais parlé **assés** anplement*, (1 : 52)  
リエゾンの実現なし : *ce que vous verrez **plus** anplement par l'ordre des voyelles* (2 : 40)
- 「副詞+前置詞」  
リエゾンの実現あり : *qu'elle obligeoit d'y faire une syllabe de **trop** avec l'e.* (1 : 138)  
リエゾンの実現なし : *les Anglois le confondent **tellement** avec le p,* (2 : 4)
- 「副詞+不定詞」  
リエゾンの実現あり : *Il en faut **seulement** excepter les 15. Suivans [...]* (2 : 78)  
リエゾンの実現なし : *j'y ai mis le Latin de tous les Exemples pour les faire **mieux** entendre aux Etrangers.* (0 : 9)
- 「副詞+人称代名詞」  
リエゾンの実現あり : ***Neanmoins** il faut remarquer que g. devant e. joint à l'a.* (2 : 51)  
リエゾンの実現なし : ***autrement** il vaudroit bien mieux ne les point dépouiller de leur Etimologie,* (2 : 34)

最もリエゾンの実現率が低いコンテキストは「副詞+アルファベット」である。

- 「副詞+アルファベット」  
リエゾンの実現あり : *et **quelque fois** s. a le son du z. devant une voyelle,* (2 : 139)  
リエゾンの実現なし : ***Par consequent** e. faisant la premiere syllabe d'un mot devant une*



*m. simple, retient son naturel son.* (1 : 72)

また、「副詞+名詞」のコンテキストではリエゾンが実現されなかった。

- 「副詞+名詞」

リエゾンの実現なし: *autrement Emaux* signifieroit *Encansta* plurier d'*Email*. (1 : 109)

### 6.2.5.5. 接続詞におけるリエゾン

本コーパスに含まれる接続詞は *car, or, et, puis, donc, mais, quand* が該当する。ただし、これらの7つの接続詞は、それぞれ異なる特徴を持つ。まず、*car, or* は語末子音字が安定的に発音される。次に、*et* の語末子音字は全く発音されない。*puis* は子音の前で語末子音字が立体で表示される例は皆無であった。ただし、母音の前に *puis* が表れる例が本コーパスにはないため母音の前での発音は不明のままである。*donc, mais, quand* は語末子音字が後続する語によって変化する接続詞である。

- *car*

(子音の前) *car r. s'y prononce un peu plus doucement.* (1 : 68)

(母音の前) *Car il ne s'y prononce point,* (1 : 10)

- *or*

(子音の前) *Or sus, Age. Ancieñes manieres de parler.* (2 : 103)

(母音の前) *Or est-il, particule, At qui.* (1 : 103)

- *et*

(子音の前) *Aportez mon Lut, et ma Guitare, et mon Violon,* (1 : 50)

(母音の前) *et il signifie un mot de trois Syllabes* (1 : 7)

(休止の前) *C. se prononce aussi devant t. dans les suivans, et, [...]* (1 : 19)

*et* については、以下の表からも明らかであるように、いくつかのエラーを除くと語末子音字は常にイタリック体で表示される。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>et</i>	872 + 16*	266 + 11*	3

表 6-124 : 接続詞 *et*

それに対して、*donc, mais, quand* の3つの接続詞は、子音および休止の前では語末子音字が発音されないが、母音の前では発音されるが揺れがあるという特徴を持つことが以下の表からも明白に読み取れる。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>donc</b>	1	10	1
<b>donc</b>	66	18	96
<b>mais</b>	2	46	5
<b>mais</b>	90	35	7
<b>quand</b>	-	57	-
<b>quand</b>	21	5	3

表 6-125：接続詞 *donc, mais, quand*

上に挙げた表からも明らかなように、*donc* および *mais* は、少数であるが子音および休止の前でも語末子音字が立体で表示される例がある。確かに、*donc* は子音で始まる語もしくは休止での前で語末子音字が立体で表示される場合が、それぞれ 1,4% (1/66) と 1,05% (1/96) であるため、エラーである可能性が高いと考えられる。ただし、*mais* に関しては、子音で始まる語の前で立体で表示された 2 例は全体の 2,1% であるが、休止の前では 12 例中 5 例で 41,6% の確率で立体で表示される。このことから Milleran の記述したフランス語において *mais* の語末子音字は休止の前で発音される可能性も否定できない。

以下では、後続要素の特徴によって発音の有無が変化する *donc, mais, quand* について観察を行う。

#### 6.2.5.5.1. 接続詞 *donc*

接続詞 *donc* は、後続語の種類によって子音字の発音に揺れがあることが観察された。以下にリエゾン実現数とリエゾン実現率をまとめた表を示す。

<i>donc</i>	L	NL	Total	%
副詞	5	1	6	83,33%
接続詞 <i>et</i>	3	6	9	33,33%
前置詞	1	2	3	33,33%
名詞	1	4	5	20,00%
形容詞	0	2	2	0%
冠詞	0	2	2	0%
人称代名詞	0	1	1	0%
<b>Total</b>	<b>10</b>	<b>18</b>	<b>28</b>	<b>35,71%</b>

表 6-126：後続語の種類による接続詞 *donc* のリエゾン実現率

副詞の前においては、リエゾン実現率は 83,33%である。形容詞と前置詞が接続詞 *donc* に後続する場合にリエゾンの実現率は 33,33%、名詞が後続する場合にリエゾンの実現率は 20%である。その他のコンテキスト、「+形容詞」、「+冠詞」、「+人称代名詞」の場合にはリエゾンは実現されない。ただし、例が大変少数であるため、子音字が絶対的に発音されないとは言い切れないだろう。

- *donc* + 副詞

Dites **donc [k]** aussi la Bouhaime, (1 : 106)

dites **donc [k]** encore si vous voulez (2 : 172)

Dites **donc / encore** suc-geré et suc-gestion. (2 : 55)

- *donc* + 形容詞

Dites **donc / Enbarassé**, anbrazé, (1 : 73)

Dites **donc / Heumble**, (1 : 108)

- *donc* + 接続詞 *et*

Dites **donc [k]** et écrivez desormais âge, bâillé, &c (1 : 114)

Dites **donc / et** écrivez desormais blessure, (1 : 134)

- *donc* + 冠詞

Dites **donc / un** nan, bon nanfan (2 : 85)

- *donc* + 名詞

Dites **donc [k]** Ognon, rognon, et rogné. (1 : 140)

Dites **donc / Enpogné**, pognée, pognar. (1 : 140)

- *donc* + 前置詞

La double mm. s'exprime **donc [k]** après e. coñe en Latin, (2 : 83)

Mais dites, et écrivez **donc / à** present, (1 : 146)

- *donc* + 人称代名詞

Dites **donc / il** aime, i finissoi, i voulure, &c. (2 : 85)

*donc* は母音の前で必ずしも常に語末子音が発音されるわけではないことが以上のことから考えられる。ただし、*donc* と母音で始まる語の前に休止が挿入される可能性も否定できない。この点が、綴り字のみから休止の有無を判断することの難しいところである。例えば、「Dites **donc [k]** Ognon, rognon, et rogné.」のような例では、休止が挿入されずに、後続する語とともに *donc* の語末子音字が発音されると考えられるが、「Dites **donc / Enpogné**, pognée, pognar」のような例では、休止が挿入されるために、語末子音字が発音されずに次に母音で始まる語が続くと考えることもできる。

« *donc* + 副詞 »のコンテキストにおいては語末子音字が発音される可能性が高いことが観察された。これは、副詞が *donc* を強調するために、2つの語の結束性が高くなり、「Dites

*donc aussi* », « *dites donc encore* »のような例で語末子音字が発音されるとも考えられる。

*donc* を接続詞に分類したが、この接続詞が含まれた定型表現においてむしろ接続詞よりも副詞的に使用されている。例えばそのような定型表現に « *dites donc et écrivez...* », « *dites donc comè ...* », « *dites donc* 名詞句/前置詞句 » のようなものがある。

#### 6.2.5.5.2. 接続詞 *mais*

接続詞 *mais* のリエゾン実現率の平均は 56,79%である。後続語の種類によってリエゾンの実現率が変化することが観察された。

<i>mais</i> +	L	NL	Total	%
副詞	4	0	4	100%
前置詞	14	2	16	87,50%
代名詞	24	5	29	82,76%
動詞	2	1	3	66,67%
アルファベット	2	25	27	7,41%
形容詞	0	1	1	0%
接続詞 <i>et</i>	0	1	1	0%
<b>Total</b>	<b>46</b>	<b>35</b>	<b>81</b>	<b>56,79%</b>

表 6-127: 後続語の種類による接続詞 *mais* のリエゾン実現率

形容詞、副詞、接続詞 *et*、動詞が *mais* に後続する例は大変少数である。形容詞と接続詞 *et* が後続する例は 1 例ずつあり、リエゾンは実現されない。副詞と動詞がそれぞれ後続する例には 1 例および 3 例あり、リエゾンは全ての例において実現される。

- *mais* + 形容詞  
Le premier n'est ni bref ni long, **mais / ouvert** (1 : 86)
- *mais* + 副詞  
**mais [z] aussi** dans leur figure, [...] (1 : 2)
- *mais* + 接続詞 *et*  
Ces deux mots **mais / & maisque**, (1 : 118)
- *mais* + 動詞  
**Mais [z] écrivez** sans virgule. (1 : 50)  
**mais [z] étant** joint à quel/que nombre [...] (2 : 60)

次に、「*mais* + アルファベット」のコンテキストでは 27 例中 2 例のみリエゾンが実現し、リエゾン実現率は 7,41%と大変低いといえる。

- mais + アルファベット

**Mais [z] e.** finissant la syllabe come dans les suivants et dans leurs dérivés, (1 : 129)

**Mais [z] s.** se prononce dans leurs dérivés. (2 : 114)

**Mais /s.** se prononce dans leurs dérivés. (2 : 113)

その一方で、「*mais*+代名詞」、「*mais*+前置詞」は他のコンテキストと比較するとリエゾンの実現率が比較的高いといえる。接続詞 *mais* に前置詞、代名詞が後続する場合はリエゾンの実現率が、それぞれ 87,50% および 82,76% である。後続する前置詞は *à, au, avec, en* の 4 種類、代名詞は *il, ils, on* の 3 種類である。

- mais + 前置詞

**mais [z] à present il vaut mieux se servir de deux virgules.** (1 : 50)

**Mais [z] avec cete diferece** (1 : 2)

**mais / avec cete diferece qu'ils peuvent s'exprimer avec l'u. ou sans l'n.** (1 : 105)

- mais + 代名詞

**Mais [z] il vaut mieux écrire desormais avec un c.** (1 : 37)

**mais [z] on entend toujourns en sa place un t,** (2 : 76)

« *mais* + アルファベット » を除いた場合には、*mais* のリエゾン実現率が 58,02% から 83,33% に上昇する。アルファベットが後続する場合に、リエゾンが実現されにくい傾向があるといえる。

### 6.2.5.5.3. 接続詞 *quand*

接続詞 *quand* のリエゾン実現率は全体で 91,94% とかなり高い値である。

<i>quand</i>	L	NL	Total	%
アルファベット	3	0	3	100%
動詞	1	0	1	100%
代名詞	52	4	56	92,86%
引用形 <i>en</i>	1	1	2	50%
<b>Total</b>	<b>57</b>	<b>5</b>	<b>62</b>	<b>91,94%</b>

表 6-128 : 後続語の種類による接続詞 *quand* のリエゾン実現率

接続詞 *quand* は他の接続詞と比較すると最もリエゾンの実現率が高く、リエゾン実現率は 91,94% である。接続詞 *quand* にアルファベット、引用形 *en*、動詞が後続するコンテキスト

では、どの例も語末の子音字が発音された。ただし、これらの例は大変少数であるため、このコンテキストで常にリエゾンが実現されるわけではないとも考えられる。「*quand* + 動詞」のコンテキストは 1 例のみ観察された。ただし、「*quand* + 動詞」のコンテキストでは、*quand* は接続詞ではなく、むしろ疑問詞である。

- *quand* + アルファベット

**Quand [t] e finit la penultième Sylabe devant la simple ou la double m.** (1 : 70)

**quand [t] u. ne compose pas une syllabe,** (1 : 108)

- *quand* + 引用形 *en*

**Quand [t] en compose une syllabe,** (1 : 76)

**quand / en compose une syllabe** (1 : 74)

- *quand* + 動詞

**Quand [t] irez-vous à Saumur ?**

接続詞 *quand* に代名詞が後続するコンテキストでは、56 例中 54 例で語末子音字が立体で表示された。リエゾンの実現率は 100% ではないが、92,86% と高い値を示している。このコンテキストにおける代名詞は、*il, ils, on* である。

- *quand* + 代名詞

**quand [t] il est nom adjectif.** (2 : 48)

**quand [t] on a le cours de ventre** (2 : 43)

**quand / il devient nom substantif,** (1 : 32)

**quand / ils trouvent par hazard quelque chose** (0 : 6)

#### 6.2.5.5.4. 接続詞のまとめ

接続詞とその後続語のリエゾンにおいては、接続詞が *quand* の場合にはリエゾンの実現率は高いものの、*donc* および *mais* のリエゾン実現率はそれほど高いとはいえない。

	L	NL	Total	%
<i>donc</i>	10	18	28	35,71%
<i>mais</i>	46	35	81	56,79%
<i>quand</i>	57	5	62	91,94%
<b>Total</b>	<b>113</b>	<b>58</b>	<b>171</b>	<b>66.08%</b>

表 6-129 : 接続詞のリエゾン実現率

接続詞 *donc* および *mais* のリエゾン実現率はそれほど高くはない理由はいくつか考えられる

だろう。まず *donc* は母音の前で必ずしも常に語末子音が発音されるわけではないとも考えることができるが、むしろ *donc* と母音で始まる語の前に休止が挿入される可能性が否定できない。そして、接続詞 *mais* については、「*mais* + アルファベット」を除いた場合には、*mais* のリエゾン実現率が 58,02% から 83,33% に上昇する。アルファベットが後続する場合は、リエゾンが実現されにくいためであることが考えられる。

## 6.2.5.6. 代名詞

### 6.2.5.6.1. 主語人称代名詞

主語となる人称代名詞には、*il, nous, vous, ils, elles* がある。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>il</i>	[i]	[il] (/ [i])	[il] (/ [i])
<i>nous</i>	[nu]	[nuz]	[nu]
<i>vous</i>	[vu]	[vuz]	[vu]
<i>ils</i>	[i]	[il]	[i(:)]
<i>elles</i>	[ɛl]	[ɛl] / [ɛlz]	[ɛl]

表 6-130 : 主語人称代名詞の発音

母音の前におけるこれらの人称代名詞のリエゾン実現率を以下に提示する。

	L	NL	Total	%
<i>il</i>	317	5	322	98,45%
<i>nous</i>	16	0	16	100%
<i>vous</i>	34	3	37	91,89%
<i>ils</i>	41	5	46	89,13%
<i>elles</i>	2	7	9	22,22%
<b>Total</b>	<b>410</b>	<b>20</b>	<b>430</b>	<b>95,35%</b>

表 6-131 : 主語人称代名詞におけるリエゾン実現率

上記の表において、常にリエゾンが実現されたのは人称代名詞 *nous* のみであり、*il* では 98,45%、*vous* では 91,89%、*ils* では 89,13%、*elles* では 22,22% のリエゾン実現率が観察された。特に *elles* については、語末子音字 *-s* が後続語の前で発音されるのは比較的珍しいと考えられる。この理由として、*elles* は語末子音字 *-s* が発音されない場合であっても、[ɛl] という語末で子音が安定的に発音されるためだろう。以下にこれらの人称代名詞の発音例を挙げる。

- *il*  
リエゾンの実現があるもの : *Il en faut excepter les trois personnes du singulier* (1 : 43)  
リエゾンの実現がないもの : *il est bas percé* (2 : 139)
- *nous*  
リエゾンの実現があるもの : *Nous aimerions*, (1 : 85)
- *vous*  
リエゾンの実現があるもの : *cõme vous avez vu ci-dessus*. (2 : 27)  
リエゾンの実現がないもの : *Vous êtes trop hardi* (2 : 93)
- *ils*  
リエゾンの実現があるもの : *Ils auroient* (2 : 76)  
リエゾンの実現がないもの : *dans les fautes qu'ils y font si souvent*, (0 : 12)
- *elles*  
リエゾンの実現があるもの : *cõme si elles étoient jointes à celles qui sont dessous* (1 : 12)  
リエゾンの実現がないもの : *[...] elles ont du raport*. (0 : 11)

#### 6.2.5.6.2. 指示代名詞 *ceux, celles*

指示代名詞 *ceux* および *celles* が母音の前に位置する場合に語末子音字は絶対的ではないが発音される。ただし、本コーパスにおいて、例数が豊富であるとは言いがたい。

	L	NL	Total	%
<i>ceux</i>	11	2	13	84,62%
<i>celles</i>	1	3	4	25,00%

表 6-132 : 指示代名詞 *ceux, celles* におけるリエゾン実現率

以上の表から明白なことは、*ceux* は比較的リエゾンの実現率が高いことである。指示代名詞 *ceux* と後続語の組み合わせを以下の表に示す。

MOT1	MOT2	L	NL	Total
<i>ceux</i>	<i>où</i>	10	1	11
	<i>et</i>	1	0	1
	<i>à</i>	0	1	1

表 6-133 : 指示代名詞 *ceux* と後続語の組み合わせ

上記の表から、語末子音字が母音の前で発音される多くの場合は「*ceux où*」という連辞であるということが明白である。接続詞 *et* (/&) が後続語となる「*ceux &*」というコンテキストではリエゾンが実現しているが、前置詞 *à* が後続する「*ceux à*」というコンテキストではリエ



ゾンが実現しない。以下に例を挙げる。

- **« ceux où »**  
 リエゾンの実現があるもの : [...] **ceux où** il seroit plus à propos de se servir du seul *i*. (1 : 99)  
 リエゾンの実現がないもの : **ceux où** l's. ne se prononce point, (2 : 140)
- **« ceux & »**  
 リエゾンの実現があるもの : *et après les relatifs celui, celle, ceux & celles*, (1 : 45)
- **« ceux à »**  
 リエゾンの実現があるもの : C'est pourquoi *il faut s'attacher à ceux* à qui le pays a donné cet avantage. (1 : 42)

次に、指示代名詞 *celles* は全体的に例が少なく、4例のみである。そのうちリエゾンが実現したのは1例のみであり、これは「*celles où*」というコンテキストであったが、同様のコンテキストが他に2例あるがリエゾンは実現しない。

MOT1	MOT2	L	NL	Total
<i>celles</i>	<i>où</i>	1	2	3
	<i>étaient</i>	0	1	1

表 6-134 : 指示代名詞 *celles* と後続語の組み合わせ

以下に例を挙げる。

- **« celles où »**  
 リエゾンの実現があるもの : Ces 9. Lettres étant **celles** où *ils* font le plus d'équivoques, (2 : 8)  
 リエゾンの実現がないもの : **celles** où la pureté de la prononciation [...] (2 : 75)
- **« celles étaient »**  
 リエゾンの実現がないもの : Prononcez les donc com̄e si **celles** étoient écrites ainsi. (2 : 147)

*celles* のリエゾンの実現率の低さは、人称代名詞 *elles* と同様の理由が考えられる。つまり、*celles* は語末子音字 *-s* が発音されない場合であっても、[sɛl] という語末で子音が安定的に発音される。

### 6.2.5.6.3. 代名詞 *les*

代名詞 *les* のリエゾンの実現率は 22 例中 20 例で 90,9% である。

	L	NL	Total	%
<i>les</i>	20	2	22	90,9%

表 6-135 : 代名詞 *les* におけるリエゾン実現率

以下は代名詞 *les* に後続する語の一覧表である。下線を引いた語はリエゾンの実現しない例で観察された語である。

MOT1	MOT2	
<i>les</i>	副詞	<i>ainsi</i>
	代名詞	<i>en, y</i>
	動詞	<i>ai, aye, aprit, écrit, écrivie, enseigne</i>
	不定詞	<i>avoir, écrire</i>
	ジェロンディフ	<i>écrivant, <u>ayant</u></i>

表 6-136 : 代名詞 *les* とその後続語の組み合わせ

以下にリエゾンが実現した例と実現しない2例を挙げる。

- リエゾンの実現があるもの
  - Et écrivez les ainsi*, (2 : 19)
  - On **les** écrit ainsi pour les distinguer (1 : 34)
  - on ne peut à peine les distinguer les unes des autres qu'en **les** écrivant (2 : 13)
- リエゾンの実現がないもの
  - et **les** ayant disposés en forme de vocabulaire pour les faire mieux comprendre aux Etrangers, parce qu'il seroit bien plus à propos de **les** écrire avec la double ss. (0 : 9)

#### 6.2.5.6.4. 代名詞におけるリエゾンのまとめ

代名詞とその後続語のリエゾンの平均実現率は94,24%である。

	L	NL	Total	%
<i>il</i>	317	5	322	98,45%
<i>nous</i>	16	0	16	100%
<i>vous</i>	34	3	37	91,89%
<i>ils</i>	41	5	46	89,13%
<i>elles</i>	2	7	9	22,22%
<i>ceux</i>	11	2	13	84,62%

<i>celles</i>	1	3	4	<b>25,00%</b>
<i>les</i>	20	2	22	<b>90,90%</b>
<b>Total</b>	<b>442</b>	<b>27</b>	<b>469</b>	<b>94,24%</b>

表 6-137：代名詞におけるリエゾン実現率

ただし、*elles* および *celles* はそれぞれ 22,22%と 25%というかなり低いリエゾン実現率を示した。これはおそらく、これらの語の語末子音字-sが発音されない場合であっても、安定的に語末で子音[l]が安定的に発音されるためである。

#### 6.2.5.7. +アルファベット

アルファベットが MOT2 の位置にある場合に、リエゾンが実現しにくい傾向が観察された。母音で始まるアルファベットに該当するのは「A, E, F, H, I, L, M, N, O, R, S, U, X, Y」である。まず、MOT1 とアルファベットというコンテキスト全体のリエゾンの実現率は 44,56% である。

	L	NL	Total	%
+アルファベット	86	107	193	<b>44,56%</b>

表 6-138：「+アルファベット」コンテキストにおけるリエゾン実現率

ただし、アルファベットに先行する語の品詞によってリエゾンの実現率は異なる。以下に先行する語の品詞に応じたリエゾンの実現率を表した表を提示する。

	L	NL	Total	%
冠詞 +	13	0	13	<b>100%</b>
数詞 +	5	1	6	<b>83,33%</b>
形容詞 +	10	9	19	<b>52,63%</b>
前置詞 +	44	37	81	<b>54,32%</b>
動詞 +	5	6	11	<b>45,45%</b>
接続詞 +	5	14	19	<b>26,32%</b>
副詞 +	4	40	44	<b>9,09%</b>
<b>Total</b>	<b>86</b>	<b>107</b>	<b>193</b>	<b>44,56%</b>

表 6-139：後続語の種類による「+アルファベット」コンテキストのリエゾン実現率

リエゾンの実現率が高いコンテキストは、「冠詞+アルファベット」、「数詞+アルファベット」である。これらのコンテキストではリエゾンの実現率がそれぞれ 100%および 83,33%

を示した。しかし、その他のコンテキストではリエゾンの実現率が高いとはいえない。また、特にリエゾンの実現率が低いのは「副詞+アルファベット」のコンテキストであり、9,09%である。

- 「冠詞+アルファベット」  
リエゾンの実現があるもの : qu'à cause que **cet** *h.* le mange. (1 : 164)
- 「数詞+アルファベット」  
リエゾンの実現があるもの : **Deux** *aa.* ne ne se metent plus ensemble, (1 : 114)
- 「副詞+アルファベット」  
リエゾンの実現があるもの : parce qu'on m'étoit autrefois *i.* devant *g.* suivi de l'*n.* (2 : 52)  
リエゾンの実現がないもの : ou **autrement** *f.* ne se prononce point. (2 : 101)

#### 6.2.5.8. +接続詞 *et, ou*

接続詞 *et* および接続詞 *ou* とその先行語とのリエゾンの実現率はそれぞれ、34,45%および35,34%である。このリエゾンの実現率は比較的低いといえる。

	L	NL	Total	%
+ <i>et</i>	41	78	119	34,45%
+ <i>ou</i>	41	75	116	35,34%
<b>Total</b>	<b>82</b>	<b>153</b>	<b>235</b>	<b>34,89%</b>

表 6-140 : 「+接続詞 *et, ou*」コンテキストのリエゾン実現率

以下ではさらに、先行語の品詞毎にリエゾンの実現頻度を観察する。

	L	NL	Total	%
数詞 +	4	1	5	80%
副詞 +	12	6	18	66,67%
冠詞 +	3	2	5	60%
動詞 +	7	6	13	53,85%
前置詞 +	4	4	8	50%
名詞 +	42	93	135	31,11%
人称代名詞 +	2	5	7	28,57%
形容詞 +	8	35	43	18,60%
接続詞 +	0	1	1	0%
<b>Total</b>	<b>82</b>	<b>153</b>	<b>235</b>	<b>34,89%</b>

表 6-141 : 後続語による「+接続詞 *et, ou*」コンテキストのリエゾン実現率

最もリエゾンの実現率が高いのは先行語が副詞の場合である。ただし、リエゾンの実現率は 66,67%で、それほど高いものではない。それ以外のコンテキストではリエゾンの実現率は全く高いとはいえない。接続詞 *et* および *ou* は先行語との間にリエゾンが実現することは可能ではあるが、選択的であるといえる。以下に例を挙げる。

- 「形容詞+接続詞」

リエゾンの実現があるもの：

ils ont l'honneur d'être sujets de nôtre **glorieux et** Invinéible Monarque (1 : 63)

リエゾンの実現がないもの：

s. se peut prnoncer encore par d'autres Regles **diferentes et** generales dans leur espece, (2 : 106)

- 「名詞+接続詞」

リエゾンの実現があるもの：Elles se divisent en **voyelles et** en consones. (1 : 3)

リエゾンの実現がないもの：dans le Livre de mes **Letres et** dans mes autres Ouvrages, (0 : 1)

### 6.2.5.9. 名詞+動詞

名詞+動詞のコンテキストは 32 例あり、そのうちの 53,13%である 17 例でリエゾンが実現された。

	L	NL	Total	%
名詞+動詞	17	15	32	53,13%

表 6-142 : 「名詞+動詞」コンテキストのリエゾン実現率

現代フランス語においてこのコンテキストはリエゾンが通常期待されないが、Milleran のフランス語においてはリエゾンは選択的であるといえる。以下に例を挙げる。

- 「名詞+動詞」

リエゾンの実現があるもの：

dont le **bois est** fort poreux, et leger (1 : 86)

Les **exemplaires ont été** fournis. (2 : 199)

リエゾンの実現がないもの：

coñe les **voyelles enpéchent** que l'h. ne soit consone, (2 : 56)

Ce **defaut est** ordinaire aux feñes (0 : 8)

#### 6.2.5.10. リエゾン分析のまとめ

Milleran コーパスにおけるリエゾンの実現率は比較的高いといえる。一音節の語は、複数音節の語よりもリエゾンの実現率が高いこと、また語末の音節構造は閉音節よりも開音節の語のリエゾンの実現率が高いことが観察された。

統語的分析においてはそれぞれの統語コンテキストによって異なる傾向が観察された。ここで、第九章において Vaudelin コーパスとの比較を行う際に注目したい点について再度まとめておくことにする。

まず、名詞句では「冠詞+名詞」、「冠詞+形容詞」においてリエゾンの実現は絶対的ではない。また冠詞 *plusieurs* や *quelques* の語末の *-s* のリエゾンは義務的ではない。この点については、おそらくこれらの冠詞が閉音節であるためであることがその理由として考えられる。現代フランス語においてはこれらのコンテキストのリエゾンは比較的安定的に実現される。

「形容詞+名詞」コンテキストでは単数形においても複数形においてもリエゾンは安定的に実現されるわけではないことが観察された。このコンテキストは現代フランス語ではリエゾンは規範においては義務的であるとされているが、実際には安定的にリエゾンがされるわけではないようである(Cf. Durand & Lyche 2003)。特に、複数形のリエゾンの実現を観察において興味深いのは、語末の複数を示す形態素 *-s*, *-x* の音である [z] が必ずしも実現しないことである。これは、[z] が未だに複数性マーカーとしての機能していなかったとも捉えることができる。

「名詞+形容詞」コンテキストには単数形においても複数形においてもリエゾンは安定的に実現されるわけではない。単数形においてリエゾンの実現が最も多く観察されたのは «*accent aigu*» という連辞であるが、その他にもリエゾンの実現が観察される連辞がある。現代フランス語においては、この単数形の「名詞+形容詞」コンテキストはリエゾンの実現は慣用句を除くとリエゾンの実現は義務的ではなく、むしろ禁止的である。ただし、詩の朗読においては例外であり、リエゾンの実現は推奨されているといえる。次に、複数形については、現代フランス語ではリエゾンは選択的であり、これは Milleran のフランス語と共通するものである。語末の複数を示す形態素 *-s*, *-x* の音である [z] はこのコンテキストにおいても複数性マーカーとしての機能を持つのかは明白ではない。

動詞句のリエゾンの実現率は高いといえる。屈折形では、三人称単数形のリエゾンは特に安定的であり、これは語末子音字 *-t* が発音されやすいこともその理由として考えられる。また、この語末子音字 *-t* が三人称マーカーという形態的機能を帯びるという説明にもなりえる。三人称複数形のリエゾンにおいては、活用語尾の違いが観察された。例えば、活用語尾 *-ont* においては、活用語尾 *-ent* よりもリエゾンの実現率が高い。この理由は、語末の音節構造が開音節であるものは、閉音節であるものよりもリエゾンが実現されやすいというものである。屈折形に限らず、過去分詞 (93,33%)、ジェロンディフ (82,61%) においてもリエ

ゾンの実現率は一定に高いものである。

また特に興味深いのは、韻文や演説ではリエゾンが実現されるといわれている「+接続詞 *et, ou*」と「名詞+動詞」コンテキストにおいて、**Milleran** コーパスではリエゾンの実現が観察されたことである。

## 第七章 Vaudelin (1713, 1715)コーパスにおける語末子音字の発音およびリエゾン

本章では Vaudelin コーパスにおける語末子音字の発音およびリエゾンについての分析を行う。

### 7.1. 語末子音字の発音

以下では、Vaudelin コーパスで観察される語末子音字の発音について品詞毎に観察を行う。品詞のカテゴリーは、冠詞、名詞および形容詞、副詞、代名詞、前置詞、接続詞、数詞、関係代名詞、動詞に分類する。

#### 7.1.1. 冠詞

##### 7.1.1.1. 定冠詞

##### 7.1.1.1.1. 語末子音字-*l*

語末子音字に-*l*を持つ定冠詞 *auquel, lequel, quel* は、語末子音[l]が子音および母音の前で常に発音される。以下にその分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>auquel, lequel, quel</i> (« <i>ocail</i> [okɛl], <i>lcail</i> [lkɛl], <i>cail</i> [kɛl] »)	9	12	-

表 7-1 : 語末子音字-*l*の定冠詞

以下に例を挙げる。

#### - 母音の前

« **Cail** âi le\* *prmie*? » (IC, p.105)

= **Quel** est le premier ?

#### - 子音の前

« An **cail** tan fôt-i fâir ste\* *Confaision*? » (IC, p.131)

= En **quel** temps faut-il faire cette Confession ?

#### 7.1.1.2. 語末子音字-*r*

語末子音字-*r* の所有定冠詞 *leur* は母音の前では発音されるが、子音の前では発音されない。以下にその分布を示す。



	子音の前	母音の前	休止の前
leur (« leur » [lør])	-	2	-
leur (« leu » [lø])	15	-	-

表 7-2 : 語末子音字-r の定冠詞

以下に例を挙げる。

- 母音の前

« Cail âi la pâin de\* **leur** âm? » (IC, p.136)

= Quelle est la peine de **leur** âme ?

- 子音の前

« ci veul par **leu** grand vivasite, » (NM, p.33)

= qui veulent par **leur** grande vivacité,

### 7.1.1.3. 語末子音字-s

*ces, les, leurs, mes, tes, ses, nos, vos* は語末子音字が-s の定冠詞である。これらの語は基本的に母音の前では[z]が発音される一方、子音の前では[z]は発音されない。本コーパスでは *tes* は子音の前でのみ観察され、母音の前での発音を確認することはできない。おそらく *mes* や *ses* から類推するなら、*tes* が母音の前に位置する場合には子音[z]が発音されることが考えられる。

	子音の前	母音の前	休止の前
ces (« sez » [sez])	-	2	-
ces (« se » [se])	46	-	-
les (« lez » [lez])	-	90	-
les (« le » [le])	301	-	-
leurs (« leuz » [løz])	-	5	-
leurs (« leu » [lø])	17	-	-
mes (« mez » [mez])	-	11	-
mes (« me » [me])	22	-	-
tes (« tez » [tez])	-	-	-
tes (« te » [te])	4	-	-
ses (« sez » [sez])	-	16	-
ses (« se » [se])	28	-	-
nos (« noz » [noz])	-	8	-
nos (« no » [no])	29	-	-

vos (« voz » [voz])	-	8	-
vos (« vo » [vo])	35	-	-

表 7-3 : 語末子音字-s の定冠詞

以下に例を挙げる。

- 母音の前

« Cail son **sez** efâi? » (IC, p.113)

= Quels sont **ces** effets ?

« Oui, onn i peu raporte **lez** obligasion de pair e de mair anvâir **leuz** anfan; » (IC, p.125)

= Oui, on y peut rapporter **les** obligations des pères et des mères envers **leurs** enfants ;

« cahe sou **sez** aparans ecsterieur ce\* **mez** ieu voâi. (IC, p.71)

= caché sous **ses** apparences extérieures que **mes** yeux voient »

- 子音の前

« I at-i cec'eun de\* **se** pairson ci se\* sai fait om? » (IC, p.32)

= Y a-t-il quelqu'un de **ces** personnes qui se soit fait homme ?

« O Mon Dieu, je\* vou demand **le** mâim grâs pour mon Pair e ma Mair, » (IC, p.24)

= Ô Mon Dieu, je vous demande **les** mêmes grâces pour mon père et ma mère,

« Tou **te** pehe confaisrâ a tou le\* moïn eun foai l'an: (IC,p .131)

= Tous **tes** péchés confesseras à tout le moins une fois l'an:

一方、複数形の *quels, quelles, lesquels, lesquelles, auxquelles* については子音の前で語末子音字-s は発音されない。さらに、母音の前に位置する例が 2 例観察されたが、これらの例においても語末子音字-s の発音は観察されなかった。

	子音の前	母音の前	休止の前
quels, quelles, lesquels, lesquelles, auxquelles (« cail [kɛl], cail [kɛl], lcail [lkɛl], lcail [lkɛl], ocail [okɛl] »)	26	2	-

表 7-4 : 語末子音字-s の定冠詞 *quels, quelles, lesquels, lesquelles, auxquelles*

- 母音の前

« la diferans de pairson avai **lecaïl** on le\* peu comaitr. » (IC, p.126)

la différence des personnes avec **lesquelles** on le peut commetre.

- 子音の前

« **Cail** son le Fâit instituê par l'Eglîz? » (IC, p.130)

**Quels** sont les Fêtes instituées par l'Eglise ?

#### 7.1.1.4. 語末子音字-*n*

語末子音字に-*n*を持つ所有形容詞には *mon, ton, son* がある。これらは母音の前では語末子音字-*n* [n]が発音されるが、子音の前では発音されない。以下にその分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>mon</b> (« mon ») [mɔn]	-	17	-
<b>mo<del>n</del></b> (« mon ») [mɔ̃]	74	-	-
<b>ton</b> (« ton ») [tɔn]	-	2	-
<b>to<del>n</del></b> (« ton ») [tɔ̃]	1	-	-
<b>son</b> (« son ») [sɔn] [sɔ̃n]	-	16	-
<b>so<del>n</del></b> (« son ») [sɔ̃]	50	-	-

表 7-5 : 語末子音字-*n* の定冠詞

また、これらの所有形容詞は母音の前で発音される場合に、今日のフランス語のように非鼻母音化が生じることが観察された。以下に例を挙げる。

- 母音の前

« Mon Dieu, je\* vouz ofr **mon** âme, mon cœur, » (IC, p.24)

= Mon Dieu, je vous offre **mon** âme, mon coeur

« Le\* biin d'ôtrui tu ne\* prandrâ ni rtiindrâ a **ton** aisian? (IC, p.127)

= Le bien d'autrui tu ne prendras ni retiendra à **ton** escient ?

« **son** umilite, sa pasians e sa harite anvair tôu lez Om. » (IC, p.58)

= **son** humilité, sa patience et sa charité envers tous les hommes.

- 子音の前

« e ce\* **mon** cri âlie\* jusc'a vou. » (IC, p.38)

= et que **mon** cri aille jusqu'à vous.

« **Ton** Créateur recevra au moins à Pâcques humblement ? » (IC, p.131)

= **Ton** Créateur recevra au moins à Pâcques humblement ?

« I se\* fai par la vairtu tout-puisant de parol de\* JEZU-CRI ce\* le\* Prâitr pronons an **son** Non. » (IC, p. 104)

= Il se fait par la vertu tout-puissante des paroles de JESUS-CHRIST que le Prêtre prononce en **son** Nom.

ただし、川口 (2010 : 135)も指摘しているように、非鼻母音化を起こさずに鼻母音がそのま

ま保存され、リエゾンの-nの続く例が *son* において2例観察された。以下に例を示す(川口, 2010 : 135)。

& porcoa ne la pa joindr a *sonn Istoair* ci sra toujou si curieuz e toujou bail?  
 = et pourquoi ne la pas joindre à son histoire qui sera toujours si curieuse et toujours belle?

*son Istoar, ci fra* NM, p.29.

ou dan sa pairson, ou dan *sonn oneur*, ou dan se biin.  
 = ou dans sa personne, ou dans son honneur, ou dans ses biens.

*ò da son oneur,* IC, p.112.

ただし、このような例は *mon* および *ton* においては観察されなかった。川口(2010 : 135)が「もちろん3人称の *son* にだけ鼻母音化が起きていたとは考えにくい。*mon* や *ton* でも同じような鼻母音化の起きる可能性があったと推測するのが自然であろう」と述べているように、単に本コーパスでは観察されなかっただけで、これらの所有形容詞において鼻母音が保持されていた可能性は大いにありえるだろう。

#### 7.1.1.5. 語末子音字-t

定冠詞 *cet* については、子音の前では *ce* が表れ、母音の前では常に *cet* が表れ語末子音[t]が発音される。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>cet</i> (« st' » [st])	-	13	-

表 7-6 : 語末子音字-tの定冠詞

以下に例を挙げる。

- *cet*
  - « D'ou me\* viin se\* bon-eur e st'oneur ce\* mon Sainie\*eur sai vnu jusc'a moi, » (IC, p.73)
  - = D'où me vient ce bonheur et cet honneur que mon Seigneur soit venu jusqu'à moi, »
  - « Ou at-i pri se\* côr e st'âm? »
  - = Où a-t-il pris ce corps et cet âme ?

### 7.1.1.6. 冠詞における語末子音字の発音のまとめ

以上で観察した冠詞にはいくつかのタイプがある。まず、基本的に語末子音字が常に発音されるもの（例：*auquel, lequel, quel*）で、これは語末子音字に-*l*を持つ冠詞である。次に、語末子音字が全く発音されないもの（例：*quelques, quels, auxquels*）が観察されるが、これは語末子音字が発音されない場合においても、語末で他の子音が発音される閉音節語末の冠詞である。そして、子音、休止の前および母音の前において語末子音の発音に相補分布が見られるもの（例：*un, des, leur, ces, les, etc.*）がある。このコンテクストによって相補分布が観察される冠詞は、基本的に子音および休止の前では語末子音字が発音されず、母音の前でのみ語末子音字の発音が観察される。

語末子音字が-*n*の冠詞は、後続要素に依存して、常に非鼻母音化するものと、鼻母音が保たれる場合がある。母音の前では、非鼻母音が起こり、不定冠詞 *un* は«*eun*»と綴られる。子音および休止の前では鼻母音が保持され、「*un*»と綴られる。

鼻母音	例：« <i>i n' i ann a c' un</i> » (IC. p. 31) [i ni ãn a k œ] = <i>Il n' y en a qu' un</i>
リエゾンの実現による非鼻母音化	例：« <i>e s' âit eun avantaĵ c' oceun de Saict</i> » [e set œn avãtaĵ kokœ dœ sœkt] = <i>et c' est un avantage qu' aucun de Sectes</i> (IC. p. 92)

表 7-7：鼻母音形と非鼻母音形の綴り字の違い

上記の例では、一方で語末の *un* は鼻母音で発音される。他方では、*un avantage* [œn avãtaĵ] の *un* は非鼻母音化された形で発音され、鼻母音が保たれ子音[n]が発音される [œn avãtaĵ] という発音ではない。これは母音が後続する全ての *un* で共有されているものである。リエゾンの実現によって生じる非鼻母音形は、現代フランス語とは異なる特徴であるといえる。Straka (1981 : 198-199)によれば、1836年の *Société grammaticale* によって、非鼻母音形が伝統的および規範的な発音であると定められており、これは Littré においても同様の発音が保持されている。ただし、19世紀末には、一方で Rousselot が話者は非鼻母音形と鼻母音形の両方を用いると述べ、他方で Passy が鼻母音形のみを正しい発音として提示している。そして、20世紀に入ると Martinon は鼻母音形のみを提示している。以下にその様子を要約した表を提示する。

1836年 Société grammaticale	[ <b>œn</b> avãtaʒ] ([œ̃n avãtaʒ])
1863年—1872年 Littré	[ <b>œn</b> avãtaʒ] ([œ̃n avãtaʒ])
1887年 Passy	[œ̃n avãtaʒ]
1899年 Rousselot	[ <b>œn</b> avãtaʒ] / [œ̃n avãtaʒ]
1913年 Martinon	[œ̃n avãtaʒ]

表 7-8 : 非鼻母音化形と鼻母音化形の交替推移 (Straka, 1981 :198 を参照)<sup>132</sup>

一方で、鼻母音が保持される例が少数存在する。例えば、所有形容詞 *son* に母音が後続した 17 例のうち 2 例は、鼻母音が保たれる例が観察された<sup>133</sup>。おそらく、Vaudelin の時代のフランス語においてはこれら 2 つの形態が同時に存在したと考えられる。

冠詞 *leur* の語末子音字 *-r* は、現代フランス語においては常に発音されるが、Vaudelin のフランス語においては、母音の前でのみ発音されることが観察された。

### 7.1.2. 不定冠詞

不定冠詞 *un* の語末子音字 *-n* は母音の前で発音され、子音の前では発音されない。以下にその分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>un</b> (« eun » [œ̃n])	-	20	-
<b>un̄</b> (« un » [œ̃])	100	-	2

表 7-9 : 不定冠詞 *un*

Cohen (1946 : 38)および川口(2010 : 133)によって既に指摘されている通り、不定冠詞 *un* が子音の前に表れる場合には、Vaudelin によって « un » と綴られるのに対して、母音の前に表れる場合には、不定冠詞 *un* の発音は女性形と同じ綴り字 « eun » で記される。つまり、不定冠詞 *un* が母音の前で発音される場合には、非母音化が起こる。

#### - 母音の前

« e s'ait **eun** avantaj c'oceun de Saict, ci son separê d'ail, » (IC, p.92)

= et c'est **un** avantage qu'aucun de sectes, qui sont séparés d'elle.

#### - 子音の前

« S'ait **un** pehe ci nou fai pairdr la grâs de\* Dieu, » (IC, p.134)

= C'est **un** péché qui nous fait perdre la grâce

<sup>132</sup> 括弧に入れた鼻母音が保たれた発音形は当時規範的ではないものの存在した発音である。

<sup>133</sup> Kawaguchi (2011 : 142)を参照。

不定冠詞 *des* は母音の前で語末子音[z]が発音され、子音の前では発音されないことが観察された。以下にその分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>des</i> (« <i>dez</i> » [dez ])	-	27	-
<i>des</i> (« <i>de</i> » [de])	113	-	-

表 7-10 : 不定冠詞 *des*

不定冠詞 *plusieurs* は子音および休止の前で語末子音字-s が発音されない。母音の前での発音が観察されないため、母音の前で語末子音字-s が発音されるか否かについては不明のままである。一方、*quelques* については子音の前および母音の前で語末子音字-s が発音されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>plusieurs</i> (« <i>pluzieur</i> » [pluziœr])	13	-	4
<i>quelques</i> <sup>134</sup> (« <i>cec</i> » [kek])	16	4	-

表 7-11 : 不定冠詞 *plusieurs* および *quelques*

以下に例を挙げる。

***des***

- 子音の前

« De\* l'efai **de** Sacrman. » (IC, p.94)

= De l'effet **des** Sacrements.

- 母音の前

« Le\* Sinbol **dez** Apôtr, » (IC, p.38)

= Le Symbole **des** Apôtres,

***plusieurs***

- 子音の前

« I at-i **pluzieur Di-eu?** » (IC, p.82)

= Y a-t-il **plusieurs** Dieux ?

- 休止の前

« e in'i an peut avo-air **pluzieur.** » (IC, p.85)

= et qu'il n'y en peut avoir **plusieurs.**

***quelques***

<sup>134</sup> *quelques* については語中子音字-l-[l]が発音されずに、[kek]という発音が使用されている。

- 子音の前  
« an li vaïrsan **cec gout** d'ô» (IC, p.44)  
= en lui versant **quelques** gouttes d'eau
- 母音の前  
« Non de\* Dieu, ou par **cec ôtr** hôz de\* sacre, » (IC, p.124)  
= Nom de Dieu, ou par **quelques** autres choses de sacrées,

### 7.1.3. 名詞および形容詞の語末子音の発音

#### 7.1.3.1. 単数形

##### 7.1.3.1.1. 語末子音字-*f* ([f])

本コーパスで観察される語末子音字に-*f* を持つ形容詞および名詞は大変数が少なく、*attentif*, *boeuf*, *chef*のみが観察された。*attentif*については、母音の前でのみ観察されたため、子音および休止の前での発音の有無は定かではないが、おそらく常に発音されると考えられる。*boeuf*は休止の前で1例のみ観察され、語末子音字は発音される。*chef*は子音、母音および休止の前で観察され、いずれの場合にも語末子音字が発音される。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>attentif</i> (« atantif » [atâtif])	-	1	-
<i>boeuf</i> (« beuf » [bœf])	-	-	1
<i>chef</i> (« haif » [ʃɛf])	1	2	1

表 7-12 : 語末子音字-*f* の名詞および形容詞

以下に例を挙げる。

- *attentif*  
« afin d'âitr pluz **atantif** a biin sairvi le\* Prâitr. » (IC, p.40)  
= afin d'être plus **attentif** à bien servir le Prêtre.
- *beuf*  
« Vou ne\* dzirrai poin sa maison, ni son sairviteur, ni son **beuf**, ni son ân, » (IC, p.118)  
= Vous ne desirez point sa maison, ni son serviteur, ni son **beuf**, ni son âne,
- *chef*  
« An se\* c'î n'on c'un mâim **Haif** invizibl ci âi JÉZU-CRI, e un **Haif** vizibl ci âi le\* Pap, (IC, p.91)  
= En ce qu'ils n'ont qu'un même **chef** invisible qui est JÉSUS-CHRIST, et un **Chef** visible qui est le Pape,



### 7.1.3.1.2. 語末子音字-c, -g ([k])

語末子音字-c, -g を持つ形容詞および名詞は *blanc*, *long*, *estomac*, *sang* が観察された。形容詞 *blanc* は子音の前でのみ観察され、語末子音字は発音されない。おそらく休止の前でも発音されないことが予想されるが、母音の前においては語末子音字が発音されるとも考えられる。形容詞 *long* については、休止の前では発音されない。名詞 *estomac* については、休止の前でのみ 1 例観察された。子音および母音の前での発音は不明であるが、休止において語末子音字が発音されないため、おそらく子音の前では発音されないと予想できる。名詞 *sang* については、子音、母音、休止全てのコンテキストにおいて語末子音字が発音されなかった。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>blanc</i> (« blan » [blã])	2	-	-
<i>estomac</i> (« estoma » [estoma])	-	-	1
<i>long</i> (« lon » [lõ])	-	-	1
<i>sang</i> (« san » [sã])	10	1	6

表 7-13：語末子音字-c, -g の名詞および形容詞(語末子音字の発音なし)

一方、以下の形容詞 *grec* は子音および休止の前で語末子音が発音され、*public* は語末子音が、子音および母音の前で発音される。これらの語末子音は常に発音されるものと考えられるだろう。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>grec</i> (« graik » [grek])	1	-	1
<i>public</i> (« publik » [pyblik])	1	1	-

表 7-14：語末子音字-c, -g の名詞および形容詞(語末子音字の発音あり)

### 7.1.3.1.3. 語末子音字-l

語末子音字に-lを持つ語について、この-lには2つの子音[ʎ]および[l]が当てはまるだろう。まず、[ʎ]が発音されるのは-*ail*, -*oeil*, -*eil*, -*il* を語末に持つ形容詞および名詞である。本コーパスにおいては以下に挙げる5つの語がこの子音を持つ。

	子音の前	母音の前	休止の前
travail (« travalie* » [travaʎ])	1	-	2
oeil (« euile* » [øʎ])	1	-	-
réveil (« revailie* » [revɛʎ])	1	-	-
péril (« perilie* » [periʎ])	1	-	-
vil (« vil » [vil]) <sup>135</sup>	1	-	-

表 7-15：語末子音字-*l* ([ʎ])の名詞および形容詞

これらの名詞および形容詞の語末子音字-*l*は、子音の前で発音される例が1例ずつあり、*travail*のみ休止においても子音が発音される例が2例ある。よって、これらの語の語末子音は、子音、母音および休止の前で常に発音されることが考えられる。

次に、[ʎ]が発音される形容詞および名詞は、基本的に-*al*、-*el*、-*eul*を持つものであり、[ʎ]は基本的に、子音、母音、休止の前で常に発音される。語末-*ul*に関しては*nul*の1例のみ母音の前で観察され、語末子音字-*l*は発音される<sup>136</sup>。

	子音の前	母音の前	休止の前
-al (« -al » [-al]) (Ex. confessionnal, égal, final, général, initial, mal)	2	5	7
-el (« -ail » [-ɛl]) (Ex. actuel, Autel, Babel, bel, Ciel, consubstantiel, corporel, essentiel, éternel, immortel, originel, Missel, mortel, naturel, Noël, originel, solennel, spirituel, universel, tel, vénuel)	14	21	57
-eul (« -eul » [-œl]) (Ex. seul)	9	1	3
-ul (« -ul » [-ul]) (Ex. nul)	-	1	-

表 7-16：語末子音字-*l* ([ʎ])の名詞および形容詞

<sup>135</sup> « vil »の語末の-*l*は[ʎ]ではなく[ʎ]と発音されている。

<sup>136</sup> Milleranのコーパスにおいて語末に-*ul*を持つ語*cul*および*saoul*は子音および休止の前では発音されず、母音の前においては例がないため不明である。よって、語末に-*ul*を持つ全ての語において語末子音[ʎ]が発音されるとは限らない。

#### 7.1.3.1.4. 語末子音字-n

語末子音字に-n を持つ形容詞および形容詞は多くの例が観察された。名詞については語末子音字が子音、母音および休止の前で発音されることはない。以下に例の分布を示した表を挙げる。

	子音の前	母音の前	休止の前
名詞 - $\tilde{V}n$	220	60	215

表 7-17：語末子音字-n の名詞

- 子音の前  
« A la **fin** de\* l'Épitr le\* Ministr repon toujou » (IC, p.43)  
= A la **fin** de l'Épître le Ministre répond toujours
- 母音の前  
« La **Salutation** Anjelic. » (IC, p.38)  
= La **Salutation** Angélique.
- 休止の前  
« sou lez espais du pin e du **vin**. » (IC, p.104)  
= les espèces du pain et du **vin**.

それに対して、形容詞は母音の前で語末子音字-n が発音される例が 2 例のみ観察された。ただし、常に語末子音字が発音されるわけではなく母音の前における他の 5 例では発音は観察されない。一方、子音および休止の前において語末子音字は一切発音されることはない。

	子音の前	母音の前	休止の前
形容詞 - $\tilde{V}n$	-	2	-
- $\tilde{V}n$	17	5	8

表 7-18：語末子音字-n の形容詞

形容詞が母音の前で発音される 2 例はいずれも名詞が後続する連辞 « *bon Ange* » である。また、これらの形容詞は冠詞とは異なり、鼻母音が保持されたまま発音される。形容詞の例を以下に例を挙げる。

- 子音の前  
« Mon **bon** Dieu, acorde-moi la grâs de\* biin conaitr, » (IC, p.61)

- = Mon **bon** Dieu, accordez-moi la grâce de bien connaître,
- 母音の前
  - « mon **bon** Anj aide moi. Rmôr de\* ma Consians » (IC, p.60)
  - = mon **bon** Ange aidez moi. Remords de ma Conscience
  - « Oui: il âi **bon** e util d’avoair rcôur a leu priair, (IC, p.121)
  - = Oui : il est **bon** et utile d’avoir recours à leurs prières,
- 休止の前
  - « Done-nou ojourd’ui not pin **cotidiin**. » (IC, p.139)
  - = Donnez-nous aujourd’hui notre pain **quotidien**.

#### 7.1.3.1.5. 語末子音字-r [r]

語末子音字-r の発音有無は-r の直前に位置する母音の種類によって異なる傾向が観察された。まず、語末に-air, -er, -eur, -oir, -or, -our, -ur, -yr を持つ語は基本的に子音、母音および休止の前で語末子音字は発音される。ただし、語 *monsieur* は例外であり、本コーパスでは子音の前でのみ 1 例観察されたが、語末子音字は発音されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
-air (ex. <i>chair</i> ), -er (ex. <i>enfer</i> ), -eur (ex. <i>seigneur</i> ) -oir (ex. <i>devoir</i> ), -or (ex. <i>trésor</i> ), -our (ex. <i>amour</i> ), -ur (ex. <i>pur</i> ), -yr (ex. <i>martyr</i> )	111	53	110
monsieur ( « monsieu » [mõsieu])	1	-	-

表 7-19 : 語末子音字-r の名詞および形容詞

次に、-ier を語末に持つ語(例 : *dernier, entier, particulier, premier*)は基本的に子音および休止の前では発音されないが、母音の前では発音の有無に揺れがあることが観察された。以下にその分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
-ier ( « -iair » [ier])	-	2	-
-ier ( « -iai » [ier])	8	1	6

表 7-20 : 語末子音字-r (-ier) の名詞および形容詞

終わりに、*-ir* を語末に持つ語は、*avenir* および *plaisir* を除くと、全てのコンテキストにおいて語末子音字の発音が観察された。*avenir* および *plaisir* は語末子音字の発音が子音および母音の前で観察されなかった。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>-ir</b> (« -ir » [ir]) (Ex. <i>souvenir, désir</i> )	5	1	1
<b>aveniɾ</b> (« avni » [avni]), <b>plaisiɾ</b> (« plezi » [plezi])	1	2	-

表 7-21 : 語末子音字-*r* (*-ir*)の名詞および形容詞

#### 7.1.3.1.6. 語末子音字-*s*, -*x*

語末子音字に-*s*, -*x* を持つ語は基本的に子音、母音および休止の前で語末子音字が発音されることはない。語末に語末子音字に-*s*, -*x* を含むいくつかの子音字を持つ語がいくつかある。それらは、*films, temps, corps* と語末子音字に-*rs* を持つ語 *secours, discours, recours, vers* である。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>films</b> (« fi » [fi])	9	9	14
<b>temps</b> (« tan » [tã])	10	1	2
<b>corps</b> (« côr » [kɔ:r])	11	11	18
<b>secours</b> (« scour » [skur]), <b>discours</b> (« discour » [diskur]), <b>recours</b> (« rcour » [rkur]), <b>vers</b> (« vair » [vɛr])	4	5	1

表 7-22 : 語末子音字-*s*, -*x* の名詞および形容詞 (直前に子音字があるもの)

まず、*films* については、子音字-*l*および-*s* のどちらも発音されず、発音形は常に[fi]である<sup>137</sup>。次に、*temps* は子音字-*p*および-*s* のどちらも発音されず、発音形は常に[tã]である。*corps* についても、子音字-*p*および-*s* のどちらも発音されないが、子音字-*r*のみ発音され[kɔ:r]という発音形で常に表れる。そして、最後に語末子音字に-*rs* を持つ語 *secours, discours, recours, vers* については子音字-*r*のみ発音され、それぞれ[skur], [diskur], [rkur], [vɛr]と発音される。

<sup>137</sup> *films* は現代フランス語では[fis]と発音される。

語末子音字 *-s*, *-x* の直前に母音字がある語は、基本的に子音、母音、休止の前において語末子音字は発音されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>-Vs, -Vx</b> (Ex. <i>croix, paix, pays, français</i> , etc...)	49	21	37

表 7-23 : 語末子音字 *-s*, *-x* の名詞および形容詞 (直前に母音字があるもの)

しかし、1例のみ休止の前で語末子音字が発音される語 *Angélus* ([ãzelys]) が観察される。また、形容詞 *pieux* および *mauvais* で母音で始まる語の前で子音 [z] が発音される。

	子音の前	母音の前	休止の前
Angélus (« Anjelus » [ãzelys])	-	-	1
pieux (« pieuz » [piøz])	-	1	-
mauvais (« movaiz / movâiz » [move(:)z])	-	1	-

表 7-24 : 語末子音字 *-s*, *-x* の名詞および形容詞 (語末子音字の発音が観察されるもの)

#### 7.1.3.1.7. 語末子音字 *-t*, *-d*

語末子音字 *-t*, *-d* の名詞および形容詞を持つ語は基本的に母音の前では発音される一方で、子音および休止の前では発音されない傾向が観察された。1例のみ語末子音字が休止の前で発音される語があるが、これは名詞 *introit* (« Introit » ([ëtroit]) 入祭文) である。

また語末子音字 *-t*, *-d* の直前の母音の種類、もしくは語末子音字 *-t*, *-d* の直前に位置する子音の種類を基に、語末子音字の発音有無を観察した。語末子音字が発音されるのは(1) 語末子音字 *-t*, *-d* の直前が短母音であるもの (*Vt*)、(2) 語末子音字 *-t*, *-d* の直前が鼻母音であるもの (*Ũt*) である。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>-Vt</b> (Ex. <i>fait</i> )	-	5	1
<b>-Vt̥</b>	70	26	76
<b>-Ũt</b> (Ex. <i>Saint</i> )	-	48	-
<b>-Ũt̥</b>	172	19	84

表 7-24 : 語末子音字 *-t*, *-d* の名詞および形容詞 (直前が口母音もしくは鼻母音)

それに対して、(3) 語末子音字 *-t*, *-d* の直前が長母音であるもの (*Ūt*) は母音の前での例が観察されないが、子音および休止の前で語末子音字は発音されない。また、(4) 語末子音字 *-t*, *-d* の直前に子音字 *-r* があるものに関しては語末子音字 *-t* が発音されないことが観察された。た

だし、子音字-*r*は常に発音される。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>-Vʔ</b> (Ex. <i>goût</i> )	3	-	1
<b>-Vrʔ, -Vrʔ</b> (Ex. <i>mort, fort</i> )	15	4	14

表 7-25：語末子音字-*t*, -*d* の名詞および形容詞（直前が長母音もしくは-*r*のもの）

終わりに、(4)語末子音字-*t*の直前に子音字-*c*があるもの、つまり語 *respect* については、以下に提示する分布が観察された。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>respect</i> (« <i>respaic</i> » [respek])	-	1	1
<i>respeʔ</i> (« <i>respai</i> » [respe])	2	-	2

表 7-26：語末子音字-*t*, -*d* の名詞および形容詞（直前が-*c*のもの）

つまり、*respect* には 2 つの異なる発音形[respek]および[respe]が観察された。この語においても語末子音字-*t* は発音されない<sup>138</sup>。ただし、子音の前では常に[k]が発音されない[respe]という発音形が、母音の前では[respek]という発音形が、そして休止の前では、2 つの発音形[respek]および[respe]が同時に観察された。

### 7.1.3.2. 複数形

名詞および形容詞の複数形の語末子音字-*s*, -*x*である。語末子音字は、母音の前では発音されることが可能であるが、子音および休止の前では語末子音字が発音されないことが観察された。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>-s, -x</b>	-	15	-
<b>-s, -x</b>	557	137	516

表 7-27：名詞・形容詞の複数形語尾-*s*, *x*

以下に例を挙げる。

<sup>138</sup> Fouché (1959 : 440)によれば、現代フランス語において *respect* や *aspect* のような語が後続語とリエゾンする際には、語末子音字-*t*ではなく、-*k*が発音されるようである。よって、*respect humain* [respekymɛ̃]、そして *aspect odieux* [aspekɔdjø]のように発音される。

- 子音の前  
 « Le\* Prâitr aitan dbou o **pie** de\* l'Otail, » (IC, p.40)  
 = Le Prêtre étant debout aux **pieds** de l'Autel,
- 母音の前  
 « O contrâir ail ecsitra la curiozite de **bôz** Esprî, » (NM, p18-19.)  
 = Au contraire elle excitera la curiosité des **beaux** Exprits,  
 « I rmai le **pâin** etairmail, » (IC, p.97)  
 = Il remet les **peines** éternels,
- 休止の前  
 « Pour troai raizon **prinsipal**. » (IC, p.107)  
 = Pour trois raisons **principales**.

### 7.1.3.3. 名詞および形容詞の語末子音字の発音のまとめ

単数形の名詞および単数形の形容詞の語末子音字には子音の種類によって異なる傾向が観察された。まず、語末子音字 *-f* および *-l* は基本的に常に発音される。次に、語末子音字 *-c*, *-g* および *-r* をもつ名詞および形容詞については、語末子音字が常に発音される語、常に発音されない語、そして発音が後続語によって変化する語という 3 種類が観察された。最後に、語末子音字 *-s*, *-x* および *-t*, *-d* を持つ語はいくつかの例外を除くと、基本的に休止および子音の前で語末子音字が発音されないが、母音の前では発音される語があるというタイプである。

複数形の語末子音字 *-s*, *-x* については、基本的に子音および休止の前では発音されず、母音の前では発音が可能であることが確認できた。

### 7.1.4. 副詞

#### 7.1.4.1. 語末子音字 *-l* ([l]) を持つ副詞

語末子音字が *-l* の副詞は本コーパスでは *mal* のみ、母音の前で観察された。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>mal</i> (« mal » [mal])	-	2	-

表 7-28 : 語末子音字 *-l* ([l]) を持つ副詞

以下に例を挙げる。

- *mal*  
 « je\* vou prî, je\* vou conjur d'avoair pitie de\* moai **mal**-ureu peheur. » (IC, p.62)  
 = Je vous prie, je vous conjure d'avoir pitié de moi **mal**-heureux pécheur.



« tou se\* ce\* vou pouve avoair panse, di, ou fai ci ai deplu a Dieu, **mal** edifie ou prejudisie a ôtrui. » (IC, p.61)

= tout ce que vous pouvez avoir pensé, dit, ou fait qui est déplu à Dieu, **mal** édifié ou préjudicié

#### 7.1.4.2. 語末子音字 **-n** ([n])を持つ副詞

語末子音字 **-n** を持つ副詞は複数ある。まず、*bien* および *rien* における語末子音字 **-n** は子音の前では発音されず、母音の前では子音[n]が発音される。副詞 *bien* および *rien* はそれぞれ子音の前では « *biin*, *riin* » と綴られ、母音の前では « *biin*, *ri-inn* » のようになる。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>bien</b> (« <i>biinn</i> » [bjɛ̃n])	-	12	-
<b>bienn</b> (« <i>biin</i> » [bjɛ̃])	25	1	-
<b>rien</b> (« <i>ri-inn</i> » [riɛ̃n])	-	1	-
<b>rienn</b> (« <i>riin</i> » [riɛ̃])	11	-	-

表 7-29 : 語末子音字 **-n** ([n])を持つ副詞 *bien*, *rien*

以下に *bien* および *rien* の例を挙げる。

##### - *bien*

母音の前 :

« si je\* n'êtâi **biinn** asure ce\* vô mizericord eclat par dsu tou voz ouvraj » (IC, p.62)

= si je n'étais **bien** assuré que vos miséricordes éclatent par-dessus tous vos ouvrages

子音の前 :

« Pour nou dispoze a le **biin** selebre. » (IC, P. 132)

= Pour nous disposer à les **bien** célébrer.

##### - *rien*

母音の前 :

« Com je\* crai ne\* li laise plû **ri-inn** a dzire su ste\* matiair, » (NM, p.17)

= Comme je crois ne lui laisser plus rien à désirer sur cette manière,

子音の前 :

« Je\* ne\* pui **riin** san vou; » (IC, p.67)

= Je ne puis **rien** sans vous ;

次に、副詞 *enfin*, *combien*, *non* は、子音、母音および休止の前において常に語末子音字 **-n** は発音されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
enfin (« anfin » [ãfɛ̃])	2	1	-
combien (« conbiin » [kɔ̃bjɛ̃])	4	14	-
non (« non » [nɔ̃])	10	1	21

表 7-30 : 語末子音字-n ([n])を持つ副詞 *enfin*, *combien*, *non*

#### 7.1.4.3. 語末子音字 -p ([p])を持つ副詞

語末子音字に-p を持つ副詞は *trop* および *beaucoup* の 2 種類である。まず、*trop* は子音の前では語末子音字-p は発音されないが、母音の前においては発音される例が 1 例のみ観察された。本コーパスでは休止の前に位置する例は観察されないが、語末子音字-p は発音されないと考えられる。

	子音の前	母音の前	休止の前
trop (« trop » [tʁɔp])	-	1	-
trop (« tro » [tʁɔ])	2	-	-

表 7-31 : 語末子音字-p ([p])を持つ副詞 *trop*

以下に例を挙げる。

母音の前 :

« je\* conclu c'i fôdrat âtr bi-in delica, e **trop** ainmi de\* la pairfaicsion »

Je conclus qu'il faudrait être bien délicat, et trop ennemi de la perfection.

子音の前 :

« i n'âi ce\* **tro** vrai ce\* je pehe contr le\* Sial e an vot prezans. »

Il n'est que trop vrai que je péchais contre le Ciel et en votre présence.

副詞 *beaucoup* は子音の前で 4 例観察され、いずれの例においても語末子音字-p は発音されない。ただし、本コーパスでは母音の前での例は観察されないが、*beaucoup* の発音が *trop* に類似するのであれば、おそらく母音の前では語末子音が発音されることも可能である。

	子音の前	母音の前	休止の前
beaucoup (« bocou » [boku])	4	-	-

表 7-32 : 語末子音字-p ([p])を持つ副詞 *beaucoup*

以下に例を挙げる。

- *beaucoup*

« ecoute avai **bocou** d’atansion sez avairtisman » (IC, p.66)

= écoutez avec **beaucoup** d’attention ses avertissements, et recevez

« ce\* l’on diz **bôcou** de\* hoz an peu de parol e de\* tan. » (NM, p. 33)

= que l’on dise **beaucoup** de choses en peu de paroles et de temps.

7.1.4.4. 語末子音字 *-r* ([r])を持つ副詞

語末子音字に*-r*を持つ副詞には *en particulier* が2例のみ観察された。これらの例はいずれも子音の前で観察され、語末子音字は発音されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
en particulier (« an particulie » [ã partikulie])	3	-	-

表 7-33 : 語末子音字*-r* ([r])を持つ副詞 *en particulier*

以下に例を挙げる。

- *en particulier*

« Je\* vou l’ofr **an particulie** pour N. e N. » (IC, p.56)

= Je vous l’offre **en particulier** pour N. et N.

ただし、母音の前では発音が観察されないため、この副詞が母音の前に位置する場合の発音は不明である。

7.1.4.5. 語末子音字 *-s* ([z])を持つ副詞

語末子音字に*-s*を持つ副詞には、(1) 語末子音字*-s*の直前が母音のもの (-Vs)、(2)語末子音字*-s*の直前が鼻母音のもの (-Ṽs)、(3)および語末子音字*-s*の直前に子音 (-Vrs)の3つのタイプが観察される。

まず、(1) 語末子音字*-s*の直前が母音のタイプ(-Vs)のうち、*plus, jamais, pas, très* は子音の前では語末子音字が発音されないが、母音の前では発音される。これらの副詞はそれぞれ子音の前で « plû », « jamâi », « pa/pâ », « trâi »と綴られるのに対して、母音の前で « pluz », « jamaiz », « paz », « trâiz »のようになる。以下に例数の分布を示した表を挙げる。

	子音の前	母音の前	休止の前
plus (« pluz [plyz] »)	-	10	-
plus (« plû [plu:] »)	30	2 <sup>139</sup>	-
jamaiz (« jamaiz [zamez] »)	-	3	-
jamaiz (« jamâi » [zameɛ])	10	1	5
pas (« paz » [paz])	-	14	-
pas (« pa /pâ» [pa(:)])	44	2	5
très (« trâiz » [trɛ:z])	-	6	-
très (« trâi » [trɛ:])	10	-	-

表 7-34 : 語末子音字-s ([z])を持つ副詞 *plus, jamaiz, pas, très*

以下にこれらの副詞の例をそれぞれ挙げる。

- *plus*

子音の前 :

« La Lang Fransâiz ne srai cazi **plû** sujait o hanjman. » (NM, p.27)

= La Langue Française ne serai quasi **plus** sujette au changemen.

母音の前 :

« I n'a ni livr ni haplai a la min, afin d'âitr **pluz** atantif » (IC, p.40)

= Il n'a ni livre ni chaplet à la main, afin d'être **plus** attentif

- *jamaiz*

子音の前 :

« pars c'il ne\* sra **jamaiz** pairmi slon st'Ortograf de\* le Lir, e de\* le Prononse d'eun ôtr maniair; » (NM, p.23)

= parce qu'il ne sera **jamaiz** permis selon cet Orthographe de les Lire, et de les Prononcer d'une autre manière,

母音の前 :

« **Jamaiz** i ne\* justifira seu ci ne\* voudron paz uze de\* se\* sgrai, » (NM, p.19)

= **Jamaiz** il ne justifira ceux qui ne voudront pas user de ce secret,

休止の前 :

« Non: parc c'il inprim un caractair ci ne\* s'efas **jamâi**. » (IC, p.102)

Non : parce qu'il imprime un caractère qui ne s'efface **jamaiz**.

- *pas*

子音の前 :

« Sainie\*eur, je\* ne\* sui **pa** dinie\* de\* vou rsvoair : » (IC, p.58)

<sup>139</sup> 2例のうち1例は有声の *h* で始まる語である。

Seigneur, je ne suis **pas** digne de vous recevoir :

母音の前 :

« Coai ce\* l'Eglîz n'ai **paz** univairsailman detairmine le\* tan de\* la Confaision annuail, » (IC, p.131)

Quoi que l'Eglise n'ait **pas** universellement déterminé le temps de la Confession anuelle,

休止の前 :

« je\* ne\* conai **pâ**. » (IC, p.63)

je ne connais **pas**.

- **très**

子音の前 :

« e s'âi se\* c'onnn apail la **trâi** sint Trinite. » (IC, p.83)

« et c'est ce qu'on appelle la **très** sainte Trinité. »

母音の前 :

« Non: maiz ail âi **trâiz**-util, » (IC, p.111)

Non : mais elle est **très**-utile,

一方、*bas*, *mieux* は子音および休止の前では発音されず、母音の前における例は観察されない。*puis* に関しては、子音および母音の前での発音が観察されない。また、*assez*, *dessous*, *dessus* に関しては子音の前において発音されないことのみ確認できたが、母音の前での発音の可能性は不明である。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>bas</b> (« ba » [ba])	1	-	1
<b>mieu<del>x</del></b> (« mieu » [miø])	2	-	1
<b>puis</b> (« pui » [pɥi])	6	2	-
<b>assez</b> (« ase » [ase])	3	-	-
<b>dessous</b> (« dsou » [dsu])	1	-	-
<b>dessus</b> (« dsu » [dsy])	4	-	-

表 7-35 : 語末子音字-s ([z])を持つ副詞 (語末子音字が発音されないもの)

次に、(2) 語末子音字-s の直前が鼻母音 (-*Ń*s)の副詞は、*au moins*, *à tout le moins*, *longtemps*, *néanmoins* がある。

まず、*au moins*, *à tout le moins* に関しては、子音の前では語末子音字-s は発音されない。ただし、母音の前ではその発音は常に起こるわけではないようである。例えば、*au moins* は母音の前において 6 例観察されたが、1 例のみでしか語末子音字が発音される発音形 [mwêz]は観察されず、他の 5 例は母音の前においても語末子音字が発音されない発音形

[mwɛ̃]が表れる。また、*à tout le moins* については母音の前でのみ 2 例観察され、それぞれ語末子音字が発音される例が 1 例、語末子音字が発音される例が 1 例ある。以下に例の分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
au moins (« o moinz » [omwɛ̃z])	-	1	-
au moins (« o moïn » [omwɛ̃])	2	5	-
à tout le moins (« a tou le* moinz » [atuləmɔwɛ̃z])	-	1	-
à tout le moins (« a tou le* moïn » [atuləmɔwɛ̃])	-	1	-

表 7-36 : 語末子音字-s ([z])を持つ副詞 *au moins, à tout le moins*

以下に例を示す。

- *au moins*

« Ton Createur rsvrâ **o moïn** a Pâc unblman? » (IC, p.131)

= Ton Créateur recevra **au moins** à Pâcques humblement ?

« Il ordon a tou le fidaïl ci ont atin l'âj de\* discesion de\* comunie **o moïn** eun foai l'an, » (IC, p.131)

= Il ordonne à tous les fidèles qui ont atteint l'âge de discrétion de communier **au moins** une fois

そして、*longtemps, néanmoins* については語末子音字が発音される例は観察されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
longtemps (« lon-tan » [lõtã])	2	-	1
néanmoins (« neanmoïn » [neãmwɛ̃])	-	1	-

表 7-37 : 語末子音字-s ([z])を持つ副詞 *longtemps, néanmoins*

終わりに、(3)および語末子音字-s の直前に子音(-Vrs)がある副詞は、*alors, ailleurs, lors, toujours* が観察された。*Alors, ailleurs, lors* は子音および休止の前で語末子音字-s が発音されることはない。ただし、-s に先行する子音字-r-は常に発音される。母音の前における例が観察されないため、母音の前における発音有無は不明である。

	子音の前	母音の前	休止の前
alors (« alor » [alɔ :r])	1	-	-
ailleurs (« alie*eur » [alœ :r])	-	-	1
lors (« lôr » [lɔ :r])	5	-	-

表 7-38 : 語末子音字-s ([z])を持つ副詞 *alors, ailleurs, lors*

副詞 *toujours* については語末の-s はリエゾンされない。母音の前で表れる語末子音は[r]である。川口 (2010 :141)はこの点について、以下のように述べている。

「Féraud 1761 の辞書では古い伝統的発音が記載されていた。「*Tou-jou, 1<sup>re</sup> brève, 2<sup>e</sup> longue*」で、語末の-r は無音であったが、Littré 以後、語末の-r は発音されるとしている。」

川口 (2010 :141)

また Thurot (1883 : 83)は、以下のように述べている。

*Toujours.* Au témoignage d'H. Estienne, le peuple prononce *toujou*. Cette prononciation est encore prescrite par Milleran (...), Villecomte (...), Mauvillon (...) (« avant une consonne), Féraud, Bouilliette (...), qui dit que l'r « ne se prononce que très rarement ».

Thurot (1883 : 2 : 83)

「*Toujours.* H. Estienne の証言によれば、民衆は *toujou* と発音する。この発音はさらに Milleran、Villecomte、Mauvillon (子音の前で)、Féraud、そして「r は大変稀に発音される」とする Bouilliette によって規定されている。」

母音の前において-rが発音される発音形[tuzur]が 9 例、-rが発音されない発音形[tuzu]が 3 例観察された。子音および休止の前では-rが発音されない発音形がそれぞれ 18 例および 4 例観察された。以下にその分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
toujours (« toujour » [tuzur])	-	9	-
toujours (« toujou » [tuzu])	18	3	4

表 7-39 : 語末子音字-s ([z])を持つ副詞 *toujours*

以下に例を示す。

- *toujours* [tuzur]

« mâi **toujour** an prezans de deuz ou troai temoin. » (IC, p.116)

= mais **toujours** en présence de deux ou trois témoins.

- **toujours** [tuʒu]

« e supôz **toujou** avaic ail la Voaiail e. » (NM, OBSERVATION)

= et suppose **toujours** avec elle la voyelle e.

副詞 *toujours* に対する Milleran の立場は、基本的に子音の前では *-r-* を発音せず、母音の前では発音は特に義務的ではないというものであると解釈できる。

#### 7.1.4.6. 語末子音字 *-t, -d* ([t]) を持つ副詞

語末子音字が *-t* である副詞は、語末音節の特徴によっていくつかのタイプに分けることができる。このタイプとは、(1) 語末子音字が *-t* の直前が長母音のもの、(2) 語末子音字が *-t* の直前が鼻母音のもの、(3) 語末子音字 *-t, -d* の直前に [r] が発音されるもの、(4) 語末子音字の直前が短母音のもの、の 4 つである。

まず、(1) 語末子音字が *-t* の直前が長母音の副詞は、*aussitôt, bientôt, haut, plutôt, sitôt, tôt* が観察された。副詞 *aussitôt, bientôt, sitôt, tôt* に関しては子音の前でのみ観察され、語末子音字が発音されることはない。副詞 *haut* に関しては、休止の前でのみ観察され、語末子音字は発音されない。*Plutôt* は子音の前で 2 例、母音の前で 1 例観察され、どちらの場合にも語末子音字は発音されない。以下に例を挙げる。

	子音の前	母音の前	休止の前
aussitôt ( « ositô » [osito :])	2	-	-
Bientôt ( « bi-intô » [bjêto :])	1	-	-
haut ( « ô » [o :])	-	-	1
plutôt ( « plutô » [plyto :])	2	1	-
sitôt ( « sitô » [sito :])	1	-	-
tôt ( « tô » [to :])	1	-	-

表 7-40 : 語末子音字 *-t, -d* ([t]) を持つ副詞 (直前が長母音のもの)

次に、(2) 語末子音字が *-t* の直前が鼻母音の副詞は、語末子音字が発音されるもの、そして語末子音字が全く発音されないものがある。まず、語末子音字が発音されるものに関しては、語末に *-ment* を持つ副詞(例: *particulièrement*)および *comment* がある。語末に *-ment* を持つ副詞は母音の前で 1 例のみ語末子音字が発音される例が観察される一方、語末子音字が発音されない例が 20 例観察された。子音および休止の前において、語末子音字は発音されない。副詞 *comment* に関しては、母音の前で観察された 8 例のうち 4 例は語末子音字が発音され、残りの 4 例では語末子音字は発音されない。また、子音の前において語末子音字



は発音されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
副詞-ment (« -mant » [mât])	-	1	-
副詞-ment (« -man » [mâ])	70	20	65
comment (« comant » [komât])	-	4	-
comment (« coman » [komâ])	21	4	-

表 7-41 : 語末子音字 *-t, -d* ([t]) を持つ副詞  
(直前が鼻母音であり、母音の前で発音があるもの)

次に、語末子音字が全く発音されない副詞として、*à présent, auparavant, autant, du fond, maintenant, souvent, tant, point* が観察された。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>à présent</i> (« a presan » [aprezã])	2	-	-
<i>auparavant</i> (« oparavan » [oparavã])	2	-	2
<i>autant</i> (« otan » [otã])	4	-	-
<i>du fond</i> (« du fon » [dyfõ])	1	-	-
<i>tant</i> (« tan » [tã])	4	-	-
<i>maintenant</i> (« mintnan » [mêtnã])	2	2	1
<i>souvent</i> (« souvan » [suvã])	1	1	-
<i>point</i> (« poin » [pwê])	28	8	4

表 7-42 : 語末子音字 *-t, -d* ([t]) を持つ副詞  
(直前が鼻母音であり、母音の前で発音がないもの)

*à présent, auparavant, autant, du fond, tant* に関しては、子音および休止の前でのみ観察された。ただし、母音の前で語末子音字が発音されるか否かについては不明である。*Maintenant, souvent, point* に関しては、子音および休止の前では発音されないことが明らかになった一方、母音の前において語末子音字は発音されない。ただし、例数が非常に少ないため、語末子音字の発音が可能か否かについては不明である。

次に、(3)語末子音字 *-t, -d* の直前に [r] が発音される副詞には、*d'abord* および *fort* が観察される。まず、*d'abord* は休止の前で 1 例のみ観察され、語末子音字は発音されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
d'abord (≪ d'abor ≫ [dabo :r])	-	-	1

表 7-43：語末子音字 *-t, -d* ([t]) を持つ副詞

(直前に[r]が発音される副詞 *d'abord*)

副詞 *fort* は母音の前で語末子音字が発音される例が 1 例、子音の前で語末子音字が発音されない例が 1 例観察された。

	子音の前	母音の前	休止の前
fort (≪ fort ≫ [fɔ:r])	-	1	-
fort (≪ for ≫ [fɔ:r])	1	-	-

表 7-44：語末子音字 *-t, -d* ([t]) を持つ副詞

(直前に[r]が発音される副詞 *fort*)

終わりに、(4)語末子音字の直前が短母音の副詞には *tout, partout, surtout* が観察された。まず、*tout* に関しては母音の前において語末子音字は発音され、子音の前では発音されないことが観察される。以下に例の分布を挙げる。

	子音の前	母音の前	休止の前
tout (≪ tout ≫ [tut])	-	6	-
tout (≪ tou ≫ [tu])	17	1 <sup>140</sup>	-

表 7-45：語末子音字 *-t, -d* ([t]) を持つ副詞 *tout*

副詞 *partout, surtout* に関しては、母音の前における例が観察されないため、母音の前における語末子音字の発音は不明のままである。一方、子音および休止の前における語末子音字の発音は観察されない。以下に例の分布を示した表を提示する。

	子音の前	母音の前	休止の前
partout (≪ par tou ≫ [partu])	1	-	3
surtout (≪ sur tou ≫ [syrtu])	1	-	-

表 7-46：語末子音字 *-t, -d* ([t]) を持つ副詞 *partout, surtout*

## 7.1.5. 人称代名詞

### 7.1.5.1. 三人称単数形代名詞 *il*

三人称単数形 *il* は [i] と [iɪ] の 2 つの発音形を持つことが観察された。以下にその分布を表

<sup>140</sup> 後続する語は *h aspiré* で始まる語 *haut* である。

示する。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>il</b> (« il » [il])	7	90	-
<b>îl</b> (« i » [i])	233	13	10

表 7-47：三人称単数形代名詞 *il*

まず、子音の前では発音形 [il] が 7 例に対して、発音形 [i] が 233 例観察された。子音の前における圧倒的な発音形 [i] の例数の豊富から推測すると、発音形 [il] は変則的なものであったと考えられる。これについて川口 (2010 : 130) は以下のように述べている。

「Livet は Claude de Saint-Lien による 16 世紀のフランス語音声学に関する記述を引用して、宮廷人たちは *il vient* や *ils disent* の *-l* を発音しなかったと書いている。こうした *il/i* の変異は社会言語学的な変異であったのかもしれない。」

川口 (2010 : 130)

しかし、Thurot (1883 : 2 : 141-142) に見られる文法家の証言を参考にすると、*il* の発音は文法家によって揺れがある。基本的に子音の前では発音しないという意見が多いが、演説のようなスタイルでは子音の前においても [il] を発音すべきであるというような意見もみられる<sup>141</sup>。

以下に例を挙げる。

- 子音の前

- « Pourcoai l'Évâic frapt-i su la jôu slui c'îl confirm, (IC, p.101)
- = Pourquoi l'Évêque frappe-t-il sur la joue celui qu'îl confirme,
- « c'îl nou gard e nou prezairv de\* tou mal, (IC, p.27)
- = qu'îl nous garde et nous préserve de tout mal,
- « pars c'i sra toujou vrai de\* dir, » (NM, p.23)
- = et parce qu'îl sera toujours vrai de dire,
- « I defan ancor la âin, l'anvî, le\* mepri, » (IC, p.126)

<sup>141</sup> 以下では、Thurot (1883 : 2 : 142) に引用されている Hindret (1687 : 218) の記述を提示する。« l' l du pronom *il* ne se prononce pas ordinairement dans le discours familier (...) Mais dans le discours soutenu il est bien souvent nécessaire de le prononcer (...) » (「*il* の *l* は通常、親しい間柄の会話においては発音されない。しかし、かしこまった会話においてはしばしばこれを発音することが必要となる。」)

= **Il** défend encore la haine, l'envie, le mépris,

次に、母音の前では発音形[il]が 90 例観察され、発音形[i]が 13 例観察された。ところで、倒置疑問文「動詞+i」に母音で始まる語が後続する場合には、発音形[i]が表れる。以下に例を挙げる。

- 母音の前

« **Il** i ann a tro-ais; savo-air, le\* Pair, le\* Fi, e le\* Sint-Espri. » (IC, p.32)

= **Il** y en a trois ; savoir, le Père, le Fils, et le Saint-Esprit.

« **Il** âid o Prâitr a se\* rvaiti, e pran gard c'i sai rvaitu proprman. » (IC, p.40)

= **Il** aide au Prêtre à se revêtir, et prend garde qu'il soit revêtu proprement.

«Coman fôt-**i** aime son prohin? » (IC, p.121)

= Comment faut-**il** aimer son prochain ?

« Pourcoai le\* jêun de\* Carâim at-**i** ete institue? » (IC, p.132)

= Pourquoi le jeûne de Carême a-t-**il** été institué ?

終わりに、休止の前においては発音形[i]のみが表れる。以下に例を挙げる。

- 休止の前

« Insi so-ai t-**i**. » (IC, p.27)

= Ainsi soit-**il**.

« Conbiin i ann at-**i** ? » (IC, p.83)

= Combien y en a-t-**il** ?

7.1.5.2. 主語人称代名詞 *on*

主語人称代名詞 *on* は子音および休止の前において、子音[n]は発音されない。それに対して、母音の前では鼻母音を保持したまま子音[n]が発音されることが観察された。また、倒置疑問文「動詞+on」に母音で始まる語が後続する場合には、母音の前において子音[n]が発音されない。以下に例数の分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>on</b> (« onn » [ɔ̃n])	-	21	-
<b>oñ</b> (« on » [ɔ̃])	83	7	2

表 7-48 : 主語人称代名詞 *on*

以下に例を挙げる。

- 子音の前 :
  - « **On** s'inclin mediocrman » (IC, p.42)
  - = **On** s'incline médiocrement
  - « **On** doit ancor assiste a l'Ofis divin e ôz Instrucion Cretian.» (IC, p.131)
  - = **On** doit encore assister à l'Office divin et aux Instructions Chrétienne.
- 母音の前 :
  - « ce\* l'**onn** apail Atrision. » (IC, p.110)
  - = que l'**on** appelle Attrition.
  - « Cant-**onn** âi pairsecute pour la foai, » (IC, p.102)
  - = Quand-**on** est persécuté pour la foi,
- 休止の前 :
  - « A ci l'ofit-**on**? » (IC, p.108)
  - = À qui l'offre-t-**on** ?
  - « Pourcoai le\* fait-**on**? » (IC, p.137)
  - = Pourquoi le fait-**on** ?

### 7.1.5.3. 三人称複数形代名詞 *ils*

三人称複数形代名詞 *ils* は3つの発音形[i], [iz], [il]を持つことが観察された。まず、子音および休止の前では、発音形[i]が発音される。母音の前では、[iz]もしくは [il]が発音される。本コーパスにおいて、母音の前に三人称単数形 *ils* が位置する例は全体で8例のみ観察され、そのうち6例が[iz]、2例が[i]の発音形で表れた。発音形[iz]は[i]よりも多く、[il]は「*ils ont*」という連辞でのみ使用されている。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>ils</b> (« iz » [iz]) / <b>ils</b> (« il » [il])	-	6/2	-
<b>ils</b> (« i / î » [i(:)])	27	-	5

表 7-49 : 三人称複数形代名詞 *ils*

以下に例を挙げる。

- 子音の前 :
  - « S'âit an se\* c'î particip ô mâim Sacrman. » (IC, p.91)
  - = C'est en ce qu'**ils** participent au même Sacrement.
  - « î manj e î boaiv leu jujman e leu condanasion. »
  - = **ils** mangent et **ils** boivent leur jugement et leur condamnation.

- 母音の前 :

« **Iz** ahaiv de\* lez ecspie par le pâin du Purgatoair, avan c'î jouis de\* la vû de\* Dieu. » (IC, p.136)

= **Ils** achèvent de les expier par les peines du Purgatoire, avant qu'ils jouissent de la vue de Dieu.

« S'âit an se\* c'**il** ont eun sosiete e comunote de\* priair. »

= C'est en ce qu'**ils** ont une société et communauté de prières.

- 休止の前 :

« Ci sont-**i?** » (IC, p.35)

= Qui sont-**ils** ?

#### 7.1.5.4. 三人称複数形代名詞 *elles*

三人称複数形 *elles* は常に[ɛl]という発音形で表れた。つまり、語末子音字-sが発音されない。以下に例数の分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>elles</i> (« ail » [ɛl])	8	5	-

表 7-50 : 三人称複数形代名詞 *elles*

以下に例を挙げる。

- *elles*

« Pars c'**ail ont** eun mâim divinite, e eun mâim natur; » (IC, p.83)

= Parce qu'**elles ont** une même divinité, et une même nature,

« e nouz onoron le Sin, dont **ail port** la rsanblans. (IC, p.122)

= et nous honorons les Saints, dont **elles portent** la ressemblance.

#### 7.1.5.5. 一人称複数形 代名詞 *nous*、二人称複数形 代名詞 *vous*

一人称複数形 *nous*、二人称複数形 *vous* は、子音の前ではそれぞれ[nu], [vu]という発音形で表れる。母音の前では、[nu]/[nuz] および[vu]/[vuz]という発音形が観察される。基本的に、母音の前で[nu], [vu]の発音形で表れる場合には、倒置疑問「動詞+*nous* / *vous*」に母音で始まる語が後続する場合である。

	子音の前	母音の前	休止の前
nous (« nouz » [nuz])	-	82	-
nous (« nou » [nu])	159	10	13
vous (« vouz » [vuz])	-	102	-
vous (« vou » [vu])	188	4	30

表 7-51 : 一人称複数形 代名詞 *nous*、二人称複数形 代名詞 *vous*

#### 7.1.5.6. 代名詞 *leur*

代名詞 *leur* は子音の前では[lø]という発音形で表れ、母音の前では[lør]ではなく、[løz]という発音形で表れる。

	子音の前	母音の前	休止の前
leur (« leuz » [løz])	-	9	-
leur (« leu » [lø])	8	-	-

表 7-52 : 代名詞 *leur*

この[lør]に代わる[løz]という発音形は、既に Kawaguchi (2011)が指摘した間違ったりエゾンと思われる発音である。以下に例を挙げる。

#### - *leur*

子音の前 :

« Non: on ne\* **leu** ran poin le\* cult e l'omaj ci n'âi du c'a Dieu » (IC, p.121)

= Non : on ne **leur** rend point le culte et l'hommage qui n'est dû qu'à Dieu

母音の前 :

« nou ne\* **leuz** adraison pa no priair, » (IC, p.122)

= nous ne **leur** adressons par nos prières,

#### 7.1.5.7. 代名詞 *en*

代名詞 *en* は子音の前では語末子音字が発音されない発音形[ã]が表れ、鼻母音の前では必ず母音が保たれ、語末子音字が発音される発音形[ã̃n]が表れる。この場合には、「ann」と綴られる。語末子音字が発音されない発音形は「an」と綴られ、語末子音字が発音される発音形は[ã̃]である。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>en</b> (« ann » [ãn])	-	52	-
<b>en</b> (« an » [ã])	37	-	-

表 7-53 : 代名詞 *en*

以下に例を挙げる。

- *en*

子音の前 :

« Je\* vous **an** suplî traiz instaman par Not-Sainie\*eur J.C. » (IC, p.60)

= Je vous **en** supplie très instamment par Notre-Seigneur J.C.

母音の前 :

« Si vous **ann** ave le\* tan e la devoision vou pouve ajoute le\* (...) » (IC, p.67)

= Si vous **en** avez le temps et la dévotion vous pouvez ajouter le (...)

7.1.5.8. 代名詞 *les*

代名詞 *les* は子音の前で発音形[le]で表れる。母音の前では語末子音字が発音される[lez]という発音形が観察された。母音の前における語末子音字が発音されない発音形[le]は、命令形「動詞+*les*」に母音で始まる語が後続する場合に表れる。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>les</b> (« lez » [lez])	-	17	-
<b>les</b> (« le » [le])	27	3	-

表 7-54 : 代名詞 *les*

以下に例を提示する。

- 代名詞 *les*

子音の前 :

« Pouvon-nou **le** soulaje dan st'eta? » (IC, p.136)

= Pouvons-nous **les** soulager dans cet état ?

母音の前 :

« J'e rgrai de\* **lez** avoair comi » (IC, p.71)

= J'ai regret de **les** avoir commis

7.1.5.9. 代名詞 *eux, aucun, chacun, quelqu'un*

代名詞 *eux, aucun, chacun, quelqu'un* については、語末子音字が発音される例は観察されな



い。 *eux* については、子音、母音、休止の前で常に[ø]という発音形で観察された。その他の代名詞 *aucun*, *chacun*, *quelqu'un* については、子音の前でのみ観察され、母音の前での発音は不明である。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>eux</i> (« eu » [ø])	2	1	2
<i>aucun</i> (« ocun » [okœ̃])	7	-	-
<i>chacun</i> (« hacun » [ʃakœ̃])	5	-	-
<i>quelqu'un</i> (« cec'eun » [kekœ̃]) <sup>142</sup>	2	-	-

表 7-55 : 代名詞 *eux*, *aucun*, *chacun*, *quelqu'un*

#### 7.1.6. 接続詞

本コーパスで観察された接続詞は *et*, *car*, *mais*, *quand*, *donc* の 5 つである。まず、*et* に関しては語末子音字 *-t* が発音されることはなく、常に[e]という発音で表記された。以下に例数の分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>et</i> (« e » [e])	648	120	-

表 7-56 : 接続詞 *et*

以下に接続詞 *et* の例を示す。

- 子音の前 :  
« pour moi e pour tout vot Eglíz. » (IC, p.59)  
pour moi **et** pour toute votre Eglise.
- 母音の前 :  
« un Côt e eun Âme sanblabl o nôtr. » (IC, p.84)  
un Corps **et** un Âme semblablent au nôtre.

次に、*car* については、語末子音字 *-r* は常に発音されることが観察された。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>car</i> (« car » [kar])	3	-	-

表 7-57 : 接続詞 *car*

<sup>142</sup> *quelque* と同様に *quelqu'un* においても語中子音字 *-l-* は発音されない。

以下に例を挙げる。

- « Oui: **car** s'âi la mâim Ostî e le\* mâim »  
= Oui : car c'est la même hostie et le même

子音の前で安定的に[r]が発音されるのであれば、母音の前においても休止もしくは単独で発音されても、この[r]は常に発音されるものと考えられるだろう。

ただし、*mais*, *quand*, *donc* に関しては母音の前でのみ語末子音字が発音され、子音および休止の前で語末子音字が発音されることはないということが観察された。以下にその分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>mais</i> (« mâiz »[mez])	-	12	-
<i>mais</i> (« mâi » [mɛ])	14	-	-
<i>quand</i> (« cant »[kât])	-	8	-
<i>quand</i> (« can » [kâ])	10	1	-
<i>donc</i> (« donc » [dôk])	-	1	-
<i>done</i> (« don » [dõ])	1	-	-

表 7-58 : 接続詞 *mais*, *quand*, *donc*

以下に接続詞 *mais*, *quand*, *donc* の例を示す。

- ***mais***

子音の前 :

« ou avaic verite, **mâi** san nesaisite. » = ou avec vérité, **mais** sans nécessité. (IC, p.123)

母音の前 :

« **mâiz** on lez onor seulman com se sairviteur e sez ami. »

= **mais** on les honore seulement comme ses serviteurs et ses amis. (IC, p.121)

- ***quand***

子音の前 :

« **Can** le\* fôt-i fâir? » = Quand le faut-il faire ? (IC, p.137)

母音の前 :

« **Cant** âi-se\* c'un pehe âi veniail? » (IC, p.135)

= Quand est-ce qu'un péché est vénial ?

« A peu prâi voaila **can** e coman le Voaiail Hanj » (IC, p.147)

= A peu près voilà quand et comment les Voyelles Changent

- ***donc***

子音の前 :

« Cail âi **don** l'oneur ce\* nou leu randon? »

= Quel est donc l'honneur que nous leur rendons ? (IC, p.122)

母音の前 :

« Pourcoai **donec** âit-ail particulairmant atribue o Pair ? » (IC, p.86)

Pourquoi donc est-elle particulièrement atribué au Père ?

### 7.1.7. 数詞

Vaudelin のフランス語において観察された数詞には *deux*, *trois*, *cinq*, *six*, *sept*, *dix* がある。これらの数詞は基本的に子音の前では語末子音字は発音されず、母音および休止の前では語末子音字が発音される傾向にある。以下に例数の分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>deux</b> (« <b>deuz</b> » [døz], « <b>deus</b> » [døs])	-	4	1
<b>deux</b> (« <b>deu</b> » [dø])	24	2	-
<b>trois</b> (« <b>tro-ais</b> » [trwəs])	-	-	3
<b>trois</b> (« <b>troiai</b> » [trwɛ])	32	-	-
<b>cinq</b> (« <b>sinc</b> » [sɛ̃k])	-	-	2
<b>cinq</b> (« <b>sin</b> » [sɛ̃])	-	-	-
<b>six</b> (« <b>sis</b> » [sis])	-	-	4
<b>six</b> (« <b>si</b> » [si])	1	-	-
<b>sept</b> (« <b>sait</b> » [sɛt])	-	2	2
<b>sept</b> (« <b>sai</b> » [sɛ])	4	-	-
<b>dix</b> (« <b>dis</b> » [dis])	-	-	2
<b>dix</b> (« <b>di</b> » [di])	-	-	-

表 7-59 : 数詞

数詞 *deux* は母音の前では、語末子音が発音される[døz]、もしくは語末子音が発音されない[dø]という発音形が観察された。子音の前では語末子音が発音されない発音形[dø]のみ観察された。休止の前では語末子音は脱落せず、[døs]という発音形が観察された。母音の前で語末子音字が発音されない場合には以下のような例がある。

« **deu** rr ou deu ss, com error, esse, » (IC, p.145)

= **deux** rr ou deux ss, comme error, esse,

数詞 *trois*, *six* は母音の前に位置する例は観察されなかった。休止の前では、語末子音字が

発音される発音形[trwas]および[sis]が観察された<sup>143</sup>。一方、子音の前においては語末子音字が発音されない発音形 [trwa]および[si]が観察された。川口 (2010 :143)は「*trois* や *six* はおそらく *deux* と同じように3つの異なる形態を持っていたと推測される」と述べている。

数詞 *cinq* および *dix* に関しては、休止の前でのみ観察され、語末子音字が発音される発音形[sɛk]および[dis]が観察された。数詞 *sept* は、母音および休止の前で[set]という発音形が観察され、子音の前では語末子音字が発音されない[se]という発音形が観察された。

また、川口 (2010 :143)は数詞 *quatre* の発音について以下のように述べている。

「数詞 *quatre* は、子音の前で *cat hoz=quatre choses, cat maniâir=quatre manières* のように、語末-r が脱落した形態 *cat* で4回出てくるが、一方 *catr* という綴り字が2例みられる。

Il i ann a *catr prinsipô*. IC, p.105.

= Il y en a quatre principaux.

Il i ann a *catr principal*. IC, p. 115.

= Il y en a quatre principales. 」

Vaudelin のフランス語において、子音クラスター-*tre* [tr]は[t]に単純化される傾向にある。例えば、*votre, notre* といった語における子音のクラスター-*tre* [tr]はやはり、[vot]および[not]のように[t]に子音クラスターの単純化が起こる。Thurot (1883 : 2 : 281)に見られる文法書の証言においては、*votre, notre* の語末の子音クラスターの単純化は日常会話において起こるものであると説明されている<sup>144</sup>。

### 7.1.8. 前置詞

前置詞には、語末子音字-*c, -n, -r, -s, -x, -t*を持つものがそれぞれ観察された。以下ではこれらの語末子音字毎に、発音を観察する。

#### 7.1.8.1. 語末子音字 -c ([k])を持つ前置詞

---

<sup>143</sup> Hindret (1687 : 745)を参考にすると、休止の前において *trois* と *six* の語末子音字は発音される。「On fait sonner les consonnes finales des noms de nombre *un, deux, trois, cinq, sept, huit, neuf, dix*, quand ils ne sont point suivis de substantifs, ou quand ils sont relatifs, comme quand on compte, *un, deux, trois*, etc. ou quand on sousentend un substantif precedent par la particule relative *en*. Prononcez donc, en comptant quelque chose, *eunn, deûss, troiss, sink, siss, sett, huitt, neuff, diss (...)*」

<sup>144</sup> 例えば、De la Touche (1696 : 28)は以下のような説明を与えている。「(...) dans le discours familier on ne prononce point l'*r* dans *notre, votre, autre*, quand ils sont joints à un substantif ou à un adjectif qui commencent par une consonne, *notre seigneur, votre serviteur, notre cher maître, une autre chose*, etc.」(「親しい間の会話においては、*notre, votre, autre* に子音で始まる名詞もしくは形容詞が続く場合には、*r* を発音しない。)

語末子音字に-cを持つ前置詞は *avec* である。子音の前で語末の-cが脱落した発音形 [avɛ] (綴り字 « avai ») が一般的である。それに対して母音の前では基本的に語末の-cが発音される発音形[avɛk] (綴り字 « avaik ») が発音される。ただし、子音の前であるのに対して、1例のみ語末の-cが発音される例が観察される。また、母音の前であるのに対して、1例のみ語末の-cが発音されない例が観察された。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>avec</i> (« avaik » [avɛk])	1	19	-
<i>avee</i> (« avai » [avɛ])	68	1	-

表 7-60 : 語末子音字 -c ([k])を持つ前置詞

以下に例を示す。

- *avec*

子音の前 :

« E c'i sai **avai** vot espri. » (IC, p.48)

= Et qu'il soit **avec** votre esprit.

母音の前 :

« **avaic** atansion, e **avaic** eun vrâi piete. » (IC, p.53)

= **avec** attention, et **avec** une vraie piété.

### 7.1.8.2. 語末子音字 -n ([n])を持つ前置詞

語末子音字に-nを持つ前置詞には、*afin*, *selon*, *en* が観察される。*afin* および *selon* は子音の前でのみそれぞれ 16 例、11 例観察される。子音[n]が発音されることはなく、鼻母音だけが発音される。それに対して、*en* が母音の前に表れる例は 19 例観察される。*en* は子音の前では « an » と綴られ、母音の前では鼻母音が保持された上に子音[n]が発音されるため、 « ann » と綴られる。以下に例の分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>afin</i> (« afin » [afɛ̃])	16	-	-
<i>selon</i> (« slon » [slɔ̃])	11	-	-
<i>en</i> (« ann » [ãn])	-	19	-
<i>en</i> (« an » [ã])	210	-	-

表 7-61 : 語末子音字 -n ([n])を持つ前置詞

### 7.1.8.3. 語末子音字 -r ([r])を持つ前置詞

語末子音字が安定的に発音される前置詞には *par*, *pour* がある。これらの前置詞において

語末で必ず[r]が発音される。

	子音の前	母音の前	休止の前
par (« par » [par])	176	19	1
pour (« pour » [pur])	205	35	-

表 7-62 : 語末子音字-r ([r])を持つ前置詞 *par, pour*

以下に例を挙げる。

- *par*

子音の前 :

« Pour glorifie Dieu, e pour li randr grâs **par** Jezu-Cri son Fi. » (IC, p.69)

= Dieu, et pour lui rendre grâce **par** Jésus-Christ Fils.

母音の前 :

« je\* dmeur a vou **par** amour e par eun fidail obeisans a vô Comandman. » (IC, p.75)

= je demeure à vous **par** amour et par une fidèle obéissance à vos commendements.

休止の前 :

« C'antande-vous **par** ; Le vivan e le môr? » » (IC, p.90)

= Qu'entendez-vous **par**; Les vivants et les morts ?

- *pour*

子音の前 :

« S'âit un Sacrman etabli **pour** le\* soulajman spirituail e corporail de malad. » (IC, p113)

= C'est un Sacrement établi **pour** le soulagement spirituel et corporel des malades.

母音の前 :

« Le\* Sacrman de\* la Confirmasiom âit-i nesesaiir absoluman **pour** âitr sôve? » (IC, p.102)

= Le Sacrement de la Confirmation est-il nécessaire absolument **pour** être sauvé ?

前置詞 *sur* は母音の前では語末子音が発音される一方、子音の前では語末子音が発音されないことが観察された。以下にその分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
sur (« sur » [syr])	-	1	-
sur# (« su » [sy])	33	-	-

表 7-63 : 語末子音字-r ([r])を持つ前置詞 *sur*

- *sur*

子音の前 :

« fait **su** vou le\* sinie\* de\* la Croai dizan. » (IC, p. 23)

= faites **sur** vous le signe de la Croix disant.

母音の前 :

« ou an fzan aspairsion **sur** ail, e dizan an mâim tan se parol » (IC, p.98)

= ou en faisant aspersion sur elle, et disant en même temps ces paroles

#### 7.1.8.4. 語末子音字 -s, -x ([z])を持つ前置詞

以下では語末子音字 -s, -x を持つ前置詞について観察を行う。まず、前置詞 *aux*, *après*, *dans*, *dès*, *sans* は子音の前では語末子音字が発音されず、母音の前では語末子音字が発音されることが観察された。以下に例数の分布を示す。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>aux</b> (« oz » [oz])	-	15	-
<b>aux</b> (« o » [o])	34	-	-
<b>après</b> (« apraiz » [aprez])	-	6	-
<b>après</b> (« aprai » [apre])	32	-	-
<b>dans</b> (« danz » [dãz])	-	3	-
<b>dans</b> (« dan » [dã])	147	-	-
<b>dès</b> (« daiz » [dez])	-	2	-
<b>dès</b> (« daî » [de])	3	-	-
<b>sans</b> (« sanz » [sãz])	-	3	-
<b>sans</b> (« san » [sã])	11	-	-

表 7-64 : 語末子音字 -s, -x ([z])を持つ前置詞 (母音の前での発音あり)

以下に例を挙げる。

- **aux**

子音の前 :

« Not Pair ci ait **ô** Sieu... » (IC, p.138)

= Notre Père qui est **aux** Cieux...

母音の前 :

« Se\* son sêu ci negligij d'asiste **ôz** Ofis Divin, » (IC, p.125)

= Ce sont ceux qui négligent d'assister **aux** Offices Divins,

- **après**

子音の前 :

« **APRAI** LA COMUNION. » (IC, p.73)

= **APRÈS** LA COMMUNION.

母音の前 :

« Anfin **apraiz** avoair declare tô vo pehe e repondu ô dmand du Confaisseur finise insi. » (IC, p.65)

= Enfin **après** avoir déclaré tous vos péchés et répondu aux demandes du Confesseur finissez ainsi.

- **dans**

子音の前 :

« vouz âit adorabl **dan** tou vo Mistâir. » (IC, p.54)

= vous êtes adorable **dans** tous vos Mystères.

母音の前 :

« De\* vivr ansanbl **danz** eun sint sosiete. » (IC, p.116)

= De vivre ensemble **dans** une sainte société.

- **dès**

子音の前 :

« Ri-in n'anpâih de\* la pairfaicsione **dâi** mintnan c'ôn le\* peu fair. » (NM, p.25)

= Rien n'empêche de la perfectionner **dès** maintenant qu'on le peut faire.

母音の前 :

« S'âit a dir ce\* vou rainie\*ie **dâiz** a prezan dan no cœur par la grâs, » (IC, p.116)

= C'est à dire que vous régniez **dès** à présent dans nos coeurs par la grâce,

- **sans**

子音の前 :

« se\* c'onnn apail parjur; ou avaic verite, mâi **san** nesaisite. »

= ce qu'on appelle parjure ; ou avec vérité, mais **sans** nécessité.

母音の前 :

« eun Raigl jeneral e sairtain pour Ortografie **sanz** anbarâ, » (NM, p.16)

= une règle générale et certaine pour Orthographier **sans** embarras,

次に、*auprès, envers, hors, sous, vers* は子音の前でのみ観察され、語末子音字は全く発音されない。母音の前においてこれらの前置詞は観察されないため、母音の前での語末子音字の発音有無は不明である。



	子音の前	母音の前	休止の前
auprès (« oprai » [opɾɛ])	3	-	-
envers (« anvair » [ãvɛr])	9	-	-
hors (« or » [ɔ:r])	3	-	-
près (« prai » [prɛ])	1	-	-
sous (« sou » [su])	14	-	-
vers (« vair » [vɛr])	3	-	-

表 7-65 : 語末子音字-s ([z])を持つ前置詞 *auprès, envers, hors, près, sous, vers*

興味深い前置詞として *depuis* がある。川口 (2010 :137)はこの前置詞について、「一顧に価する。子音前でこの前置詞は dpui の綴り字で 6 例表れる。母音前の例は 1 つも無い。ところが子音前であるのに、語末子音-s を保持している例が見つかる」と述べている。以下に、前置詞 *depuis* の発音形の分布を提示する。

	子音の前	母音の前	休止の前
depuis (« dpuis » [dpuis])	1	-	-
depuis (« depui » [dpuɪ])	6	-	-

表 7-66 : 語末子音字-s ([z])を持つ前置詞 *depuis*

以下に、例を挙げる。

- *depuis* (子音の前)

« Je vou remairsi de tout le grâs ce vou m'ave fait *dpuis ce* vous m'ave cree jusc'a mintnan »  
(IC, p.36)

= Je vous remercie de toutes les grâces que vous m'avez faites **depuis que** vous m'avez créé jusqu'à maintenant

前置詞 *depuis* に限っては語末子音字が子音の前で未だに脱落していなかったことも以上の例から考えられる。

#### 7.1.8.5. 語末子音字 -t ([t])を持つ前置詞

語末子音字に-t を持つ前置詞 *devant* および *durant* については、一般的に子音の前では語末子音字が発音されず、母音の前では語末子音字が発音される傾向が観察された。ただし *devant* が母音の前に位置する例は合計で 13 例あるが、そのうち 9 例で語末子音字の発音が観察され、残りの 4 例では語末子音字の発音は観察されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
devant (« dvant » [dvât])	-	9	-
devant <sup>t</sup> (« dvant » [dvât])	19	4	1
durant (« durant » [dyrât])	-	1	-
durant <sup>t</sup> (« duran » [dyrât])	4	-	-

表 7-67 : 語末子音字-*t* ([t])を持つ前置詞 *devant, durant*

以下に例を示す。

- *devant*

子音の前 :

« e s'il pâs **dvant** le\* Sin Sacman i fai la reverans. » (IC, p.40)

= et s'il passe **devant** le Saint Sacrement il fait la révérence.

母音の前 :

« o comansman du mo, e **dvant** eun Voyaiail se\* pronons toujours Egz. » (IC, p.149)

= au commencement du mot, et **devant** une Voyelle se prononce toujours Egz.

« **Dvan** eun seul Conson, ci n'âi pa final. » (IC, p.146)

= **Devant** une seule Consonne, qui n'est pas finale.

- *durant*

子音の前 :

« s'âi le\* jour ôcaïl Dieu se\* rpoza apraiz avoir cree tout hôz **duran** sî jour » (IC, p.124)

= c'est le jour auquel Dieu se reposa après avoir crée toute chose **durant** si jour »

母音の前 :

« **durant** un Rainie\* si florisan e si poli » (NM, p.25)

= **durant** un Règne si florissant et si poli

次に、前置詞 *quant* については « *quant au* » という連辞で語末子音字が発音される発音形が観察された。

	子音の前	母音の前	休止の前
quant (« cant » [kât])	-	1	-

表 7-68 : 語末子音字-*t* ([t])を持つ前置詞 *quant*

前置詞 *avant, moyennant, pendant* については、子音の前でのみ観察され、語末子音字は発音されない。母音の前での例がないため、母音の前における発音は不明である。

	子音の前	母音の前	休止の前
avant (« avan » [avã])	9	-	-
moyennant (« moaiianan » [mwajenã])	1	-	-
pendant (« pandan » [pãdã])	11	-	-

表 7-69 : 語末子音字-t ([t])を持つ前置詞 *avant*, *moyennant*, *pendant*

### 7.1.9. 動詞

#### 7.1.9.1. 屈折形

##### 7.1.9.1.1. 一人称単数形

動詞の一人称単数形における語末子音字-s は、子音、母音および休止の前で発音される例は観察されない。これらの動詞が母音の前に位置する例は合計で 9 例観察されたが、語末子音字の発音は観察されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
bénis (« beni » [beni])	-	-	1
conclu (« conclu » [kõklu])	1	-	-
connais (« conai » [kone])	1	-	-
crois (« crai » [kre])	11	4	1
fais (« fai » [fẽ])	2	-	-
entends (« antan » [ãtã])	18	-	-
omets, mets, remets (« omâi » [ome], « mai » [me], « rmai » [rme] )	7	-	1
obtiens (« obtiain » [obtiẽ])	1	-	-
reconnais (« rconai » [rkone])	-	2	-
rends (« ran » [rã])	1	-	-
repens (« rpan » [rpã])	1	-	-
sais (« sai » [se])	1	-	-
souviens (« souviin » [suvjẽ])	1	-	-
vais (« vai » [ve])	3	-	-
veux (« veu » [vø])	2	-	-
viens (« viin » [vjẽ])	1	-	-
dois (« doai » [vwe])	1	-	-
suis (« sui » [sqi])	12	3	1

接続法 <i>sois</i> (« soai » [swɛ])	1	-	-
条件法 <i>-rais</i> (« -raî » [-rɛ])	1	-	-
半過去 <i>-ais</i> (« -aî » [-ɛ])	3	-	1

表 7-70 : 一人称単数形

以下に例を挙げる。

- *suis*

子音の前 :

« je\* ne\* **sui** pa dinie\* de\* vou rsvoir » (IC, p.58)

= je ne **suis** pas digne de vous recevoir

母音の前 :

« Mon biinn aime âit a moai, e je\* **sui** a lui. » (IC, p.73)

= Mon bien aimé est à moi, et je **suis** à lui.

休止の前 :

« anfin je\* vouz ofr tou se\* ce\* je\* **sui**, » (IC, p.75)

= enfin je vous offre tout ce que je **suis**,

7.1.9.1.2. 二人称単数形

本コーパスにおいて動詞の二人称単数形の例は多いとはいえない。まず、*vivre* の接続法二人称単数形 *vives* は子音の前に位置する例が観察されたが、語末子音字は発音されない。未来形については、母音の前では 9 例中 2 例において語末子音字の発音が観察され、子音および休止の前ではこの語末子音字は発音されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>vives</i> (« viv » [viv])	1	-	-
未来形 <i>-ras</i> (« -raz » [-raz])	-	2	-
<i>-ras</i> (« -râ » [-ra :])	12	7	9

表 7-71 : 二人称単数形

以下に例を挙げる。

- *vives*

子音の前 :

« Afin ce\* **vive**\* longe\*man. » (IC, p.26)

= Afin que **vives** longuement.

- 未来形

子音の前 :

« Le\* biin d'ôtrui tu ne\* **prandrâ** ni rtiindrâ a ton aisian? » (IC, p.127)

= Le bien d'autrui tu ne **prendras** ni retiendras à ton escient.

母音の前 :

« Ne\* **re\*ti-indraz** a ton ai si-an. » (IC, p.26)

= Ne retiendras à ton essient.

« Le\* biin d'ôtrui tu ne\* prandrâ ni **rtiindrâ** a ton aisian? » (IC, p.127)

= Le bien d'autrui tu ne prendras ni **retiendras** à ton escient.

休止の前 :

« Dieu an vîn tu ne\* **jure\*râ**, » (IC, p. 26)

= Dieu en vain tu ne **jureras**,

### 7.1.9.1.3. 三人称単数形

三人称単数形については、基本的に語末子音字は子音および休止の前では発音されない。母音の前では語末子音字-t [t]が発音される場合と発音されない場合と両方観察される。以下に挙げる表は、母音の前で語末子音字の発音が観察された動詞および活用語尾である。

	子音の前	母音の前	休止の前
appartient (« apartiint » [apartjêt])	-	1	-
appartient (« apartiin » [apartjê])	-	1	-
commet (« comait » [komet])	-	2	-
commet (« comai » [kome])	-	2	-
défend (« defant » [defât])	-	5	-
défend (« defan » [defã])	13	5	1
fait (« fait » [fet])	-	8	-
fait (« fai » [fɛ])	13	4	2
remet (« rmait » [rmet])	-	2	-
remet (« rmai » [rme])	5	-	-
rend (« rant » [rât])	-	1	-
rend (« ran » [rã])	3	-	-
sert (« sairt » [se:rt])	-	1	-
sert (« sair » [sɛ:r])	1	1	-
C'est (« s'ait » [set])	-	68	-
C'est (« s'ai » [sɛ])	87	-	5
est (« ait » [ɛt])	-	66	-
est (« ai » [ɛ])	242	-	1
doit (« doit » [dwet])	-	11	-

doi <del>t</del> (« doai » [dwɛ])	5	1	-
faut (« fôt » [fo:t])	-	26	-
fau <del>t</del> (« fô » [fo:])	19	-	1
peut (« peut » [pøt])	-	14	-
peu <del>t</del> (« peu » [pø])	15	2	-
produit (« produit » [prodʒit])	-	1	-
être 接続法 soit (« soait » [swɛt])	-	11	-
soit <del>t</del> (« soai » [swɛ])	21	3	2
条件法 -rait (« -rait » [rɛt])	-	3	-
-rai <del>t</del> (« -rai » [rɛ])	4	2	1
半過去 -ait (« -aît » [ɛt])	-	1	-
-ai <del>t</del> (« -ai » [ɛ])	18	1	3
単純過去 -ut (« -ut » [-yt])	-	1	-
-u <del>t</del> (« -u » [y])	3	1	-

表 7-72 : 三人称単数形 (母音の前での発音あり)

以下の表に示す動詞では語末子音字が子音、母音、休止の前において発音が観察されないものである。

	子音の前	母音の前	休止の前
adouci <del>t</del> (« adousi » [adusi])	1	-	-
affaibli <del>t</del> (« afaibli » [afɛbli])	-	1	-
appartien <del>t</del> (« apartiin » [apartjɛ̃])	-	1	-
connai <del>t</del> (« conâi » [konɛ])	2	-	-
contien <del>t</del> (« contiin » [kõtjɛ̃])	2	-	-
converti <del>t</del> (« convairti » [kõverti])	-	1	-
déplai <del>t</del> (« deplai » [deplɛ])	-	-	1
descend <del>t</del> (« desand » [desã])	1	-	-
devien <del>t</del> (« dviin » [dvjɛ̃])	1	-	-
di <del>t</del> (« di » [di])	3	2	2
écri <del>t</del> (« ecri » [ekri])	1	-	-
exclu <del>t</del> (« esclû » [esklu:])	1	-	-
géri <del>t</del> (« geri » [geri])	1	-	-
me <del>t</del> , promet <del>t</del> (« -mai » [-mɛ])	-	1	1
meur <del>t</del> (« meur » [mœ:r])	1	-	-

paraît (« parâi » [parɛ])	1	1	-
parît (« par » [par])	1	-	-
plainît (« plain » [plɛ̃])	1	-	-
plaiît (« plâi » [plɛ:])	-	-	2
prendît (« pran » [prɑ̃])	4	-	-
reçoit (« rsoai » [rswɛ])	1	3	-
réduit (« redui » [redɥi])	1	-	-
répondît (« repon » [repɔ̃])	2	-	2
retient (« rtiin » [rtjɛ̃])	1	-	-
réuniît (« reuni » [reyni])	1	-	-
revient (« rviin » [rvjɛ̃])	-	1	-
s'ouvriît (« s'ouvri » [s'uvri])	2	-	-
uniît, s'uniît (« uni » [yni])	1	2	-
suffiît (« sufi » [syfi])	1	-	-
suppliît (« supli » [sypli])	1	-	-
tientiît (« tiin » [tjɛ̃])	2	-	-
tresailliît (« tresaili » [treseli])	1	-	-
veutiît (« veu » [vø])	13	-	-
vientiît (« viin » [vjɛ̃])	8	1	-
voitiît (« voai » [vwɛ])	2	-	-
avoir 接続法 aiît (« aî » [ɛ:])	1	-	-

表 7-73：三人称単数形（母音の前での発音無し）

活用語尾が-e の三人称単数形が倒置疑問文に含まれる場合には、動詞と人称代名詞の間に-tが挿入され、[t]が発音される。

	子音の前	母音の前	休止の前
倒置疑問文挿入子音 -t-	-	60	-

表 7-74：倒置疑問文挿入子音 -t-

以下に例を挙げる。

- 倒置疑問 -t-

母音の前：

« Pourcoai l'Évâic frapt-i su la jôu slui c'il confirm, » (IC, p.101)

= Pourquoi l'Évêque frappe-t-il sous la joue celui qu'il confirme,

#### 7.1.9.1.4. 一人称複数形

一人称複数形においては、一般的に子音、母音、休止の前での語末子音字-s [z]の発音は観察されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
現在形 <b>-ons</b> (« on » [ɔ̃])	46	10	15
半過去 <b>-ions</b> (« -ion » [-jɔ̃])	4	2	-
単純未来 <b>-rons</b> (« -ron » [-ɔ̃])	3	-	-
条件法 <b>-ions</b> (« -ion » [-jɔ̃])	1	1	-
接続法 <b>ayons</b> (« aion » [ɛjɔ̃])	2	-	-
<b>sommes</b> (« som » [som])	2	2	-

表 7-75 : 一人称複数形

以下に例を挙げる。

- **現在形-*ons***

子音の前 :

« S'âit-un pehe ce\* nou **comaiton** par not prop volonte (...) » (IC, p.134)

= C'est-un péché que nous **commettons** par notre propre volonté (...)

母音の前 :

« **Alon** o dvan de\* Jezu-Cri: » (IC, p.56)

= **Allons** au devant de Jésus-Christ :

休止の前 :

« Cail âi don l'oneur ce\* nou leu **randon** ? » (IC, p. 122)

= Quel est donc l'honneur que nous leurs **rendons** ?

ただし、*être* の接続法形 *soyons* では母音の前において 1 例のみ語末子音字が発音される例が観察された。

	子音の前	母音の前	休止の前
<b>être</b> 接続法 <i>soyons</i> (« saionz » [sejɔ̃z])	-	1	-
<i>soyons</i> (« saion » [sejɔ̃])	1	-	-

表 7-76 : 一人称複数形 *être* 接続法

以下に例を示す。

- **接続法 *soyons***

子音の前 :



«E afin ce\* nou **saïion** dinie\* de\* vouz ofri le\* Côt e le\* San de\* Jezu-Cri » (IC, p.55)

= Et afin que nous **soyons** digne de vous offrir le Corps et Sang de Jésus-Christ

母音の前 :

« Non, i fô ce\* nouz i **saïionz** ecsite e aide par un mouvman interieur du Sint-Espri. » (IC, p.94)

= Non, il faut que nous y **soyons** excités et aidés par un mouvement intérieur du Saint-Esprit.

#### 7.1.9.1.5. 二人称複数形

二人称複数形は一般的に子音および休止の前では語末子音字が発音されない。二人称複数形は以下に挙げる、語尾に *-ez* を持つ現在形においては母音の前で 3 例、*avoir* の現在形 *avez* では 1 例、そして、*être* の接続形 *soyez* では 3 例、母音の前で語末子音[z]が発音される例が観察される。動詞 *aller* の単純過去形 *allâtes* は母音の前に位置する例が 1 例観察されるが、語末子音字は発音されない。以下にその分布を示す。

		子音の前	母音の前	休止の前
現在形	-ez (« -ez » [-ez])	-	3	-
	-e <del>z</del> (« -e » [-e])	187	14	16
<i>avoir</i> 現在形	avez (« avez » [avez])	-	1	-
	ave <del>z</del> (« ave » [ave])	29	7	-
<i>être</i> 接続法	soyez (« saïiez » [sejez])	-	3	-
	soye <del>z</del> (« saïie » [seje])	5	-	-
<i>aller</i> 単純過去	allâtes (« alat » [alat])	-	1	-

表 7-77 : 二人称複数形

以下に例を示す。

子音の前 :

« Sainie\*eur, **aprne**-nou a vou prie, » (IC, p.49)

= Seigneur, **aprenez**-nous à vous prier,

母音の前 :

« e **alumez**-i le\* feu de\* vot amour. » (IC, p. 36)

= et **allumez**-y le feu de votre amour.

« e vou me\* **prepare** a la vî etairnail. » (IC, p.74)

= et vous me **préparez** à la vie éternelle.

休止の前 :

« **Rsve**, Sainiie\*ur, se\* sacrifis de min de\* vot Prâitr, » (IC, p. 56)

= **Recevez**, Seigneur, ce sacrifice des mains de votre Prêtre,

### 7.1.9.1.6. 三人称複数形

三人称複数現在形-ent、avoirの現在形ont、êtreの現在形sont、faireの現在形font、条件法-raient、単純未来-rontの語末子音字-tは基本的に子音および休止の前では発音されず、母音の前においては発音される。また、allerの現在形vont、êtreの接続法soientは母音の前でのみ、それぞれ1例および2例観察され、語末子音字の発音が観察される。以下にその分布を示す。

		子音の前	母音の前	休止の前
現在形	-ent	-	3	-
	-ent̥	72	22	13
avoir 現在形	ont (« ont » [ɔ̃t])	-	13	-
	ont̥ (« on » [ɔ̃])	13	-	-
être 現在形	sont (« sont » [sɔ̃t])	-	14	-
	sont̥ (« son » [sɔ̃])	63	-	-
faire 現在形	font (« font » [fɔ̃t])	-	2	-
	font̥ (« fon » [fɔ̃])	5	-	-
条件法	-raient (« -rait » [-rait])	-	1	-
	-raient̥ (« -rai » [-rai])	3	1	-
単純未来	-ront (« -ront » [-rɔ̃t])	-	3	-
	-ront̥ (« -ron » [-rɔ̃])	10	2	3
aller 現在形	vont (« -vont » [-vɔ̃t])	-	1	-
être 接続法	soient (« sâit » [sɛ:t])	-	2	-

表 7-78：三人称複数形（母音の前での発音あり）

半過去形-aientは子音および母音の前に位置する例が観察されるが、語末子音字が発音されないことが観察される。また、avoirの接続法aient、faireの接続法fassentは子音の前に位置する例が観察されるが、語末子音字が発音されない。以下にその分布を示す。

		子音の前	母音の前	休止の前
半過去形	-aient̥ (« âit » [ɛ:])	5	2	-
avoir 接続法	aient̥ (« âit » [ɛ:])	2	-	-
faire 接続法	fassent̥ (« fas » [fas])	1	-	-

表 7-79：三人称複数形（子音および母音の前での発音なし）

三人称複数形の例を以下に示す。

子音の前：

« mâi sêu ci le\* **neglij** se\* **rand** coupabl de\* pehe, » (IC, p.102)

= mais ceux qui le **negligent** se **rendent** coupables de péchés,

母音の前 :

« Il ordon a tou le fidail ci **ont** atin l'âj de\* discesion (...) » (IC, p. 131)

= Il ordonne à tous les fidèles qui **ont** atteint l'âge de discrétion (...)

« Il i ann a troai ci **inprim** ancor un Caractâir ; » (IC, p.94)

= Il y en a trois qui **impriment** encore un Caractère;

休止の前 :

« Santifie seu ci vou l'**ofr**. » (IC, p. 57)

= Sanctifiez ceux qui vous l'**offrent**.

### 7.1.9.2. 過去分詞

ここで過去分詞として扱うのは、動詞 *être* もしくは *avoir* と共起し、過去を示すものである。過去分詞の語末が子音字で終わる場合には、*-s* もしくは *-t* の語末子音字である。以下では、それぞれ語末子音字 *-s* の過去分詞および語末子音字 *-t* の過去分詞の発音を観察する。

#### 7.1.9.2.1. 語末子音字 *-s*

語末子音字が *-s* である過去分詞は基本的に子音および休止の前では発音されない。また、母音の前においても語末子音字 *-s* が発音される例は観察されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
admis (« admi » [admi])	1	-	-
commis (« comi » [komi])	1	4	2
mis (« mi » [mi])	2	-	-
permis (« pairmi » [permi])	-	1	-
pris (« pri » [pri])	1	-	2
promis (« promi » [promi])	-	-	2
性・数一致 <b>-s, -es</b>	1	1	7

表 7-80 : 語末子音字 *-s* の過去分詞

以下に例を挙げる。

子音の前 :

« e nouz aiant **admi** dan la sal du faistin, » (IC, p. 49)

= et nous ayant **admis** dans la salle du festin,

母音の前 :

« ce\* vous ave **comi** un tail pehe tan de\* foai. » (IC, p.65)

= que vous avez **commis** un tel péché tant de fois.

休止の前 :

« ce\* l'onn a **comi**, avaic un fairm propô de\* n'i plû rtonbê. » (IC, p.109)

= que l'on a **commis**, avec un ferme propos de n'y plus retomber.

#### 7.1.9.2.2. 語末子音字 -t

語末子音字が-tである過去分詞については、子音の前および休止の前において発音されることはない。ただし、*fait* および *joint* に限っては母音の前で発音される例が観察され、*écrit*, *mort*, *satisfait*, *souffert* が母音の前に位置する例では語末子音字の発音は確認されなかった。以下に例数の分布を示した表を挙げる。

	子音の前	母音の前	休止の前
fait (« fait » [fɛt])	-	7	-
fai# (« fai » [fɛ])	9	-	-
joint (« joint » [ʒwɛ̃t])	-	1	-
atteint (« atin » [atɛ̃])	2	-	-
di# (« di » [dit])	2	-	1
écrit (« ecri » [ekri])	-	1	-
mort (« mor » [mɔ:r])	-	-	2
offer# (« ofair » [ofɛ:r])	1	-	-
satisfait (« satisfai » [satisfɛ])	-	1	1
souffert (« soufair » [sufɛ:r])	-	4	1

表 7-81 : 語末子音字 -t の過去分詞

以下に例を挙げる。

子音の前 :

« dpui ce\* nouz avon **atin** l'uzaj de\* la raizon. » (IC, p.134)

= depuis que nous avons **atteint** l'usage de la raison.

母音の前 :

« Pourcoai s'âit-i **fait** Om? » (IC, p.84)

= Pourquoi s'est il **fait** homme ?

« Se\* son se parol c'ail a **joint** a sail de\* L'Anj e d'Elizabait » (IC, p.140)

= Ce sont ces paroles qu'elle a **joint** à celles de L'Ange et d'Elisabeth

休止の前 :

« le rezolusion ce\* vous i ave **priz**; » (IC, p.69)

= les résolutions que vous y avez **prises**;

### 7.1.9.3. ジェロンディフ

ジェロンディフの語尾は-*ant* である。基本的に語末子音字-*t* [t]は子音および休止の前では発音されない。また、母音の前においては語末子音字が発音される例が4例のみ確認される。ただし、他の29例では語末子音字は母音の前において発音されない。

	子音の前	母音の前	休止の前
-ant («-ant » [-ãt])	-	3	-
-ant («-an » [-ã])	91	29	15

表 7-82 : ジェロンディフ

以下に例を挙げる。

子音の前 :

« Aprâi sla, **aian** l'Espri afile e le\* ceur contrin e umilie, » (IC, p.102)

= Après cela, **ayant** l'Esprit affligé et le coeur contraint et humilié,

母音の前 :

« e an **soufran** avai joâi pour l'amour de\* Dieu (...) » (IC, p. 101)

= et en **souffrant** avec joie pour l'amour de Dieu (...)

« e nouz **aiant** admi dan la sal du faistin » (IC, p.49)

= et nous **ayant** admis dans la salle du festin,

休止の前 :

« **Detaistan**, vô pehe, » (IC, p. 72)

= **Détestant**, vos péchés,

### 7.1.9.4. 不定詞

不定詞は *avoir* および語尾が-*voir* で終わるものは語末子音字-*r* が、子音、母音および休止の前で常に発音される。以下に本コーパスで観察された例数を示した表を挙げる。

	子音の前	母音の前	休止の前
avoir (« avoir » [avoε:r])	33	11	-
-voir (« -voir » [-voε:r])	26	15	17

表 7-83 : 不定詞-*voir*

以下に例を挙げる。

子音の前 :

« mâiz ail le\* dispoz a **rsvoair** la grâs de\* la justificasion par l’Absolusion (...)» (IC, p.110)

= mais elle le dispose à **recevoir** la grâce de la justification par l’Absolusion (...)

母音の前 :

« Pour lez **avo-air** injuste\*man. » (IC, p. 26)

= Pour les **avoir** injustement.

休止の前 :

« Ou doit-on le\* **rsvoair**? » (IC, p. 116)

= Où doit-on le **recevoir** ?

次に、不定詞の語尾-*er* および-*ir* は語末子音字-*r* は、後続する要素にかかわらず発音されることはない。以下に本コーパスで観察された例数を示した表を挙げる。

	子音の前	母音の前	休止の前
-e# (« -e » [-e])	191	81	53
-i# (« -i » [-i])	39	13	12

表 7-84 : 不定詞-*er*, -*ir*

以下に例を挙げる。

子音の前 :

« Pour **anonse** la-môr de\* Jezu-Cri: » (IC, p.69)

= Pour **annoncer** la-mort de Jésus-Christ :

« E afin ce\* nou saïion dinie\* de\* vouz **ofri** le\* Côt e le\* San de\* Jezu-Cri (...) » (IC, p.55)

= Et afin que nous soyons digne de vous **offrir** le Corps et Sang de Jésus-Christ (...)

母音の前 :

« pour **asiste** a la sint Mais. » (IC, p.55)

= pour **assister** à la sainte Messe.

« e d’**obei** a tôu vo Comandman pandan le\* raist de\* ma vî. » (IC, p.63)

= et d’**obéir** à tous vos Commandements pendant le reste de ma vie.

休止の前 :

« pour **soutni**, pour **proteje**, pour **vizite**, » (IC, p.48)

= Pour **soutenir**, pour **protéger**, pour **visiter**,

#### 7.1.10. 語末子音字の発音のまとめ

本節で観察した、子音、母音および休止の前における語末子音字の発音について簡略に要約する。基本的に語末子音字-*t*, -*d*, -*n*, -*s*, -*x*, -*p* は子音および休止の前では発音されないが、母音の前においては発音を期待することができる。ただし、数詞は少々特殊であり、*deux*,

*trois, cina, six, sept, dix* の語末子音字は休止の前においても発音されることが観察された。次に、*-f* を語末子音字に持つ語は *attentif, boeuf, chef* しか観察されない。*attentif* は母音の前で [f] が発音され、*boeuf* は休止の前で [f] が発音され、そして *chef* については子音、母音および休止の前で常に発音されることが観察された。*-f* を語末に持つ他の語が観察されないことは大変残念である。

語末子音字 *-c, -g, -r, -l* については少し様相が異なる。まず、*-c, -g* の発音有無については以下のような表にまとめることができる。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>blanc</i>	-	?	?
<i>estomac, long</i>	?	?	-
<i>sang</i>	-	-	-
<i>grec, public</i>	+	+	+
<i>donc</i>	-	+	?
<i>avec</i>	-/+	-/+	?

表 7-85：語末子音字 *-c, -g* の発音分布

*blanc, estomac, long, sang* については本コーパスにおいて語末子音字の発音は観察されない。一方、*grec, public* については語末子音字は常に発音される。*donc* については子音の前では発音されないが、母音の前では発音される。*avec* については子音の前では基本的に語末子音字は発音されず（例外 1 例あり）、母音の前では発音される（例外 1 例あり）。よって、*-c, -g* を語末子音字に持つ語は、語によって語末子音字の発音有無の分布が異なるということである。

次に、語末子音字 *-r* についても、語によって語末子音字の発音有無の分布は異なる。以下にその分布を示した表を提示する。

	子音の前	母音の前	休止の前
冠詞 <i>leur</i>	-	+	?
前置詞 <i>sur</i>	-	+	?
不定詞 <i>-voir</i>	+	+	+
名詞および形容詞 <i>-air, -er, -eur, -oir, -or, -our, -ur, -yr, -ir</i>	+	+	+
<i>monsieur</i>	-	?	?
<i>avenir, plaisir</i>	-	-	-
接続詞 <i>car</i>	+	?	?

前置詞 <i>par, pour</i>	+	+	+
不定詞 <i>-er, -ir</i>	-	-	-
副詞 <i>en particulier</i>	-	?	?

表 7-86：語末子音字-rの発音分布

まず、冠詞 *leur* および前置詞 *sur* は子音の前では発音されないが、母音の前では発音される。語末子音字が安定的に発音されるのは、不定詞-*voir* および-*air, -er, -eur, -oir, -or, -our, -ur, -yr, -ir* を語末に持つ名詞および形容詞である。ただし、*monsieur* は休止の前において語末子音字が発音されず、母音および休止の前における語末子音字の発音は不明である。また、*avenir* および *plaisir* は子音、母音および休止の前で語末子音字は発音されない。次に、接続詞 *car* は子音の前において常に発音される。前置詞 *par, pour* の語末子音字は子音、母音および休止の前で常に発音される。*-er, -ir* を語末にもつ不定詞の語末子音字は全く発音されない。そして、副詞 *en particulier* は子音の前において語末子音字は発音されない、また母音および休止の前における語末子音字の発音は不明である。

終わりに、-*l*については、これも語によって語末子音字の有無の分布が異なることが明白である。

	子音の 前	母音の 前	休止 の前
<i>auquel, le quel, quel</i>	+	+	+
<i>travail, oeil, réveil, vil, péril</i>	+	?	+
名詞、形容詞 <i>-al, -el, -eul, -ul</i>	+	+	+
副詞 <i>mal</i>	?	+	?
代名詞 <i>il</i>	-/+	-/+	-

表 7-87：語末子音字-lの発音分布

まず、*auquel, le quel, quel* および-*al, -el, -eul, -ul* を持つ名詞および形容詞は基本的に常に発音される。また、*travail, oeil, réveil, péril* については子音および休止の前でのみ観察され、語末子音字は子音[k]として発音されるようである。また、副詞 *mal* は母音の前でのみ発音が観察され、子音[l]が発音される。代名詞 *il* については子音の前では基本的に語末子音字は発音されず（例外 7 例）、母音の前では基本的に発音され（例外 13 例）、休止の前では語末子音字は発音されない。

## 7.2. リエゾンの分析

### 7.2.1. リエゾン子音

リエゾン子音ごとのリエゾンの実現数を観察すると、いくつかの点に気づくことができる。まず、コンテキスト数が多いものと少ないものとある。例えば、最もコンテキスト数



が多いのは、リエゾン子音[z]は 795 個のコンテキスト、次に多いのがリエゾン子音[t]の 660 個のコンテキストである。また、リエゾン子音[n]のコンテキスト数は 261 例と少なくなる。さらに、リエゾン子音[l]が表れるコンテキストは 105 例ある。リエゾン子音[r], [p], [k]はそれぞれ、15 例、1 例、22 例と、コンテキスト数はかなり少数である。

[t]	[z]	[n]
69,24% (457/660)	61,51% (489/795)	62,45% (163/261)
[r]	[p]	[k]
77,78% (14/18)	100% (1/1)	90,91% (20/22)
[l]		
87,62% (92/105)		

表 7-88：リエゾン子音毎のリエゾン実現率

最もリエゾン実現率が高いのはリエゾン子音[p]であり、100%のリエゾン実現率である。次に、リエゾン実現率が高いのはリエゾン子音[k]であり、リエゾン実現率は 90,91%である。また、リエゾン子音[l]および[r]は、リエゾン実現率がそれぞれ 87,62%および 77,78%とかなり高い値を示している。リエゾンの実現率が 60%台に落ち込むのは、リエゾン子音[t], [z], [n]であり、それぞれ 69,24%、61,51%、62,45%という値が得られた。リエゾン子音[t], [z], [n]およびリエゾン子音[r], [p], [k], [l]の大きな違いは、これらの語末子音を持つ語彙の種類の豊富さである。以下では、Vaudelin コーパスにおけるリエゾン子音[r], [p], [k], [l]およびリエゾン子音[t], [z], [n]を持つ語彙の特徴を観察する。

### 7.2.1.1. リエゾン子音[r], [p], [k], [l]

リエゾン子音[r]を持つ語は、副詞 *toujours*、形容詞 *dernier* および *premier*、前置詞 *sur*、冠詞 *leur* である。最も例数が多いのは副詞 *toujours* であり、形容詞 *dernier*, *premier* は合計で 3 例、冠詞 *leur* は 2 例、前置詞 *sur* は 1 例のみである。

	品詞	L	NL	Total	%	リエゾンが実現された例に占める割合
<i>toujours</i>	副詞	9	3	12	75,00%	64,29%
<i>premier, dernier</i>	形容詞	2	1	3	66,67%	14,29%
<i>leur</i>	冠詞	2	0	2	100%	14,29%
<i>sur</i>	前置詞	1	0	1	100%	7,14%
<b>Total</b>		<b>14</b>	<b>4</b>	<b>18</b>	<b>77,78%</b>	<b>100%</b>

表 7-89：リエゾン子音[r]を持つ語彙

冠詞 *leur* および前置詞 *sur* は例数が 2 例および 1 例と少ないが、リエゾンでは全ての例において実現される。副詞 *toujours* および形容詞 *dernier, premier* においてはリエゾンの実現が常に起きるわけではない。

次に、リエゾン子音[p]は副詞 *trop* が 1 例のみ観察され、リエゾンが 100%実現される。

	品詞	L	NL	Total	%	リエゾンが実現された例に占める割合
<i>trop</i>	副詞	1	1	1	100%	100%

表 7-90：リエゾン子音[p]を持つ語彙

リエゾン子音[k]を持つ語彙は、前置詞 *avec*、接続詞 *donc*、名詞 *sang* である。最も例数が多いのは前置詞 *avec* であり、その他の語彙はそれぞれ 1 例のみである。

	品詞	L	NL	Total	%	リエゾンが実現された例に占める割合
<i>avec</i>	前置詞	19	1	20	95%	95%
<i>donc</i>	接続詞	1	0	1	100%	5%
<i>sang</i>	名詞	0	1	1	0%	0%
<b>Total</b>		<b>20</b>	<b>2</b>	<b>22</b>	<b>90,91%</b>	<b>100%</b>

表 7-91：リエゾン子音[k]を持つ語彙

リエゾン子音[l]を持つ語は、人称代名詞 *il* および *ils* である。三人称単数形代名詞 *il* の例数が圧倒的に多いといえる。

	品詞	L	NL	Total	%	リエゾンが実現された例に占める割合
<i>il</i>	代名詞	90	13	103	87,38%	97,83%
<i>ils</i>	代名詞	2	0	2	100%	2,17%
<b>Total</b>		<b>92</b>	<b>13</b>	<b>105</b>	<b>87,62%</b>	<b>100%</b>

表 7-92：リエゾン子音[l]を持つ語彙

リエゾン子音[r], [p], [k], [l]を持つ語の種類は大変少数であることが以上で明らかになった。また、これらのリエゾン子音は基本的にリエゾンの実現率が比較的高いといえる。

#### 7.2.1.2. リエゾン子音[t]

以下では、リエゾンが実現された例全体に占める割合が高い上位 12 例の語、そのリエゾ

ン実現率、そしてリエゾンがされた例全体に占める割合を以下の表に示す。

	品詞	L	NL	Total	%	リエゾンが実現された 例に占める割合
<i>c'est</i>	動詞	69	0	69	100%	15,10%
<i>est</i>	動詞	66	0	66	100%	14,44%
倒置- <i>t</i>	動詞	51	0	51	100%	11,16%
<i>saint</i>	形容詞	46	1	47	97,87%	10,07%
<i>faut</i>	動詞	26	0	26	100%	5,69%
<i>fait</i>	動詞	20	5	25	80%	4,38%
<i>peut</i>	動詞	14	2	16	87,50%	3,06%
<i>sont</i>	動詞	14	0	14	100%	3,06%
<i>cet</i>	冠詞	13	0	13	100%	2,84%
<i>ont</i>	動詞	13	0	13	100%	2,84%
<i>doit</i>	動詞	11	1	12	91,67%	2,41%
<i>soit</i>	動詞	11	3	14	78,57%	2,41%
その他		103	191	294	35,03%	22,54%
<b>Total</b>		<b>457</b>	<b>203</b>	<b>660</b>	<b>69,24%</b>	<b>100%</b>

表 7-93：リエゾン子音[t]を持つ語彙

リエゾンが実現した全体例 453 例に占める割合において、これらの上位語の多くは三人称単数形の屈折形(*c'est, est, faut, fait, peut, sont, doit, soit, 倒置-t*)であることがまず特徴の一つである。三人称複数形の屈折形(*ont*)も上位語に含まれるが、これは三人称単数形と比較すると必ずしも例が多いとはいえない。しかし、リエゾン子音[t]が、3人称の形態素を表示するという傾向があることは明らかである。動詞以外には、形容詞 *saint* と冠詞 *cet* も上位語に含まれる。形容詞 *saint* に関しては、Vaudelin がキリスト教の祈祷の発音を記述したため、このような形容詞の頻度が高いと考えられる。

### 7.2.1.3. リエゾン子音[z]

リエゾン子音[z]のリエゾンが実現される例全体に占める割合が高い上位 10 例の語、そのリエゾン実現率、そしてリエゾンがされた例全体に占める割合を以下の表に示す。

	品詞	L	NL	Total	%	リエゾンが実現された例が占める割合
<i>les</i>	冠詞	107	3	110	97,27%	<b>21,88%</b>
<i>vous</i>	代名詞	102	4	106	96,23%	<b>20,86%</b>
<i>nous</i>	代名詞	82	10	92	89,13%	<b>16,77%</b>
<i>des</i>	冠詞	27	0	27	100%	<b>5,52%</b>
<i>ses</i>	冠詞	16	0	16	100%	<b>3,27%</b>
<i>aux</i>	前置詞	15	0	15	100%	<b>3,07%</b>
<i>pas</i>	副詞	14	2	16	87,50%	<b>2,86%</b>
<i>mais</i>	接続詞	12	0	12	100%	<b>2,45%</b>
<i>mes</i>	冠詞	11	0	11	100%	<b>2,25%</b>
<i>plus</i>	副詞	11	3	14	78,57%	<b>2,25%</b>
その他		<b>92</b>	<b>285</b>	<b>377</b>	<b>24,40%</b>	<b>18,82%</b>
<b>Total</b>		<b>489</b>	<b>306</b>	<b>795</b>	<b>61,51%</b>	<b>100%</b>

表 7-94：リエゾン子音[z]を持つ語彙

以上の表から明らかなことはいくつかある。まず、リエゾン子音[z]のリエゾンが実現された例全体に占める割合が高い語の多くは、冠詞(*les, des, ses, mes*)、代名詞(*vous, nous*)、前置詞(*aux*)、副詞(*pas, plus*)、接続詞(*mais*)である。特に、冠詞(*les, des, ses, mes*)、代名詞(*vous, nous*)は、リエゾン子音[z]が複数性を示す形態素として機能し、かなり規則的にリエゾンが実現されると考えられる。

#### 7.2.1.4. リエゾン子音[n]

以下では、リエゾン子音[n]のリエゾンが実現された例全体に占める割合が高い上位 10 例の語、そのリエゾン実現率、そしてリエゾンが実現された例全体に占める割合を以下の表に示す。

	品詞	L	NL	Total	%	リエゾンが実現された例が占める割合
代名詞 <i>en</i>	代名詞	52	0	52	100%	31,90%
<i>on</i>	代名詞	21	7	28	75,00%	12,88%
<i>un</i>	冠詞	21	7	28	75,00%	12,88%
前置詞 <i>en</i>	前置詞	19	0	19	100%	11,66%
<i>mon</i>	冠詞	17	0	17	100%	10,43%
<i>son</i>	冠詞	16	0	16	100%	9,82%
<i>bien</i>	冠詞	12	1	13	92,31%	7,36%
<i>bon</i>	形容詞	2	4	6	33,33%	1,23%
<i>ton</i>	冠詞	2	0	2	100%	1,23%
<i>rien</i>	副詞	1	1	2	50%	0,61%
その他		0	78	78	0%	0%
<b>Total</b>		<b>163</b>	<b>98</b>	<b>261</b>	<b>62,45%</b>	<b>100%</b>

表 7-95：リエゾン子音[n]を持つ語彙

リエゾン子音[n]のリエゾンの実現に占める割合が高い語は代名詞(*en, on*)、冠詞(*un, mon, son, ton*)、前置詞(*en*)、形容詞(*bon*)、副詞(*rien*)である。そして、それ以外の語のリエゾンの実現率は0%である。よって、リエゾン子音[n]は限定された語においてのみ実現されるといえる。また、これらの語の品詞は、代名詞、冠詞、前置詞のように単独で発話を構成することがない機能語であり、これらの語のリエゾンの実現はかなり規則的に起こるものである。リエゾンが実現されない語の品詞の多くは名詞である。

### 7.2.2. 音節の長さ

音節の長さがリエゾンの実現に与える影響を観察するため、まずは以下の表にリエゾン実現率を示す。

	単音節			複数音節		
	L	NL	%	L	NL	%
[t]	386	38	91,04%	71	165	30,08%
[z]	462	71	86,68%	27	235	10,31%
[n]	163	31	84,02%	0	67	0%
[r]	1	0	100%	11	15	73,33%
[p]	1	0	100%	-	-	-
[k]	1	1	50%	19	1	95%
[l]	92	105	87,62%			
<b>Total</b>	<b>1108</b>	<b>246</b>	<b>81,83%</b>	<b>128</b>	<b>483</b>	<b>20,85%</b>

表 7-96 : 語の長さ

以上の表をみると、単音節語のリエゾン実現率は 81,93%であり、複数音節語のリエゾン実現率は 20,16%である。この結果から基本的に単音節語では、複数音節語に比べてリエゾンが実現しやすいことが明らかである。またリエゾン子音[k]を除けば、単音節語のリエゾンの実現率は 80%以上であり、比較的リエゾンの実現率が高いといえる。複数音節語の中で最もリエゾンの実現率が高いリエゾン子音は[k]であるが、これは前置詞 *avec* である。複数音節語であってもリエゾンの実現率が高いこの語は、音節数の影響を受けず、むしろ後続語との統語的結束性が影響しているといえる。

### 7.2.3. 音節の種類

以下では、MOT 1 の語末音節の種類がリエゾンの実現にどのように影響するのかを考察する。ここでも Milleran コーパスと同様に、音節を母音で終わる開音節と、子音で終わる閉音節に分類する。つまり、開音節はリエゾン子音が発音されない場合に母音で終わる語末音節のことを指し、閉音節はリエゾン子音が発音されない場合に子音で終わる語末音節のことを指す。音節の種類にはまず、母音で終わる開音節と、子音で終わる閉音節がある。開音節の母音の下位分類として、口母音と鼻母音の 2 つの分類を設ける。次に、閉音節の下位分類として、母音+[r]のもの、母音+[r]以外の子音、母音+子音+無音の *e* (ə) という 3 つの分類を設けた。

これら語末音節の種類それぞれのリエゾン実現率を算出すると、以下のようなグラフが得られる。

		L	NL	Total	%
開音節	口母音	902	229	1131	79,75%
	鼻母音	298	240	538	55,39%
閉音節	母音+子音(+無音の e (ə))	34	120	154	22,08%
	母音+ [r]	2	35	37	5,41%
	母音+ [r]以外の子音	0	2	2	0%

表 7-97：音節の種類

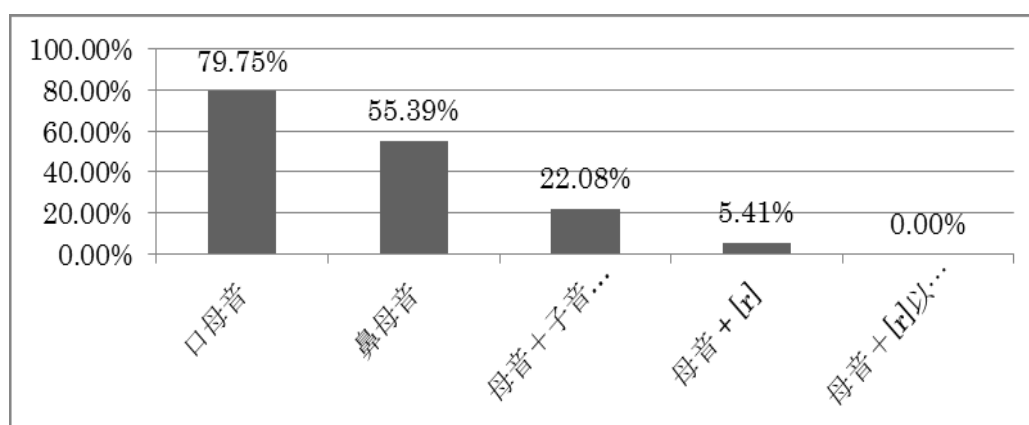


図 7-1：音節の種類

最もリエゾンの実現率が高いのは、口母音で終わる語末音節を持つ語のグループで、リエゾン実現率は 79,75%である。その次に、リエゾン実現率が高いのは、鼻母音で終わる語末音節を持つ語のグループであり、リエゾン実現率は 55,39%である。よって、この結果から語末に開音節を持つ語がよりリエゾンが実現しやすいことは明白である。閉音節を持つ語のグループについては、最もリエゾンが実現するのは、母音+子音 (+無音の e) を語末音節を持つ語のグループで、リエゾンの実現率は 22,08%である。母音+[r]を語末に持つ語のグループにおいては、リエゾン実現率は 5,41%とかなり低い値となる。母音+[r]以外の子音を語末音節として持つ語のグループではリエゾンの実現が観察されない。

さらに、開音節と閉音節という音節構造の違いを単純な二項対立に還元した場合、以下の表のような結果が得られる。

	L	NL	Total	%
開音節	1200	469	1669	71,90%
閉音節	36	157	193	18,65%

表 7-98：音節の種類（開音節 vs 閉音節）

開音節の語は 71,90%、閉音節の語は 18,65%のリエゾン実現率を示し、やはり開音節語にお

いてリエゾンの実現頻度が高いことが明らかである。

#### 7.2.4. 統語的結束性

以下では、統語的結束性がリエゾンの実現に与える影響を観察する。第六章での Milleran コーパスの分析と同様に、本節ではまず MOT1 の品詞に焦点を置き、名詞句、動詞句、前置詞句、副詞、接続詞、代名詞におけるリエゾンの実現を観察する。また、MOT2 がアルファベットおよび接続詞(*et, ou*)であるコンテキストにおけるリエゾンの実現を観察する。終わりに、「名詞+動詞」という主語と動詞が隣接したリエゾンコンテキストについて観察する。

##### 7.2.4.1. 名詞句

###### 7.2.4.1.1. 冠詞+名詞

本節では *des, les, ces, mes, ses, nos, vos, leurs, mon, ton, son, leur, quelques* の 13 個の冠詞とその後続後である名詞におけるリエゾンの実現を観察する。

まず、以下に「冠詞+名詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率を以下に表の形で示す。

「冠詞+名詞」	L	NL	Total	%
<i>des</i>	26	0	26	100%
<i>les</i>	68	0	68	100%
<i>ces</i>	2	0	2	100%
<i>mes</i>	9	0	9	100%
<i>ses</i>	15	0	15	100%
<i>nos</i>	8	0	8	100%
<i>vos</i>	8	0	8	100%
<i>leurs</i>	5	0	5	100%
<i>cet</i>	10	0	10	100%
<i>mon</i>	17	0	17	100%
<i>ton</i>	2	0	2	100%
<i>son</i>	16	0	16	100%
<i>un</i>	12	0	12	100%
<i>leur</i>	1	0	1	100%
<i>quelques</i>	0	1	1	0%
<b>Total</b>	<b>199</b>	<b>1</b>	<b>200</b>	<b>99,50%</b>

表 7-99: 「冠詞+名詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率

*quelques* を除くと、「冠詞+名詞」のコンテキストでは常にリエゾンが実現し、リエゾンの



実現率の平均は 99.50%である。ところで、Vaudelin コーパスと比較すると、Milleran のコーパスにおける「冠詞+名詞」のリエゾンはそれほど安定的ではない。また、Vaudelin コーパスおよび Milleran コーパスに共通するのは、*quelques* のような語末が閉音節の語のリエゾン子音[z]が必ずしも発音されないことである。この点については第 8 章で考察を行う。

#### 7.2.4.1.2. 冠詞+形容詞

「冠詞+形容詞」のコンテキストにおいてリエゾンの実現率は全体で 86.67%である。

	L	NL	Total	%
<i>des</i>	1	0	1	100%
<i>les</i>	2	0	2	100%
<i>mes</i>	1	0	1	100%
<i>ses</i>	1	0	1	100%
<i>cet</i>	1	0	1	100%
<i>un</i>	6	0	6	100%
<i>leur</i>	1	0	1	100%
<i>quelques</i>	0	2	2	0%
<b>Total</b>	<b>13</b>	<b>2</b>	<b>15</b>	<b>86,67%</b>

表 7-100 : 「冠詞+形容詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率

「冠詞+名詞」のコンテキストと同様に、*quelques* を除くと、「冠詞+形容詞」のコンテキストでは常にリエゾンが実現する。*quelques* は後続する語とのリエゾンが全く義務的ではなかったと推測できる。

#### 7.2.4.1.3. 「数詞+形容詞」、「数詞+名詞」

本節では、「数詞+形容詞」、「数詞+名詞」という統語コンテキストにおけるリエゾンの実現を観察する。数詞のリエゾンコンテキストは本コーパスにおいて、数が多いとは決して言えない。

	L	NL	Total	%
「数詞 + 前置形容詞」	1	0	1	100%
「数詞 + 名詞」	2	0	2	100%

表 7-101 : 「数詞+形容詞」、「数詞+名詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率

以上の表からも明らかなように、「数詞+前置形容詞」、「数詞+名詞」のコンテキストにお

いて、リエゾンは常に実現される。また、これらの数詞は、*deux* および *sept* である。

#### 7.2.4.1.4. 形容詞+名詞

##### 7.2.4.1.4.1. 単数形

「単数形形容詞+単数形名詞」のコンテキストは、語末子音字に *-n*, *-t*, *-d*, *-s*, *-x*, *-r* を持つ形容詞に名詞が後続するものが観察され、リエゾンは常に実現される。

	L	NL	Total	%
「単数形形容詞+単数形名詞」	52	0	52	100%

表 7-102: 「単数形形容詞+単数形名詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率

以下に、「単数形形容詞+単数形名詞」の例および例数を提示する。

語末子音字	例	例数
<i>-n</i>	<i>bon ange</i>	2
<i>-t, -d</i>	<i>saint Ange</i>	1
	<i>saint-Esprit</i>	41
	<i>saint-Evangile</i>	1
	<i>saint Hostie</i>	1
	<i>saint Eglise</i>	1
	<i>second état</i>	1
<i>-s, -x</i>	<i>pieux écrivain</i>	1
	<i>mauvais usage</i>	1
<i>-r</i>	<i>dernier article</i>	1
	<i>premier être</i>	1

表 7-103: 「単数形形容詞+単数形名詞」コンテキストの例

以下に例を示す。

- *bon*

« mon **bon Anj** aide moi » (IC, p. 60) [mɔ̃ **bon** ɑ̃ʒ ede mwɛ]

= mon *bon Ange* aidez moi.

- *second*

« ce\* se\* **sgont eta** ne\* sai plû funaist ce\* le\* pmie.» (IC, p. 67)

= que ce **second état** ne sois plus funeste que le premier

[kə sə **sgɔ̃t eta** nə soit plus funeste aue le pmie]

#### 7.2.4.1.4.2. 複数形

複数形形容詞の語末子音字は-s もしくは-x である。本コーパスにおいて、「複数形形容詞+複数形名詞」のコンテキストは 16 例観察された。そのうち 12 例においてリエゾンが実現され、リエゾンの実現率は 75% である。

	L	NL	Total	%
「複数形形容詞 -s, -x + 複数形名詞」	12	4	16	75%

表 7-104 : 「複数形形容詞 -s, -x + 複数形名詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率

リエゾンの実現有無は語末音節の構造に依存する可能性をここで考察したい。

リエゾン実現あり	開音節	<i>beaux arts,</i> <i>beaux esprits,</i> <i>bons amis,</i> <i>bons avis,</i> <i>mauvais exemples,</i> <i>saints Anges,</i> <i>facheux inconvénients,</i> <i>petits inconvénients</i>
	閉音節	<i>jeunes enfants</i>
リエゾン実現なし	閉音節	<i>mauvaises habitudes,</i> <i>pauvres artisans,</i> <i>saintes écritures,</i> <i>très-humbles actions</i>

表 7-105 : 「複数形形容詞 -s, -x + 複数形名詞」コンテキストの例

以上の表から、明らかなことはいくつかある。第一に、リエゾンの実現がある形容詞の多くは、語末が開音節の語である。そして、これらの語ではリエゾンが常に実現する。一方、語末が閉音節の語は 5 例 (*jeunes, mauvaises, pauvres, saintes, humbles*) 観察され、1 例のみリエゾンが実現する。

- *mauvaises*

« Travailie\*e a detruir le **mo**vai**z** abitud. » (IC, p.109)

= Travailler à détruire les **mauvaises** habitudes

[travaʎe a detruʎir le movez habitud]

- **pauvres**

« anvaïr tan de\* **pôvr** Artizân, e de\* » (NM, p. 8)

= envers tant de **pauvres** Artisans, et de

[ãvɛr tã də po:vɛr artiã e də]

- **jeunes**

« pour le **jeunz** Anfan. » (IC, p. 33)

= pour les **jeunes** enfants

[pur le ʒønz ãfã]

上記の例 *mauvaises* および *pauvres* は語末が閉音節の語である。リエゾンコンテキストにある形容詞と名詞の間には、リエゾン子音[z]の実現が期待されるが、[z]は発音されない。つまり、形容詞の語末子音([z]および[r])が安定的に発音されるが、複数形の形態素-s は子音[z]として発音されないということである。ただし、語 *jeunes* ([ʒønz])は語末において子音が安定的に発音される語であるが、複数形の-s がリエゾン子音[z]として発音される。ここで、Vaudelin の語末子音に関する次のような記述が想起される。

「語末の子音字は『発音の文字』であり、単語の意味に役立つことはなく、  
2つの母音が接触することを回避し発音を和らげるために加えられる」  
(NM. p.10)

複数形を表す[z]のリエゾンが実現されない理由として考えられるのは、語末の安定的子音によって母音接続が回避されているためであり、それ以上に[z]のリエゾン子音が実現される必要がないということも考えられる。

#### 7.2.4.1.5. 名詞+後置形容詞

##### 7.2.4.1.5.1. 単数形

「単数形名詞+単数形形容詞」のコンテキストでは、いずれの例でもリエゾンは実現されない。

	L	NL	Total	%
「単数形名詞+ 単数形形容詞」	0	30	30	0%

表 7-106: 「単数形名詞+単数形形容詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率

現代フランス語では、名詞に形容詞が後置する場合には、複合語を除いた場合に通常では、リエゾンは禁止的である。以下に例を挙げる。

「単数形名詞+ 単数形形容詞」	« Sainie*eur, done le* <i>rpô etairnail</i> » (IC. p.39) = Seigneur, donnez le <i>repos éternel</i> [sɛ̃nøʁ, done lə rpo: etɛʁnɛl]
--------------------	--

表 7-107 「単数形名詞+単数形形容詞」 コンテキストの例

#### 7.2.4.1.5.2. 複数形

次に、「複数形名詞+複数形形容詞」のコンテキストは13例観察され、リエゾンの実現しない。

	L	NL	total	%
複数形名詞+複数形形容詞	0	13	13	0%

表 7-108: 「複数形名詞+複数形形容詞」 コンテキストにおけるリエゾン実現率

複数形である場合には、複数形を表す綴り字-s および-x が子音[z]として発音され、リエゾンが実現されることが可能であることが考えられるが、そのようなリエゾンの実現は本コーパスにおいて観察されない。以下に例を示す。

- 「複数形名詞+複数形形容詞」  
« le *pâin etairnail* e tanporail. » (IC. p.97) [le pɛ:n etɛʁnɛl e tãporel]  
= les *peines éternels* et temporels.

よって、Vaudelin の記述したフランス語において、「複数形名詞+複数形形容詞」のコンテキストにおけるリエゾンの実現は特に必要ではないということである。

#### 7.2.4.1.6. 名詞句におけるリエゾンのまとめ

名詞句におけるリエゾンの特徴として、「限定辞（冠詞および数詞）+名詞」、「限定辞（冠詞および数詞）+形容詞」、「形容詞+名詞」のように、名詞とその先行語におけるリエゾン実現率は、99,50%、93,75%、94,12%というかなり高い確率である。その一方で、「名詞+形容詞」のように、名詞とその後続語におけるリエゾンの実現率は0%である。

		L	NL	Total	%
「限定辞+名詞」	冠詞+名詞	199	1	200	99,50%
	数詞+名詞	1	0	1	100%
	「限定辞+名詞」	200	1	201	99,50%
「限定辞+形容詞」	冠詞+形容詞	13	2	15	86,67%
	数詞+形容詞	2	0	2	100%
	「限定辞+形容詞」	15	1	16	93,75%
「形容詞+名詞」	形容詞+名詞 (単数形)	52	0	52	100%
	形容詞+名詞 (複数形)	12	4	16	75%
	「形容詞+名詞」	64	4	68	94,12%
「名詞+形容詞」	名詞+形容詞 (単数形)	0	30	30	0%
	名詞+形容詞 (複数形)	0	13	13	0%
	「名詞+形容詞」	0	43	43	0%
名詞句全体		279	50	329	84,80%

表 7-109 名詞句におけるリエゾン実現率

「形容詞+名詞」の統語的コンテキストにおいては、単数形ではリエゾンの実現率が 100% であるのに対して、複数形ではリエゾンの実現は絶対的ではなく、リエゾンの実現率は 75% である。複数形の場合には、複数形の形態素-s および-x のリエゾン子音[z]が常に発音されるわけではない。終わりに、「名詞+形容詞」のコンテキストでは単数形および複数形に関わらず、リエゾンの実現は全くといって観察されない。

#### 7.2.4.2. 動詞句

動詞句におけるリエゾンについては、屈折形、過去分詞、ジェロンディフに分けて分析を行う。

##### 7.2.4.2.1. 屈折形

###### 7.2.4.2.1.1. 後続語の種類による違い

動詞の屈折形と後続語のリエゾンは後続語の種類によって異なる傾向が観察された。以下に後続語ごとのリエゾン実現率を示した表を提示する。

	L	NL	Total	%
代名詞	169	1	170	99,41%
冠詞 ( <i>un, une</i> )	49	5	54	90,74%
形容詞	26	11	37	70,27%

過去分詞	16	7	23	69,57%
不定詞	16	9	25	64,00%
副詞	18	16	34	52,94%
前置詞	48	65	113	42,48%
接続詞 ( <i>et, ou</i> )	0	13	13	0%
名詞	0	4	4	0%
動詞	0	3	3	0%
<b>Total</b>	<b>342</b>	<b>134</b>	<b>476</b>	<b>71,85%</b>

表 7-110 動詞の屈折形におけるリエゾンの実現率

動詞の屈折形におけるリエゾンは後続語の種類によって、リエゾンの実現率が異なることが観察された。本コーパスにおいて「動詞+代名詞」、「動詞+冠詞」のコンテキストにおいて、リエゾンはそれぞれ 99,41%および 90,74%の確率で実現され、これはかなり高い実現率であるといえる。その一方で、「動詞+接続詞」、「動詞+名詞」、「動詞+動詞」のようなコンテキストではリエゾンは観察されない。

- 「動詞+代名詞」

リエゾンの実現がある例：

« e **alumez**-i le\* feu de\* vot amour. » (IC, p.36)

= et **allumez**-y le feu de votre amour.

リエゾンの実現がない例：

« ne\* **dezinie**\*an ocun de\* sêu ci **peuv** i avoair u pâ, » (IC, p.65)

= ne désignant aucun de ceux qui **peuvent** y avoir eu part,

- 「動詞+冠詞」

リエゾンの実現がある例：

« S'âit an se\* c'il **ont** eun sosiete e comunote de\* priaïr. » (IC, p.91)

= C'est en ce qu'ils **ont** une société et communauté de prière.

« S'âit un sinie\* sansibl institue par Not-Sainie\*eur JEZU-CRI » (IC, p.33)

= C'est un signe sensible institué par Notre Seigneur JESUS-CHRIST

リエゾンの実現がない例：

« on ne\* rsoai pa la remision de\* se pehe, e on **comai** un sacrilaj. » (IC, p. 111)

= on ne reçoit pas la rémission de ces péchés et on **commet** un sacrilège.

« **dit** eun parol, e mon âm sra gerî. » (IC, p.68)

= **dites** une parole, et mon âme sera guéri.

- 「動詞+接続詞」

リエゾンの実現がない例：

« **Prononse** e considere toujou l'Y graic com l'I latin. » (IC, p.142)

= **Prononcez** et considérez toujours l'Y grèc comme l'I latin.

- 「動詞+名詞」

リエゾンの実現がない例：

« e ci nou **fai** anfan de\* Dieu e de\* l'Eglîz. » (IC, p. 34)

= et qui nous **fait** enfants de Dieu et de l'Eglise.

- 「動詞+動詞」

リエゾンの実現がない例：

« l'Absolusion ce\* l'on **rsoai** ogmant la grâs an nou. » (IC, p.112)

= l'Absolusion que l'on **reçoit** augmente la grâce en nous.

#### 7.2.4.2.1.2. 人称の違いによるリエゾン実現率の比較

以下では人称の違いによるリエゾン実現率の違いを比較する。まず、以下にそれぞれの人称のリエゾン実現率を記した表を提示する。

	L	NL	Total	%
一人称単数形	0	9	9	0%
二人称単数形	2	7	9	22,22%
三人称単数形	293	36	329	89,06%
一人称複数形	1	15	16	6,25%
二人称複数形	7	40	47	14,89%
三人称複数形	39	27	66	59,09%
<b>Total</b>	<b>342</b>	<b>134</b>	<b>476</b>	<b>71,85%</b>

表 7-111: 各人称におけるリエゾンの実現率

まず、一人称単数形については、コンテキストが9例観察されるが、リエゾンの実現は0%である。次に、二人称単数形、二人称複数形および一人称複数形では、それぞれ 22,22%、14,89%、6,25%とリエゾンの実現率はかなり低い。最もリエゾンの実現率が高いのは三人称単数形で、89,06%のリエゾン実現率が観察される。また、三人称複数形のリエゾン実現率は 59,09%である。この結果からすぐにわかることは、リエゾン子音[t]の実現が期待される三人称単数形および複数形におけるリエゾンの実現率は、リエゾン子音[z]の実現が期待されるその他の人称のものに比べて高いということである。

#### 7.2.4.2.2. 過去分詞

過去分詞とその後続語のリエゾンの実現率は 50%であり、実現率が高いとはいえない。



	L	NL	Total	%
過去分詞	8	8	16	50%

表 7-112: 過去分詞におけるリエゾン実現率

リエゾンが実現したのは、「過去分詞+名詞」、「過去分詞+前置詞」のコンテキストのみである。「過去分詞+名詞」のコンテキストは 6 例観察され、リエゾンが常に実現される。ただし、このコンテキストは、常に「疑問副詞+s'est-il **fait** homme?」という連辞である。「過去分詞+前置詞」のコンテキストは 9 例観察され、そのうちの 2 例でのみリエゾンが実現する。そして、「過去分詞+冠詞」のコンテキストは 1 例のみ観察され、リエゾンの実現が観察されない。またリエゾンが実現するのは語末子音字に-t を持つ過去分詞のみである。

	L	NL	Total	%
名詞	6	0	6	100%
前置詞	2	7	9	22,22%
冠詞	0	1	1	0%
<b>Total</b>	<b>8</b>	<b>8</b>	<b>16</b>	<b>50%</b>

表 7-113: 後続語の種類による過去分詞のリエゾン実現率

以下に例を提示する。

- 「過去分詞+名詞」

リエゾンの実現がある例 :

« Ou s'aît-i **fait** om? » (IC, p.32)

= Où s'est-il **fait** homme ?

« Ce\* veu dir c'i s'âi **fait** Om? » (IC, p.84)

= Que veut dire qu'il s'est **fait** homme ?

- 「過去分詞+前置詞」

リエゾンの実現がある例 :

« Se\* son se parole c'ail a **joint** a sail de\* L'Anj e d'Elizabait: » (IC, p.140)

= Ce sont ces paroles qu'elle a **joint** à celles de L'Ange et d'Elisabeth :

リエゾンの実現がない例 :

« jusc'a se\* cîz âi **satisfai** a se\* Comandman; » (IC, p.132)

= jusqu'à ce qu'ils aient **satisfait** à ce Commandement ;

- 「過去分詞+冠詞」

リエゾンの実現がない例 :

« ce\* vouz ave **comi** un tail pehe tan de\* foai. » (IC, p.65)

= que vous avez **commis** un tel péché tant de fois.

### 7.2.4.2.3. ジェロンディフ

ジェロンディフとその後続語のリエゾンが 32 例中 3 例で実現され、リエゾン実現率は 9,38%である。

	L	NL	Total	%
ジェロンディフ <i>-ant</i>	3	29	32	9,38%

表 7-114: ジェロンディフにおけるリエゾン実現率

リエゾンが実現されたのは、「ジェロンディフ+不定詞」、「ジェロンディフ+過去分詞」、「ジェロンディフ+名詞」のみである。一方、「ジェロンディフ+前置詞」、「ジェロンディフ+接続詞」、「ジェロンディフ+副詞」、「ジェロンディフ+冠詞」のコンテキストではリエゾンの実現は観察されない。

	L	NL	Total	%
不定詞	1	0	1	100%
過去分詞	1	2	3	33,33%
名詞	1	3	4	25,00%
前置詞	0	11	11	0%
接続詞	0	7	7	0%
副詞	0	2	2	0%
冠詞	0	4	4	0%
Total	3	29	32	9,38%

表 7-115: 後続語の種類によるジェロンディフにおけるリエゾン実現率

以下に例を挙げる。

- 「ジェロンディフ+不定詞」

リエゾンの実現がある例：

« e de\* Vilajoâi leu **fzant** ansainie\*e st'Alfabai mi a la tâit d'un pti Livr, » (IC,p .32)

= et de Villageois leur **faisant** enseigner cet Alphabèt mis à la tête d'un petit Livre,

- 「ジェロンディフ+過去分詞」

リエゾンの実現がある例：

« Vou nou considere tou; e nouz **aiant** admi dan la sal du faistin, » (IC, p.49)

= Vous nous considerez tout; et nous **ayant** admis dans la salle du festin, » (IC, p.89)

リエゾンの実現がない例：

« S'âi c'aprâi sa môr son côr **aian** ete detahe de\* la croai, » (IC, p. 89)

- = C'est qu'après sa mort son corps **ayant** été détaché
- 「ジェロンディフ+名詞」  
 « J'antan c'an se\* **fzant** Om, » (IC, p.88)  
 = J'entends qu'en se **faisant** Homme,
  - 「ジェロンディフ+前置詞」  
 リエゾンの実現がない例：  
 « e an **soufran** avai joâi pour l'amour de\* Dieu (...) » (IC, p.101)  
 = et en **souffrant** avec joie pour l'amour de Dieu (...)
  - 「ジェロンディフ+接続詞」  
 リエゾンの実現がない例：  
 « **fabrican** ou produizan de\* fô contrâ ou de\* fô titr, (IC, p.128)  
 = **fabriquant** ou produisant de faux contrats ou de faux titres,
  - 「ジェロンディフ+副詞」  
 リエゾンの実現がない例：  
 « mâiz osi sêu ci **âitan** ancor vivan lôr c'i viindra, » (IC, p.90)  
 = mais aussi ceux qui **étant** encore vivants lors qu'il viendra,
  - 「ジェロンディフ+冠詞」  
 リエゾンの実現がない例：  
 « Le\* Ministr **aitan** un peu incline » (IC, p.42)  
 = Le Ministre **étant** un peu incliné

#### 7.2.4.2.4. 動詞句におけるリエゾンのまとめ

動詞句のリエゾンの実現率の平均値は 67,37%である。

	L	NL	Total	%
屈折形	342	134	476	71,85%
過去分詞	8	8	16	50,00%
ジェロンディフ	3	29	32	9,38%
動詞句全体	353	171	524	67,37%

表 7-116: 動詞句におけるリエゾン実現率

屈折形のリエゾンの実現率が最も高く、71,85%のリエゾン実現率である。ただし、リエゾンの実現は主に、三人称単数形 (89,06%)において最も高い。その他の人称の屈折形ではリエゾン実現率はそこまで高いとはいえない。過去分詞においてはリエゾンの実現率が50%であり、リエゾンが実現された例は全てリエゾン子音[t]を持つ過去分詞である。ジェロンディフと後続する語におけるリエゾンは大変稀であることも明らかになった。

ただし、Vaudelin と Milleran のコーパスを比較してみると、Milleran コーパスでは動詞句のリエゾンの実現率は非常に高い。三人称単数形は Vaudelin コーパスもそれほど変わらないリエゾン実現率が観察されるが、他の人称において Vaudelin コーパスにおけるリエゾン実現率は Vaudelin のものを常に下回る。以下に 2 つのコーパスにおけるそれぞれの屈折形のリエゾン実現率を示した表を提示する。

	Milleran	Vaudelin
一人称単数形	80,77%	0%
二人称単数形	100%	22,22%
三人称単数形	95,75%	89,06%
一人称複数形	60%	6,25%
二人称複数形	76%	14,89%
三人称複数形	66,67%	59,09%
<b>Total</b>	<b>85,47%</b>	<b>71,85%</b>

表 7-117: 各人称におけるリエゾン実現率

また、過去分詞およびジェロンディフについても、Vaudelin コーパスでは Milleran コーパスと比較するとリエゾン実現率は大きく下回る。

	Milleran	Vaudelin
過去分詞	93,33%	50%
ジェロンディフ	82,61%	9,38%

表 7-118: 過去分詞およびジェロンディフにおけるリエゾン実現率

#### 7.2.4.3. 前置詞句

本コーパスにおいて母音で始まる語の前に表れた前置詞は以下の表に提示する 11 種類ある。

[k]	[n]	[z]	[t]	[r]
<i>avec</i>	<i>en</i>	<i>après,</i> <i>dans,</i> <i>dès,</i> <i>sans,</i> <i>aux</i>	<i>devant,</i> <i>durant,</i> <i>quant</i>	<i>sur</i>

表 7-119: 前置詞の例

発音が期待される語末子音が[k]である前置詞には *avec* がある。次に、語末子音が[n]である前置詞には *en*、語末子音が[z]である前置詞には *après, dans, dès, sans, sans, aux* がある。語末子音が[t]である前置詞は *devant, durant, quant* がある。また、語末子音[r]を持つ前置詞には *sur* が挙げられる。まず、それぞれの前置詞のリエゾン実現率は以下の表のようになる。

	L	NL	Total	%
<i>avec</i>	19	1	20	95%
<i>en</i>	19	0	19	100%
<i>après</i>	6	0	6	100%
<i>dans</i>	3	0	3	100%
<i>dès</i>	2	0	2	100%
<i>sans</i>	3	0	3	100%
<i>aux</i>	15	0	15	100%
<i>devant</i>	9	4	13	69,23%
<i>durant</i>	1	0	1	100%
<i>quant</i>	1	0	1	100%
<i>sur</i>	1	0	1	100%
<b>Total</b>	<b>79</b>	<b>5</b>	<b>84</b>	<b>94,05%</b>

表 7-120 前置詞におけるリエゾン実現率

前置詞 *en, après, dans, dès, sans, aux, durant, quant, sur* において、リエゾン 100%の確率で実現される。前置詞 *avec* に関しては、20 例のうち 19 例においてリエゾンが実現され、リエゾン実現率は 95%である。最もリエゾンの実現率が低いのは *devant* で、リエゾン実現率は 69.23%である。

#### 7.2.4.3.1. 後続語によるリエゾン実現率の違い

後続語の種類によって生じるリエゾンの実現率の違いはどのようなものだろうか。以下にコンテキスト毎のリエゾン実現率をまとめた表をあげる。

	L	NL	Total	%
名詞	28	0	28	100%
前置詞	3	0	3	100%
人称代名詞	7	0	7	100%
ジェロンディフ	7	0	7	100%
不定詞	7	0	7	100%
冠詞 ( <i>un, une</i> )	21	3	24	87,50%

アルファベット	6	1	7	85,71%
接続詞 (et, ou)	0	1	1	0%
<b>Total</b>	<b>79</b>	<b>5</b>	<b>84</b>	<b>94,05%</b>

表 7-121: 後続語による前置詞におけるリエゾン実現率

「前置詞+名詞」、「前置詞+前置詞」、「前置詞+人称代名詞」、「前置詞+ジェロンディフ」、「前置詞+不定詞」のコンテキストにおいてはリエゾンの実現率は 100%である。以下に例を挙げる。

- 「前置詞+名詞」
  - « je\* lez ecout **avaic** atansion, » (IC, p.61)
  - = je les écoute **avec** attention,
  - « S'âi d'âitr **ann** eta de\* grâs. » (IC, p.115)
  - = C'est d'être **en** état de grâce.
- 「前置詞+前置詞」
  - « S'âit a dir ce\* vou rainie\*ie **dâiz** a prezan dan no cêur par la grâs, » (IC, p.116)
  - = C'est à dire que vous régniez **dès** à présent dans nos coeurs par la grâce,
  - « **Cant** o comansman du mo E presaid deu rr ou deu ss, » (IC, p.145)
  - = **Quant** au commencement du mot E précède deux rr ou deux ss,
- 「前置詞+人称代名詞」
  - « ou an la plonjan, ou an fzan aspersion **sur** ail, » (IC, p.98)
  - = ou en la plongeant, ou en faisant aspersion **sur** elle,
  - « Oui, pars ce\* la harite ci nouz uni **avaic** êu, » (IC, p.92)
  - = Oui, parce que la charité qui nous unit **avec** eux,
- 「前置詞+ジェロンディフ」
  - « S'âi prinsipalman **ann** afairmisan la Foai, » (IC, p.114)
  - = C'est principalement **en** affermissant la Foi,
  - « An pairfaicsionan, s'âit a dir, **ann** ogmantan e an fortifian an nou la grâs du Batâim, (IC, p.99)
  - = En perfectionnant, c'est à dire, **en** augmentant et en fortifiant en nous la grâce du Baptême,
- 「前置詞+不定詞」
  - « **Aprâiz** avoair defandu par le\* siziaim tout lez acsion esterieur de\* l'inpurte, » (IC, p.129)
  - = **Après** avoir défendu par le sixième toutes les actions extérieures de l'impureté,
  - « slui ci i âit antre **sanz** avoair la rob nupsial. » (IC, p.49)
  - = celui qui y est entré **sans** avoir la robe nuptiale.

次に、「前置詞+冠詞」のコンテキストにおけるリエゾンは 24 例中 21 例で実現され、実現率は 87,50%である。リエゾンの実現がない 3 例において前置詞は全て *devant* である。以下に例を挙げる。

- 「前置詞+冠詞」

リエゾンの実現があるもの：

« De\* vivr ansanbl **danz** eun sint sosiete. » (IC, p.117)

= De vivre ensemble **dans** une sainte société.

« TI. dan le\* mo e **dvant** eun Voiaail se\* Pronons SI.» (IC, p.149)

= TI. dans le mot et **devant** une Voyelle se Prononce SI.

リエゾンの実現がないもの：

« **Dvan** eun seul Conson, ci n'âi pa final. » (IC, p.145)

= **Devant** une seule Consonne, qui n'est pas finale.

終わりに、「前置詞+アルファベット」のコンテキストにおいてリエゾンは 7 例中 6 例で実現され、リエゾン実現率は 85,71%である。

- 「前置詞+アルファベット」

リエゾンの実現があるもの：

« seulman **dvant** E ou I. » (IC, p.148)

= seulement **devant** E ou I

リエゾンの実現がないもの：

« Souvne vou biin ce\* toujou eun Voiaail **avai** M.» (IC, p.143)

= Souvenez vous bien que toujours une voyelle **avec** M.

「前置詞+接続詞」についてはリエゾンの実現は観察されない。

- 「前置詞+接続詞」

= Hifr varî leu prononsiasion **dvan** e avaic un mo ci comans par eun Voiaail, » (IC, p.80)

« Chiffre varie leur prononciation **devant** et avec un mot qui commence par une voyelle,

#### 7.2.4.3.2. 前置詞のまとめ

前置詞句においてリエゾンの実現率は非常に高いといえる。リエゾンが実現されない例は 84 例中たった 5 例であり、これらの副詞は *devant* および *avec* である。また、後続語の種類においてリエゾンの実現が 100%ではないのは、「前置詞+冠詞」、「前置詞+アルファベット」、「前置詞+接続詞」である。特に MOT2 がアルファベットもしくは接続詞の場合には

一般的にリエゾンの実現率は高くないということは既に観察されている。よって、Vaudelinのコーパスにおいて前置詞と後続語のリエゾンにはほぼ義務的に実現されるということが明らかである。

#### 7.2.4.4. 副詞

##### 7.2.4.4.1. 語末子音字による違い

本コーパスにおけるリエゾン実現有無の観察の対象とする副詞を以下の表に示す。

[p]	[t]	[z]	[r]	[n]
<i>trop</i>	<i>comment,</i> <i>fort,</i> <i>tout,</i> 副詞- <i>ment</i>	<i>plus,</i> <i>jamais,</i> <i>pas,</i> <i>point,</i> <i>très,</i> <i>au moins,</i> <i>à tout le moins</i>	<i>toujours</i>	<i>bien,</i> <i>rien</i>

表 7-122: 副詞の例

以下では副詞を語末子音字ごとのリエゾンの実現率を観察する。その後に、後続語の違いによるリエゾンの実現率について観察する。

##### 7.2.4.4.2. 語末子音字による違い

###### 7.2.4.4.2.1. 語末子音[p]の副詞

語末子音が[p]の副詞には、*trop*がある。*trop*は母音の前で1例のみ観察され、リエゾンが実現されることが観察される。

	L	NL	Total	%
<i>trop</i>	1	0	1	100%

表 7-123: 語末子音[p]の副詞(*trop*)におけるリエゾン実現率

#### - *trop*

« d'ou je\* conclu c'i fôdrait âitr bi-in delica, e **trop** ainmi de\* la pairfaicsion, » (NM, p. 19)

= d'ou je conclus qui foudrait être bien délicat, et **trop** énnemi de la perfection,



#### 7.2.4.4.2.2. 語末子音[t]の副詞

語末子音[t]の副詞は *comment, fort, tout* および語尾が *-ment* の副詞である。これらの副詞と後続語のリエゾンの実現率の平均は 34,21%である。副詞 *fort* のリエゾンコンテキストは 1 例のみ観察され、リエゾンが実現される。副詞 *tout* のリエゾンコンテキストは 7 例観察され、全てにおいてリエゾンが実現される。副詞 *comment* のリエゾンコンテキストは 9 例観察され、4 例においてリエゾンが実現される。この 4 例は « *Comment est-ce que ... ?* » という疑問文である。語尾が *-ment* の副詞は最もリエゾンの実現率が低く、21 例のリエゾンコンテキストのうち 1 例のみでリエゾンが実現される。

	L	NL	Total	%
<i>fort</i>	1	0	1	100%
<i>tout</i>	7	0	7	100%
<i>comment</i>	4	5	9	44,44%
副詞- <i>ment</i>	1	20	21	4,76%
<b>Total</b>	<b>13</b>	<b>25</b>	<b>38</b>	<b>34,21%</b>

表 7-124: 語末子音[t]の副詞におけるリエゾン実現率

#### 7.2.4.4.2.3. 語末子音[z]の副詞

語末子音[z]の副詞は *plus, jamais, pas, très, au moins, à tout le moins* である。これらの副詞全体のリエゾン実現率平均値は 77,78%である。副詞 *très* のリエゾンコンテキストは 6 例観察され、リエゾンは常に実現される。副詞 *plus, pas, jamais* においては、リエゾン実現率はそれぞれ、90,91%、87,50%、75%と比較的高いといえる。副詞句 *à tout le moins* および *au moins* はリエゾンの実現率はそれぞれ、50%および 16,67%である。

	L	NL	Total	%
<i>très</i>	6	0	6	100%
<i>plus</i>	10	1	11	90,91%
<i>pas</i>	14	2	16	87,50%
<i>jamais</i>	3	1	4	75%
<i>à tout le moins</i>	1	1	2	50%
<i>au moins</i>	1	5	6	16,67%
<b>Total</b>	<b>35</b>	<b>10</b>	<b>45</b>	<b>77,78%</b>

表 7-125: 語末子音[z]の副詞におけるリエゾン実現率

#### 7.2.4.4.2.4. 語末子音[r]の副詞

語末子音[r]の副詞は *toujours* である。この副詞は語末子音字が *-s* であるにもかかわらず、

語末子音字-s は発音されることがなく、母音の前ではむしろ-r-[r]が発音される。

	L	NL	Total	%
<i>toujours</i>	9	3	12	75%

表 7-126: 語末子音[r]の副詞におけるリエゾン実現率

« Di-eu at-i *toujour ete* [tuʒur ete]? » (IC. p.31)

= Dieu a-t-il *toujours* été ?

« Jezu-Cri se\* *trouv toujou o* [tuʒu o] milieu de\* seu ci s'asanbl pour prie an son Non. » (IC. p.39)

= Jésus-Christ se trouve *toujours* au milieu de ceux qui s'assemblent pour prier en son Nom.

#### 7.2.4.4.2.5. 語末子音[n]の副詞

語末子音[n]の副詞は *bien* および *rien* である。これらの副詞のリエゾンコンテキストにおいて、リエゾンの実現率は非常に高い。

	L	NL	Total	%
<i>bien</i>	12	1	13	92,31%
<i>rien</i>	1	0	1	100%
<b>Total</b>	<b>13</b>	<b>1</b>	<b>14</b>	<b>92,86%</b>

表 7-127: 語末子音[n]の副詞におけるリエゾン実現率

#### 7.2.4.4.3. 後続語の種類

副詞に後続する語には、アルファベット、名詞、形容詞、副詞、過去分詞、人称代名詞、不定詞、動詞、前置詞、冠詞、接続詞が観察された。

	L	NL	Total	%
アルファベット	4	0	4	100%
名詞	2	0	2	100%
形容詞	35	3	38	92,11%
副詞	12	4	16	75%
過去分詞	4	3	7	57,14%
人称代名詞	1	1	2	50%
不定詞	2	2	4	50%
動詞	4	5	9	44,44%
前置詞	5	15	20	25%
冠詞 ( <i>un, une</i> )	2	9	11	18,18%

接続詞 ( <i>et, ou</i> )	0	5	5	0%
<b>Total</b>	<b>71</b>	<b>47</b>	<b>118</b>	<b>60,17%</b>

表 7-128: 後続語の種類による副詞のリエゾン実現率

リエゾンの実現率は後続語の種類によって変化する。まず、「副詞+アルファベット」および「副詞+名詞」はコンテキスト数は4例および2例と少ないが、リエゾンの実現率は100%である。

- 「副詞+アルファベット」

« L'u aprai le\* q, e dvan l'A. se\* Pronons **toujour** OU. » (IC, p.147)  
 = L'u après le q, et devant l'A. se Prononce **toujours** OU.

- 「副詞+名詞」

« Pourcoa ne\* nou fron-nou **paz** oneur e plaizi de\* transmair a tōu le Savan (...) (IC, p.28)  
 = Pourquoi ne nous ferons-nous **pas** honneur et plaisir de transmettre à tous les Savants (...)

「副詞+形容詞」のコンテキストではリエゾンの実現率は92,11%である。このコンテキストは38例観察され、そのうちの35例でリエゾンが実現される。

- 「副詞+形容詞」

« si je\* n'étâi **biinn** assure ce\* vô mizericord eclat par dsu tou voz ouvraj, » (IC, p.62)  
 = si je n'étais **bien** assuré que vos miséricordes éclatent par dessus tous vos ouvrages,

「副詞+副詞」のコンテキストにおけるリエゾンの実現率は75%である。

- 「副詞+副詞」

« Coai ce\* l'Eglîz n'ai **paz** univairsailman detairmine le\* tan de\* la Confaision annuail, » (IC, p.131)  
 = Quoi que l'Eglise n'ait **pas** universellement déterminé le temps de la Confession annuelle,

#### 7.2.4.5. 接続詞

接続詞については、*quand, mais, donc* の3つの接続詞のリエゾンコンテキストが観察された<sup>145</sup>。22例のコンテキストが観察され、そのうちの21例においてリエゾンが実現する。

<sup>145</sup> *quand* は疑問副詞でもあるが、語毎に分析するために接続詞に含めることとする。

	L	NL	Total	%
<i>quand</i>	8	1	9	88,89%
<i>mais</i>	12	0	12	100%
<i>donc</i>	1	0	1	100%
<b>Total</b>	<b>21</b>	<b>1</b>	<b>22</b>	<b>95,45%</b>

表 7-129：接続詞におけるリエゾン実現率

また、後続語の種類に応じたリエゾンの実現率は以下ようになる。

	L	NL	Total	%
副詞	5	0	5	100%
前置詞	1	0	1	100%
代名詞	12	0	12	100%
動詞（倒置疑問文）	3	0	3	100%
接続詞 <i>et</i>	0	1	1	0%
<b>Total</b>	<b>21</b>	<b>1</b>	<b>22</b>	<b>95,45%</b>

表 7-130：後続語の種類による接続詞におけるリエゾン実現率

リエゾンの実現されない 1 例は、「*quand* + 接続詞 *et*」である。接続詞 *et* と先行語とのリエゾンは本コーパスで 1 例も観察されないため、以下に例を挙げる。

« A peu prâi voaila **can** e coman le Voaiail Hanj, ou paird leu propr Son. » (IC, p.147)

= A peu près voilà **quand** et comment les Voyelles Changent, ou perdent leurs propres Sons.

以下では個々の接続詞の例を提示する。まず、*quand* に関しては、人称代名詞および動詞 *est-*（倒置疑問文）の前でリエゾンの実現が観察される。以下に例を挙げる。

- *quand*

« **Cant i** vou don l'absolution rsve-la com eun grâs (...) » (IC, p.66)

= **Quand il** vous donne l'absolution recevez-là comme une grâce (...)

« **Cant âi-se\*** c'un pehe âi veniail? » (IC, p.135)

= **Quand est-ce** qu'un péché est véniel ?

次に、*mais* に関しては、人称代名詞および副詞 *aussi* および *encore* の前でリエゾンの実現が観察される。

- *mais*

«Oui, **mâiz** î ne\* rsoaiv pa se grâs; » (IC, p. 106)

= Oui, **mais ils** ne reçoivent pas ces graces

« **mâiz osi** sêu ci âitan ancor vivan » (IC, p. 90)

= **mais aussi** ceux qui étant encore vivants

« mâiz ancor pour tou sêu pour ci je\* vouz e prie se\* matin. » (IC, p.38)

= **mais** encore pour tous ceux pour qui je vous ai prié ce matin.

終わりに、*donc* は 1 例のみ母音の前に位置する例が観察され、語末子音字-*c* は発音される。

- *donc*

« Pourcoai **donc** âit-ail particuliairmant attribue o Pair? » (IC, p.86)

= Pourquoi **donc** est-elle particulièrement attribué au Père ?

Vaudelin コーパスにおいて接続詞のリエゾンの実現率は非常に高いといえる。ただし、例数がそれほど多いとはいえないだろう。特に *donc* は母音の前で観察される例が 1 例のみであり、語末子音が常に母音の前で発音されるのかどうかは明白ではない。

## 7.2.4.6. 代名詞

### 7.2.4.6.1. 人称代名詞

主語となる人称代名詞には、*il, nous, vous, ils, elles, on* がある。

	子音の前	母音の前	休止の前
<i>il</i>	[i]	[il] (/ [i])	[i]
<i>nous</i>	[nu]	[nuz]	[nu]
<i>vous</i>	[vu]	[vuz]	[vu]
<i>ils</i>	[i]	[iz] / [il]	[i(:)]
<i>elles</i>	[ɛl]	[ɛl]	[ɛl]

表 7-131 : 人称代名詞の発音形

*elles* の語末子音字-*z* は母音の前では発音されず、常に [ɛl] と発音されるため、リエゾンの分析には含まないこととする。

	L	NL	Total	%
<i>il</i>	90	13	103	87,38%
<i>nous</i>	82	10	92	89,13%
<i>vous</i>	102	4	106	96,23%
<i>ils</i>	8	0	8	100%
<i>on</i>	20	7	27	74,07%
<b>Total</b>	<b>302</b>	<b>34</b>	<b>336</b>	<b>89,88%</b>

表 7-132：人称代名詞におけるリエゾン実現率

以下に挙げるのは、後続語によるリエゾンの実現率の違いである。

	L	NL	Total	%
代名詞	61	0	61	100%
ジェロンディフ	4	0	4	100%
動詞	214	1	215	99,53%
不定詞	23	4	27	85,19%
形容詞	0	5	5	0%
副詞	0	6	6	0%
接続詞	0	2	2	0%
前置詞	0	10	10	0%
過去分詞	0	6	6	0%
<b>Total</b>	<b>302</b>	<b>34</b>	<b>336</b>	<b>89,88%</b>

表 7-133：後続語の種類による人称代名詞におけるリエゾン実現率

まず、「人称代名詞+代名詞」のコンテキストではリエゾンの実現率が 100%である。次に、「人称代名詞+ジェロンディフ」のコンテキストにおいてもリエゾンの実現率は 100%である。

- 「人称代名詞+代名詞」
  - « **Il** i ann a troai prinsipô. » (IC, p.113)
  - = **Il** y en a trois principaux.
  - « **Il** an fô declare le\* nonbr, le calite diferant, » (IC, p.111)
  - = **Il** en faut déclarer le nombre, les qualités différentes,
- 「人称代名詞+ジェロンディフ」
  - « An **nouz** unisan avai Dieu, ci âi la vî de\* not âm, » (IC, p.97)

= En **nous** unissant avec Dieu, qui est la vie de notre âme,

「人称代名詞+動詞」においては 215 例中 214 例でリエゾンが実現されるため、リエゾン実現率は非常に高く、99,07%である。リエゾンが実現されない 1 例は、人称代名詞 *il* である。以下に例を挙げる。

- 「人称代名詞+動詞」

リエゾンの実現がある例：

« S'âi pour leu dmande c'îz unis leu priair avai le nôtr. » (IC, p.109)

= C'est pour leur demander qu'**ils** unissent leurs prières avec les nôtres.

リエゾンの実現がない例：

«Jêzu-Cri s'i ofr d'eun maniair non sanglant avai tou leFidail, » (IC, p.53)

= Jésus-Christ s'**il** offre d'une manière non sanglante avec tous les Fidèles,

「代名詞+不定詞」のコンテキストでは 27 例中 23 例でリエゾンが実現される。リエゾンが実現されない 4 例は、どれも倒置疑問文におけるものである。

- 「代名詞+不定詞」

リエゾンの実現がある例：

« Je\* viin **vous** ofri Jezu-Cri vot Fi, » (IC, p. 53)

= Je viens **vous** offrir Jésus-Christ votre Fils,

リエゾンの実現がない例：

« Dan cail espri doit-**on** assiste a se\* Sacrifis? » (IC, p. 108)

= Dans quel esprit doit-**on** assister à ce Sacrifice ?

また、「代名詞+形容詞」、「代名詞+副詞」、「代名詞+接続詞」、「代名詞+前置詞」、「代名詞+過去分詞」においてはリエゾンの実現率は 0%である。

「代名詞+形容詞」

« srait-i onorabl ô Zelateur de\* la gloair de\* not Lang » (NM, p. 25)

= serait-il honorable aux zélateurs de la gloire de notre Langue

「代名詞+副詞」

« At-on ancor oblige de\* satisfaire a Dieu aprâi ce\* le\* pehe âi pardone? » (IC, p.112)

= A-t-on encore obligé de satisfaire à Dieu après que le péché est pardonné ?

「代名詞+接続詞」

« mâi de\* le dmande a Dieu pour **nou** e avai nou par le merit de\* JEZU-CRI. » (IC, p.122)

= mais de les demander à Dieu pour **nous** et avec nous par les mérites de JÉSUS-CHRIST.

「代名詞+前置詞」

« préparon-nou a le\* rsvoir e a l'adore. » (IC, p.56)

= préparons-nous à le recevoir et à l'adorer.

「代名詞+過去分詞」

« Pourcoai Not-Sainie\*eur at-i institue se\* Sacrifis? » (IC, p.107)

= Pourquoi Notre-Seigneur a-t-il institué ce Sacrifice ?

#### 7.2.4.6.2. 代名詞 *en*, *les*

代名詞 *en* および *les* のリエゾン実現率をそれぞれ以下の表に示す。

	L	NL	Total	%
<i>en</i>	52	0	52	100%
<i>les</i>	18	3	21	85,71%

表 7-134: 代名詞 *en*, *les* におけるリエゾン実現率

代名詞 *en* については常に母音の前でリエゾンの実現が観察される。代名詞 *les* については、リエゾンの実現がない 3 例はいずれも倒置文もしくは命令文である。以下に例を示す。

##### - *en*

リエゾンの実現がある例 :

« Il i **ann** a catr prinsipô. » (IC, p.105)

= Il y **en** a quatre principaux.

##### - *les*

リエゾンの実現がある例 :

« je\* **lez** ecout avaic atansion, » (IC, p.61)

= je **les** écoute avec attention,

リエゾンの実現がない例 :

« e poursuive-**lai** an nouz aidan, » (IC, p.28)

= et poursuivez-**les** en nous aidant,

#### 7.2.4.6.4. 代名詞におけるリエゾンのまとめ

代名詞のリエゾンの実現率は非常に高いといえる。また、リエゾンの実現がない例というのは主に、代名詞が倒置疑問文もしくは命令文に含まれた場合であり、この場合にはリエゾンの実現が全く観察されない。



	L	NL	Total	%
人称代名詞	302	34	336	89,88%
<i>en</i>	52	0	52	100%
<i>les</i>	18	3	21	85,71%
<b>Total</b>	<b>372</b>	<b>37</b>	<b>409</b>	<b>90,95%</b>

表 7-135：代名詞におけるリエゾン実現率

#### 7.2.4.7. +アルファベット

アルファベットが MOT2 の位置にある場合に、リエゾンが実現しにくい傾向が観察された。母音で始まるアルファベットに該当するのは「A, E, F, H, I, L, M, N, O, R, S, U, X」である。

まず、MOT1 とアルファベットというコンテキスト全体のリエゾンの実現率は 26,92% である。

	L	NL	Total	%
+ アルファベット	12	14	26	<b>46,15%</b>

表 7-136：「+ アルファベット」コンテキストにおけるリエゾン実現率

ただし、アルファベットに先行する語の品詞によってリエゾンの実現率は異なる。以下に先行する語の品詞に応じたリエゾンの実現率を表した表を提示する。

	L	NL	Total	%
前置詞 +	6	1	7	<b>85,71%</b>
副詞 +	2	2	4	<b>50%</b>
冠詞 +	4	7	11	<b>36,36%</b>
数詞 +	0	2	2	<b>0%</b>
形容詞 +	0	1	1	<b>0%</b>
名詞 +	0	1	1	<b>0%</b>
<b>Total</b>	<b>12</b>	<b>14</b>	<b>26</b>	<b>46,15%</b>

表 7-137：後続語の種類による「+ アルファベット」コンテキストにおけるリエゾン実現率

また、「前置詞+アルファベット」のコンテキストでは、7 例中 6 例でのみリエゾンが実現され、リエゾンの実現率は 85,71% である。リエゾンの実現率が最も高いコンテキストは、「副詞+アルファベット」であり、次に「冠詞+アルファベット」である。これらのコンテキストではリエゾンの実現率がそれぞれ 50% および 36,36% を示した。しかし、その他のコ

ンテキスト、「数詞+アルファベット」、「形容詞+アルファベット」、「名詞+アルファベット」においてはリエゾンが実現されない。以下に例を提示する。

- 「前置詞+アルファベット」
  - « G seulman **dvant** E ou I pran le\* Son du J. » (IC, p.147)
  - = G seulement **devant** E ou I prennent le Son du J.
  - « Souvne vou biin ce\* toujou eun Voaiiail **avai** M.» (IC, p.143)
  - = Souvenez vous bien que toujours une voyelle **avec** M.
- 「副詞+アルファベット」
  - « L’u aprai le\* q, e dvan l’A. se\* Pronons **toujour** OU. » (IC, p.147)
  - = L’u après le q, et devant l’A. se Prononce **toujours** OU.
- 「冠詞+アルファベット」
  - « prain tou deu le\* Son d’**eun** O lon. » (IC, p.145)
  - = prennent tous deux le Son d’**un** O long.
- 「数詞+アルファベット」
  - « **deu** rr ou **deu** ss, » (IC, p.145)
  - = **deux** rr ou **deux** ss,
- 「形容詞+アルファベット」
  - « Onn obsairv ce\* la distincion de\* se\* troai Caractair **italic** AN. AI. » (IC, p.79)
  - = On observe que la distinction de ces trois Caractères **italiques** AN. AI.
- 「名詞+アルファベット」
  - « Cant o comansman du **mo** E presaid deu rr ou deu ss, » (IC, p. 145)
  - = Quant au commencement du **mot** E précède deux rr ou deux ss,

#### 7.2.4.8. +接続詞 *et, ou*

接続詞 *et* および接続詞 *ou* とその先行語とのリエゾンの実現率はそれぞれ、0%および11,11%である。接続詞 *et* と先行語においてリエゾンの実現は全く観察されない。また、接続詞 *ou* は1例でのみリエゾンが実現するが、先行語は数詞 *deux* である。

	L	NL	Total	%
+ <i>et</i>	0	125	125	0%
+ <i>ou</i>	0	8	9	11,11%
<b>Total</b>	<b>1</b>	<b>133</b>	134	<b>0,75%</b>

表 7-138 : 「+接続詞 *et, ou*」 コンテキストにおけるリエゾン実現率

以下に例を挙げる。

- +接続詞 *et, ou*

リエゾンが実現される例：

« mâi toujours an prezans de\* **deuz ou** troâi témoin. » (IC, p. 116)

= mais toujours en présence de **deux ou** trois témoins.

リエゾンが実現されない例：

« î **manj** e î boaiv leu jujman e leu condanasion. » (IC, p.106)

= ils **mangent et** ils boivent leurs jugements et leurs condamnations.

#### 7.2.4.9. 名詞+動詞

「名詞+動詞」のコンテキストは16例あり、リエゾンは実現されない。

	L	NL	Total	%
名詞+動詞	0	16	16	0%

表 7-139：「名詞+動詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率

以下に例を挙げる。

- 「名詞+動詞」

« J’antan ce\* **JEZU-CRI** a etabli de Sacrman dan son Egliz (...) » (IC, p. 92)

= J’entends que **JÉSUS-CHRIST** a établi des Sacrements dans son Eglise (...)

« si je\* n’étâi biinn asure ce\* vô **mizericord** éclat par dsu tou voz ouvraj, » (IC, p. 62)

= si je n’étais bien assuré que vos **miséricordes** éclatent par dessus tous vos ouvrages,

#### 7.2.5. リエゾンの分析のまとめ

Vaudeln コーパスにおいて、一音節の語は、複数音節の語よりもリエゾンの実現率が高いこと、また語末の音節構造が閉音節よりも開音節の語のリエゾンの実現率が高いという傾向が観察された。これについては、Milleran コーパスにおいても同様の傾向が観察された。

統語的分析においてはそれぞれの統語コンテキストによって異なる傾向が観察されたといえる。

まず、名詞句では「限定辞（冠詞および数詞）+名詞」、「限定辞（冠詞および数詞）」のような、名詞とその先行語におけるリエゾンの実現は比較的安定している。また「単数形形容詞+単数形名詞」コンテキストにおいてもリエゾンの実現は安定している。それに対して、「複数形形容詞+複数形名詞」コンテキストにおいては、リエゾンが常に実現されるわけではなく、Vaudelin コーパスでは語末が開音節の形容詞ではリエゾンが比較的安定的であるものの、語末が閉音節の形容詞においてはリエゾンの実現が観察されない。この点から言えることは、2つの語の間で母音接続が回避できるのであれば、リエゾン子音[z]が実現さ

れなくてもよいということであり、リエゾン子音[z]は複数性マーカーとして機能するわけではないということである。次に、「名詞+形容詞」コンテキストでは、単数形および複数形のどちらにおいてもリエゾンの実現は観察されなかった。反対に、**Milleran** コーパスにおいてはこのコンテキストにおいてリエゾンの実現が少なからず観察された。

動詞句においては、屈折形ではリエゾンの実現が比較的多く観察されるのに対して、過去分詞およびジェロンディフではリエゾンの実現率はかなり低い。また、屈折形におけるリエゾンは、三人称単数形においては比較的安定的に実現される。それに対して、三人称複数形におけるリエゾンの実現率は三人称単数形のものよりも低い(89,06% vs 59,09%)。ところで、**Milleran** コーパスにおいては動詞の全ての屈折形において比較的高いリエゾン実現率が観察された。それに対して、**Vaudelin** コーパスでは3人称以外の屈折形におけるリエゾン実現率は高いとは言えない。この違いは、**Milleran** と **Vaudelin** のフランス語でそれぞれ用いられたスタイルの違いが理由であるとも考えられる。

前置詞句ではリエゾンの実現が安定的に観察された。副詞のリエゾンについては、リエゾンの実現はそれぞれの副詞によって異なることが観察された。また、接続詞のリエゾンは比較的高いリエゾンの実現率が観察された。代名詞のリエゾンの実現率は非常に高く、リエゾンの実現がない例というのは主に、代名詞が倒置疑問文もしくは命令文に含まれる場合である。

また特に興味深いのは、**Milleran** コーパスではリエゾンの実現が観察された「+接続詞 *et, ou*」および「名詞+動詞」コンテキストにおいて、**Vaudelin** コーパスでは全く、もしくはほとんどリエゾンの実現が観察されなかったことである。この原因は、2つのコーパスで用いられているスタイルの違いが原因と考えられるだろう。つまり、**Vaudelin** が記述したフランス語におけるスタイルは口語的であり、韻文や演説で要求されるようなリエゾンの実現は求められていないと判断することも可能である。

次章では、2つのコーパスで得られた結果の比較を行い、両コーパスに類似する特徴と異なる特徴を提示する。また、それによって、特にリエゾン子音[t]および[z]が形態的マーカーとしての機能を確立させているのか、そして両コーパスにおいてスタイルの違いがどのように影響しているのかについて考察していきたい。

## 第八章 Milleran コーパスと Vaudelin コーパスの比較

この章では第六章および第七章において得られた両コーパスにおけるリエゾンの特徴を比較することにより、類似する特徴と異なる特徴をそれぞれ考察する。これらの比較をした後に、特にリエゾン子音[t]および[z]が形態的マーカーとしての機能が確立される状況、そして両コーパスにおいてスタイルの違いがリエゾンの実現にどのように影響しているのかについて考察する。

### 8.1. 両コーパスに類似する特徴

以下では両コーパスに類似する特徴についての観察を述べる。

#### 8.1.1. リエゾンの実現における MOT1 (左側の語) の音節数の影響

リエゾンの実現における MOT1 (左側の語) の音節数の影響は顕著である。まず、Milleran コーパスにおいては単音節語のリエゾン実現率は 84,50%であり、複数音節語では 60,19%である。単音節語は複数音節語と比較して、リエゾンが実現されやすい傾向が観察されたといえる。Vaudelin コーパスにおいてこの傾向はさらに顕著である。Vaudelin コーパスでは、単音節語におけるリエゾンの実現率は 81,83%であり、複数音節語においては 20,85%である。以下に数値を示した表を提示する。

	Milleran	Vaudelin
単音節語	84,50% (1951/2309)	81,83% (1108/1354)
複数音節語	60,19% (821/1364)	20,85% (128/614)

表 8-1: 単音節語と複数音節語によるリエゾン実現率の違い

単音節語のリエゾンの実現率が高い理由として、冠詞 (*un, des, les, mon, ton, son, mes, tes, ses, vos, nos, leurs, etc*)、人称代名詞 (*il, nous, vous, ils, elles, en, les*)など、リエゾンの実現率が高い品詞がそもそも単音節であるということが考えられる。

現代フランス語においても左側の語の音節数がリエゾンの実現率に影響を与えるという同様の傾向が観察されている。例えば、Mallet (2008 : 270-271)の研究においては、単音節語では 66,3%のリエゾン実現率、複数音節語では 7,4%のリエゾン実現率というように、やはり単音節語におけるリエゾンの実現率の高さは顕著である。

### 8.1.2. MOT1 (左側の語) の語末の音節構造

MOT1 の語末の音節構造がリエゾンの実現に影響することも観察された。まず、引用形で発音された場合にリエゾン子音が潜在的であり、休止の前で実現しないと前提した場合に、語末が母音で終わる開音節語末の語彙については、これは語末の母音を口母音と鼻母音の2つに分けて観察することも可能である。次に、引用形で発音された場合に語末が子音で終わる閉音節語末の語彙に分類できるものがある。これには、語末が[r]で終わるもの、語末が[r]以外の子音で終わるもの、そして子音 (+無音の e) で終わるものがある。

	音節の種類の下位分類		例
開音節語末	(1) 口母音	__V (CL)#	<i>mot</i> [mɔ]
	(2) 鼻母音	__VN (CL)#	<i>devant</i> [d(ə)vɑ̃]
閉音節語末	(3) 母音+ [r]	__V [r] (CL)#	<i>fort</i> [fɔr]
	(4) 母音+ [r]以外の子音	__VC (CL)#	<i>personels</i> [pɛrsonɛl]
	(5) 母音+子音 (+無音の e)	__VC (ə) (CL)#	<i>lettres</i> [lɛtr(ə)]

表 8-2: 音節の違い

まず、両方のコーパスにおいて開音節語末の語のリエゾン実現率は、閉音節語末の語のリエゾン実現率よりも高いことが観察された。

	Milleran	Vaudelin
開音節	80,53% (2561/3180)	71,90% (1200/1669)
閉音節	42,80% (211/493)	18,65% (36/193)

表 8-3: 音節の違いによるリエゾン実現率

よって、母音接続がある場合には、リエゾンの実現が優先される可能性が高く、MOT1 の語末で子音が安定的に発音されるような場合には、リエゾンの実現はそこまで優先的であるわけではないといえる。このような傾向は現代フランス語についても、Delattre (1966 : 59) によって指摘されている。

« La liaison se fait plus fréquemment après voyelle qu’après consonne. *Des faits historiques* [fe zistɔrik] lie plus que : *Des heures historiques* [œr zistɔrik]. Deux raisons se présentent : d’abord il est plus aisé d’articuler une consonne que deux ; ensuite le besoin de liaison se fait moins sentir lorsqu’il y a déjà enchaînement : [œristɔrik], puisqu’il n’y a pas de hiatus à éviter. »

Delattre (1966 : 59)

「リエゾンの子音の前よりも母音の前でより頻繁に起きる。*Des faits historiques* [fe zistɔʁik]は*Des heures historiques* [œr zistɔʁik]よりもリエゾンが実現されやすい。これには2つの理由がある。まず、子音を二つ発音するよりも一つ発音するほうが楽である。そして、既に[œristɔʁik]のようにアンシェヌマンがある場合にはリエゾンの必要性はより少なく感じられる。なぜなら、そこに避けるべき母音接続がないからである。」

### 8.1.3. 名詞句

名詞句では「複数形形容詞+複数形名詞」および「冠詞（語末閉音節）+名詞/形容詞」コンテキストにおいて両コーパスで類似性が観察された。

#### 8.1.3.1. 「複数形形容詞+複数形名詞」

「複数形形容詞+複数形名詞」のコンテキストにおいて、複数性を示す形態素の綴り字が-sもしくは-xであることから、リエゾンが実現された場合に発音が期待されるのは子音[z]である。このコンテキストにおいて両コーパスにおいて、リエゾンの実現は常に起こるわけではない。Milleran コーパスにおけるリエゾン実現率は60%であり、Vaudelin コーパスにおけるリエゾン実現率は75%である。

	Milleran	Vaudelin
複数形形容詞+複数形名詞	60% (12/20)	75% (12/16)

表 8-4: 「複数形形容詞+複数形名詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率

Vaudelin コーパスにおいては、リエゾンの有無は形容詞の語末の音節構造に依存する。つまり、語末が開音節の形容詞においては常にリエゾンが実現する一方で、閉音節の形容詞はリエゾンの実現は1例のみ観察され、その他の4例ではリエゾンの実現は観察されない。

リエゾン実現あり	開音節	<b>beaux arts, beaux esprits,</b> <b>bons amis, bons avis,</b> <b>mauvais exemples</b> <b>saints Anges</b> <b>facheux inconvénients</b> <b>petits inconvénients</b>
	閉音節	<b>jeunes enfants</b>

リエゾン実現なし	閉音節	<b>mauvaises</b> habitudes, <b>pauvres</b> artisans, <b>saintes</b> écritures, <b>très-humbles</b> actions
----------	-----	---

表 8-5 : Vaudelin コーパスで観察される「複数形形容詞+複数形名詞」コンテキスト

それに対して、Milleran コーパスでは上記で述べた傾向は観察されない。つまり、Milleran のフランス語においては、形容詞の語末が開音節であるか、閉音節であるかという点は、リエゾンの実現にさほど影響するわけではないようである。

リエゾン実現あり	開音節	<b>beaux</b> habits, <b>bons</b> Auteurs, <b>curieux</b> amateurs , <b>fameux</b> Auteurs, <b>gentils</b> -hommes, <b>savans</b> amateurs
	閉音節	<b>belles</b> actions, <b>belles</b> eaux, <b>foles</b> amours, <b>hautes</b> oeuvres, <b>mêmes</b> avantages, <b>premieres</b> années
リエゾン実現なし	開音節	<b>beaux</b> animaux, <b>diferens</b> accens, <b>grands</b> exploits, <b>principaux</b> endroits, <b>sacrés</b> Atomes,
	閉音節	<b>meilleurs</b> Auteurs, <b>seuls</b> exeptés, <b>superbes</b> ignorans

表 8-6 : Milleran コーパスで観察される「複数形形容詞+複数形名詞」コンテキスト

閉音節語末と開音節語末の語におけるリエゾンの実現の違いに関連していると思われる証言として、語末に安定的に発音される綴り字 *c, f, l, r, q* に複数形の形態素 *-s, -x* が後続する場合に、リエゾン子音 [z] は発音されないという指摘が Buffier (1709 : 394) によって与えられている。



« (...) l's ne se prononce point quand elle est précédée d'une des consones, *c, f, l, r, q* ;  
*des trictracs à vendre, tresors infinis* prononcez, *trictâc à vendre, des tresor infinis*.  
L's finale ne sert alors qu'à rendre longue la dernière silabe ; néanmoins dans la  
prononciation fort soutenu l's finale se prononceroit après *r* ou *l*, *des tresors*  
*immenses, des chevreuils animez*. Si l's finale étoit précédée d'une *r* qui ne se  
prononce point, on pourroit prononcer cette *s* finale devant une voyele, mais sans  
prononcer l'*r* : *des dangers infinis*, pron., *dangé-zinfinis* ou *dangé infinis*.»

Buffier (1709 :394)

「*c, f, l, r, q* が先行する場合に、*s* は発音されない。*des trictracs à vendre, tresors*  
*infinis* は *trictâc à vendre, des tresor infinis* のように発音しなさい。*S* は語末の音  
節を長くするためにしか役立たない。しかし、大変高尚な発音においては、*r*  
もしくは *l* の後の語末の *s* は発音されることもある。つまり、*des tresors*  
*immenses, des chevreuils animez* のようなものである。もし語末の *s* が発音され  
ない *r* によって先行されるのであれば、この語末の *s* は母音の前で発音される。  
ただし、*r* は発音されない。*des dangers infinis* は *dangé-zinfinis* もしくは *dangé*  
*infinis* と発音される。」

この Buffier (1709 : 394) の指摘は主に名詞とその後続語におけるリエゾンに関するもの  
であるが、*des chevreuils animez* という一例だけは「複数形名詞+複数形形容詞」の例である。  
上記の Buffier (1709 : 394) の指摘は、もし名詞が *c, f, l, r, q* のように基本的に発音される綴  
り字で終わり、複数を示す形態素 *-s* がそれに続くのであれば、リエゾンの実現は義務的では  
なく、高尚なスタイルでのみ可能であるということを意味する。この指摘は、語末が閉音  
節の形容詞もしくは名詞に、母音で始まる語が後続する場合に、リエゾンの実現は通常義  
務的ではないが、高尚なスタイルの場合にはリエゾンを実現するべきであることを意味し  
ていると解釈できる。Vaudelin コーパスで観察されるように、語末において安定的に何らか  
の子音が発音されるのであれば、複数を示す形態素 *-s* および *-x* の発音は義務的ではないと  
いう傾向は Buffier (1709 : 394) の指摘と類似していると捉えることもできる。

現代フランス語においてリエゾン子音 [z] は複数を示す形態的マーカーであると考えられ  
ている。以上で観察した両コーパスの「複数形形容詞+複数形名詞」コンテキストにおける  
リエゾンの実現が絶対的ではないことを考慮すると、この時代においてはリエゾン子音 [z]  
は複数を示す形態的マーカーとして認識されていたとはいえないのではないだろうか。少  
し後の時代にはなるが、Moules (1761 : 138) では「複数形形容詞+複数形名詞」について以下  
のような証言が観察される。

« Tous les adjectifs pluriels en *s*, quand ils sont joints à des substantifs qui commencent par une voyelle. Exemples : *des grands hommes, des sublimes auteurs, des profonds abîmes* ; évitez de prononcer *des gran hommes, des sublime auteurs, des profon abîmes*, mais en transportant l'*s* de l'adjectif sur la voyelle du mot suivant, dites *des gran-zhommes, de sublime-z'auteurs, des profon-z'abîmes*, & ainsi des autres. »

Moules (1761 : 138)

「*s* を持つ全ての複数形形容詞が、母音で始まる名詞の前につながるとき、例えば「*des grands hommes, des sublimes auteurs, des profonds abîmes*」のような場合には、「*des gran hommes, des sublime auteurs, des profon abîmes*」のような発音は避けなさい。後に続く語の母音に形容詞の *s* を運んで、「*des gran-zhommes, de sublime-z'auteurs, des profon-z'abîmes*」のように発音しなさい。」

上記の説明から考察できることは、このコンテキストにおけるリエゾンの実現の文法化は、実際には徐々に進行したという可能性である。子音[z]のリエゾンが文法化することによって、複数性を示す形態的マーカーとしての機能の強さが増していったとも捉えることができる。

#### 8.1.3.2. 「冠詞（語末閉音節）+名詞/形容詞」

語末が閉音節で終わる冠詞には複数形の *quelques* および *plusieurs* がある。これらの冠詞は Milleran コーパスではリエゾンの実現率はそこまで高くはなく、Vaudelin コーパスではリエゾンの実現は観察されない。

	Milleran	Vaudelin
<i>quelques</i>	61,53% (8/13)	0% (0/3)
<i>plusieurs</i>	50% (7/14)	-

表 8-7 : *quelques* および *plusieurs* のリエゾン実現率

両コーパスのリエゾン実現率をみると、これらの冠詞においてリエゾンの実現が義務的ではないことが伺える。*quelques* について Hindret (1687 : 702)は、語末の *s* が発音されるが、常にではないという印象を与えている (Cf. Thurot, 1883 : 2 : 26)。また、前節の「複数形形容詞+複数形名詞」コンテキストと同様に、発音が期待されるリエゾン子音[z]のリエゾンが絶対的ではないことから、複数性を示す形態的マーカーとして確立していたわけではないと考えられる。

#### 8.1.4. 三人称屈折形におけるリエゾンの実現

Milleran コーパスと Vaudelin コーパスにおける動詞の屈折形におけるリエゾンを観察する

と、Milleran コーパスにおいては基本的にどの人称の屈折形でもリエゾンの実現率が高いことが明らかである。一方、Vaudelin コーパスにおいてリエゾンの実現率が比較的高いといえるのは三人称単数形および三人称複数形である。三人称単数形におけるリエゾンの実現率は 89,06%であり、これは他の人称と比較して最も高いリエゾンの実現率である。また、三人称複数形において、リエゾンの実現率は 59,09%である。

	Milleran	Vaudelin
三人称単数形	95,75% (428/447)	89,06% (293/329)
三人称複数形	66,67% (126/189)	59,09% (39/66)

表 8-8 : 三人称単数形と三人称複数形のリエゾン実現率

Milleran コーパスおよび Vaudelin コーパスにおいて共通する特徴は、三人称単数形において、リエゾンの実現率は三人称複数形よりも高いことである。Milleran コーパスにおいても同様の傾向が観察される。Milleran コーパスにおいて三人称単数形のリエゾン実現率は 95,75%であり、三人称複数形のリエゾン実現率は 66,67%である。

三人称複数形の活用語尾におけるリエゾンの有無については、例えば、Moules (1761 : 143-144)が三人称複数形の語末子音字を会話では脱落させることを推奨している。

« la troisième personne pluriel des verbes en *oient*, en *ent*, en *ont*. Exemples : *ils aimeroient à dire*, *il se repent en ce jour*, *sagement examiné*, *commandement inouüi*, *ils sont ici* ; prononcez en conversation, *ils aimeré à dire*, *il se repen en ce jour*, *sagemen examiné*, *commandamen inoui*, *ils son ici*. »

Moules (1761 : 143-144)

「*oient*、*ent*、*ont* を持つ複数形の三人称について。例 : *ils aimeroient à dire*, *il se repent en ce jour*, *sagement examiné*, *commandement inouüi*, *ils sont ici* は会話において、*ils aimeré à dire*, *il se repen en ce jour*, *sagemen examiné*, *commandamen inoui*, *ils son ici* と発音せよ。」

よって、三人称複数形はおそらくスタイルがかしこまったものであれば、リエゾンが実現されると解釈できるだろう。

さらに興味深いことは、三人称複数形においては語末の音節構造によってリエゾンの実現率が異なることが観察されることである。以下に開音節語末と閉音節語末のリエゾン実現率を示した表を挙げる。

三人称複数形	Milleran	Vaudelin
開音節 語末	91,43%	78,72%
閉音節 語末	52,1%	10,53%
全体平均	<b>66,67% (126/189)</b>	<b>59,09% (39/66)</b>

表 8-9 : 三人称複数形における語末音節構造による  
リエゾン実現率の違い

Milleran のコーパスにおいて三人称複数形のリエゾン実現率の平均は 66,67%であるが、開音節語末ではリエゾン実現率は 91,43%まで上昇し、閉音節語末ではリエゾンの実現率は平均値よりも低い 52,1%である。また、Vaudelin コーパスにおいては開音節語末のリエゾン実現率は 78,72%であり、閉音節語末のリエゾン実現率は 10,53%とかなり低い値となる。これに関しては、Restaut (1732 : 314) は-ont は-ent よりも語末子音字が発音されやすいというような証言を残している。

« Il est assez d’usage de prononcer aussi le *t* final dans les troisièmes personnes du pluriel des Verbes, lorsque leur dernière syllabe n’a pas le son de l’e muet ; comme dans, *ils vont à Rome. Ils sont à Paris. Elles étoient à table. Ils espéroient en venir à bout*, &c. au lieu qu’il faut prononcer, *Ils donnent à manger tous les jours*, comme s’il y avoit *ils donne à manger*, &c. »

Restaut (1732 : 314)

「語末の音節が無音の *e* の音を持たない時、動詞の複数形三人称において語末 *t* を発音することは十分慣用的である。例えば、*ils vont à Rome. Ils sont à Paris. Elles étoient à table. Ils espéroient en venir à bout* などのように。その代わりに、*Ils donnent à manger tous les jours* は、あたかも *ils donne à manger* のように発音する。」

これはリエゾンが起きる語の直前で、語末に子音が発音される活用語尾よりも、語末に母音が発音される活用語尾の語末子音字が発音されやすいということである。

## 8.2. 両コーパスにおいて異なる傾向

以下では両コーパスにおいて異なる傾向についての観察を行う。

## 8.2.1. 名詞句

### 8.2.1.1. 「冠詞+名詞」

「冠詞+名詞」コンテキスト<sup>146</sup>において興味深いことは、Vaudelin のコーパスにおいてリエゾンの実現率が 100%であるのに対して、Milleran のコーパスではリエゾンの実現が常に起こる訳ではない点である。

	Milleran	Vaudelin
冠詞+名詞	86,12% (242/281)	100% (199/199)

表 8-10 : 「冠詞+名詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率

17 世紀の文法家 Chiflet (1659 : 206)は、「冠詞+名詞」コンテキストに限定した説明を与えているわけではないが、単数形かつ語末に *-n* を持つ冠詞 *mon, ton, son, un* について以下のように説明している。

« [...] *Mon, ton, son, & vn*, deuant les substantifs & les adjectifs, commencez par des voyeles, sonnet leur *n* : comme, *Mon ami, ton aimable frere, vn enfant, vn autre jour, vn excellent peintre*. Lisez, *mon-nami, vn-nanfant, vn-nautre &c.* »

「母音で始まる名詞および形容詞の前において *Mon, ton, son, & vn* の *n* は発音される。*Mon ami, ton aimable frere, vn enfant, vn autre jour, vn excellent peintre* は *mon-nami, vn-nanfant, vn-nautre* のように発音しなさい。」

さらに以下に挙げる Chiflet (1659 : 208)による定冠詞 *les* についての説明も参考にできるだろう。

« Quant à l'*s*, c'est vne regle generale qu'elle se prononce entre deux voyelles, & qu'elle prend le son du *z* : comme ; *Faites encore le mesme. Les Anges & les hommes*. Lisez : *Faite-zan core : Lay-zange-zé-zommes.* »

「*s* については、2つの母音の間で発音され、そして *z* の音が用いられるのが一般的な規則である。*Faites encore le mesme. Les Anges & les hommes* は *Faite-zan core : Lay-zange-zé-zommes* のように読みなさい。」

また、Hindret (1687 : 202-203)は語末子音が発音される語の大部分として、それらの語のリ

<sup>146</sup> *quelques* および *plusieurs* を除く。

ストを挙げているが、この中に冠詞も多く見られる。例えば、Hindret (1687 : 202-203)はこれらの冠詞として、*les, des, aux, mon, ton, son, leur, mes, tes, ses, nos, vos, leurs, cet, ces* を挙げており、また例文として以下に挙げるような連辞を提示している。

*Les avis, des hommes, aux enfans, mon hote, ton amy, mes ancestres, tes ayeux, ses yeux, nos armées, vos ouvrages, leurs ordres, cet esprit, ces exemples.*

Milleran コーパスにおいて、冠詞のリエゾンが安定的に実現されない点について、Crevier (1994 : 264)は、以下のように述べている。

« La source de la variation observée pour les et pour mes ne serait probablement due qu'à la généralisation de la forme sans consonne finale à tous les contextes. »

Crevier (1994 : 264)

「les および mes について観察された変異の原因は、おそらく全てのコンテキストにおける語末子音字が脱落した形が一般化されたせいである。」

しかし、「冠詞+名詞」のコンテキストにおいてリエゾンが実現されない Milleran の発音は、この時代においても孤立していると考えられる。

#### 8.2.1.2. 「名詞+形容詞」

「名詞+形容詞」のコンテキストには、単数形および複数形がある。Milleran コーパスにおいては単数形および複数形どちらにおいてもリエゾンの実現が観察される。それに対して Vaudelin コーパスにおいてはリエゾンの実現は全く観察されない。以下に実現率を示した表を提示する。

	Milleran	Vaudelin
単数形	75% (18/24)	0% (0/30)
複数形	34,61% (9/26)	0% (0/13)

表 8-11 : 「名詞+形容詞」 コンテキストにおけるリエゾン実現率

ここで文法書における指摘を考慮してみよう。まず、「単数形名詞+単数形形容詞」のコンテキストについて Buffier (1709 : 395)は親しい間の会話において語末子音字の発音は必要ないとしている。

« Le t final dans le discours familier ne se prononce point d'ordinaire, même devant une voyele, précédé d'r ou d'n : *une mort afreuse, un pédant importun* ; prononcez, *mor*

*afreuse, pedan importun (...)* »

Buffier (1709 : 395)

「親しい間柄の会話において *r* もしくは *n* が先行する語末の *t* は、母音の前で普通全く発音されない。よって、*une mort afreuse, un pédant importun* は、*mor afreuse, pedan importun* と発音しなさい。」

ただし、Buffier (1709 : 395)が例に出した形容詞は語末で *-r* が安定的に発音される形容詞 *mort*、そして鼻母音語末の形容詞 *pédant* である。それ以外の形容詞についての一般的傾向はこの説明から明らかであるとは言い難い。さらに、Moules (1761 : 138)もやはり、高尚なスタイルにおいては特に複数形の「名詞+形容詞」のリエゾンが実現することを指摘している。以下にその説明を引用する。

«L's finale est sonante en poésie & dans le discours soutenu, dans les exceptions ci-dessus & toutes les fois qu'elle est devant un mot qui commence par une voyelle. Ainsi, quoique dans la conversation on dise *cruauté inoüies*, il faudra prononcer en poésie & dans le discours soutenu, *cruauté zinoüies, armée-zinnombrable, homme-zavare, & non armée innombrable, homme avare, mes frere-z& soeurs*, quoique la conversation admette, *mes frere & soeur.* »

Moules (1761 : 138)

「以下の例外において、詩文とかしこまった演説において語末の *s* は、母音で始まる語の前にあるときには常に、発音される。つまり、会話においては *cruauté inoüies* と発音するにもかかわらず、詩文とかしこまった演説においては *armée innombrable, homme avare* とではなく、*cruauté zinoüies, armée-zinnombrable, homme-zavare* のように発音する。会話は *mes frere & soeur* という発音を許すが、*mes frere-z& soeurs* と発音する。」

以上の文法書の引用を踏まえた上で、Milleran コーパスと Vaudelin コーパスにおけるリエゾンの実現の違いを考えると、Milleran のフランス語で用いられているスタイルは韻文的もしくは演説的なもの、Vaudelin のフランス語で用いられているスタイルは会話的であるといえる。ところで、現代フランス語において、いくつかの複合語<sup>147</sup>を除けば、「単数形名詞+単数形形容詞」のコンテキストではリエゾンの実現は禁止的であるとされている (Delattre, 1966)。

次に、「複数形名詞+複数形形容詞」コンテキストにおいて、Milleran コーパスにおいてリ

<sup>147</sup> 例えば、Delattre (1966 : 47-48)は *un fait accompli, un guet-apens, accent aigu, le cas échéant* といった複合語を挙げている。

エゾンの実現率は 34,61%と低めではあるが、リエゾンの実現が観察された一方で、Vaudelin コーパスにおいてはリエゾンの実現が観察されなかった。Milleran のフランス語が書き言葉的であり、Vaudelin のフランス語が口語的であるという特徴を持つと仮定した場合に、このコンテキストにおけるリエゾンの実現は口語においては特に求められているわけではない、ということである。そして、Buffier (1709 : 394)が「しかし、大変高尚な発音においては、*r* もしくは *l* の後の語末の *s* は発音されることもある。つまり、*des tresors immenses, des chevreuils animez* のようなものである。(« neanmoins dans la prononciation fort soutenu l's finale se prononceroit après *r* ou *l*, *des tresors immenses, des chevreuils animez*. »)」と述べているように、書き言葉を朗読するようなスタイルのフランス語においてはリエゾンの実現は可能である。

Milleran コーパスでは、特に「複数形名詞+複数形形容詞」において、名詞の語末が開音節である場合には、閉音節である場合よりも高いリエゾンの実現率が高いことが観察された。

	L	NL	Total	%
開音節	7	5	12	58,33%
閉音節	2	12	14	14,29%
<b>Total</b>	<b>9</b>	<b>17</b>	<b>26</b>	<b>34,61%</b>

表 8-12 : 「複数形名詞+複数形形容詞」コンテキストにおける語末音節構造によるリエゾン実現率の違い

つまり、Milleran コーパスの「複数形名詞+複数形形容詞」において語末音節が開音節の場合のリエゾンの実現率は 58,33%であり、閉音節の場合には 14,29%である。語末音節が開音節である場合には、閉音節である場合よりもリエゾンの実現する確率が高いと考えられる。また、複数形の場合には語末の綴り字が *-s* もしくは *-x* であるため、リエゾン子音[z]の実現が期待される。この子音が複数性を示す形態的機能を持つと言われていることは本論文で何度も述べているが、このコンテキストから考察する場合にも複数性を示すマーカであるリエゾン子音[z]の発音は特に優先的であるとはいえない。また、「複数形名詞+複数形形容詞」は選択的コンテキストに分類される。例えば、Ågren (1973 : 125)のラジオコーパスにおいてはリエゾンの実現率は 26%である。

### 8.2.3. 動詞句

動詞句においては、「動詞の屈折形+」の特に一人称単数形、一人称複数形、二人称単数形および二人称複数形で、そして「過去分詞+」と「ジェロンディフ+」の 2 つのコンテキストにおいて、Milleran コーパスでより高いリエゾン実現率が観察された。



### 8.2.3.1. 動詞の屈折形

Milleran コーパスでは、動詞の屈折形の一人称単数形、一人称複数形、二人称単数形、二人称複数形において高いリエゾン実現率が観察された。Vaudelin コーパスにおいてこれらの屈折形のリエゾンの実現率は大変低いといえる。

	Milleran	Vaudelin
一人称単数	80,77% (21/26)	0% (0/9)
二人称単数	100% (3/3)	22,22% (2/9)
一人称複数	60% (6/10)	6,25% (1/16)
二人称複数	76% (57/75)	14,89% (7/47)

表 8-13 : 動詞の屈折形 (一人称および二人称) におけるリエゾン実現率

ところで、これらの活用形の語尾は語末子音字-sもしくは-zであり、実現が期待されるリエゾン子音は[z]である。Vaudelin コーパスにおいてリエゾンの実現がほとんど観察されないことから、動詞の屈折形における[z]のリエゾンは話し言葉においてはそれほど必要性がなかったとも考えられる。それに対して、韻文および演説においてこれらの動詞の屈折形のリエゾンを実現することが求められていたと解釈できるだろう。

### 8.2.3.2. 過去分詞

過去分詞とその後続語におけるコンテキストでは、両コーパスにおいてリエゾンの実現が観察された。しかし、リエゾンの実現率は大きく異なる。Milleran コーパスにおいてリエゾン実現率は非常に高く、93,33%である。それに対して Vaudelin コーパスにおいてリエゾンの実現率は50%と Milleran コーパスと比較すると約半分の実現率である。

	Milleran	Vaudelin
過去分詞	93,33% (28/30)	50% (8/16)

表 8-14 : 過去分詞におけるリエゾン実現率

Milleran コーパスと Vaudelin コーパスにおける過去分詞のリエゾンで共通するのは、どちらも過去分詞の語末子音字が-t である場合にリエゾンが実現しやすいということである。Milleran コーパスにおいては過去分詞の語末子音字が-t の場合には常にリエゾンが実現した。Vaudelin コーパスでは過去分詞の語末子音字が-t である場合にはリエゾンが実現するが、語末子音字が-z である場合にはリエゾンの実現が観察されない。

### 8.2.3.3. ジェロンディフ

ジェロンディフとその後続語におけるコンテキストにおいては、両コーパスにおいてリ

エゾンの実現率は大きく異なるといえる。まず、Milleran コーパスにおいてリエゾンの実現率は 82,61%である。それに対して、Vaudelin コーパスでは、リエゾンの実現は珍しく、実現率は 9,38%である。以下に数値を示した表を提示する。

	Milleran	Vaudelin
ジェロンディフ	82,61% (38/46)	9,38% (3/32)

表 8-15 : ジェロンディフにおけるリエゾン実現率

Vaudelin コーパスにおけるジェロンディフのリエゾンの実現率の低さから言えることは、このリエゾンの実現は口語において、そこまで重要ではないということである。

#### 8.2.4. 接続詞 *et, ou*

接続詞 *et* および *ou* とその後続語のコンテキストでは、Milleran コーパスではリエゾンの実現が可能である。まず、接続詞 *et* ではリエゾンの実現率が 34,45%、そして接続詞 *ou* ではリエゾンの実現率は 35,34%である。それに対して、Vaudelin コーパスでは、接続詞 *et* ではリエゾンの実現率が 0%、そして接続詞 *ou* ではリエゾンの実現率は 11,11%である。

	Milleran	Vaudelin
+ 接続詞 <i>et</i>	34,45% (41/119)	0% (0/125)
+ 接続詞 <i>ou</i>	35,34% (41/116)	11,11% (1/9)
<b>Total</b>	<b>34,89% (82/235)</b>	<b>0,75% (1/134)</b>

表 8-16 : 「+接続詞 *et, ou*」コンテキストにおけるリエゾン実現率

Milleran コーパスにおけるリエゾン実現率は Vaudelin コーパスよりも高いが、この実現率の数値は決して高いとは言えない。Vaudelin コーパスにおけるこのリエゾン実現率の低さは、丁寧なスタイルが用いられた場合においても、このコンテキストではリエゾンの実現はそれほど要求されないということを示している。

「+接続詞 *et, ou*」におけるリエゾンの必要性について、Chiflet (1659)の提言は幾分か曖昧なものである。Chiflet (1659 : 205)は「*Peti & Joli. Bon & beau. Gran & gros. Devan & Derriere. Il alloy & venoit. Allan & venant. Veut-on aller là, &c.*」のようなコンテキストでは子音を発音しないと指示しているのに対して、*sang* と *bourg* について *sang & la vie* および *le bourg & la ville* については、接続詞 *et* の前で *sanc* および *bourc* と発音するように指示している。

また、Restaut (1732 : 313)は「+接続詞 *et*」の例文を提示し、会話において接続詞の前でリエゾンを実現することは学識をひけらかすような行いであると批判している。以下に引用を挙げる。

« (...) dans la prose commune & dans le discours ordinaire, ce seroit une affectation ridicule, & qui tiendroit du pédantisme, que de vouloir prononcer les consonnes finales & même les *s* & les *t* avant les mots qui commencent par une voyelle ou par un *h* non aspirée, aussi exactement que dans les vers & dans le discours soutenu. Ainsi on prononce, *Mes freres & vos soeurs reviennent ensemble*, comme s'il y avoit, *Mes frere & vos soeurs reviennen ensemble (...)* »

Restaut (1732 : 313)

「普通の散文そして普通の会話において、韻文やかしまった演説と同じように、語末子音、特に *s* や *t* を母音の前で発音したがるようなことというのは、学者ぶることを許す馬鹿げた気取りである。」よって、*Mes freres & vos soeurs reviennent ensemble* はあたかも *Mes frere & vos soeurs reviennen ensemble* のように発音する。」

つまり、*Mes freres & vos soeurs* の名詞 *freres* の語末の *-s* は接続詞 *et* の前においてリエゾン子音として発音されないということである。以上の Restaut (1732 :313)の説明からは、接続詞 *et* の前でリエゾンを実現することは、韻文や演説では可能であるが、会話において必要ではないことが明白である。

現代フランス語においてこのコンテキストのリエゾンは選択的であるが、定型表現的な連辞においてはリエゾンの実現は義務的である。そのようなコンテキストとして、Delattre (1966 : 47-48)は「*Mesdames et Messieurs, pieds et poings liés, ses faits et gestes, monts et merveilles, ponts et chaussées, arts et métiers, tant et plus, nuit et jour*」を例として挙げている。

### 8.2.5. 「名詞+動詞」

「名詞+動詞」のコンテキストにおいて、Milleran コーパスではリエゾンの実現が観察され、リエゾン実現率は 53,13%である。それに対して、Vaudelin コーパスではリエゾンの実現は観察されない。

	Milleran	Vaudelin
「名詞+動詞」	53,13% (17/32)	0% (0/16)

表 8-16 : 「名詞+動詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率

例えば、Chiflet (1659)はこのコンテキストにおけるリエゾンは可能であると考えているようだが、常にリエゾンが実現されるわけではないことも察することができる。例えば、Chiflet (1659)以下のような例ではリエゾンが実現されると説明している。

- *Tout le camp est alarme* (p.207)
- *Les rangs estoit doubles* (p. 208)

それに対して、以下の例では、語末子音字-tを発音しないように指示している。

- *L'estat / est en trouble* (p. 209)

特に、Vaudelin コーパスにおいてリエゾンの実現が全く観察されないこと、そして Milleran コーパスではリエゾンの実現は観察されるもののそれほど安定的にリエゾンが実現するわけではない。残念ながら、文法書を調査する過程でこのコンテキストのリエゾンについての説明は特に見受けられなかった。よって、もし両コーパスの比較にのみに頼るのであれば、「名詞+動詞」コンテキストにおいては、おそらく韻文および演説ではリエゾンの実現は可能ではあるが義務的というわけではなく、会話においてはリエゾンを実現する必要はないと解釈できる。

### 8.3. 形態的マーカーに関する考察

#### 8.3.1. 複数性を示す[z]

2つのコーパスにおいて、複数性を示すとも考えられるリエゾン子音[z]が「複数形形容詞+複数形名詞」、「冠詞 *quelques, plusieurs* + 形容詞/名詞」、「複数形名詞+複数形形容詞」のようなコンテキストで常に発音されるわけではない。

まず、Vaudelin (NM, p.9-10)は語末の子音字の発音について以下のように述べている。

« Une Consonne à la fin d'un mot n'est souvent qu'une Lettre de Prononciation, c'est à dire qu'elle ne sert point à la signification du mot, & qu'elle y est ajoutée seulement pour adoucir la prononciation, en empeschant la rencontre, & la rude choc de deux voyelles, (...) »

(Vaudelin, NM, p.9-10)

「語末の子音はしばしば発音の文字でしかない。つまり、単語の意味に役立つことはなく、2つの母音の耳障りな衝突を和らげるためにだけ付け加えられる。」

以上の Vaudelin の引用から察することができるのは、語境界において2つの母音の衝突さえなければ、語末子音字を発音する必要は特にないということである。また、「単語の意味に役立つことはない」ということは、語末子音字-s, -xが必ずしも複数性を示すということでもないと考えることもできる。よって、「複数形形容詞+複数形名詞」、「冠詞 *quelques, plusieurs*+形容詞/名詞」、「複数形名詞+複数形形容詞」のようなコンテキストにおいて、リ

リエゾン子音[z]が必ずしも義務的に実現されるわけではない理由は、リエゾン子音[z]が複数性を示す機能の認識が定着していなかったと考えることができる。

### 8.3.2. 三人称マーカークの[t]

両コーパスにおいて動詞の三人称単数の屈折形のリエゾン実現率が非常に高いことが観察された（Milleran では 95,75%、Vaudelin では 89,06%）。特に Vaudelin コーパスにおいてその他の人称の屈折形ではリエゾン実現率が低く、唯一リエゾンが比較的安定して実現されるのが三人称単数の屈折形である。つまり、三人称単数形のコンテキストにおいてはリエゾンの実現は他の動詞の屈折形と違い、かなり義務的であるといえる。それに対して、三人称複数の屈折形のリエゾン実現率は特に高いとはいえず、さらに韻文・演説スタイルでなければリエゾンの実現は義務的ではないというような証言が目立つ。また、同じ動詞句であっても、Vaudelin コーパスにおけるジェロンディフと過去分詞におけるリエゾンの実現は全く安定的であるとはいえない。このことから、リエゾン子音[t]は動詞マーカークではなく、やはり三人称単数形マーカークという限定された機能を持っていたと捉えることもできる。

## 8.4. スタイルに関する考察

Milleran と Vaudelin のコーパスにおけるリエゾンの実現を比較した場合に、様々なリエゾンコンテキストにおいて、リエゾン実現率は Milleran コーパスにおいてより高いことは明らかである。

名詞句については、例えば「名詞+形容詞」のコンテキストにおいては Vaudelin コーパスでは全くリエゾンの実現が観察されないのに対して、Milleran コーパスではリエゾンの実現が観察される。動詞句については、人称屈折形、ジェロンディフ、過去分詞とその後続語のリエゾンは常に Milleran コーパスにおいて Vaudelin コーパスよりも高いリエゾン実現率が観察された。また、特にこの2つのコーパスにおいて顕著な違いとして、「+接続詞 *et, ou*」および「名詞+動詞」のコンテキストにおいて、Vaudelin コーパスではほとんど、もしくは全くリエゾンの実現が観察されないのに対して、Milleran コーパスではリエゾンの実現がそれなりに観察されることである。この Milleran コーパスにおけるリエゾンの実現率の高さは、スタイルの違いから生じるものであると考える。Milleran と Vaudelin の目的には、「良き発音」を教える、という共通点があるが、本の趣旨は異なる。まず、Milleran の書は文法書であり、発音に対する説明書きが多く、用いられているスタイルも文語的である。それに対して、Vaudelin の書においては、祈りや教理問答を発音記号で記述されており、より口語的なスタイルが使用されていると考えた。つまり、これらのリエゾンを実現することは丁寧なスタイルが用いられた口語体では特に必要ないが、韻文を読む際、そして演説を行うような場合は綴り字にできるだけ忠実に発音されることが要求されることも考えることができる。これは程度は違うが現代フランス語においても同じようなことが Mallet (2008 : 189)によって指摘されている。つまり、テキストの朗読においては、会話においてよりもリエゾ

ンが実現されるということである。

## 8.5. 第八章のまとめ

### 8.5.1. MOT1 の長さのリエゾン実現への影響

2つのコーパスにおいて、リエゾンの実現における MOT1 (左側の語) の音節数の影響は顕著であった。単音節語のリエゾンの実現率が高い理由として、冠詞 (*un, des, les, mon, ton, son, mes, tes, ses, vos, nos, leurs, etc*)、人称代名詞 (*il, nous, vous, ils, elles, en, les*)などリエゾンの実現率が高い品詞がそもそも単音節であるということが考えられる。

### 8.5.2. MOT1 の語末音節構造のリエゾン実現への影響

MOT1 の語末の音節構造がリエゾンの実現に影響することも観察された。両方のコーパスにおいて開音節語末の語のリエゾン実現率は、閉音節語末の語のリエゾン実現率よりも高いことが観察された。つまり、母音接続がある場合には、リエゾンの実現が優先される可能性が高く、MOT1 の語末で子音が安定的に発音されるような場合には、リエゾンの実現はそこまで優先的であるわけではないと解釈することもできる。

### 8.5.3. 複数性マーカー[z]

「複数形形容詞+複数形名詞」、「冠詞 *quelques, plusieurs*」、「複数形名詞+複数形形容詞」のようなコンテキストにおいて、複数性という形態的機能を持つことが考えられるリエゾン子音[z]は常に安定的に発音されるわけではないことが、両コーパスの分析から明らかになった。特に、MOT1 の語末が閉音節で、MOT2 の語頭音節との母音接続が回避されている場合には、リエゾン子音[z]の実現がないという様子も観察された。よって、リエゾン子音[z]がこの時代に必ずしも複数性マーカーとして機能していたわけではない。しかし、Vaudelin コーパスにおいては、間違ったりリエゾンであると考えられる例も観察される。以下にその例を再度提示する。

« un comairs de priaïr, ce nou *leuz adraison* », IC, p.92.

[ɑ̃ komɛrs də pri/(j)ɛr, kə nu lœz adresɔ̃]

= un commerce de prière, que nous *leur adressons*,

以上の例で注目すべき点は、人称代名詞 *leur* と動詞 *adressons* の間に綴り字の s が存在しないにも関わらず、[z]の音が発音されていることである。これについて Kawaguchi (2011)は2つの可能性を与えている。第一の可能性とは、[z]が複数を表す形態的マーカーだということである。第二の可能性は、母音に r や z が挟まれて発音された場合に、置換が起こる現象である(例: *cousin*⇒*courin*、*Marie*⇒*Masie*)。Hindret (1687: 234)は人称代名詞 *leur* が *leuz* のように[z]を伴って発音されることを批判している。Hindret の時代の頃には複数性を示す形

態的マーカーとしての機能を担い始めていたとも考えられる。

#### 8.5.4. 三人称単数マーカー[t]

両コーパスにおいて動詞の三人称単数の屈折形のリエゾン実現率が非常に高いことが観察された。Milleran のコーパスでは動詞の屈折形におけるリエゾンの実現率はどの人称においても一様に高いが、それに対して Vaudelin コーパスではその他の人称の屈折形ではリエゾン実現率が低く、唯一リエゾンが比較的安定して実現されるのが三人称単数の屈折形である。やはり、三人称単数形のコンテキストにおいてはリエゾンの実現は他の動詞の屈折形と違い、かなり義務的であるといえる。これは、動詞の屈折形がリエゾンコンテキストにある場合に、リエゾン子音[z]ではなくリエゾン子音[t]が実現されやすいことを意味する。

さらに、三人称単数形と比較すると、三人称複数形のリエゾン実現率は特に高いとはいえず、さらに韻文・演説スタイルでなければリエゾンの実現は義務的ではないというような文法家の証言が目立つ。このことから、リエゾン子音[t]が形態的機能を示すマーカーとなりえるのであれば、動詞マーカーではなく、やはり三人称単数形マーカーという限定された機能を持ち得るとも考えられる。ただし、本研究で使用したコーパスにおいては、この三人称単数マーカー[t]が挿入される間違っただけのリエゾンは観察されない。

#### 8.5.5. スタイルの違い

本研究では Milleran コーパスと Vaudelin コーパスの比較をする意義として、この 2 つの文献が記述される際に選ばれたフランス語のスタイルの違いを観察できることを挙げた。Milleran (1694)の文献は 17 世紀末に、そして Vaudelin (1713, 1715)の文献は 18 世紀初頭に掲載されているため、通時的变化が観察されることが期待できると考えられる可能性も考慮された。ただし、実際にはこれら 2 人の著者は同時代に生きた人々であるとする方が適格であると判断した。Milleran の書は文法書であり、発音に対する説明書きが多い。それに対して、Vaudelin の書は特に IC の方では祈りと教理問答が発音記号で記してある。この違いから Milleran (1694)のフランス語はより文語的であり、そして Vaudelin (1713, 1715)のフランス語はより口語的であるということが考えられる。よって、Milleran と Vaudelin の目的には、「良き発音」を教えることであるという共通点があるが、これらの文献自体の目的における趣旨は異なることを指摘した。

Milleran と Vaudelin のコーパスにおけるリエゾンの実現を比較した場合に、様々なリエゾンコンテキストにおいて、リエゾン実現率は Milleran コーパスにおいてより高いことは明らかである。名詞句については、例えば「名詞+形容詞」のコンテキストにおいては Vaudelin コーパスでは全くリエゾンの実現が観察されないのに対して、Milleran コーパスではリエゾンの実現が観察される。動詞句については、人称屈折形、ジェロンディフ、過去分詞とその後続語のリエゾンは常に Milleran コーパスにおいて Vaudelin コーパスよりも高いリエゾン実現率が観察された。また、特にこの 2 つのコーパスにおいて顕著な違いとして、「+ 接

続詞 *et, ou* および「名詞+動詞」のコンテキストにおいて、**Vaudelin** コーパスではほとんど、もしくは全くリエゾンの実現が観察されないのに対して、**Milleran** コーパスではリエゾンの実現が観察されることである。この **Milleran** コーパスにおけるリエゾンの実現率の高さは、スタイルの違いから生じるものであると考える。逆に言えば、この時代に、より丁寧な発音をすることを心掛ける場合には、上記に挙げたリエゾンコンテキストにおいてリエゾンを実現することが重要であったということがうかがえる。



## 結論

### 1. 本研究のまとめ

本研究は、17世紀末および18世紀初頭のフランス語におけるリエゾンを対象としてきた。音声現象であるリエゾンを、実際に録音された音声からではなく文献調査によってどのように研究できるのかという問題点を、語末子音字の発音有無を確認することが可能な文献をコーパスとして用いることで克服し、さらに16世紀から18世紀に出版された文法書の調査を行うことで当時の規範におけるリエゾンの姿を映し出すように努めた。本研究では17世紀末のRené Milleran (1694)の文献および18世紀初頭のGile Vaudelin (1713, 1715)の文献をコーパスとして使用し、語末子音字の発音の様子、そしてこの時代にリエゾンがどのように実現されていたのかについて調査を行った。本研究では、2つのコーパスでそれぞれ用いられるスタイルが、「書き言葉的 (Milleran コーパス)」、そして「話し言葉的 (Vaudelin コーパス)」という2つの異なるものであると仮定し、この2つの異なるスタイルのフランス語においてリエゾンの実現がどのように異なるのかということ明らかにした。

2つのコーパスを比較することによって、いくつかのことが明らかになった。まず、言語内の要因である語の長さ、音節構造の種類がリエゾンの実現に影響していることである。

**(1) 語の長さ :** 2つのコーパスにおいて、リエゾンの実現におけるMOT1 (左側の語) の音節数の影響は顕著であった。つまり、MOT1が単音節の語であれば、リエゾンの実現率が高いということである。この傾向については現代フランス語を対象にした先行研究においても既に観察されている (Delattre, 1966 : 43-48 ; Ågren, 1973 : 30 ; Booij & De Jong, 1976 : 1013 ; Encrevé, 1983 : 52 ; Fougeron *et al*, 2001 ; Mallet, 2008 : 270-271)。そして、単音節語のリエゾンの実現率が高い理由として、冠詞 (*un, des, les, mon, ton, son, mes, tes, ses, vos, nos, leurs, etc*)、人称代名詞 (*il, nous, vous, ils, elles, en, les*)などリエゾンの実現率が高い品詞がそもそも単音節であるということが考えられる。

**(2) 音節構造の種類 :** MOT1の語末の音節構造がリエゾンの実現に影響することも観察された。2つのコーパスにおいて開音節語末の語のリエゾン実現率は、閉音節語末の語のリエゾン実現率よりも高いことが観察された。つまり、母音接続がある場合には、リエゾンの実現が優先される可能性が高く、MOT1の語末で子音が安定的に発音されるような場合には、リエゾンの実現はそこまで優先的であるわけではないと解釈することができる。

次に、リエゾン子音[z]および[t]の形態的マーカーとしての機能の確立について考察を行った。

(3) 複数性マーカーとしてのリエゾン子音[z] : 「複数形形容詞+複数形名詞」、「冠詞 *quelques, plusieurs+*」、「複数形名詞+複数形形容詞」のようなコンテキストにおいて、複数性という形態的機能を持つと考えられているリエゾン子音[z]は常に安定的に発音されるわけではないことが、両コーパスの分析から明らかになった。MOT1 の語末が閉音節であり、MOT2 の語頭音節との母音接続が回避される場合には、リエゾン子音[z]が実現しないという様子も観察された。よって、リエゾン子音[z]がこの時代に必ずしも複数性マーカーとして機能していたわけではないことが考えられる。しかし、時代を追うごとに上記に挙げたコンテキストにおけるリエゾンが安定的に実現されるようになることで、この複数性を示す機能が文法化され、その定着が起こったと考えられるのではないだろうか。

(4) 三人称マーカーとしてのリエゾン子音[t] : 両コーパスにおいて動詞の三人称単数の屈折形のリエゾン実現率が非常に高いことが確認された。Milleran のコーパスでは動詞の屈折形におけるリエゾンの実現率はどの人称においても一様に高いが、それに対して Vaudelin コーパスでは三人称以外の屈折形ではリエゾン実現率が低く、唯一リエゾンが比較的安定して実現されるのが三人称単数の屈折形である。よって、三人称単数形のコンテキストにおいてリエゾンはかなり義務的であったといえる。さらに、三人称単数形と比較すると、三人称複数形のリエゾン実現率は特に高いとはいえず、韻文・演説でなければリエゾンの実現は義務的ではないというような文法家の証言が目立つ (Cf. Moules, 1761 : 143-144)。このことから、リエゾン子音[t]が形態的機能を示すマーカーとなりえるのであれば、やはり三人称単数形マーカーという限定された機能を持ち得るとも考えられる。ただし、本研究で使用したコーパスにおいては、動詞句においてこのリエゾン子音[t]が挿入される間違ったりエゾンは観察されない。しかし、時代を追うごとに、このような間違ったりエゾンの実現は増加したということも予想できる。

両コーパスの分析から、リエゾンの実現に対するスタイルの違いの影響は本コーパスにおいても顕著に見られた。

(5) スタイルの違い : 本研究では Milleran コーパスと Vaudelin コーパスの比較をする意義として、この 2 つの文献が記述される際に選ばれたフランス語のスタイルの違いを観察できることを挙げた。両コーパスで記述されたフランス語の違いとして、Milleran (1694)のフランス語はより文語的であり、そして Vaudelin (1713, 1715)のフランス語はより口語的であるということが考慮された。Milleran コーパスと Vaudelin のコーパスにおけるリエゾンの実現を比較した場合に、様々なリエゾンコンテキストにおいて、Milleran コーパスにおけるリエゾン実現率は Vaudelin コーパスのものよりも高いことが明らかであった。名詞句については、例えば「名詞+形容詞」のコンテキストにおいては Vaudelin コーパスでは全くリエゾンの実現が観察されないのに対して、Milleran コーパスではリエゾンの実現が観察される。動詞句については、人称屈折形、ジェロンディフ、過去分詞とその後続語のリエゾンは常に

Milleran コーパスにおいて Vaudelin コーパスよりも高いリエゾン実現率が観察された。また、特にこの2つのコーパスにおいて顕著な違いとして、「+接続詞 *et, ou*」および「名詞+動詞」のコンテキストにおいて、Vaudelin コーパスではほとんど、もしくは全くリエゾンの実現が観察されないのに対して、Milleran コーパスではそれなりの頻度で観察されることである。よって、この Milleran コーパスにおけるリエゾン実現率の高さは、スタイルの違いから生じるものであると結論付けた。そして、この時代に演説や詩の朗読の際には、上記に挙げたリエゾンコンテキストにおいてリエゾンを実現することが重要であるといえる。ただし、普通の会話におけるリエゾンの過剰な実現は、批判される対象であったということも忘れてはならない (Cf. Restaut, 1732 : 313)。

本研究で得られたリエゾンの実現傾向は、現代フランス語の傾向に比較的類似するものである。ただし、時代を追うごとに規範自体が変化するため、リエゾンの実現に対する規範も変化を免れないだろう。例えば、本研究では「形容詞+名詞」のコンテキストで必ずしもリエゾンが義務的に実現されるわけではないことが確認された。さらに「複数形形容詞+複数形名詞」のコンテキスト (Ex : *pauvres artisans*)において、複数性を示す形態素 *-s* は必ずしもリエゾン子音 [z] として MOT2 の語頭で発音されるわけではないという傾向も観察された。それに対して、現代フランス語において、このコンテキストにおけるリエゾンの実現は比較的安定的に観察されるものである<sup>148</sup>。リエゾンの変化に関して Dauzat (1930 : 143) が以下のように説明している。

« La liaison s'est heurtée à l'hostilité du peuple, qui y répugne, tandis que les grammairiens se sont efforcés d'en étendre l'usage. Dans la bonne société, elle avait perdu du terrain du XVIe au XVIIe siècle pour des raisons phonétiques ; elle en a regagné du XVIIIe au XIXe époque où elle a atteint son maximum. Depuis un demi-siècle, le nombre des liaisons va en diminuant dans ces milieux, fait très frappant lorsqu'on compare le langage d'une même famille à une et surtout à deux générations de distance. »

Dauzat (1930 : 143)

「リエゾンは嫌悪を抱く民衆の敵意にさらされる一方で、文法家はその使用を広げようと努力した。16世紀から17世紀にかけて、リエゾンの存在は薄れた。18世紀から19世紀にかけて、リエゾンはまたその存在を得ることになり、この時代は最もリエゾンがなされた。半世紀前から、リエゾンの数は減少し始めた。家族代々の言語、特に2世代を比較すると明らかである。」

---

<sup>148</sup> 例えば、Delattre (1966)によって、「形容詞+名詞」コンテキストは義務的リエゾンに分類されている。

「16 世紀から 18 世紀にかけて、リエゾンの存在が薄れた」という Dauzat の指摘が正しいか否かを判断することはここでは避けるが、複数存在していたフランス語の規範の統一が徐々に成されることで、リエゾンに対する規範も堅固なものになったということは言うまでもないだろう。つまり、リエゾンに関する規範のヴァリエーションが統一されることによって、それまではリエゾンの実現の揺れが許容されていたコンテキストにおいて実現が義務的になるということである。また特に 19 世紀以降は、綴り字の普及により綴り字と発音の関係が強化された影響で、リエゾンの実現がより強制されるという可能性も考えられる<sup>149</sup>。

## 2. 今後の課題

リエゾンに対する研究は特に 20 世紀以降、規範的研究、記述的研究、社会言語学的研究、理論的研究といった言語学の幅広い分野および方法論によって行われてきた。リエゾンという現象が幅広い分野からの関心を得た理由として、2 つの語の間で子音が発音される現象であるリエゾンのメカニズムの複雑さを一番に挙げることができる。例えば、現代フランス語においては、言語内的要因および言語外的要因といった 2 つの要因がリエゾンの実現および非実現に影響すると考えられている。本研究の独自性は、この時代のフランス語の実際の発音に近いものが反映されていると考えられる文献をコーパスとして使用し、その結果を規範と照合しながら、リエゾンの実現の状況を明らかにしたことである。

分析の結果、17 世紀および 18 世紀のフランス語において既にリエゾンの実現には言語内的要因および言語外的要因の両方が作用することが明らかになった。よって、17 世紀と 18 世紀において、「語が単独で発音された場合に、発音されない子音字が、母音で始まる語の前で発音される」という定義通りに必ずしもリエゾンが実現されるわけではないのである。1960 年代以降、「リエゾン子音の位置」の問題に関する解決策の多くは、リエゾンを単純な音韻現象として扱ってきたが、リエゾンはやはり純粋な音韻現象であるとはいえないだろう。確かに、リエゾンは語末子音脱落という音声変化の中で出現し、形成された現象ではある。しかし、リエゾンの実現には、発音と綴り字の関係性、連辞における統語的結束性、形態的マーカーとしてのリエゾン子音に対する再解釈、発話に使用されるスタイル、といった実に多様な要因が影響しているわけである。

第三章においてリエゾンに関する先行研究の要約を行ったが、リエゾンに関する先行研究は大変豊富であり、また研究分野も幅広い。しかし、綴り字と発音の習得についての研究（特に、第一言語習得研究）や統語構造とプロソディーの関連性に着目した研究などは未だ豊富であるとは言い難い。そして、通時言語学的視点からの研究はほとんど行われて

---

<sup>149</sup> 発音に対する綴り字の影響については Effet Buben (Buben 効果) というような名称で議論が行われている。これに関しては Cheverot, P. & Malderez, I. (1999). L'effet Buben ; de la linguistique diachronique à l'approche cognitive (et retour). *Langue Française*, 124, pp. 104-125. で議論されている。

いないというのが現状である。本研究は、17 世紀末と 18 世紀初頭という時代に話されたフランス語に対する共時的研究であり、通時的視点を持ちつつも、言語変化を研究対象とする本来の意味での通時的研究とは言えない。これは本研究に限らず、リエゾンに関する研究のほとんどは共時的研究であり、通時的研究を目的とする研究は大変少数である<sup>150</sup>。以上のことから、今後の研究の方向性としての可能性を 2 つ挙げる。まず、第一に、18 世紀後半以降の文法書調査などを細かく行い、リエゾンに関する規範的説明についてまとめることによって、規範の変化を追うことである。第二に規範を踏まえた上で、特に 18 世紀半ば以降のリエゾンの実現について、コーパスとなりえる文献を使用することで、本研究を基に実際のリエゾンの実現が今日にかけてどのように変化したのかを調査することである。

---

<sup>150</sup> 例えば、Laks, B. (2009). Les homes politiques français et la liaison (1908-1999). *Le Français d'un continent à l'autre*, Québec : Presses de l'Université de Laval, pp. 237-267. は、20 世紀の政治家によって話されたフランス語に着目した通時的研究である。

## 参考文献

### 外国語文献

- Abecassis, M. (2005). *The representation of Parisian Speech in the cinema of the 1930s*. Bern: Peter Lang.
- Ameringen, A. (1977). *La liaison en français de Montréal*. Thèse de Maîtrise: Université du Québec à Montréal.
- Ågren, J. (1973). *Enquête sur quelques liaisons facultatives dans le français de conversation radiophonique*. Uppsala: Acta Universitatis Upsaliensis.
- Armstrong, N. (2001). *Social and stylistic variation in spoken French: a comparative approach*. Amsterdam: John Benjamins.
- Ashby, W. J. (1981). French liaison as a sociolinguistic Phenomenon. In William W. Cressy and Donna Jo Napoli (ed.), *Linguistic Symposium on romance languages 9*. Washington D.C.: Georgetown University Press, pp.46-57.
- Auroux, S. (1998). *La raison, le langage et les normes*. Paris: PUF.
- Ayres-Bennett, W & Seijido, M. (2011). *Remarques et observations sur la langue française, Histoire et évolution d'un genre*. Paris: Classiques Garnier.
- Bettens, O. (2003). *Chantez-vous français ? Remarques curieuses sur le français chanté du Moyen Âge à la période baroque. Avec quelques considérations sur le latin chanté des Français*. <http://virga.org/cvf/index.html> (最終アクセス日 : 2015 年 2 月 19 日)
- Bettens, O. (2007). Consonnes finales à la pause et devant voyelle: même combat ? États de langue, traditions artifices et déclamation du français. *Annales de l'Association pour un Centre de Recherche sur les Arts du Spectacle aux XVIIe et XVIIIe siècles*, n°2, pp. 39-53.
- Blanche-Benveniste, C. (1993). Les unités: langue écrite – langue orale, *Proceedings of the workshop on Orality versus Literacy : Concepts, Methods and Data*, Clotilde Pontecorvo and Claire Blanche-Benveniste (éd), ESF Scientific Networks, pp. 139-194.
- Blanche-Benveniste, C. (1997). *Approches de la langue parlée en français*. Paris: Ophrys.
- Blanche-Benveniste, C., Jeanjean, C. (1987). *Le français parlé: transcription et édition*. Paris: CNRS/Didier Erudition.
- Bonami, O. & Boyé, G. (2003). La nature morphologique des allomorphies conditionnées: les formes des adjectifs en français. In B. Fradin and al. (éd.), *Les Unités morphologiques. Actes du 3<sup>ème</sup> forum de morphologie*. Collection Silexicales: Université de Lille 3, pp. 39-48
- Booij, G. & De Jong, D. (1987). The domain of liaison: theories and data, *Linguistics*, 25, pp.1005-1025.
- Brun, A. (1931). *Le français de Marseille*. Marseille : Institut historique de Provence. (Réédité en

- 1982, Marseille : Laffitte Reprints.)
- Bruneau, C. (1931). *Manuel de phonétique pratique*. Seconde édition. Paris: Berger-Levrault.
- Buben, V. (1935). *Influence de l'orthographe sur la prononciation du français moderne*. Bratislava: Faculté de lettres de l'université de Bratislava.
- Buffier, C. (1709). *Grammaire française sur un plan nouveau*, Paris: Nicolas le Clerc.
- Burov, I. (2012). *Les phénomènes de sandhi dans l'espace gallo-romain*. Thèse de doctorat: Université de Sofia et Université Bordeaux 3.
- Bybee, J. (1995). Regular morphology and the lexicon. *Language and Cognitive Processes*, 10, pp. 425-455.
- Bybee, J. (2001). *Phonology and language use*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, J. (2005). La liaison: effets de fréquence et constructions. *Langages*, 158, pp. 24-37.
- Carton, F. (2000). La prononciation. *Histoire de la langue française 1945-2000*, éd. par Gérard Antoine et Bernard Cerguiglini, pp. 25-60. Paris: CNRS.
- Clédat, L. (1917). *Manuel de phonétique et de morphologie*. Paris: Hachette.
- Chasle, N. (2008). Manifestation de la latence en ancien français aux X<sup>ème</sup> et XI<sup>ème</sup> siècles: liaison et redoublement syntaxique, *Congrès Mondial de Linguistique Française —CMFL'08*, Paris, pp. 1645-1656.
- Chiflet, L. (1659). *Essay d'une parfaite Grammaire de la langue française*. Anvers: Jacques van Meurs, Réimpression, Genève: Slatkine Reprints 1973.
- Chevrot, J.-P. & Malderez, I. (1999). L'effet Buben: De la linguistique diachronique à l'approche cognitive (et retour). *Langue Française*, 158, pp. 38-52.
- Chevrot, J.-P., Dugua, C., & Fayol, M. (2005). Liaison et formation des mots en français: un scénario développemental. *Langages*, 158, pp. 38-52.
- Chomsky, N. & Halle, M. (1968). *The Sound Pattern of English*. New York: Harper and Row.
- Chomsky, N. (1970). Remarks on Nominalization, in *Readings in English Transformational Grammar*, R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum (eds), Waltham, Massachusetts: Ginn and Co.
- Cohen, M. (1946). *Le français en 1700 d'après le témoignage de Gile Vaudelin*, Paris: Librairie ancienne Honoré Champion.
- Côté, M-H. (2005). Le statut lexical des consonnes de liaison. *Langages*, 158, pp. 66-78.
- Côté, M-H. (2010). Le statut des consonnes de liaison: l'apport de données du français laurentien. In *2<sup>ème</sup> Congrès Mondial de Linguistique Française*, Paris: Institut de Linguistique Française, pp.1279-1288.
- Crevier, I. (1993). René Milleran, grammairien et réformateur de l'orthographe au XVII<sup>e</sup> siècle. *Travaux de linguistique et de philologie*, 31, pp. 347-365.
- Crevier, I. (1994). *La liaison à la fin du XVII<sup>e</sup> siècle dans la Nouvelle grammaire française de René Milleran de Saumur*. Thèse de Ph.D. Montréal: Université de Montréal.

- Crystal, D. (1992). *An Encyclopedic Dictionary of Language and Languages*, Cornwall: Hartnolls Ltd.
- Damourette, J. & E. Pichon. (1911-1930). *Des mots à la pensée, Essai de grammaire de la langue française*, Paris: D'Artrey.
- Dauzat, A. (1930). *Histoire de la langue française*. Paris : Payot.
- Dejean de la Bâtie, B. (1993). *Word boundary ambiguity in spoken French*. Unpublished dissertation. Monash University, Victoria, Australia.
- Delattre, P. (1940). Le mot est-il une entité phonétique en français? *Le français moderne*, 8, pp. 47-56.
- Delattre, P. (1966). *Studies in French and comparative Linguistics*. The Hague: Mouton.
- Dell, F. (1970). *Les règles phonologiques tardives et la phonologie dérivationnelle du français*. Ph.D. dissertation: MIT.
- Dell, F. (1973). *Les règles et les sons*. Paris: Hermann.
- Desrochers, R. (1994). Les liaisons dangereuses: le statut équivoque des erreurs de liaisons. *Linguisticae investigationes*, 18, 2, pp. 243-284.
- Doberet, A. (1650). *Recreations literales et mysterieuses: ou sont curieusement estalez les Principes et l'importance de la nouvelle Orthographe*, Lyon: François de Masso.
- Dubroca, L. (1824). *Traité de la prononciation des consonnes et des voyelles finales des mots français, suivi de la prosodie de la langue française*. Paris: chez l'auteur, Delaunay et A. Johanneau.
- Dubois Jacques (Sylvius). (1531). Introduction à la langue française suivie d'une grammaire, Texte latin original, traduction et notes de Colette Demaizière. Paris: Honoré Champion éditeur, 1998.
- Dugua, C. (2006). *Liaison et segmentation lexicale et schémas syntaxiques entre 2 et 6 ans : un modèle développemental basé sur l'usage*. Ph.D. Dissertation: Université de Grenoble III.
- Duez, N. (1669). *Le Vray et Parfait Guidon de la langue française*, Amsterdam: Daniel Elzevier. Première édition en 1639.
- Dupuis, S. (1836). *Traité de prononciation, ou Nouvelle prosodie française*. Paris: A. Guyot, Imprimeur du Roi.
- Durand, J. & Lyche, C. (2003). Le projet 'Phonologie du Français Contemporain' (PFC) et sa méthodologie. In E. Delais and J. Durand (éd.), *Corpus et variation en phonologie du français : méthodes et analyses*. Toulouse : Presses Universitaires du Mirail, pp.212-276.
- Durand, J. & Lyche, C. (2008). French liaison in the light of corpus data, *Journal of French Language Studies*, 18, 1, pp.33-66.
- Durand, J., B. Laks, B. Calderone & A. Tchobanov. (2011). Que savons-nous de la liaison aujourd'hui?, *Langue Française*, 169, 1, pp. 103-126.
- Duval, J-B. (1604). *L'Eschole française pour apprendre à bien parler & écrire selon l'usage de ce*



- temps & pratique des bons auteurs*, Paris: Eustache Foucault. Réimpression, Paris : France-Expansion, 1973.
- Encrevé, P. (1983). La liaison sans enchaînement. *Actes de la recherche en sciences sociales*, 46, pp.39-66.
- Encrevé, P. (1988). *La liaison avec et sans enchaînement. Phonologie tridimensionnelle et usages du français*. Paris: Seuil.
- Estienne, H. (1582). *Hypomnese de gallica lingua*. Paris. [Reproduction 1999, traduction et notes par Jacques Chomarat. Paris: Honoré Champion.]
- Eychenne. (2011). La liaison en français et la théorie de l'optimalité. *Langue Française*, 169, pp. 79-101.
- Fouché, P. (1952). *Phonétique historique du français, Volume III, Les consonnes et index général*. Paris: Klincksieck.
- Fouché, P. (1959). *Traité de prononciation française*. Paris: Klincksieck.
- Fouché, P. & Dauzat, A. (1935). Phonétique et Orthographe. *Où en sont les études de français, manuel général de linguistique française moderne*. Albert Dauzat (éd). Paris: Bibliothèque du Français moderne.
- Fougeron, C., Goldman, J. -P., Dart, A., Guélat, L. & Jeager, C. (2001). Influence de facteurs stylistiques, syntaxiques et lexicaux sur la réalisation de la liaison en français. *8<sup>ème</sup> Conférence Traitement Automatique des langues Naturelles*. Tours, France.
- Frei, H. (1929, 2011). *La grammaire des fautes*. Rennes: Presses Universitaires de Rennes.
- Gadet, F. (1997a). *Le français ordinaire*. 2<sup>ème</sup> édition, Paris: Armand Colin.
- Gadet, F. (1997b). *Le français populaire. Que sais-je ?* 2<sup>ème</sup> édition, Paris: Presses Universitaires de France.
- Gadet, F. (2003a). Is there a French theory of variation?, *International Journal of the Sociology of Language*, 160, pp.17-40.
- Gadet, F. (2003b). *La variation sociale en français*. Paris: Ophrys.
- Garnier, P. (1607). *Praecepta gallici sermonis*. Strasbourg.
- Girard, G. (1716). *L'ortographe française sans équivoques & dans ses Principes naturels*, Paris : Giffart.
- Grevisse, M. (1969). *Le Bon Usage*. Gembloux: Duclot.
- Grammont, M. (1914). *Traité pratique de prononciation française*. Paris: Librairie Delagrave.
- Grammont, M. (1933). *Traité de phonétique*. Paris: Delagrave.
- Green, J. & Hintze, M.-A. (1990). Variation and change in French linking phenomena, In M.-A. Hintze & J.N. Green (éds), *Variation and Change in French: essays presented to Rebecca Posner on the occasion of her sixtieth birthday*, Londres: Routledge, pp. 61-88.
- Gross, M. (1967). Phonémique et syntaxe. CNRS, Section d'Automatique Documentaire, Rapport

N° 3/P.

- Gueunir, N., Genouvrier, E., & Khomsi, A. (1978). *Les français devant la norme*. Paris: Champion.
- Guiraud, P. (1965). *Le français populaire*. Paris: Presses Universitaires de France.
- Howard, A. (2005). L'acquisition de la liaison en français langue seconde –Une analyse quantitative d'apprenants avancés en milieu guidé et en milieu naturel. *CORELA –Numéros Spéciaux. Colloque AFLS*.  
<http://corela.edel.univ-poitiers.fr/index.php?id=1127>. (最終アクセス日 : 2015 年 2 月 19 日)
- Kaisse, E. (1985). *Connected speech: the interaction of syntax and phonology*. San Diego: Academic Press.
- Kawaguchi, Y. (2011). French Liaison in the 18th Century -Analysis of Gile Vaudelin's textes -, *Corpus-based Analysis in Diachronic Linguistics*, Y. Kawaguchi, M. Minegishi, W. Viereck (eds.), John Benjamins, pp.133-151.
- Klausenburger, J. (1974). Rule inversion, opacity, conspirancies: French liaison and elision. *Lingua*, 34, pp. 167-179.
- Klausenburger, J. (1984). *French liaison and linguistic theory*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag Wiesbaden GMBH.
- Krier, F. (1993). Gile Vaudelin und die französische Orthographie, Schmidt-Radefeldt, Andreas Harder (hrsg.), *Sprachwandel und Sprachgeschichte, Festschrift für Helmut Lüdtke*, Tübingen: Narr, pp. 117-122.
- Laks, B. (1980). *Différenciation linguistique et différenciation sociale: quelques problèmes de sociolinguistique française*, thèse de 3<sup>ème</sup> cycle, Paris VIII.
- Laks, B. (2005). La liaison et l'illusion. *Langage*, 158, pp. 101- 125.
- Lancelot, C. & A. Arnauld. (1660) (1967). *Grammaire générale et raisonnée*. The Scolar Press Limited: Menston.
- Léon, P. (1971). *Essais de phonostylistique*, Paris: Didier.
- Léon, P. (1992). *Phonétisme et prononciations du français*, Paris: Nathan.
- Lodge, A. (1997). *Le français, Histoire d'un dialecte devenu langue*. Paris: Fayard.
- Lodge, A. (2004). *A sociolinguistic History of Parisian French*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Malécot, A. (1975). French liaison as a fonction of grammatical, phonetic and paralinguistic variables. *Phonetica*, 32, pp.161-179.
- Mallet, G. (2008). *La liaison en français: descriptions et analyses dans le corpus PFC*. Thèse de doctorat: Université Paris Ouest-Nanterre-La Défense.
- Martinet, A. (1964). *L'économie des changements phonétiques: Traité de phonologie diachronique*, Berne: Francke.
- Martinet, A. (1969). *Le français sans fard*. Paris: Presses universitaires de France.

- Martinon, P. (1913). *Comment on prononce le français. Traité complet de prononciation pratique avec les noms propres et les noms étrangers*. Paris: Larousse.
- Maupas, C. (1607). *Grammaire et syntaxe française*, première édition, Orléans : Olivier Boynard. Réimpression, Genève: Slatkine, 1973.
- Milleran, R. (1964). *Les deux grammaires françaises*, Marseille, Henri Brebion. Réimpression, Genève: Slatkine, 1973.
- Millet, A. (1933). *Les grammairiens et la phonétique ou l'enseignement des sons du français depuis le XVI<sup>e</sup> siècle jusqu'à nos jours*. Paris: Librairie J. Monnier.
- Milner, J-C. (1967). French Truncation Rule, *Quarterly Progress Report of the Research Laboratory of Electronics*, MIT, 86, pp. 273-283.
- Morin, Y-C. (1986). On the morphologization of word-final consonant deletion in French, *Sandhi phenomena in the languages of Europe*, Andersen, Henning (ed). Berlin/New York/ Amsterdam: Mouton de Gruyter, pp. 167-210.
- Morin, Y.-C. (1987). French data and phonological theory. *Linguistics*, 25, pp. 815-843.
- Morin, Y-C. (2003). Remarks on prenominal liaison consonants in French. *Living on Edge -28 papers in honour of Jonathan Kaye*, Stefan Ploch (eds.), Berlin/New York: Mouton de Gruyter, pp. 291-330.
- Morin, Y-C. (2005a). La liaison relève-t-elle d'une tendance à éviter les hiatus. Réflexions sur son évolution historique. *Langages*, 158, pp. 8-23.
- Morin, Y-C. (2005b). Liaison et enchaînement dans les vers aux XVI<sup>e</sup> et XVII<sup>e</sup> siècles, in Jean-Michel Gouvard, *De la langue au style*, Lyon: Presses Universitaires de Lyon. pp.299-318.
- Morin, Y-C. & Kaye, J. (1982). The syntactic bases for French liaison. *Journal of Linguistics*, 18, pp. 291-330.
- Moules, Abbé de. (1761). *Règles pour la prononciation des langues française et latine*, Paris: A-M. Lottin.
- Mourgues, M. (1724). *Traité de la poésie française*, Paris : Jacques Vincent. Réimpression, Genève: Slatkine, 1968.
- Nyrop, Kr. (1935). *Manuel phonétique du français parlé*. Copenhague: Nordiske.
- Pagliano, C. (2003). *L'épenthèse consonantique en français. Ce que la syntaxe, la sémantique et la morphologie peuvent faire à la phonologie : parles-en de la numérotation automatique*. Ph. D. Dissertation: Université de Nice-Sophia Antipolis.
- Pagliano, C. & Laks, B. (2005). Problématique de la liaison dans l'analyse d'un corpus de français oral actuel. *Français fondamental, corpus oraux, contenus d'enseignement. 50 ans de travaux et d'enjeux*. 8-10 décembre 2005. Lyon: École Normale Supérieure Lettres et Sciences Humaines.
- Palsgrave, J. (1530, 2003). *L'Éclaircissement de la langue française, Texte anglais original*

- Traduction et notes de Susan Baddeley*. Paris: Honoré Champion Éditeur.
- Passy, P. (1889). *Le français parlé morceaux choisis à l'usage des étrangers avec la prononciation figure*. 2<sup>ème</sup> édition, Paris: Heilbronn Henninger Frères, Libraires éditeurs.
- Prince, A. & Smolensky, P. (1993). *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*. ROA.
- Ranson, D. (2008) « La liaison variable dans un corpus du français méridional : L'importance relative de la fonction grammaticale », in J. Durand, B. Habert & B. Laks (eds) *Congrès mondial de linguistique française. Recueil des résumés et CD-ROM des actes*. Paris: Institut de Linguistique Française et EDP Sciences, pp. 1657-1671.
- Régnier-Desmarais, F-S. (1706). *Traité de la grammaire française*, Paris: Jean-Baptiste Coignard. Réimpression, Genève : Slatkine, 1973.
- Restaut, P. (1732). *Abrégé des regles de la versification française*, Poitiers: Barbier succ. Faulcon.
- Rey, A. (1972). Usages, jugements et prescriptions linguistiques, *Langue Française*, 16, pp. 4-28.
- Rivarol (de), A. (1784). *De l'universalité de la langue française; discours qui a remporté le prix à l'Académie de Berlin*, H. Juin (éd. écrit.), Paris: Belfond.
- Rosset, T. (1911). *Les Origines de la prononciation moderne étudiées au XVII<sup>e</sup> siècle d'après les remarques des grammairiens et les textes en patois de la banlieue parisienne*. Paris: Armand Colin.
- Roux, S. (1694). *Méthode nouvelle pour apprendre aux enfants à lire parfaitement bien le latin et le français*. Paris: A. Warin.
- Ruvoletto, S. (2014). Liaison, élision et enchaînement : le rôle de la phonologie et du lexique chez les enfants au début de l'école primaire, In 4<sup>ème</sup> *Congrès Mondial de Linguistique Française*, Paris: Institut de Linguistique Française, pp.1579-1590.
- Sabio, F. (2000). Les difficultés de la notion de *mot*: l'exemple des liaisons graphiques dans les textes d'enfants, *Linx* [en ligne], 42. URL : <http://linx.revues.org/830>; DOI :10.4000/linx.830
- Sainliens (Holyband), Claude de. (1580). *Caludii a Sancto Vinculo De Ponuntiatione linguae gallicae libri duo: Ad illustrissimam, simulq; Doctissimam Elisabetham Anglorum Reginam*, Londres, Excudebat Thomas Vautrollerius Typographus (Réimprimé en 1973, Genève: Skatkine Reprints).
- Sanders, C. (1993). *French Today: Language in its Social Context*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Schane, S. A. (1965). *The phonological and Morphological Structure of French*, Ph.D. dissertation: MIT Press.
- Schane, S. A. (1968). *French Phonology and Morphology*. Cambridge, Massachusetts: M.I.T. Press.
- Selkirk, E. (1972). *The Phrase Phonology of English and French*. Ph.D. dissertation: MIT. New York: Garland, 1980.

- Selkirk, E. (1974). French Liaison and X notation. *Linguistic Inquiry*, 5, pp. 573-590.
- Spinelli E., Muenier, F. (2005). Le traitement cognitive de la liaison dans la reconnaissance de la parole enchaînée, *Langages*, 158, pp.79-88.
- Steriade, D. (1999). Lexical conservatism in French adjectival liaison. *Formal perspectives on Romance linguistics*, Jean-Marc Authier, Barbar E. Bullock et Lisa A. Reed (éds), pp. 243-270. Amsterdam : Benjamins.
- Straka, G. (1981). Sur la formation de la prononciation française d'aujourd'hui, *Travaux de linguistique et de littérature*, 19, 1, pp. 161-248.
- Tallemant, L. (1698). *Remarques et décisions de l'Académie françoise*, Paris: Jean-Baptiste Coignard.
- Thurot, C. (1881-1883). *De la prononciation française depuis le commencement du XVI<sup>e</sup> siècle, d'après le témoignage des grammairiens*, en 3 vol. Paris: Imprimerie Nationale.
- Tory, G. (1529). *Champ Fleury, ou l'Art et Science de la proportion des Lettres*, Paris. Réimpression, Genève: Slatkine, 1973.
- Tousignant, C. (1978). *La liaison consonantique en français montréalais*. Mémoire de maîtrise, Université de Montréal.
- Tousignant, C. & Sankoff, D. (1979). Aspects de la compétence productive et réceptive : la liaison à Montréal, *Le Français Parlé, Etudes sociolinguistiques*, Thibault, P. (éd), Edmonton: Linguistic Research Inc, pp. 41-52.
- Tranel, B. (1981). *Concreteness in Generative Phonology: evidence from French*. Berkeley: University of California Press.
- Tranel, B. (1990). On suppletion and French liaison, *Probus*, 2, pp. 169-208.
- Tranel, B. (1995). French final consonants and nonlinear phonology. *Lingua*, 95, pp.131-167.
- Tranel, B. (2000). Aspects de la phonologie du français et la théorie de l'optimalité. *Langue française*, 126, pp.39-72.
- Vaudelin, G. (1713) (1973). *Nouvelle manière d'écrire comme on parle en France*. Paris: Chez La Veuve de Jean Cot et Jean-Baptiste Lamesle, Slatkine Reprints.
- Vaudelin, G. (1715) (1973). *Instructions chrétiennes mises en orthographe naturelle*. Paris: Chez Jean-Baptiste Lamesle, Slatkine Reprints.
- Völker, H. (2009). La linguistique variationnelle et la perspective intralinguistique, *Revue de linguistique romane*, 73, pp. 27-76.
- Walter, H. (1976). *La dynamique des phonèmes dans le lexique français contemporain*. Paris: France expansion.
- Walter, H. (1982). *Enquête phonologique et variétés régionales du français*. Paris: Presses Universitaires de France.
- Wartburg, W.V. (1946). *Évolution et structure de la langue française*, Berne: Editions A. Francke S.A.

Berne.

Wauquier-Gravelines, S. (1996). *Organisation phonologique et traitement de la parole continue*,  
Thèse de doctorat: Université de Paris 7.

Wauquier-Gravelines, S. (2004). Les liaisons dangereuses. Psycholinguistique et phonologie: une  
interface complexe, in Ferrand, L. & Grainger, J. (éds.), *Psycholinguistique cognitive, Essais en  
l'honneur de Juan Segui*, Bruxelles: De Boeck Université.

### 日本語文献

川口裕司 (2010). 「18 世紀フランス語におけるリエゾン Gile Vaudelin 文献の予備的調査か  
ら」, 『コーパスに基づく言語学教育研究報告 5』, pp.119-153, 東京外国語大学大学院  
総合国際学研究科.

古賀健太郎, 秋廣 尚恵, 川口 裕司 (2011). 「Aix 話し言葉コーパスプロジェクト」, 『ふ  
らんぼー』, 37, pp.37-54

近藤野里 (2010). 「フランス語話し言葉におけるリエゾン —Aix-en-Provence コーパスを用  
いた統語・音韻分析—」, 東京外国語大学大学院修士論文.

近藤野里 (2011). 「フランス語のリエゾンにおける社会言語学的要因の一考察」, 『ロマン  
ス語研究』, 44, pp.59-68.

近藤野里 (2013). 「19 世紀フランス語の母音体系 -Paul Passy (1889)によるフランス語記述  
を基に」, 『ふらんぼー』, 39, pp.88-109

ピーター＝リカード (1995). 『フランス語史を学ぶ人のために』, 伊藤忠雄、高橋秀雄翻訳,  
世界思想社 (京都) .

## Résumé français

### **La liaison à la fin du XVII<sup>e</sup> siècle et au début du XVIII<sup>e</sup> siècle -Analyse fondée sur les ouvrages de Milleran (1694) et de Vaudelin (1713, 1715)-**

#### **Introduction**

Notre objectif est d'examiner la liaison vers la fin du XVII<sup>e</sup> siècle et le début du XVIII<sup>e</sup> siècle, surtout clarifier les facteurs intra-linguistiques et extra-linguistiques influençant la réalisation de la liaison à cette époque. Pour cela, nous avons utilisé deux corpus, l'ouvrage de René Milleran (1694), et les deux ouvrages de Gile Vaudelin (1713, 1715). À l'époque dans laquelle il n'y avait aucun moyen d'enregistrement phonétique, nous avons choisi ces travaux, dans lesquels les auteurs ont exploité des moyens de noter la prononciation. De plus, en vue de renforcer nos analyses empiriques, nous avons aussi effectué des recherches philologiques : chercher des témoignages de grammairiens sur la liaison entre les XVI<sup>e</sup> et XVIII<sup>e</sup> siècles.

#### **Chapitre II : Définition de la liaison**

Dans ce chapitre, nous avons donné une explication générale sur les phénomènes de sandhi externe de la langue française (c.-à-d. liaison, élision, enchaînement). L'objet de notre recherche est la liaison, c'est la réalisation d'une consonne qui n'est pas prononcée à la fin de MOT1 (mot de gauche) ni au début de MOT2 (mot de droite) lorsque l'on prononce isolément chacun de ces mots. Par exemple, les deux mots *petit* et *enfant* sont prononcés chacun comme [p(ə)ti] et [ɑ̃fɑ̃]. Par ailleurs, quand on prononce ces deux mots successivement comme *petit enfant*, la prononciation de ce syntagme est [p(ə)ti. tɑ̃. fɑ̃], avec une consonne [t] que nous appelons « la consonne de liaison (désormais notée CL).

Nous avons discuté aussi la complexité de la définition de mot de la langue française. En considérant qu'en français, plusieurs mots peuvent être attachés l'un à l'autre lors de l'énonciation, il est difficile de dégager un mot de syntagme en oral (Cf. Sabio, 2000 : 6). Comment pouvons-nous définir le « mot » de la langue française ? Une des réponses est proposée par Blanche-Benveniste & Chervel (1969 : 211) : « L'orthographe nous a appris à écrire des mots, c'est-à-dire à lever la plume à la fin d'un ensemble graphique minimum afin de le séparer du suivant par un blanc ». Pour ceux qui connaissent l'orthographe, le mot est plus détachable, mais il est beaucoup plus difficile de trouver une frontière de mots chez les enfants (Dugua, 2006 ; Wauquier-Gravelines, 2004). Les erreurs de la liaison sont souvent observées chez les enfants (Cf. Côté, 2005 : 68). L'apprentissage de l'orthographe aide à détacher un mot de la succession phonétique (Cf. Ruvoletto, 2014). Ainsi, l'orthographe prend un rôle important pour définir le « mot » en français, puisqu'on peut trouver une

frontière de mots grâce aux espaces vides entre les mots écrits.

Ensuite, nous avons aussi introduit les deux liaisons marginales : la liaison sans enchaînement et la fausse liaison, car ces phénomènes sont souvent tirés pour le traitement théorique de la liaison, surtout pour discuter le statut de la CL.

Nous avons montré la classification de contextes de la liaison proposée par Delattre (1966). Les contextes sont divisées en trois : obligatoire, facultatif, interdit. Par ailleurs, Durand & Lyche (2008) indique que le résultat obtenu dans les corpus PFC présente quelques différences avec la classification de Delattre. Selon les données obtenues dans le Corpus PFC, les contextes ci-dessous doivent être plutôt variables :

- (1) Adjectif suivi d'un nom
- (2) Adverbe monosyllabique suivi d'un MOT2
- (3) Préposition monosyllabique suivie d'un MOT2
- (4) Après la construction « *C'est* »

### **Chapitre III : Les travaux du XX<sup>e</sup> siècle et du XXI<sup>e</sup> siècle sur la liaison**

Dans ce chapitre, nous avons fait état des lieux des travaux antérieurs sur la liaison. Parmi ces travaux sur la liaison, nous distinguons quatre approches différentes : (1) Approche normative, (2) Approche descriptive basée sur les corpus, (3) Approche sociolinguistique, (4) Approche théorique.

#### **1. Approche normative**

L'objectif de l'approche normative est de fournir un modèle idéal de la prononciation (la norme). Dans le cas de la liaison, il s'agit de spécifier les contextes où il faut ou non réaliser la liaison. Au XX<sup>e</sup> siècle, ce sont surtout les phonéticiens qui ont fourni les règles prescriptives sur la liaison. Citons l'avis de Durand & Lyche (2003 : 260) :

« En décrivant la liaison, des phonéticiens dont on admire l'objectivité dans d'autres domaines, sont pris dans la tenaille de la norme et ne peuvent cacher leur mépris ou leur irritation à l'usage de diverses classes sociales. Passy (1913) et Martinon (1913) ne sont ni les premiers ni les derniers [...] »

Durand & Lyche (2003 : 260)

Les locuteurs idéalisés par les prescriptivistes comme Martinon (1913 : VII), Grammont (1914 : 1), Bruneau (1931 : xx-xxo) et Fouché (1959) sont, en général, soit les bourgeois parisiens intellectuels, soit les locuteurs cultivés de grandes villes du nord de la France. Dans la description prescriptive, nous pouvons généralement trouver des explications plus ou moins précises sur les contextes où il (ne) faut (pas) réaliser la liaison selon le style ; par exemple, Fouché (1959) consacre



plus de 50 pages de son ouvrage pour la liaison.

## **2. Approche descriptive basée sur les corpus**

Les travaux basés sur les corpus se sont développés à partir des années 1970. La raison de ce développement est liée à l'apparition de la technologie informatique (Cf. Malécot, 1975 : 161). Ce qui caractérise l'approche basée sur le corpus est la volonté de montrer à partir de corpus oraux des facteurs intra-linguistiques qui influencent la réalisation de la liaison. Nous présentons quelques caractéristiques des corpus oraux employés et les facteurs intra-linguistiques de la liaison tels que les a dégagés par la recherche descriptive.

Comme la liaison est un « *phénomène sociolinguistiquement inversé* » (Encrevé, 1988 : 45), elle est réalisée par les locuteurs du français les plus scolarisés, et aussi dans le style soutenu. Les corpus oraux utilisés ont dû être aussi adaptés au besoin de recherche, cela nécessite généralement des locuteurs 'favorisés' et une situation surveillée (Cf. Gadet, 1997a : 52-53). En comparant quelques corpus (Ågren, 1973 ; Malécot, 1975 ; Ashby, 1981 ; Encrevé, 1988 ; Léon, 1992 ; Green & Hintz, 2001), nous avons remarqué que les locuteurs doivent parler le français standard, idéalement être parisiens, et aussi que le style visé est plutôt soutenu dans la situation de l'énonciation (conversation à la radio, discours politique, entretien).

Ensuite, nous avons montré les facteurs intra-linguistiques dégagés par la recherche descriptive. Le pionnier est Pierre Delattre (Cf. Ågren, 1973 : 14). Delattre a regroupé les quatre facteurs les plus importants (Mallet, 2008 :32) : (a) L'influence de la situation de communication et du registre employé (stylistique) ; (b) L'influence de la syntaxe, les liaisons facultatives étant en partie réglées par le degré de solidarité des mots en contact ; (c) L'influence de la prosodie, à savoir la longueur des éléments à lier, l'intonation de la phrase, l'accent d'insistance ; (d) l'influence du degré phonématique. A l'instar de Delattre, des recherches importantes ont été menées par Ågren (1973), Malécot (1975), etc. Les recherches descriptives basées sur les corpus relèvent généralement quatre facteurs : (1) longueur du mot liaisonnant ; (2) fréquence de mot ; (3) consonne de liaison ; et (4) groupe rythmique.

## **3. Approche sociolinguistique**

L'approche sociolinguistique détermine les facteurs sociolinguistiques influençant la réalisation de la liaison. Suivant Gadet (2003b : 15), « Les façons de parler se diversifient selon le temps, l'espace, les caractéristiques sociales des locuteurs, et les activités qu'ils pratiquent ». Elle montre les différentes dimensions de la variation : (1) Diachronie ; (2) Diatopie ; (3) Diastratie ; (4) Diaphasie ; (5) Diamésie. Ces cinq dimensions sont aussi réparties dans deux catégories distinctes : (i) la variation inter-locuteurs ; et (ii) la variation intra-locuteurs. Dans les travaux antérieurs sur la liaison, cinq facteurs extra-linguistiques sont dégagés : (a) profil social (classe sociale, niveau

d'études), sexe, âge, et différence dialectale pour la variation intra-locuteurs : et (b) situation et style pour la variation intra-locuteurs.

- (i) *Profil social (la classe sociale, le niveau d'études)* : Booij & De Jong (1987 : 1016) et Ashby (1981 : 53) remarquent que les locuteurs de la classe sociale favorisée réalisent plus de liaison que ceux de la classe moins favorisée. Cependant, Mallet (2008 : 192) ne trouve pas de corrélation entre le taux de réalisation de la liaison et le niveau d'études, elle retrouve plutôt la différence entre lecture et conversation.
- (ii) *Sexe* : Dans la recherche de Malécot (1975 :169), les femmes réaliseraient plus de liaison que les hommes (67% vs 62%). Par contre, pour Ashby (1981 : 50), ce sont les hommes qui réalisent plus de liaison que les femmes (36% vs 32%). La recherche récente menée par Ranson (2008) montre qu'il n'y a pas de différence entre les femmes et les hommes. Comme leurs résultats sont contradictoires, nous pouvons considérer que le sexe n'est pas un facteur influençant la réalisation de la liaison.
- (iii) *Âge* : La tendance des locuteurs plus âgés à réaliser la liaison plus souvent que les locuteurs jeunes est observée par plusieurs recherches (Booij & De Jong, 1987 ; 1016-1017, Ranson, 2008 :1678 ; Mallet, 2008 :194 ; Kondo, 2010)
- (iv) *Différence dialectale* : Il semble y avoir des opinions diverses sur la liaison dans chaque région dialectale. Par exemple, Brun (1931 : 45) critique le français de Marseille en insistant sur le fait que « les liaisons sont donc beaucoup moins fréquentes qu'en français commun ». En revanche, Séguy (1978 : 38) suggère que « les liaisons sont plus fréquentes à Toulouse qu'à Paris ». Enfin, Durand & Lyche (2008) remarque que des locuteurs du sud peuvent être plus conservateurs que ceux du nord en montrant que les premiers réalisent plus de liaisons que les derniers.
- (v) *Situation et style* : Suivant Gadet (1997a : 5), « La variation *stylistique* ou *situationnelle* ne clive pas la société, mais le locuteur : il n'y a pas de locuteur à style unique». Delattre (1966 : 40) distingue quatre styles qui déterminent la fréquence de la liaison : conversation familière, conversation soignée, discours (/conférence) et récitation de vers. Plus le style est élevé, plus il y a de liaisons réalisées. Cependant, le résultat obtenu par Mallet (2008 : 189) suggère qu'il n'y ait pas de distinction assez nette entre la conversation guidée et conversation libre. Elle trouve la fréquence la plus élevée de la liaison dans la lecture. Cela ferait penser que l'information visuelle que fournit l'orthographe influence la réalisation de liaison.

#### 4. Approche théorique

L'approche théorique est divisée en deux branches : (i) analyses phonologiques ou morphologiques ; (ii) analyses syntaxiques. Dans les premières analyses, le problème central est le

statut lexical de la consonne de liaison (Mallet, 2008 ; Côté, 2010). L'hypothèse la plus fréquemment soutenue considère la CL attachée au mot de gauche (MOT1) (Schane, 1965, 1968 ; Dell, 1970, Côté, 2005, 2010 ; Tranel, 1990 ; Stériade, 1999 ; Encrevé, 1988, Tranel, 2000 ; Eychenne, 2011). Cependant, il y a trois autres positions possibles : (ii) la CL comme consonne épenthétique (Klausenburger, 1974 ; Tranel, 1981 ; Côté, 2005, 2010) ; (iii) la CL attachée au mot de droite (MOT2) (Morin & Kaye, 1982 ; Morin 2003, 2005 ; Côté, 2005, 2010) : (iii) la CL appartient à la construction (Bybee, 2001, 2005).

Le problème du statut de la consonne de liaison peut être résumé dans le tableau ci-dessous (Cf. Côté 2010) :

Statut		Sous-types	Sous-jacence
Consonne attachée à MOT1	Phonologique : Schane (1965, 1968)	Troncation : Les CL sont des consonnes stables qui chutent dans des contextes de non liaison	/døz/ /ami/
	Phonologique : Dell (1970)	Métathèse : Déplacement de CL de MOT1 à MOT2	/døz/ /ami/
	Morphologique : Côté (2005, 2010), Tranel (1990), Steriade (1999)	Supplétion : Les CL sont attachées une des morphèmes de mot	/dø, døz/ /ami/
Consonne latente attachée à MOT1	Phonologique Encrevé (1988)	Phonologie autosegmentale : Les CL sont flottantes par rapport au squelette ou à la syllabe, avec une représentation distincte de celle des consonnes stables	/dø(z)/ /ami/
	Phonologique Tranel (2000), Eychenne (2011)	Théorie de l'Optimalité : Les CL sont traitées comme consonnes latentes	/dø(z)/ /ami/
Consonne épenthétique	Morphologique/ Phonologique : Klausenburger (1974), Tranel (1981), Côté (2005, 2010),	Les CL sont insérées par épenthèse	/dø/ /ami/
Consonne	Morphologique :	Les CL sont des préfixes du MOT2	/dø/ /z+ami/

attachée à MOT2	Morin & Kaye (1982), Morin (2003, 2005), Côté (2005, 2010)		
Consonne intergréé dans une construction MOT1 + MOT2	Bybee (2001, 2005)	Les CL font partie de constructions de mots	/dø z ami/

**Tableau 1 : statuts de la consonne de liaison**

Les analyses syntaxiques, quant à elles, abordent le problème syntaxique de la réalisation de liaison (« dans quels contextes syntaxiques la liaison se réalise-t-elle ? ») en faisant l'hypothèse qu'il y a une cohésion syntaxique entre deux mots en contexte de la liaison.

Selkirk (1972, 1974) est la première qui a proposé une solution à ce sujet. Selkirk (1972, 1974) s'appuie, en particulier, sur la règle de sandhi externe proposée par Chomsky & Halle (1968). Selon Selkirk, la liaison serait invariablement réalisée s'il n'y a qu'un signe de frontière entre deux mots, mais elle se réalise facultativement s'il y a deux signes de frontière entre deux mots. Morin & Kaye (1982) trouvent des points faibles dans l'approche de Selkirk ; bien qu'il doive y avoir deux signes de frontière entre un adjectif antéposé et un nom, ce contexte n'est pas facultatif ; Selkirk ne considère pas l'influence de la fréquence de mot (par exemple, la liaison est plus réalisée après « *est* » que « *sont* ».), etc. Leur critique insiste surtout sur le fait que Selkirk n'utilise pas de données empiriques.

Plus tard, Kaisse (1985) utilise la notion de c-commande<sup>151</sup> de la syntaxe générative. Selon lui, pour qu'il y ait la liaison, il doit y avoir la relation de c-commande entre les deux mots. Mais, la c-commande est une condition nécessaire, mais elle ne suffit pas pour expliquer la totalité des faits de la liaison.

#### **Chapitre IV : Témoignages sur la consonne finale et la liaison dans la grammaire entre XVI<sup>e</sup> et XVIII<sup>e</sup> siècle**

Dans ce chapitre, nous faisons un résumé bref du développement de l'omission de la consonne finale et nous faisons le point sur le développement de la liaison.

L'explication de Léon (1992 : 151) illustre bien l'origine de la liaison : « la liaison est le résultat d'un état de langue ancienne où toutes les consonnes étaient prononcées. Vers le XI<sup>e</sup> ou le XII<sup>e</sup> siècle,

<sup>151</sup> La définition de c-commande est suivante: «A c-commande B, si A ne domine pas B, B ne domine pas A, et le premier nœud branchant dominant A domine également B ».

les consonnes finales ont commencé à ne plus se prononcer. Ce n'est que dans la mesure où elles se trouvaient enchaînées à la voyelle suivante, à l'intérieur d'un groupe rythmique, qu'on les a conservées ». L'amuïssement de la consonne finale se divise en trois étapes. Dans la première étape, la consonne finale qui a été prononcée autrefois commence à s'amuïr d'abord devant un mot commençant par une consonne, mais elle est prononcée devant une pause et une voyelle. Dans la deuxième étape, elle s'amuït devant une pause, et ne se prononce que devant une voyelle, c'est l'apparition de la liaison. La troisième étape se caractérise par la restriction contextuelle de la prononciation de cette consonne finale devant une voyelle. Le premier à l'avoir observé est un grammairien du XVII<sup>e</sup> siècle, Laurent Chiflet (1659) qui a donné des règles sur la liaison en utilisant la notion de « *mot régi* ».

Au milieu du XVII<sup>e</sup> siècle, la première caractérisation des contextes de la liaison à réaliser est présentée par Chiflet (1659) : « *mot régi* », qui concerne la relation syntaxique entre deux mots. Nous citons l'explication de Chiflet (1659) ci-dessous :

« la voicy : les consonnes finales, principalement l'*n*, le *t*, & le *d* prononcé comme vn *t* ; ont coutume de se faire entendre & de sonner clairement deuant les voyelles des mots suiuaus, quand ces mots suiuaus sont regis par le precedent, qui finit en consone : autrement non. Ainsi le nom adjectif deuant son substantif ; la preposition deuant ses cas ; le verbe deuant le cas qui en est regi ; l'aduerbe *on*, ou *l'on*, deuant son verbe impersonnel, font sonner leurs consonnes finales : comme en ces exemples ; *Petit-t'enfant. Bon-n'homme. Grand-t'orateur. Deuant-t'hier. Il alloit-t'à la ville. Allant-t'à la ville. On-n'aime. L'on-n'a aimé &c.* Autrement vous ne prononcerez pas ces consonnes, disant ; *Peti & Joli. Bon & beau. Gran & gros. Devan & Derriere. Il alloi & venoit. Allan & venant. Veut-on aller là, &c.* »

Chiflet (1659 : 204-205)

Le passage : « quand ces mots suiuaus sont regis par le precedent » notamment, nous fait penser à la cohésion syntaxique. Ainsi, Chiflet permet de réaliser la liaison dans certaines syntagmes : « Adjectif + Nom » (*Petit-t'enfant. Bon-n'homme. Grand-t'orateur.*), « Préposition + » (*Deuant-t'hier*), « Verbe + Préposition » (*Il alloit-t'à la ville. Allant-t'à la ville*), « Pronom + Verbe » (*On-n'aime. L'on-n'a aimé*), mais ne le permet pas dans des autres syntagmes : « + Conjonction *et* » (*Peti & Joli. Bon & beau. Gran & gros. Devan & Derriere. Il alloi & venoit. Allan & venant*) et « Pronom + Infinitif dans l'inversion » (*Veut-on aller là*).

Après Chiflet, Hindret (1687 : 201) propose une explication de contextes de la liaison qui ressemble plus ou moins à celle de Chiflet (1659). Nous citons Hindret (1687 : 201) ci-dessous :

« Les lettres finales des mots qui en regissent d'autres suivans, commencez par des voyelles ou par des *h*, muettes, se prononcent, c'est à dire qu'on fait sonner la dernière consone de l'article mis devant son substantif, comme *les Anges*, Celle de l'adjectif, du pronom, ou d'un nom de nombre, mis devant un substantif, comme, *petit animal, mon enfant, un arbre, deux, aunes, trois exemples* ; Celle du pronom personnel devant son verbe, comme *nous avons* ; Celle du verbe & de la prononciation devant leurs cas, comme, *passer une rivière, finit une affaire, sans argent ; en Angleterre, sous ombre, &c.* »

Hindret (1687 : 201)

Cependant, les explications sur les contextes de la liaison sont dispersées dans les ouvrages, même dans les livres de grammaire écrits par Chiflet (1659) et par Hindret (1687). A cette époque l'intérêt pour la prononciation est toujours lié à l'orthographe, et habituellement la liaison est traitée dans l'ordre alphabétique de chaque consonne graphique finale.

Nous avons dégagé donc quelques éléments essentiels concernant la liaison trouvés dans les livres de grammaire entre le XVI<sup>e</sup> siècle et le XVIII<sup>e</sup> siècle : (1) considérations à propos du style ; (2) indications de quelques contextes de la liaison ; (3) indications sur certains mots et certains éléments morphologiques.

- (1) Considérations à propos du style : nous pouvons toujours noter la conscience sur la réalisation de liaison selon le style. La distinction de styles est souvent montrée par la dichotomie entre la récitation de vers et la conversation. La liaison, qui n'est pas requise dans la conversation, est généralement exigée dans la récitation de vers ou dans le discours.
- (2) Indications sur quelques contextes de la liaison : Par exemple, les grammairiens donnent des remarques sur les contextes comme « Adjectif + Nom » et « Nom + Adjectif ». Souvent la liaison est exigée dans le contexte « Adjectif + Nom », mais elle est facultative dans le contexte « Nom + Adjectif » selon le style.
- (3) Indications sur certains mots et certains éléments morphologiques : les opinions varient sur la prononciation de *-r* de l'infinitif *-er, -ir*. Pour ce qui concerne les désinences de la troisième personne du pluriel, la liaison est plus obligatoire avec la désinence *-ont* qu'avec *-ent*. Enfin, le pronom de la troisième personne du pluriel a plusieurs formes phonétiques en contexte de liaison : [il], [iz], [ilz].

## Chapitre V : Corpus et méthodologie

Dans ce chapitre, nous avons expliqué les caractéristiques de nos corpus, et la méthodologie de l'analyse.

### 1. Milleran (1694)

L'un de nos corpus est le livre de la grammaire écrit par René Milleran *Les deux grammaires*

*fransaizes* (1694). Le premier livre de Milleran *La Nouvelle grammaire française* est publié à Marseille en 1692. Nous utilisons une réimpression de l'édition de 1694 (Slatkine, Genève, 1973).

René Milleran, originaire de Saumur était professeur des langues (française et des autres langues européennes). Son ouvrage a deux objectifs : (1) enseigner la bonne prononciation du français et (2) justifier sa réforme orthographique. Ce qui rend possible l'analyse de la prononciation à partir de ce livre est l'exponctuation<sup>152</sup>, c.-à-d. le changement de fonte pour montrer que certaines lettres sont muettes ou prononcées. Milleran explique lui-même ce moyen de noter la prononciation des lettres :

« (...) sur tout retranché par les accens la plû-part des letres muetes *ou* qui ne se prononcent point ordinairement, *et* marqué d'*Italique* DANS le Romain, Et DE Romain DANS l'*Italique* toutes celles qui ne se prononcent point du tout, (...) » (0 :13)

Nous donnons un petit extrait de ce livre ci-dessous : nous y pouvons voir que les graphies *t* de « absolument », *st* de « est », *c* de « avec » sont exponctuées, c'est-à-dire qu'au moins Milleran ne prononce pas ces graphies. Par contre, les graphies *t* de « doit », *s* de « suis » ne sont pas exponctuées, cela signifie que Milleran prononce ces graphies.

**Com̃e la première chose qu'on doit apprendre absolument, *est* l'ortografe, je me suis apliqué avec toute l'exactitude possible à en**

com̃e la première chose qu'on doit apprendre absolument, *est*  
l'ortografe, je me suis apliqué avec toute l'exactitude possible à en....

Lors de la construction de ce corpus, nous avons enregistré la transcription dans un fichier Microsoft Word en respectant les variations de fonte (roman et italique).

## 2. Vaudelin (1713, 1715)

Nous avons exploité deux ouvrages de Gile Vaudelin comme notre deuxième corpus : (1) *Nouvelle manière d'écrire comme on parle en France*, 1713, Paris : Chez La Veuve de Jean Cot et Jean-Baptiste Lamesle, Slatkine Reprints, 33p ; (2) *Instructions chrétiennes, mises en ortografe naturelle, pour faciliter au peuple la lecture de la Science du salut*, 1715, Paris : Chez Jean-Baptiste Lamesle, Slatkine Reprints, 247p.

L'objectif de Vaudelin est de proposer la « nouvelle manière d'écrire comme on parle en

---

<sup>152</sup> Nous suivons Crevier (1994).

France ». Ce qu'il a essayé de décrire est la prononciation des conversations 'honnêtes' observée dans la cour et aux salons. Vauvelin a inventé des alphabets phonétiques pour décrire la prononciation comme ci-dessous :

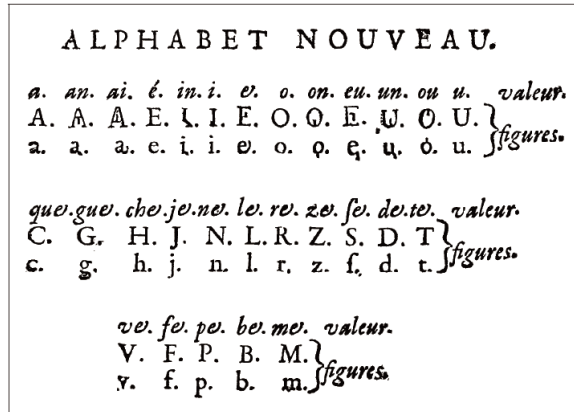


Figure 1 : les nouveaux alphabets de Vauvelin (1713), NM. p.4

Pour le Corpus Vauvelin, nous avons donné une orthographe à chaque alphabet afin de faciliter la transcription.

Alphabet phonétique de Vauvelin	Orthographe de transcription	Alphabet phonétique
A. a.	A / a	[a]

Figure 2 : Exemple d'orthographe de transcription

Nous montrons un exemple (un texte et sa transcription) ci-dessous.

### Reflaicsiø.

1. Si d'Ecrir ðtrma cø l'ø Parl a Fras, i n'an ariva cø pø ø cø de püz icøveniā ; e fi l'ø ne s'a planiea po-i partø , e dpui lø-ta , parson n'ora jama pafe a la Reform de l'Ortograf Fraſæz.

Reflaicsion.



I. Si d'Écrire ôtrman ce\* l'on Parl an Frans, i n'an n arivai ce\* peu ou ce\* de\* ptîz inconveniân ; e si l'on ne s'ai plainieai po-in partou, e depui lon-tan, pairson n'orai jamai panse a la Reform de l'Ortograf Fransâiz.

(I. Si d'Écrire autrement que l'on Parle en France, il n'en arrivait que peu ou que de petits inconvénients ; et si l'on ne s'est plaint point partout, et depuis longtemps, personne n'aurait jamais pensé à la Réforme de l'Orthographe Française.)

### 3. Objectif de l'analyse

Notre objectif dans l'analyse de chaque corpus est d'observer la prononciation de consonnes graphiques finales et la réalisation de liaisons. Ensuite, nous avons surtout comparé les réalisations de la liaison entre les deux corpus. Nous faisons l'hypothèse que l'on peut observer la différence de styles pour ces deux corpus en considérant leurs caractéristiques assez distinctes. D'un côté, l'ouvrage de Milleran est un livre de grammaire, de l'autre, l'ouvrage de Vaudelin contient les prières et les catéchismes. Nous attendons donc une dichotomie entre l'oral littéraire (récitation de vers ou discours) et l'oral plutôt conversationnel. En particulier dans l'ouvrage de Vaudelin, il y a plus de dialogues (l'interrogation et la réponse). De plus, on note avec l'intérêt la différence de nombre de points d'interrogation entre le Corpus Milleran et le Corpus Vaudelin : ce dernier contient trois fois plus de nombre de points d'interrogation alors qu'il contient trois fois moins de mots.

	Milleran	Vaudelin
<b>Nombre de points d'interrogation</b>	126	381
<b>Nombre de mots contenus dans chaque corpus</b>	66663	20889

**Tableau 2 : nombres de points d'interrogation et de mots contenus dans chaque corpus**

Cependant, le style de Vaudelin n'est surtout pas du tout vulgaire, c'est celui du français de la conversation des gens cultivés (Cf. Cohen, 1946 : 4). Pour ces raisons, nous avons voulu comparer ces deux corpus afin d'observer la différence de styles.

## Chapitre VI : Analyse du corpus de Milleran

### 1. Prononciation de consonnes finales chez Milleran

La situation de la chute de consonnes finales chez Milleran est assez complexe. Nous nous limitons à en montrer quatre types (Cf. Crevier 1994 : 327).

(1) Pour le premier type, la consonne finale est prononcée devant voyelle et à la pause, mais muette

devant consonne. C'est le cas, par exemple, des noms, oeuf, boeuf, coup, état.

- (2) Deuxième type, la consonne finale n'est prononcée que devant voyelle, elle est muette devant consonne et à la pause, comme dans les mots saut, rapport, mauvais.
- (3) Troisième type, la prononciation de consonne finale est aléatoire quel que soit le contexte, par exemple dans des mots comme cerf, singulier, mot.
- (4) Le quatrième type est constitué de mots ayant une finale stable : soit la consonne finale est toujours prononcée dans les mots adjectif, bec, cap, but, athlas, animal, soleil, azur ; soit elle s'est amuïe partout comme dans les mots couvre-chef, banc, drap, concert, gant, roux, saoul, outil, cuiller.

Ce qui caractérise le français de Milleran est surtout la consonne finale *-t* qui n'est pas omise dans quelques mots comme *mot* (Cf. Morin, 2005b : 308) même devant consonne et pause. En conjugaison de la 3<sup>ème</sup> personne singulière, cette consonne finale *-t* prononcée est aussi observée devant consonne et à la pause.

## 2. La liaison chez Milleran

### (1) Consonne de liaison

Les contextes où la liaison est réalisée avec [t] et [z] paraissent relativement nombreux comparés à ceux où la CL est [p], [k], [l], [ʎ].

<b>CL</b>	<b>[t]</b>	<b>[z]</b>	<b>[p]</b>
<b>Fréquence de LR</b>	<b>81,31%</b> (1214/1493)	<b>65,98%</b> (1121/1699)	<b>80%</b> (4/5)
<b>CL</b>	<b>[k]</b>	<b>[l]</b>	<b>[ʎ]</b>
<b>Fréquence de LR</b>	<b>68,57%</b> (72/105)	<b>97,28%</b> (358/368)	<b>100%</b> (3/3)

**Tableau 3 : Fréquence de Liaisons Réalisées**

Le taux élevé de la réalisation de CL [t] est remarquable, si l'on considère que la liaison est souvent moins réalisée dans les contextes contenant cette CL que dans ceux où la CL est [z] ou de [n] (Cf. Mallet, 2008 : 205). L'une des raisons pour ce taux élevé semble être liée à la réalisation assez stable après les verbes conjugués à la 3<sup>ème</sup> personne du singulier et du pluriel (ex. *est, faut, c'est, peut, ont*).

### (2) Nombre de syllabes de MOT1

La liaison est plus réalisée après les mots monosyllabiques (84,50%) qu'après les mots

plurisyllabiques (60,19%).

CL	Monosyllabe			Plurisyllabe		
	Nombre de contextes	Liaisons réalisées	%	Nombre de contextes	Liaisons réalisées	%
[t]	849	787	92,70%	644	427	66,30%
[z]	1048	792	75,57%	651	329	50,54%
[p]	2	2	100%	3	2	66,66%
[l]	368	358	97,28%	-	-	-
[k]	42	12	28,57%	63	60	95,24%
[ʎ]	-	-	-	3	3	100%
<b>Total</b>	<b>2309</b>	<b>1951</b>	<b>84,50%</b>	<b>1364</b>	<b>821</b>	<b>60,19%</b>

**Tableau 4 : Liaison en mots monosyllabes et plurisyllabes**

### (3) Structures syllabiques

Nous avons aussi observé l'influence de la structure syllabique de finale de mots : (1) syllabe ouverte, syllabe finissant par voyelle à condition que CL soit latente (muette en finale), (2) syllabe fermée finissant par consonne.

Structures syllabiques		L	NL	Total	%
Syllabe Ouverte	(1) Voyelle	1983	346	2329	<b>85,14%</b>
	(2) Voyelle nasale	575	273	848	<b>67,81%</b>
Syllabe Fermée	(3) Voyelle + [r]	69	68	137	<b>50,36%</b>
	(4) Voyelle + consonne autre que [r]	1	18	19	<b>5,26%</b>
	(5) Voyelle + consonne (+ e muet)	141	196	337	<b>41,84%</b>

**Tableau 5 : Réalisation de la liaison par structures syllabiques**

La liaison est plus souvent réalisée après les mots à syllabe finale ouverte (80,53%) qu'après ceux à syllabe finale fermée (42,80%).

### (4) Cohésion syntaxique

#### a. Syntagme Nominal

Dans les contextes « **Déterminant + Nom** » et « **Déterminant + Adjectif** », la liaison n'est pas toujours réalisée. Il en va de même après les déterminants comme *plusieurs* et *quelques*.

Dans les contextes « **Adjectif + Nom** », la réalisation de la liaison n'est pas stable, l'adjectif soit singulier ou pluriel. La liaison est variable dans le contexte « Adjectif<sub>sg</sub> + Nom<sub>sg</sub> », bien que

cette liaison soit considérée comme obligatoire par la norme du français moderne. C'est le même cas pour le contexte « Adjectif<sub>pl</sub> + Nom<sub>pl</sub> ». Considérant l'instabilité de la liaison dans ce contexte, la fonction morphologique de la pluralité ne serait pas encore établie pour la consonne [z].

Dans les contextes « **Nom + Adjectif** », la liaison n'est pas du tout stable. Avec les formes au singulier, la liaison est plus souvent réalisée dans le syntagme « *accent aigu* ». Aujourd'hui, la liaison est plutôt erratique sauf pour quelques expressions figées, mais elle est plutôt conseillée lors de la récitation de vers. Au pluriel, la liaison est variable, nous trouvons la même tendance pour le français d'aujourd'hui.

		<b>L</b>	<b>NL</b>	<b>Total</b>	<b>%</b>
« <b>DET+ NOM</b> »	Déterminant + Nom	249	48	297	83,84%
	Numéral + Nom	9	0	9	100%
	« <b>DET+ NOM</b> »	<b>258</b>	<b>48</b>	<b>306</b>	<b>84,31%</b>
« <b>DET+ ADJ</b> »	Déterminant + Adjectif	100	11	111	90,09%
	Numéral + Adjectif	3	2	5	60%
	« <b>DET+ ADJ</b> »	<b>103</b>	<b>13</b>	<b>116</b>	<b>88,79%</b>
« <b>ADJ + NOM</b> »	Adjectif + Nom (Singulier)	11	2	13	84,62%
	Adjectif + Nom (Pluriel)	12	8	20	60%
	« <b>ADJ + NOM</b> »	<b>23</b>	<b>10</b>	<b>33</b>	<b>69,70%</b>
« <b>NOM+ADJ</b> »	Nom + Adjectif (Singulier)	18	6	24	75%
	Nom + Adjectif (Pluriel)	9	17	26	34,61%
	「 <b>NOM+ADJ</b> 」	<b>27</b>	<b>23</b>	<b>50</b>	<b>54,00%</b>
<b>Total</b>		<b>411</b>	<b>94</b>	<b>505</b>	<b>81,39%</b>

**Tableau 6 : Liaison dans le syntagme nominal**

### b. Syntagme Verbal

Les taux de liaisons réalisées sont assez élevés pour les syntagmes verbaux. Pour les formes conjuguées, les fréquences de la réalisation de la liaison sont uniformément assez élevées. Parmi les formes conjuguées, celles de la troisième personne du singulier a plus de contextes et le taux de réalisation est très élevé (95,75%).

	<b>L</b>	<b>NL</b>	<b>Total</b>	<b>%</b>
<b>1sg</b>	21	5	26	<b>80,77%</b>
<b>2sg</b>	3	0	3	<b>100%</b>
<b>3sg</b>	428	19	447	<b>95,75%</b>

<b>1pl</b>	6	4	10	<b>60%</b>
<b>2pl</b>	57	18	75	<b>76%</b>
<b>3pl</b>	126	63	189	<b>66,67%</b>
<b>Total</b>	<b>641</b>	<b>109</b>	<b>750</b>	<b>85,47%</b>

**Tableau 7 : Liaison après verbes**

Pour la troisième personne du pluriel, la liaison est moins réalisée. Ce qui est intéressant est la différence de taux de réalisation trouvée entre suffixe *-ont* (91,43%) et *-ent* (52, 1%). La liaison est plus réalisée après le suffixe *-ont*. Nous pouvons expliquer cette cause par la structure syllabique, les mots ayant une syllabe ouverte en finale sont plus liaisonnants que ceux qui ont la syllabe fermée en finale.

Le taux de réalisation de la liaison est aussi assez élevé pour les contextes « **participe passé +** » et « **gérondif +** ».

	<b>L</b>	<b>NL</b>	<b>total</b>	<b>%</b>
<b>Participe Passé</b>	28	2	30	<b>93,33%</b>
<b>Gérondif (-ant)</b>	38	8	46	<b>82,61%</b>

**Tableau 8 : Liaison après participe passé et gérondif**

**c. « + Conjonction *et, ou* », « Nom + Verbe »**

Nous avons aussi observé la réalisation de liaisons dans les contextes « + **conjonction *et, ou*** ». Mais les taux de réalisation de liaison y sont assez modestes.

	<b>L</b>	<b>NL</b>	<b>Total</b>	<b>%</b>
<b>+ <i>et</i></b>	41	78	119	<b>34,45%</b>
<b>+ <i>ou</i></b>	41	75	116	<b>35,34%</b>
<b>Total</b>	<b>82</b>	<b>153</b>	<b>235</b>	<b>34,89%</b>

**Tableau 9 : Liaison dans « + Conjonction *et, ou* »**

Pour le contexte « **Nom + Verbe** », la fréquence de réalisation de la liaison reste faible.

	<b>L</b>	<b>NL</b>	<b>Total</b>	<b>%</b>
<b>Nom + Verbe</b>	17	15	32	<b>53,13%</b>

**Tableau 10 : Liaison dans « Nom + Verbe »**

Considérant que ces deux types de liaison ne sont réalisés que lors de la récitation de vers ou du discours public, nous pouvons penser que le style de Milleran est très soutenu.

## Chapitre VII : Analyse du corpus de Vaudelin

### 1. Prononciation des consonnes finales

En général, les consonnes graphiques *-t, -d, -n, -s, -x, -p* sont amuïes devant consonne et pause, mais ces consonnes peuvent être prononcées devant voyelle. Pour certains numéraux, *deux, trois, cinq, six, sept, dix*, les consonnes finales sont prononcées même devant pause.

Les mots contenant la consonne graphique *-f* en finale sont pas du tout nombreux dans le corpus de Vaudelin. Ainsi la consonne [f] est toujours prononcée dans le mot *chef*. Nous avons observé la prononciation de [f] dans le mot *attentif* devant voyelle, et *boeuf* devant pause.

La prononciation des consonnes graphiques *-c, -g, -r, -l* dépend de mot. Par exemple, nous pouvons résumer la situation avec les consonnes graphiques *-c, -g* dans le tableau ci-dessous :

	_ C	_ V	_ Pause
<i>blanc</i>	-	?	?
<i>estomac, long</i>	?	?	-
<i>sang</i>	-	-	-
<i>grec, public</i>	+	+	+
<i>donc</i>	-	+	?
<i>avec</i>	-/+	-/+	?

Tableau 11 : Consonne graphique finale *-k, -g*

Nous ne pouvons vérifier aucune prononciation de [k] dans les mots *blanc, estomac, long, sang*. La prononciation de [k] est stable dans les mots *grec, public*. Pour le mot *donc*, la consonne est prononcée devant voyelle, mais pas devant consonne. Pour le mot *avec*, elle est prononcée devant voyelle (sauf une exception), pas devant pause (sauf une exception).

Pour la consonne graphique finale *-r*, il est intéressant de noter qu'avec les deux suffixes de l'infinitif *-ir* et *-er* on n'observe pas de réalisation en [r] devant consonne, voyelle ou pause. La consonne graphique finale *-l* est prononcée sauf dans le pronom *il*. Elle est prononcée très souvent devant voyelle, mais pas devant consonne et pause.

### 2. Liaison

#### (1) Consonne de Liaison

Comme dans le corpus de Milleran, les contextes avec les CL [t] et [z] sont également très nombreux par rapport aux contextes des CL [p], [k], [l], [r] dans le corpus de Vaudelin.

<b>[t]</b>	<b>[z]</b>	<b>[n]</b>
69,24% (457/660)	61,51% (489/795)	62,45% (163/261)
<b>[r]</b>	<b>[p]</b>	<b>[k]</b>
77,78% (14/18)	100% (1/1)	90,91% (20/22)
<b>[l]</b>		
87,2% (92/105)		

**Tableau 12 : Fréquence de la liaison par des consonnes de liaison**

Le taux de réalisation de la CL [t] est plus élevé par rapport à ceux des CL [z] et [n]. Comme nous l'avons expliqué pour la même tendance trouvée dans le corpus de Milleran, l'une des raisons pour ce taux élevé semble liée à la réalisation assez stable après les verbes conjugués aux 3<sup>ème</sup> personnes du singulier et du pluriel (ex. *est, faut, c'est, peut, sont*).

### (2) Nombre de syllabes de MOT1

Le nombre de syllabes de MOT1 influence la réalisation de la liaison dans le corpus de Vaudelin.

	monosyllabique			plurisyllabique		
	L	NL	%	L	NL	%
[t]	386	38	<b>91,04%</b>	71	165	<b>30,08%</b>
[z]	462	71	<b>86,68%</b>	27	235	<b>10,31%</b>
[n]	163	31	<b>84,02%</b>	0	67	<b>0%</b>
[r]	1	0	<b>100%</b>	11	15	<b>73,33%</b>
[p]	1	0	<b>100%</b>	-	-	-
[k]	1	1	<b>50%</b>	19	1	<b>95%</b>
[l]	92	105	<b>87,62%</b>	-	-	-
<b>Total</b>	<b>1108</b>	<b>246</b>	<b>81,83%</b>	<b>128</b>	<b>483</b>	<b>20,85%</b>

**Tableau 13 : Fréquence de la liaison par nombre de syllabes de MOT1**

La fréquence moyenne de réalisation de la liaison pour les mots monosyllabiques est 81,83%. En revanche, celle des mots polysyllabiques est 20,85%. La liaison est plus souvent réalisée pour les mots monosyllabiques.

### (3) Structures syllabiques

La liaison est plus souvent réalisée dans les mots en syllabe finale ouverte que dans les mots en

syllabe finale fermée.

	Structures syllabiques	L	NL	Total	%
Syllabe ouverte	Voyelle ouverte	902	229	1131	79,75%
	Voyelle nasale	298	240	538	55,39%
Syllabe fermée	Voyelle + consonne (+e muet)	34	120	154	22,08%
	Voyelle+ [r]	2	35	37	5,41%
	Voyelle + consonne autre que [r]	0	2	2	0%

Tableau 14 : Fréquence de la liaison par structures syllabiques

#### (4) Cohésion syntaxique

##### a. Syntagme Nominal

Dans les contextes « **Déterminant + Nom** » et « **Déterminant + Adjectif** », la liaison est toujours réalisée, mais il y a des exceptions avec des déterminants comme *plusieurs* et *quelques* pour lesquels la liaison n'est pas stable.

Dans les contextes « **Adjectif + Nom** », la réalisation de la liaison est systématique dans les contextes « ADJ<sub>sg</sub> + NOM<sub>sg</sub> ». En revanche, elle n'est pas toujours réalisée dans les sujets « Adjectif<sub>pl</sub> + Nom<sub>pl</sub> ». Les seuls contextes dans lesquels la liaison est réalisée ont la syllabe finale ouverte, dans les autres mots ayant une syllabe finale fermée, la consonne [z] n'est pas réalisée (Ex. *mauvaises habitudes, pauvres artisans*, etc.). Si l'hiatus peut être évité, la réalisation de la consonne [z] n'est pas obligée à réaliser, ce qui laisse penser que la fonction morphologique de pluralité ne serait pas encore établie pour la consonne [z].

Dans les contextes « **Nom + Adjectif** », la liaison n'est jamais réalisée. Pour les contextes « NOM<sub>sg</sub> + ADJ<sub>sg</sub> », au moins pour le français moderne, la liaison est plutôt erratique sauf pour quelques expressions figées, mais elle est conseillée lors de la récitation de vers. Par contre, pour les contextes « NOM<sub>pl</sub> + ADJ<sub>pl</sub> », la liaison est variable (même cas pour le français moderne).

		L	NL	Total	%
« <b>DET+NOM</b> »	Déterminant + Nom	199	1	200	99,50%
	Numéral + Nom	1	0	1	100%
	« <b>DET+NOM</b> » Total	200	1	201	99,50%
« <b>DET+ADJ</b> »	Déterminant + Adjectif	13	2	15	86,67%
	Numéral + Adjectif	2	0	2	100%
	« <b>DET + ADJ</b> » Total	15	1	16	93,75%
« <b>ADJ+NOM</b> »	Adjectif + Nom (sg)	52	0	52	100%



	Adjectif + Nom (pl)	12	4	16	75%
	<b>« ADJ + NOM » Total</b>	<b>64</b>	<b>4</b>	<b>68</b>	<b>94,12%</b>
<b>« NOM + ADJ »</b>	Nom + Adjectif (sg)	0	30	30	0%
	Nom + Adjectif (pl)	0	13	13	0%
	<b>« NOM + ADJ » Total</b>	<b>0</b>	<b>43</b>	<b>43</b>	<b>0%</b>
<b>Total</b>		<b>279</b>	<b>50</b>	<b>329</b>	<b>84,80%</b>

**Tableau 15 : Fréquence de la liaison dans des syntagmes nominaux**

### b. Syntagme verbal

Dans le corpus de Vaudelin, la liaison la plus réalisée est celle de la troisième personne du singulier, puis la fréquence est encore assez élevée pour la troisième personne du pluriel. Pour les autres personnes, la liaison n'est que peu réalisée.

	<b>L</b>	<b>NL</b>	<b>Total</b>	<b>%</b>
<b>1sg</b>	0	9	9	<b>0%</b>
<b>2sg</b>	2	7	9	<b>22,22%</b>
<b>3sg</b>	293	36	329	<b>89,06%</b>
<b>1pl</b>	1	15	16	<b>6,25%</b>
<b>2pl</b>	7	40	47	<b>14,89%</b>
<b>3pl</b>	39	27	66	<b>59,09%</b>
<b>Total</b>	<b>342</b>	<b>134</b>	<b>476</b>	<b>71,85%</b>

**Tableau 16 : Fréquence de la liaison par les personnes**

Pour les contextes « **Participe passé +** » et « **Gérondif +** », la réalisation de la liaison est assez rare.

	<b>L</b>	<b>NL</b>	<b>Total</b>	<b>%</b>
<b>« Participe passé + »</b>	8	8	16	<b>50%</b>
<b>« Gérondif + »</b>	3	29	32	<b>9,38%</b>

**Tableau 17 : Fréquence de la liaison dans « Participe passé + » et « Gérondif + »**

Concernant la consonne [t] comme marqueur de la troisième personne, la condition est passablement satisfaite pour que cette fonction morphologique soit développée, la liaison étant plus souvent réalisée à la troisième personne, comparativement aux autres personnes ayant la consonne de liaison [z] en finale.

### c. « + Conjonction *et, ou* », « Nom + Verbe »

Dans le corpus de Vaudelin, la liaison n'est presque pas réalisée dans les contextes « +

Conjonction *et, ou* ». Enfin, la liaison n'est jamais réalisée dans les contextes « Nom + Verbe ». Pour ces deux types de contextes, nous avons observé la réalisation de la liaison dans le corpus de Milleran. Cette différence découle probablement de la différence entre les styles utilisés dans ces deux corpus. La non-réalisation de la liaison dans ces contextes chez Vaudelin signifie que son style est moins soutenu que celui de Milleran.

## Chapitre VIII : Comparaison des résultats des deux corpus

Nous avons comparé les résultats obtenus dans les deux corpus, et présentons les similitudes et les différences observées entre les deux.

### a. Influence de la longueur de MOT1

Il est clair, comme présenté dans le tableau ci-dessous, que la liaison est plus réalisée si le MOT1 est monosyllabique, dans les deux corpus.

	Milleran	Vaudelin
<b>Monosyllabique</b>	84,50% (1951/2309)	81,83% (1108/1354)
<b>Plurisyllabique</b>	60,19% (821/1364)	20,85% (128/614)

**Tableau 18 : Fréquence de liaison vue de l'influence de la longueur de MOT2 dans deux corpus**

La liaison est systématiquement réalisée pour les déterminants (*un, des, les, mon, ton, son, mes, tes, ses, vos, nos, leurs*, etc), les pronoms (*il, nous, vous, ils, elles, en, les*). Pour le français d'aujourd'hui, nous trouvons la même tendance, par exemple, il est attesté dans la recherche de Mallet (2008 : 270-271) que le taux de réalisation de liaison est plus élevée avec MOT1 monosyllabique qu'avec MOT1 polysyllabique (66,3% vs 7,4%).

### b. Structure syllabique

Nous avons observé que la structure syllabique de MOT1 peut influencer la réalisation de liaison : la liaison est plus réalisée avec les mots à syllabe finale ouverte qu'avec ceux ayant la syllabe finale fermée.

	<b>Milleran</b>	<b>Vaudelin</b>
<b>Syllabe Finale Ouverte</b>	80,53% (2561/3180)	71,90% (1200/1669)
<b>Syllabe Finale Fermée</b>	42,80% (211/493)	18,65% (36/193)

**Tableau 19 : Fréquence de liaison vue de l'influence de la structure syllabique dans deux corpus**

### c. Marqueur morphologique

#### (i) [z] comme marqueur de la pluralité ?

La liaison n'est pas toujours réalisée dans les contextes « ADJ<sub>pl</sub> + NOM<sub>pl</sub> », « *quelques, plusieurs* + ADJ<sub>pl</sub>/NOM<sub>pl</sub> », « NOM<sub>pl</sub> + ADJ<sub>pl</sub> » dans les deux corpus. Cette tendance semble impliquer que la fonction morphologique de la consonne [z] comme marqueur de la pluralité n'est pas suffisamment établie. Par exemple, Vaudelin (1713 : 9-10) fait la remarque suivante : « Une Consonne à la fin d'un mot n'est *souvent* qu'une *Lettre de Prononciation*, c'est à dire qu'elle ne sert point à la signification du mot, & qu'elle y est ajoutée seulement pour adoucir la prononciation, en empeschant la rencontre, & la rude choc de deux voyelles (...) ». Nous pouvons en conclure que la liaison n'est pas requise à la frontière de deux mots s'il n'y a pas d'hiatus.

#### (ii) [t] comme marqueur de la troisième personne ?

La fréquence de la réalisation de la liaison en contextes de la troisième personne du singulier est très élevée dans les deux corpus (Milleran : 95,75%, Vaudelin : 89,06%).

Dans le corpus de Vaudelin, la fréquence de réalisation de la liaison n'est pas très élevée pour les autres personnes (1sg, 2sg, 1pl, 2pl). Pour le suffixe de la troisième personne du pluriel, nous avons trouvé quelques commentaires chez les grammairiens, la réalisation de la liaison peut dépendre du style employé. C'est-à-dire que cette liaison n'est pas conseillée dans la conversation (Cf. Moules, 1761 :143-144), tandis que la liaison est conseillée après la désinence *-ont*, ce qui n'est pas le cas après la désinence *-ent* (Cf. Restaut, 1732 : 314).

Ce qui est distingué nettement entre Milleran et Vaudelin est le taux de réalisation de la liaison dans les contextes « Participe Passé + » et « Gérondif + » comme le montre le tableau ci-dessous :

	<b>Milleran</b>	<b>Vaudelin</b>
« <b>Participe Passé +</b> »	93,33% (28/30)	50% (8/16)
« <b>Gérondif +</b> »	82,61% (38/46)	9,38% (3/32)

**Tableau 20 : Fréquence de liaison dans « Participe passé + » et « Gérondif + » de chaque corpus**

Alors que la fréquence de la réalisation de la liaison soit très élevée dans le corpus de Milleran, elle est plus faible dans le corpus de Vaudelin. Si l'on juge possible qu'un style soutenu soit employé chez Milleran, ces types de la liaison ne sont pas très employés en conversation. Si c'est le cas, la consonne [t] a gagné le statut de marqueur morphologique pour la troisième personne.

#### d. Style

La comparaison des résultats dans les deux corpus a montré que la réalisation de la liaison est toujours plus fréquente chez Milleran. En particulier, la liaison dans les contextes « + Conjonction *et, ou* » et « NOM + VERBE » n'est presque exclusivement observée que chez Milleran.

	<b>Milleran</b>	<b>Vaudelin</b>
« + Conjonction <i>et, ou</i> »	34,89% (82/235)	0,75% (1/134)
« NOM + VERBE »	53,13% (17/32)	0% (0/16)

**Tableau 20 : Fréquence de liaison dans « + Conjonction *et, ou* » et « NOM + VERBE » de chaque corpus**

La réalisation de la liaison dans ces contextes est conseillée lors de la récitation de vers et dans le discours.

Dans les témoignages de grammairiens, nous avons aussi trouvé que la liaison n'est pas conseillée pour certains contextes en conversation. Par exemple, Moules (1761 : 143-144) fait la remarque suivante sur le contexte de la troisième personne pluriel :

« la troisième personne pluriel des verbes en *oient*, en *ent*, en *ont*. Exemples : *ils aimeroient à dire*, *il se repent en ce jour*, *sagement examiné*, *commandement inouïi*, *ils sont ici* ; prononcez en conversation, *ils aimerê à dire*, *il se repen en ce jour*, *sagemen examiné*, *commandamen inoui*, *ils son ici*. »

Moules (1761 : 143-144)

Par ailleurs, à propos du contexte « NOMsg + ADJsg », Buffier (1709 : 395) interdit de faire la liaison dans le discours familier :

« Le *t* final dans le discours familier ne se prononce point d'ordinaire, même devant une voyele, précédé d'*r* ou d'*n* : *une mort afreuse*, *un pédant importun* ; prononcez, *mor afreuse*, *pedan importun* (...) »

Buffier (1709 : 395)

Nous reprenons maintenant notre hypothèse sur la différence entre les deux styles utilisés dans nos corpus : si l'on considère leurs caractéristiques assez distinctes, nous nous attendons à observer une différence de styles entre ces deux corpus. D'un côté, L'ouvrage de Milleran est un livre de grammaire, de l'autre, celui de Vaudelin contient les prières et les catéchismes. Nous trouvons donc la dichotomie entre l'oral littéraire (récitation de vers ou discours) et l'oral plutôt conversationnel.

## **Conclusion**

La liaison est un sujet qui présente des angles d'approche très variés, différents niveaux d'analyse ont contribué à expliquer le mécanisme de la liaison : l'approche normative, l'approche descriptive, l'approche sociolinguistique, l'approche théorique. La réalisation de la liaison est influencée par des facteurs intra-linguistiques (consonne de liaison, longueur de MOT1, structure syllabique, cohésion syntaxique), et des facteurs extra-linguistique (ce que nous avons discerné dans nos corpus est la différence de styles). Cette diversité ne permet pas de réduire la liaison à une dimension particulière. Dans notre thèse, nous avons analysé empiriquement les deux corpus de la fin du XVII<sup>e</sup> siècle et du début du XIII<sup>e</sup> siècle d'un point de vue synchronique. Nous avons aussi confirmé que plusieurs facteurs influencent la réalisation de la liaison à cette époque. En même temps, nous avons examiné les témoignages normatifs de grammairiens entre les XVI<sup>e</sup> et XVII<sup>e</sup> siècles pour éclairer les résultats obtenus à partir de nos corpus.

Il n'y a peu de recherches portant sur le changement diachronique de la liaison. Nous avons aussi essayé d'avoir un point de vue diachronique dans notre approche, mais nous n'avons pas pu développer suffisamment cette perspective. Ainsi, l'exploration de point de vue diachronique reste un champ à explorer plus profondément. Pour cela, il serait nécessaire d'examiner les livres de grammaire à partir de la moitié du XVIII<sup>e</sup> siècle, pour suivre les changements de règles normatives sur la liaison. De plus, il serait important, autant que possible, d'explorer empiriquement des corpus.

## 謝辞

博士論文を完成させる過程において、大変多くの方々にお世話になりました。ここに深く感謝の意を表します。

研究活動全般にわたり格別なる御指導と御高配を賜りました川口裕司先生に謝意を表します。修士課程入学以前から約10年という長い期間、研究指導をしていただきました。また、人文科学に対する国際的貢献を常に忘れずに研究する姿勢を学ばせてもらいました。心より感謝申し上げます。

副指導教員として、常に温かくご指導いただいた斎藤弘子先生にも感謝の気持ちを伝えさせていただきます。また、審査員として本博士論文審査に参加していただいた益子幸江先生、Sylvain Detey 先生、黒澤直俊先生にも感謝の気持ちを伝えさせていただきます。

ロータリー国際親善奨学金（久居ロータリークラブ、Montreal Ville-Marie club）の援助によるモントリオール大学への留学では言語学全般に対して改めて勉強する良い機会、そしてケベックフランス語との出会いを与えていただきました。また、日本学術振興会の若手研究者インターナショナル・トレーニングプログラム(ITP-EUROPA)の援助によってフランスに約1年半留学し、博士論文の文献調査を効率的に進めることができました。この2つの機会を私に与えてくださった方々に感謝いたします。

東京外国語大学大学院においても沢山の方々に出会い、素晴らしい学問的刺激を受けました。特に、杉山香織さん、高橋康德君、新城真理奈さん、古賀健太郎君、菊池美里さん、ありがとうございました。また川口ゼミの方々にも博論に対する沢山のコメントをいただきましたこと、ご協力ありがとうございました。フランス留学中にも大変多くの出会いに恵まれました。博士論文執筆に奮闘している際、叱咤激励してくれた友人の方々にお礼を申し上げます。松井裕美さん、仲村愛さん、そしてパリ第8大学博士課程の同級生である Samantha Ruvoletto さん、Heglyn Pimenta さん、Silvia Darteni さんにはいつも励ましていただきました。また、フランス語の添削を常に快く引き受けてくれた Anthony Felice さん、Jean-François Bourdin さんにもお礼を申し上げます。旧友である野澤絃子さん、飯田賢穂君、丸島直己君、曾野玲子さんにも、この場を借りてお礼を申し上げます。本当に沢山の方々にお世話になったのですが、全ての方のお名前を謝辞に載せることは残念ながらできません。博士論文を完成させることができたのは、沢山の方々の尽力、励ましがあつたからこそです。ありがとうございました。

最後に、常に努力すれば何か成し遂げることができると教えてくれた父の近藤和泉、そして意志を強く持つことを教えてくれた母、近藤百合子に感謝の辞を捧げます。